大分市埋蔵文化財発掘調査報告書　第61集

下郡遺跡群　Ⅲ

－大分市下郡地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書２－

2005

大分市教育委員会

下郡遺跡群　Ⅲ

－大分市下郡地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書２－

下郡遺跡群第 25次調査
下郡遺跡群第 98次調査
下郡遺跡群第 99次調査
下郡遺跡群第140次調査
下郡遺跡群第141次調査
下郡遺跡群第142次調査
下郡遺跡群第143次調査

2005

大分市教育委員会

序　文

本市教育委員会では、昭和62年度から下郡地区の区画整理事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施してきました。本書は、これまで十数年にわたり調査を実施しました下郡遺跡群の正式報告書です。

下郡遺跡群は、長年にわたる調査によって大分川の河口に近い右岸の自然堤防上に広範に展開する縄文時代後期から現代に至る大規模な複合遺跡であることが分かりました。特に弥生時代においては、我が国で初めて確認された家畜動物遺体を出土するなど、学史的にきわめて重要な成果を得ているところです。

このたび発刊の、下郡遺跡群発掘調査報告書第３巻では、143地点におよぶ調査地のうち、第25次調査と第98・第99次調査、第140～143次調査地点の調査報告を収録することができました。遺跡の内容は、弥生時代から中世と多岐におよび、発見された遺構・遺物も多種にわたります。とりわけ第25次調査は、昭和63年度にいわゆる「弥生ブタ」を検出した下郡桑苗遺跡の隣接地に当たり、桑苗遺跡で検出した河川跡の延長部分の調査成果を報告しています。この中で示した内容は、下郡桑苗遺跡の調査成果を補強するものであり、郷土大分の歴史を紐解いていく上で、たいへん重要な内容と言えます。

本書が学術研究者のみならず広く市民の皆様に活用され、文化財に対するご理解を深めていただくための一助となれば幸であります。

最後になりましたが、本書の発刊にあたりご配慮、ご協力いただきました下郡地区の方々や大分市都市計画部まちなみ整備課、同滝尾中部地区住環境整理事務所に対し衷心より謝意を表すとともに、発掘調査並びに資料整理にご協力下さいました関係各位に対しましても深く感謝申し上げます。

平成17年　３月　31日

大分市教育委員会

教育長　　秦　政博

例　言

1．本書は昭和62年度から平成15年度までに大分市教育委員会が調査を実施した下郡遺跡群内での発掘調査の中で、第25次調査、第98次調査、第99次調査、第140次調査、第141次調査、第142次調査、第143次調査の内容をまとめたものである。

2．本書に掲載した調査内容（調査期間、面積、担当者）は、各調査の報文中に記している。

3．調査の実測には国土座標第Ⅱ座標系を利用している。したがって本書に示される方位は特に注記のない限り（G・N・座標北）を示している。

4．遺跡・調査地点名称は、従来の慣例に従い小字名をもって呼称するには、その対象面積が96haと広大であり、また遺跡単位も複数の字地域に及ぶなどの状況が認められるため、遺跡名については、『下郡遺跡群』とし、主要路線等による大区画区分（第３図）と国土座標系による小地点表示（第４図）の２本柱で表示することとする。

（1）　小地点表示は国土座標第Ⅱ座標系（x＝25.550　y＝59.850）を基点として一辺50mの方形地区割を行った。（第４図）

（2）　遺跡名称表示は次のようになる。

下郡遺跡群　H区　　a−2地点

（大区画表示）　（小区画表示）

5．遺構の切り合い図の表記については、遺構の新旧関係を実線で示し、下層遺構は点線で記した。

6．各遺構番号は下記のように示した。

例　　025　　SH　020

（調査次）（種別）（番号）

7．遺構種別は下記の略号表記による。

SA	柵列状遺構	SH	竪穴住居跡
SB	建物跡（掘立柱建物跡等）	SJ	土器棺墓
SC	廊状遺構	SK	貯蔵穴
SD	溝状遺構	ST	墓遺構
SE	井戸跡	SX	性格不明遺構（土坑、小ピットなどを含む）
SF	道路状遺構	SZ	表土等出土層位が不明なもの

8．第25次調査において出土した木製品の樹種鑑定は能代修一氏（農林水産省森林総合研究所）に依頼した。

9．遺跡地からは多量の遺物が出土している。これらの遺物をすべて図化し掲載することが望ましいことは言うまでもないが、時間的制約、予算的制約などの諸事情から不可能である。したがって、図化遺物は一括性の高いと考えられるものを除き、遺構内出土遺物の中でも、所産時期を示すと考えられ、しかも出土遺物中で新出のものを基本的に選別し掲載している。このような方針を踏まえ、遺構台帳の記載にあたっては、特に未掲載遺物の内容を中心に心がけた。種別の明らかなものについては種別名を、不明なものについては「土器片」「弥生土器片」「須恵器片」というレベルでの表記を行っている。台帳に記入した未掲載遺物については、可能なかぎり資料収蔵庫内で検索できるように努め、原資料へフィードバックできるように配慮している。

10. 本書の執筆は坪根伸也、中西武尚、荻幸二、苅谷史穂、松竹智之、今田秀樹(日田市天瀬振興局)が行った。なお執筆分担は下記の通りである。

第１章 ――― 坪根伸也

第２章 ――― 坪根伸也

第３章 ――― 坪根伸也、荻幸二、中西武尚、苅谷史穂、松竹智之、今田秀樹

第４章 ――― 坪根伸也、荻幸二

11. 遺構の実測は各現場担当者が行った他、一部は㈲九州文化財リサーチに委託した。

12. 出土遺物の実測は、坪根伸也、松竹智之、黒田きくみ、杉浦由香、堤美智代、藤内美佐、林潤也、渕野玲子、松場泉が行い、石器・石製品については荻幸二による。

13. 実測図製図は秋好早苗、池永くるみ、石田ひとみ、岡田美紀、黒田きくみ、堤美智代、堀田清乃、松場泉、宮成美穂が行い、一部を㈲九州文化財リサーチ、㈲雅企画に委託した。

14. 遺物整理は坪根伸也、井口あけみ、苅谷史穂、松竹智之が行い、写真撮影のための復元、着色には主として石田ひとみ、今村信子、沖本美和子、菅真奈美、堀田清乃、三重野京子があたった。

15. 遺物番号は遺構番号の末尾に遺構別の通し番号において表示する。

090**SH**001-001　(遺構番号)-(通し番号)

ただし、下郡遺跡群第25次調査については以下の表記による。

弥生土器　025**SX**001-001　(遺構番号)-(通し番号)

縄文土器　025**SZYO**-001　(025**SZYO**)-(通し番号)

木　　器　025**SWO**-001　(025**SWO**)-(通し番号)

石　　器　025**SST**-001　(025**SST**)-(通し番号)

16. 遺物番号は本文・挿図・図版で一致する。

17. 遺物観察表は以下の記述基準により標記される。

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
①	②	③	③	④	⑤	⑤	⑥	⑥	⑦	⑦	⑦	⑦	⑧	⑨

①項目15に準ずる。　②挿図番号に一致する。

③判明する器種について記述する。　④胎土中に含まれる混和材について記述する。

⑤色調について記述する。

⑥器面調整について記述する。複数段で記述されるものは基本的に上位のものが上部調整を示す。

⑦計測可能な各部位のサイズを記入する。復元数値は（　）にて表示する。

⑧残存率について記述する。　⑨特記事項について記述する。

18. 本書に掲載される遺物の説明に際しては、次の文献を参考にした。

土師器・須恵器など

太宰府市教育委員会　1983　「付編　土器の分類」『大宰府条坊跡　Ⅱ』

太宰府市教育委員会　1992　「遺物各説」『宮の本遺跡　Ⅱ』太宰府市の文化財　第10集

山本　信夫　1990　「統計上の土器-歴史時代の土師器の編年研究によせて」『九州上代文化論集』乙益重隆先生古希記念論文集

中島恒次郎　1992　「大宰府における椀形態の変遷」『中近世土器の基礎研究』Ⅷ　中近世土器研究会

中島恒次郎　1992　「都へ行った土器」『古文化談叢』第28集　九州古文化研究会
小野　正敏　1982　「15～16世紀の染付碗・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』**No.**2　日本貿易陶磁研究会
森　毅　1995「16・17世紀における陶磁器の様相とその流通−大坂の資料を中心に」『ヒストリア』第149号　大阪歴史学会
森田　勉　1982　「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』**No.**2　日本貿易陶磁研究会
上田　秀夫　1982　「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』**No.**2　日本貿易陶磁研究会
乗岡　実　2000　「中世備前焼（壺）の編年案」『第２回　中世備前焼研究会資料』中世備前焼研究会
乗岡　実　2000　「中世備前焼擂鉢の編年について」『第３回　中世備前焼研究会資料』中世備前焼研究会
小柳和宏　1991　「中世土器生産小考−文書・地名から土器生産を探る」『大分縣地方史』第143号　大分県地方史研究会
小林昭彦・玉永光洋　1988　「出土遺物−土器」『安岐城　下原古墳』大分県教育委員会
菊田　徹　1986　「東九州における中世土師質土器の様相−坏・皿形土器を中心として」『専修考古学』第７号　専修考古学会
渋谷　忠章　1984　「考察　出土遺物について　土師質土器」『伐株山城跡』玖珠町教育委員会
佐藤　浩司　1988　「第Ⅴ章　考察　平安時代の土師器編年試案と地域相の解明にむけて」『寺田遺跡』北九州市埋蔵文化財調査報告書　第70集　（財）北九州市教育文化事業団
坪根　伸也　1995　「付章　羽田遺跡出土土器に関する二・三の問題」『羽田遺跡　Ⅱ』大分市教育委員会
坪根　伸也・塩地潤一　2001　「豊後国の土器編年」『大分・大友土器研究会論集』大分・大友土器研究会

弥生土器など

高橋　徹　1979　「廃棄された鏡片−豊後における弥生時代の終焉−」『古文化談叢』第６集　九州古文化研究会
高橋　徹他　1989　『大分県史　先史篇Ⅱ』　大分県
柳田　康雄　1991　「土師器の編年　１九州」『古墳時代の研究』６　雄山閣出版
坪根　伸也　1996　「東九州（大分）の弥生前期土器−別府湾岸地域を中心として−」『山口考古学談話会百回記念大会−西部瀬戸内の弥生文化−前期弥生土器の諸相−』山口考古学談話会百回記念大会実行委員会

須恵器編年

須恵器編年に関しては、陶邑編年、小田富士雄氏による九州須恵器編年を適宜使用しているが、両者の対応はおおよそ以下の年代観により使用している。

実年代(西暦)	500年		550年		600年		650年	
陶邑編年	**TK**47	**MT**15	**TK**10	**MT**85	**TK**43	**TK**209	**TK**217	**TK**46
小田編年	Ⅲ−**A** 期				Ⅲ−**B** 期	Ⅳ期	Ⅴ期	

須恵器実年代比較表

19．本書の編集・校正については下記の体制にて行った。

チーフエディター　坪根伸也
メインエディター　梅木信宏
サブエディター　堤美智代、黒田きくみ、松場　泉
スタッフ　池永くるみ、石田ひとみ、今村信子、岡田美紀、堀田清乃、三重野京子
整理スタッフ　秋好早苗、穴井民子、阿部眞知子、井口あけみ、石田直美、伊東みほ、今井祐子、内田順子、沖　有子、沖本美和子、甲斐光代、川野美和、木村藍子、釘宮香苗、笹垣美香、佐藤香織、三宮多美子、首藤美千代、白坂直美、菅真奈美、杉浦由香、高木麻奈美、藤内美佐、中村由美子、成田千春、西嶋スミエ、野崎香織、野崎豊子、野田友枝、秦由美子、飛高裕子、原田和代、渕野玲子、帆足みゆき、町田ユカリ、丸井久美子、三重野八重子、南優子、宮崎里美、宮成美恵、宮本早苗、本室初代、山下順子、結城由利恵、幸しのぶ、吉岡真由美、吉田純子、渡辺里美

目　次

第Ⅰ章　総　　説 …… 1
　１．調査に至る経過 …… 1
　２．調査組織 …… 2
第Ⅱ章　遺跡の立地と環境 …… 7
　１．下郡遺跡群の立地と遺跡概要 …… 7
　２．調査の方法…… 10
第Ⅲ章　調査の概要…… 19
　第１節　下郡遺跡群第25次調査…… 19
　　（１）はじめに…… 19
　　（２）遺構と遺物…… 21
　　（３）小　　結 ……138
　第２節　下郡遺跡群第98次調査 ……171
　　（１）はじめに ……171
　　（２）土層 ……172
　　（３）遺構と遺物 ……175
　第３節　下郡遺跡群第99次調査地点 ……201
　　（１）はじめに ……201
　　（２）土層 ……201
　　（３）遺構と遺物 ……207
　　（４）下郡遺跡群第98・99次調査小結 ……236
　第４節　下郡遺跡群第140次調査……246
　　（１）はじめに ……246
　　（２）層位 ……246
　　（３）遺構と遺物 ……258
　　（４）小結 ……293
　第５節　下郡遺跡群第141次調査……302
　　（１）はじめに ……302
　　（２）層位 ……302
　　（３）遺構と遺物 ……307
　　（４）小結 ……322
　第６節　下郡遺跡群第142次調査……328
　　（１）はじめに ……328
　　（２）遺構と遺物 ……329
　　（３）小結 ……332
　第７節　下郡遺跡群第143次調査……334
　　（１）はじめに ……334
　　（２）遺構と遺物 ……338
　　（３）小結 ……350
第４章　総　　括　－調査成果の整理とまとめ－ ……356
　第１節　大分平野部における弥生時代前期末から中期の土器について ……356
　　１．弥生土器編年概要（前期・中期） ……356
　　２．下城式甕の成立過程 ……358
　　３．中期の甕形土器について ……358
　　４．下城式壺形土器について ……359
　　５．台付鉢（高坏）形土器について ……362
　　６．まとめ ……364
　第２節　大分平野出土の不定形石錘について ……365

挿図目次

第１図　調査遺跡位置図……7
第２図　平面直角座標系……11
第３図　調査グリッド図……12
第４図　下郡遺跡群調査地点位置図……13～14
第５図　遺構配置図……19
第６図　基本土層図……20
第７図　５層出土遺物実測図……21
第８図　６層出土遺物実測図①……22
第９図　６層出土遺物実測図②……22
第10図　６層出土遺物実測図③……23
第11図　６層出土遺物実測図④……25
第12図　６層出土遺物実測図⑤……26
第13図　６層出土遺物実測図⑥……27
第14図　６層出土遺物実測図⑦……28
第15図　８層（Ⅲ層）出土遺物実測図①……29
第16図　８層（Ⅲ層）出土遺物実測図②……30
第17図　８層（Ⅲ層）出土遺物実測図③……31
第18図　８層（Ⅲ層）出土遺物実測図④……32
第19図　８層（Ⅲ層）出土遺物実測図⑤……34
第20図　８層（Ⅲ層）出土遺物実測図⑥……35
第21図　８層（Ⅲ層）出土遺物実測図⑦……36
第22図　８層（Ⅲ層）出土遺物実測図⑧……38
第23図　８層（Ⅲ層）出土遺物実測図⑨……39
第24図　８層（Ⅲ層）出土遺物実測図⑩……39
第25図　８層（Ⅲ層）出土遺物実測図⑪……40
第26図　８層（Ⅲ層）出土遺物実測図⑫……41
第27図　８層（Ⅲ層）出土遺物実測図⑬……42
第28図　８層（Ⅲ層）出土遺物実測図⑭……44
第29図　８層（Ⅲ層）出土遺物実測図⑮……45
第30図　８層（Ⅲ**a**層）出土遺物実測図①　……46
第31図　８層（Ⅲ**a**層）出土遺物実測図②　……47
第32図　８層（Ⅲ**a**層）出土遺物実測図③　……48
第33図　８層（Ⅲ**a**層）出土遺物実測図④　……50
第34図　８層（Ⅲ**a**層）出土遺物実測図⑤　……51
第35図　８層（Ⅲ**a**層）出土遺物実測図⑥　……52
第36図　８層（Ⅲ**a**層）出土遺物実測図⑦　……53
第37図　８層（Ⅲ**a**層）出土遺物実測図⑧　……54
第38図　８層（Ⅲ**b**層）出土遺物実測図①　……56
第39図　８層（Ⅲ**b**層）出土遺物実測図②　……59
第40図　８層（Ⅲ**b**層）出土遺物実測図③　……60
第41図　８層（Ⅲ**b**層）出土遺物実測図④　……62
第42図　８層（Ⅲ**b**層）出土遺物実測図⑤　……63
第43図　８層（Ⅲ**b**層）出土遺物実測図⑥　……64
第44図　８層（Ⅲ**b**層）出土遺物実測図⑦　……66
第45図　８層（Ⅲ**b**層）出土遺物実測図⑧　……67
第46図　８層（Ⅲ**b**層）出土遺物実測図⑨　……69
第47図　８層（Ⅲ**b**層）出土遺物実測図⑩　……69
第48図　８層（Ⅲ**c**層）出土遺物実測図①　……70
第49図　８層（Ⅲ**c**層）出土遺物実測図②　……71
第50図　８層（Ⅲ**c**層）出土遺物実測図③　……73
第51図　８層（Ⅲ**c**層）出土遺物実測図④　……74
第52図　８層（Ⅲ**c**層）出土遺物実測図⑤　……76
第53図　９層（Ⅳ層）出土遺物実測図……78
第54図　９層（Ⅳ**c**層）出土遺物実測図　……79
第55図　縄文土器出土遺物実測図①……80
第56図　縄文土器出土遺物実測図②……81
第57図　縄文土器出土遺物実測図③……82
第58図　縄文土器出土遺物実測図④……84
第59図　縄文土器出土遺物実測図⑤……85
第60図　縄文土器出土遺物実測図⑥……86
第61図　縄文土器出土遺物実測図⑦……87
第62図　縄文土器出土遺物実測図⑧……88
第63図　縄文土器出土遺物実測図⑨……89
第64図　縄文土器出土遺物実測図⑩……89
第65図　縄文土器出土遺物実測図⑪……90
第66図　縄文土器出土遺物実測図⑫……90
第67図　縄文土器出土遺物実測図⑬……92
第68図　縄文土器出土遺物実測図⑭……93
第69図　縄文土器出土遺物実測図⑮……94
第70図　縄文土器出土遺物実測図⑯……94
第71図　縄文土器出土遺物実測図⑰……95
第72図　縄文土器出土遺物実測図⑱……95
第73図　遺物出土状況①……98
第74図　遺物出土状況②……98
第75図　遺物出土状況③……98
第76図　**SWO**-023出土状況　……98
第77図　木器出土地点位置図……99
第78図　木器出土遺物実測図①　……100
第79図　木器出土遺物実測図②　……101
第80図　木器出土遺物実測図③　……103
第81図　木器出土遺物実測図④　……104
第82図　木器出土遺物実測図⑤　……106
第83図　木器出土遺物実測図⑥　……107
第84図　木器出土遺物実測図⑦　……108
第85図　木器出土遺物実測図⑧　……110
第86図　木器出土遺物実測図⑨　……111
第87図　木器出土遺物実測図⑩　……112
第88図　木器出土遺物実測図⑪　……114
第89図　石器出土遺物実測図①　……116
第90図　石器出土遺物実測図②　……117
第91図　石器出土遺物実測図③　……118
第92図　石器出土遺物実測図④　……120
第93図　石器出土遺物実測図⑤　……121
第94図　石器出土遺物実測図⑥　……122
第95図　石器出土遺物実測図⑦　……123
第96図　石器出土遺物実測図⑧　……124
第97図　石器出土遺物実測図⑨　……126
第98図　石器出土遺物実測図⑩　……128
第99図　石器出土遺物実測図⑪　……129
第100図　石器出土遺物実測図⑫……130
第101図　石器出土遺物実測図⑬……131
第102図　石器出土遺物実測図⑭……132
第103図　動物遺体頭骨出土状況……133
第104図　植物遺体出土状況……134
第105図　出土オニグルミ……134
第106図　**SD**010平面・土層断面実測図……134
第107図　**SK**002遺構実測図……135
第108図　**SX**003平面・土層断面実測図……135
第109図　**SX**004平面・土層断面実測図……135
第110図　**SX**021平面・土層断面実測図……136
第111図　**SX**023平面・土層断面実測図……136
第112図　表土出土遺物実測図……137
第113図　調査地点位置図……138
第114図　下郡遺跡群第25次調査甕タイプ別出土比率表
……140
第115図　下郡桑苗遺跡甕タイプ別出土比率表……140
第116図　遺構配置図・全体遺構図……171
第117図　１**T**・３**T**土層断面実測図　……172
第118図　**SD**001出土遺物実測図①……175
第119図　**SD**001出土遺物実測図②……175
第120図　**SD**002出土遺物実測図……176
第121図　**SX**003出土遺物実測図……176
第122図　**SX**004出土遺物実測図……177
第123図　連続土坑平面・断面実測図……178
第124図　**SX**005平面・断面実測図……179
第125図　**SX**005遺物出土状況……180
第126図　**SX**005出土遺物実測図……180
第127図　**SX**010出土遺物実測図……181
第128図　**SX**012出土遺物実測図①……181
第129図　**SX**012出土遺物実測図②……182
第130図　**SX**038出土遺物実測図……182
第131図　**SX**039出土遺物実測図……182
第132図　**SX**055出土遺物実測図……182
第133図　**SX**056出土遺物実測図……183
第134図　長土坑断面実測図……184
第135図　**SX**057出土遺物実測図……185
第136図　**SX**059出土遺物実測図……185
第137図　**SX**060出土遺物実測図……185
第138図　**SX**061出土遺物実測図……186
第139図　**SX**062出土遺物実測図……187
第140図　**SX**063出土遺物実測図……187
第141図　**SX**065出土遺物実測図……187
第142図　**SX**066出土遺物実測図……188
第143図　**SX**067出土遺物実測図……188
第144図　**SX**072出土遺物実測図……188
第145図　第１トレンチ出土遺物実測図……189
第146図　第３トレンチ出土遺物実測図……189
第147図　表土出土遺物実測図①……191
第148図　表土出土遺物実測図②……192
第149図　表土出土遺物実測図③……193
第150図　表土出土遺物実測図④……194
第151図　表土出土遺物実測図⑤……194
第152図　表土出土遺物実測図⑥……194
第153図　遺構配置図・全体遺構図……202
第154図　土層断面位置図……203
第155図　調査区西壁・南壁基本土層断面実測図……204
第156図　**SD**003土層断面実測図……207
第157図　**SD**003出土遺物実測図①……207
第158図　**SD**003出土遺物実測図②……207
第159図　**SD**006土層断面実測図……207
第160図　**SD**006出土遺物実測図……208
第161図　**SD**007土層断面実測図……209
第162図　**SD**007出土遺物実測図……209
第163図　**SD**008土層断面実測図……209
第164図　**SD**008出土遺物実測図……209
第165図　**SD**010土層断面実測図……210
第166図　**SD**010出土遺物実測図……210
第167図　**ST**001遺構実測図……211
第168図　**ST**002・**ST**011・**ST**012・**ST**019平面・土層断面実測図……211
第169図　**ST**002出土銭……212
第170図　**ST**002出土遺物実測図……212
第171図　**ST**009遺構実測図……212
第172図　**ST**009出土銭……212
第173図　**ST**011出土遺物実測図……213
第174図　**ST**016遺構実測図……214
第175図　**ST**016出土遺物実測図……214
第176図　**SF**020土層断面実測図①……215
第177図　**SF**020土層断面実測図②……216
第178図　**SF**020出土遺物実測図……217
第179図　**SX**土層断面位置図　……218
第180図　連続土坑平面・土層断面実測図①……220
第181図　**SX**出土遺物実測図　……221
第182図　土器バラス（**SX**017）観察時……222
第183図　連続土坑平面・土層断面実測図②……222
第184図　**SX**122出土遺物実測図……223
第185図　**SX**122周辺状況……223
第186図　**SX**122遺物出土状況……223
第187図　**SX**090平面・断面実測図……223
第188図　**SX**090出土遺物実測図……224
第189図　**SX**085土層断面実測図……225
第190図　**SX**085出土遺物実測図……225
第191図　**SX**005平面・土層断面実測図……225
第192図　**SX**018出土遺物実測図……226
第193図　**SX**088土層断面実測図……226
第194図　**SX**088出土遺物実測図……226
第195図　**SX**092土層断面実測図……227
第196図　**SX**092出土遺物実測図……227
第197図　**SX**096平面・土層断面実測図……227
第198図　**SX**112平面・土層断面実測図……227
第199図　**SX**021平面・土層断面実測図……228
第200図　**SX**025土層断面実測図……228
第201図　**SX**089土層断面実測図……228
第202図　**SX**089出土遺物実測図……228
第203図　**SX**107土層断面実測図……228
第204図　**SX**107出土遺物実測図……228
第205図　表土出土遺物実測図①……229
第206図　表土出土遺物実測図②……230
第207図　表土出土遺物実測図③……230
第208図　道路状遺構変遷模式図……236
第209図　069**SF**001完掘状況　……237
第210図　土師器甕埋納状況……237
第211図　第４段階土器敷設状況……237
第212図　道路状遺構変遷図①……238
第213図　道路状遺構変遷図②……239
第214図　下郡遺跡群古代道路推定ライン……240
第215図　**SF**003土層断面　……241
第216図　**SF**001底面検出状況　……243
第217図　**SF**001平面実測図　……243
第218図　古代主要遺構配置図……244
第219図　調査区西壁土層断面略図……246
第220図　遺構配置図……247
第221図　全体遺構図……248
第222図　**SB**595遺構平面・断面実測図……258
第223図　**SD**290・**SD**300土層断面実測図……259
第224図　**SD**290出土遺物実測図①……260
第225図　**SD**290出土遺物実測図②……261
第226図　**SD**300出土遺物実測図……261
第227図　**SD**350・**SD**351遺構平面・土層断面実測図261
第228図　**SD**351出土遺物実測図……262
第229図　**SD**360平面・土層断面実測図……262
第230図　**SD**360出土遺物実測図……262
第231図　**SD**550平面・土層断面実測図……263
第232図　**SD**580出土遺物実測図……263
第233図　**SD**590出土遺物実測図……263
第234図　**SE**410出土遺物実測図……264
第235図　**SE**415遺構実測図……264
第236図　**SE**415出土遺物実測図①……265
第237図　**SE**415出土遺物実測図②……266
第238図　**SE**415出土遺物実測図③……266
第239図　**SE**635平面・土層断面実測図……266
第240図　**SE**635出土遺物実測図……267
第241図　**SH**426遺構実測図……267

第242図　**SH**426出土遺物実測図……268
第243図　**SH**430遺構実測図……268
第244図　**SH**430出土遺物実測図①……269
第245図　**SH**430出土遺物実測図②……270
第246図　**SH**430出土遺物実測図③……270
第247図　**SH**455・**SH**620遺構実測図……271
第248図　**SH**465平面・断面実測図……272
第249図　**SH**465出土遺物実測図①……272
第250図　**SH**465出土遺物実測図②……273
第251図　**SH**469平面・土層断面実測図……274
第252図　**SH**474平面・土層断面実測図……275
第253図　**SH**481遺構実測図……276
第254図　**SH**481出土遺物実測図……276
第255図　**SH**615平面・土層断面実測図……277
第256図　**SH**615出土遺物実測図……277
第257図　**SX**355土層断面実測図……279
第258図　**SX**700調査区北壁面土層断面実測図……279
第259図　**SX**355出土遺物実測図①……280
第260図　**SX**355出土遺物実測図②……281
第261図　**SX**355出土遺物実測図③……281
第262図　**SX**355出土遺物実測図④……282
第263図　**SX**367・394遺構実測図 ……283
第264図　**SX**368遺構実測図……283
第265図　**SX**397遺構実測図……284
第266図　**SX**397出土遺物実測図……284
第267図　**SX**432出土遺物実測図……284
第268図　**SX**435平面・土層断面実測図……285
第269図　**SX**435出土遺物実測図……285
第270図　**SX**450遺構実測図……286
第271図　**SX**450出土遺物実測図①……286
第272図　**SX**450出土遺物実測図②……287
第273図　**SX**460出土遺物実測図①……288
第274図　**SX**460出土遺物実測図②……288
第275図　**SX**462平面・土層断面実測図……289
第276図　**SX**470平面・土層断面実測図……289
第277図　**SX**470出土遺物実測図……290
第278図　**SX**480平面・土層断面実測図……292
第279図　**SX**574平面・断面実測図……292
第280図　**SX**610平面・土層断面実測図……292
第281図　表土出土遺物実測図……293
第282図　中世遺構変遷模式図……294
第283図　遺構配置図……302
第284図　基本土層断面実測図……303
第285図　**SK**002遺構実測図……307
第286図　**SK**002出土遺物実測図……307
第287図　**SK**003遺構実測図……308
第288図　**SK**003出土遺物実測図……308
第289図　**SK**015出土遺物実測図……309
第290図　**SK**159遺構実測図……309
第291図　**SK**159出土遺物実測図①……309
第292図　**SK**159出土遺物実測図②……310
第293図　**SX**001平面・土層断面実測図……311
第294図　**SX**001出土遺物実測図……311
第295図　**SX**005出土遺物実測図……311
第296図　**SX**006出土遺物実測図……311
第297図　**SX**007出土遺物実測図……312
第298図　**SX**009出土遺物実測図……312
第299図　**SX**017平面・土層断面実測図……312
第300図　**SX**017出土遺物実測図……312
第301図　**SX**020出土遺物実測図……313
第302図　**SX**021出土遺物実測図①……313
第303図　**SX**021出土遺物実測図②……313
第304図　**SX**029出土遺物実測図……314
第305図　**SX**032出土遺物実測図……314
第306図　**SX**060出土遺物実測図……314
第307図　**SX**062出土遺物実測図……315
第308図　**SX**065出土遺物実測図……315
第309図　**SX**070出土遺物実測図……315
第310図　**SX**079出土遺物実測図……316
第311図　**SX**092出土遺物実測図……316
第312図　**SX**108出土遺物実測図……316
第313図　**SX**113平面・断面実測図……317
第314図　**SX**113出土遺物実測図……317
第315図　**SX**133遺構実測図……318
第316図　**SX**133出土遺物実測図……318
第317図　**SX**140遺構実測図……320
第318図　**SX**140出土遺物実測図①……321
第319図　**SX**140出土遺物実測図②……321
第320図　**SX**151平面・土層断面実測図……321
第321図　**SX**151出土遺物実測図……322
第322図　表土出土遺物実測図……322
第323図　遺構配置図……328
第324図　全体遺構図……328
第325図　調査区西壁土層断面実測図……328
第326図　**SX**001出土遺物実測図……329
第327図　**SX**002出土遺物実測図……329
第328図　**SX**004（暗褐土層）出土遺物実測図①……330
第329図　**SX**004（暗褐土層）出土遺物実測図②……331
第330図　下郡遺跡群第143次調査周辺位置図 ……334
第331図　遺構配置図……335
第332図　調査区西壁土層断面実測図……335
第333図　**SE**005平面・土層断面実測図……338
第334図　**SE**005出土遺物実測図……338
第335図　**SE**015平面・土層断面実測図……339
第336図　**SE**015出土遺物実測図……339
第337図　**SK**020遺構実測図……339
第338図　**SK**020出土遺物実測図……340
第339図　**SK**025遺構実測図……340
第340図　**SK**025出土遺物実測図……340
第341図　**ST**100平面・断面実測図……341
第342図　**ST**100出土遺物実測図……341
第343図　**ST**100出土銭……341
第344図　**ST**101平面・断面実測図……342
第345図　**ST**102平面・断面実測図……342
第346図　**ST**102出土銭……342
第347図　**ST**103平面・断面実測図……343
第348図　**ST**103出土遺物実測図……343
第349図　**ST**103出土銭……343
第350図　**ST**104平面・断面実測図……343
第351図　**ST**104出土遺物実測図……343
第352図　**ST**105平面・断面実測図……344
第353図　**ST**105出土銭……344
第354図　**ST**106平面・断面実測図……345
第355図　**ST**106出土遺物実測図……345
第356図　**ST**106出土銭……345
第357図　**ST**107平面・断面実測図……345
第358図　**ST**107出土銭……346
第359図　**ST**108平面・断面実測図……346
第360図　**ST**108出土遺物実測図……346
第361図　**ST**109平面・断面実測図……347
第362図　**ST**110平面・断面実測図……347
第363図　**ST**110出土銭……347
第364図　**ST**111平面・断面実測図……348
第365図　**ST**112平面・断面実測図……348
第366図　**ST**112出土遺物実測図……348
第367図　**ST**113平面・断面実測図……349
第368図　**ST**113出土銭……349
第369図　**ST**114平面・断面実測図……349
第370図　**ST**114出土遺物実測図……349
第371図　**ST**114出土銭……349
第372図　**ST**115平面・断面実測図……350
第373図　**ST**115出土遺物実測図……350
第374図　**ST**116平面・断面実測図……350
第375図　**ST**116出土遺物実測図……350
第376図　甕形土器口縁部形態変遷模式図……358
第377図　時期別量比概念表……359
第378図　口縁部形態模式図……360
第379図　東部九州（第二・三地域）中期から後期中葉の土器編年１……361
第380図　東部九州（第二・三地域）中期から後期中葉の土器編年２……363
第381図　下郡遺跡第25次調査出土石錘の形態分類…366
第382図　下志村遺跡第２次調査出土石錘……368
第383図　賀来西遺跡試掘調査出土石錘……369
第384図　玉沢地区条里跡出土石錘①……371
第385図　玉沢地区条里跡出土石錘②……372
第386図　石錘出土遺跡と石材産地……374

表　目　次

第１表　調査地点一覧……15
第２表　出土木器一覧表①……96
第３表　出土木器一覧表②……97
第４表　出土木器一覧表③……98
第５表　石器組成表 ……133
第６表　下郡遺跡群第25次調査甕タイプ別出土比率表 ……140
第７表　下郡桑苗遺跡甕タイプ別出土比率表 ……140
第８表　遺物観察表① ……146
第９表　遺物観察表② ……147
第10表　遺物観察表③ ……148
第11表　遺物観察表④ ……149
第12表　遺物観察表⑤ ……150
第13表　遺物観察表⑥ ……151
第14表　遺物観察表⑦ ……152
第15表　遺物観察表⑧ ……153
第16表　遺物観察表⑨ ……154
第17表　遺物観察表⑩ ……155
第18表　遺物観察表⑪ ……156
第19表　遺物観察表⑫ ……157
第20表　遺物観察表⑬ ……158
第21表　遺物観察表⑭ ……159
第22表　遺物観察表⑮ ……160
第23表　遺物観察表⑯ ……161
第24表　土錘観察表 ……161
第25表　縄文遺物観察表① ……162
第26表　縄文遺物観察表② ……163
第27表　縄文遺物観察表③ ……164
第28表　縄文遺物観察表④ ……165
第29表　縄文遺物観察表⑤ ……166
第30表　縄文遺物観察表⑥ ……167
第31表　縄文遺物観察表⑦ ……168
第32表　石器観察表① ……169
第33表　石器観察表② ……170
第34表　遺構一覧表① ……173
第35表　遺構一覧表② ……174
第36表　遺物観察表① ……195
第37表　遺物観察表② ……196
第38表　遺物観察表③ ……197
第39表　遺物観察表④ ……198
第40表　遺物観察表⑤ ……199
第41表　陶磁器観察表 ……200
第42表　土錘観察表 ……200
第43表　金属製品観察表 ……200
第44表　石器観察表 ……200
第45表　遺構一覧表① ……201
第46表　遺構一覧表② ……205
第47表　遺構一覧表③ ……206
第48表　遺物観察表① ……231
第49表　遺物観察表② ……232
第50表　遺物観察表③ ……233
第51表　陶磁器観察表 ……234
第52表　土錘観察表 ……234
第53表　金属製品観察表 ……235
第54表　石器観察表 ……235
第55表　古銭観察表 ……235
第56表　遺構一覧表① ……248
第57表　遺構一覧表② ……249
第58表　遺構一覧表③ ……250
第59表　遺構一覧表④ ……251
第60表　遺構一覧表⑤ ……252
第61表　遺構一覧表⑥ ……253
第62表　遺構一覧表⑦ ……254
第63表　遺構一覧表⑧ ……255
第64表　遺構一覧表⑨ ……256
第65表　遺構一覧表⑩ ……257
第66表　遺物観察表① ……295
第67表　遺物観察表② ……296
第68表　遺物観察表③ ……297
第69表　遺物観察表④ ……298
第70表　遺物観察表⑤ ……299
第71表　遺物観察表⑥ ……300
第72表　陶磁器観察表 ……301
第73表　金属製品観察表 ……301
第74表　石器観察表 ……301
第75表　遺構一覧表① ……304
第76表　遺構一覧表② ……305
第77表　遺構一覧表③ ……306
第78表　遺物観察表① ……324
第79表　遺物観察表② ……325
第80表　遺物観察表③ ……326
第81表　遺物観察表④ ……327
第82表　陶磁器観察表 ……327
第83表　石器観察表 ……327
第84表　遺構一覧表 ……329
第85表　遺物観察表 ……333
第86表　石器観察表 ……333
第87表　遺構一覧表① ……336
第88表　遺構一覧表② ……337
第89表　墓壙出土銭貨 ……351
第90表　遺物観察表① ……353
第91表　遺物観察表② ……354
第92表　陶磁器観察表 ……355
第93表　古銭観察表 ……355
第94表　口縁形態と文様パターンの相関表 ……362

第Ⅰ章　総　　説

１．調査に至る経過

下郡遺跡群は大分県大分市下郡に所在する。下郡遺跡群の所在する大分平野の西部には大分川が貫流し、河口に近い大分川流域には南北に延びる自然堤防を発達させている。下郡遺跡群は大分川河口付近の右岸にあたる約１㎞四方の自然堤防上に立地しており、標高４ｍ～７ｍの地点に遺跡が展開する。

遺跡の所在する大分市は、急激な都市化、人口増加に対応するため、住環境整備や効率的な土地利用が嘱望され、市内各所で積極的な土地区画整理事業が推進されている。下郡地区も市街中心部に至近な位置にありながら、永らく水田地帯としての景観を保持してきたが、機能的かつ快適な住環境を創造すべく昭和60年代に至り、土地区画整理事業が計画、着手されたのである。

遺跡の存在は昭和30年代に刊行された『大分市史』等により知られてはいたが、遺物の散布地として認識されていたにすぎず、その具体的内容を示す資料は皆無であった。当該地域の土地区画整理事業が実施されるに伴い、昭和62年３月、下郡土地区画整理事業対象地域内に夥しい遺物の散布が確認されたため、区画整理事務所と現場の立会を実施した。こうして遺跡の存在が改めて再認識されることになったとともに、当時『下郡第２段丘遺跡』として周知されていた当該遺跡が、当初の推定範囲よりも広範に展開することが明らかとなったのである。

以上の経緯を受け、大分県教育委員会及び都市整備部下郡土地区画整理事務所と遺跡の取り扱いについて協議をかさねた。その結果、工事施工部分について、事前に発掘調査を実施することとし、以後現在まで継続して調査が実施され、平成16年８月現在、調査地点は143地点に及んでいる。これまでの各調査地点を第１表に示している。

また、下郡遺跡群の調査概要は以下の概報、および大分市埋蔵文化財調査年報において記載している。

大分市教育委員会　1990『下郡遺跡群』大分市下郡地区土地区画整理事業に伴う発掘調査概報（１）

大分市教育委員会　1991『下郡遺跡群』大分市下郡地区土地区画整理事業に伴う発掘調査概報（２）

大分市教育委員会　1992『下郡遺跡群』大分市下郡地区土地区画整理事業に伴う発掘調査概報（３）

大分市教育委員会　1993『下郡遺跡群』大分市下郡地区土地区画整理事業に伴う発掘調査概報（４）

大分市教育委員会　1990『大分市埋蔵文化財調査年報』　１　－平成元年度－

大分市教育委員会　1991『大分市埋蔵文化財調査年報』　２　－平成２年度－

大分市教育委員会　1992『大分市埋蔵文化財調査年報』　３　－平成３年度－

大分市教育委員会　1993『大分市埋蔵文化財調査年報』　４　－平成４年度－

大分市教育委員会　1994『大分市埋蔵文化財調査年報』　５　－平成５年度－

大分市教育委員会　1995『大分市埋蔵文化財調査年報』　vol.６　1994年度

大分市教育委員会　1996『大分市埋蔵文化財調査年報』　vol.７　1995年度

大分市教育委員会　1997『大分市埋蔵文化財調査年報』　vol.８　1996年度

大分市教育委員会　1998『大分市埋蔵文化財調査年報』　vol.９　1997年度

大分市教育委員会　1999「大分市埋蔵文化財調査年報」 **vol.** 10　1998年度
大分市教育委員会　2000「大分市埋蔵文化財調査年報」 **vol.** 11　1999年度
大分市教育委員会　2001「大分市埋蔵文化財調査年報」 **vol.** 12　2000年度
大分市教育委員会　2002「大分市埋蔵文化財調査年報」 **vol.** 13　2001年度
大分市教育委員会　2003「大分市埋蔵文化財調査年報」 **vol.** 14　2002年度
大分市教育委員会　2004「大分市埋蔵文化財調査年報」 **vol.** 15　2003年度

2．調査組織

調査を実施した各年度の調査組織については、年度別に「下郡遺跡群Ⅰ」に所収してあり、これを参照していただきたい。以下には「下郡遺跡群Ⅰ」刊行以降に該当する調査組織と資料整理体制について記述する。

〔平成14年度〕

調査主体者　大分市教育委員会　教育長　御沓　義則

事務局　大分市教育委員会教育総務部文化財課

帯刀　修一（大分市教育委員会教育総務部文化財課課長）
玉永　光洋（　同上　参事）
讃岐　和夫（　同上　課長補佐兼文化財係長）
熊谷　一秋（　同上　課長補佐兼管理係長）
幸　裕美（　同上　文化財課主任）
三浦　亜紀（　同上　文化財課主事）

大分市教育委員会理財課

衛藤　道男（大分市都市計画部区画整理課課長）
池辺洋一郎（　同上　参事）
甲斐　文雄（　同上　主査）

調査協力　下郡土地区画整理事務所

石坂紀久男（参事兼下郡土地区画整理事務所所長）
井上　邦明（　同上　換地工務係長）
後藤　修（　同上　補償係長）

調査担当　塔鼻　光司（大分市教育委員会教育総務部文化財課専門員）
後藤　典幸（　同上　文化財課指導主事）
姫野　公徳（　同上　文化財課指導主事）
甲斐　猛（　同上　文化財課指導主事）
坪根　伸也（　同上　文化財課主任技師）
池邉千太郎（　同上　文化財課主任技師）
塩地　潤一（　同上　文化財課主任技師）
高畠　豊（　同上　文化財課技師）
河野　史郎（　同上　文化財課技師）

中西　武尚（大分市教育委員会教育総務部文化財課技師）
永松　正大（　　同上　　文化財課主事）
佐藤　道文（　　同上　　文化財課事務員）
奥村　義貴（　　同上　　文化財課嘱託）
荻　　幸二（　　同上　　文化財課嘱託）
佐藤　孝則（　　同上　　文化財課嘱託）
羽田野達郎（　　同上　　文化財課嘱託）
宮田　　剛（　　同上　　文化財課嘱託）
羽田野裕之（　　同上　　文化財課嘱託）
上野　淳也（　　同上　　文化財課嘱託）
小住　武史（　　同上　　文化財課嘱託）
松尾　　聡（　　同上　　文化財課嘱託）
松竹　智之（　　同上　　文化財課嘱託）
苅谷　史穂（　　同上　　文化財課嘱託）
水町　裕子（　　同上　　文化財課嘱託）
梅田　昭宏（　　同上　　文化財課嘱託）
井口あけみ（　　同上　　文化財課嘱託）
勝間田あや（　　同上　　文化財課嘱託）
岩尾美保子（　　同上　　文化財課嘱託）
梅木　信宏（　　同上　　文化財課嘱託）

〔平成15年度〕

調査主体者　　大分市教育委員会　教育長　秦　政博

事務局　　大分市教育委員会

帯刀　修一（大分市教育委員会教育総務部文化財課課長）
玉永　光洋（　　同上　　参事）
讃岐　和夫（　　同上　　課長補佐兼文化財係長）
久多羅岐明（　　同上　　管理係長）
平野　勝敏（　　同上　　管理係主査）
姫野　公徳（　　同上　　管理係指導主事）
桑原　　治（　　同上　　管理係主任）
安部　一成（　　同上　　管理係主任）
三浦　亜紀（　　同上　　管理係主事）

大分市都市計画部区画整理課

油布　隆徳（大分市都市計画部区画整理課課長）
池辺洋一郎（　　同上　　参事）
玉衛　隆見（　　同上　　庶務係長）

賀来　俊文（大分市都市計画部区画整理課庶務係主査）
熊瀬　俊成（　　同上　　庶務係主任）

調査協力　下郡土地区画整理事務所

石坂紀久男（参事兼下郡土地区画整理事務所所長）
井上　邦明（　　同上　　課長補佐兼換地工務係長）
木本　行男（　　同上　　課長補佐兼補償係長）

調査担当　　後藤　典幸（大分市教育委員会教育総務部文化財課指導主事）
塔鼻　光司（　　同上　　文化財課専門員）
坪根　伸也（　　同上　　文化財課主任技師）
池邉千太郎（　　同上　　文化財課主任技師）
塩地　潤一（　　同上　　文化財課主任技師）
高畠　　豊（　　同上　　文化財課技師）
河野　史郎（　　同上　　文化財課技師）
中西　武尚（　　同上　　文化財課技師）
永松　正大（　　同上　　文化財課主事）
佐藤　道文（　　同上　　文化財課主事）
五十川雄也（　　同上　　文化財課事務員）
水町　裕子（　　同上　　文化財課嘱託）
井口あけみ（　　同上　　文化財課嘱託）
松尾　　聡（　　同上　　文化財課嘱託）
梅田　昭宏（　　同上　　文化財課嘱託）
荻　　幸二（　　同上　　文化財課嘱託）
羽田野達郎（　　同上　　文化財課嘱託）
佐藤　暁子（　　同上　　文化財課嘱託）
勝間田あや（　　同上　　文化財課嘱託）
奥村　義貴（　　同上　　文化財課嘱託）
岩尾美保子（　　同上　　文化財課嘱託）
佐藤　孝則（　　同上　　文化財課嘱託）
梅木　信宏（　　同上　　文化財課嘱託）
宮田　　剛（　　同上　　文化財課嘱託）
吉本　明弘（　　同上　　文化財課嘱託）
羽田野裕之（　　同上　　文化財課嘱託）
江上　正高（　　同上　　文化財課嘱託）
上野　淳也（　　同上　　文化財課嘱託）
秦　さとみ（　　同上　　文化財課嘱託）
大野　瑞恵（　　同上　　文化財課嘱託）
小橋　寛之（　　同上　　文化財課嘱託）

小住　武史（大分市教育委員会教育総務部文化財課嘱託）
衛藤　亮介（　　同上　　文化財課嘱託）
松竹　智之（　　同上　　文化財課嘱託）
苅谷　史穂（　　同上　　文化財課嘱託）

〔平成16年度〕

調査主体者　　大分市教育委員会　教育長　秦　政博

事務局　　大分市教育委員会
足立　昌人（大分市教育委員会教育総務部文化財課課長）
玉永　光洋（　　同上　　参事）
讃岐　和夫（　　同上　　課長補佐兼文化財係長）
久多羅岐明（　　同上　　管理係長）
平野　勝敏（　　同上　　管理係主査）
姫野　公徳（　　同上　　管理係指導主事）
桑原　　治（　　同上　　管理係主任）
安部　一成（　　同上　　管理係主任）
加藤　キヌ（　　同上　　管理係主事）
大分市都市計画部まちなみ整備課（区画整理課から改組）
油布　隆徳（大分市都市計画部まちなみ整備課課長）
熊瀬　俊成（　　同上　　主任）

調査協力　滝尾中部地区住環境整備事務所（下郡地区区画整理事務所より改組）
石坂紀久男（滝尾中部地区住環境整備事務所所長）
井上　邦明（　　同上　　主幹）
江口　雅道（　　同上　　主幹）

調査担当　　後藤　典幸（大分市教育委員会教育総務部文化財課文化財係指導主事）
塔鼻　光司（　　同上　　文化財課専門員）
坪根　伸也（　　同上　　文化財課専門員）
池邉千太郎（　　同上　　文化財課主任技師）
塩地　潤一（　　同上　　文化財課主任技師）
高畠　　豊（　　同上　　文化財課主任技師）
河野　史郎（　　同上　　文化財課主任技師）
中西　武尚（　　同上　　文化財課技師）
永松　正大（　　同上　　文化財課技師）
佐藤　道文（　　同上　　文化財課主事）
五十川雄也（　　同上　　文化財課主事）
古川　　匠（　　同上　　文化財課事務員）
井口あけみ（　　同上　　文化財課嘱託）

岩尾美保子（大分市教育委員会教育総務部文化財課嘱託）
上野　淳也（　　同上　　文化財課嘱託）
梅木　信宏（　　同上　　文化財課嘱託）
梅田　昭宏（　　同上　　文化財課嘱託）
衛藤　亮介（　　同上　　文化財課嘱託）
大野　瑞恵（　　同上　　文化財課嘱託）
荻　　幸二（　　同上　　文化財課嘱託）
奥村　義貴（　　同上　　文化財課嘱託）
小住　武史（　　同上　　文化財課嘱託）
苅谷　史穂（　　同上　　文化財課嘱託）
佐藤　孝則（　　同上　　文化財課嘱託）
秦　さとみ（　　同上　　文化財課嘱託）
羽田野達郎（　　同上　　文化財課嘱託）
羽田野裕之（　　同上　　文化財課嘱託）
服部　真和（　　同上　　文化財課嘱託）
松尾　　聡（　　同上　　文化財課嘱託）
松竹　智之（　　同上　　文化財課嘱託）
水町　裕子（　　同上　　文化財課嘱託）
宮田　　剛（　　同上　　文化財課嘱託）
森岡　晃司（　　同上　　文化財課嘱託）
山下　美郷（　　同上　　文化財課嘱託）
山本　哲也（　　同上　　文化財課嘱託）
佐藤　暁子（　　同上　　文化財課嘱託）
勝間田あや（　　同上　　文化財課嘱託）

調査作業員

秋吉幸彦・秋吉利恵子・麻生咲子・安部さな江・安部文生・安部道子・安藤カズ子・安東尚礼・井上弘美・井上真樹・岩尾正則・内山ツネ子・梅木好子・江藤和子・衛藤勝寛・江藤裕見子・大石妙子・大塚たま子・大山末喜・加藤香代子・加藤きよ子・辛島智栄・河野佳奈・河野久明・吉良二・工藤八重子・倉山香苗・栗原万実・久渡真・五所恵美子・古長静代・後藤聡・後藤昌子・小村美義・坂元ヨシエ・佐藤信・佐藤剛・重藤たま子・重松邦子・柴田カツ子・首藤小百合・首藤孝子・白石麻子・白木守・秦憲二・進司初恵・関愛子・関恵美子・関順子・関ナラエ・関ハツ子・関光子・高尾千代子・高野英子・高野スエ・高橋美佐子・高橋美代子・武石修吾・竹中エミ子・竹中房子・竹野内猛・田島正美・田代重豪・田代秀子・多田仁・立石カズ子・伊達久美子・伊達円香・丹後文子・鶴田弘美・霍間幸子・時枝忠宏・土佐林恵子・飛田佳子・友田ヌイコ・長見幸信・中村淑・西田恭子・野崎金一郎・野崎邦浩・野崎豊子・野田喜六・野田武志・野田友枝・野田守・野村節子・橋口真吾・羽田民子・秦野恒夫・林枝祐一・日野恭男・平田美代子・平林政子・広瀬敬子・兵谷有利・藤本正和・古川一郎・松井千代子・松村千里・松本昭治・松本道子・三浦ミヨ子・三重野京子・水嶋千枝子・溝口正人・宮迫喜久雄・宮下孝文・宮下責治・宮瀬知夫・柳井信二・山路康弘・山田美恵子・山本千加子・山元明・幸しのぶ・吉永匡史・渡部英子・綿丸るみ子

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境

１．下郡遺跡群の立地と遺跡概要

下郡遺跡群は大分平野の西部を流れる大分川の河口付近の右岸に位置する。昭和62年に第１次調査を実施して以来、平成15年の第143次調査まで発掘調査を終了している。各調査地点は、面積の大小はあるが、96ha におよぶ調査対象範囲をほぼカバーし、エリア内の遺跡状況の概略を把握できるまでになっている。



1	牧　遺　跡	2	小池原貝塚	3	高城石棺群	4	松栄山横穴墓群
5	北下郡横穴墓群	6	大友館跡	**7**	**下郡遺跡群**	8	穴井前横穴墓群
9	上原館跡	10	大臣塚古墳	11	羽田遺跡	12	米良草遺跡
13	葛木遺跡	14	長谷横穴墓群	15	滝尾百穴横穴古墳群	16	岩屋寺遺跡
17	国府推定地	18	石明遺跡	19	津守遺跡	20	二目川遺跡

第１図　調査遺跡位置図　(1/50,000)

遺跡は標高６ｍ前後の自然堤防上に立地し、遺跡群内には南北方向に旧河道、およびその支流跡が確認されるなど、旧地形は複雑な様相を示している。

これまでの調査により検出された遺構は縄文時代のものを上限とし、旧石器時代に比定されるものは確認されていない。

縄文時代に関しては、縄文後期と晩期の遺物の出土が認められている。特に本書にその内容を掲載した第25次調査では、弥生時代の流路埋土内に後期中葉に比定される北久根山式土器を中心とする大量の土器の出土が認められている。周辺地域での当該期の遺構は確認されていないことから、上流域に該期の集落遺跡の存在が予想される。近接時期の遺構としては、下郡桑苗遺跡で小池原上層式に比定される土器資料を出土した貯蔵穴が唯一のものである(註１)。

縄文晩期の遺物は、第５次調査においてまとまった出土が認められている。出土資料は晩期中頃のものを主体とし、自然流路跡の上部の窪み内に堆積した土層中から出土している。縄文土器の他、石斧などの出土も認められている。縄文時代遺物は下郡遺跡群の他地点においても後世の遺物との混在状況で出土するがその量は概して少ない。

弥生時代には、前期末段階に集落展開が顕著となる。中央に存在する旧河道を挟み、その両側に展開する自然堤防上に集落が立地する。集落内からは青銅製ヤリガンナ先端部分が長土坑中から出土した他、福岡県今山産の石斧も出土しており、他地域からの搬入品が比較的顕著な点が特徴的である。第25次調査はこの集落の西端に位置し、中央を走る旧河道の水際にあたる部分に相当する。これらの集落に対して、旧河道西側の微高地上に展開する集落は、大分川方向に二重の溝を巡らすことが近年の調査で判明している。集落東側の状況は不明な点が多いが、河道が存在しており、第25次調査地点のような状況であったと推定される。集落の大規模化は河道の東側集落よりも若干遅れて、中期になってからであり、その時間軸上の中心は後半にある。第141次、第142次調査地点はこの段階の集落に包括されるものである。弥生時代後期には集落様相は大きく変化し、遺跡群の中央、および南端に断面Ｖ字の環濠を伴う集落が形成される。さらに、弥生時代終末～古墳時代初頭の段階に集落構造という点においてもうひとつの画期があり、ふたたび集落の分布域は大きく変化する。すなわち後期段階の環濠を伴う集落エリアは溝の埋没とともに解消され、当該期の竪穴住居跡は広範な分布を示すようになる。なかでも第140次調査地点周辺にひとつの核となるゾーンが想定され、多くの切り合い関係を有する竪穴住居跡の分布が認められる。

集落は古墳時代前期～後期へと継続するが、住居の数は大きくその数を減じる。しかしながら、第18次調査の１号竪穴住居跡からは、多くの高坏資料とともに、完存する器台形の陶質土器が出土するなど、遺物内容には注目すべきものがある。

古墳時代後期、終末期には遺跡群東側の鶴崎丘陵崖面に多くの横穴墓群が形成される。下郡横穴墓群(註２)、穴井前横穴墓群、長谷横穴墓群(註３)、滝尾百穴横穴古墳群などが主要な横穴墓群であり、６世紀後半～７世紀前半頃に積極的な造墓活動が行われている。しかしながら、下郡遺跡群内では当該期の住居跡などは顕著でなく、現状では遺跡群の周辺においても同様である。数百基におよぶ横穴墓を造営した集団の集落遺跡の解明が今後の課題となっている。

７世紀の末には、大分川の対岸において大きな動きが認められる。大分川方面に突き出た上野丘陵の突端に所在する上野竜王畑遺跡(註４)において真南北方位を基軸とする建物群が確認されている。さ

らに、ほぼこれと軌を一にするように同一台地上の近接する地点に百済系単弁軒丸瓦をもつ古代寺院の存在が判明し(註5)、後の豊後国府に繋がると推定される遺跡の胎動が認められるのである。さらに、上野丘陵の南側にあたる羽屋地区には、ほぼ同時期の居館、あるいは官衙的な建物群が羽屋・井戸遺跡(註6)で確認されており、豊後国中枢の整備への萌芽的な様相として注目されている。

当該期の下郡遺跡では、ごく僅かの竪穴遺構が認められるものの、前述の遺跡のような様相は認められない。それが、羽屋・井戸遺跡等の衰退と呼応するように8世紀中頃に遺跡群は一気に大規模化し、ここに大きな画期を認めることができる。この段階での下郡遺跡群内での掘立柱建物群の分布は大きく三地点に集中が認められ、それぞれのエリアが道路により連絡されていたらしい様子も近年の調査により明らかとなっている。第98次・99次調査地点は、中枢部と推定される**F**区と大型建物が存在する**H**区とを連接する道路遺構が検出されており、この道路遺構は遺跡群のさらに南にも延びている状況が確認されている。「下郡」地区は「こおり」地名から、古くから大分郡衙の推定地として有力視されていた地域にあたり、3地区に集中する古代の建物群の様相や出土遺物内容等からその可能性はさらに高まっている。

10世紀～11世紀の遺構からは近江産の緑釉陶器椀を出土するなど、なおも他地域交流の結節に位置していたことは出土遺物の面から想定されるものの、遺構の状況は8世紀～9世紀にみられた活況はもはやない。

中世末の遺構からは京都系土師器、楠葉型瓦器椀、和泉型瓦器椀、小皿などの出土が確認され、大分川の河口に近接するという立地面の優位性から、なおも物流における主要な位置を担保していたものと考えられる。

中世後半期には、方形館の存在が知られ、国際貿易都市豊後府内の動向と連動する状況が認められる。下郡地区に所在する方形館は府内の都市再整備が行われる16世紀後半～末に館の拡張が行われ、大規模な堀に囲まれた方半町、あるいは一町規模の館へと変貌する様子が確認されつつある。この時期の館の変遷を第140次調査結果は如実に示しており、周辺調査区からの出土遺物にも、華南三彩水注片やタイ・ノイ川窯産の焼締陶器四耳壺などがあり、大分川対岸に所在した中世大友府内町跡（豊後府内）との強い関連性を示している。

註1　大分県教育委員会　1989　「下郡桑苗遺跡」　大分県文化財調査報告書　第80輯

註2　大分市教育委員会　2003　「下郡横穴墓群」　大分市大字下郡字加納に所在する発掘調査報告書

註3　大分市教育委員会　1992　「長谷横穴墓群」　大分県大分市羽田所在遺跡の発掘調査報告書

註4　高橋信武　1999　「大分県大分市上野遺跡群竜王畑遺跡」『日本考古学年報』50　日本考古学協会

註5　大分市教育委員会　1999　「大分市埋蔵文化財調査年報」**vol.**10　1998年度

註6　大分市教育委員会　1998　「大分市埋蔵文化財調査年報」**vol.**9　1997年度

2．調査の方法

発掘調査については、表土は原則として機械力を使用し、除去、搬出を行った。

調査区の設定にあたっては、国土座標第Ⅱ座標系を使用し、下記の図郭に基づき、調査区内に4mを方眼の地区杭を設定し、グリッド番号を決定した。こうして設定され、設置されたグリッドピン（基点）は調査終了段階まで使用され、図面の作成以外にも遺物取り上げの際の標記や調査単位等にも使用される。

遺構検出後は、このグリッドを基準に1：100の遺構配置略図を作成する。これに頭にSを冠した遺構番号が付され、遺構番号として、遺物取り上げ、写真ボード、遺構実測図等の整理番号となる。これに対応して遺構番号台帳が作成され、各遺構に関する所見を記入していく。各遺構の性格付に関しては、調査途上では保留とし、最終的には調査終了後に決定する。その段階では、遺構番号は調査時のままとし、遺構種別により遺構の個別の性格を表記している。たとえば、現場段階でS80と付された遺構が、調査終了段階に竪穴住居跡と判断された場合SH080と表記されることになる。

個別遺構の完掘図面、遺物出土状況図面等については、対象ケースによるものの、原則的には1：20を基本とし作成している。また、遺跡の全体完掘図面に関しては、一定程度の遺構占有率と調査面積のある場合には、航空写真測量図化を積極的に利用している。

【図郭表示についての表記】

位置の基準は、平面直角座標系（昭和43年建設省告示第3059号）を用いて表示し、以下に示す区分単位により、大分市域を4mメッシュで区切った上での標記を行う。大分県の場合、平面直角座標系は第Ⅱ系であり、この座標系はさらに、各座標系のY軸及びX軸を基準として、南北300km、東西160kmを含む区域を30km×40kmの長方形に分割し、その区画はアルファベットの大文字の組み合わせにより表示される。大分市の場合、大半がこの区画のJFであり、当然ながら、下郡遺跡群が所在する地域の区画コード（第1次区画コードメッシュ）もJFとなる。第1次区画コードメッシュは30km×40kmの長方形であることはすでに述べたが、この座標系内をさらに100等分し、次図に示すようなアラビア数字で表示される。これにより示される図郭は、5000分の1の国土基本図に一致することになり、これをさらに4等分することで、国土基本図の2500分の1の図郭となり、アラビア数字で区画番号を定める（第2次区画コードメッシュ）。

次にこの2500分の1の図郭を25等分し、500分の1の図郭を生成し、これにアラビア数字の図郭番号を付し、これをさらに25等分して、100分の1の図郭を作成する（第3次区画コードメッシュ）。

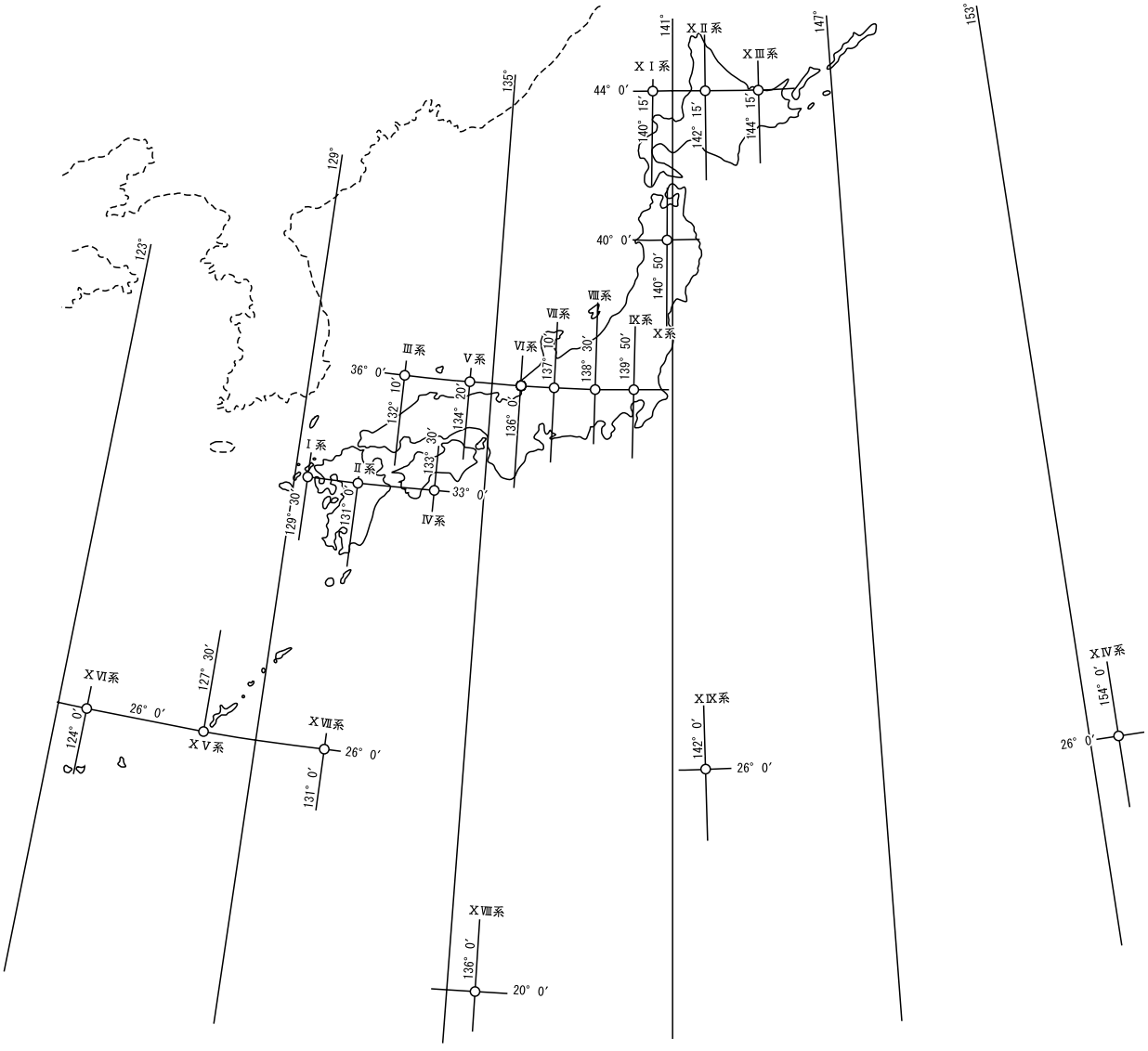
さらに、この100分の1の図葉に相当する区画を25等分したものが、20分の1の図郭となる（第4次区画コードメッシュ）。

以上の各コードメッシュは以下のように読み直される。

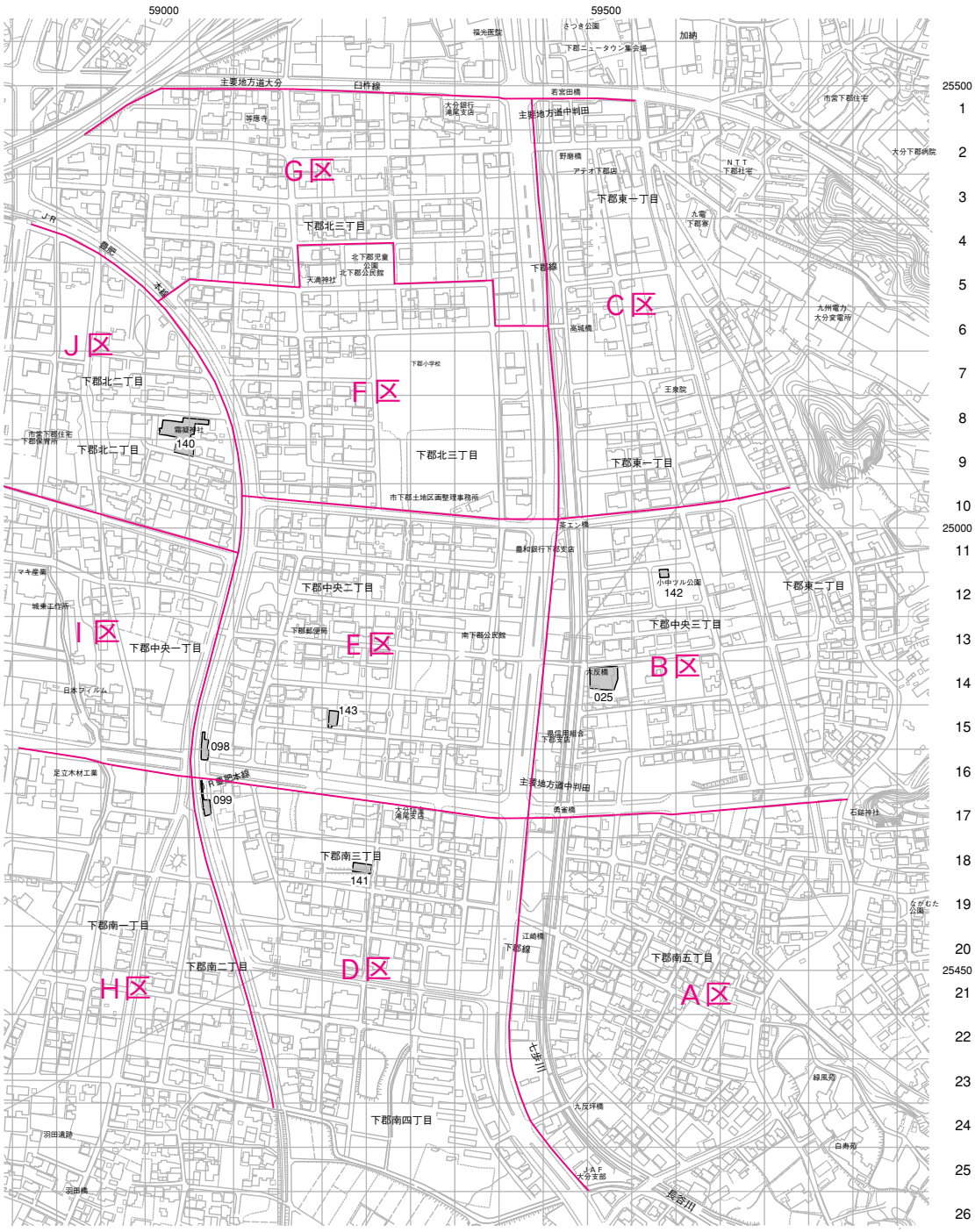
第1次区画コードメッシュ　　第1次地域区画：座標系番号と座標系内の区画名
第2次区画コードメッシュ　　第2次地域区画：国土基本図番号
第3次区画コードメッシュ　　第3次地域区画：遺跡図面番号
第4次区画コードメッシュ　　第4次地域区画：詳細遺跡図面番号

この区画コードは遺跡の図面整理番号として使用に供され、その際には、第4次区画コードメッ

シュにおいて、20分の１遺跡図面の図葉に相当する部分を４等分し、アルファベットの小文字で標記されることになる。また、このコードは現場段階においては、調査グリッド番号に準用される。すなわち、第３次区画コードメッシュにより生成された100分の１図郭を単位として、これを４ｍ－メッシュで区切り、北西角を基点としてアルファベットと数字による組み合わせにより標記される。この場合、４ｍメッシュ12マスの単位が20分の１の図郭と一致することになる。



第２図　平面直角座標系



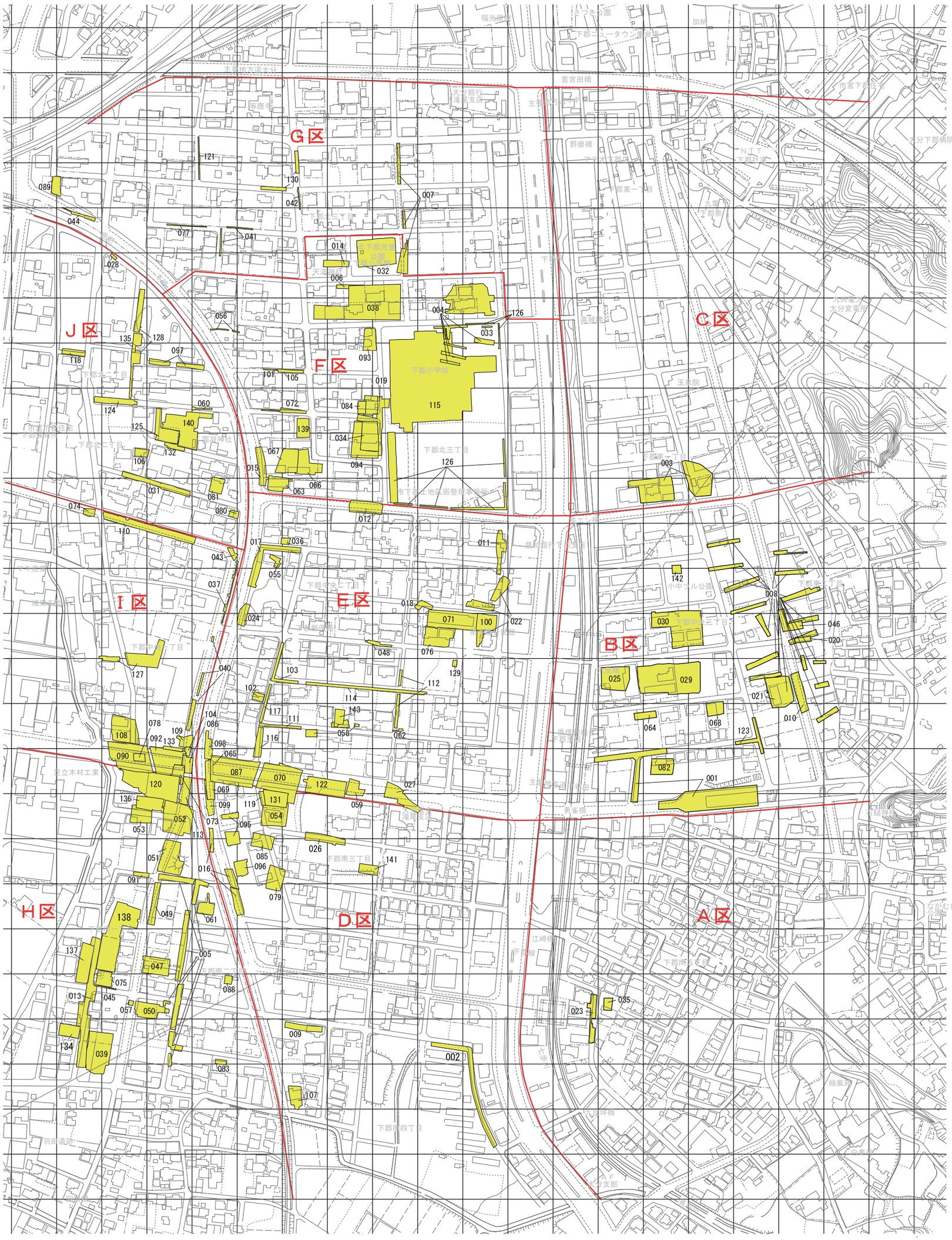
調　　査　　地	調査面積(m²)	調査期間	調査担当者
下郡遺跡群第25次調査地点	900	1990年５月９日～1990年９月11日	坪根伸也、渕野玲子
下郡遺跡群第98次調査地点	207	1997年11月１日～1997年12月26日	坪根伸也、中西武尚
下郡遺跡群第99次調査地点	313	1997年11月１日～1997年12月26日	坪根伸也、中西武尚
下郡遺跡群第140次調査地点	1136	2002年12月５日～2003年７月29日	苅谷史穂、松竹智之
下郡遺跡群第141次調査地点	214	2002年８月26日～2002年９月11日	松尾　聡、松竹智之
下郡遺跡群第142次調査地点	100	2002年11月12日～2002年11月15日	松尾　聡
下郡遺跡群第143次調査地点	176	2004年３月９日～2004年４月23日	松竹智之

第３図　調査グリッド図　(1/7,500)

t s r q p o n m l k j i h g f e d c b a

59000 59500

25500 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 25000 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 24500 21 22 23 24 25 26

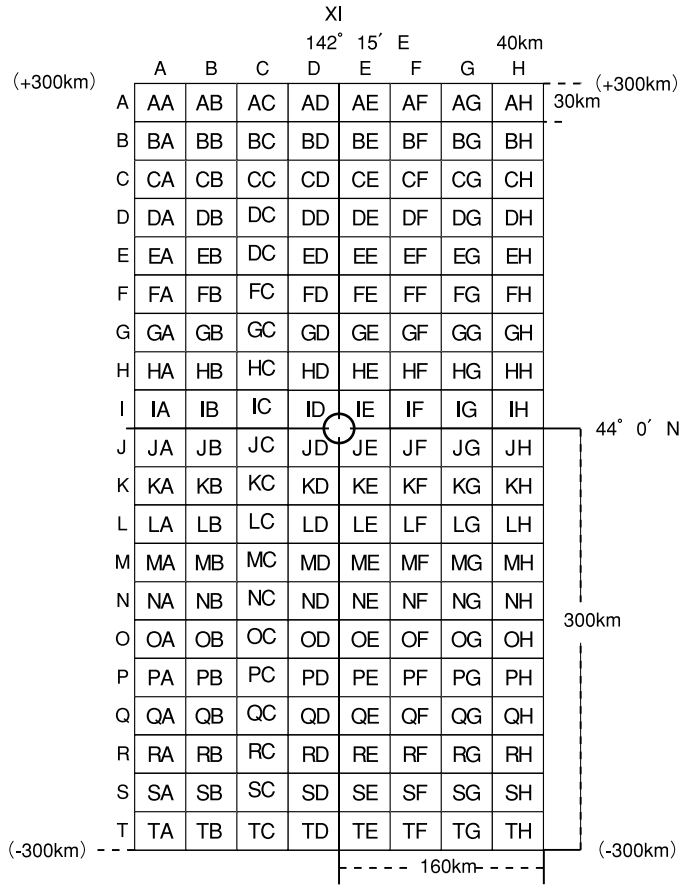


第４図　下郡遺跡群調査地点位置図

第１表　調査地点一覧

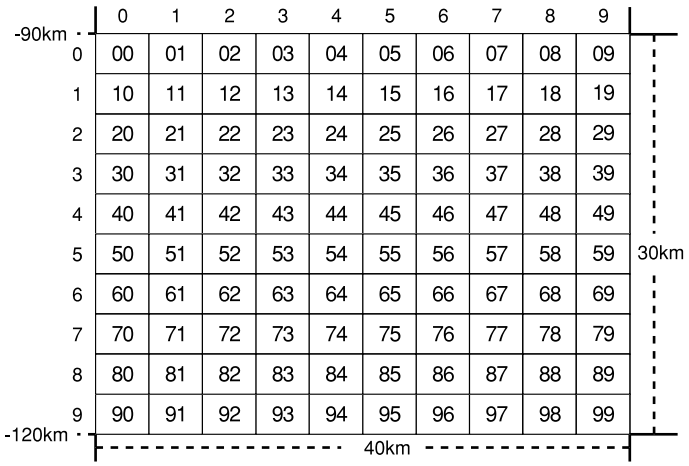
調査次数	調　査　地　点　名	面　積	調査年度
1	Ｂ区ｂ～ｇ-16・17地点	2130	昭和62年度
2	Ｄ区ｊ・ｋ-21～24地点	800	昭和62年度
3	Ｃ区ｅ～ｇ-9・10地点	2600	昭和62年度
4	Ｆ区ｊ・ｋ-5～7 地点	1900	昭和62年度
5	Ｈ区ｐ・ｑ-18～22地点	2007	昭和63年度
6	Ｆ区m-5地点	120	昭和63年度
7	Ｇ区ｌ-2～5地点	530	昭和63年度
8	Ｂ区トレンチ調査第1～第26トレンチ	2399	昭和63年度
9	Ｄ区ｎ-22地点	418	昭和63年度
10	Ｂ区ｃ-14・15地点	383	昭和63年度
11	Ｅ区ｊ-11・12地点	331	昭和63年度
12	Ｅ区ｌ・m-10地点	450	昭和63年度
13	Ｈ区ｓ-20～23地点	2500	平成元年度
14	Ｆ区m・ｎ-5地点	200	平成元年度
15	Ｆ区ｏ-9・10地点	500	平成元年度
16	Ｄ区ｏ・ｐ-17～19地点	2200	平成元年度
17	Ｅ区ｎ・ｏ-11・12地点	700	平成元年度
18	Ｅ区ｋ・ｌ-12地点	150	平成元年度
19	Ｆ区ｌ-8・9地点	700	平成元年度
20	Ｂ区ｃ-13地点	240	平成元年度
21	Ｂ区ｃ・ｄ-14・15地点	1600	平成元年度
22	Ｅ区ｊ-12・13地点	791	平成２年度
23	Ａ区ｈ-21・22地点	850	平成２年度
24	Ｅ区ｏ-12・13地点	210	平成２年度
25	Ｂ区ｇ-14地点	900	平成２年度
26	Ｄ区m・ｎ-17・18地点	360	平成２年度
27	Ｅ区ｋ・ｌ-16・17地点	450	平成２年度
28	Ｊ区ｒ-5地点	52.5	平成２年度
29	Ｂ区ｅ～ｇ-14地点	2800	平成３年度
30	Ｂ区ｅ・ｆ-13地点	2500	平成３年度
31	Ｊ区ｑ・ｒ-9・10地点	500	平成４年度
32	Ｆ区ｌ・m-4・5地点	1400	平成４年度
33	Ｆ区ｊ-6地点	24	平成４年度
34	Ｆ区ｌ・m-8・9地点	1000	平成４年度
35	Ａ区ｇ-21地点	6	平成４年度
36	Ｅ区ｎ-11地点	16	平成４年度
37	Ｉ区ｐ-11～13地点	110	平成５年度
38	Ｆ区ｌ～ｎ-5・6地点	3196	平成５年度
39	Ｈ区ｒ・ｓ-22・23地点	1200	平成５年度
40	Ｉ区ｐ・ｑ-13～15地点	246	平成５年度
41	Ｇ区ｏ・ｐ-4・5地点	81.5	平成５年度
42	Ｇ区ｎ-3・4地点	48	平成５年度
43	Ｉ区ｐ-11地点	70	平成５年度
44	Ｇ区ｓ-４地点	120	平成５年度
45	Ｈ区ｒ・ｓ-21地点	41	平成５年度
46	Ｂ区ｃ-12・13地点	310	平成５年度
47	Ｈ区ｑ・ｒ-20・21地点	589	平成５年度
48	Ｅ区ｋ～m-13地点	96	平成５年度
49	Ｈ区ｑ-19地点	350	平成６年度
50	Ｈ区ｑ・ｒ-21地点	481	平成６年度
51	Ｈ区ｑ-18地点	936	平成６年度
52	Ｈ区ｑ-17地点	1088	平成６年度
53	Ｈ区ｒ・ｑ-17地点	460	平成６年度
54	Ｄ区ｎ・ｏ-17地点	203	平成６年度
55	Ｅ区ｏ-11地点	110	平成６年度
56	Ｆ区ｏ・ｐ-6地点	298	平成６年度
57	Ｈ区ｒ-21地点	16	平成６年度
58	Ｅ区m・ｎ-15地点	256	平成７年度
59	Ｅ区m-16・17地点	236	平成７年度
60	Ｊ区ｐ-8地点	46	平成７年度
61	Ｈ区ｐ-19地点	247	平成７年度
62	Ｅ区ｌ-15地点	23.4	平成７年度
63	Ｆ区ｎ・ｏ-10地点	742.5	平成７年度
64	Ｂ区ｆ・ｇ-15地点	120	平成７年度
65	Ｅ区ｐ-16地点	93.3	平成７年度
66	Ｆ区ｎ・ｏ-9地点	1062	平成７年度
67			
68	Ｂ区ｅ-15地点	251	平成７年度
69	Ｅ区ｐ-16・17地点	405	平成７年度
70	Ｅ区ｎ・ｏ-16地点	1655	平成７年度
71	Ｅ区ｊ・ｋ-13地点	1050	平成７年度
72	Ｆ区ｎ・ｏ-8	113.5	平成７年度

調査次数	調　査　地　点　名	面　積	調査年度
73	Ｈ区ｑ-16地点	223	平成７年度
74	Ｉ区ｓ-10地点	100	平成７年度
75	Ｈ区ｒ・ｓ-20・21地点	300	平成７年度
76	Ｅ区ｊ・ｋ-13地点	660	平成７年度
77	Ｇ区ｐ・ｑ-3・4地点	315	平成７年度
78	Ｉ区ｒ-16地点	100	平成７年度
79	Ｄ区ｏ-18・19地点	468	平成７年度
80	Ｊ区ｐ-10地点	84	平成７年度
81	Ｊ区ｐ-9・10地点	238	平成７年度
82	Ｂ区ｆ-16地点	161.4	平成８年度
83	Ｈ区ｐ-22・23地点	65	平成８年度
84	Ｆ区m-8地点	120	平成８年度
85	Ｄ区ｏ-17・18地点	345	平成８年度
86	Ｉ区ｑ-16地点	339	平成８年度
87	Ｅ区ｏ・ｐ-16地点	1596.6	平成８年度
88	Ｈ区ｐ-21地点	300	平成８年度
89	Ｇ区ｓ・ｔ-3地点	210	平成８年度
90	Ｉ区ｑ・ｒ-15・16地点	1315	平成９年度
91	Ｈ区ｑ・ｒ-18地点	80	平成８年度
92	Ｉ区ｑ-16地点	850	平成９年度
93	Ｆ区ｌ・m-6・7地点	467	平成９年度
94	Ｆ区ｌ・m-8・9地点	1576	平成９年度
95	Ｄ区ｏ・ｐ-17・18地点	300	平成９年度
96	Ｄ区ｏ・ｐ-18地点	215	平成９年度
97	Ｊ区ｐ・ｑ-7地点	327	平成９年度
98	Ｅ区ｐ-15・16地点	207	平成９年度
99	Ｄ区ｐ-16・17地点	313	平成９年度
100	Ｅ区ｊ-13地点	543	平成９年度
101	Ｆ区ｏ-7地点	25	平成９年度
102	Ｅ区ｏ-14地点	200	平成９年度
103	Ｅ区ｎ・ｏ-13・14地点	270	平成９年度
104	Ｉ区ｑ-15・16地点	150	平成９年度
105	Ｆ区ｏ・ｎ-7地点	100	平成９年度
106	Ｊ区ｒ-9地点	120	平成10年度
107	Ｄ区ｎ-23地点	305	平成10年度
108	Ｉ区ｒ-15地点	771	平成10年度
109	Ｉ区ｑ-15地点	183	平成10年度
110	Ｉ区ｐ・ｒ-10・11地点	1434	平成10年度
111	Ｅ区ｎ・ｏ-15地点	165	平成10年度
112	Ｅ区ｌ-14・15地点	160.5	平成10年度
113	Ｈ区ｑ-16・17地点	301	平成10年度
114	Ｅ区ｋ～ｎ-14地点	451	平成10年度
115	Ｆ区ｊ～ｌ-6～8地点	8740	平成10・11年度
116	Ｅ区ｏ-15・16地点	246	平成10年度
117	Ｅ区ｏ-14・15地点	120	平成10年度
118	Ｊ区ｓ-7地点	149	平成10・11年度
119	Ｄ区ｏ-16・17地点	150	平成11年度
120	Ｈ区ｑ・ｒ-16・17地点	1600	平成11年度
121	Ｇ区ｐ-2・3地点	189	平成11年度
122	Ｅ区m・ｎ-16・17地点	800	平成11年度
123	Ｂ区ｄ-15・16地点	158	平成11年度
124	Ｊ区ｒ・ｓ-8地点	360	平成11年度
125	Ｊ区q-8・9地点	550	平成12年度
126	Ｆ区ｊ～ｌ-6～10地点	1150	平成12年度
127	Ｉ区ｑ～ｓ-13・14地点	840	平成12年度
128	Ｊ区ｒ-5・6/r-7・8地点	523	平成12年度
129	Ｈ区ｋ-14地点	33	平成12年度
130	Ｇ区ｎ・ｏ-2・3地点	212	平成12年度
131	Ｄ区ｎ・ｏ-16・17地点	442	平成12年度
132	Ｊ区ｑ-9地点	188	平成12・13年度
133	Ｉ区ｑ-15地点	79	平成13年度
134	Ｈ区ｓ-22地点	416	平成13年度
135	Ｊ区ｒ-6・7地点	152	平成13年度
136	Ｈ区ｑ・ｒ-17地点	417	平成13年度
137	Ｈ区ｓ-20・21地点	508	平成13年度
138	Ｈ区ｒ・ｓ-19・20地点	1774	平成14年度
139	Ｆ区ｎ-8・9地点	302	平成14年度
140	Ｊ区ｑｐ-8・9地点	1136.3	平成14年度
141	Ｄ区ｌ・m-18地点	214	平成14年度
142	Ｂ区ｆ-11・12地点	100	平成14年度
143	Ｅ区m-15地点	176	平成15年度



図葉番号

1/5000国土基本図にあっては、座標系内の一区画を100等分し、次の図によりアラビア数字で表示する。



1/2500国土基本図にあっては、1/5000国土基本図の図葉に相当する区画を4等分し、次の図によりアラビア数字で区画番号を定め、1/5000国土基本図の図葉番号、横線及び区画番号をこの順に連記して表示する。



平面直角座標系による図面図郭とグリッド

・平面直角座標系　　大分県は第Ⅱ系
・1/50000によるグリッド　　大分市はその大半がＪＦ（北側はＩＦ）
・1/5000

	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
0	00	01	02	03	04	05	06	07	08	09
1	10									
2	20									
3	30									
4	40									
5	50									
6	60									
7	70									
8	80									
9	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99

・1/2500（1500m×2000m、図郭60cm×80cm）

1	2
3	4

外枠が1/5000

・1/500（300m×400m、図郭60cm×80cm）

1	2	3	4	5
6	7	8	9	10
11	12	13	14	15
16	17	18	19	20
21	22	23	24	25

外枠が1/2500

・1/100（60m×80m、図郭60cm×80cm ）

1	2	3	4	5
6	7	8	9	10
11	12	13	14	15
16	17	18	19	20
21	22	23	24	25

a	b
c	d

方眼メッシュ
外枠が1/500

・1/20（12m×16m、図郭60cm×80cm）

1	2	3	4	5
6	7	8	9	10
11	12	13	14	15
16	17	18	19	20
21	22	23	24	25

a	b
c	d

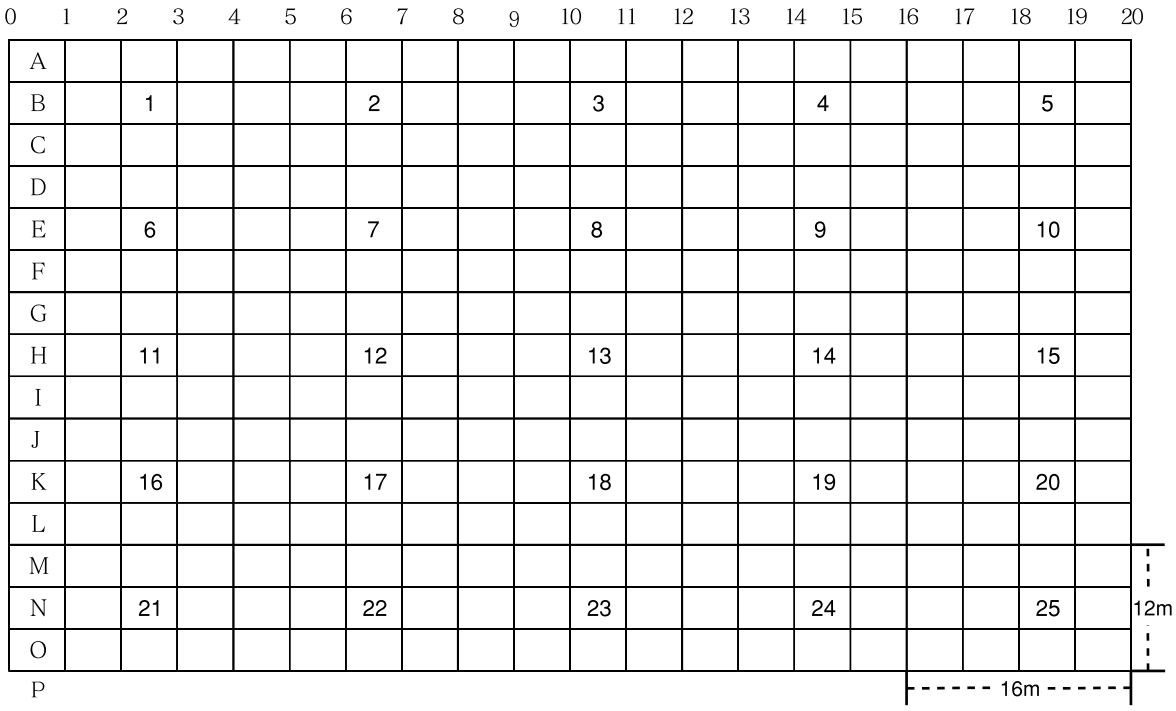
方眼メッシュ
外枠が1/100

・1/10（6m×8m、図郭60cm×8cm）

a	b
c	d

外枠が1/20

＊調査グリッド（1/100　4mメッシュ）



※外枠は 1/100 の図郭である。（範囲は 60m×80ｍである。）

一つの太い枠は 1/20 の図郭と番号である。（範囲は 12m×16ｍである。）

一つの細い枠は 4mピッチの杭幅を表している。

杭の番号は北西よりA－0　として 4m置きに増える。

グリッドは北西にあたる杭番号と同じである。

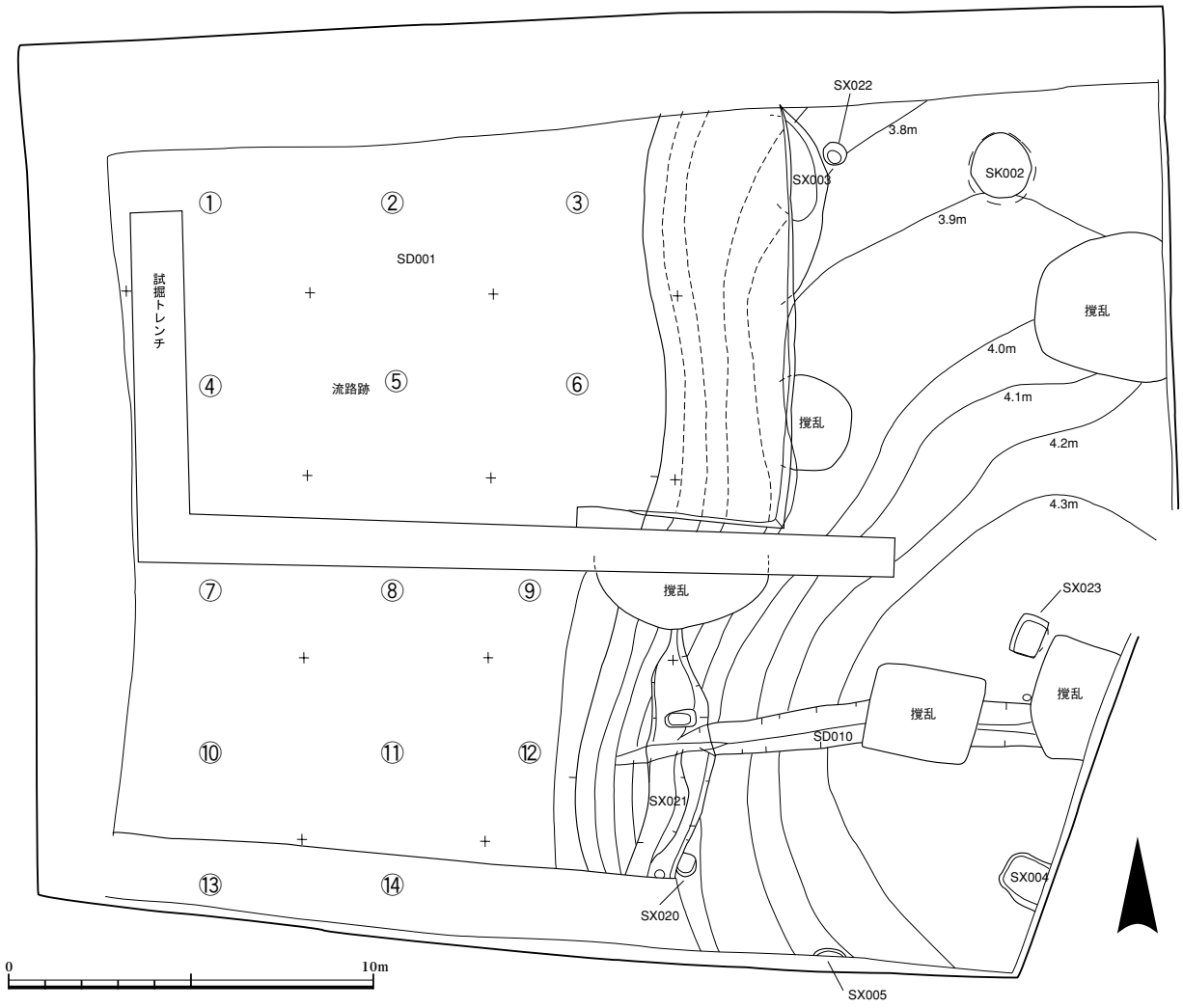
第Ⅲ章　調査の概要

第１節　下郡遺跡群第25次調査

（１）はじめに

本地点は昭和63年９月に大分県教育委員会が調査を実施した「下郡桑苗遺跡」[註1]の北方約50m に位置する。平成２年２月に行った試掘確認調査により下郡桑苗遺跡の延長部の存在を捕捉したことから、調査はこの流路跡を中心とする約900㎡を対象に平成２年５月９日～９月11日の間実施した。

調査は、重機による表土の除去を行った後人力による掘り下げを行った。流路範囲をある程度確認した段階において、流路全域をカバーするように第５図に示すような一辺５m の調査グリッドを設定した。便宜的に北西角のグリッドから①～⑮の名称を付しており、遺物の取り上げその他に関してこのグリッド番号を使用している。また、掘り下げ調査も基本的にこのグリッド単位で行い、第６図の土層断面図に示す基本土層との対比を行った。したがって、本調査地点のグリッドメッシュは、調査時のものをそのまま使用しており、そのため、下郡遺跡群内で統一的に使用しているグリッド名と



第５図　遺構配置図　(1/200)

は整合していない。

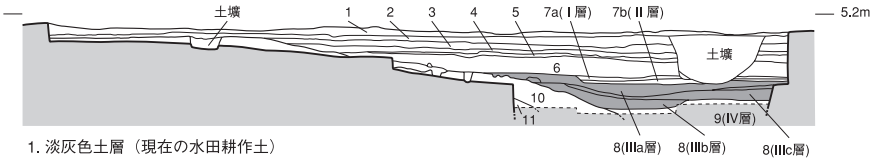
また、遺構番号に関しては、現場時に使用したものに若干の変更を加えているため、下記に対照を示す。本文中に使用する遺構番号は、すべて変更後のものである（太字部分が変更後の遺構番号）。

流路跡	→	SD001	SK001	→	SK002（概報1992ではSK02で報告）
SK001	→	SX003（概報1992ではSK01で報告）			
SK004	→	SX004	SK005	→	SX005
SK006	→	SX020	SK021	→	SX021（概報1992ではSD02で報告）
SK003	→	SX023	SD001	→	SD010（概報1992ではSD01で報告）

調査の結果、調査区の西側部分に弥生時代の流路跡を検出し、東側部分に当時の生活面を確認することができた。土層断面図に示されるように、東側生活面から流路へは緩やかな傾斜を経て底面に至る状況が看取され、さらには流路内堆積土層の堆積状況は本調査区が弥生時代前期末～中期のある時期、水際に相当する場所であったことを示唆している。

調査対象地は、調査段階において水田として利用されており、第１層とした現在の水田耕作土を除去すると対象地全面に灰色土層があらわれる。この第２層については、10～20㎝程度の層厚を示し、第１層に相当する現在の水田層以前の水田耕作土の水田床土である可能性がある。調査区の東側では、この第２層直下において黄茶色の基盤土層が存在し、遺構を確認することができる。遺構の遺存状況、上位に堆積する第１層、第２層の状況から、水田耕作時、あるいはそれ以前に大規模な削平を受けている状況が想定される。

検出遺構には、調査対象区の西側半分を占有する流路跡（SD001）をはじめ、東側の安定地盤面上面において土坑、溝状の遺構等を検出した。



1. 淡灰色土層（現在の水田耕作土）
2. 灰色土層（やや粘性を帯びる。下部に鉄分の垂下有り）
3. 淡灰褐色土層（多量の鉄分の垂下有り。硬質）
4. 灰褐色土層（鉄分の垂下有り）
5. 暗灰褐色土層（やや粘性を帯びる。鉄分の垂下有り）
6. 暗灰褐色粘質土層（古墳時代包含層）
7a. 灰褐色粘質土層（上部に黄色粒子を少量含む）　…Ⅰ層（流路内堆積土）
7b. 淡灰褐色粘質土層　…Ⅱ層（流路内堆積土）
8. 暗灰褐色粗砂+灰白色粘質土の混土層　…Ⅲa層（流路内堆積土）
黒色粘質土+灰白色粘質土の混土層　…Ⅲb層（流路内堆積土）
砂質土層（ラミナ状堆積物あり）　…Ⅲc層（流路内堆積土）
層間には灰色粗砂を基調とするラミナが随所にみられ、地点によってはⅢa層とⅢb層の区分は不明瞭
9. 黒色粘質土（木片・木葉等を多量に含む）　…Ⅳ層（流路内堆積土）
10. オリーブ黒色粘質土層
11. 灰色細砂層（基盤砂層）

第６図　基本土層図　(1/200)

（２）遺構と遺物

流路跡（SD）

025SD001（第５図）

調査区の西側半分を占有し、さらに調査区外に展開することから、その規模を確定することはできない。流路内堆積土層は、大きく上下に大別することができる。すなわち、第６層と第７層との間には、随所に不整合面を確認することができ、両層の間には時間的なヒアタスの存在が想定される。調査の結果、第６層は古墳時代の包含層であることが判明しており、その上部に存在する第３層から第５層については、土層状況から水田土層である可能性を指摘できるが、遺物の出土がなく、所産時期の確定には至っていない。第７層以下については、出土遺物内容から弥生時代中期以前の所産になるものと推定される。第７層下の弥生時代以前に比定される堆積土層は７層認められる。これらの内、弥生時代前期末前後の流路内堆積土層は第７**a**層～９層に相当し、上部層から順に第Ⅰ層～第Ⅵ層と別途呼称した。第７**a**・**b**層は流路内堆積土層第Ⅰ・Ⅱ層に相当するが、出土遺物が僅少であるため厳密な時期特定は行えない。また、第７**a**層の上部に見られる黄色粒子の沈殿は特徴的であり、下郡桑苗遺跡における第９層と類似した特徴を示している点から、土層対比に際しての鍵層となりうる可能性をもっている。なお、流路跡の西側部分は調査区外に延びており、今回の調査結果をもって流路跡の幅を確定することはできないが、本地点では最大幅15**m**を確認している。

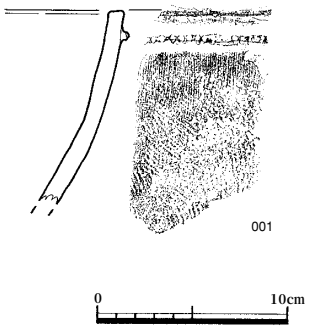
出土遺物（第７～102図）

出土遺物の主体は弥生時代前期末を中心とする弥生土器であり、壺、甕、高坏、蓋等の器種がある。さらにこれに縄文時代後期を中心とする縄文土器が混在状況で出土し、近隣地域に当該期の遺構が存在することを示唆している。さらに、**SD**001の上部層に相当する第５層、第６層中には古墳時代中期後半～末に比定される土器資料が出土する。

弥生土器・土師器

第５層出土土器（第７図）

001は第５層土中から出土した下城式甕の口縁部資料である。外面・茶褐色、内面・暗茶黒色を呈し、外器面はタテ方向のハケ目、内器面はナデにより調整される。胎土中には石英、角閃石粒が含まれている。内外器面にはススの付着が認められる。弥生前期末～中期初頭に編年されるものであり、下層からの掻きあげ遺物であると推定される。



第７図　５層出土遺物実測図　(1/4)

第６層出土土器（第８～14図）

第６層中からは、弥生時代中期後半～末、古墳時代におよぶ遺物の出土が認められる。**001～004**は古墳時代に比定される遺物である。

001は高坏の脚柱部であり、淡橙褐色を呈している。外器面はナデ、脚内面は工具ナデにより調整される。形態上の特徴から古墳時代前期後半頃に編年される高坏の脚部と考えられる。

002は短く立ち上がる口縁部をもつ鉢の口縁部付近の資料である。復元口径9.4cmを測る。外器面はタテ方向のハケ目の後ナデがなされ、内器面は丁寧なナデにより調整される。淡黄褐色を呈し胎土中には長石、角閃石粒を含む。古墳時代初頭のものと推定される。

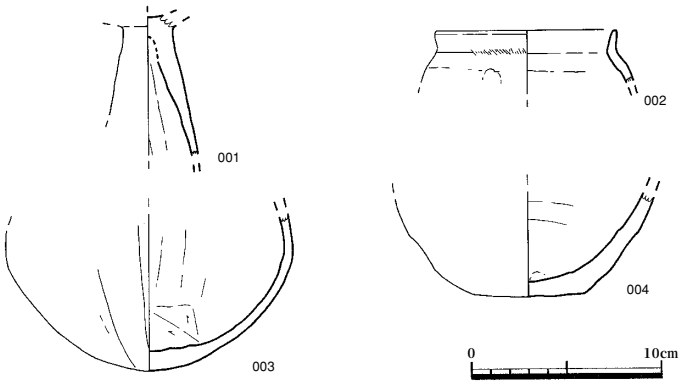
003は丸底を呈する甕の底部である。内面には工具ナデにより器面を平滑にした後にケズリが実施される。外器面はハケナデにより調整される。外面にはススの付着が認められ、内外面とも淡黄褐色を呈する。古墳時代前期に比定される。

004は底部のみの資料であり、詳細は不明であるが、壺の底部に相当する資料と考えられる。内器面工具ナデ、外器面ナデにより調整される。内外面とも淡黄褐色を呈する。弥生時代終末～古墳時代前期に盛行するものである。

005～010は弥生時代中期後半に比定される資料である。005・006は東北部九州系甕の口縁部破片である。

005は外面・淡黄褐色、内面・淡黄色を呈する。口縁部は強いヨコナデにより調整され、口縁内面端部はナデによりつまみ上げ状に強調される。中期後半前後のものである。

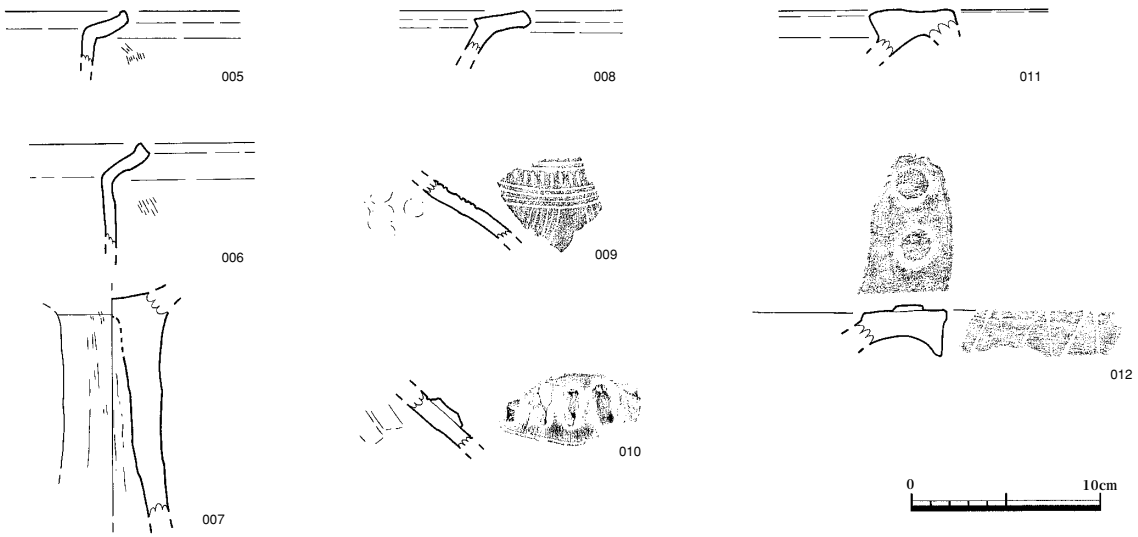
006も005と同様の特徴を具備する甕口縁部破片である、外器面はハケ目、内器面はナデにより調整される。淡黄褐色を呈する。



第８図　６層出土遺物実測図①　(1/4)

007は高坏脚柱部の破片である。外器面には赤色顔料の塗彩が行われている。色調は淡橙褐色を呈し、石英、長石、角閃石粒を含む。外器面にはミガキ、内器面にはナデによる調整がなされている。弥生中期後半の所産となるものである。

008は壺の口縁部破片である。外反する口縁部の内面には粘土の貼り付けにより水平口縁を形成する。内外面と



第９図　６層出土遺物実測図②　(1/4)

も淡茶褐色を呈し、ナデにより調整される。弥生時代中期中頃前後に比定される。

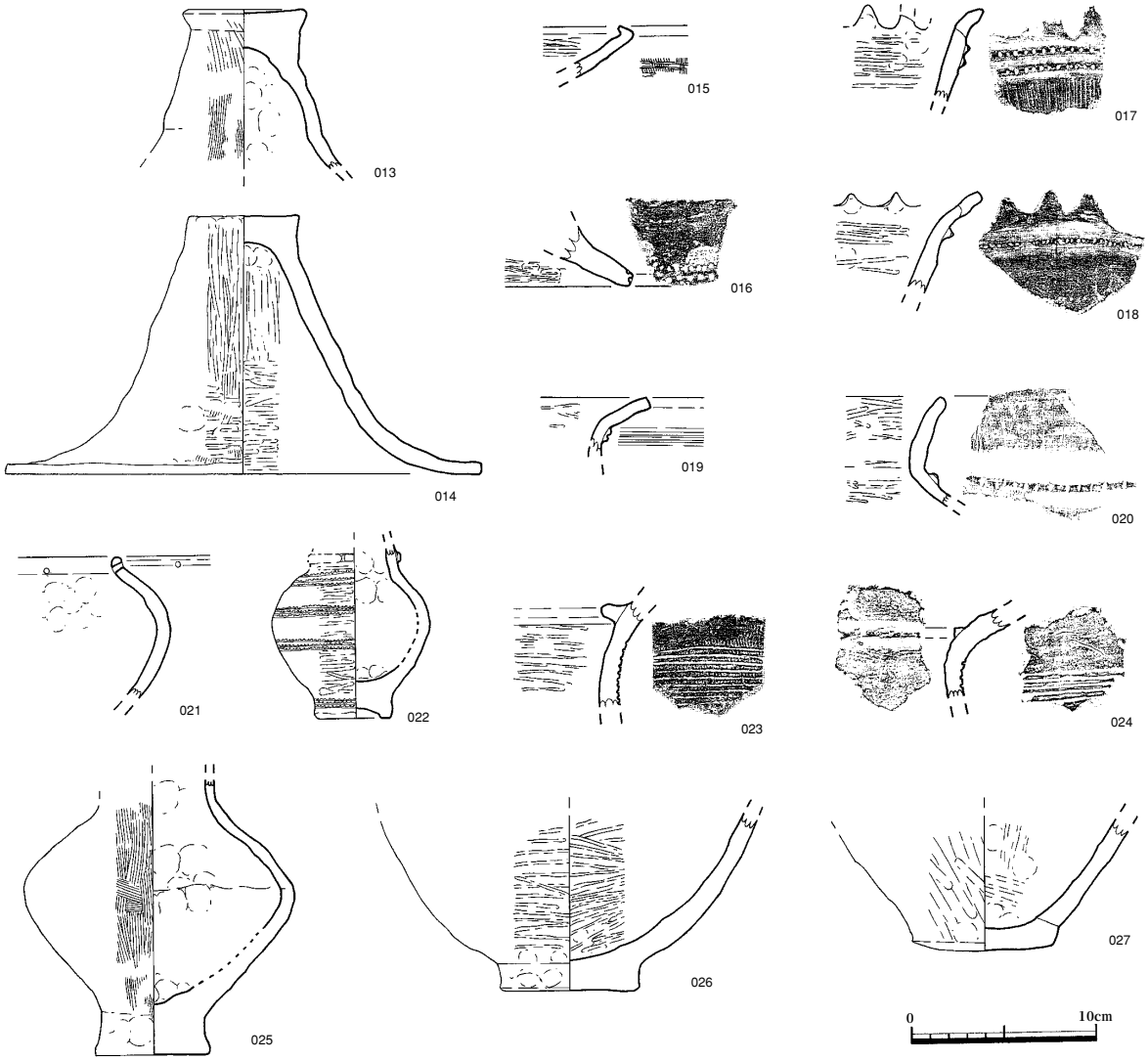
009は壺の肩部破片である。半截竹管状の工具により文様を施文する下城式壺であり、外面・暗茶褐色、内面・淡茶褐色を呈する。外器面は文様施文後に最終調整としてヘラミガキが施される。

010も壺の肩部破片であり、横方向の沈線間に縦長の浮文を密に貼付する。内外面とも淡橙褐色を呈し、胎土中には長石、角閃石粒を含む。外器面はハケ目により調整され、内器面は工具ナデにより仕上げられている。これらの諸属性、特に浮文の様相などは弥生時代中期の範疇で捉えることのできるものである。

011は、弥生土器壺の口縁端部破片である。色調は内外面とも淡黄褐色を呈し、口縁部上面は平坦面を形成する。端部外面は下垂気味に成形されるようであるが、欠損しており詳細は不明である。

012は口縁部上面を平坦に成形し、口縁端部を下垂させるタイプの壺の口縁部片である。口縁端部にはヘラ描きによる鋸歯文が施文され、上面には円形の浮文が貼付される。このようなタイプの壺は別府湾沿岸地域から宮崎県北部にかけての地域に主体的分布が認められるもので、弥生時代中期末に編年される資料である。内外面とも淡茶褐色を呈し、石英、角閃石、長石粒を胎土中に内包する。

013〜055は弥生時代前期末〜中期初頭の範疇で捉えられる資料である。第７層以下の土層からの混



第10図　６層出土遺物実測図③　(1/4)

入遺物と推定される。

013・014は蓋である。両者とも甕の底部を想起させる幅広く厚みをもつ頂部をもつ。頂部は平坦に成形され、ナデにより調整される。

013は内外面とも淡茶褐色を呈し、胎土中には角閃石、長石粒を内包する。頂部径6.1㎝を測る。外器面はハケ目により調整されるが、頂部付近と体部とでは異なるハケ目工具が使用されている。

014は頂部は完存し、裾部の約半分が遺存する蓋資料である。頂部径6.0㎝、復元口径25.7㎝を測る。内外面とも黒色を呈し、上半部をタテ方向のハケ目により、下半部はヨコ方向のヘラミガキにより調整される。胎土中には石英粒を含んでいる。いずれも頂部の形態から弥生時代前期末のものであると考えられる。

015は暗茶褐色を呈する鉢口縁部破片である。口縁端部は短く「く」字状に屈曲する口縁部を有する。同様の口縁部形態をもつ木製高坏が出土しており、本資料も高坏の口縁部である可能性も指摘される。内外器面ともヨコ方向のヘラミガキが施される。

016は台付鉢あるいは高坏の脚裾部である。「ハ」字状に開く裾部の端部には串状の工具による刺突連点文が施文される。淡茶褐色を呈し、内外器面ともヘラミガキが施される。

017・018は山形口縁を有する鉢口縁部である。

017は口縁部外面下位に二条の刻目突帯を貼付し、外器面はタテ方向のハケ目により調整される。外面・茶褐色、内面・淡茶黒色を呈する。

018も同様の形態を有する鉢口縁部である。口縁下の貼付突帯は一条となっている。外面・淡茶褐色、内面・黒色を呈し、外器面はハケ目、内器面はヘラミガキにより仕上げられている。**017**、**018**とも口縁形状が山形を呈している以外は下城式甕と同様の特徴を具備しており、同一様式の中に存在する器種と考えられる。他遺跡からの出土例は多くなく、近世府内町跡（大分合同新聞社）、福岡県京都郡葛川遺跡などに類例がみられる。

019は小片のため詳細は不明であるが、壺の口縁部と推定される資料である。外方へ大きく展開する形態をなし、口縁端部外面下位には削り出しによる低平な突帯が作出される。淡黄褐色を呈し、内外器面ともヘラミガキにより調整される。

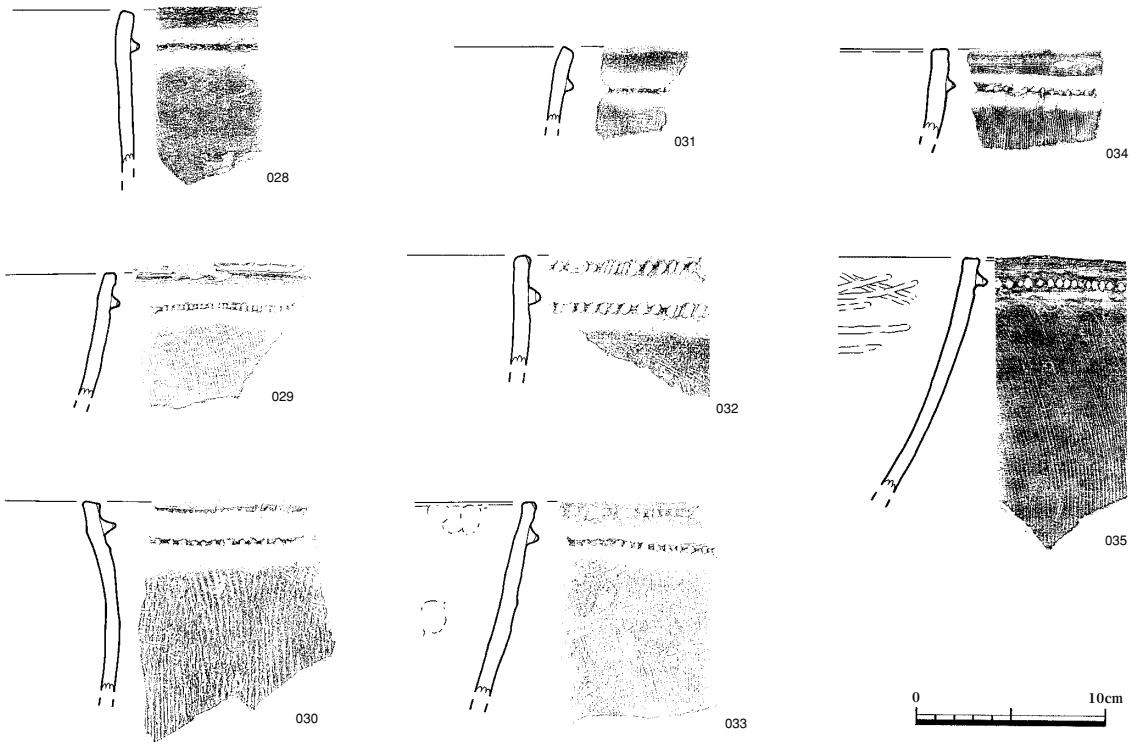
020は壺口縁部である。頸部に一条の刻目突帯が貼付される。外面・褐灰色、内面・灰黄褐色を呈し、内外器面ともハケ目およびヘラミガキにより調整される。胎土中には石英、角閃石粒を内包する。

021は無頸壺の口縁部から胴部の破片資料である。外面・暗茶褐色、内面・茶褐色を呈する。僅かにつまみ上げ気味に整形される口縁部には焼成後に穿たれる穿孔が認められる。

022は淡黒色を呈するミニチュア壺である。口縁部を欠損する。底部は厚底となり、上げ底状を呈する。頸部には突帯が一条貼付され、肩、胴、底部の都合四ヶ所に貝殻腹縁の刺突による平行線文が施文される。胴部最大径8.5㎝、底径4.1㎝を測る。頸部以下が完存する資料である。

023は外方向へ大きく延びる口縁部をもつ壺口縁部資料である。口縁端部は欠損する。内器面には突帯が一条貼付される。外器面にはタテ方向のハケ目調整の後、ヘラ描きによる多条の沈線文が施文される。内器面調整はヘラミガキによる。外面・淡橙褐色、内面・淡茶褐色を呈する。

024も**023**と同様の壺口縁部資料である。外面・黒色～暗茶褐色、内面・淡暗茶褐色を呈し、胎土中



第11図　6層出土遺物実測図④　(1/4)

には石英粒を含む。外面の多条沈線文も**023**と同じようにヘラによる１本描きによるものである。

025は壺である。口縁部を欠損する。底部は厚底となり、体部は菱状を呈する。胴部最大径14.6㎝、復元底径6.3㎝を測り、器表面は細密なタテ方向のハケ目により調整される。外面・淡黒色、内面・淡灰褐色を呈し、胎土中には長石粒を含む。

026・027は壺底部資料である。

026は円盤貼り付け様の底部をもち、底部から膨らみをもって上半部へ立ち上がる。外面・淡茶褐色、内面・淡黄褐色を呈し、両面ともヨコ方向のヘラミガキが施される。胎土中には石英、角閃石粒を含み、復元底径7.0㎝を測る。

027は外面・淡黄褐色、内面・黒色を呈し、内外器面はヘラミガキにより調整される。底径7.6㎝を測り、胎土中には石英、角閃石を含む。

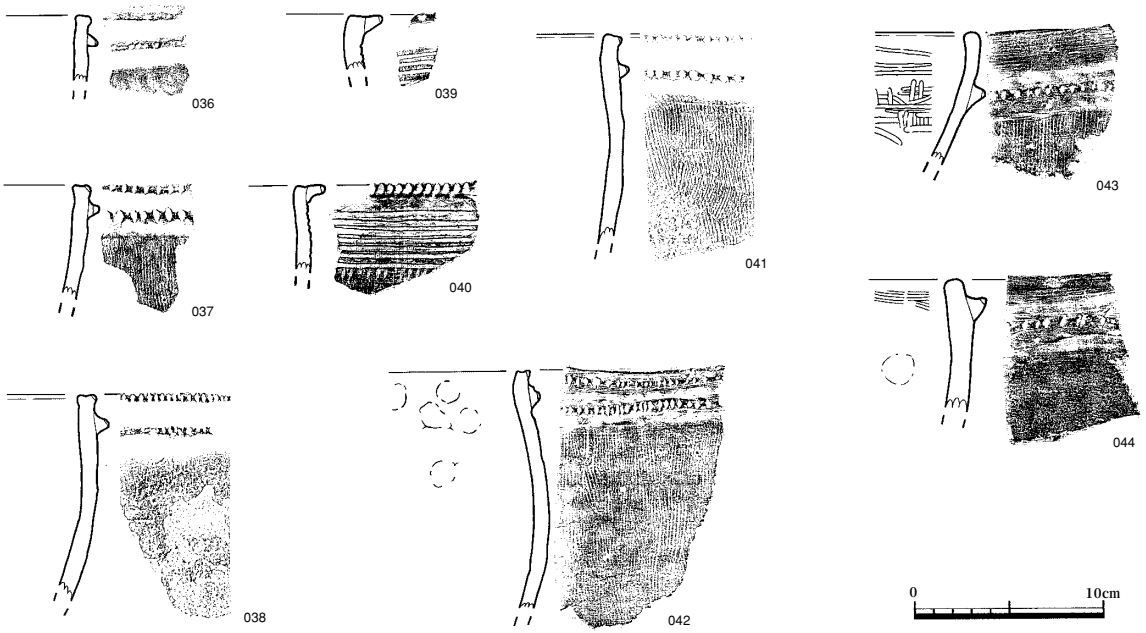
028～052は甕口縁部資料である。

028は外方へ若干屈曲気味に立ち上がる口縁部をもつ口縁部片である。口縁外面下に一条の刻目突帯を貼付する。淡黄褐色を呈し、胎土中に石英、角閃石を内包する。内外器面はナデにより調整される。

029も同形態の口縁部をもつ甕資料である。外器面はタテ方向のハケ目、内器面はナデとミガキにより調整される。外面・橙色～褐灰色、内面・明褐灰色を呈する。

030は内湾気味に立ち上がる胴部に直立する口縁部をもつ資料である。突帯上の他、口縁端部にも刻みが施される。外器面はタテ方向のハケ目、内器面はナデおよびミガキにより仕上げられる。内外面とも黒色を呈し、胎土中には石英、長石を含む。

031も淡黄褐色を呈する口縁部資料である。貼付け突帯付近を中心に強いヨコナデにより整形される。



第12図　6層出土遺物実測図⑤　(1/4)

032は直立する口縁部をもつ下城式甕の口縁部資料である。外面・黒色、内面・暗茶黒色を呈し、胎土中に石英、角閃石を内包する。器面調整は、029などと同様に内外器面はハケ目、ナデ後ミガキという器面調整パターンを示す。口縁端部にも斜目方向の刻みが突帯と同じように施文される。

033も下城式甕の口縁部資料である。外面・黒褐色～黄褐色、内面・黒色～灰黄褐色を呈している。器表面の調整は、032と同じパターンによる。

034は黄褐色を呈する下城式甕口縁部資料である。口縁端部は強いヨコナデにより面取りをしたような平坦面を形成している。胎土中には石英、角閃石粒を含んでいる。

035は直立気味に立ち上がる口縁部形状を示す下城式甕口縁部資料である。口縁端部には強いヨコナデが施される。外面・黒灰色、内面・灰黒色を呈する。器面調整パターンは、外器面・ハケ目、内器面・ナデ後ミガキである。胎土中には角閃石、長石粒を含み、外器面にはススの付着が認められる。

036～038は内外の口縁端部をヨコナデ時に僅かに突出させ、外面の突出部に刻みを施した資料である。口縁部はいずれも直立形状を示す。

036は黄茶褐色を呈し、内外器面ともナデにより調整される。

037は外面・暗茶黒色、内面・淡茶褐色を呈し、外器面にはススの付着が認められる。器面の調整は外器面がタテ方向のハケ目、内器面がナデ調整後、部分的にヘラミガキが施される。胎土中には石英、角閃石粒が認められる。

038は器面の調整にハケ目を残さず、内外器面とも最終調整にナデによる仕上げを行うものである。胎土中に石英、長石粒を含む。外器面の一部が剥落する。ススの付着がみられ、剥落も被熱によるものと考えられる。

039・040は、西部瀬戸内地域に起源をもつ甕の口縁部資料である。

039は断面三角形の突帯を口縁部に貼付し、端部に刻みを施し、口縁部外面下位にヘラ描きによる多条沈線文を施文する。淡黄褐色を呈し、外器面はハケ目、内器面はナデとミガキにより調整され

る。

040は口縁端部に貼付した粘土帯を外方向へ薄く引き出し、水平口縁を形成する。口縁端部には刻みを施し、外面下位にはヘラ描きによる多条沈線文とその下部には刺突連点文を一条施文する。器面調整は内外器面ともナデによる。外面・暗褐茶色、内面・暗褐灰色を呈している。**039・040**とも形態、文様等は外来のものであるが、胎土中には角閃石、石英粒を含み、他の在地系の土器と差異のない点は注目されよう。

041～044は在地系の下城式甕の口縁部資料である。

041・042は突帯部から外反気味に短く立ち上がる口縁形状を示すものであり、**043・044**は内湾気味の形態を示すものである。

041は外面・暗茶褐色、内面・茶褐色を呈し、外器面・ハケ目、内器面・ナデ後ミガキという調整パターンを示す資料である。

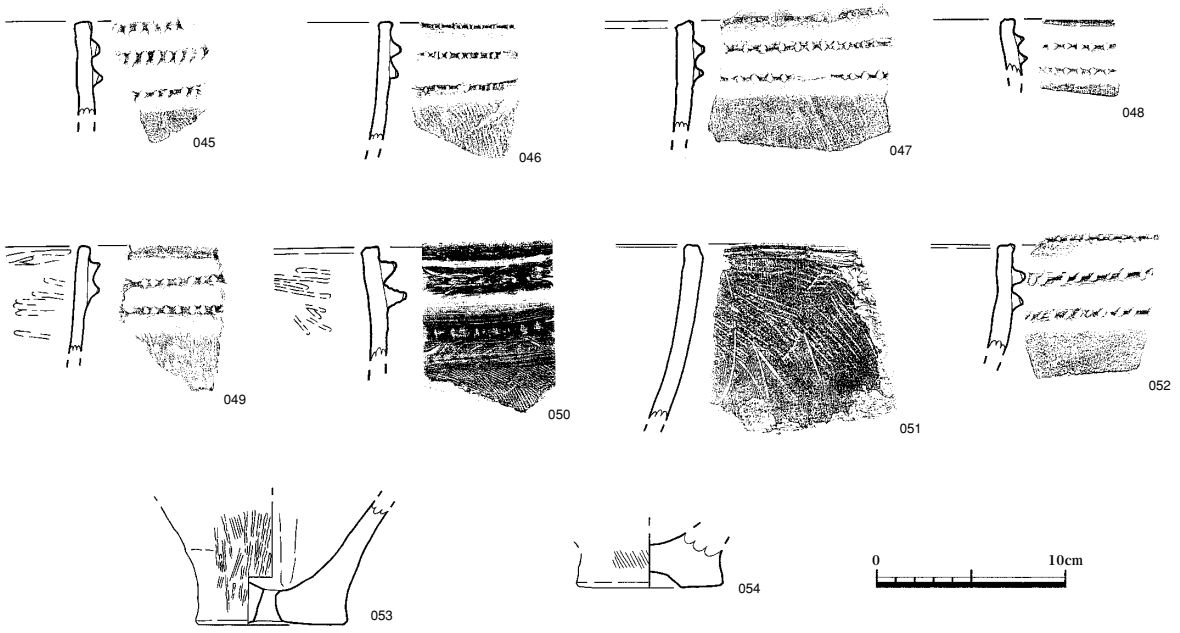
042は外器面・ハケ目、内器面・ナデという部分に異同はないが、**042**にはミガキが認められない。外面・淡褐色、内面・暗褐色を呈している。

043は器形的な特徴から胴部最大径部に突帯が貼付されるような形態となる。外器面・ハケ目、内器面・ナデ後ミガキという調整が行われるが、口縁端部に関しては、内外器面とも強いヨコナデにより調整される。外面・黒灰色～淡黄灰色、内面・灰黒褐色を呈し、外器面にはススの付着が認められる。

044は内外器面ともナデにより調整される資料であるが、内器面上端部にヨコ方向のハケ目調整痕が残る。このような点から本来は、内外器面ともにハケ目による調整が実施されていたものを最終的にナデにより仕上げを行った結果、現在のような状況になったと推定される。

045～050、**052**は外面口縁部下位の貼付突帯が二条のものである。口縁端部の形状に若干の差異がある。

045は内外面とも暗茶黒色を呈し、口縁部外面下位には低平な突帯が二条貼付される。あわせて口縁端部外面にも刻みが施され、刻みの施文部位は都合三ヶ所ということになる。器面調整のパターン



第13図　6層出土遺物実測図⑥　(1/4)

は外器面・ハケ目、内器面・ナデ後ミガキのパターンである。胎土中には角閃石、長石粒を含んでいる。外器面にススの付着が認められる。

046は直立気味に立ち上がる口縁部に断面三角形を呈する二条の刻目突帯を貼付する下城式甕である。内外面とも暗茶褐色を呈し、胎土中には、角閃石、石英を含む。器面調整パターンは**045**と同様である。胎土中に含まれる混和材に関しても、石英、角閃石粒を含むなど共通要素が多い。

047も直立気味の口縁部をもつ下城式甕の口縁部破片である。端部は内傾するよう成形される。外面・暗黄褐色、内面・淡茶褐色を呈する。外器面はハケ目により、内器面はナデにより調整されるが、ミガキは認められない。外器面にススの付着が認められる。

048は口縁端部外面をナデにより若干突出させ、この部分にも二条の突帯と同じく刻みが施文される。内外面とも茶褐色を呈し、器面調整パターンは**047**と同じであり、内器面にミガキ調整は行われない。胎土中には石英、長石粒を含んでいる。

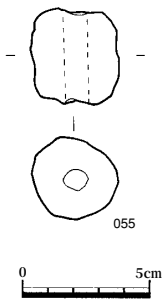
049は直線的に口縁部に立ち上がる口縁部をもつ下城式甕の口縁部である。内外面とも淡黄色を呈する。内器面にはヨコ方向のヘラミガキが顕著である。

050は外器面に大型の刻目突帯をもつ下城式甕の口縁部破片である。外面・明茶褐色、内面・淡茶褐色を呈する。胎土中には石英、角閃石粒を含む。

051は若干内湾気味に立ち上がる形態を示す甕、あるいは鉢の口縁部破片である。突帯は貼付されない。内外器面ともハケ目、ナデ、ミガキにより調整される。外面・黒色、内面・茶褐色を呈する。胎土中には石英、角閃石粒を含む。

052は二条の貼付による刻目突帯をもつ下城式甕口縁部である。外面・黒色、内面・茶褐色を呈し、外器面・ハケ目、内器面・ナデ調整により仕上げられる。胎土中には石英、長石粒を含む。外器面にはススの付着が認められる。

053は甕底部である。外面・淡茶褐色、内面・黒色を呈する。外器面の調整はタテ方向のハケ目とミガキにより、内器面はナデにより調整される。底部中央には両側からによる焼成後穿孔が認められる。



第14図　6層出土遺物実測図⑦ (1/3)

054は底部破片であるが、小破片のため詳細は不明である。胎土状況や調整等は甕底部に類似するが、底面に凹形に上げ底状に成形する資料は先述の**022**のミニチュア壺のみであり、他器種の可能性もある。内外面とも茶褐色を呈し、外器面はハケ目により調整される。底径7.4㎝を測る。

055は完存する土錘である。長さ3.8㎝、径3.4㎝、重量41.9**g** を測る。内外面とも淡茶褐色を呈し、胎土中には角閃石、長石粒を含む。

第８層出土土器（第15～52図）

先述のように、第Ⅲ層は場所により上下に分層することができる部分があり、その間にラミナ状の堆積物が存在する。出土遺物の解説にあたっては、分層により細別層に帰属することの出来たものについては、各細別層の項目に掲載し、それ以外の遺物については、第Ⅲ層出土土器として一括した。したがって、第Ⅲ層出土遺物の中には第Ⅲ**a**層、第Ⅲ**b**層、第Ⅲ**c**層の遺物を含んでいることになる。

（１）第Ⅲ層出土土器（第15～29図）

001は下城式甕の系譜に連なるものであり、外反する口縁部の外面下位に突帯を一条貼付する。口縁端部、突帯においても刻みは施さず、外器面・ハケ目、内器面・ナデ後ミガキという調整パターンを示す。口縁端部から突帯までの間が比較的広い点を大きな特徴とする。

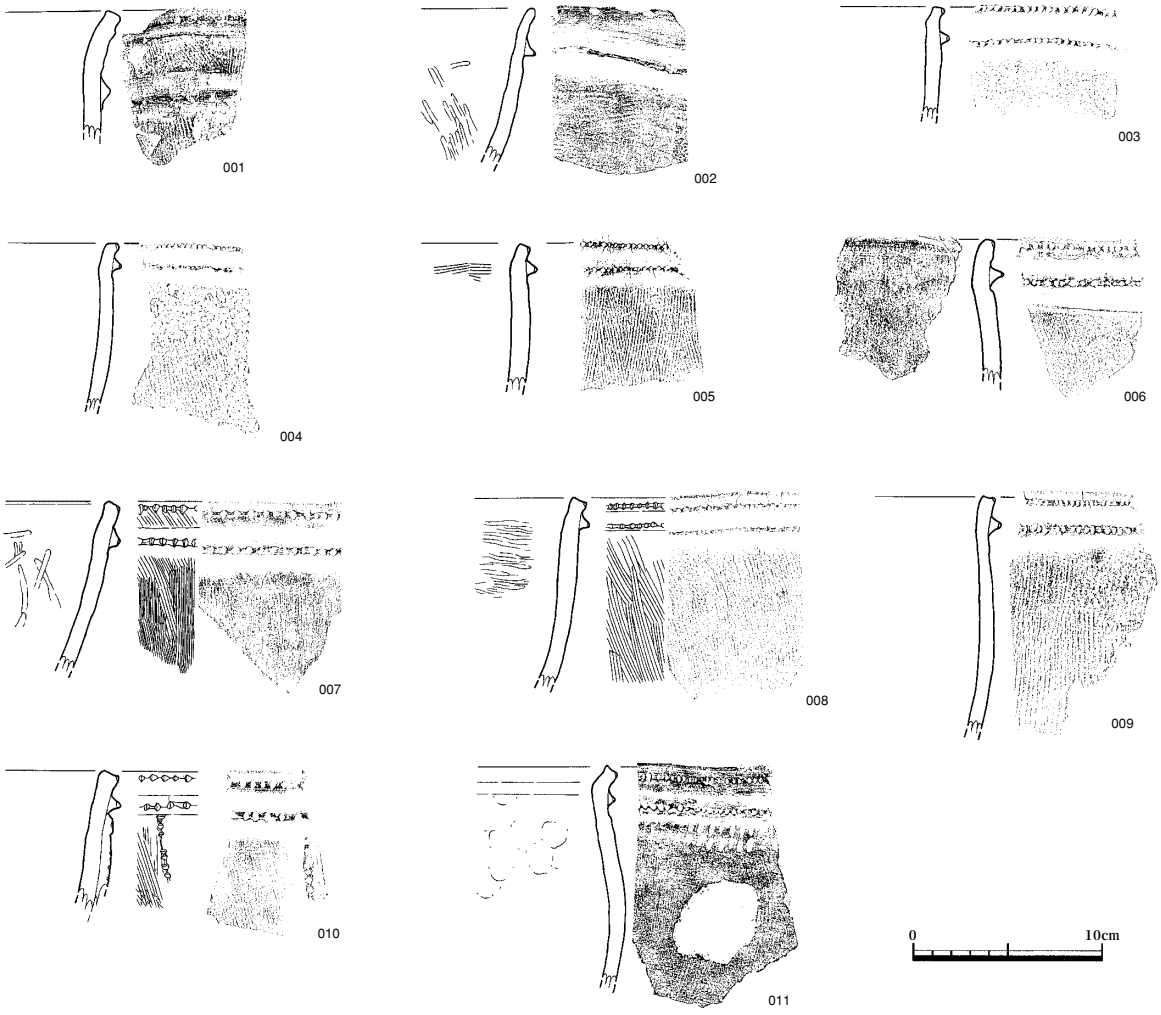
002～011は口縁部形状が短く外反する器形をなし、一条の刻目突帯を貼付し、**003～011**は加えて口縁端部にも刻みを施す下城式甕の口縁部資料である。

002は外面・黄橙色～褐灰色、内面・黒色～灰黄褐色を呈し、胎土中には石英、角閃石、長石粒を含む。調整は外器面・ハケ目後ミガキ、内器面・ナデ後ミガキによるものである。口縁端部を面取りせずに舌状におさめる点を特徴とする。

003は外面・茶黒色、内面・茶褐色を呈する。内器面はミガキにより仕上げられるが、外器面にはハケ目は残さず、ミガキもみられない。ナデによる調整により仕上げられる。

004は内外面とも黒色を呈する。調整パターンは外器面・ハケ目、内器面・ミガキによるものであり、胎土中には角閃石、長石粒を含む。外面の突帯下位に被熱による剥落が認められる。

005は外面・赤茶色、内面・暗茶褐色を呈する口縁部破片である。内器面は基本的にナデにより仕上げられるが、上端部にヨコ方向のハケ目が残り、当初はハケ目による調整がなされていたことがわ



第15図　８層（Ⅲ層）出土遺物実測図①　(1/4)

かる。外器面のタテ方向のハケ目は比較的密に調整される。

006は外面・黄茶褐色、内面・茶褐色を呈する。外器面のみでなく、内器面にもハケ目を残すが、内外器面のハケ目の調整工具は異なるものが使用され、内器面にみられるハケ目調整痕は外器面のものに比較して条線の間隔が広く、粗い感じを受ける。

007は胎土中に石英、角閃石粒が目立つ口縁部資料である。外面・黄灰色、内面・黄褐色を呈する。内器面のみヘラミガキが施されるが、ミガキは主としてタテ方向に施される。

008は諸特徴については、**007**に類似するが、内器面のヘラミガキがヨコ方向に施される点が大きく異なり、外面・橙色～褐灰色、内面・灰褐色を呈している。

009は外面・黒色、内面・暗茶褐色を呈し、胎土中には角閃石粒が目立つ。内器面にヘラミガキは認められない。

010は外器面下位に貼付された刻目突帯に接続するように下方に延びる刻目突帯をもつ口縁部資料である。内外面とも黄橙色を呈する。調整パターンは外器面・ハケ目、内器面・ナデ後ミガキによるものである。

011は外面・黒灰色～黄灰褐色、内面・淡黄褐灰色を呈し、胎土中には石英、角閃石を含む。内器面のミガキは認められない。外器面にはススの付着がみられ、突帯下には刺突連点文が施文される。

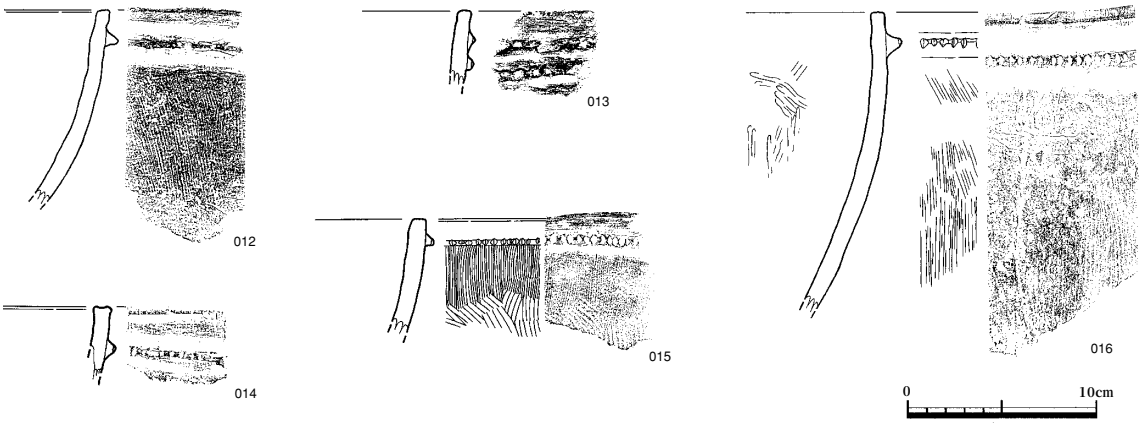
012～031は直立気味の口縁形状を呈する下城式甕口縁部破片である。刻みを施さないもの（**012**）、一条ないし二条の刻目突帯を貼付するもの(**013～031**)、そのうち、口縁端部にも刻目があるもの(**017～031**）がある。

012は外面・黒色、内面・黄黒色を呈する。口縁端部外面、突帯部はナデにより調整され、刻みは施されない。外器面・ハケ目、内器面・ナデによる調整パターンを示す資料である。

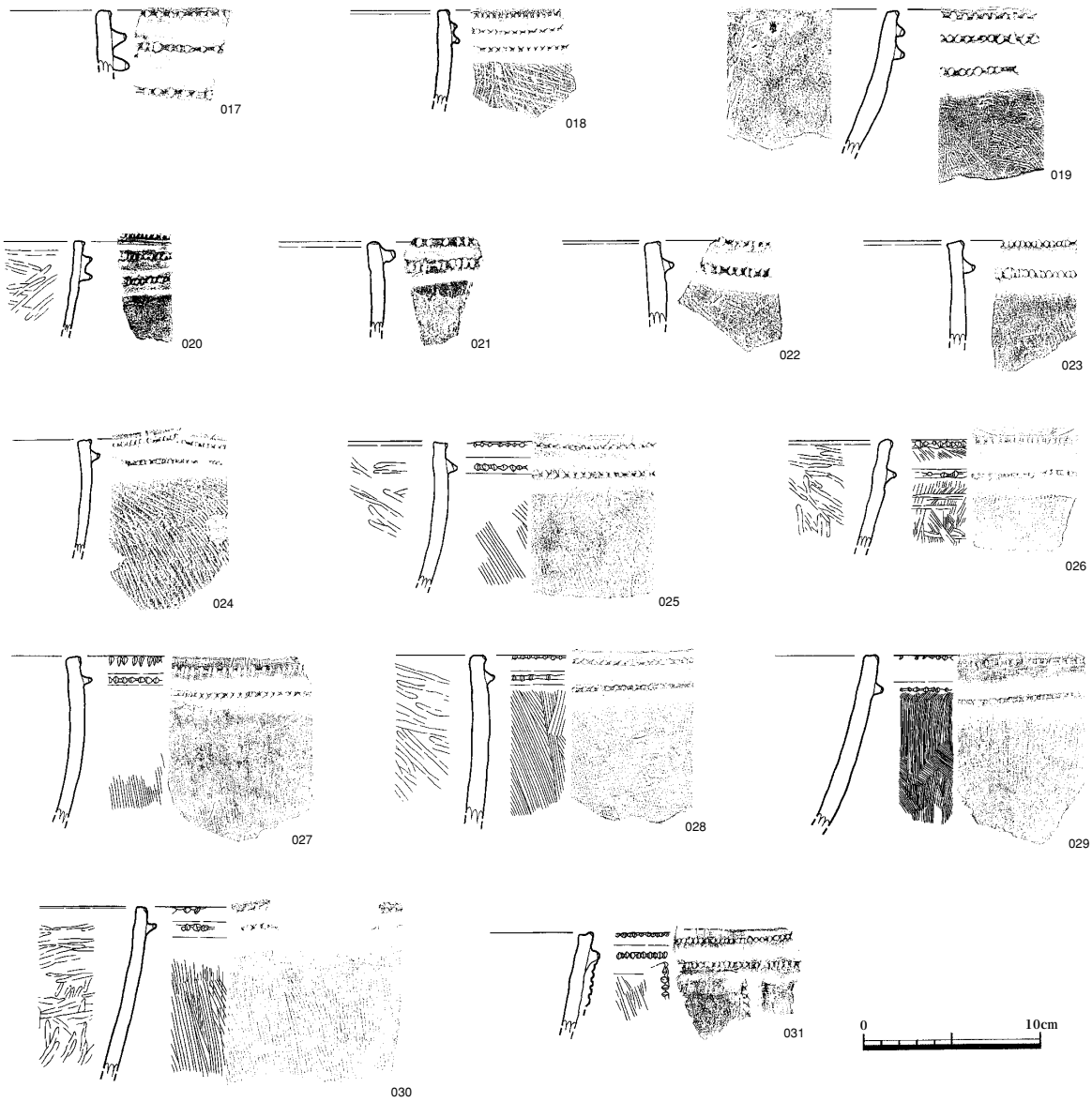
013は外器面口縁部下位に二条の刻目突帯をもつ甕口縁部である。淡茶灰色を呈する。内外器面ともナデにより調整される。

014は内外面とも黒色を呈する口縁部資料であり、胎土中には比較的多量に角閃石粒を含む。外器面・ナデ後ミガキ、内器面・ナデにより調整される。

015は外器面・ハケ目、内器面・ナデにより調整される。外器面は上部、下部で異なる工具によるハケ目が施される。上部は条線間が緻密な工具が使用され、下半には間隔の広いハケ目工具による。調整は上半部が先に実施され、後に下半部にハケ目により調整が行われている。内外面とも淡灰黒色



第16図　8層（Ⅲ層）出土遺物実測図②　(1/4)



第17図　8層（Ⅲ層）出土遺物実測図③　(1/4)

を呈する。

016は胎土中に石英、長石を含む。外器面・ハケ目、内器面・ナデ後ミガキによる調整がなされる。外面・黒褐色、内面・黄橙色～褐灰色を呈する。外器面はハケ目をナデにより消しているが、貫徹しておらず、随所にタテ方向のハケ目が残る。

017は二条の刻目突帯をもつ甕口縁部資料である。外面・橙茶褐色、内面・茶褐色を呈する。内外器面ともナデにより調整され、胎土中には石英、長石粒を含む。

018は二条の刻目突帯をもち、口縁端部外面ともに刻目を施す。外器面・ハケ目、内器面・ナデ後ミガキによる調整がなされている。内外面とも茶褐色を呈する。

019も二条の刻目突帯をもつ口縁部資料である。基本的な器面の調整は、外器面・ハケ目後ナデ、内器面・ナデ後ミガキによるものであるが、内面には一次的な器面調整としてハケ目が施されており、ナデ消しが貫徹しておらず、部分的にハケ目が認められる。内外面とも暗茶黒色を呈する。

020も同様に二条の刻目突帯をもつ甕口縁部資料である。外器面・ナデ、内器面・ナデ後ミガキに

よる調整がなされている。内外面とも黒灰褐色を呈している。外器面にはススの付着が認められる。

021は一条の刻目突帯をもつ甕資料である。突帯は口縁端部外面の端部に非常に近接する位置に貼付される。外器面・ナデ、内器面・ナデ後ミガキにより調整される。外面・茶黒色、内面・淡茶褐色を呈する。外器面の一部に剥落が認められる。

022は内外面とも茶褐色を呈し、外器面・ハケ目、内器面・ナデ後ミガキによる器面調整が施されている。胎土中には角閃石、長石粒を含んでいる。

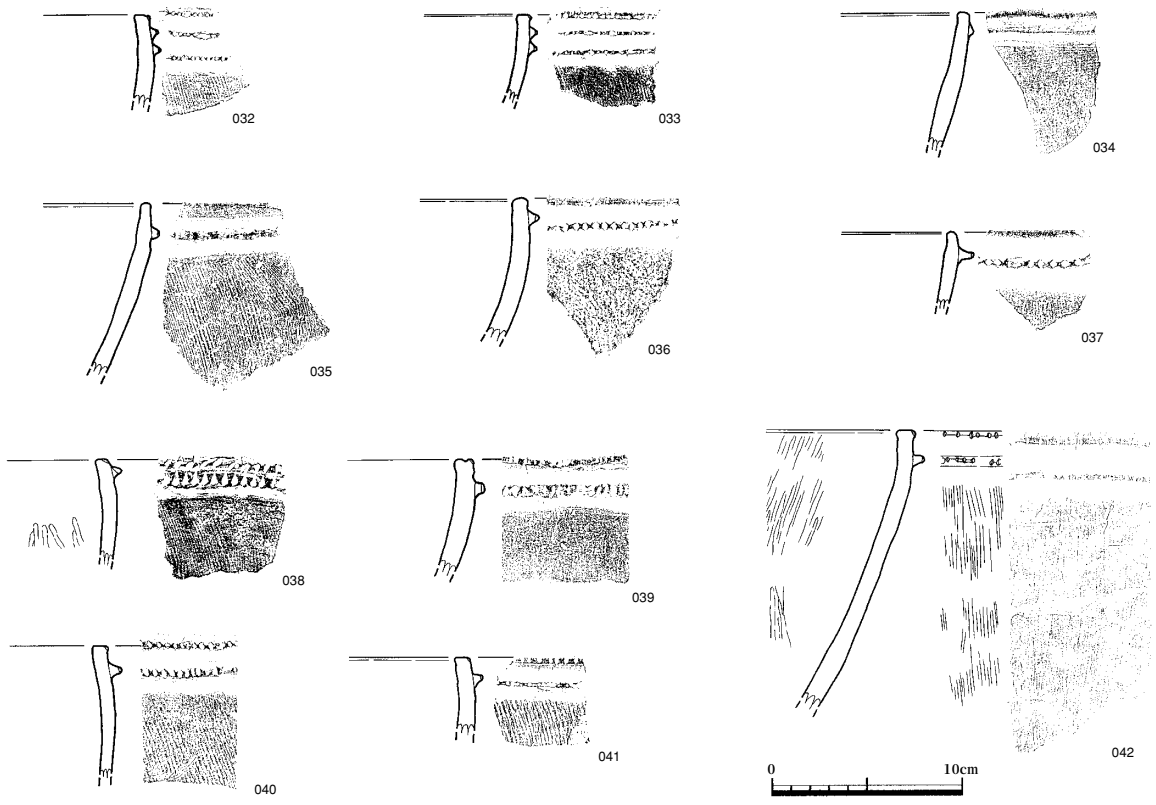
023は外面・黒色、内面・暗茶褐色を呈し、外器面・ハケ目、内器面・ナデによる器面調整が実施される。

024は内外面とも暗茶褐色を呈し、外器面・ハケ目、内器面・ナデ後ミガキによる調整パターンが実施される。胎土中には石英、角閃石粒を含んでいる。内外器面にはススの付着が認められる。

025は内外面とも黄褐色～黒色を呈し、胎土中には石英、長石粒を含む。外器面･ハケ目、内器面･ナデ後ミガキの組み合わせによる調整パターンによって仕上げられる。内外器面にはススの付着が認められる。

026は内外面とも黄褐色～黒褐色を呈し、胎土中に石英、長石粒を含む。口縁端部外面と突帯に刻目を施すタイプのものであるが、特徴的なのは、内外器面とも最終調整としてヘラミガキが実施される点が注目される。他資料は、内器面のみにミガキを施す資料が圧倒的に多い中で特異な存在として注目される。

027は砲弾形を示すと思われる体部に直立する口縁部が接続する資料である。内外面とも黒色を呈し、外器面・ハケ目、内器面・ナデにより調整される。胎土中には石英、角閃石粒を含む。



第18図　8層（Ⅲ層）出土遺物実測図④　(1/4)

028は外面・灰黄褐色、内面・褐灰色を呈し、外器面・ハケ目、内器面・ナデ後ミガキにより調整される。特に内器面のミガキは斜め方向に密に施されている。

029は口縁部分に最大径をもつ鉢様の器形を呈する口縁部資料である。外面・赤茶褐色、内面・茶褐色を呈し、外器面・ハケ目、内器面・ナデにより調整される。

030も029と同様の器形を呈する下城式甕の口縁部である。外器面・ハケ目、内器面・ナデ後ミガキという調整パターンが認められる。外面・橙色～黒色、内面・灰黄褐色を呈している。

031は口縁部下の刻目突帯から下方向に延びるタテ方向の刻目突帯を貼付する資料である。胎土中には石英、長石粒を含み、外面・灰黄色、内面・褐灰色を呈する。外器面・ハケ目、内器面・ナデ後ミガキによる器面調整が実施される。

032～042は、口縁端部に明らかな内湾傾向を示す資料である。本タイプの口縁部形状についても一条、および二条の突帯が貼付される資料がある。

032は内外面とも黄茶褐色を呈する二条の刻目突帯を有する下城式甕口縁部資料である。器面調整パターンは外器面・ハケ目、内器面・ナデ後ミガキによるものである。

033は内外面とも淡茶褐色を呈し、032と同様に二条の刻目突帯をもつ下城式甕の口縁部資料である。内外器面の調整も同一であり、内器面には最終調整としてヘラミガキが施される。

034は内湾する口縁端部に近接する位置に突帯が貼付される資料である。突帯部分はナデにより調整されるが、刻みは施されない。内外面とも暗茶褐色を呈し、胎土中には石英、長石を含む。

035は内外面とも橙褐色を呈し、外器面・ハケ目、内器面・ナデによる器面調整が実施される。胎土中には石英、角閃石粒を内包する。

036も内湾口縁の外面下位に一条の刻目突帯を貼付する下城式甕口縁部資料である。風化により器面が荒れている部分があるが、外器面・ハケ目、内器面・ナデ後ミガキという組み合わせによるものと推定される。胎土中には石英、角閃石粒を含む。

037は口縁端部を内湾気味に屈曲させ、外器面に一条の刻目突帯を貼付する。口縁端部は明確な角はもたず、丸くおさめる。内外面とも淡茶褐色～黒色を呈し、石英、角閃石粒を胎土中に含んでいる。

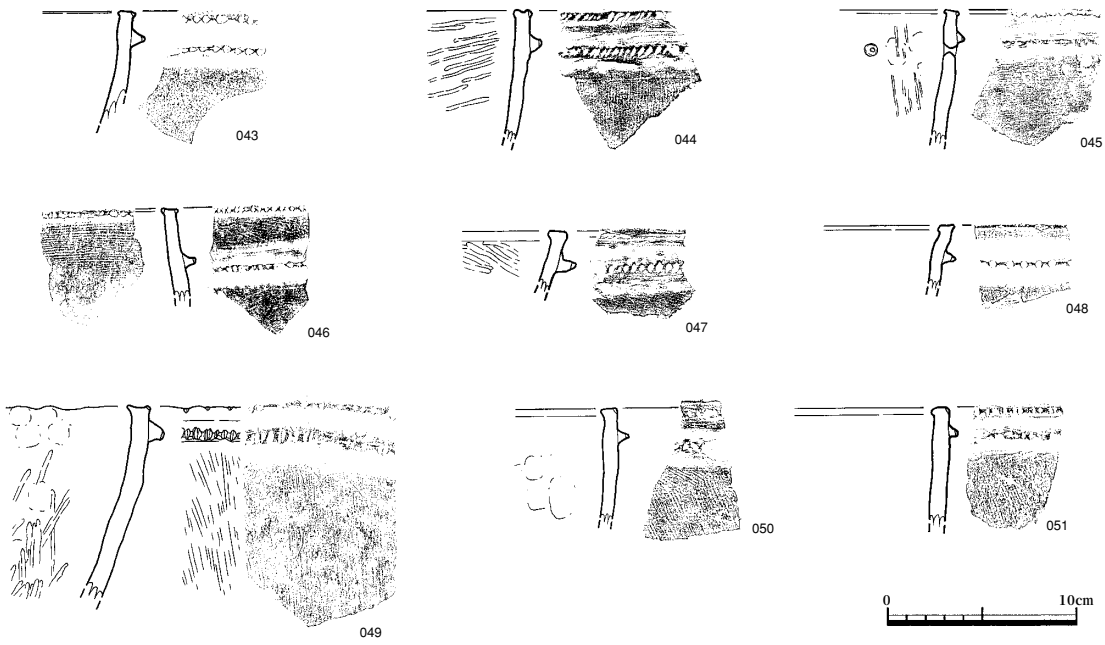
038は内湾形状をもつ口縁部を有し、外面下位には一条の刻目突帯を貼付するが、口縁端部と突帯部の二ヶ所とも刻みが施される。両者の刻みは同時に施文されたものではなく、別々に刻まれている。内外面とも黒灰色を呈し、石英、角閃石粒を比較的多く含んでいる。器面調整は、外器面にハケ目、内器面にナデとタテ方向のミガキがなされている。

039は一条の刻目突帯をもつ甕口縁部資料であり、口縁端部外面にも刻みがなされる。外面・暗茶褐色、内面・淡茶褐色を呈し、胎土中には角閃石、長石を含む。

040も内湾気味に立ち上がる口縁部に断面がシャープな刻目突帯が貼付される甕口縁部資料である。外面・暗茶褐色、内面・黒色を呈し、器面の調整は、外器面・ハケ目、内器面・ナデ後ミガキにより行われている。

041は内外面とも黄橙褐色を呈する下城式甕口縁部資料である。外器面はハケ目により調整されるが内器面にはミガキによる調整痕は認められない。

042も内湾気味に立ち上がる口縁部をもつ下城式甕口縁部である。色調・黒褐色を呈し、胎土中に



第19図　8層（Ⅲ層）出土遺物実測図⑤　(1/4)

は石英、角閃石粒を含む。外器面はハケ目、内器面はナデにより調整された後に内外器面ともタテ方向のヘラミガキによる最終調整がなされている。

043〜046は直立気味に立ち上がる口縁端部を意図的に内外面に拡張させた資料を示している。

043は口縁端部の内外器面を強いナデにより拡張する。内外面とも淡茶褐色を呈し、内外器面ともナデにより調整される。

044もまた、ナデにより口縁端部両端を強調し、張り出し気味に整形する。外面・淡褐色、内面・褐茶色を呈する。外器面はハケ目、内器面はナデ後ミガキにより調整される。外面端部、および突帯に刻みがなされるが、これらは同時に刻まれている。

045は内外面とも黒色を呈し、胎土中には石英、角閃石粒を含む。外器面はハケ目、内器面はナデ後ミガキによる調整パターンにより仕上げられる。突帯下位には焼成後穿孔が認められる。

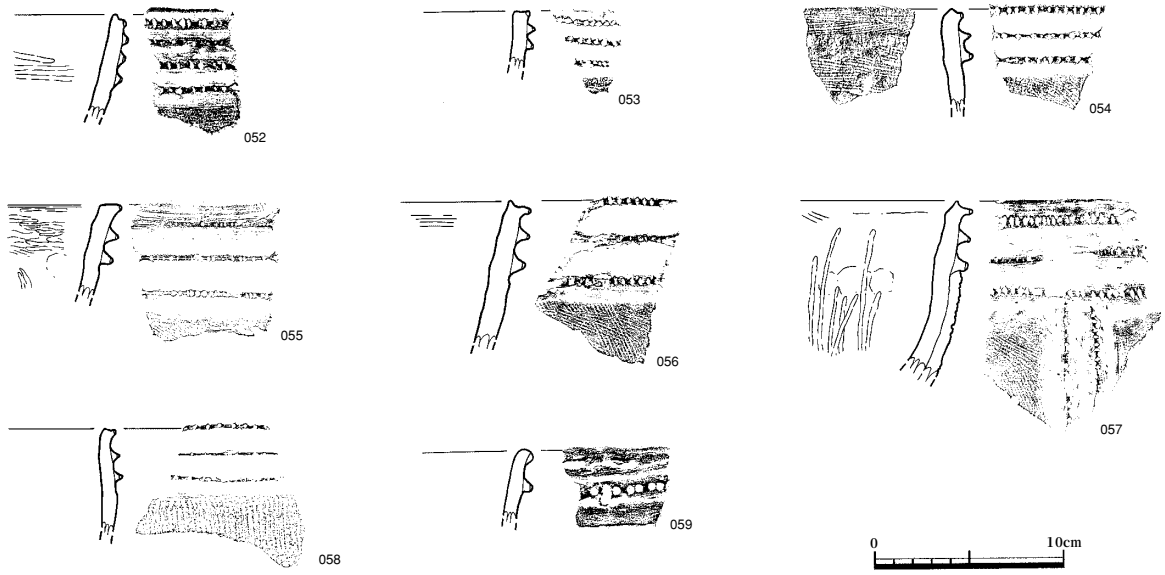
046は口縁端部内外面の拡張部に刻みを施している。内外面とも暗茶黒色を呈し、外器面調整はハケ目の後ミガキが、内器面は通常、ハケ目の後にナデ仕上げが行われ、その後にヘラミガキが行われる場合が多いが、本資料はナデ仕上げを省略、あるいは簡略化し、ヘラミガキを行っている。

047〜051は口縁端部を内面に拡張するタイプの甕口縁部資料である。

047は内外面とも淡灰褐色を呈する下城式甕破片であり、直立気味に立ち上がる口縁端部の内面を張り出させる資料である。内器面にはミガキによる器面調整が実施される。

048は突帯貼付部から外方向へ若干の屈曲傾向をみせる口縁形状を示しており、他の資料と同じように口縁端部上面の内面を拡張させ平坦面を形成する。外面・茶褐色、内面・暗茶褐色を呈し、胎土中には石英、長石粒を内包する。器面調整に関しては、外器面・ハケ目、内器面・ナデ後ミガキというパターンにより仕上げられる。

049は直立気味の口縁形状を呈し、ナデ調整により口縁端部内面を引き出している。外面・灰黄褐色、内面・黄橙色を呈する。器面の調整は、外器面・ハケ目後ナデ後あとヨコナデ、内器面・ナデ後ミガキ後あとヨコナデによる。胎土中には石英、角閃石を含む。外器面にはススの付着が認められ



第20図　8層（Ⅲ層）出土遺物実測図⑥　(1/4)

る。

050は直立する口縁部の端部内面をナデにより張り出しを形成する。外面・黒灰色、内面・淡灰黄色を呈し、石英、角閃石粒を胎土中に内包している。内器面は丁寧なナデにより調整されるが、ヘラミガキは認められない。

051も直線的に口縁端部に至る口縁形状の端部内面にヨコナデによる張り出しを形成する資料である。外面・橙茶褐色、内面・暗茶褐色を呈し、器面調整は外器面・ハケ目、内器面・ナデ後ミガキというパターンにより仕上げられる。

052〜070は口縁端部をナデ等で強調し、外方向へ張り出すタイプの口縁形状を示す下城式甕口縁部資料である。

052は三条の刻目突帯を貼付し、口縁外面端部を強いヨコナデにより突帯状に強調する。突帯と口縁端部に刻目を施文し、都合四条の刻目突帯があるように見える。外面・淡灰黄色、内面・淡茶褐色を呈し、器面調整はナデを主体として仕上げられる。内器面には最終調整にミガキが施される。

053も同様の形態、特徴を示す口縁部資料である。外面・暗茶黒色、内面・黒色を呈する。

054は突帯部から外方向へ短く外反する口縁部形状を示す甕口縁部資料である。外面・黄褐色〜暗茶黒色、内面・淡茶褐色を呈する。外器面はタテ方向のハケ目、内器面はヨコ方向のハケ目により調整される。

055は直線的に展開する口縁部の端部を強いナデにより断面三角形状に整形し、頂部に相当する部分に胴部の二条の突帯と同様の刻目を施文する。外面・褐灰色、内面・黄褐色〜灰褐色を呈する。外器面は斜め方向のハケ目、内器面はヨコ方向のヘラミガキにより調整される。外器面にはススの付着が認められる。

056は**055**と同タイプの下城式甕口縁部資料である。強いナデにより端部を作出するにあたり、ヨコナデにより口縁部上端は浅い凹線状の窪みとなっている。口縁部外面下位には二条の貼付による刻目突帯が存在し、三者ともに同様の刻みが施される。外面・黒灰色、内面・淡灰茶色を呈する。外器面の調整はハケ目によるものであり、内器面は基本的にナデにより仕上げられるが、随所に１次調整と

して実施されたヨコ方向のハケ目調整痕が残る。

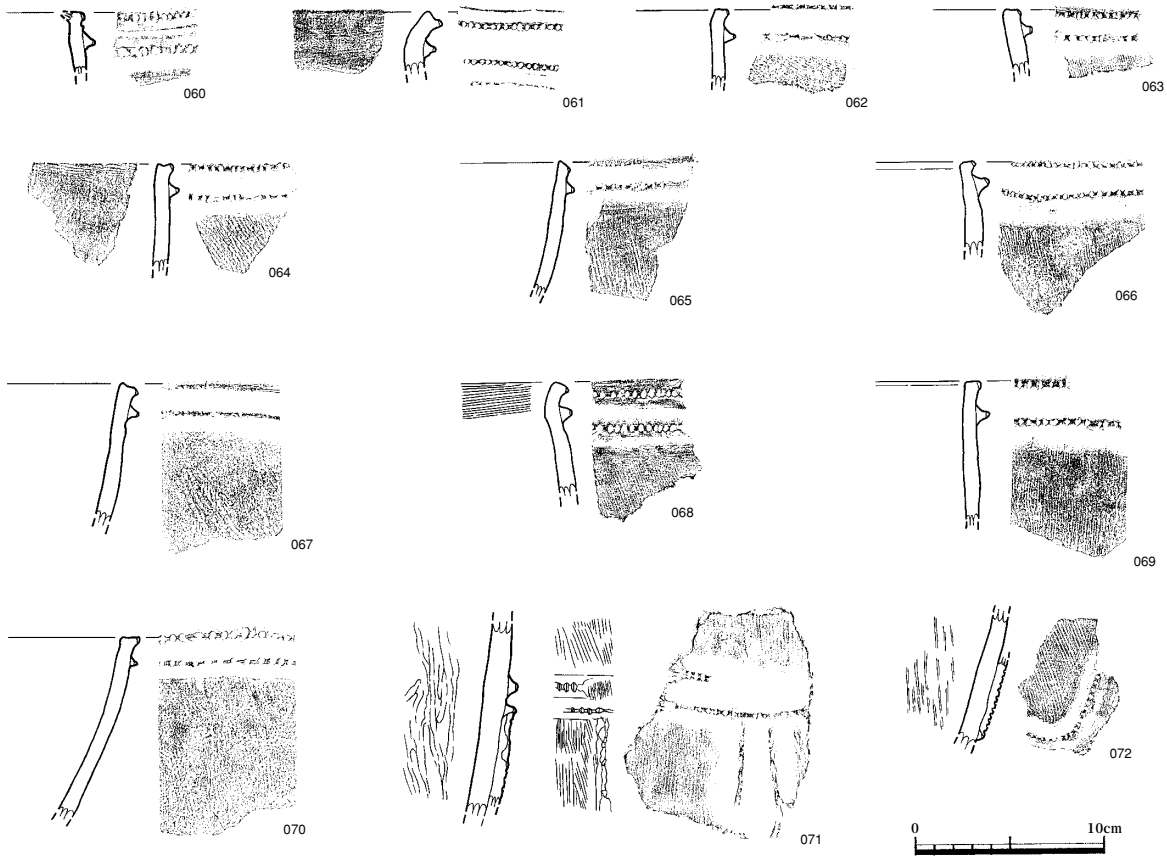
057は口縁端部で僅かに屈曲する形状を示す下城式甕口縁部資料である。端部の強調は大きく、突帯状に成形される。胴部に二条の刻目突帯が貼付されるが、端部と突帯の３者に刻みが施される。さらに下部突帯の下から二条のタテ方向の突帯が延び、ここにも同様の刻目が施文される。外面・淡灰黒色、内面･淡灰茶褐色を呈し、外器面･ハケ目、内器面･ハケ目、ナデ、ミガキにより調整される。

058は口縁端部で短く外反する口縁形状を呈する下城式甕の口縁部資料である。端部はナデによる張り出しをもつ。口縁部外面下位には二条の刻目突帯が貼付される。刻みは他の資料と同様に突帯、端部強調部とともに刻みが施される。胎土中には石英、角閃石粒を含み、内外面とも淡橙褐色を呈する。内器面のみにミガキが認められる。

059は直線的に延びる口縁端部に突帯を貼付し、端部外面に口縁部を成形する甕口縁部資料である。口縁部端部には刻みはなく、下位に貼付される突帯のみに刻みがみられる。外面・黒灰色、内面・淡灰色を呈し、内外器面ともナデにより調整される。外器面にススの付着が認められる。

060は内外面とも茶褐色を呈する甕口縁部資料である。端部内面が欠損しているため、両側を拡張するタイプのものである可能性もある。端部外面はヨコナデにより強調し、突帯とあわせて刻みが施される。外器面・ナデ、内器面にはナデ後ミガキが施される。胎土中には角閃石、長石粒を含む。

061は外反する口縁部を呈し、端部をナデにより強調する。突帯とともに刻みを施し、胎土中には石英、角閃石粒を含む。内外面とも黄褐色を呈する。内器面にはミガキがなされるが、その前段階にヨコ方向のハケ目が施される。



第21図　８層（Ⅲ層）出土遺物実測図⑦　(1/4)

062も短く外反する口縁部を持つ甕口縁部資料である。内外面とも赤茶褐色を呈し、胎土中には石英、長石粒を含む。外器面・ハケ目、内器面・ナデにより調整される。

063は内外面とも淡茶色を呈し、外器面・ハケ目、内器面・ナデにより調整される。

064は直立する口縁部の端部をナデにより強調し、突出部を形成する。内外面とも淡茶褐色を呈し、外器面・タテ方向のハケ目、内器面はヨコ方向のハケ目後ナデ、ミガキにより調整される。胎土中には石英、角閃石粒を含んでいる。

065は直口する口縁部をもち、口縁端部はナデにより突部を形成し、下位にある突帯とともに刻みが施される。外器面はハケ目、内器面はナデ後ミガキにより調整される。内外面とも淡茶褐色を呈する。

066は内湾気味の口縁端部を外方へ引き出し突帯とともに刻みを施す。内外面とも淡茶褐色を呈する。外器面はハケ目、内器面はナデにより調整されている。外器面にはススの付着が認められる。

067は直線的に端部に至る口縁部形状を示す資料であり、ナデにより端部外面を強調する。その上で比較的細かい刻みを突帯とあわせて施文する。内外面とも黒色を呈し、外器面・ハケ目、内器面・ナデの後ミガキにより仕上げられる。胎土中には角閃石、長石粒を含んでいる。

068は外反する口縁端部の外面をナデにより強調し、突帯状に整形する。加えて下部の突帯とともに刻みを実施する。外面・暗灰褐色、内面・淡灰褐色を呈する。内器面上部にはヨコ方向のハケ目調整痕が残る。

069は直立気味に立ち上がる口縁部の端部外面をやはりナデによって突部を創出し、刻みを施す。突帯は若干下がった位置に貼付され、口縁端部と同様の刻目が施文される。内外面とも茶褐色を呈し、外器面はハケ目により、内器面はナデの後、ヘラミガキにより調整される。外器面にはススの付着がみられる。

070も一条の貼付突帯をもち、口縁端部外面を外方へ拡大し、突部を形成する。両者ともに刻目が施文され、外面・黄褐色～黒色、内面・茶褐色～淡茶黒色を呈する。外器面の突帯下半にタテ方向のハケ目調整痕がみられる他は器表面はナデにより仕上げられる。

071・072は横位の刻目突帯以外の刻目突帯を貼付する資料を提示している。口縁部資料に関してはすでに010、031、057において触れており、ここでは胴部の破片２点を掲載している。

071は二条の横位置の突帯から下方へ二条の刻目突帯が垂下する。破片資料のため突帯の展開状況は不明である。外面・黄灰色～黒褐色、内面・灰褐色を呈する。外器面はタテ方向のハケ目、内器面はタテ方向の密なヘラミガキが施される。胎土中には石英、長石粒を含む。

072は弧を描くように刻目突帯が貼付される。外器面はハケ目、内器面にはタテ方向のミガキによる調整がなされている。

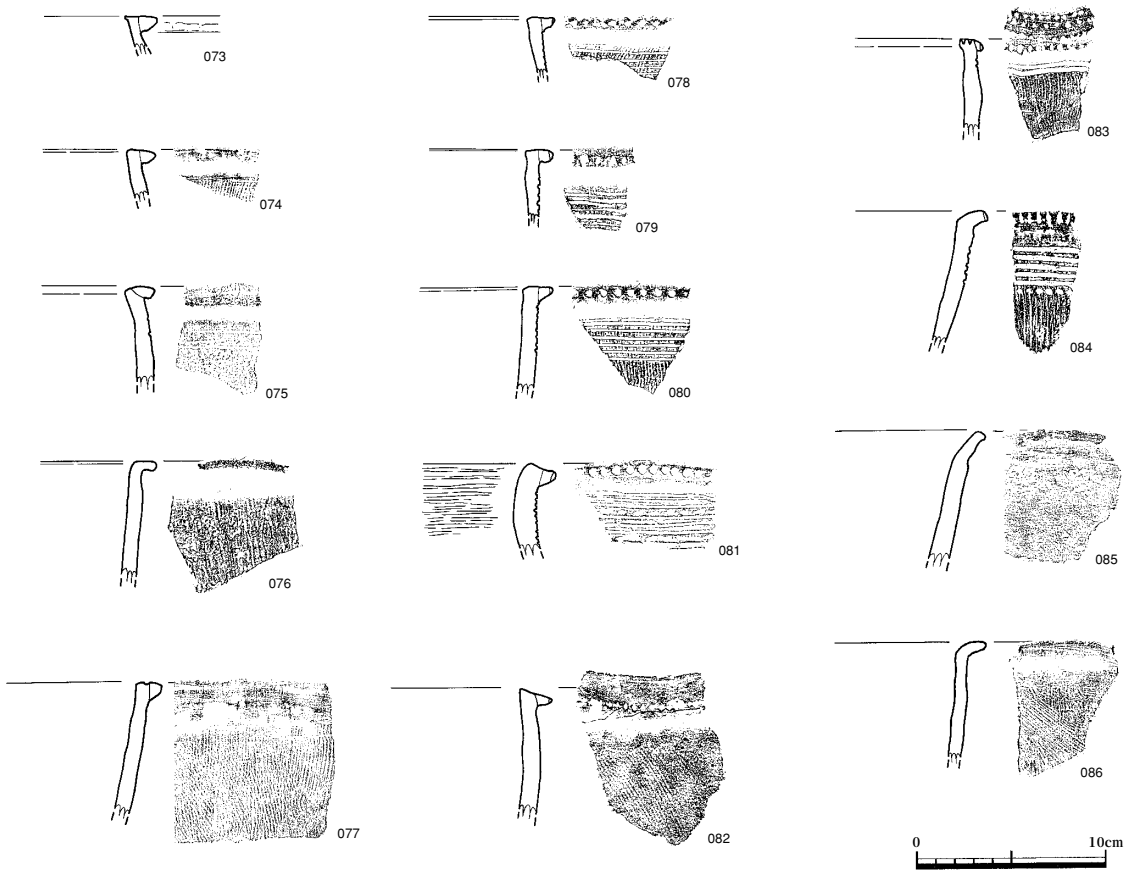
073～093は、下城式甕とは趣を異にする甕資料口縁部を示している。

073は口縁部の外面端部に断面三角形の突帯を貼りつけ口縁部を形成する資料である。口縁部上面には水平面が形成される。内外面とも暗茶黒色を呈し、内外器面ともナデにより調整される。

074～077も同様の製作原理により形成された甕口縁部である。

074は口縁部下の外器面にはタテ方向のハケ目、内器面にはミガキが施される。

075は粘土の折り返しにより口縁部端部を形成する。そのため、断面形状は丸みを帯び、口縁部上



第22図　8層（Ⅲ層）出土遺物実測図⑧（1/4）

面は僅かに凸面を形成する。外器面にはヘラ状工具による二条の沈線文が施文される。外面・暗茶黒色、内面・茶褐色を呈する。

076は口縁端部を**T**字形に折り曲げ形成する。内外面とも暗茶褐色を呈し、内外器面とも最終調整にヘラミガキを施す。口縁端部には刻み等はみられない。外器面にはススの付着が認められる。

077は口縁端部外面に断面三角形の突帯を貼りつけるタイプの資料である。甕としているが、鉢形土器の口縁部の可能性もある。内外面とも茶褐色を呈し、胎土中には石英、角閃石粒などを含む。外器面はハケ目後ミガキ、内器面はナデ後ヘラミガキにより調整される。

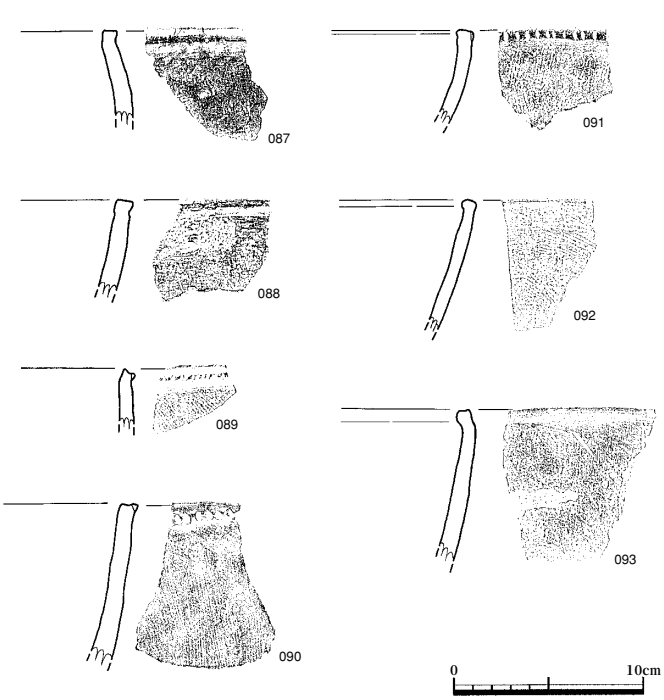
078～081、**084**は胴部に多条沈線文を施文する西部瀬戸内系甕である。

078は断面三角形の口縁部形状を呈し、口縁端部に刻目を施す。外面・黄茶褐色、内面・茶褐色を呈し、胎土中には石英粒を含む。外器面はハケ目による調整を実施し、口縁部の下位にヘラ描きによる多条沈線文を施文する。

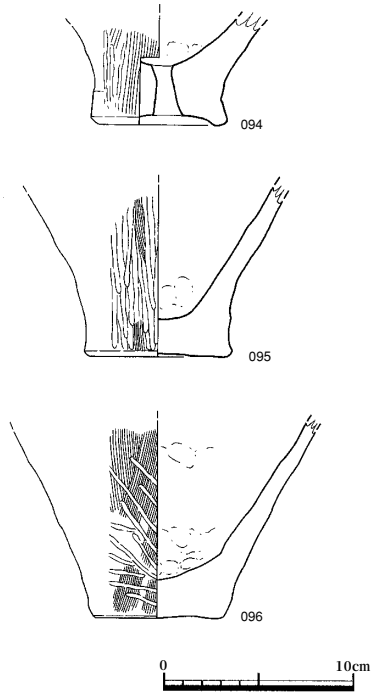
079は粘土貼りつけにより逆**L**字形の口縁部形状を呈する甕口縁部である、内外面とも黒色を呈し、胎土中には石英、長石粒を内包する。外器面の調整は風化のため不明である。内器面はナデの後、ミガキが施される。

080は小さな断面三角形状の口縁部を形成し、端部に刻目を施す。外面・暗茶褐色、内面・黄茶褐色を呈する。外器面はタテ方向のハケ目、内器面はミガキにより調整される。胎土中には石英、角閃石粒を含む。

081は外反する口縁端部に突帯を貼りつけ口縁部を形成する。口縁下の胴部にはヘラによる多条沈



第23図　8層（Ⅲ層）出土遺物実測図⑨　(1/4)



第24図　8層（Ⅲ層）出土遺物実測図⑩　(1/4)

線、および刺突文との組み合わせによる文様がタテ方向のハケ目調整の後に実施される。内器面はヨコ方向のミガキが比較的密に施される。

082は垂れ下がり気味の口縁部形態を示す甕口縁部である。外器面にはタテ方向のハケ目が、内器面はヨコナデにより調整される。外面・黒灰色、内面・淡灰黒色を呈する。口縁端部には刻目が施文される。外器面にススが付着する。

083は低平な突帯を口縁端部に貼りつけ、さらに内面に口縁部を拡張させることで上面に平坦部を形成する甕口縁部資料である。口縁端部、口縁端部上面には刺突連点文が施文される。外器面にはタテ方向のハケ目による調整が行われた後に二条の沈線が施文される。内外面とも暗茶黒色を呈する。

084は西部瀬戸内系の甕口縁部資料である。口縁端部は外方向に屈曲する形態をなし、端部には刻みが施文される。胴部外器面にはハケ目による器面調整の後にヘラ描きによる多条沈線文、刺突連点文が施文される。内器面は丁寧なナデにより平滑に仕上げられる。外面・黒灰色、内面・暗褐茶色を呈する。外器面にはススの付着が認められる。

085は外方向へ大きく展開する口縁部資料である。外面・赤茶褐色、内面・暗茶褐色を呈している。器面調整については、外器面がハケ目後ミガキにより仕上げられ、内器面はミガキによる最終調整が行われる。鉢形状を呈する可能性も考えられる。

086は端部が外反器形を示す口縁部資料である。外器面は黒灰色～灰褐色を呈し、ハケ目により調整される。内器面は淡茶褐色を呈し、ナデによる調整が実施される。

087～093は素口縁状を呈する口縁部資料である。胴部にも突帯は貼付されず、端部の強調もあまり顕著ではない。

087は直立する口縁部形状を示す甕口縁部である。外器面はハケ目とミガキにより調整され、茶褐色を呈する。内器面はミガキが施され、淡茶褐色を呈している。

088は外面・淡茶褐色、内面・淡茶黒色を呈する口縁部資料である。胎土中には石英、角閃石粒を

内包し、内器面には最終調整としてミガキが施される。

089は端部外面をナデにより若干強調し、この部分に刻みを施す。外器面はハケ目、内器面はナデにより調整される。外面・黒色、内面・淡茶褐色を呈する。胎土中には石英、角閃石、長石粒を含んでいる。

090は直線的な器形を示す口縁部の端部に刻みを施す口縁部資料である。外器面は茶褐色を呈し、タテ方向のハケ目による調整がなされる。内器面は暗茶褐色を呈し、ナデ、ミガキにより調整される。

091は直立する口縁部の端部外面に刻みを施す口縁部資料である。内外面とも淡黄褐色を呈し、外器面・ハケ目、内器面・ナデにより調整される。

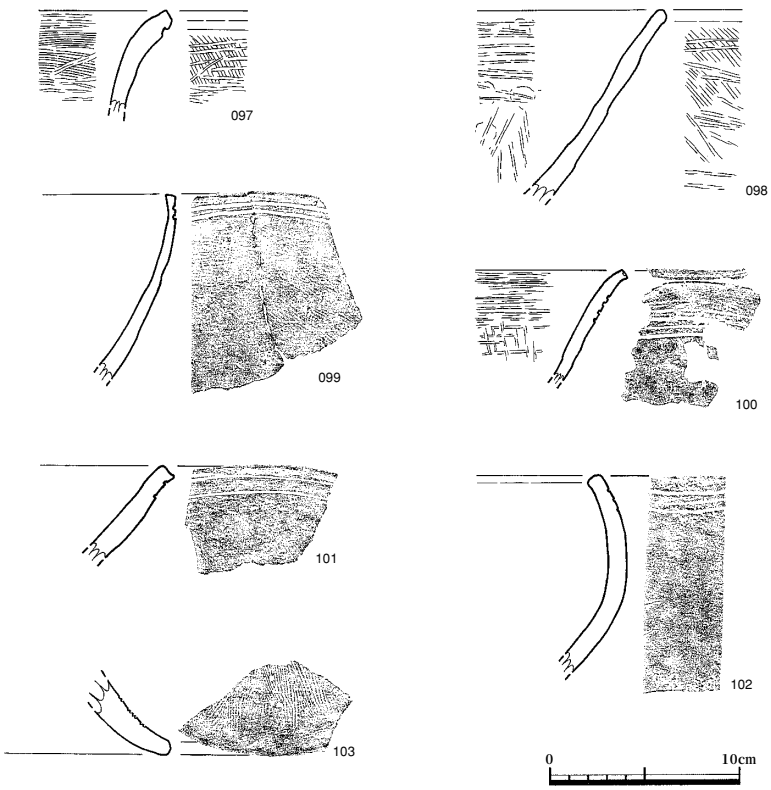
092は甕口縁部資料であり、端部はナデにより調整され、丸くおさめられる。内外面とも黒色を呈し、外器面はハケ目の後にミガキにより調整され、内器面はナデとミガキにより仕上げられる。**091**とともに鉢形状を呈する可能性も考えられる。

093も素口縁状の形態をなす口縁部資料である。端部はヨコナデによる調整に際して内湾形態に整形されている。外器面は黒色を呈し、ハケ目後ミガキが、内器面は茶褐色～黒色を呈し、ミガキにより調整されている。

094～096は甕底部資料である。

094は底面が僅かに上げ底状を呈する甕底部資料である。外器面はハケ目、ナデ、ミガキにより調整され、胎土中には石英、角閃石粒を含む。外面は茶褐色、内面は暗茶黒色を呈している。底径6.4cmを測る。

095は外器面はタテ方向のハケ目の後ヘラミガキが、内器面はナデにより調整される。底径7.2cmを測り、内外面とも橙茶色を呈している。



第25図　8層（Ⅲ層）出土遺物実測図⑪　(1/4)

096は底面から外方へ直線的に立ち上がる甕底部資料である。外器面は暗茶褐色を呈し、ハケ目後ナデにより調整される。内器面は黒色を呈しナデにより調整される。底径6.5cmを測る。

097～103は鉢形を呈すると考えられる資料を掲載した。

097は外反する口縁部資料であり、端部外面に一条の沈線が施文される。内外器面ともハケ目の後に細密なヘラミガキにより仕上げられる。外面・黒色、内面・茶褐色を呈している。

098は直線的に口縁部へ至る鉢口

縁部資料である。脚台付きの鉢である可能性も考えられる。内外面とも茶褐色を呈し、外器面はハケ目調整の後にヨコ方向を基調とするヘラミガキがランダムに実施される。これに対して内器面はナデ調整の後にヘラミガキが施されるが、上半部はヨコ方向、下半部はタテ方向による規則的な施文が行われている。

099は胴部から直立する口縁形状を示し、外器面には二条のヘラ描き沈線文が施文される。器面調整は、外器面がハケ目とミガキ、内器面がミガキにより調整される。内外面とも茶褐色を呈する。

100は内外器面ともヘラミガキにより調整される鉢口縁部資料である。外面・黒色、内面・赤褐色を呈する。胎土中には角閃石、長石を含む。端部には刺突連点文を施文し、外器面には四条のヘラ描き沈線文と刺突連点文の組み合わせによる文様が施文される。

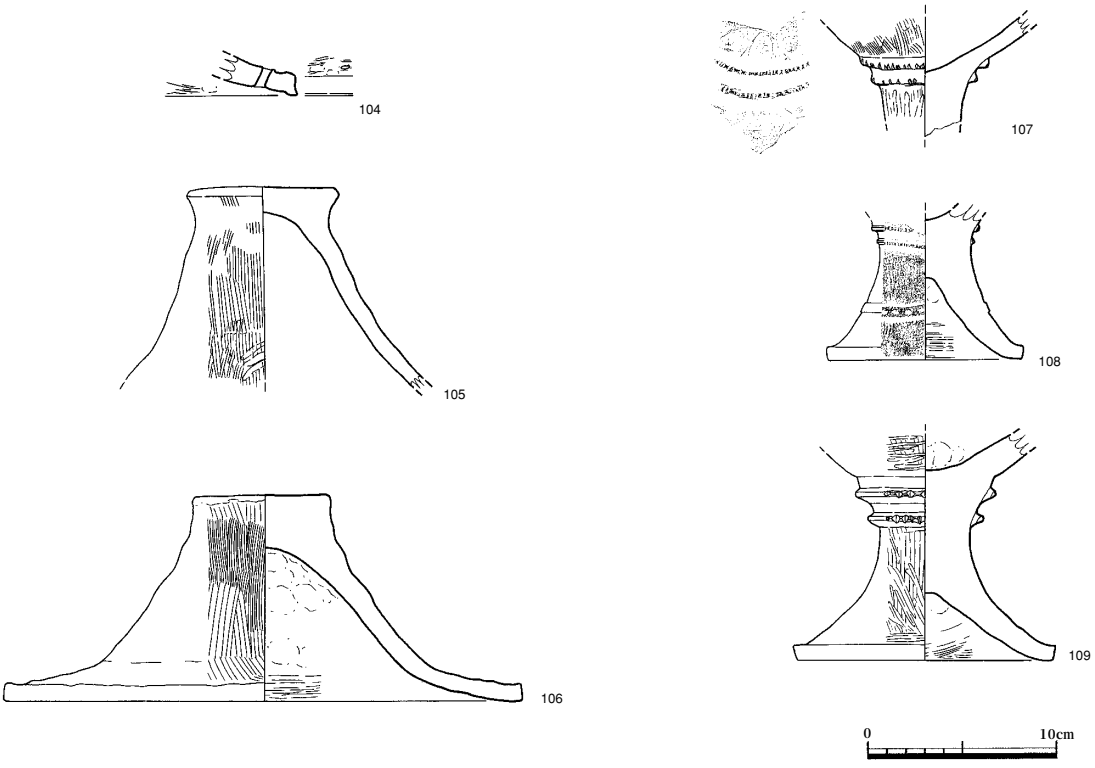
101は素口縁を呈する鉢口縁部資料である。内外器面とも丁寧なミガキにより仕上げられる。口縁端部外面には二条のヘラ描き沈線が施文され、内外面とも茶褐色～黒色を呈している。内外器面にススが認められる。

102は内湾器形を呈する鉢口縁部資料である。胎土中には角閃石、長石、橙色粒子を内包する。外面・赤褐色～茶褐色、内面・赤褐色～黒色を呈する。内器面はナデにより調整され、外器面はハケ目の後ミガキにより仕上げられ、口縁端部外面には三条のヘラ描き沈線文が施文される。

103は台付鉢の脚裾部資料である。竹管による刺突連点文が二条一単位で施文される。器表面は淡茶褐色～黒色を呈し、ハケ目およびナデにより仕上げられる。

104～106は蓋形土器である。

104は蓋と考えられる端部資料であり、内外面とも暗茶褐色を呈する。外器面はナデとヘラミガキ、内器面はナデとハケ目により調整される。胎土中には長石粒を含む。



第26図　8層（Ⅲ層）出土遺物実測図⑫　(1/4)

105は蓋の頂部資料である。頂部径8.0cmを測る。外器面は橙色～黒色を呈し、ハケ目後ミガキにより調整される。内器面は橙色を呈し、ナデにより平滑に仕上げられる。胎土中には石英、角閃石、長石粒を内包する。

106は頂部径7.0cm、器高11.0cm、復元口径27.0cmを測る。外器面は淡黒色～淡灰茶褐色を呈し、タテ方向のハケ目により調整される。器表面に残るハケ目調整痕は二種認められる。内器面は淡赤褐色～淡灰茶褐色を呈し、ハケ目後丁寧なヨコナデにより仕上げられる。胎土中には石英粒を含む。

107～109は高坏の脚柱部破片資料である。いずれの資料も坏部と脚柱部の接合部に二条の刻目突帯を貼付する。

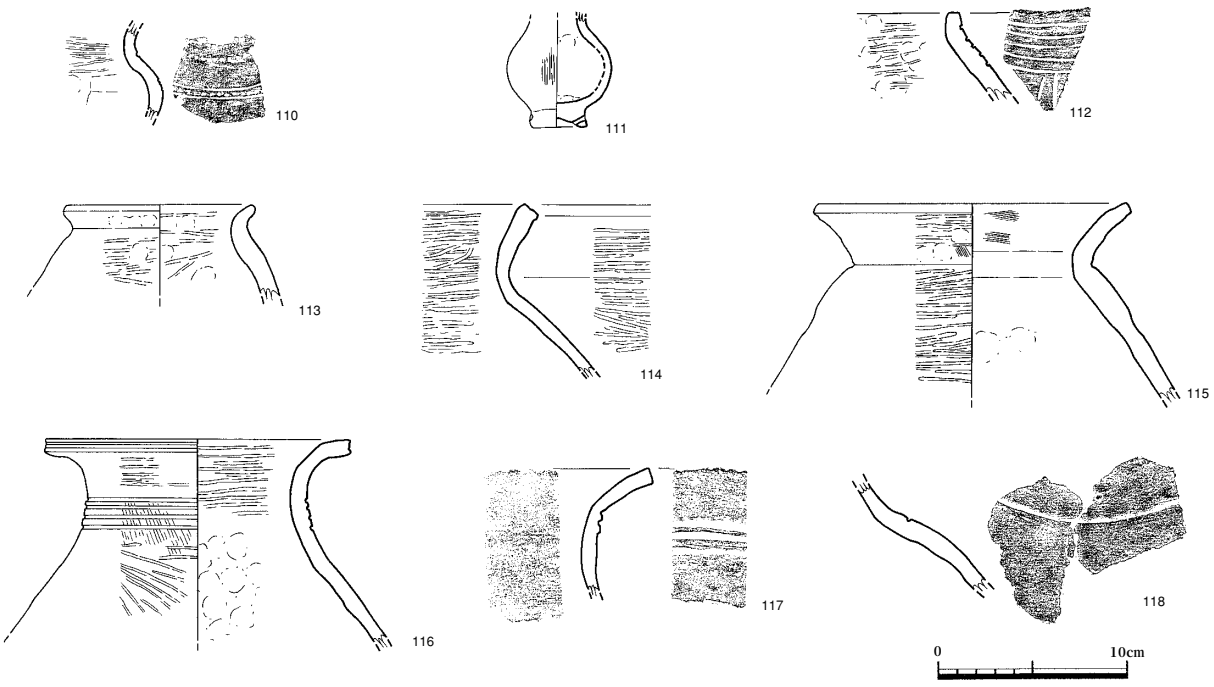
107は外器面をハケ目後丁寧なミガキにより調整する。胎土中には石英、角閃石粒を含み、内外面とも褐灰色～橙色を呈する。器表面は荒れており、明確でないが、部分的に赤色塗彩されていたような痕跡が認められる。

108は接合部の他に脚柱部中央付近の上面に刺突連点文を施文する低平な突帯を貼付する。内外面とも茶褐色～黒色を呈し、胎土中には石英、角閃石、長石粒を内包する。内外器面とも丁寧なヘラミガキが実施されている。復元底径は10.0cmである。

109は坏部接合部から脚裾部まで遺存する脚柱部資料である。内外面とも黒色～淡灰黒色を呈し、胎土中には石英粒が認められる。外器面はハケ目調整後ミガキにより、内器面はナデの後にミガキ調整のように平滑に仕上げられる丁寧なナデにより調整される。復元底径14.0cmを測る。

110～143は壺資料である。

110はミニチュア小壺の胴部破片である。外器面は暗茶黒色を呈し、ミガキにより調整される。頸部付近には刺突連点文を施文し、肩部には二条の沈線間に刺突連点文を充填する文様によって加飾される。内器面は黒色を呈し、ヘラ状の工具による工具ナデとヘラミガキの併用によって調整される。胎土中には角閃石、長石粒が認められる。



第27図　8層（Ⅲ層）出土遺物実測図⑬　(1/4)

111はミニチュア小壺であり、胎土中に石英、角閃石粒を含む。内外面とも淡灰黒色～淡茶褐色を呈し、丁寧なナデにより調整される。底部は厚底状に成形され上げ底をなしている。底部に穿孔が認められる。胴部最大径5.5㎝、底径3.0㎝を測る。口縁部が欠損する。

112は無頸壺の口縁部資料である。内外面とも黒色を呈し、丁寧なヘラミガキが施される。外器面にはヘラ描きによる沈線文が施文される。

113は広口壺の口縁部資料である。内外器面ともヘラミガキにより調整される。外面・暗茶黒色、内面・茶褐色を呈する。口径9.8㎝を測り、胎土中には角閃石を比較的多く認めることができる。

114は口縁が外方へ開くタイプの壺口縁部資料である。内外面とも茶褐色を呈し、内外器面とも横位のヘラミガキにより調整される。胎土中には石英、角閃石、長石粒を含んでいる。

115はナデ肩の肩部から外方へ短く開く口縁部をもつ壺資料である。外器面は暗茶褐色を呈し、ハケ目、ミガキによる器面調整が実施される。内器面は淡橙茶色を呈し、ヨコ位置のハケ目により調整される。胎土中には石英、角閃石、長石粒を含んでいる。復元口径16.0㎝を測る。

116～118は肩部から比較的長い頸部を経由して外反する口縁を有する壺資料である。

116は頸部に四条の沈線文を施し、口唇部を凹状に整形する。復元口径16.0㎝を測り、胎土中には石英、金雲母を含む。外器面は暗茶褐色を呈し、ハケ目調整後ミガキにより仕上げられる。内器面は茶褐色を呈し、ナデとミガキにより調整される。

117は壺口縁部であり、頸部には削り出しにより二条の突帯を成形する。内外面とも暗茶黒色を呈し、ヘラミガキにより調整される。内外器面にススが認められる。

118は壺肩部の破片資料である。肩部に段をもつ点を大きな特徴とする。外面・暗茶褐色、内面・茶褐色を呈し、内外器面とも比較的丁寧なヘラミガキによる器面調整により仕上げられる。

119は広口壺の口縁部破片である。口縁端部、内器面に刺突連点文が施文される。内外面とも茶褐色を呈し、胎土中には角閃石、長石粒を含む。器面調整は内外器面ともナデによるものである。

120は119と同様構成文様をもつ壺口縁部資料である。外器面は暗茶黒色を呈しヨコ方向のヘラミガキにより調整される。内器面は茶褐色を呈し、ナデ、およびヘラミガキにより仕上げられる。

121は外面・暗茶黒色、内面・黄褐色を呈する壺口縁部破片である。内器面はナデ、外器面にのみヘラミガキが認められる。口縁部外面下位には刺突連点文と沈線の施文が確認される。

122は広口壺の口縁端部片であり、口唇部に刺突連点文、口縁外面下位に二条のヘラ描き沈線が施文されている。外面・暗茶黒色、内面・茶褐色を呈する。器面調整に関しては、内外器面ともハケ目後ヘラミガキによる調整が実施されている。胎土中には角閃石粒が目立つ。

123は上下二段の刺突連点文を施文する土器破片資料である。小破片のため器種は不明であり、壺として分類しているものの、甕の胴部破片である可能性も考えられる。外器面は淡茶褐色を呈し、タテ方向のハケ目により調整され、内器面は淡黒色を呈しナデにより調整される。胎土中には角閃石、長石粒を含んでいる。

124は壺の肩部破片であり、ヘラ描きによる沈線文と刺突連点文により構成される文様を外器面に施文する。外器面は暗茶褐色を呈しハケ目およびヘラミガキにより調整され、内器面は茶褐色を呈しナデにより仕上げられる。また、外器面に赤色塗彩の痕跡が認められる。

125は外器面に二条のヨコ沈線を施文し、その間を二列の刺突連点文で充填する文様をもつ壺破片

である。外器面は茶褐色を呈し、ハケ目調整後ミガキを施す。内器面は灰茶褐色を呈し、ミガキにより調整される。胎土中には角閃石、長石粒を内包する。

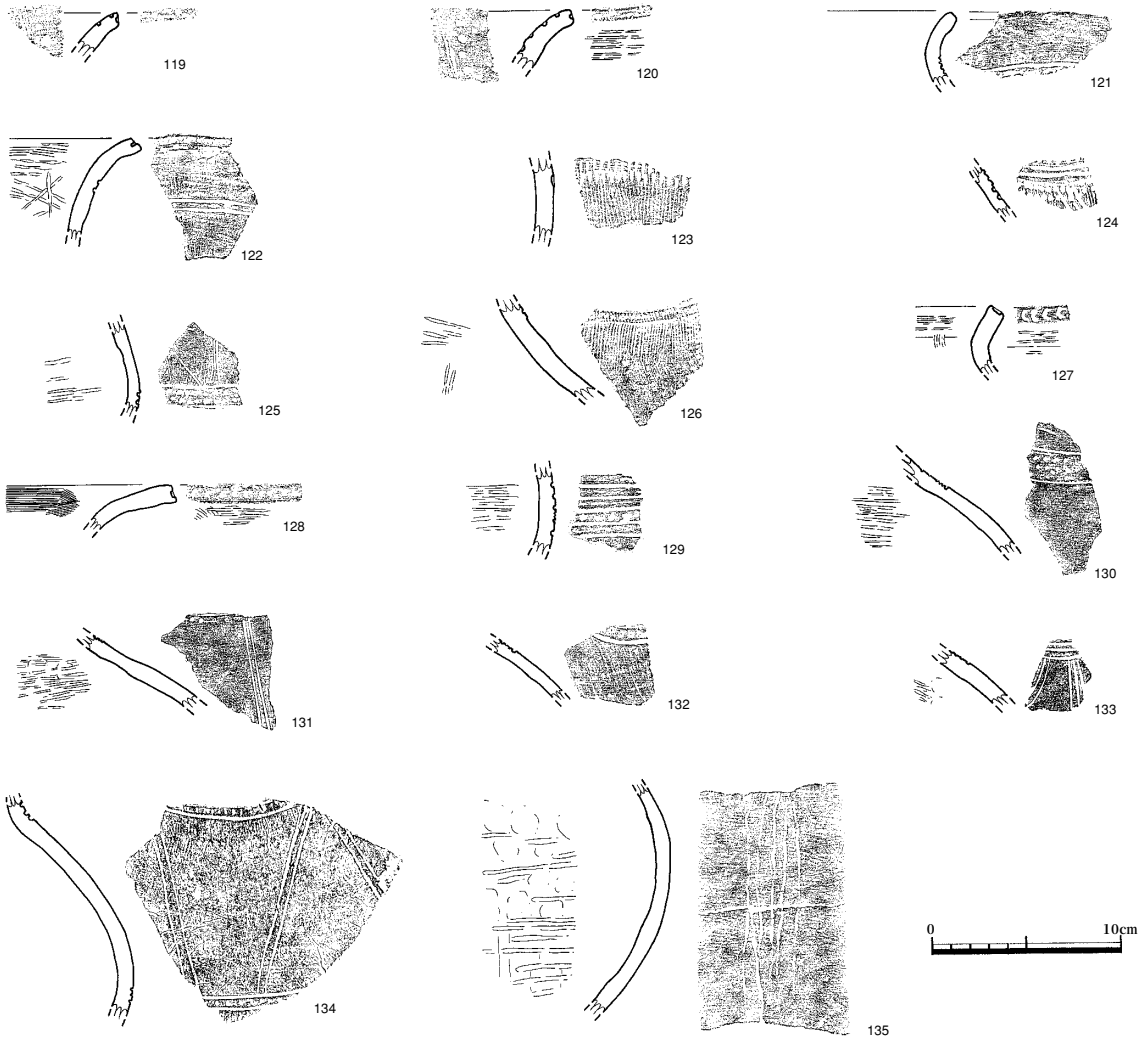
126は壺の肩部破片であり、頸部にあたる部分に削り出しによる低平な突帯が形成される。突帯上面には刺突連点文が施文され、さらに突帯から垂下するような形で二条の刺突連点文が下方へ延びている。内外面とも淡茶褐色を呈し、外器面はハケ目、内器面はミガキにより最終調整が行われている。

127は口唇部に半截竹管による刺突連点文を施文する壺の口縁部資料である。外面・黒色、内面・暗茶褐色を呈し、内外器面ともヨコ方向のヘラミガキにより調整される。

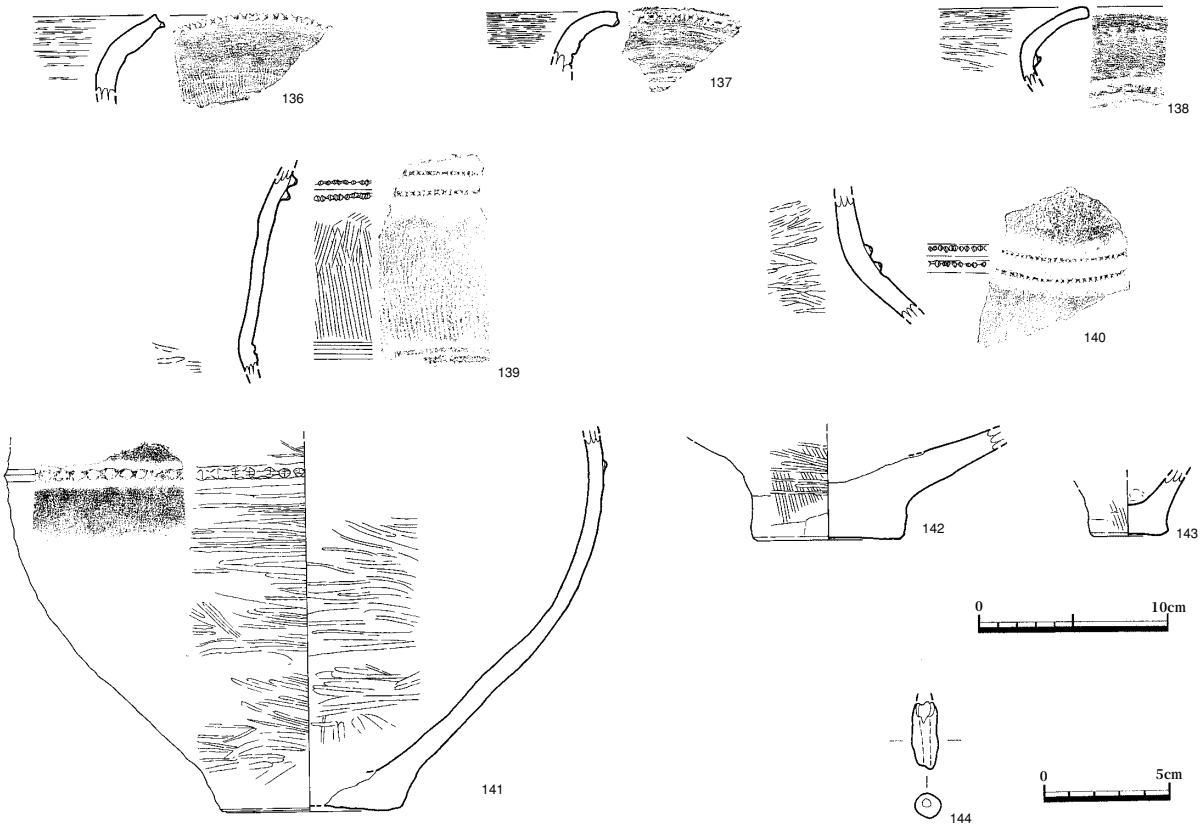
128は広口壺の口縁部破片である。口唇部に半截竹管状の工具による刺突連点文を施す。内外面とも黒色を呈し、外器面はハケ目、ヘラミガキ、内器面はヨコ方向のハケ目により調整する。胎土中には石英、角閃石粒を含んでいる。

129は壺の胴部破片である。ヘラ描き平行沈線文とその間に刺突連点文を配置する文様を施文する。外面・橙褐色、内面・黒色を呈し、内外器面ともヘラミガキにより仕上げられる。

130は壺の肩部破片であり、肩部には二条の沈線間を刺突文で充填する文様帯を形成する。外面は暗茶黒色を、内面は灰黒色を呈する。内外器面ともヨコ方向のヘラミガキにより調整される。



第28図　8層（Ⅲ層）出土遺物実測図⑭　(1/4)



第29図　8層（Ⅲ層）出土遺物実測図⑮ （1/4・1/3）

131は壺の肩部破片であり、頸部には刺突文、胴部にはヘラ描きによるタテ方向の沈線が二条施文される。内外器面ともヨコ方向のヘラミガキが施される。

132は壺の肩部破片であり、沈線間に竹管状の工具による刺突連点文を施文する。内外面とも暗茶黒色を呈し、ヘラミガキにより調整される。胎土中には石英、角閃石粒を比較的多く含んでいる。

133は器表面がヘラミガキにより平滑に仕上げられた壺肩部の破片であり、外器面にヘラ描きによる平行沈線文と下向きの重弧文と考えられる文様が施文される。内外面とも黒色を呈している。

134は外面・黒色を呈する壺肩部破片である。頸部と胴部にふたつの直線間を刺突文で埋める文様を施文し、その間の空間にヘラ描きによる二条一単位の鋸歯文を施している。内器面はナデにより仕上げられるが、外器面はハケ目の後ヘラミガキにより平滑に調整される。

135は壺の胴部破片である。タテ方向に五条の沈線がヘラにより施文される。外器面は茶褐色を呈し、ハケ目調整の後、ヘラミガキが施される。内器面は淡茶褐色を呈し、ナデおよびヘラミガキにより仕上げられる。外面には随所に赤色塗彩の痕跡が認められる。

136・137は口縁端部下端に刻みを施す壺口縁部である。

136は内外面とも茶褐色を呈し、外器面はハケ目とミガキにより調整される。内器面はナデの後、ヨコ方向の丁寧なヘラミガキによって仕上げられている。

137は内外器面ともヨコ方向のヘラミガキにより調整される。外面・黒色、内面・暗茶褐色を呈する。

138は広口壺の口縁部資料であり、内外器面とも丁寧なヨコ方向のヘラミガキにより調整される。内外面とも黒色を呈している。

139は口が外方向へ大きく延びる広口壺の頸部破片である。肩部には削り出しにより作出された突帯がめぐり、口縁部下には二条の刻目突帯が貼付される。外器面は赤褐色を呈し、タテ方向のハケ目

調整とミガキが施され、内器面は黄褐色～黒褐色を呈し、ハケ目の後、ヨコ方向の丁寧なミガキにより平滑に仕上げられている。胎土中には石英、角閃石粒を内包する。

140は頸部に二条の刻目突帯を貼付する壺資料である。内外器面ともヨコ方向を主体とするヘラミガキにより調整される。外面・黒色、内面・褐色を呈する。外器面にススが認められる。

141は壺の胴部から底部資料である。復元胴部最大径31.8cm、復元底径9.6cmを測る。内外器面ともヨコ方向のヘラミガキにより調整され、最大胴部には連鎖状突帯と呼ばれる貼り付け突帯が貼付される。内外器面にススが認められる。

142は底径7.4cmを測る壺底部資料である。外器面は黒色を呈し、ナデとミガキにより調整され、内器面は淡黄褐色を呈し、ヘラミガキにより調整される。胎土中には石英、角閃石粒を含む。

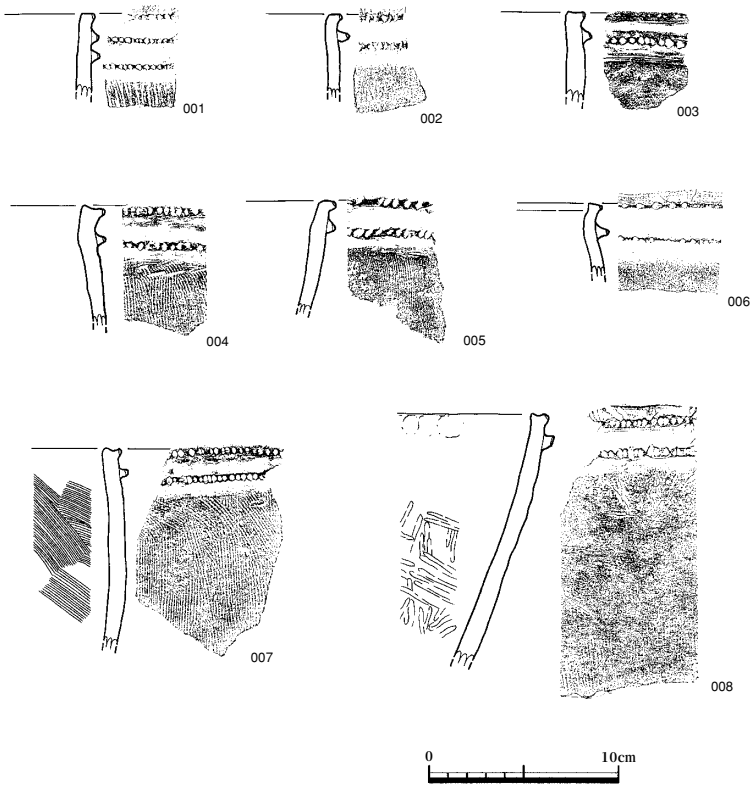
143も壺の底部と推定されるが、小片のため詳細は不明である。内外面とも淡茶褐色を呈し、外器面はタテ方向のハケ目、内器面はナデにより器面の調整が行われている。底径3.4cmを測る。

144は紡錘形を呈する土錘片である。片端を欠損し、現存長2.6cm、最大部での径1.0cm、現存重量1.8g を測る。内外面とも淡茶褐色を呈し、胎土中には長石粒を内包する。

（２）第Ⅲａ層出土土器（第30～37図）

第Ⅲ層（第８層）の上部層に相当する土層から出土した土器資料である。出土土器には甕、壺、高坏などがある。

001～008は下城式系甕の中でも口縁端部上面外側を強調することにより、張り出し部を形成し、この部分に突帯とともに刻みを施すタイプの甕形土器口縁部資料である。



第30図　８層（Ⅲａ層）出土遺物実測図①　(1/4)

001は外面・淡茶黒色、内面・暗茶黒色を呈し、胎土中に角閃石、長石粒を含む甕口縁部である。口縁部外面下位に二条の刻目突帯を貼付する。外器面はタテ方向のハケ目により調整され、内器面はナデにより仕上げられる。

002は口縁端部を強いナデにより、僅かに外反気味に整形し、端部外面に刻みを施す。口縁部外面下位には一条の刻目突帯を巡らし、外器面・ハケ目、内器面・ナデにより調整される。外面・黒色、内面・茶褐色を呈し、胎土中には角閃石、橙色粒子を内包する。

003は直立する口縁部の外面端部をナデにより強調し、刻みを施す。外器面は灰黒色～淡茶褐色を呈し、ハケ目による調整が、内器面は淡褐灰色を呈し、ナデによる器面調整が

なされている。外器面にはススの付着が認められる。

004は突帯貼付部から外方向へ短く外反する口縁部の端部をナデにより突帯状に整形する。突帯は一条であり、突帯上面はヨコナデにより整形される。外面・黄褐色、内面・赤褐色～暗灰色を呈する。器面調整パターンは外面・ハケ目、内面・ナデとするものである。

005は僅かに外反器形をもち、端部をナデにより如意状に整形する。口縁下の突帯は一条である。外器面は淡白褐色を呈し、ハケ目により、内器面は淡赤褐色を呈し、ナデにより調整される。胎土中には石英、角閃石粒が認められる。

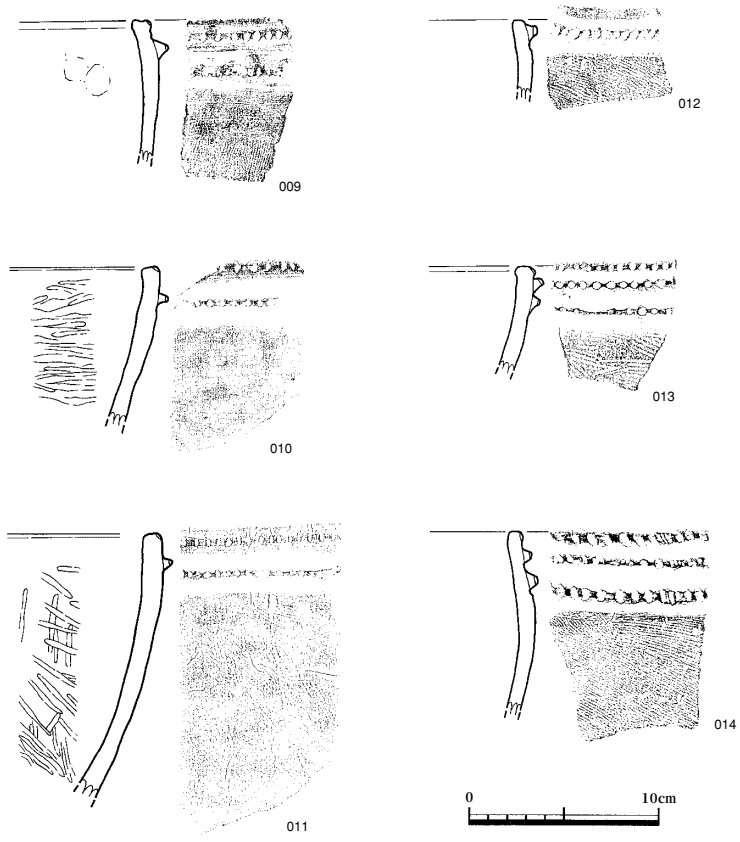
006は突帯貼付部にむかって砲弾形をなす体部から口縁端部へ外方へ短く外反する器形を呈する口縁部資料である。外面・淡茶褐色、内面・茶褐色を呈し、外器面はハケ目、内器面はナデ後ヘラミガキにより調整される。

007は直立気味に立ち上がる口縁端部を強調し、刻みを施す甕資料である。口縁部下位に貼付される突帯は一条であり、内外器面ともハケ目とナデにより調整される。外面・灰黒色、内面・淡灰黒色を呈する。外器面にはススが付着する。

008は直線的に口縁部に至る口縁端部をナデにより強調し、刻みを施す甕資料である。端部強調時のナデにより、上面が凹状を呈するようになっている。外器面は黒褐色を呈し、タテ方向のハケ目とナデにより調整され、内器面は黒色を呈し、最終調整としてヘラミガキが実施されている。内外器面にはススが付着する。

009～014は口縁形状が内湾器形を意識して整形された甕口縁部資料である。

009は口縁部上端の平坦面を水平に整形し、外面の若干下がった位置に一条の刻目突帯を貼付する。内湾器形のため、突帯部が胴部最大径を示す部位となる。口縁端部外面と突帯の二ヶ所に刻みを施し、内外面とも黒灰色を呈する。外器面はナデとハケ目、内器面にはナデによる調整痕が残る。外器面にはススが付着する。



第31図　8層（Ⅲa層）出土遺物実測図②　(1/4)

010も口縁部分において内湾器形を意識した整形が行われている口縁部資料である。外面・灰褐色、内面・黄橙色～褐灰色を呈し、最終調整として内外器面ともヘラミガキによる器面調整が実施されている。胎土中には石英、角閃石、長石粒などを内包する。

011も突帯貼付部に最大径をもつ、内湾器形を指向した口縁部資料である。内外面とも褐色を呈し、最終調整時にヘラミガキが施されている。胎土中には石英、角閃石、長石粒などを含

んでいる。

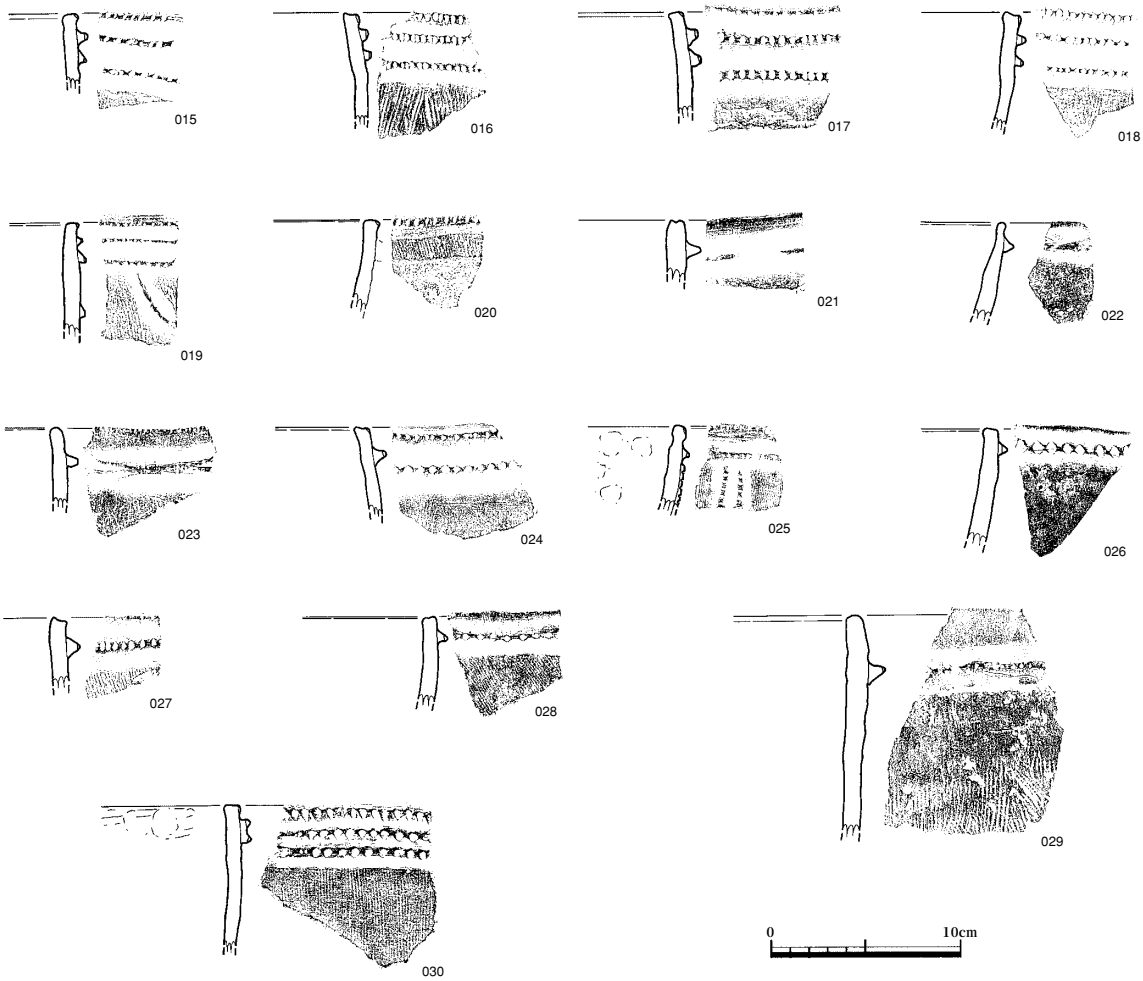
012は内湾器形を呈する口縁部の外面直下に断面三角形を呈する刻目突帯を巡らす甕口縁部資料である。突帯の貼り付け位置が口縁部に極めて近いため、他の下城式系の口縁部とは若干趣を異にする。内外面とも茶褐色を呈し、外器面は斜方向のハケ目、内器面は不定方向のナデにより調整される。

013は直立気味に立ち上がる口縁部の端部をナデにより内湾させた甕口縁部資料である。口縁部外面下位には二条の刻目突帯が貼付され、口縁端部外面とともに都合三ヶ所に刻みが施されている。内外面とも暗茶黒色を呈し、外器面・ナデ後ハケ目、内器面・ナデ後ミガキによる器面調整が行われる。

014は内湾器形を示す胴部から口縁部が直立気味に立ち上がる口縁部形状を示す甕資料である。口縁部外面下には二条の刻目突帯が貼付される。外面は暗黄褐色を呈し、斜方向のハケ目、内器面はナデによる器面調整が実施される。

015〜019は外面に二条の刻目突帯を貼付する下城式系の甕口縁部である。

015は直立する口縁部の外面下位に二条の刻目突帯をもつ下城式系甕口縁部資料である。刻みは口縁端部外面、二条の突帯上面に施文される。内外面とも淡黄褐色を呈し、胎土中には角閃石、長石粒を内包する。内外器面ともハケ目とナデにより調整される。



第32図　8層（Ⅲａ層）出土遺物実測図③　(1/4)

016は内湾器形を呈し、外面突帯ならびに口縁端部外面に刻みを施している。内外面とも暗茶褐色を呈し、外器面はハケ目とナデ、内器面はヘラミガキにより調整される。

017も016と同様の特徴をもつ下城式系の甕口縁部である。外器面は暗茶黒色を呈し、ナデにより、内器面は暗茶褐色を呈しナデにより調整される。外器面には炭化物の付着が認められる。

018は直立する口縁部をもち、外面・茶褐色、内面・淡茶褐色を呈する。器面の調整は外器面がハケ目とナデ、内器面がヘラミガキにより行われる。

019は直立する口縁をもつものであり、外面の二条の突帯下から弧状になると推定される刻目突帯が貼付される。内外面とも淡茶褐色を呈し、外器面はハケ目とナデ、内器面はハケ目とナデ、最終的にはミガキにより調整される。

020は直立する口縁部をもつ甕資料であるが、外器面の突帯が剥落し欠損している。内外面とも橙褐色を呈している。

021〜023は口縁端部外面、および突帯に刻みをもたないタイプの甕口縁部資料である。

021は直立する口縁部の外面下位に断面三角形の突帯をもつ甕資料であるが、口縁端部外面、突帯上面に刻みは施文されない。内外面とも淡黄褐色を呈し、内外器面ともナデにより調整される。

022は先細り気味に整形される口縁端部外面下位に一条の三角突帯を貼付する資料である。茶褐色を呈し、外器面・ナデ、内器面・ナデ後ミガキによる器面調整が実施される。外器面にはススが認められる。

023は直立する口縁をもち、口縁部外面下位にシャープな整形のなされない突帯が貼付される資料である。茶褐色を呈し、外器面はナデとハケ目により、内器面はナデによる調整が行われる。

024は内湾器形を示す下城式系甕の口縁部資料である。外器面は黄茶褐色を呈し、ナデにより、内器面は淡茶褐色を呈し、やはりナデにより調整される。

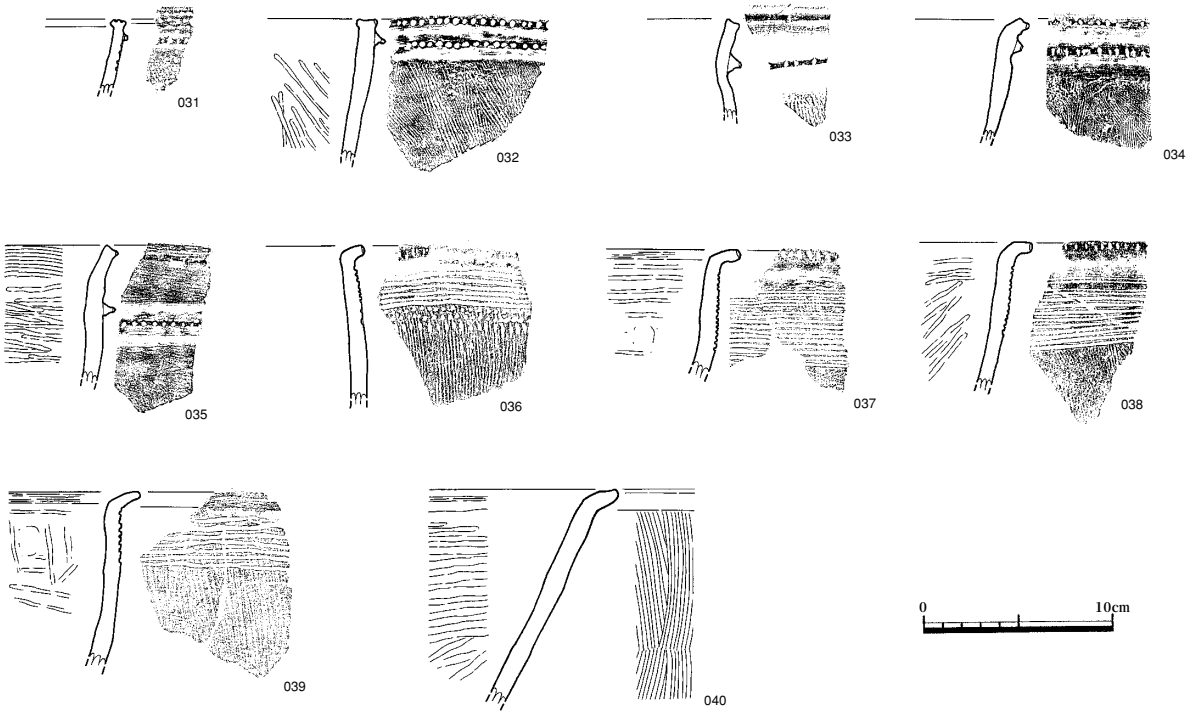
025は直線的に立ち上がる口縁部の外面下位に一条の刻目突帯を貼付し、さらにここからタテ方向に二条の刻目突帯を垂下させる甕口縁部資料である。外器面は黒色を呈し、ハケ目とナデにより調整される。これに対して内器面は暗茶褐色を呈し、ナデとヘラミガキにより比較的平滑に仕上げられる。

026は口縁端部を僅かに内湾気味に整形し、口縁端部外面に近接する位置に一条の刻目突帯を貼付する下城式系甕資料である。外器面はハケ目により調整され暗茶褐色を呈する。内器面は茶褐色を呈し、ナデによる器面調整が実施される。内外器面にはススが認められる。

027は口縁端部において僅かに外反の傾向をみせる甕口縁部資料である。端部から近接する外面下位に刻目突帯を一条貼付する。外器面は淡茶色を呈し、ハケ目により調整され、内器面は淡茶黒色を呈し、ナデによる仕上げがなされている。

028は内湾器形を呈する口縁部外面下位に一条の刻目突帯を貼付した下城式系甕の口縁部資料である。内外面とも淡茶褐色を呈する。器面の調整に関しては、外器面はナデとハケ目、内器面がナデにより調整されている。外器面にはススが認められる。

029はほぼ直立気味に立ち上がる口縁部の外面下位の比較的間隔をおいた位置に一条の刻目突帯を貼付した下城式系甕の口縁部資料である。内外面とも淡橙褐色を呈する。突帯の上部には丁寧なヨコナデが施され、下部にはタテ方向のハケ目による調整が実施される。内器面はナデにより調整され、



第33図　8層（Ⅲａ層）出土遺物実測図④　(1/4)

胎土中には石英、角閃石、長石粒を内包する。

030は直立する口縁部の外面下位に見かけの上では二条となる刻目突帯を貼付する下城式系甕口縁部資料である。外器面に貼付された突帯は、幅の広い粘土帯を貼り付け、その中央を沈線によりヨコ方向に分割し、整形することで二条の突帯を形成する。内外面とも黒灰色を呈し、外器面はハケ目、内器面はナデとヘラミガキにより調整される。

031・032は直線的な口縁部形状の端部内面をナデにより強調し張り出しをもつタイプの甕口縁部資料である。

031は内外面とも淡黄褐色を呈し、口縁部外面下に一条の刻目突帯を貼付する。口縁部上端はナデにより拡張され、この部分に二条の刺突連点文が施文される。さらに同一工具により突帯下部から同様の刺突連点文がタテ方向に施文される。外器面はハケ目、内器面はナデにより調整される。

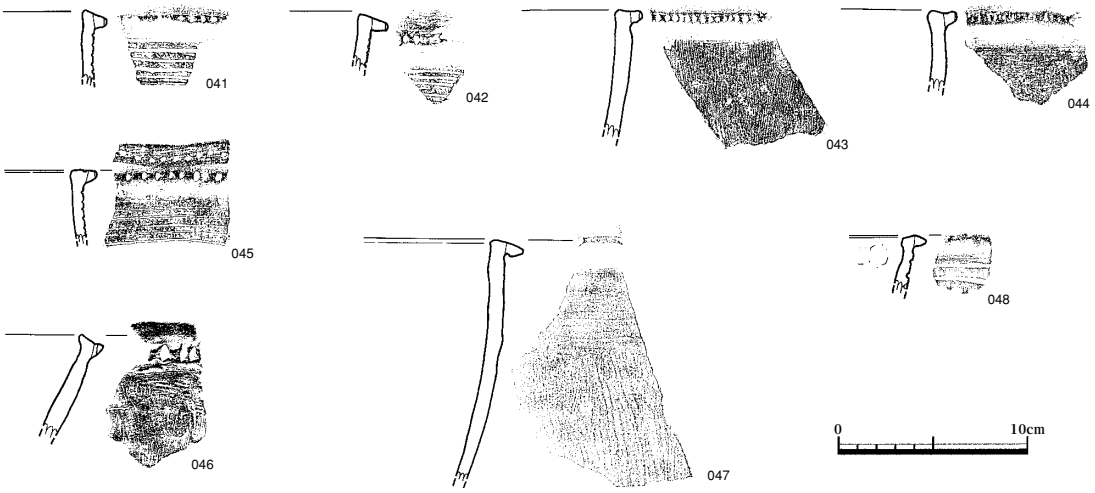
032は外器面・淡茶色を呈し、斜方向のハケ目により、内器面は淡灰色を呈し、ナデにより調整される。胎土中には石英、角閃石粒を含んでいる。

033・034・035は口縁部が大きく外反する器形を呈するものであり、口縁端部から突帯までの間隔が比較的広いものである。**034・035**は口縁端部と突帯部の両者ともに刻みを施す。

033は器壁が薄く、貼付される突帯もシャープな感じを受ける。内外面とも淡茶色を呈し、外器面・ナデ後ハケ目、内器面・ナデにより調整される。

034は内外面とも黒灰色を呈し、外器面・ナデ後ハケ目、内器面・ナデによる器面調整を実施する。外器面にはススの付着が認められる。

035は口縁部外面下位の器形の外反化が認められる位置に一条の刻目突帯を貼付する甕口縁部資料である。外面は黒灰褐色を呈し、内面は淡灰茶色を呈する。器面の調整は内外器面ともハケ目とヘラミガキによるものであり、特に内器面はヨコ方向の丁寧なヘラミガキが最終調整として実施される。



第34図　8層（Ⅲa層）出土遺物実測図⑤　(1/4)

036〜039は胴部外面に多条沈線文を施文する西部瀬戸内系の甕口縁部資料である。いずれの資料も口縁端部を如意状に屈曲させる。

036は外面・茶褐色、内面・暗茶褐色を呈し、器面調整は、外器面がタテ方向のハケ目とナデ、内器面がナデによる。口縁部下位には最終調整終了後にヘラ描きによる多条沈線文が施文され、沈線文の下部に三条の刺突連点文が施文される。胎土中には石英、角閃石粒が認められる。

037は外器面・橙褐色を呈し、ハケ目とナデにより調整される。これに対して、内器面はナデの後、ヨコ方向のヘラミガキにより平滑に仕上げられる。口縁部外面下には二条一単位の二叉状工具による多条沈線文が施文される。

038は外面・黒灰色〜明褐茶色、内面・明褐灰色を呈し、外器面はナデ後ハケ目、内器面はナデ後ヘラミガキにより調整される。胴部には**037**と同様に二条一単位の二叉状工具による多条沈線文が施文される。外器面にはススの付着が認められる。

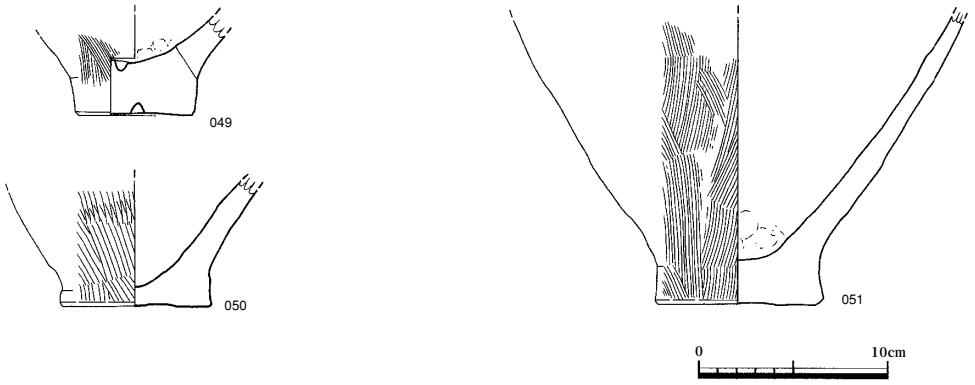
039は外器面をハケ目により、内器面をナデ、ヘラミガキにより調整する。内外面とも茶褐色を呈するが、器外面はススの付着のため黒色を呈している。口縁部外面下位にはヘラ描きによる多条沈線文が施文される。

040は如意形に外反する口縁部資料である。外器面は黒色を呈しており、ナデとタテ方向のハケ目により器面の調整が行われる。内器面は淡茶褐色を呈し、ナデとヘラミガキが施され、器表面が平滑に仕上げられる。胎土中には石英、角閃石などが認められる。諸特徴から台付鉢の鉢部の口縁部資料と考えられる。外器面にはススが認められる。

041〜045は突帯端部外面に突帯を貼り付け、断面三角形を呈する口縁形状を形成する甕口縁部資料である。

041は口縁端部上面が外方へ若干傾斜をもつように成形された甕口縁部である。端部外面には刻みが施され、突帯外面下位にはヘラ描きによる多条沈線文が施文される。外器面は黄褐色を呈し、ハケ目による調整がなされる。内器面は茶褐色を呈し、ナデとヘラミガキによる器面調整が実施される。

042も**041**と同タイプの甕口縁部資料である。外器面は暗茶黒色を呈し、ハケ目とナデによる器面調整が行われる。内器面は暗茶褐色を呈し、ナデとヘラミガキにより仕上げられている。外器面の多条沈線文はヘラ描きによるものである。



第35図　8層（Ⅲａ層）出土遺物実測図⑥　(1/4)

043は口縁部上端面を水平に成形するものであり、端部には刻みが施される。内外面とも淡黄褐色を呈し、外器面はタテ方向のハケ目、内器面はナデにより調整される。胎土中には石英、角閃石粒などを内包する。

044は043と同種の甕口縁部資料である。外器面はハケ目とナデにより調整され、内器面はナデによる器面調整が比較的丁寧になされている。外面・暗茶褐色、内面・淡茶褐色を呈している。

045は043・044と同様の口縁部形状を呈するものであるが、文様属性において大きく異なっている。口縁端部には刻みが施されるが、加えて平坦面を形成する口縁部上面にも刺突連点文が施文され、胴部外面には二条一単位の工具による多条沈線文が施文される。外面・暗茶黒色、内面・暗茶褐色を呈し、内器面はヘラミガキによる器面調整が行われる。外器面にはススが認められる。

046は直線的に延びる口縁部の内外両端を拡張するもので、外面端部に刻みを施す。外器面は黒灰色を呈し、ハケ目とナデにより、内器面は灰黄褐色を呈し、ナデによる器面調整が実施される。胎土中には石英、角閃石、長石粒などを含んでいる。外器面にはススが認められる。

047・048は突帯の貼り付けにより口縁部を成形するタイプのものであるが、口縁端部には刻みは施さない。

047は口縁端部以外に突帯はもたず、内外面とも暗茶黒色を呈する資料である。外器面はハケ目とナデにより、内器面はナデとヘラミガキにより調整される。内外器面にはススが認められる。

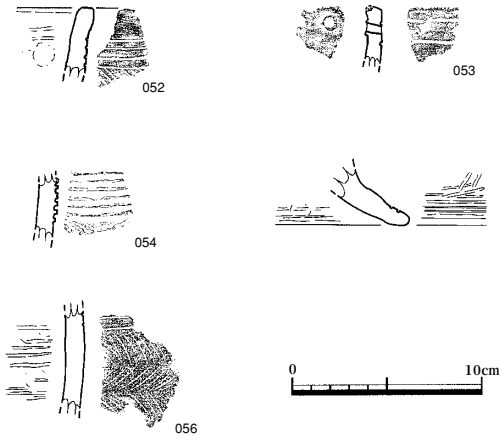
048は内外面とも淡橙褐色を呈する甕口縁部資料であり、外器面はハケ目とナデにより、内器面はナデにより調整される。口縁部外面下位にはヘラ描きによる沈線文と刺突連点文が施文される。

049～051は甕底部資料である。

049は底径5.9㎝を測る甕底部資料であり、外器面はタテ方向のハケ目、ヨコナデにより調整され橙褐色を呈する。内器面および底面はナデによる調整が行われる。この資料において注目されるのは、内面と外面との双方から別々に孔を穿こうとした痕跡が認められる点である。本調査区においても焼成後に甕底部に両側から穿孔した事例が複数例あるが、この資料は穿孔途中で放棄されたものである。器内面にススが認められる。

050は外面・淡茶褐色、内面・黒色を呈する甕底部資料である。底径7.7㎝を測る。底部は薄く作られており、外器面はタテ方向のハケ目、内器面はナデにより調整される。器内面の一部に炭化物の付着が認められる。

051は厚底の底部から上方に「ハ」字状に展開する甕底部資料である。底径8.3㎝を測る。外器面は淡茶褐色を呈し、タテ方向のハケ目により調整される。内器面は黒色を呈し、ナデにより仕上げられ



第36図　8層（Ⅲａ層）出土遺物実測図⑦　(1/4)

る。内器面には部分的に炭化物の付着が認められる。

052～055は鉢資料と考えられるものである。

052は直立する口縁部に二条一単位の二叉状工具により沈線文が施文され、その下位にはアナダラ属の貝殻腹縁による無軸羽状文が施文される。内外面とも茶褐色を呈し、外器面・ナデ、内器面・ミガキにより調整される。

053は直立気味に立ち上がる口縁部の外面に二条の沈線文を施文し、その間に並列するふたつの穿孔が認められる。内外器面とも淡橙褐色を呈し、ナデにより調整される。小破片のため詳細は不明であり、鉢に分類しているものの、他の器種の口縁部破片である可能性も考えられる。

054はヘラ描きによる多条沈線文を施す胴部破片である。小破片であるため、詳細は不明であり、本項に掲載しているものの、上下関係、器種についても不明な部分が多く他器種の胴部破片である可能性も想定される。外器面は暗茶褐色を呈し、ナデにより、内器面は淡黄褐色を呈しヘラミガキにより調整される。

055は台付鉢の脚裾部片である。外器面・淡橙褐色を呈しナデとミガキにより器面の調整が行われる。内器面は黒色を呈し、ナデ調整後、ヨコ方向のヘラミガキが実施されている。

056は胴部破片であり、器種等は不明であるが、種々の特徴から**052**と同一資料である可能性が高い。内外面とも茶褐色を呈し、二条一単位の二叉状工具による沈線文の下位にアナダラ属の貝殻腹縁による無軸羽状文が二段にわたって施文される。外器面はナデにより、内器面はナデとミガキにより調整される。

057は内外面とも茶褐色を呈し、内器面にはヨコ方向のヘラミガキが施される。口縁端部には格子目状に施文される刻みが施される。

058は細頸の壺口縁部破片である。口縁部はラッパ状に開き、穿孔が認められる。外器面は黒色を呈し、ハケ目、ヘラミガキにより調整される。内器面に関しては、淡茶褐色を呈し、ナデとヘラミガキの組み合わせにより器面の調整が実施される。

059は壺口縁部資料である。口唇部には半截竹管状の工具による刺突連点文が施文され、口縁部内面には串状工具による二条の刺突連点文がヨコ方向に施文される。外器面は暗茶褐色を呈し、ヘラミガキにより調整され、内器面は淡茶褐色を呈し、同じくヘラミガキによる器面調整が行われる。

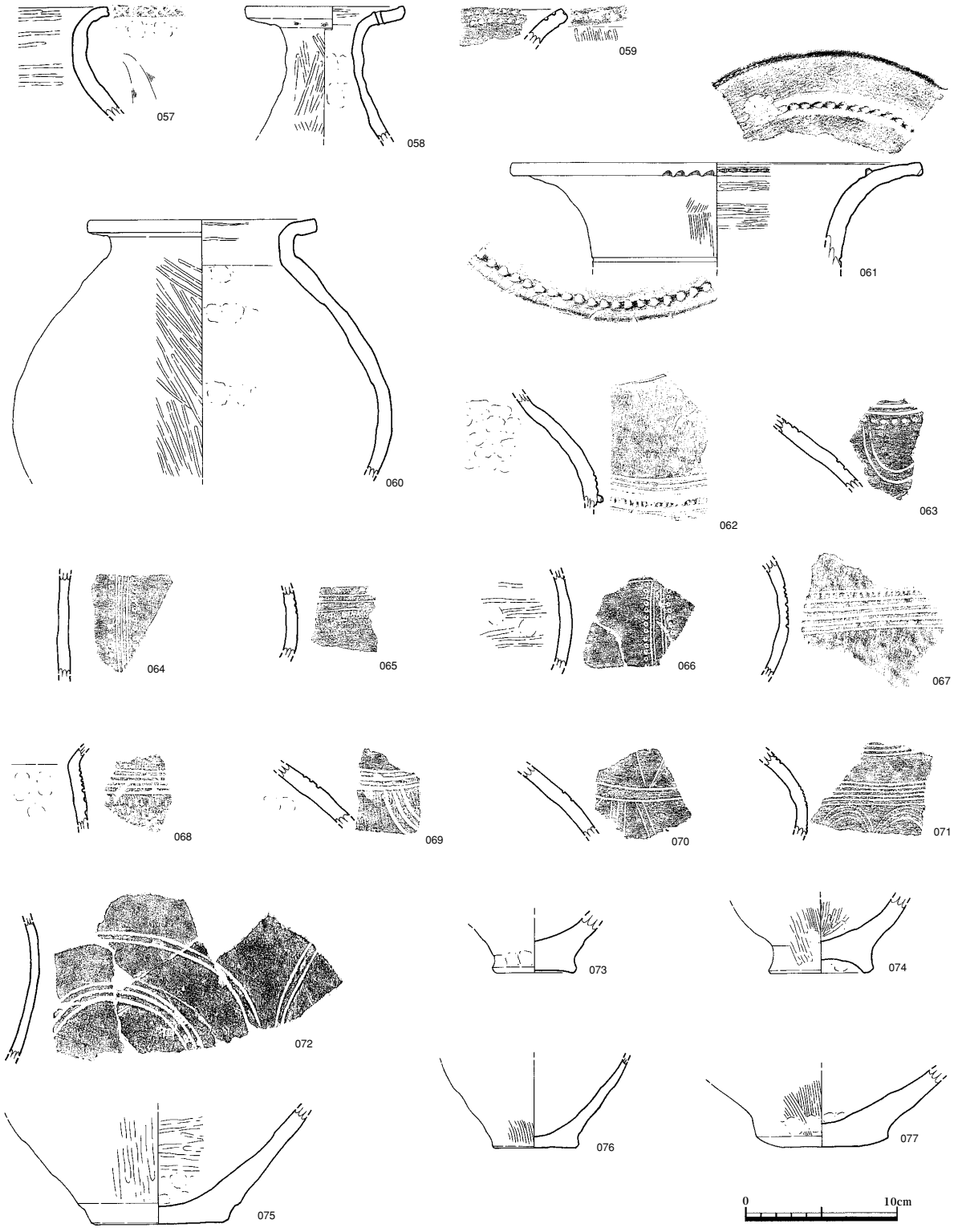
060は胴中位に胴部最大径をもつ壺資料である。内外面とも茶褐色～暗茶褐色を呈し、内外器面ともナデとヘラミガキにより調整される。胎土中には石英、角閃石粒を含み、復元口径14.8㎝、胴部最大径25.0㎝を測る。

061はラッパ状に開く口縁端部に刻みを施し、さらに、口縁内面に刻目突帯を貼付する。内外面とも淡黒褐色を呈し、外器面・ハケ目後ミガキ、内器面・ミガキにより調整される。復元口径27.2㎝を測る。頸部にはヨコ方向の沈線文が認められる。

062は壺肩部破片である。胴中位にはヘラ描きによる多条沈線文と貼り付けによる刻目突帯が配置

される。内外面とも褐灰色を呈し、胎土中には石英、角閃石、長石粒が内包される。外器面はナデとヘラミガキにより、内器面はナデにより調整される。

063は壺肩部片である。外面上位にヘラ描きによる沈線文、刺突連点文を施文し、さらにその下部に同じくヘラ描きによる下向きの重弧文が施文される。内外器面ともミガキにより調整され、外面・茶褐色、内面・淡茶灰色を呈している。



第37図　8層（Ⅲａ層）出土遺物実測図⑧ （1/4）

064・065・066は同種の文様構成をもつ壺胴部破片である。

064はヘラ描きによる３本のタテ沈線が施文され、その両側面に竹管状の工具による刺突連点文を施文する。外器面は淡黄褐色を呈し、ハケ目とミガキにより、内器面は茶褐色を呈し、ナデにより調整される。胎土中には石英、角閃石粒を含む。

065はヘラ描きによるヨコ沈線を施文後、その下部にヨコ方向の刺突連点文を施文する壺胴部の破片である。外面は橙褐色、内面は淡茶褐色を呈する。内外器面ともヘラミガキにより調整される。

066はヨコ沈線施文後にタテ方向の沈線を描き、その側面に竹管状の工具による刺突連点文を施文する。内外器面ともミガキにより調整され、外面・淡橙褐色、内面・淡黄褐色を呈する。この資料が前二者と大きく異なる点は、沈線の施文にあたり、ヘラによる単線単位の施文でなく、二叉状工具による二本一単位の工具により施文されている点である。胎土中には石英、長石粒を含む。

067はヘラ描きによる多条沈線文とその最上位の沈線間に刺突連点文を施文した壺胴部破片である。外面・暗黄褐色～灰褐色、内面・灰白色を呈する。外器面はハケ目、内器面はミガキ風の非常に丁寧なナデ調整が行われる。

068は壺肩部破片である。ヘラ描きによるヨコ方向の多条沈線を施文し、その下位に二段にわたり刺突連点文を施文する。内外面とも淡茶褐色を呈し、外器面・ハケ目、内器面・ナデにより調整される。

069は壺肩部の破片であり、ヘラ描きによる三本一単位の文様が施文される。外器面・暗茶褐色を呈し、ハケ目により、内器面・淡茶褐色を呈し、ナデにより調整される。

070も壺肩部片であり、ヘラ描きによる沈線文により文様が構成される。文様構成は破片資料のため詳細は不明であるが、ヨコ沈線（二条）＋タテ沈線（三条）＋鋸歯状文（一・二条）となるものと考えられる。内外器面とも茶褐色を呈し、ヘラミガキにより調整される。

071は壺胴部破片資料である。ヘラ描きによる多条沈線文とアナダラ属の貝殻腹縁による重弧文により文様が構成される。胎土中には石英、角閃石粒を含み、内外面とも淡茶褐色を呈し、ヘラミガキによる器面調整が実施される。

072は壺胴部資料である。内外面とも灰褐色～黒色を呈し、胎土中には石英粒を含む。外器面はハケ目後ミガキ、内器面はナデにより仕上げられる。文様はヘラ描きによるものであり、重弧文が施文される。

073～077は壺底部資料である。

073は底径5.0㎝を測り、内外面とも黄茶色を呈する。外器面はナデ後ミガキ、内器面はナデにより調整される。

074は上げ底形状を呈する壺底部資料である。外器面は黒茶色、ハケ目とヘラミガキにより、内器面は茶褐色を呈し、ナデとミガキにより調整される。底径6.4㎝を測る。

075は平底を呈する壺底部資料である。内外面とも淡茶褐色を呈する。胎土中には角閃石、長石粒を含み、内外器面ともミガキにより調整される。底部径8.4㎝を測る。外器面にはススが認められる。

076は底径5.3㎝を測り、内外面とも淡黄褐色を呈する。外器面はハケ目とナデ、内器面はナデにより調整される。

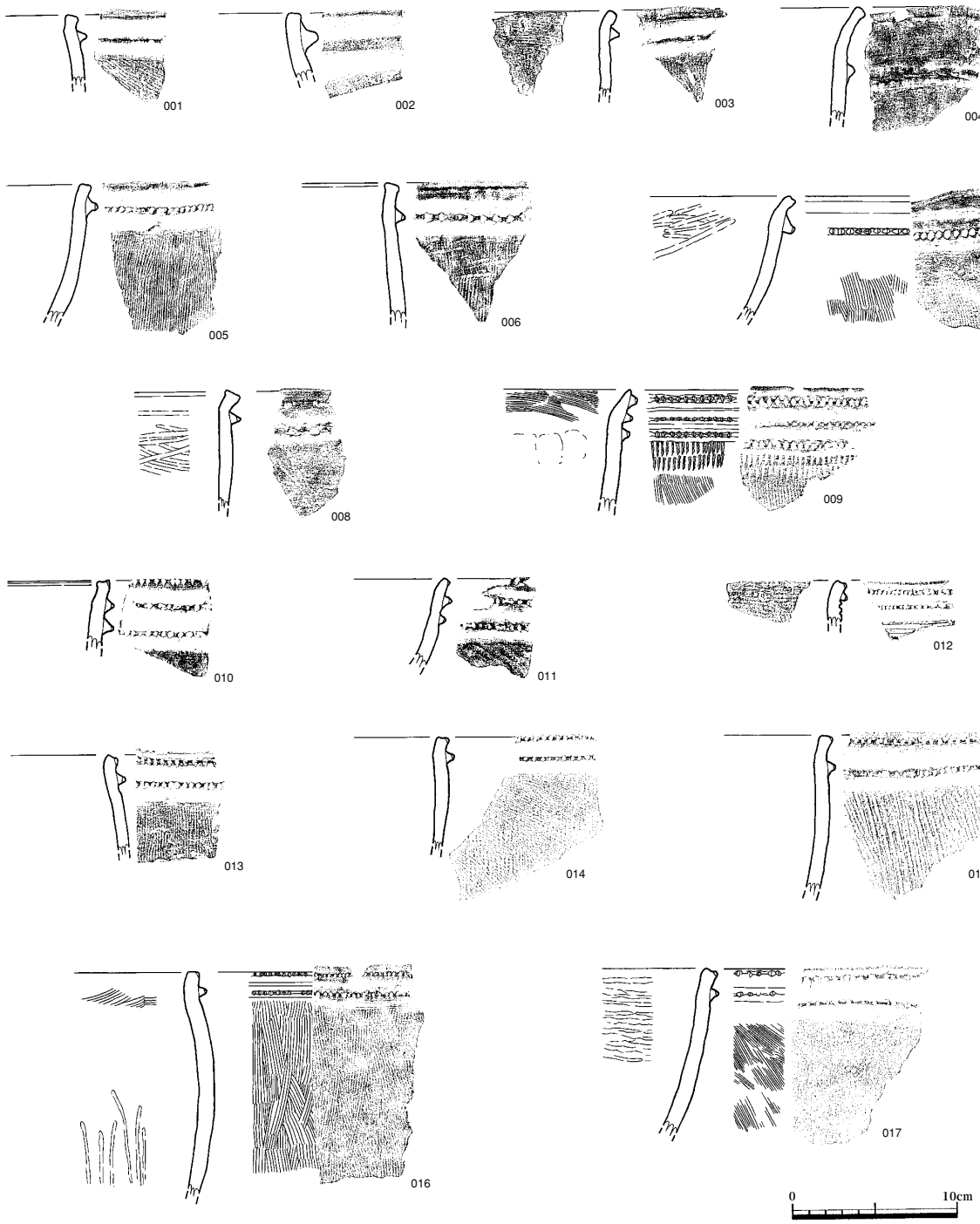
077は厚ぼったい形状を呈する壺底部資料である。内外器面とも暗茶褐色を呈し、ヘラミガキによ

り調整される。底径8.7㎝を測る。

（３）第Ⅲｂ層出土土器（第38～47図）

第Ⅲ層（第８層）の下部層に相当する土層から出土した土器資料である。出土土器には甕、壺、高坏などがある。

001～017は口縁端部を短く外反する口縁部形状を呈する甕口縁部資料である。**001～004**は口縁部外面下位に一条の貼付突帯をもつ資料であるが、口縁端部および突帯には刻みを施さない資料である。



第38図　８層（Ⅲｂ層）出土遺物実測図①　(1/4)

001は短く外反する口縁部をもつ甕口縁部資料であり、外器面は黒色を呈し、ハケ目により調整される。これに対し、内器面は淡茶褐色を呈し、ミガキによる器面調整が実施される。胎土中には角閃石、長石粒を含む。外器面にススが認められる。

002は口縁部外面下位に比較的大きめの三角突帯を貼付する資料である。外面・淡黄褐色、内面・淡茶黒色を呈し、内外器面はナデにより仕上げられる。

003は内外面とも茶褐色を呈し、内外器面ともハケ目、ヘラミガキにより調整される。

004は大きく外反する口縁部の外面端部から若干離れた位置に断面三角形の突帯を貼付する甕口縁部資料である。内外器面とも黒色を呈し、ヘラミガキにより仕上げられる。内外器面にススが認められる。

005は外面・黄茶褐色、内面・茶褐色を呈する。外器面はタテ方向のハケ目、内器面はナデとミガキにより調整される。口縁端部には刻みは施されない。

006は外面・橙褐色、内面・淡橙褐色を呈する甕口縁部である。器面の調整パターンは外器面・ハケ目、内器面・ナデであり、口縁端部はヨコナデがなされるのみで刻みは施されない。胎土中には石英、角閃石、長石粒を含む。

007は外面・黒灰色、内面・灰黒色を呈する甕口縁部であり、外器面はハケ目とナデ、内器面はナデとミガキにより調整される。本資料も口縁端部に刻みを施文しない。胎土中には石英、角閃石、長石粒を含む。器外面にススが認められる。

008は口縁端部を折り曲げ気味に外反させ、口縁端部を強いナデにより面取り風に強調する。刻みはこの口縁端部と突帯に施文される。内外面とも灰黒色を呈し、外器面はナデ、内器面はヨコ方向のヘラミガキにより調整される。器外面にススが認められる。

009は舌状に成形した口縁端部に突帯を貼付することで口縁部を形成する。外器面には口縁端部の突帯を含め三条の刻目突帯が貼付され、最下段の突帯下位にはハケ目工具と思われるヘラ状の工具により二段にわたり、刺突文が施文される。外面・黒色、内面・暗茶褐色を呈し、内外器面ともハケ目とナデの組み合わせにより調整される。器面に炭化物の付着が認められる。

010は外器面に二条の刻目突帯を貼付する甕口縁部資料である。口縁端部はナデにより整形され、刻みが施される。内外面とも暗茶黒色を呈し、胎土中には角閃石、長石粒を含む。外器面はナデ、内器面はナデとミガキにより調整される。

011もまた外器面の口縁部下位に二条の刻目突帯を貼付する甕口縁部資料である。外器面は灰黒色を呈し、ハケ目とナデにより調整される。内器面は灰黒茶色～白灰色を呈し、ナデにより平滑に仕上げられている。口縁端部外面にも刻みが施される。

012は口縁端部を僅かに外反させる甕口縁部資料である。口縁部外面の若干下がった位置に一条の刻目突帯を貼付する形態などは、下城式甕の特徴を示すが、突帯下位にヘラ描きによる沈線文が施文される点は大きく異なり、西部瀬戸内地域の影響によるものと考えられる。内外面とも暗茶褐色を呈し、外器面はヨコナデ、内器面はハケ目により調整される。胎土中には石英、長石粒を含んでいる。

013は口縁端部を短く外反させ、ナデにより強調する。刻みは口縁端部外面と胴部に貼付される突帯に施され、外器面はナデとハケ目により器面調整が行われる。外面・茶褐色～黒色、内面・淡茶褐色を呈し、内器面はナデにより平滑に仕上げられる。

014もまた、口縁端部を短く外反させるタイプの甕口縁部資料である。外器面は茶褐色を呈し、斜め方向によるハケ目調整が行われる。内器面は茶黒色を呈し、ナデとミガキが施される。

015も突帯貼付部から上方へ若干外反する口縁部器形を呈する甕資料である。外面・黒色、内面・茶褐色を呈し、外器面はタテ方向の粗いハケ目調整により器面を調整する。内器面はナデによる最終調整が行われ、平滑に仕上げられている。胎土中には石英、角閃石粒を含み、器外面にはススの付着も認められる。

016は砲弾形を呈すると考えられる体部から立ち上がる口縁部を外方に短く外反させた甕口縁部資料である。外面・赤褐色、内面・淡赤褐色を呈し、胎土中には角閃石、長石粒を含む。器面の調整に関しては、外器面がタテ方向を主体とするハケ目調整により仕上げられ、内器面はヨコ方向のハケ目後ナデ後あとタテ方向のヘラミガキが順次行われている。

017は外面・黒色、内面・橙色～褐灰色を呈し、外器面・ハケ目、内器面・ナデ後ミガキという調整パターンにより器面調整が実施される。特に内器面のヘラミガキはヨコ方向の丁寧なものであり、016等の内面に認められるヘラミガキとは趣を異にする。胎土中には石英、角閃石粒を含んでいる。器外面にススが認められる。

018～030は口縁端部を直立気味に整形するタイプの甕資料である。

018は砲弾形を呈すると推定される体部から突帯貼付部において直立気味に立ち上がる甕口縁部資料である。外面・淡黄褐色を呈し、器面はハケ目により調整される。内面は淡茶褐色を呈し、ナデ後ミガキの組み合わせパターンの器面調整が実施される。胎土中には石英、長石粒を含む。

019は口縁部に最大径をもつ鉢形の器形を呈し、直口傾向の口縁部をもつ資料である。内面・暗茶褐色、外面・暗茶黒色を呈し、胎土内には石英粒を内包する。外器面はハケ目、内器面はナデにより調整され、口縁端部外面には一条の貼り付け突帯上に刻目が施文される。器外面にススが認められる。

020は019と同様の器形をもつ甕口縁部資料である。外器面は暗茶黒色を呈し、ハケ目により調整される。内器面は暗茶褐色を呈し、ナデによる最終調整が行われる。胎土中には石英、角閃石粒を含んでいる。器外面にススが認められる。

021は外器面・ハケ目、内器面・ナデというパターンにより器面が調整され、外面・黄茶褐色、内面・橙茶褐色を呈している。口縁端部外面、突帯上面両方に刻みが施される。

022は口縁部から直線的に口縁部に至る器形を呈する甕資料であり、外面・淡褐灰色、内面・淡茶褐色を呈する。外器面にはハケ目、内器面はナデ仕上げによる。

023は外面・橙色、内面・灰黄褐色を呈する。器面調整に関しては、外器面がタテ方向のハケ目、内器面がハケ目後ナデ後あとヘラミガキという順番により調整が行われている。胎土中には石英、長石粒を含む。

024は内外面とも赤褐色を呈し、胎土中には石英、長石を含む。外器面の器面調整はハケ目後ナデにより行われるが、内器面は最終調整としてヨコ方向を主体とするヘラミガキを実施している。

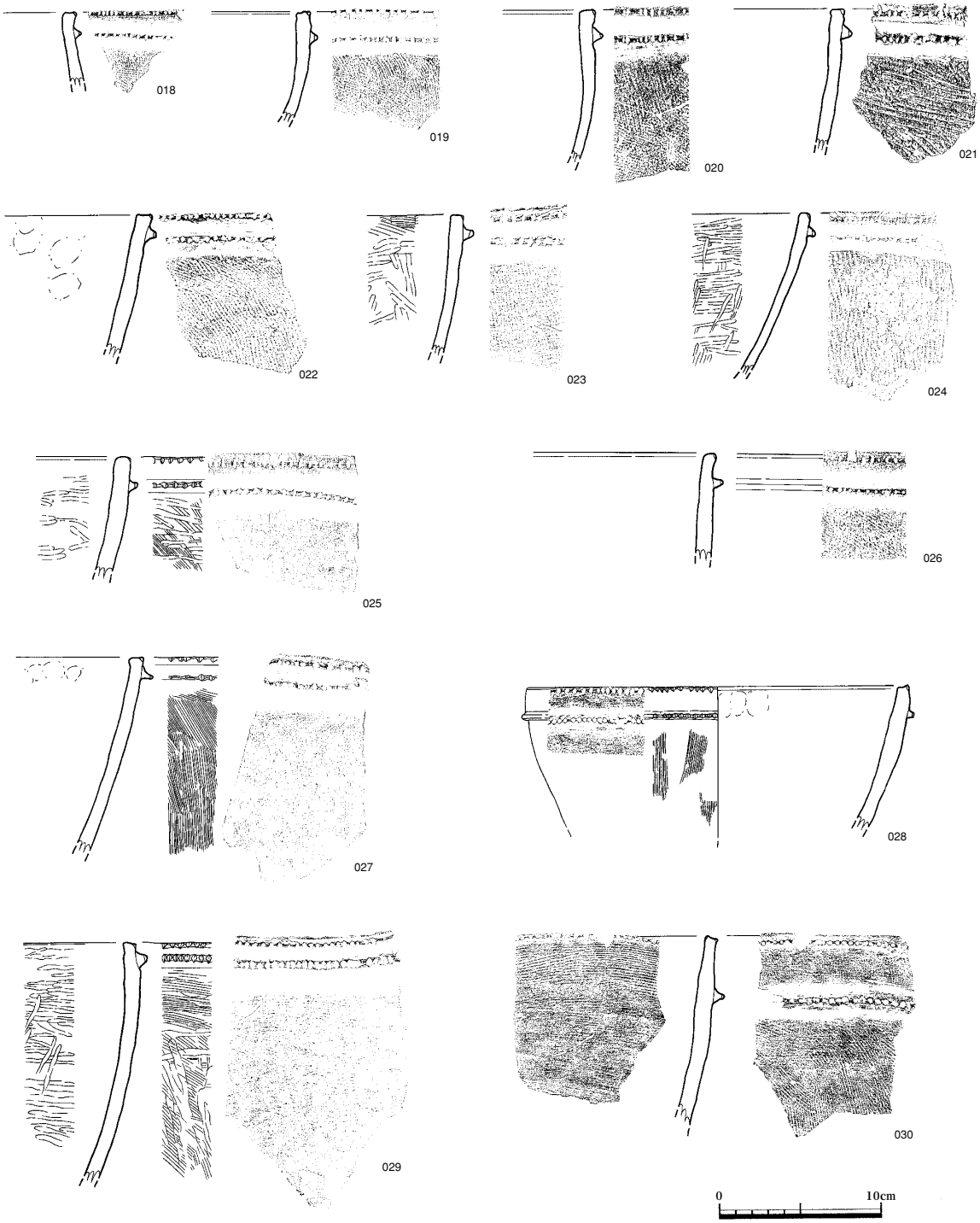
025は外面・褐色、内面・灰褐色～橙色を呈し、外器面はハケ目、内器面はナデで器面調整された後、内外器面ともにヘラミガキが施される。胎土中には石英、角閃石粒を含む。

026は甕口縁部資料であり、直立する口縁部外面下位に刻み目突帯を貼付する。内外面とも黒色を

呈し、外器面はハケ目、内器面はナデにより調整される。内外器面にはススの付着が認められる。

027は内外面とも褐色を呈し、外器面・ハケ目、内器面・ナデによる調整がなされる。口縁部内面はヨコ方向の指オサエ痕が残り、内面端部が僅かに張り出し状の形態を示す。胎土中には石英、角閃石粒を内包する。器外面にススが認められる。

028は内湾気味に立ち上がる胴部形状に直線的に延びる口縁部を整形する。端部上面はナデにより面取りされ、内傾する。内外面とも淡灰褐色～黒色を呈し、外器面・ハケ目、内器面・ナデによる器面調整が行われ、復元口径23.6㎝を測る。



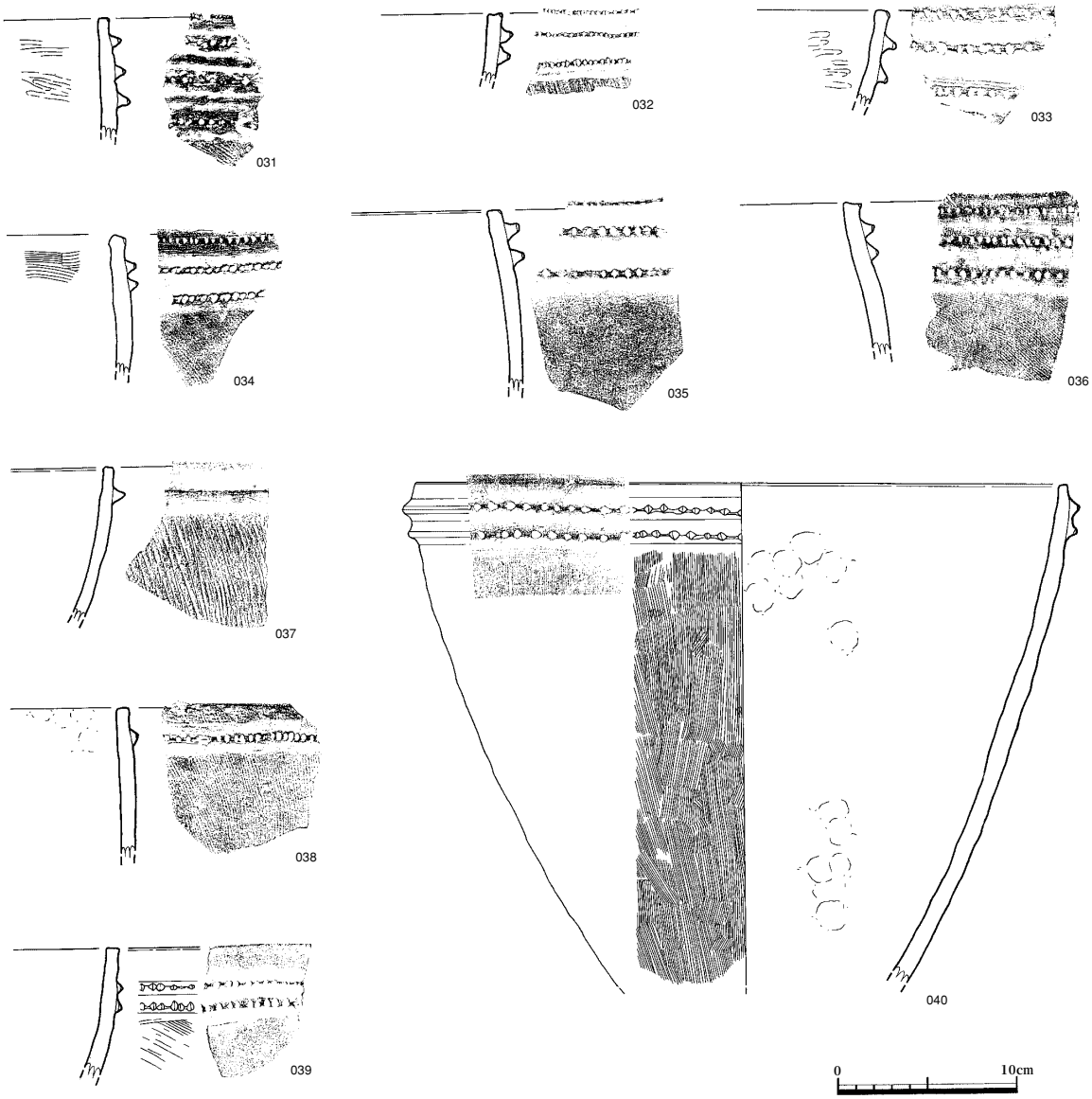
第39図　8層（Ⅲb層）出土遺物実測図②（1/4）

029は内外面とも黒色を呈し、外器面・ナデ後ハケ目後あとミガキ、内器面・ナデ後ヘラミガキによる器面調整が実施される。胎土中には石英、角閃石、長石粒などを含んでいる。

030は口縁端部から比較的間隔をおいた位置に断面三角形の刻目突帯を貼付した甕口縁部資料である。外面・黒色、内面・茶褐色を呈し、外器面はタテ方向のハケ目後ヘラミガキ、内器面はヨコ方向のハケ目の後にヘラミガキが器面調整として実施される。本資料の大きな特徴に口縁端部内面の刻みがある。通常、下城式系甕においては、端部外面のみに刻みが施文される例が多いが、**030**は外端部と同様の刻みが施される。

031〜036、039・040は直線的に整形される口縁部をもつ下城式系甕口縁部の中でも外面に貼付される刻目突帯が二条以上あるものを掲載している。

031は口縁部外面下位に三条の刻目突帯を貼付する甕口縁部資料である。口縁端部外面にも刻目が施文されているので、都合四条の刻みが施されていることになる。外器面は暗灰褐色を呈し、ハケ目により、内器面は淡灰褐色を呈し、ハケ目の後ヘラミガキにより器面調整がなされている。



第40図　8層（Ⅲb層）出土遺物実測図③　(1/4)

032は二条の刻目突帯をもつ資料であり、外器面・黄褐色、ハケ目により調整され、内器面・淡茶褐色を呈し、ナデにより仕上げられる。

033は現状で二条の刻目突帯を確認することができる資料であるが、口縁端部外面もナデにより強調され、刻みが施文されることにより、下位に位置する突帯と同様の効果を演出している。外器面・橙色～褐灰色を呈しナデ調整が、内器面・灰黄褐色を呈し、ナデ後ヘラミガキにより器面の調整がなされている。

034は二条の刻目突帯を貼付する口縁部資料である。口縁端部は平坦に整形されるのではなく、外面と内面にそれぞれ面を形成し、頂部は凸状を呈している。外面・灰黒色、内面・黒褐色を呈し、内外器面ともハケ目により調整されるが、内器面については、最終調整として丁寧なナデによる調整が行われ、ヨコ方向のハケ目調整痕は上部を除きナデ消されている。器外面にススが認められる。

035は砲弾形を示す胴部器形に直線的に端部に至る口縁部を有する甕資料である。外器面には二条の刻目突帯が貼付される。外器面は暗茶黒色を呈し、タテ方向のハケ目とナデにより調整され、内器面は暗茶褐色を呈し、ナデによる器面の調整が実施される。器外面にはススの付着が認められる。

036は035と同様に砲弾器形を呈すると考えられる体部形態をもつ甕の口縁部資料である。外器面には二条の刻目突帯が貼付される。外面・暗灰黒色、内面・明茶褐色を呈し、器面調整に関しては、外器面は突帯の下位において斜め方向を基調とする細密なハケ目調整が行われ、内器面は丁寧なナデにより平滑に仕上げられる。器外面にススが認められる。

037～040は口縁端部外面に刻みを施さない甕口縁部資料である。

037は口縁部外面下位に断面三角形の突帯が貼付されるが、口縁端部外面、突帯ともに刻目が施文されない資料である。外器面はタテ方向のハケ目とナデにより調整され、黒色を呈する。内器面は黄褐色～黒色を呈し、ナデ調整とヘラミガキにより平滑に仕上げられている。胎土中には石英、角閃石粒を含む。外器面の突帯下位にはススの付着が認められる。

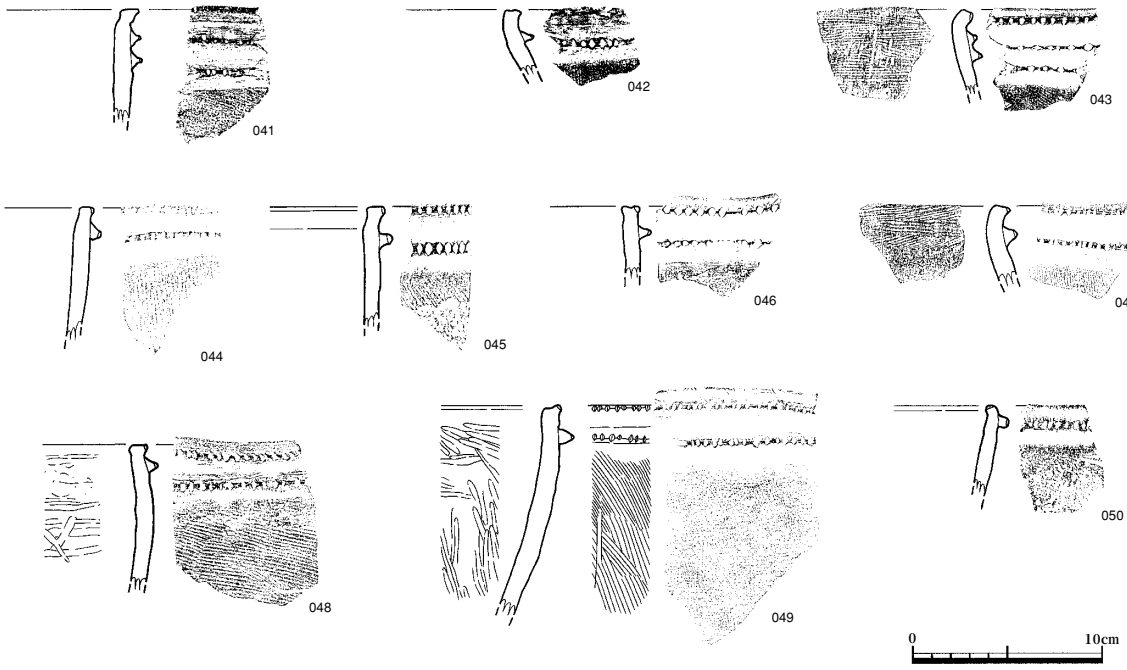
038は突帯部にのみ刻みが施される資料であり、口縁端部外面には刻目は施文されない。外器面はタテ方向のハケ目により調整され、黒黄茶色を呈する。内器面は黄灰色を呈し、ナデにより仕上げられる。胎土中には角閃石、長石粒などが認められる。

039は口縁端部から比較的間隔をもった位置に低平な二条の刻目突帯を貼付する甕口縁部資料である。口縁端部外面は丁寧なヨコナデがなされるが、刻みは施されない。外器面は黄褐色を呈し、ハケ目とナデにより、内器面は丁寧なナデ調整により器面の調整が行われている。灰褐色を呈している。

040は口縁部から胴部にかけて約３/４が遺存する資料であり、今回の出土遺物の中では比較的遺存率の高い資料といえる。口縁端部から僅かに下がった位置に二条の刻目突帯を貼付する。外器面は橙色～黒褐色を呈し、タテ方向の細密なハケ目により器面の調整が行われている。内器面は丁寧な不定方向のナデにより調整され、褐色を呈している。口径36.2㎝を測る。

041～045、047は口縁端部を外反させるものであり、同時に外端部を強いヨコナデにより強調する資料である。

041は口縁端部外面を強いナデにより強調し、シャープな頂部を形成する。外器面には二条の刻目突帯が貼付される。突帯下位には斜め方向のハケ目による器面調整が行われ、黒茶褐色を呈している。内器面は淡灰褐色を呈し、ナデによる仕上げが行われている。胎土中には石英、角閃石粒を含ん



第41図　8層（Ⅲb層）出土遺物実測図④　(1/4)

でいる。

042は砲弾形を呈する体部からの内湾器形から突帯貼付部に至り、口縁部を外反させる器形を呈している。口縁端部外面は強いヨコナデにより凸状に整形される。刻みはこの部分には施文されず、口縁外面下位に貼付けられる突帯のみに認められる。外器面は黒灰色を呈し、ハケ目による器面調整が行われている。内器面は淡灰色を呈し、ナデによる器面調整が実施されている。器外面にはススの付着が認められる。

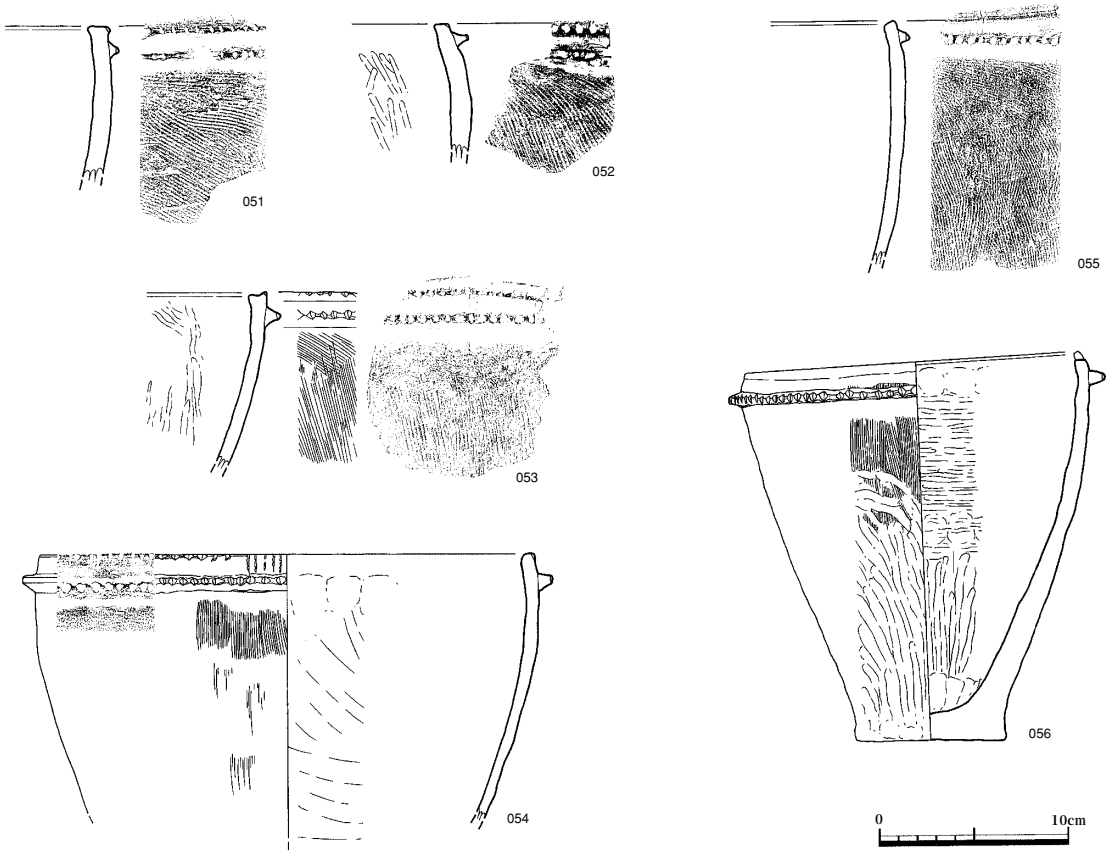
043は突帯部から外反する口縁部器形を呈しており、口縁端部外面はヨコナデにより強調され、刻みが施文される。外面には二条の刻目突帯が貼付されるが、これらは、帯状の粘土紐を貼りつけ、この内部をヨコ方向に上下に分割することで二条の刻目突帯を形成している。外器面・黄茶褐色を呈し、ハケ目により調整される。内器面・淡茶褐色を呈し、ヨコ方向のハケ目調整が行われている。

044は口縁端部を僅かに外反させる口縁端部形状を示し、端部外面はヨコナデにより強調される。この部分と胴部に貼り付けられた突帯には刻みが施され、外器面はタテ方向のハケ目、ヘラミガキにより調整され、対して内器面は茶褐色を呈しナデとヘラミガキにより仕上げられる。胎土中には石英、角閃石、長石粒を内包する。

045は044と同様の器形的特徴をもつ甕口縁部資料であり、内外面とも暗茶褐色を呈する。外器面はタテ方向のハケ目、内器面はナデとヘラミガキにより調整される。外器面の下端は被熱によると考えられる剥離が認められ、同部位にはススの付着が認められる。胎土中には石英、長石粒を含んでいる。

046は直立する口縁部の外面端部を外方へ僅かに引き出し、この部位に刻目を施文する。外器面は暗茶黒色を呈し、ナデにより調整し、内器面は淡茶褐色を呈し、外器面と同じくナデにより器面調整が実施される。

047は外反口縁形状を呈する甕口縁部資料であるが、端部外面をヨコナデにより拡張し、刻みを施



第42図　8層（Ⅲb層）出土遺物実測図⑤　(1/4)

す。内外面とも淡茶褐色を呈し、ハケ目による器面調整が行われる。

048は口縁端部の外面を拡張する資料であり、口縁部外面下位には一条の刻目突帯を貼付する。外器面は黒色を呈し、斜め方向のハケ目により器面の調整が行われる。内器面は灰黒褐色を呈し、ナデ調整とともに、ヨコ方向を主体とするヘラミガキによる器面調整が実施される。土器胎土中には石英、角閃石粒を含んでいる。また、器外面にはススの付着が認められる。

049は口縁端部外面を引き出し気味に整形し、端部には刻目を施文する。同様の刻みは胴部に貼付けられた一条の突帯にも施され、見かけの上では二条の貼付突帯であるかのような効果をかもしている。外器面は黄橙色を呈し、タテ方向のハケ目を施し、内器面は灰褐色を呈し、ナデおよびヘラミガキにより調整される。

050は口縁端部を内側に若干折り曲げ、内側に突出した部分に刻目を施文する資料である。外面には一条の刻目突帯が貼付される。内外面とも淡茶褐色を呈し、外器面・ハケ目、内器面・ナデによる器面調整が行われている。

051〜056は口縁端部において内湾傾向を示す甕資料である。

051は外面・黒色、内面・暗茶褐色を呈する。外器面は斜めおよびヨコ方向のハケ目、内器面はナデ、ヘラミガキによる器面調整が行われている。器外面にはススの付着が認められる。

052は口縁端部外面に近接する位置に一条の刻目突帯を貼付する口縁部資料である。刻みは突帯上だけでなく、口縁端部外面にも施される。外器面は黒灰色〜淡灰黄色であり、斜め方向のハケ目により調整される。内器面は淡灰色を呈し、ナデ後タテ方向のヘラミガキにより調整される。

053は内外面とも黒褐色を呈し、内湾する口縁端部上端を内傾する形態を示す資料である。外器面はハケ目、ナデにより、内器面はタテ方向のヘラミガキによる器面調整が行われる。器外面にススが認められる。

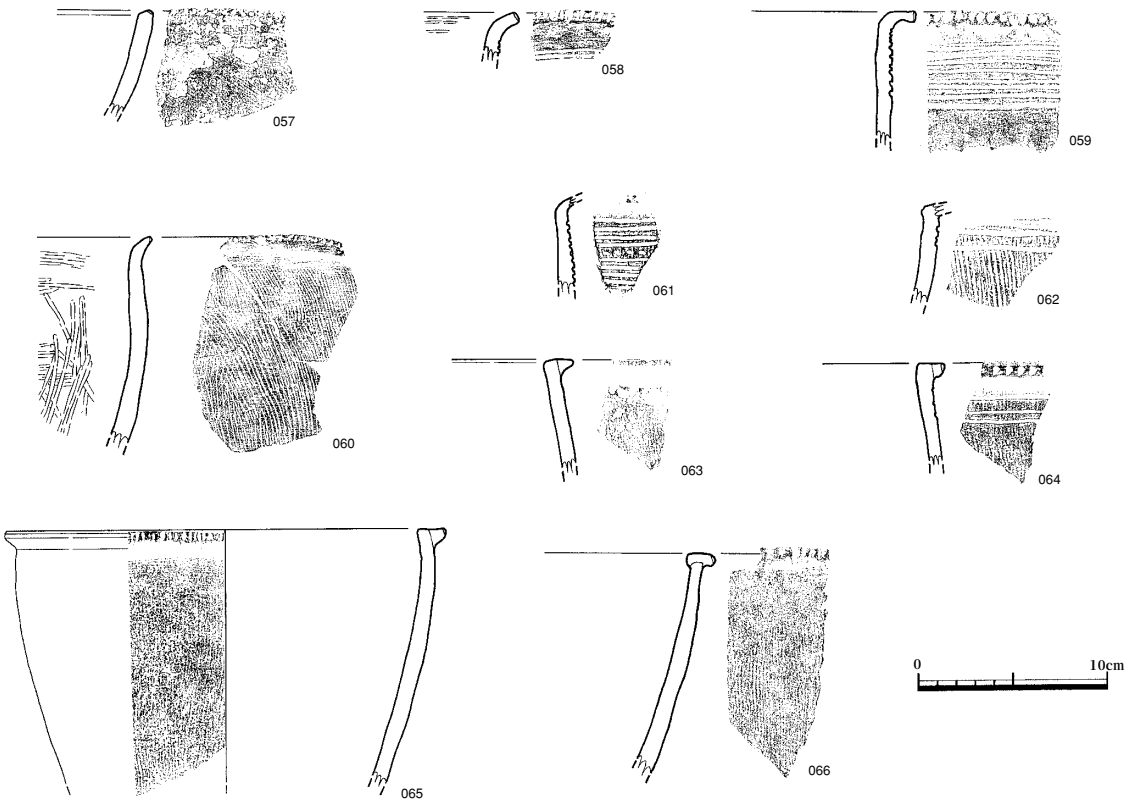
054は復元口径26.2㎝を測る甕資料である。口縁部形状に関しては、内湾するものか、直線的な形状を示すものであるのか判断が難しい資料であるが、口縁部内面の端部から若干下がった位置に口縁部整形時の指オサエ痕がヨコ方向に展開している点、ゆがみのある口縁部位の随所に口縁部自体を内傾させようとする意識を読み取れる点などから、内湾口縁に分類している。外器面は黒色～淡茶褐色を呈し、タテ方向のハケ目とナデにより調整される。内器面は暗茶褐色を呈し、ナデとヘラ状の工具により平滑に仕上げられる。器外面には炭化物の付着が認められる。

055は内湾器形と端部を内傾する口縁部をもつ甕口縁部資料である。内外面とも暗茶褐色を呈し、外器面はハケ目、内器面はナデ後ミガキという器面調整パターンによる。胎土中には石英、角閃石、長石粒を含む。

056は一部に微細な欠損はあるものの、ほぼ完存する甕資料である。口径17.7㎝、器高20.0㎝、底径7.9㎝を測る。外面・黒色～灰黒色、内面・淡黄白色～黒茶褐色を呈する。器面調整に関しては、外器面はタテ方向のハケ目による調整後、胴部下半を中心にタテ方向のヘラミガキにより調整される。内器面はナデとヨコ方向の丁寧なヘラミガキにより仕上げられる。

057～066は、口縁端部の外面下位に突帯を貼り付ける下城式土器口縁部とは形態的特徴を異にする甕口縁部資料である。

057は直立気味に立ち上がる口縁部をもち、外器面に突帯をもたないタイプの口縁部資料である。



第43図　8層（Ⅲb層）出土遺物実測図⑥ （1/4）

甕口縁部に分類しているが、鉢形土器の口縁部資料の可能性もある。内外面とも淡茶褐色を呈し、外器面のみにハケ目が認められ、最終的には内外器面ともヘラミガキにより調整される。胎土中には石英、角閃石、長石粒を含んでいる。

058は内面に稜をもたず、外反する甕口縁部資料である。口唇部には刻みが施され、外器面にはヘラ描きによると推定される多条沈線が施文される。外器面は淡黒色を呈し、ハケ目後ミガキにより、内器面は淡黄褐色を呈し、ヘラミガキによる器面調整が実施される。西部瀬戸内系の甕破片と推定される。

059は口縁部を外側に**L**字状に折り曲げる、西部瀬戸内系の甕口縁部資料である。口唇部には刻みが施され、胴部外面にはヘラ描きによる多条沈線文が施文される。外器面はナデとヘラミガキにより調整され、黒色を呈する。内器面は暗茶褐色を呈し、ヘラミガキによる器面調整が行われている。器外面にススが認められる。

060は如意状に屈曲する口縁形態を示す甕口縁部資料である。口縁部の先端は舌状に仕上げられ、刻目が施文される。外器面は淡灰黒褐色を呈し、タテ方向のハケ目により調整される。内器面は黒灰色を呈し、ハケ目後ヘラミガキによる丁寧な器面調整が行われる。

061は外方向に**L**字状に口縁が屈曲する形態となると推定される甕口縁部資料である。口縁端部は欠損する。口縁部下位の外器面にはヘラ描きによる多条沈線文と沈線間には刺突連点文が施文されている。外器面は黒色を呈し、ハケ目による調整が、内器面は暗茶褐色を呈し、ナデとヘラミガキにより調整される。西部瀬戸内系の甕口縁部資料である。

062は口縁端部が欠損しており、口縁部形状は不明であるが、口縁部外面下の胴部にはヘラ描きによる二条の沈線文が施文される。外器面はタテ方向のハケ目により調整され、淡茶褐色を呈する。内器面は黒色を呈し、ナデ調整とヘラミガキの組み合わせによる器面調整が行われる。胎土中には石英、角閃石、長石粒が認められる。

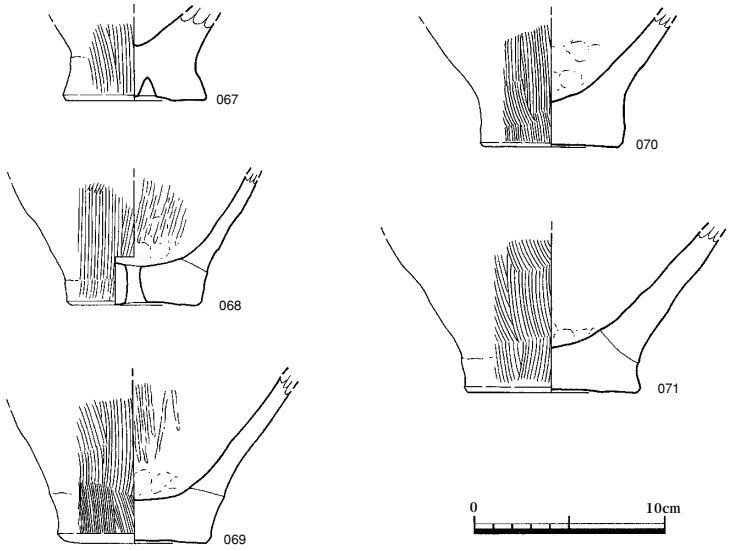
063は口縁端部に外面に粘土紐を追加し、口縁部上端を水平に整形する。口縁部、胴部とも刻み等は施文されない。内外面とも淡黄褐色を呈し、内外器面ともナデによる器面調整が実施され、内器面のみにヘラミガキによる最終調整が行われる。

064は**063**と同様の手法により口縁部が形成され、逆**L**字状の口縁形態を示す。口唇部には刻みが施され、胴部外面にはヘラ描きによる３本の沈線文が施文される。外器面は淡橙褐色を呈し、ハケ目後ナデ後あとミガキにより調整され、内器面は暗茶褐色を呈し、ヘラミガキによる器面調整が行われている。胎土中には石英、角閃石、長石粒を含んでいる。

065は口縁端部に粘土帯（突帯）を貼り付け上端に水平面を形成する厚手の口縁部形状を持つ甕資料である。復元口径23.2㎝を測る。外器面・暗茶黒色を呈し、ナデ後ハケ目後あとミガキの順番により器面調整が行われる。内器面はナデによる。内外器面にススが認められる。

066は口縁端部に粘土帯をかぶせるように接合し、上端に水平面をもつ口縁部を形成する。外器面は暗茶褐色を呈し、タテ方向のハケ目による調整が行われる。内器面は茶褐色～黒色を呈し、ヘラミガキにより器面の調整が実施される。口唇部に刻みが施文されるが、胴部には突帯、あるいは、沈線などによる加飾は認められない。石英、長石粒を含んでいる。器外面にススが認められる。

067～071は甕底部資料である。



第44図　8層（Ⅲｂ層）出土遺物実測図⑦　(1/4)

067は外広がり気味の底部から上方へ大きく開く器形を呈している。底径7.2㎝を測り、橙褐色を呈する外器面はタテ方向のハケ目とナデにより調整される。内器面は暗茶褐色を呈し、ナデにより仕上げられる。不定方向のナデにより調整される底面には、焼成後に孔を穿こうと試みた痕跡が残る。孔は貫通していない。胎土中には角閃石、長石粒を含んでいる。

068は底径6.8㎝を測り、底部中央に穿孔を施す甕底部である。外面・橙茶色、内面・黒色を呈し、外器面はハケ目による調整がなされ、内器面はナデとミガキにより調整される。穿孔は焼成後のものであり、内面と外面の両側からの穿孔によるものである。器内面にススが認められる。

069は底径7.6㎝を測り、外器面・ハケ目、内器面・ナデ後ミガキによる器面調整が行われる。外面・茶褐色、内面・黒色を呈している。器内面にススが認められる。

070は比較的厚味をもった底面をベースに成形された甕底部資料である。外器面はタテ方向のハケにより調整され、淡茶褐色を呈する。内器面は黒色を呈し、一部に炭化物の付着が認められる。ナデにより調整される。底径6.9㎝を測る。

071は底径8.8㎝を測る甕底部破片であり、外器面はタテ方向のハケ目により調整され、橙茶色を呈する。内器面は黒色を呈し、ナデによる器面調整が実施される。底面についてもナデによる調整が行われる。胎土中には角閃石、長石粒を含んでいる。器内面には炭化物の付着が認められる。

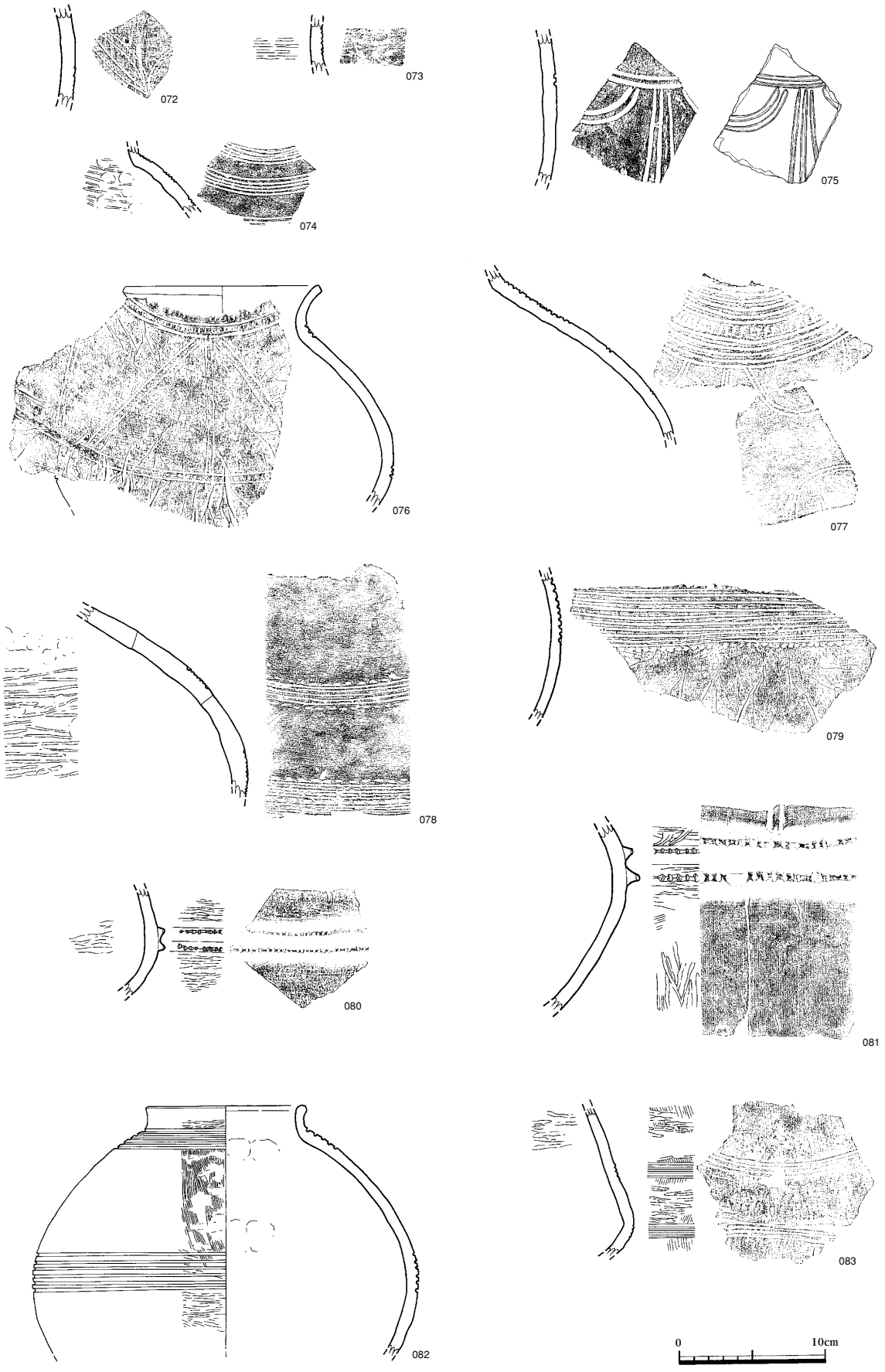
072〜088は壺資料である。

072は壺の胴部破片であり、貝殻復縁により木葉文が施文される。内外面とも淡茶褐色を呈し、ナデにより調整される。小破片のため詳細は不明であり、本来の破片傾きについても判断できない。胎土中には石英、角閃石粒を含んでいる。

073も小破片のため、傾き等の詳細は不明である。内外面とも茶褐色を呈し、ヨコ方向のヘラミガキが行われる。器外面には竹管状の工具による刺突文がタテ方向に三条施文される。胎土中には石英、角閃石、長石粒の微粒が認められる。

074は壺の肩部破片である。口縁部形状は欠損しており不明である。肩部・胴上部・胴部にはヘラ描きによる多条沈線文がそれぞれの部位を一単位として施文される。器表面は内外面とも淡茶褐色を呈し、ヘラミガキにより調整される。

075は壺の肩部片であるが、小片のため資料の傾き等は不明である。外器面は黒色を呈し、ハケ目とヘラミガキにより平滑に仕上げられる。内器面は暗黒茶褐色を呈し、ミガキによる器面調整が行われる。上部には二条の平行沈線文、その下位には三条のタテ沈線が施文され、その左右には２本単位



第45図　8層（III b層）出土遺物実測図⑧ （1/4）

の沈線による下向きの重弧文が施文される。文様の施文はすべてヘラ描きによる。胎土中には石英粒の微粒が目立ち、沈線内部には赤色顔料が残っていることから、本来赤彩されていた可能性がある。

076は球形の胴部から外反する口縁部をもつ壺資料である。頸部に三条のヘラ描き沈線を描き、その間を刺突連点文により埋める。さらにその下位にヘラ描きによる二条一単位とするタテ沈線、鋸歯状文を施文し、その下端に刺突連点文を沈線間に充填し平行線文を施文する。外器面は黒色を呈し、ナデとミガキにより調整され、内器面はヘラミガキによる器面調整が実施され、暗黒茶褐色を呈する。

077は壺肩部破片であり、ヘラ描きによる多条沈線文、刺突連点文、タテ方向の沈線、上下それぞれ重弧文が施文される。内外器面ともヘラミガキにより調整され、外面・淡黄茶褐色、内面・黒色を呈している。

078は壺肩部の破片資料であり、胴部にはヘラ描きによる多条沈線文と刺突連点文を組み合わせた文様帯を二ヶ所に認めることができる。外器面はハケ目とヘラミガキにより調整され、淡茶褐色～黒色、内器面はヘラミガキによる器面調整が行われ黒色を呈している。胎土中には角閃石、長石粒を含む。

079は壺の胴部破片であり、ヘラ描きによる多条沈線文と刺突連点文の組み合わせ文様が施文される。内外面とも黒色を呈し、ヘラミガキにより器面調整が行われる。

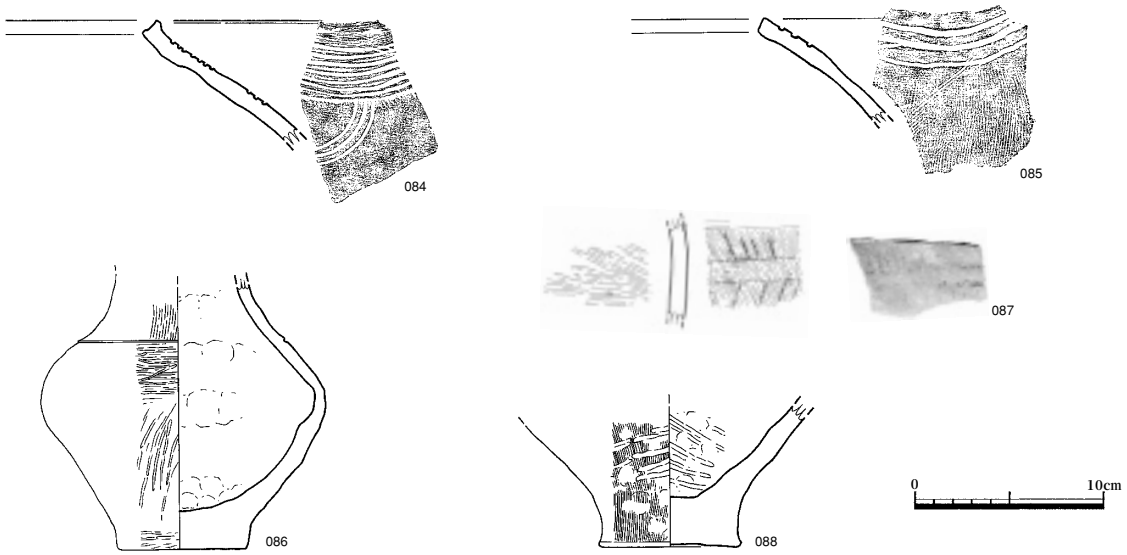
080は壺の胴部破片資料である。胴部の最大径に相当する部分に二条の刻目突帯が貼付される。外器面はナデとヘラミガキにより調整され、褐灰色～黄橙色を呈している。内器面は褐灰色を呈し、外器面と同じくヨコ方向のナデおよびヘラミガキが行われる。胎土中には石英、角閃石、長石粒を含んでいる。

081も080と同様の器形を示すと考えられる壺胴部破片である。胴部最大径部に二条の刻目突帯を貼付する。外器面はハケ目とヘラミガキによる調整が行われ、黒褐色を呈する。内器面は褐灰色～黄橙色を呈し、外器面の最終調整と同じくヘラミガキが行われる。剥落のため明確でないが、突帯部の基部を中心に赤色顔料の痕跡が残っており、本来は塗彩されていた可能性がある。胎土中には石英、角閃石、長石粒を内包する。

082は復元口径11.0cm、胴部最大径26.4cmを測る壺上半部資料である。外器面はハケ目とヘラミガキにより調整され、肩部と胴部にはヘラ描きによる多条沈線文が施文される。黒色を呈している。これに対して内器面は暗茶褐色を呈し、ミガキを思わせるような丁寧なナデにより器面の調整が行われる。

083は胴部下半に屈曲部をもつ壺胴部資料である。口縁部、底部がどのような形状を呈するものであるのかは不明である。上半部の中位と屈曲部にヘラ描きによる多条沈線文を施文する。外面は黄橙色～褐灰色、内面は明黄褐色～褐灰色を呈し、器表面はヨコ方向のヘラミガキにより調整される。胎土中には石英、角閃石、長石粒を含む。無頸壺になるのであろうか。

084は無頸壺の口縁部資料である。口縁端部は強いヨコナデが施され、面取りが行われる。肩部にはヘラ描きによる多条沈線が施文され、その下部には同じくヘラ描きによる三条一単位となる下向きの重弧文が施文される。外器面はタテ方向のハケ目後にヘラミガキにより調整され、黒色を呈する。内器面は茶褐色を呈し、ミガキによる器面調整が行われる。器外面にススが認められる。



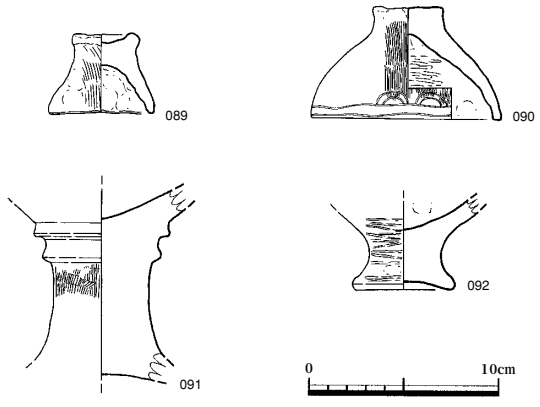
第46図　8層（Ⅲb層）出土遺物実測図⑨　(1/4)

085も**084**と同種の無頸壺の口縁部資料である。口縁部は内湾気味に端部に至る。外器面はハケ目とヨコナデによる器面調整が行われ、淡橙褐色を呈している。内器面は淡橙白色を呈し、ナデにより仕上げられる。胎土中には石英、角閃石、長石粒を含む。肩部にはヘラ描きによる三条の沈線文が施文される。

086は口縁部が欠損するものの、体部はほぼ完存する壺資料である。外面・灰白色～黒色、内面・淡灰茶褐色を呈する。肩部に胴部最大径をもち、この部分に段を有する。器面調整に関しては、外器面はナデとヘラミガキにより、内器面はナデにより調整される。底径6.9㎝、最大胴部径14.9㎝を測る。

087は赤彩により文様を描く彩文土器破片資料である。壺の胴部になると推定される。文様はヨコ方向に二本の平行線文を描き、その上下端に短い直線をほぼ等間隔に比較的密に配置する。文様の第一印象はムカデを想起させるような構成となっている。外器面はハケ目とヘラミガキにより調整され、黒色を呈する。内器面はナデとヘラミガキによる器面調整が実施され、暗茶褐色を呈している。胎土中には角閃石、長石粒を含む。

088は底部資料である。外器面はタテ方向のハケ目とヘラミガキの組み合わせにより調整される。これに対して内器面はナデとヘラミガキにより調整される。底径7.1㎝を測り、内外面とも黒色を呈する。内外器面にススが認められる。



第47図　8層（Ⅲb層）出土遺物実測図⑩　(1/4)

089・090は蓋形土器と推定される資料である。

089は内外面とも黒色を呈する。外器面はハケ目とナデにより、内器面はナデにより調整される。蓋形土器のミニチュアであろうか。ツマミ部径4.0㎝、器高4.2㎝、口径6.0㎝を測る。

090は小型の蓋である。完存する。ツマミ部径4.0㎝、器高6.0㎝、口径10.0㎝を測る。外器面は黒色～淡灰色を呈し、ハケ目とナデにより、内器面は淡

黄茶褐色を呈し、ヨコ方向のヘラミガキにより器面を調整する。外面の口縁端部外面にはヘラ描きによる二条の沈線文とその上部に上向きの重弧文が二組一対により施文される。

091は高坏の脚部資料である。脚部と坏部の接合部には二条の三角突帯が削出され、脚柱部は粘土柱により作られており、脚裾部において外方へ開く器形を呈するものと推定される。外器面は黄橙色を呈し、タテ方向のハケ目とヘラミガキによる器面調整が行われる。内器面は暗灰色～橙色を呈し、ヘラミガキにより調整される。胎土中には石英、角閃石を含んでいる。

092は小型の台付鉢の脚部として掲載しているが、蓋の頂部である可能性もある。外面は黒色、内面は淡茶褐色を呈し、内外器面ともヨコ方向のヘラミガキにより調整される。胎土中には角閃石、長石粒を含んでいる。

（４）第Ⅲｃ層出土土器（第48～52図）

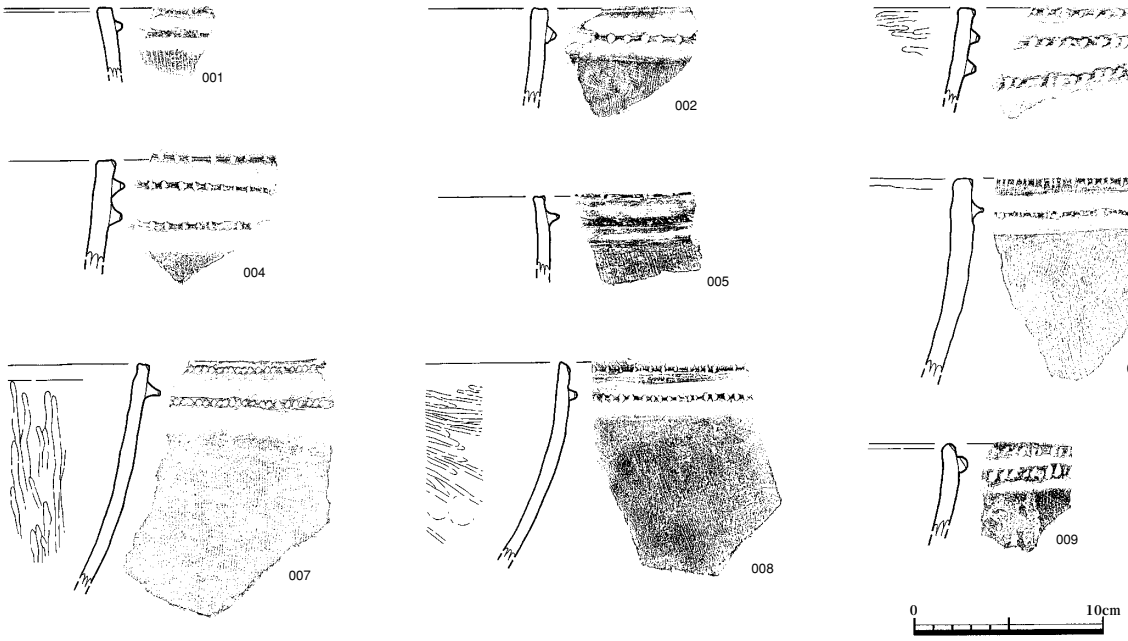
第Ⅲ層（第８層）内に認められる砂質土層であり、ラミナ状堆積物と判断される土層から出土した土器資料である。出土土器には甕、壺、高坏などがある。

001は内湾器形をなす体部に直線的に整形される口縁部をもつ甕資料である。口縁端部外面、および外面下位に貼付される突帯には刻みは施されない。外器面はタテ方向のハケ目により調整され、内器面はナデとミガキにより器面の調整がなされる。内外面とも茶褐色を呈し、胎土中には石英、角閃石、長石粒を含む。

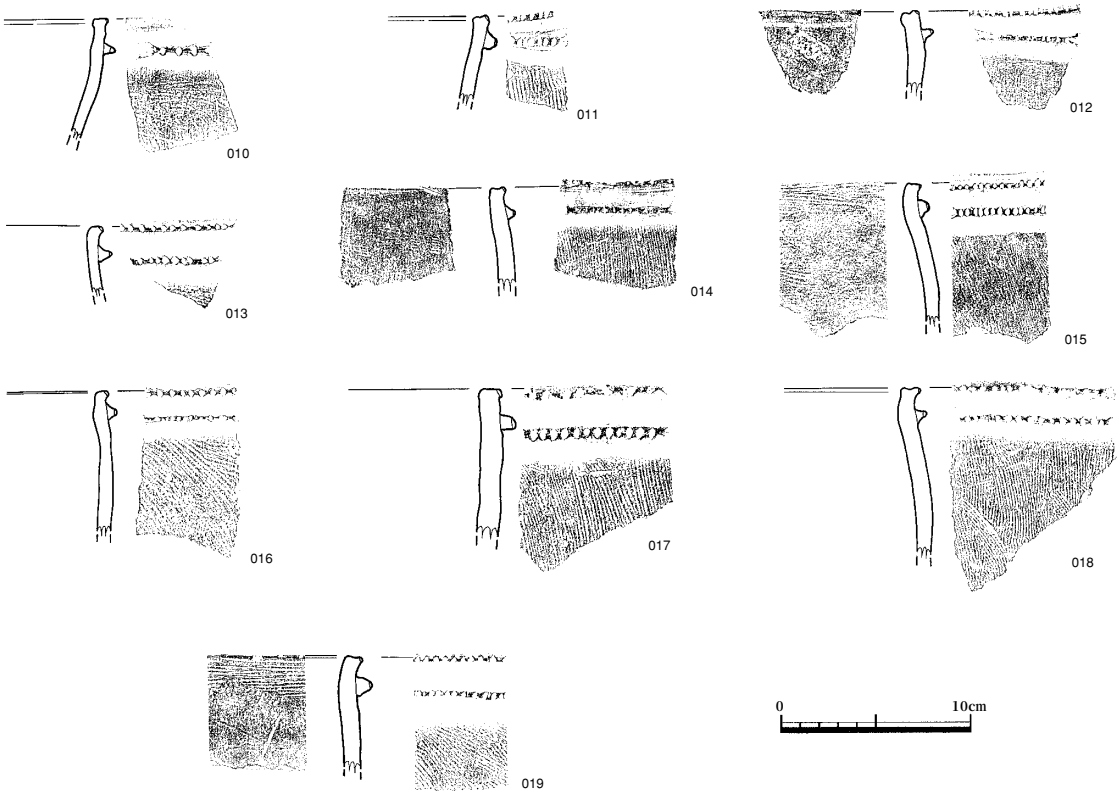
002は直線的に整形される口縁部をもつ下城式系甕の口縁部資料である。外器面にはタテ方向のハケ目が、内器面にはナデとミガキが施される。内外面とも淡茶褐色を呈する。

003は外器面に二条の貼付突帯をもつ甕口縁部資料である。口縁部は直線的に整形され、端部外面には刻目が施文される。外器面は黄橙色を呈し、ハケ目による調整がなされる。内器面はナデとヨコ方向のヘラミガキが施され褐灰色を呈している。胎土中には石英、角閃石、長石を含む。

004も直線的に整形される口縁部をもち、胴部外面に二条の刻目突帯をもつ甕口縁部資料である。



第48図　８層（Ⅲｃ層）出土遺物実測図①（1/4）



第49図　8層（Ⅲc層）出土遺物実測図②　(1/4)

外器面・ハケ目、内器面・ナデ後ミガキによる調整がなされ、内外面とも淡茶褐色を呈している。

005は口縁端部外面、突帯上面に刻目を施文する。外器面は淡灰黒色を呈し、タテ方向のハケ目が、内器面は灰茶褐色を呈し、ナデにより仕上げられる。器外面にススが認められる。

006は直立気味に立ち上がる口縁部資料であり、口縁部外面下位には一条の刻目突帯を貼付する。外面・黒色～灰黄褐色、内面・黒褐色～黄橙色を呈し、外器面はハケ目により、内器面はナデにより調整される。胎土中には角閃石、長石粒が内包される。

007は外器面をタテ方向のハケ目により調整し、内器面はナデの後にタテ方向のヘラミガキにより調整する甕口縁部資料である。外面・黒色～暗灰黄色、内面・灰褐色を呈している。器外面にススが認められる。

008・009は口縁端部に明確な面取り状の整形は行わず、舌状の形態をもつ甕口縁部資料である。

008の外器面は黒色～淡灰白色を呈し、ハケ目により調整される。これに対して、内器面は淡灰色を呈し、ヘラミガキにより器面の調整が行われている。胎土中には石英、角閃石、長石粒が確認される。器外面にススが認められる。

009の口縁端部は内湾傾向を示す。外器面はハケ目により調整され、暗茶褐色を呈する。内器面は茶褐色を呈し、ナデ、およびミガキによる器面調整が行われている。胎土中には石英、角閃石、長石粒を内包する。

010は直線的なフォルムをもつ口縁部の内面端部をナデにより強調し、若干貼りだし気味に整形される甕口縁部資料である。外器面はハケ目とヘラミガキにより調整され、黒色を呈している。口縁端部外面には刻みは施文されず、突帯部にのみ認められる。内器面は茶褐色を呈し、ナデによる器面調整が行われている。器外面にススが認められる。

011も口縁部内面端部をナデ調整により張り出し気味に強調する特徴をもつ。外器面は淡茶黒色を呈し、タテ方向のハケ目により調整される。内器面は橙茶褐色を呈し、ナデにより仕上げられている。胎土中には石英、角閃石、長石粒などを含む。

012は内湾器形を呈する甕口縁部資料であるが、やはり口縁部内面端部をヨコナデにより張り出し気味に整形し強調する。刻目は口縁端部外面と突帯上の二ヶ所ともに施文される。外器面は暗茶褐色を呈し、ナデによる調整が行われ、内器面は淡茶褐色を呈し、ハケ目による器面調整が実施されている。胎土中には石英、長石粒などを認めることができる。

013は外反形状の甕口縁部資料である。外面・橙茶褐色、内面・赤茶褐色を呈し、内外器面ともナデにより調整される。

014は口縁端部において外反傾向を示し、端部外面はヨコナデにより強調される。外器面はハケ目後ナデ、内器面はハケ目後ヘラミガキが行われる。内外面とも淡茶褐色を呈する。

015もまた口縁部が外反器形を示すものであり、外面・淡茶褐色～黒色、内面・黄褐色～黒色を呈し、内外器面ともハケ目後ナデという組み合わせによる器面調整が実施される。器外面にはススの付着が認められる。

016も外反器形を呈し、口縁端部外面を強調する甕口縁部資料である。外器面は橙茶褐色を呈し、斜め方向のハケ目による器面調整が行われる。内器面は赤橙褐色を呈し、ナデおよびヘラミガキにより仕上げられている。

017は直立する口縁部の外面端部を粘土の折り曲げにより強調する甕口縁部資料である。この端部外面と胴部に貼付された突帯の両者に刻目が施文される。外器面はハケ目による器面調整が実施され、茶褐色～黒色を呈する。内器面は茶褐色を呈し、ナデ調整とヘラミガキによる器面調整が行われる。

018は外反器形をもつ口縁部の外面下端部をナデにより強調し、刻みを施す資料である。外器面はハケ目により、内器面はナデによる器面調整が行われる。外面・暗茶褐色、内面・茶褐色を呈している。

019は外反器形の口縁部に外面端部下端を強調し、刻目を施文する甕口縁部資料である。内外器面とも黒色を呈し、ハケ目とナデの組み合わせによる器面の調整が実施される。

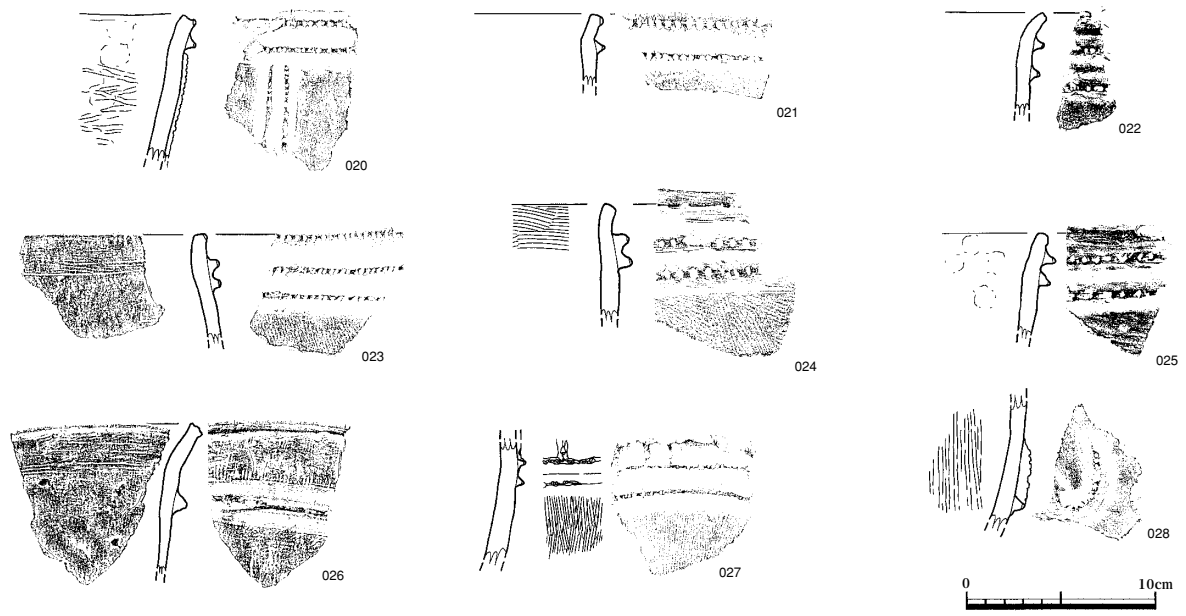
020～026は外反形状を示す甕口縁部資料である。

020は口縁部外面下位に一条の刻目突帯が貼付され、この下端部から二条のタテ方向の刻目突帯が垂下する。外器面は黄灰色を呈し、ハケ目により調整される。内器面は暗灰黄色を呈し、ミガキによる器面調整が行われる。

021は外面・黒色、内面・茶褐色を呈し、内外器面の調整は丁寧なナデによる。外器面にはススの付着が確認される。

022は外反する口縁部の外面下位に二条の三角突帯を貼付する甕口縁部資料である。外面・黒灰色、内面・灰黒色を呈し、内外器面ともナデにより調整される。胎土中には石英、角閃石、長石粒を内包する。器外面にススが認められる。

023は外反口縁の外面下位に刻目突帯を貼付する。突帯は帯状のものを上下に分割し、ふたつの突帯を形成するものであり、見かけ上は二条の突帯をそれぞれに貼付しているように見える。外器面は



第50図　8層（Ⅲc層）出土遺物実測図③　(1/4)

黒色を呈し、ハケ目による器面調整が行われる。内器面は暗茶褐色を呈し、ヨコ方向のハケ目調整とヘラミガキにより調整される。器外面には炭化物の付着が認められる。

024もまた**023**と同様に二条の刻目突帯を帯状の粘土紐で形成する甕口縁部資料である。外面・淡灰黒色、内面・黒灰色～灰白色を呈し、内外器面ともハケ目により調整される。

025は外面・暗灰茶褐色、内面・淡灰茶色を呈し、内外器面ともナデにより調整される。胎土中には石英、角閃石、長石粒を内包する。

026は大きく外反する口縁部の外面下位の比較的間隔をもった部分に一条の断面三角形の突帯が貼付される。刻みは施文されない。外面・茶黒色、内面・黄褐色を呈し、内外器面ともハケ目後ヘラミガキによる調整が行われる。

027は甕の胴部破片資料である。口縁部は欠損する。二条の刻目突帯が貼付され、上部突帯からは一条の刻目突帯が上部に延びている。外器面はハケ目とヘラミガキの組み合わせにより調整され、黄褐色を呈する。内器面はナデ調整とヘラミガキによる器面調整が行われており、黒色を呈している。胎土中には石英、角閃石、長石粒を含んでいる。

028は甕の胴部破片であり、下向きの弧文状に貼付される刻目突帯を外面に有している。内外面とも黒色を呈し、外器面・ナデ、内器面・ナデ後ヘラミガキにより調整されている。

029～047は甕又は壺口縁部資料であるが、下城式系のものとは異なる特徴をもつ資料群である。

029は口縁端部に粘土帯を貼付することで、断面三角形の口縁部を形成する。胴部にはヘラによる沈線文と刺突連点文との組み合わせによる文様が施文される。外面・橙褐色、内面・黄褐色を呈し、外器面はハケ目とナデにより、内器面はナデにより調整される。

030は内外面とも黒色を呈し、外器面・ハケ目とヘラミガキ、内器面・ヘラミガキによる器面調整が行われる。口縁部は逆**L**字状に整形され、端部に刻みを施文する。体部外面にはヘラ描きによる多状沈線文が施文される。胎土中には角閃石、長石粒を含んでいる。器外面にススが認められる。

031は内外面とも暗茶褐色を呈し、端部に刻みを施す。外器面にヘラ描きによる多条沈線文を施文

し、タテ方向のハケ目、内器面はヘラミガキによる器面調整が行われる。

032・033・034・039とも基本的な特徴は**030**と同様のものであり、西部瀬戸内系譜の甕口縁部資料である。

032は外器面が暗茶褐色を呈し、ハケ目による器面調整が行われる。内器面は淡黒色を呈し、ナデにより仕上げられている。胎土中には角閃石、長石粒を含んでいる。

033は内外面とも黒色を呈し、外器面・ハケ目、内器面・ヘラミガキにより調整される。胎土内に混和材として含まれる鉱物属性は他のものと同じく、角閃石、長石粒が目立っている。

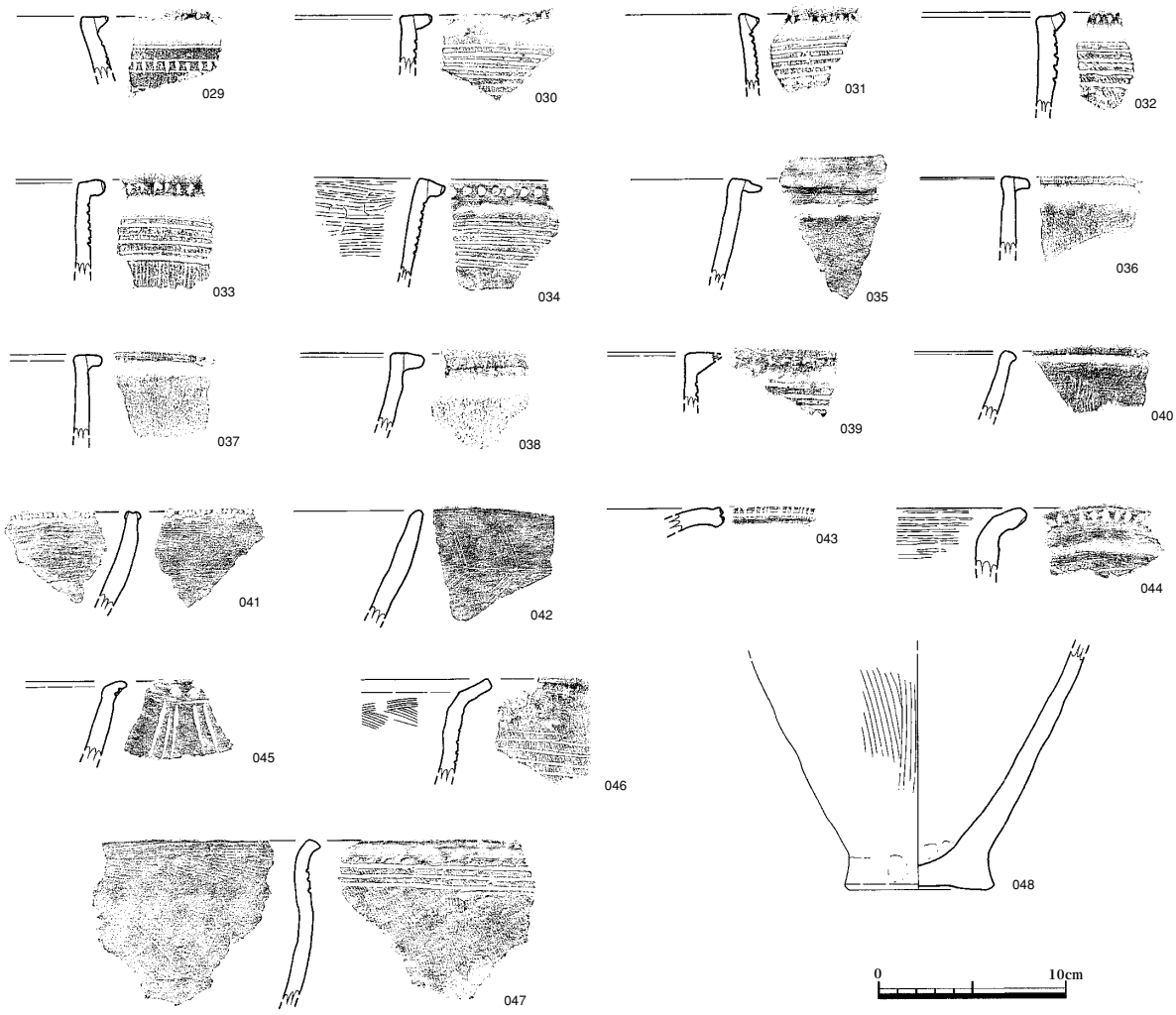
034は上部の平坦面が若干下方に垂れ下がる器形を呈している以外は他のものと同様の特徴を示す甕口縁部資料である。内外器面ともヘラミガキにより調整される。器外面にススが認められる。

039は外器面はヘラミガキにより調整され、黒色を呈する。内器面は茶褐色を呈し、器面はナデにより調整されている。胎土中には石英、長石粒を含んでいる。胴部の多条突帯はヘラ描きによる。

035〜038は口縁端部外面に断面方形の粘土帯を貼り付け、口縁部を形成する甕口縁部資料である。

035は外面・橙褐色、内面・淡橙褐色を呈し、内外器面とも最終調整としてヘラミガキが行われる。胎土中には石英、角閃石、長石粒を内包する。口縁端部等に刻みは施されない。

036は外面・黒色、内面・茶褐色を呈しており、内外器面はナデにより調整され、内面のみ最終調



第51図　8層（Ⅲc層）出土遺物実測図④　(1/4)

整としてヘラミガキが行われる。

037は外面・茶褐色、内面・淡黄褐色を呈し、内外器面はナデにより調整される。刻みは施文されない。

038は内外器面ともナデにより仕上げられ、胎土中には石英、角閃石、長石粒を含む。

040は口縁端部を外面へ若干折り曲げ、ヨコナデにより口縁部を形成する。内外面とも黒色を呈し、外器面はハケ目とヘラミガキにより、内器面はナデとヘラミガキにより調整される。内外器面にススが認められる。

041は直立気味に立ち上がる口縁端部の内外面に刻みを施文する。内外面とも暗茶褐色を呈し、外器面はハケ目とヘラミガキにより器面調整を行い、内器面はヨコ方向のヘラミガキにより仕上げられる。胎土中には角閃石、長石粒を含んでいる。

042は直立した口縁部をもち、端部を舌状に整形する。内外器面ともナデにより仕上げられ、二条一単位の文様によりヨコ方向の綾杉文風の文様が施文される。外面・暗茶黒色、内面・淡黄褐色を呈し、胎土中には角閃石、長石粒を含んでいる。便宜上甕に分類しているが、小片のため詳細は不明であり、鉢形態である可能性もあり、あるいは蓋形土器の端部であることも想定される。

043は壺の口縁端部と想定される資料である。内外面とも暗茶黒色を呈し、胎土中には角閃石粒を含む。外器面はヨコナデにより調整され、内器面はミガキにより仕上げられる。口縁端部には一条のヘラ描き沈線がヨコ方向に施文され、さらにタテ方向の刻みが施される。

044は壺あるいは甕の口縁部資料と考えられるが、小破片のためどちらであるか決することは困難である。直立する頸部から外反する口縁部形状を呈し、口縁端部下端には刻目が施文される。外器面は黒色を呈し、ナデとヘラミガキにより、内器面は茶褐色を呈し、ヘラミガキにより調整される。

045は端部を短く外反する口縁部を有し、口縁部外面に刺突を、その下位の胴部上半にヘラ描きによるタテ描きの沈線文を施す。外面・茶褐色、内面・淡茶褐色を呈し、胎土中には石英、角閃石、長石粒を含む。外器面はヘラミガキとナデにより調整される。内器面は内面剥離の為、器面調整等は不明である。鉢形態を呈する可能性もある。

046は如意形の口縁部を呈し、胴部外面にはヘラ描きによる多条沈線文を施文する。外面・淡灰茶褐色、内面・淡茶褐色を呈する。胎土中には角閃石、長石粒を含み、外器面はタテ方向の、内器面はヨコ方向のハケ目により調整される。刻み等は施されない。

047は胴部上半で S 字状に屈曲する甕口縁部である。内外面とも暗茶黒色を呈し、胎土中に石英、角閃石、長石粒を内包する。口縁部外面下にはヘラ描きによる三条の沈線文が施文される。外器面はタテ方向のハケ目とナデにより調整され、内器面はヨコ方向のハケ目とナデによる器面調整が行われる。口縁端部等には刻目は施されない。内外器面にススが認められる。

048は甕底部資料である。復元底径7.2㎝を測り、外面・茶褐色、内面・暗茶黒色を呈する。外器面・ハケ目、内器面・ナデによる器面調整が行われる。器内面には炭化物の付着が認められる。

049～051は胎土様相、文様構成等から同一個体と考えられる無頸壺破片である。

049は無頸壺の口縁部資料であり、口縁部外面に四条のヘラ描き沈線文を施文し、その下位に貝殻腹縁による刺突文が認められる。内外面とも暗茶褐色を呈し、両面ともヘラミガキにより調整される。

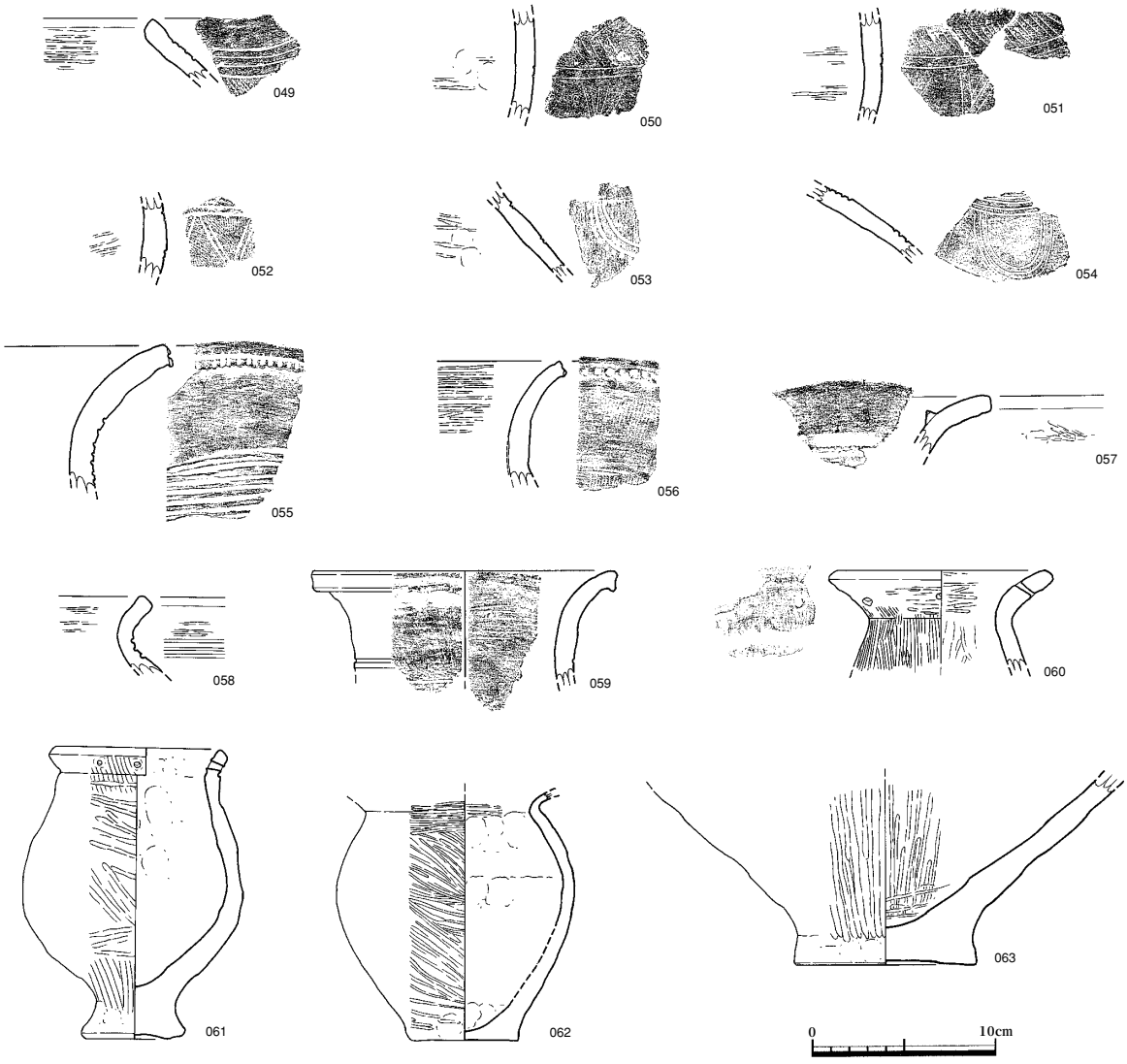
050は胴部破片である。中央に２本のヘラ描き沈線文が施文され、その上下部位に貝殻腹縁による無軸羽状文を施文する。外面・暗茶褐色、内面・茶褐色を呈している。胎土中には角閃石、長石粒等を含む。

051は**050**と同様の文様構成をもつ壺胴部破片である。外面・茶褐色、内面・暗茶褐色を呈している。

052は壺胴部の破片であり、二条一単位の平行線文とその間を埋める鋸歯状文により構成される文様をもつ。内外面とも淡茶褐色を呈し、外器面はハケ目、内器面はナデとヘラミガキにより調整される。胎土中には石英、長石粒を含む。

053は壺の肩部破片である。ヘラ描きによる下向きの重弧文を施文し、その外部に竹管状の工具による刺突連点文が施される。外器面は茶褐色～黒色を呈し、ヘラミガキにより調整される。内器面は茶褐色を呈し、ナデ後ヘラミガキにより器面の調整が行われている。胎土中には角閃石、長石粒を含む。

054はヘラ描きによる沈線文、下向きの重弧文を施文する壺肩部破片である。外器面は黒色～淡黒



第52図　８層（Ⅲｃ層）出土遺物実測図⑤　(1/4)

褐色を呈し、ヘラミガキにより器面の調整が行われる。内器面は黒色を呈し、ナデ調整により仕上げられている。

055は大きく外反する壺口縁部資料である。口縁端部には強いナデにより、下端部を強調し、ヨコ沈線を施文後に刻みを施している。頸部にはヘラ描きによる多条沈線を施文する。内外面とも暗茶褐色を呈し、外器面はハケ目、ナデにより、内器面はヘラミガキによる器面調整が実施される。胎土中には石英、角閃石、長石粒を含む。

056も外反する口縁部をもつ壺口縁部資料であり、端部下端に刻みを施文する。外器面は黒色を呈し、タテ方向のハケ目調整の後にヨコ方向のヘラミガキが施される。内器面は暗茶褐色を呈し、ヨコ方向の細密なヘラミガキにより調整される。

057は口縁部の内面に刻目突帯を貼り付ける壺口縁部である。内外器面とも淡黒茶褐色を呈し、ヘラミガキにより調整される。

058は短く外反する壺口縁部であり、内外器面とも茶褐色を呈し、器表面をヘラミガキにより調整する。胎土中には石英、長石粒を含む。

059は直立する頸部から外に大きくひらく口縁部をもつ壺資料である。口唇部はナデにより面取り風に整形され、拡張する。外器面は暗茶黒色を呈し、ナデとミガキにより調整され、外器面は茶褐色を呈し、ヨコ方向のハケ目、ヘラミガキによる器面調整が行われる。胎土中には石英、角閃石、長石粒を含む。

060は細頸部からラッパ状にひらく口縁部をもつ壺口縁部である。復元口径11.1㎝を測り、外器面は黒褐色を呈し、タテ方向のハケ目、ヘラミガキを施す。内器面は褐灰色～黄橙色を呈し、ナデおよびヨコ方向のヘラミガキによる器面調整が行われる。口縁部には穿孔が認められる。

061は脚付壺であり、口縁部が１/４欠損する以外はほぼ完存する資料である。口径8.9㎝、器高15.9㎝、胴部最大径11.9㎝、底径5.2㎝を測る。外器面は茶褐色～黒色を呈し、ハケ目後ナデ後あとヘラミガキによる器面調整が行われる。内器面は淡茶黒色を呈し、ヘラミガキにより調整される。胎土中には角閃石、長石粒を内包する。

062は平底を呈する壺資料である。外面・黒色、内面・暗茶褐色を呈する。底径5.9㎝、胴部最大径13.0㎝を測る。外器面はヨコ方向を基調とするヘラミガキにより調整され、内器面はナデとヘラミガキによる器面調整が行われる。胎土中には石英粒を内包する。

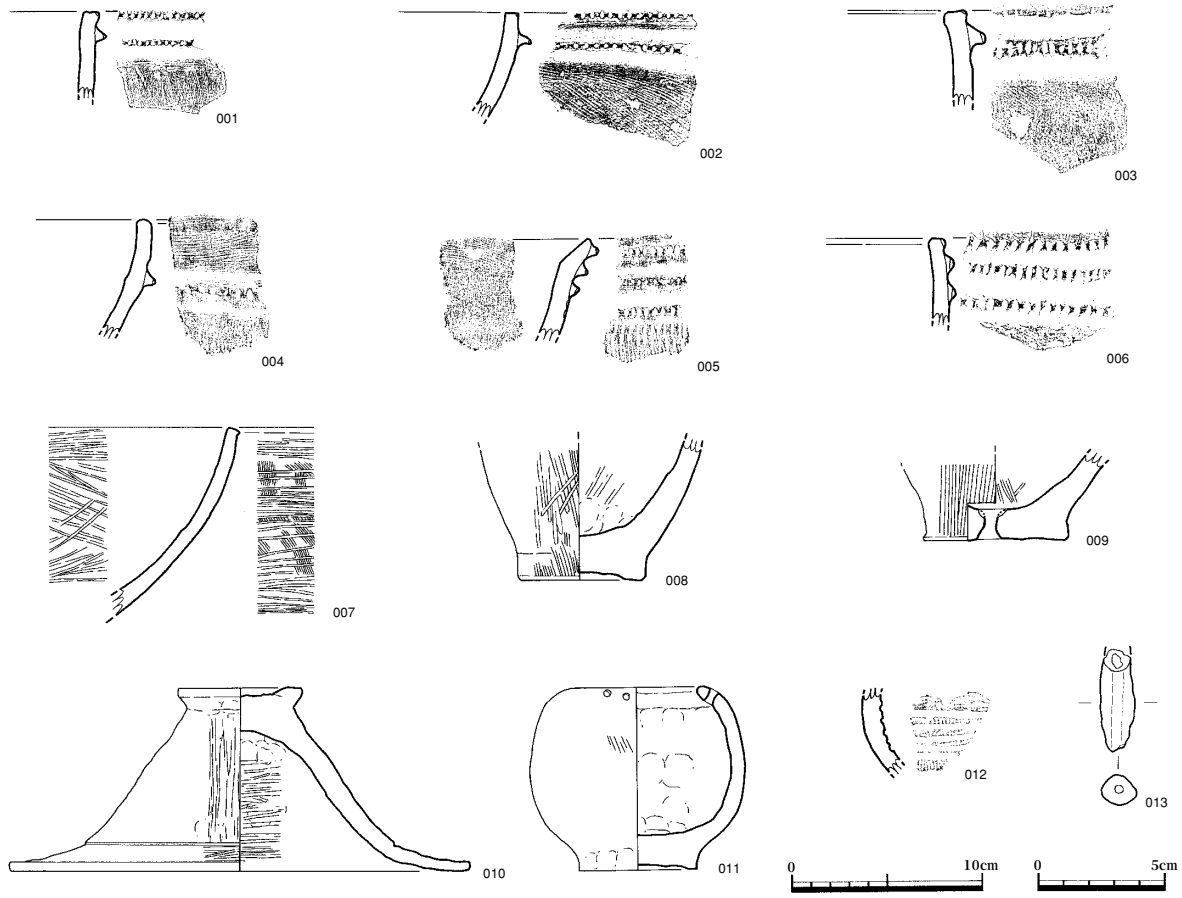
063は壺底部資料であり、外面・暗茶褐色、内面・淡黄褐色を呈している。器面調整は基本的にヘラミガキにより行われており、胎土中には石英、角閃石、長石粒を内包する。復元底径9.8㎝を測る。

第Ⅳ層出土土器（第53図）

第Ⅳ層（第９層）内から出土した土器群である。出土土器には甕、壺、鉢、蓋などがある。

001は口縁端部外面および突帯上面に刻みを施す甕口縁部資料である。外器面は茶褐色を呈し、タテ方向のハケ目により調整される。内器面は淡茶褐色を呈し、ナデによる器面調整が行われ、胎土中には長石粒を内包する。

002は内湾傾向を示す口縁部をもつ甕口縁部である。内面・淡黄灰色、外面・淡黄褐色を呈し、外器面・ナナメ方向のハケ目、内器面・ナデにより調整される。



第53図　９層（Ⅳ層）出土遺物実測図　(1/4･1/3)

003も直立する口縁部をもつ甕口縁部資料である。外面・黒色、内面・暗茶褐色を呈し、外器面はナナメ方向のハケ目、およびナデにより調整され、内器面はヘラミガキにより調整される。

004は内湾気味の口縁部をもつ甕口縁部である。口縁端部から一定程度の間隔をもった位置に刻目突帯が貼付する点を形態的特徴とする。内面・暗茶褐色、外面・暗茶黒色を呈し、外器面・ハケ目、内器面・ヘラミガキにより調整される。胎土中には石英、角閃石、長石粒を内包する。

005は外反する口縁形状の口縁端部を強いヨコナデにより整形し、下位には三条の刻目突帯を貼付する。さらに突帯の下部には二段の刺突連点文により加飾される。外器面は黒色を呈し、タテ方向のハケ目による調整が行われる。内器面は淡黄色褐色を呈し、ヨコ方向のハケ目調整とナデによる仕上げが実施される。胎土中には石英、角閃石、長石粒が認められる。外器面にはススが付着する。

006は直立する口縁部の端部外面を強いナデにより突帯風に整形し、刻みを施文する。外器面はハケ目により調整され、二条の刻目突帯が貼付される。内器面はナデおよびヘラミガキにより器面の調整が行われている。外面・暗茶黒色、内面・暗茶褐色を呈し、胎土中には長石粒を含む。器外面には炭化物の付着が認められる。

007は鉢の口縁部破片である。内外面とも茶褐色を呈し、外器面・ハケ目後ミガキ、内器面・ヘラミガキによる器面調整が行われる。胎土中には角閃石、長石粒を内包する。

008は上げ底を呈する甕の底部破片である。底径6.3㎝を測る。外器面は橙茶色を呈し、タテ方向のハケ目後ナデ後あとヘラミガキにより、内器面は黒色を呈し、ヘラミガキにより調整される。

009は甕底部破片である。底径7.3cmを測り、底部には内外面から焼成後に穿孔される。外器面はハケ目により調整され、茶褐色～黒色を呈する。内器面は淡茶褐色を呈し、ナデ後ミガキによる器面の調整が行われる。

010は蓋形土器である。復元ツマミ径6.6cm、器高9.7cm、復元口径24.4cmを測る。外面・赤褐色～淡赤褐色、内面・赤褐色～暗赤褐色を呈している。外器面・ナデ後工具ナデ後あとヘラミガキ、内器面・ヘラミガキ後ヨコナデによる器面調整が行われる。

011は無頸壺資料である。内外面とも淡黒色を呈し、胎土中には石英、角閃石粒が含まれている。復元口径6.4cm、器高9.7cm、復元胴部最大径11.3cm、復元底径6.3cmを測る。内外器面ともナデにより調整される。口縁部には２個を一単位とする穿孔が認められる。

012は壺頸部破片資料である。内外面とも橙茶褐色を呈し、外器面・ハケ目後ヘラミガキ、内器面・ヘラミガキによる器面調整が行われる。

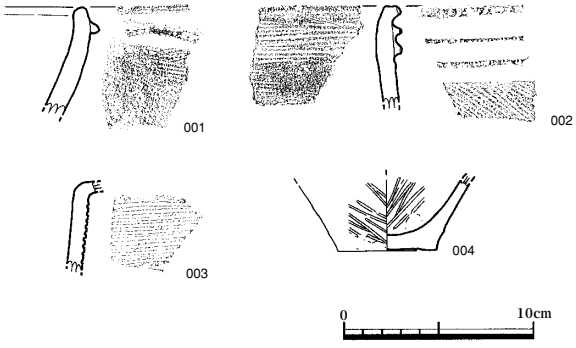
013は土錘である。片端を欠損する。内外面とも淡茶褐色を呈し、表面はナデにより調整される。現存長3.9cm、径1.4cm、現存重量4.5g を測る。

第Ⅳc 層出土土器（第54図）

第Ⅳｃ層はⅣ層内において部分的に堆積が認められるラミナ状堆積物である。出土土器には甕資料などがある。

001は口縁端部を内湾気味に整形する甕口縁部資料である。外器面に一条の刻目突帯が貼付されるが刻みは施されていない。外器面は橙茶褐色を呈し、ヨコ方向のハケ目により、内器面は暗茶褐色を呈しナデによる器面調整が行われる。胎土中には石英、角閃石、長石粒を含む。

002は外反する口縁端部をナデにより強調し、刻みを施すタイプの甕口縁部資料である。外器面には帯状の粘土紐を整形することにより二条の刻目突帯とする。内外面とも茶褐色を呈し、外器面は斜め方向のハケ目、内器面はヨコ方向のハケ目とヘラミガキにより調整される。



第54図　９層（Ⅳｃ層）出土遺物実測図　(1/4)

003は西部瀬戸内系の甕口縁部資料である。口縁端部を欠損する。内器面はヘラミガキにより平滑に仕上げられ、外器面にはナデによる器面調整の後にヘラ描きにより多条沈線文が施文される。内外面とも灰茶褐色を呈し角閃石、長石粒を含む。

004は壺底部破片である。底径5.2cmを測る。内外器面ともナデ後ヘラミガキにより調整される。

第Ⅳｃ層から出土する遺物量は多くないものの、摩滅したような状況は認められず、遺物の様相的には第Ⅲｂ層と大きな違いは看取されない。

縄文土器

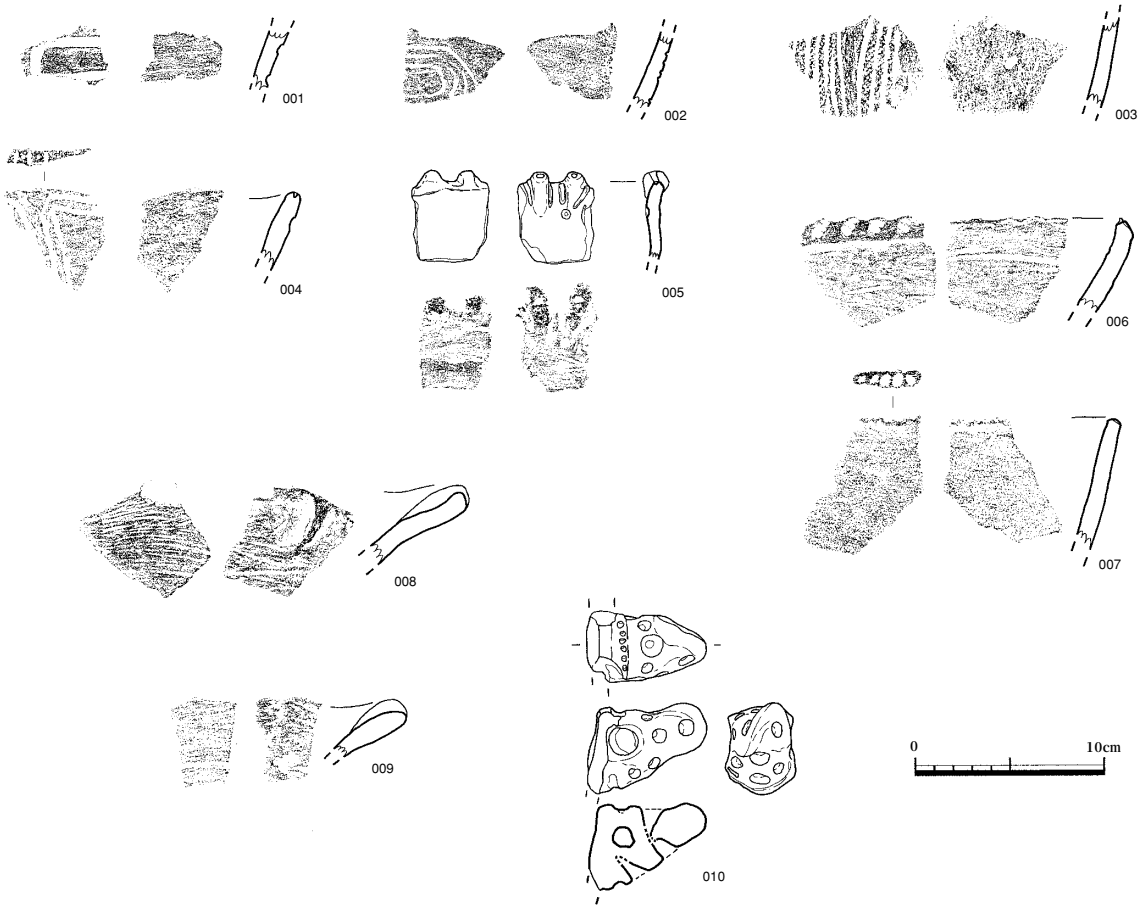
本項においては、遺跡から出土した縄文土器について記述する。出土した縄文土器は、縄文時代後期前葉のものから晩期のものを含み、時系列上においてある程度の時間幅を有する。出土状態は弥生時代前期末以降の旧河道の埋土内に弥生時代遺物と混在する状況で出土する。

出土遺物（第55～72図）

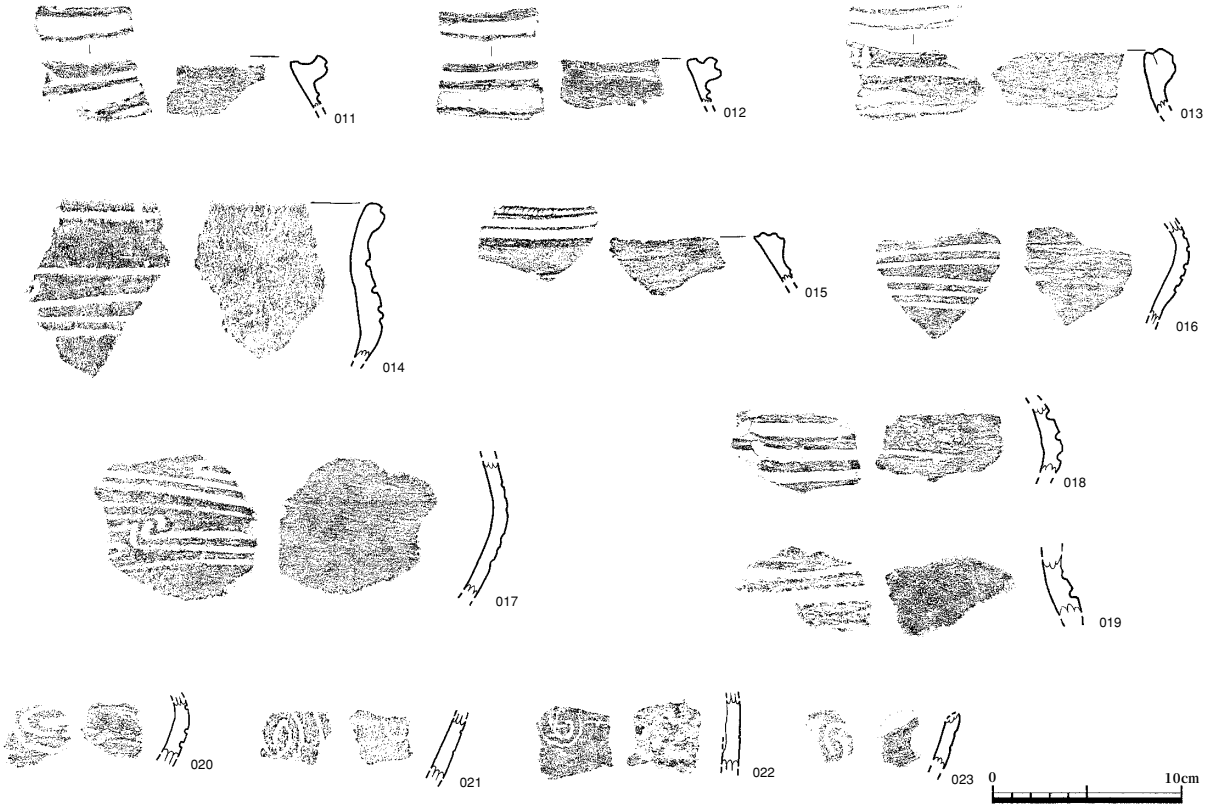
001～010は縄文時代後期前葉のもの、ないしはその可能性のあるものである。

001～003は縄文の施されているものである。**001**は外傾する口縁部（口頸部）片である。口縁端部は残されていないが、外面には方形区画文を窺うことができ、宿毛式土器と考えられる。**002・003**は胴部片である。**002**は器面が荒れていることもあり明瞭ではないが、本来は３本沈線を意識して文様を描いたものと考えられる。文様帯の中には縄文が施されていたと見て取れる。底部近くのものであろうか。**003**は４本以上の沈線により縄文帯を形成させている。**002**は縄文帯が３本沈線であること、**003**は縄の目や沈線、その後の処理や最後のミガキによる器面調整の雰囲気などから、ともに福田**K**２式土器、ないしはそれを背景に持つものと考えて大過ないと思われる。

004～**009**は口縁部片である。**004**は沈線文の土器である。口縁は、やや外傾し波状を呈している。文様は２本沈線により描かれている。波頂部の口唇部上面には、刻み目、そしてその間に刺突といった文様が施されている。**005**は口縁部に突起を有するものである。口唇部から口縁内面にかけて粘土



第55図　縄文土器出土遺物実測図①　(1/4)



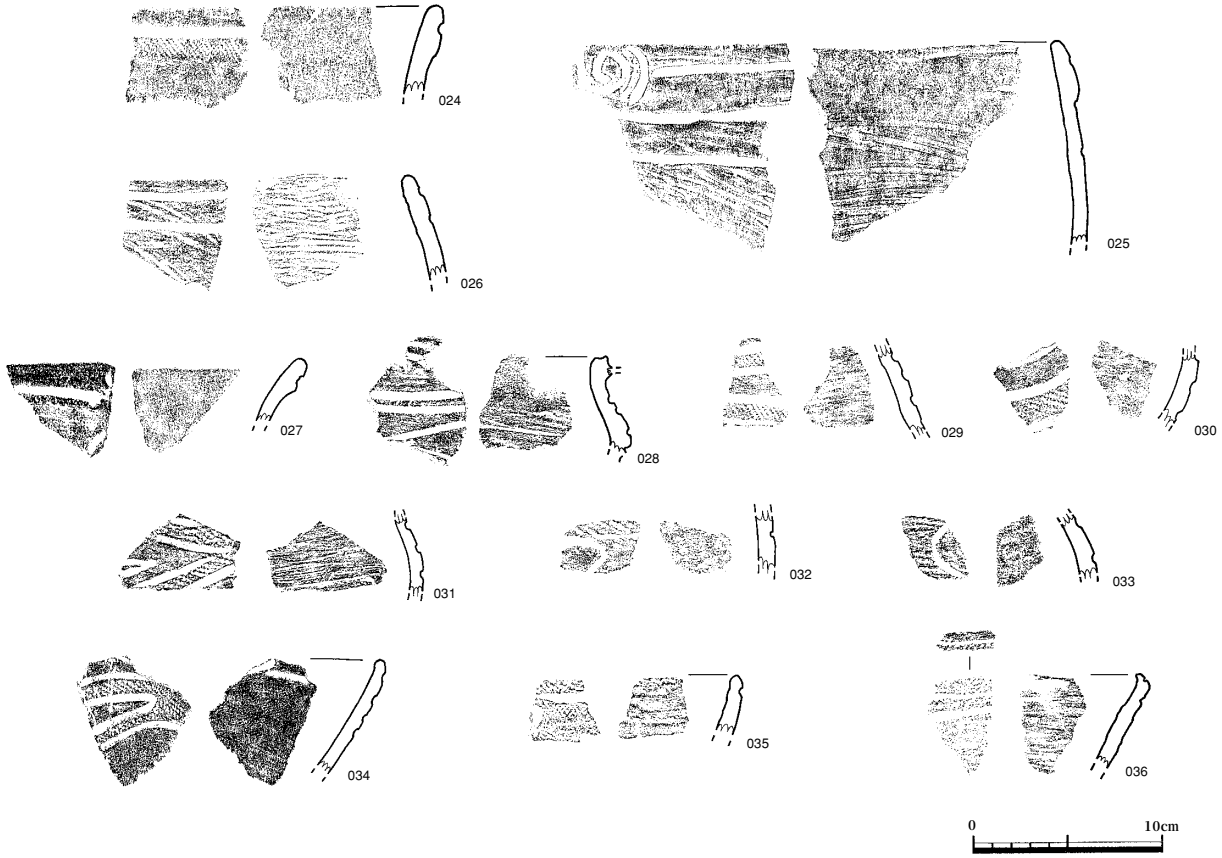
第56図　縄文土器出土遺物実測図②　(1/4)

を貼り付けることにより２つの突起を作り、その上部にはそれぞれ一つずつ刺突が見られる。なお、内面から見て右側の突起には、その左右に沈線、そして下に刺突が施されており、あたかも突起を強調するかのような行為が為されている。**006**は内湾気味に外傾する口縁部片である。口唇部外面側には、巻貝押圧による斜め刻み目が施されている。**007**には口唇部上面に刻み目が施されている。**008**は、器形的に頸部から大きく外傾する口縁部となるものとみられる。口縁は波状を呈しており、内面（上面）の波頂部下にはいわゆる耳状突起がみられる。**009**も**008**と同様の器形になるものと思われる。ただし、口縁内面の突起は、粘土を縦に貼り付けたままの形状である。**010**は把手の破片である。口縁部は直立気味、ないしはやや内傾するものと思われる。口縁端部から粘土を取り付け、横方向に孔を穿つことにより把手と為している。口縁部と把手部は沈線的なもので区画しており、その中にやや押し引き的に刺突連点が施されている。把手端部は粘土を軽く捻って形作っている。把手には全部で13個の刺突があり、そのうち上部からの一つと下部からの一つが、その奥で繋がってしまっている。時期的には、これを双耳壺の把手部と考え、後期前葉に置くことも出来ようが、把手の取り付け位置や穿孔方向(方法)等、相違点は目立つ。これら相違点は、後期中葉期のものとの類似点でもあるが、その時期にこういった文様を施す把手は今のところ見当たらない。

011〜036は後期中葉のもののうち、北久根山式期以前のものを一括している。

011〜023は鐘崎式土器とその胴部片であろうとみられるものである。**011〜015**は口縁部の残る資料である。**011・013**は口縁部文様集約部に近いものである。**015**は口縁部上面に２本の沈線を廻らせ、その内側に短沈線を連続して施している。器形的には口縁部からそのまま外側に膨らむ胴部に至るというものである。本遺物包含層出土の鐘崎式の中では新しい様相を持つものである。**016〜023**は胴部

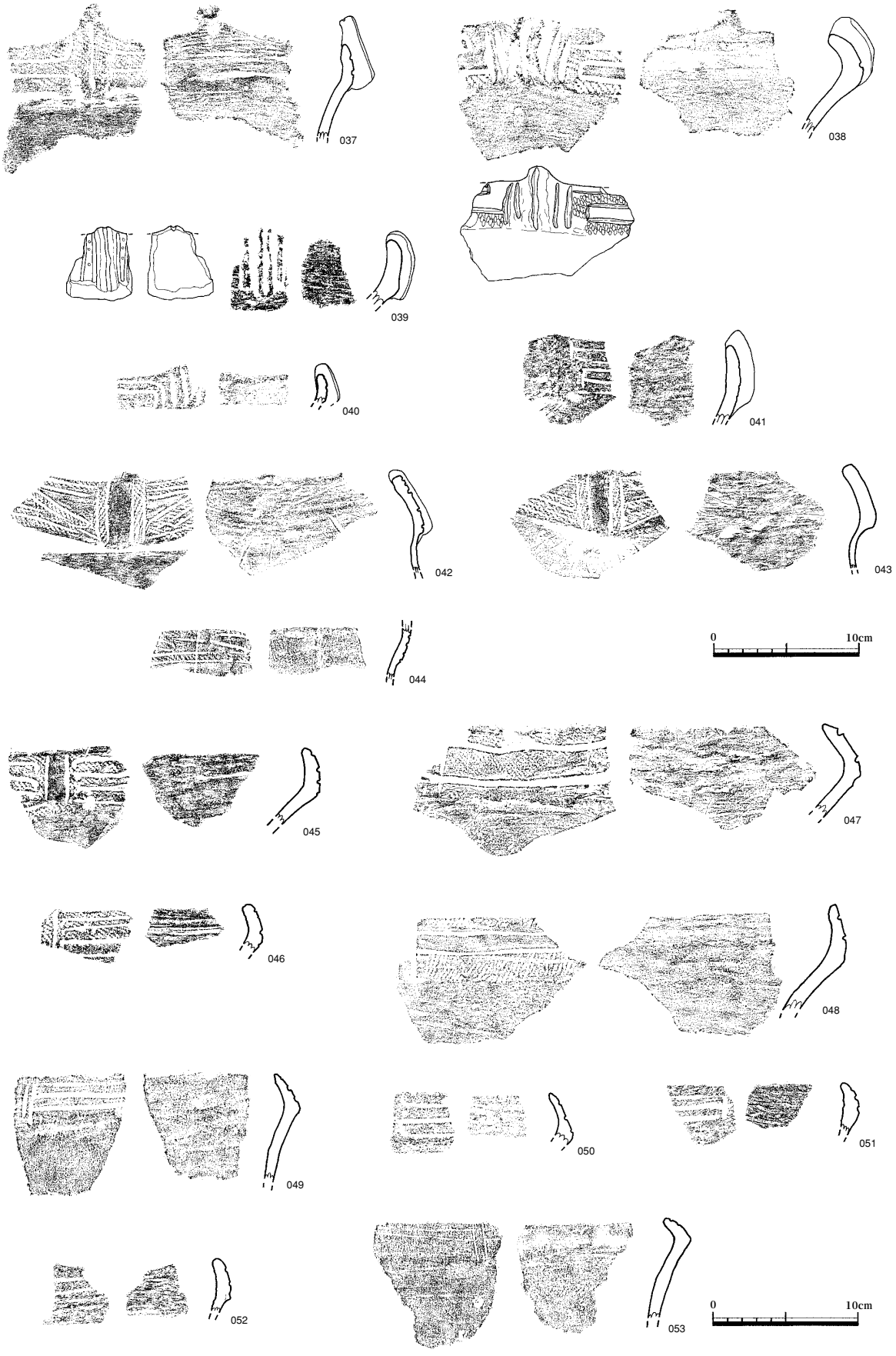
片である。**016**は磨消縄文である。沈線施文時の粘土土手等、文様施文後の処理が丁寧であるなど、これらの中では古い属性を有している。**020〜023**は入組文や渦巻文の見られるものである。胴部文様中の下位にあたる部分であろう。**018・019**の沈線は他のものに比べ、太く深い。鐘崎式の中では新しい一群であろうが、このような特徴は後述の小池原上層式の新しい段階にも見られるものであるが、口縁部が残っていないため、特定は出来ない。**024〜036**は縁帯文土器・小池原上層式土器とそれに伴うと考えられるもの、そしてその可能性のあるものである。**024**は縁帯文土器の深鉢の口縁部片である。口縁部の文様は沈線下に縄文を施し、その上は磨消部（無文部）となっている。このような文様構成は小池原上層式に見られるものである。**025**は内傾気味の口縁部からそのまま胴部へと至るボウル型を呈する鉢である。口縁部は外面に肥厚させ、一条の沈線を横走し、文様集約部には同心円文が施されている。口縁部と胴部の境に１本、その２㎝ぐらい下に１本の沈線がみられる。**026**は口縁部に二条の横走沈線が施されているが、粘土による肥厚などは見られない。器形的には**025**と同様と思われる。**027〜030・034**は小池原上層式土器である。**027**は波頂部（文様集約部）近くのものであり、頸部には鉤手文の一部分を窺うことが出来る。縄文は施されていない。なお、小池原上層式の大きな特徴の一つである口唇部内面の段は無い。028にも縄の目は認められない。本来縄文部（帯）であるところには何らかの文様、例えば二枚貝腹縁による擬似縄文が施されているようにも見て取れるが、不明瞭であり断定できない。**029・030**はいわゆる磨消縄文であり、それぞれ胴部上半・下半の破片である。**034**は頸部が無く、外傾する口縁部からそのまま胴部へと至る鉢形土器である。波頂部近くのものであろうか、口唇の内外端部に沈線による文様の一端が窺われる。**031〜033**は有文の胴部片であ



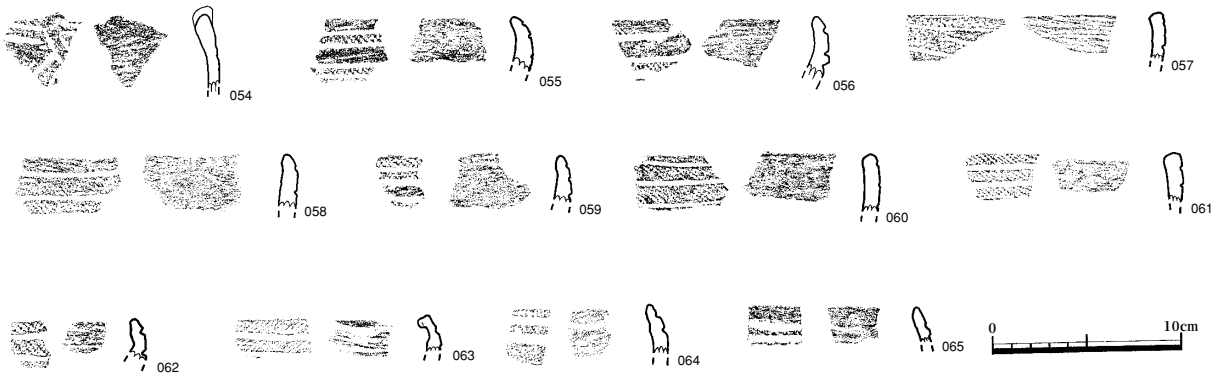
第57図　縄文土器出土遺物実測図③　(1/4)

る。縁帯文、ないしは小池原上層式に伴うものではないかと思われるものである。**031・033**の沈線は、小池原上層式の凹線的な沈線に類似している。**035・036**は**034**と同様の器形となるものである。**035**の口縁部は縄文地に沈線を施している。縁帯文土器に伴うものであろうか。**036**は口縁部外面の二条の沈線の他に、口唇上面に沈線を一条廻らせている。また、口唇部内面に段を有している。

037〜180は、本遺物包含層出土資料の中で主体を占める、いわゆる北久根山式期のもの、ないしはその可能性があるもののうち有文土器を一括している。**037〜065**は深鉢およびその可能性が高い口縁部片である。**037〜053**は横方向に文様が展開する口縁部文様帯の中に、縦展開の文様施文により文様集約部（波頂部、または波底部）を形成させているもの、ないしはそれを窺うことが出来るものである。**037〜043**は粘土の貼り付けなどにより、文様集約部を縦位に肥厚させているものである。このうち**037〜040**のそれの中心には縦方向に沈線が１本引かれている。器形的には、外傾ないしはやや外反する頸部から、内傾ないしは内湾気味に屈曲して口縁部文様帯へと至るというものである。**037**の口縁部文様は縄文地に沈線を施したものであり、肥厚させた文様集約部の上部が柱頭状に突出し、その頂部には刺突が施されている。**038・042〜044**の口縁部文様帯は明確ではないが磨消縄文となっている。**039〜041**は器面が摩滅などで荒れているため、縄文が施されていたかどうか不明瞭である。**039**の肥厚させた文様集約部の両外側にある縦位の沈線により区画された空間には刺突文が施されている。なお、**041**は口縁部からそのまま胴部へ至る鉢形土器となる可能性もある。**042〜044**は同一個体である。何れも赤色顔料の付着が見られる。**045〜053**は器形等前述のものと同様であるが、文様集約部を肥厚等強調させていないものである。口縁部文様帯は縄文地に沈線を施したものが多く、明瞭な磨消縄文、つまり磨消部（無文部）を持つものは**048**ぐらいであろう。なお、**045**は文様集約部のみ無文となっている。他のものは、その部分の残りが悪かったり、器面が荒れていたりなど判断し難いものも多い。なお、**053**は口縁部が短く、頸部との境の屈曲の度合いもきつい。沈線も細く浅いなど、前述までの他の資料との相違が認められる。**054**には口唇部に山形に近い突起が見られる。口縁部の文様は沈線によるものである。**055〜065**は口縁部に文様を有するものである。器形的には内湾気味になるものがほとんどである。**055〜059**は口縁部文様帯が縄文部と無文部により構成されているものである。**055・056**はいわゆる磨消縄文である。**060〜064**は縄文地に数条の横走沈線を施したものである。**065**は器面が荒れているため、縄文の有無は分からない。**066〜086**は有文の深鉢、ないし鉢の頸・胴部片である。そのほとんどは胴部のみの破片であり、頸部から繋がっているものは少ない。**066**はいわゆる磨消縄文により文様の描かれているものである。文様の中心となると思われる位置には、同心円文（渦文）が配されている。**067〜070**は縄文部と無文部（磨消部）により文様が構成されているものである。**071**も同様のものと思われるが、器面が荒れているため判断し難い。なお、**070**の文様が曲線で描かれているのに対し、**067〜069・071**はいわゆる逆三角形モチーフを意図しているように思われる。**072〜080**は縄文地に沈線により胴部文様を描くものである。**072〜075・077**は頸部から残存しているものである。その何れもが、頸部との境に沈線や明瞭な段を施すことにより、部位を区切っている。**078**は胴部文様の下位辺りから、胴部下半の無文部までのものである。**072・073**は曲線的に、**074**は直線で文様を描いているが、何れも逆三角形モチーフを意図しているとみることが出来よう。**075・076**は入組文・渦文（渦巻文）が主文となるようである。**077**の胴部文様は器面が荒れているため明瞭ではない。直線によって描かれた文様は逆三角形モチーフにも見て取れる。その間には崩れた

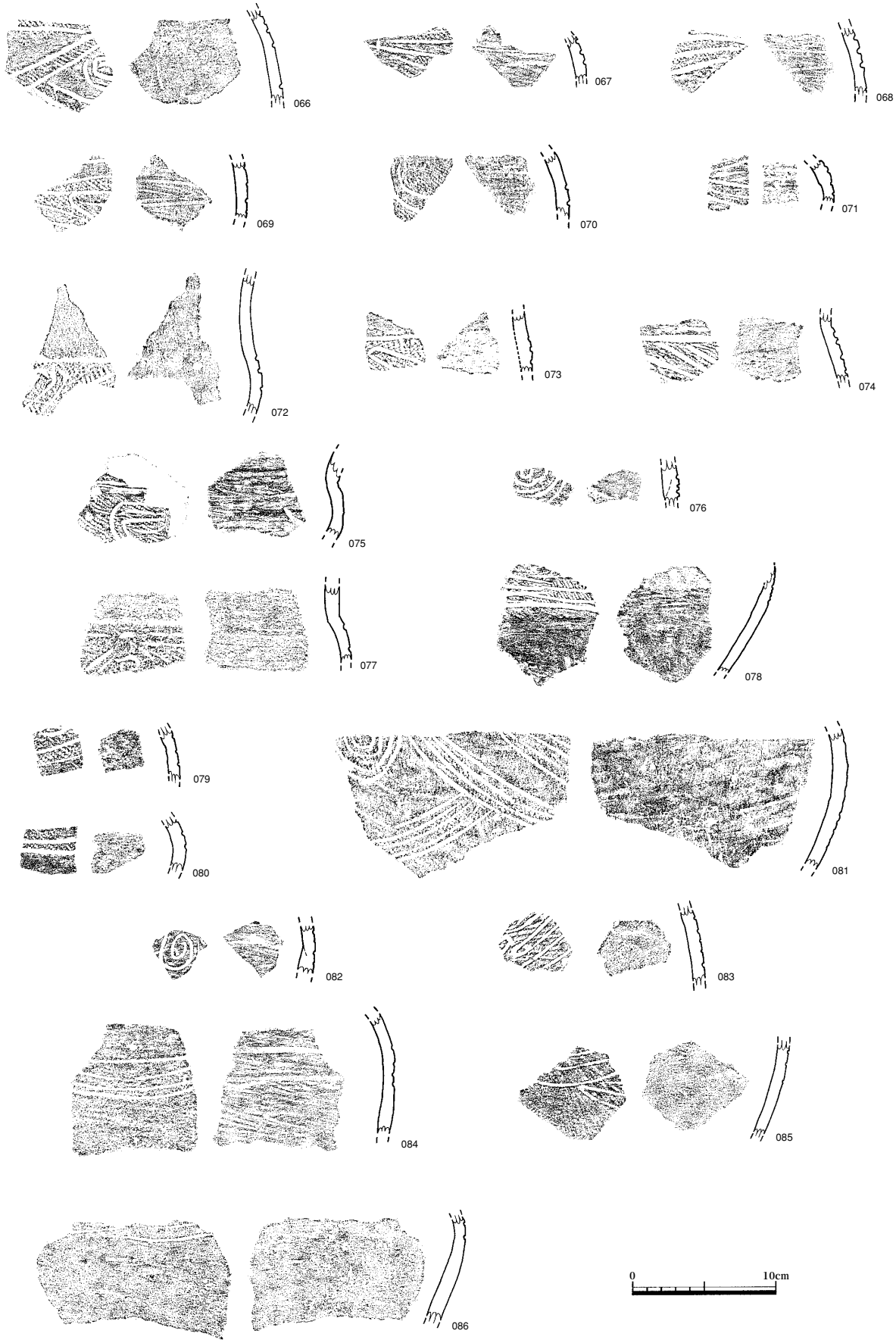


第58図　縄文土器出土遺物実測図④　(1/4)

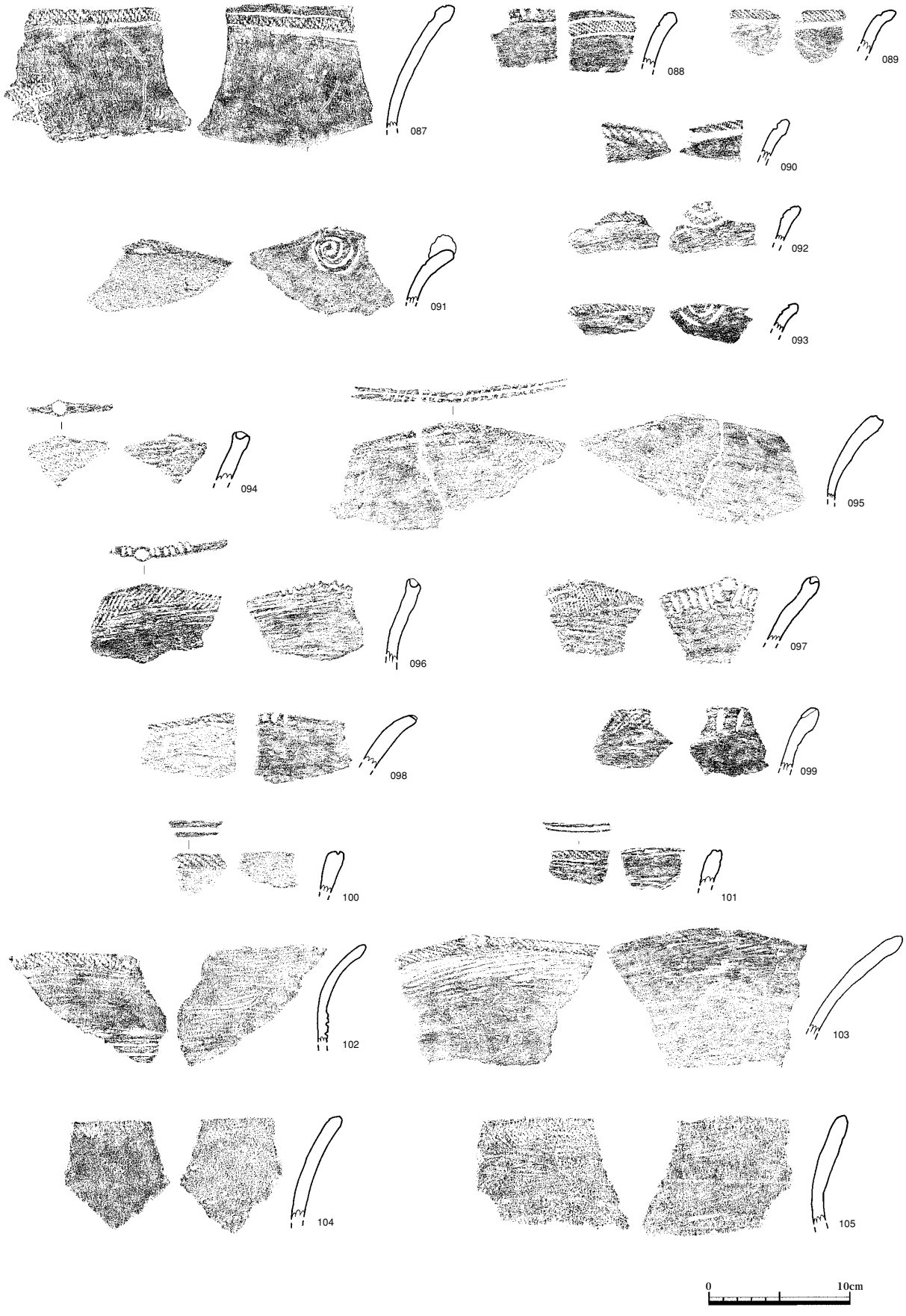


第59図　縄文土器出土遺物実測図⑤　(1/4)

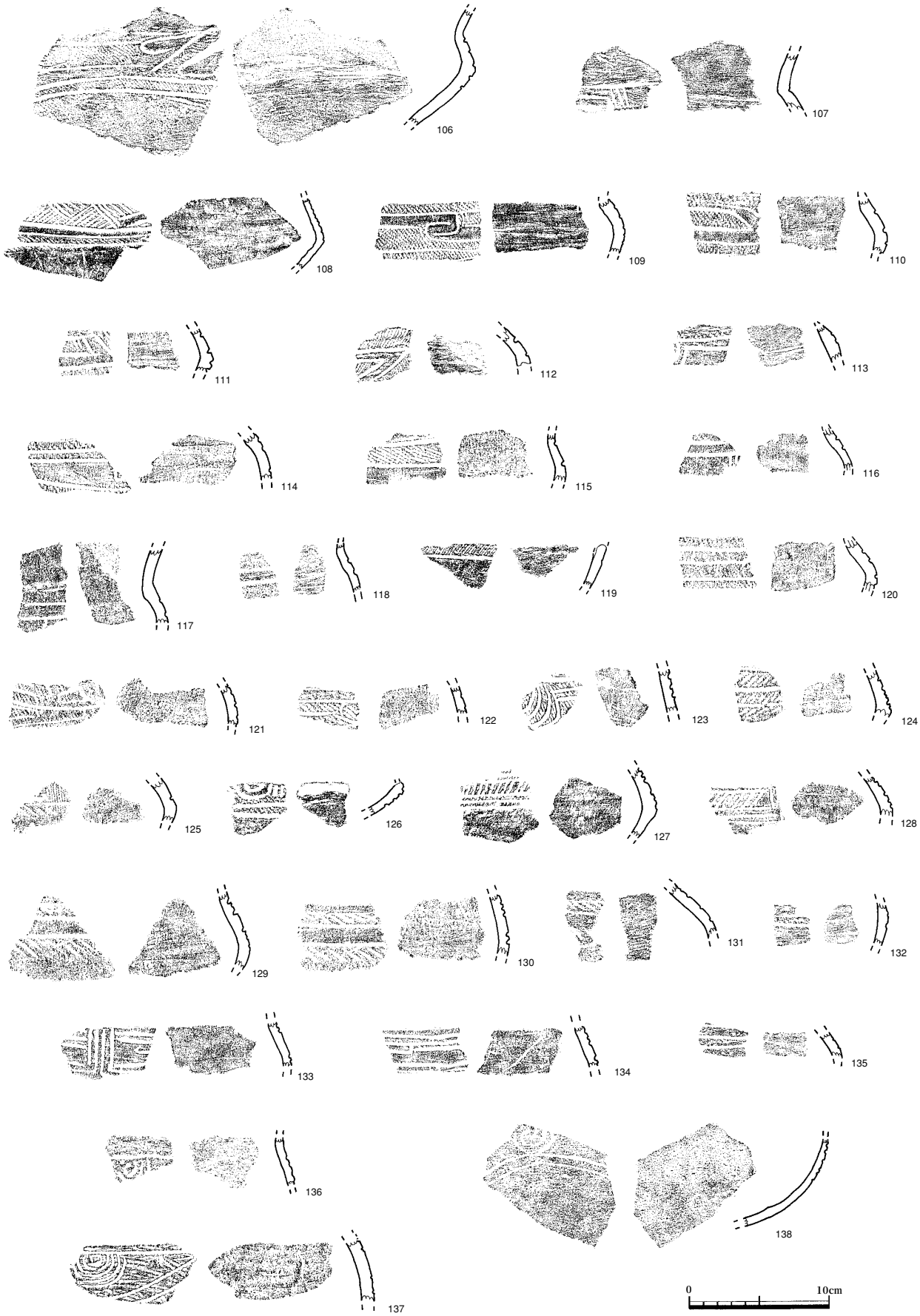
円文、もしくは入組文のようなものが見られる。時期的には、北久根山式期よりも新しい様相をもつものとも理解出来よう。**078〜080**は横走沈線によるものである。**081〜086**は沈線のみで文様を施しているものである。**081**は４本沈線により文様が描かれている。主文と考えられる部分は、同心円文になっているように見て取れる。文様の構成は、磨消縄文である**066**と類似している。**082**は渦巻文である。**083**には横走沈線とヘアピンカーブ状沈線文が見られる。**084〜086**は胴部文様の下位辺りから、胴部下半の無文部までのものである。文様は、緩く弧を描くように沈線を横走させるものである。なお、**069**と**083**は土器片加工品とみられる。**087〜138**は、よく張った胴部から頸部がくびれ外反しながら大きく開く口縁部に繋がるタイプの鉢形土器とみられるものを一括している。**087〜105**は有文の口縁部片であり、口縁部外面には基本的に縄文が施されている。中には内外面ともに文様を有しているものも多く見られる。**087・089・090・092・093・097・099**は口縁内外面に文様を有するものである。**088・091**もその可能性はあるが、器面が荒れているため、外面の縄文の有無が不明瞭である。**087〜090**の口縁部内面には縄文及び一条、ないし二条の沈線が施されている。なお、**087**には頸部文様が見られる。**091〜093**の内面には渦巻文・同心円文が施されている。**091**のその部分は、粘土を貼り付け、大きな突起を作り出し強調されている。それに比べると**093**のそれは沈線のみの簡単な施文によるものである。**094〜097**は波頂部の口唇上部に刺突を施したものである。**095**の口唇上面には一条の沈線が廻り、刺突文を中心にその両側に刻み目が施されている。**096・097**も刺突文を中心にその両側に刻み目を施している。**097**のそれは口縁部内面までかかっており、短沈線的になっている。**098**は波頂部付近の口唇部に刻み目が見られ、**099**の口縁内面には短沈線が見られる。**100・101**は口唇上面に一条の沈線が廻っている。**102〜105**は口縁外面のみに縄文を有するものである。**102**は口縁部から胴部文様帯の上部まで残存しているものである。胴部文様には横走沈線を窺うことが出来る。**106〜138**は頸部から胴部の破片である。**106〜128**は縄文の施されているものである。縄文の施文構成に至っては、**108・110・112・115**などのように明確に磨消縄文となるものも有れば、**121**や**123**などのように縄文地に沈線文を描くもの、さらにはその一部に**109・114・120**などのように磨消部（無文部）を有しているものなどが見られる。文様は直線文・曲線文によって描かれていると見て取れるものが多い。**108**には幾何学文が見られる。**109**は無文帯を入り組ませた文様となっている。なお、その入組部分の外側には刺突連点を施している。**123・126**には渦文ないしは同心円文と思われるものが見られ、**124〜128**には連続する短沈線を窺うことが出来る。胴部の器形的には、**106**のように緩く屈曲するもの、



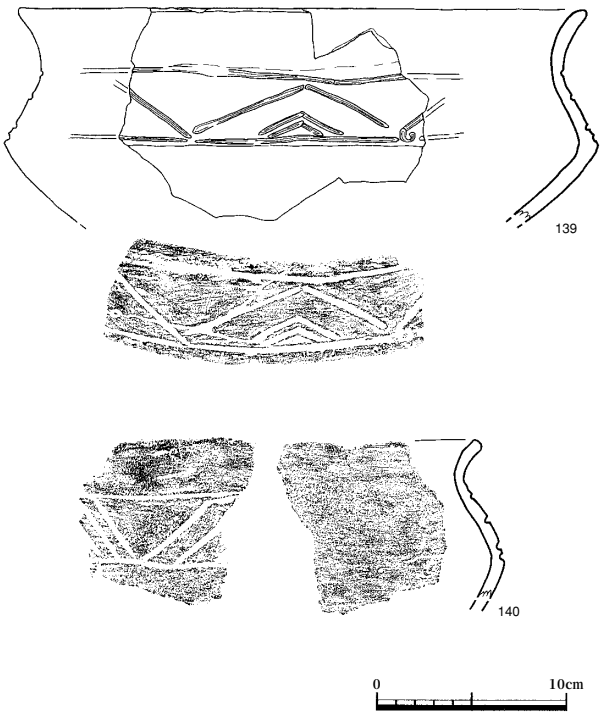
第60図　縄文土器出土遺物実測図⑥　(1/4)



第61図　縄文土器出土遺物実測図⑦　(1/4)

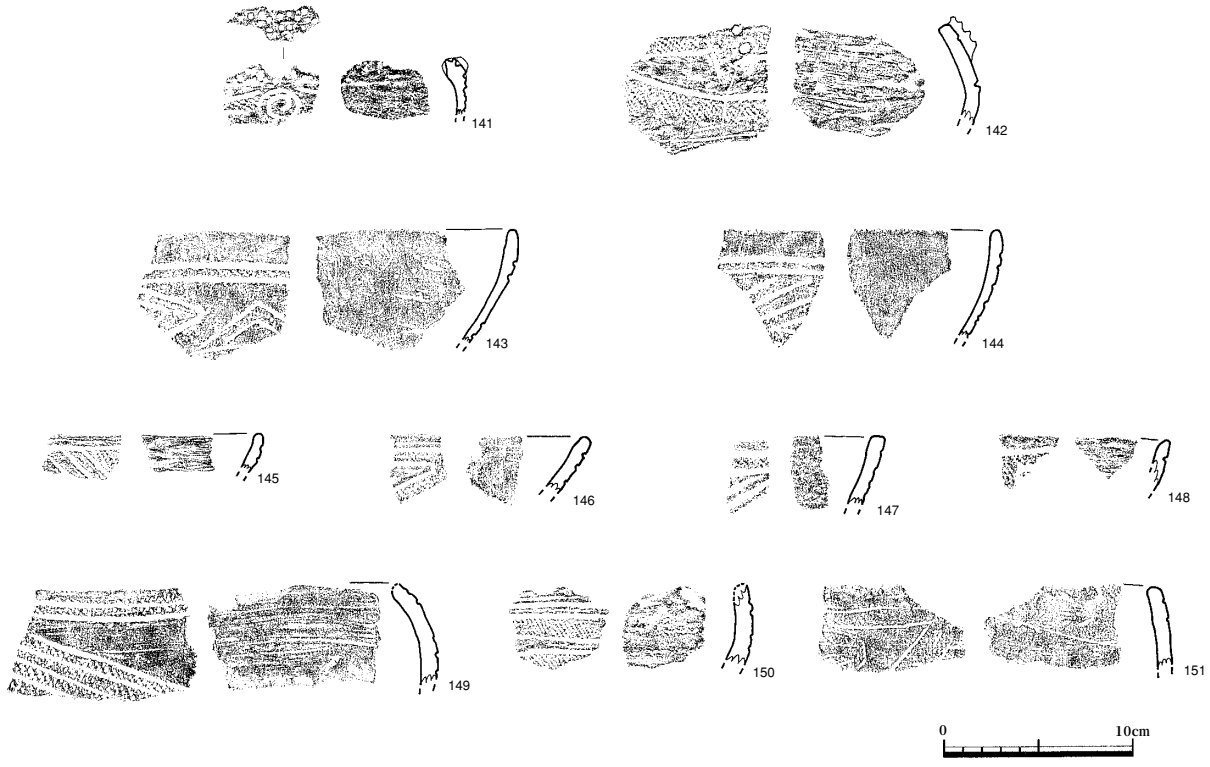


第62図　縄文土器出土遺物実測図⑧　(1/4)



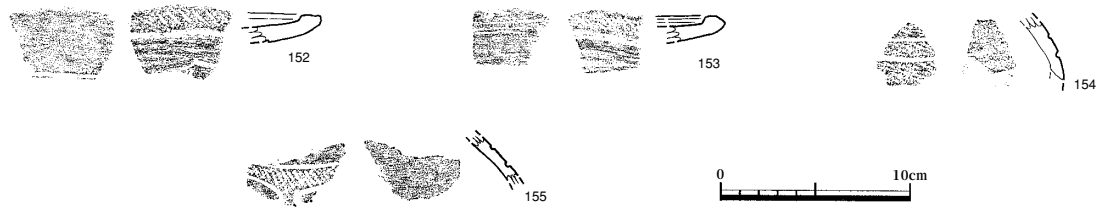
第63図　縄文土器出土遺物実測図⑨　(1/4)

109のように丸く脹らみを持つものがほとんどであるが、**108**のように算盤玉状とまではいかないものの、胴の最大部がしっかりと屈曲するものも見られる。**129〜138**は胴部文様帯が沈線のみによるものである。**129〜132**には連続する斜め短沈線が見られる。**133〜135**は横走沈線を基本とするものである。**136・137**は主文に渦文(同心円文)を持つものである。**137**の文様構成は逆三角形モチーフとなる。**138**は胴部下半のものである。入り組み的となっている文様が見られる。**139・140**は胴部にのみ沈線文の見られる鉢形土器である。**139**は外反する口縁に算盤玉状の胴部を持つものである。胴部文様は三角形（逆三角形）モチーフとなる。**140**は短く外反する口縁に緩く屈曲する胴部を持つもので、胴部文様はやはり三角形（逆三角形）モチーフとなる。**141・142**は前時代の鐘崎式土器の雰囲気を持つもので、頸部を



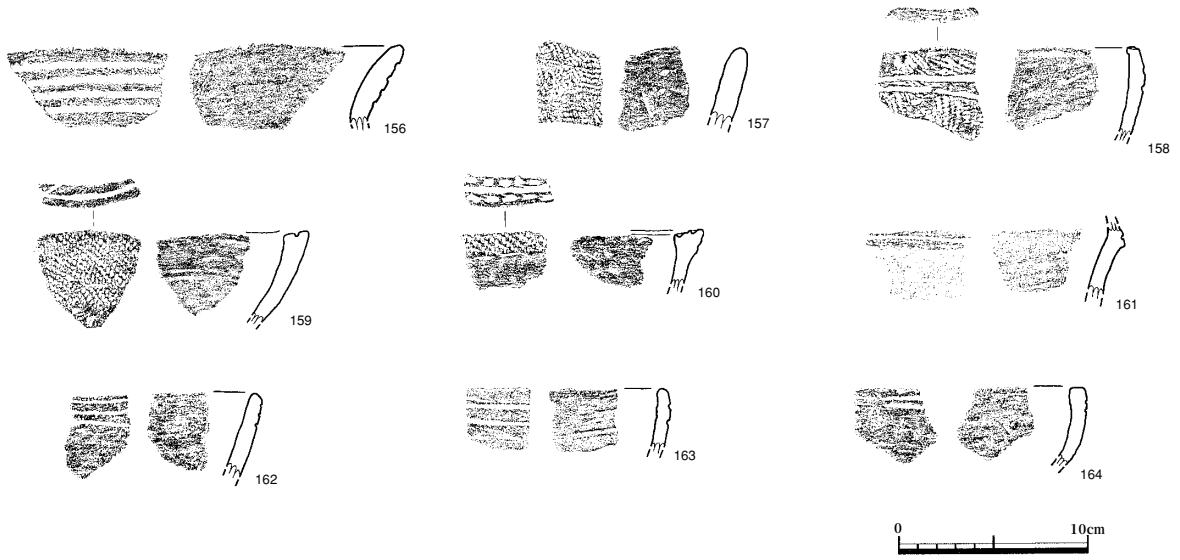
第64図　縄文土器出土遺物実測図⑩　(1/4)

持たない鉢形土器となる。**141**は口縁外側端部から上面にかけて刺突文を施すものである。胴部には縄文も見られ、文様集約部は渦巻文となる。**142**は丸く脹らんだ胴部から内湾気味に口縁部へと至る



第65図　縄文土器出土遺物実測図⑪　(1/4)

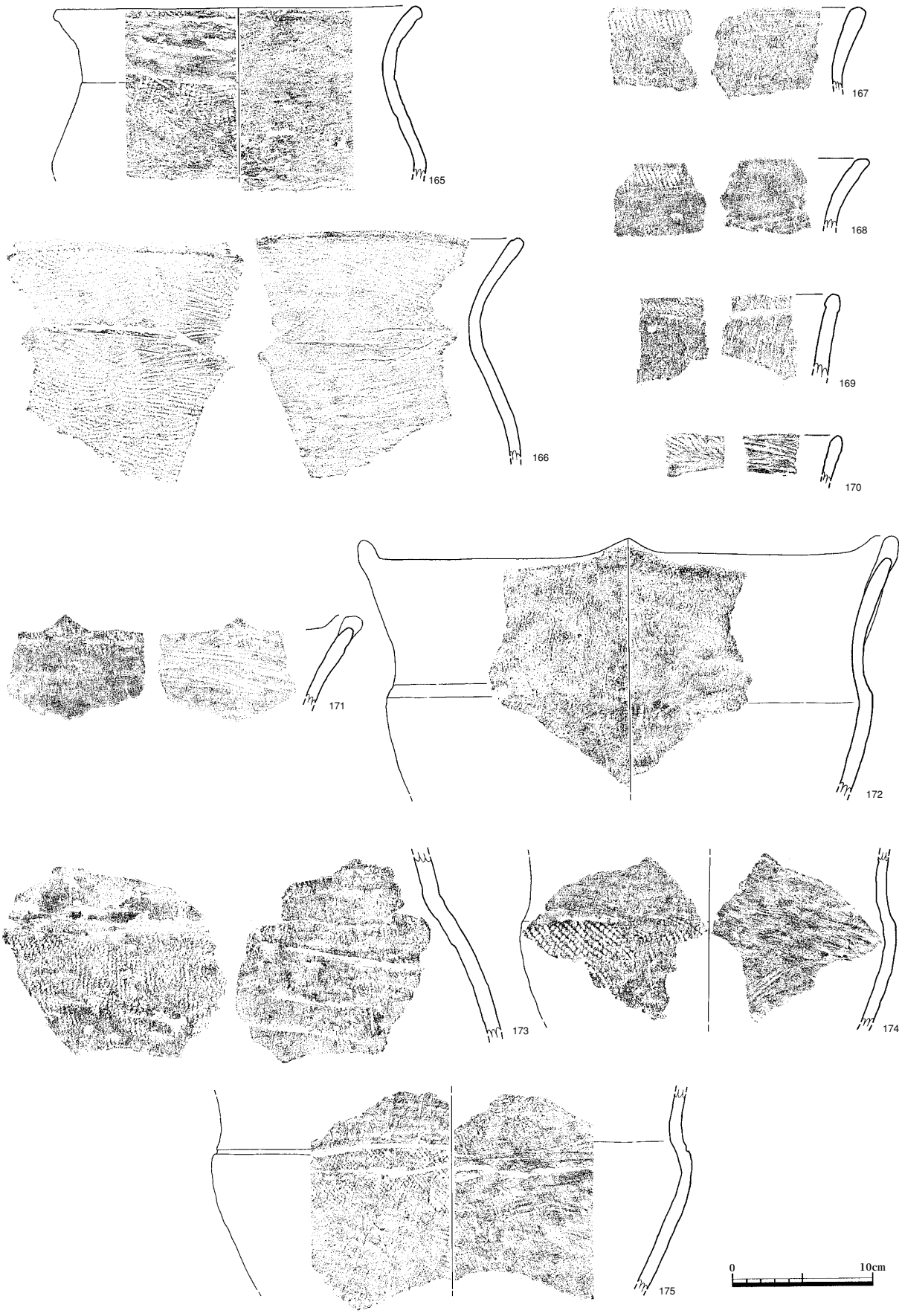
椀形の鉢である。胴部文様には逆三角形モチーフが窺え、口縁部の文様集約部にあたる位置には縦に２つの突起(コブ)を並べ、それには刺突がなされている。**143〜148**は頸部が無く、やや丸みを持って外傾する口縁部からそのまま胴部へと至る鉢形土器である。文様は基本的に磨消縄文となる。**149〜151**は内湾気味となる口縁部からやや丸く膨らむ胴部へと至る椀形の鉢である。**149**は複数の沈線による文様帯の中に縄文の見られるものである。**150**はやや粗いが磨消縄文となっている。**151**は浅くシャープな沈線、粗く施された縄文など文様自体に稚拙の感がある。**152・153**は皿形の器形を呈する口縁部片である。若干肥厚させた口縁部上面（内面）には縄文を施している。**152**の外面（下面）には沈線による文様が有ったことを窺うことが出来る。本来、脚部を伴っていた台付皿であったと考えられる。**154**はその器形、沈線の施文角度などから脚部片と考えられるものである。内面は粘土の接着面であったと思われる。本来は**152・153**などの皿部と接続し台付皿の脚部であったと考えることも出来よう。文様は縄文地に横走沈線を施すものである。**155**は磨消縄文となる土器片であり、器形的にはかなり内傾すると考えられる。注口土器の肩部にあたる部分ではなかろうか。**156**は外面に四条の横走沈線の施された口縁部片である。器面が荒れており、縄文等の文様を窺うことは出来ない。しかし、所々に二枚貝を押しつけたような擬似縄文的な痕跡や幅の狭い短沈線的な刻み目のようなものも見られるが、はっきりとしたことは分からない。**157**は波状を呈する口縁部片である。外面には縄文が施されている。**158**はやや内湾気味となる口縁部片である。外面には粗く縄文を施し、沈線により文様を描いている。口唇部には幅の狭い斜め刻み目を施している部分があり、口唇内面は段を持つ。時期的にははっきりとはしない。**159**は胴部から丸みを持って立ち上がる口縁部片である。口唇上面



第66図　縄文土器出土遺物実測図⑫　(1/4)

を文様帯とし、一条の沈線を廻らせ、その内側にも沈線による文様が施されている。外面には縄文が施されている。**160**は口唇上面を拡張し文様帯とする口縁部片である。口唇部には一条の沈線を廻らせ、その内外両側に短沈線による連点を施している。頸部は無文であり、口縁外面には縄文を施している。**161**は口唇部の欠落する口縁部片である。器面はかなり荒れており、口縁帯に一条の沈線を窺うことが出来る以外は不明瞭である。**162〜164**は口縁部に数条の横走沈線の施された鉢形土器である。**162**には三条の沈線が見られる。縄の目の痕跡を窺うことが出来るがはっきりとはしない。**163・164**には二条の沈線が見られる。**164**のそれは途中で途切れるものである。また、器形的には他の二点と比べボウル状を呈していたと思われる。以上の**156〜164**は類例に乏しく、北久根山式期に置くのには多少躊躇を覚えるものも中にはある。**165〜180**は口縁部と胴部に縄文を施すもの、いわゆる頸部無文の縄文地鉢を中心に一括している。**165〜175**は深鉢、ないしは大振りの鉢形土器と見られるものである。**165・166**は共に胴部の肩の張りが無く、撫で肩を呈するものである。**165**には口唇外面端部に縄文が施されているのに対し、**166**のそれは口縁外面に幅広く施されている。また、**165**の頸部と胴部の境には、ナデ調整時に明瞭な段を形成させている。**167〜170**は口縁部のみの破片であり、何れも外傾するものである。**169**は他のものと違い、口縁外面から内面にかけて縄文が施されている。内面はケズリ状に調整を行い、口縁部縄文帯を浮き出している。**171・172**には口縁部に山形状の突起が見られる。**171**は口縁のみの破片であり、口縁外面に縄文が見られる。**172**は頸部には明瞭な屈曲部を持たず、胴部から外反気味になり、外傾する口縁部へと至る、なだらかな器形の深鉢である。ただし頸部と胴部の境には明瞭な段が作られている。なお、胴部の縄文は辛うじて認められるものの、口縁外面のそれは器面が荒れているためか不明瞭である。**173〜175**は頸部から胴部にかけての破片である。**174**と**175**は胴部縄文帯の幅が狭い。また、**175**には頸部と胴部の境に一条の沈線を廻らせている。なお、**173**の内面には粘土の繋ぎ目の痕跡が明瞭に残っており、当時の土器製作の際の粘土帯の幅やその巻き上げの角度などを考える上で参考になると思われる。**176・177**は緩く膨らむ胴部からやや外反する口縁部へと至る鉢形土器である。**176**の頸部と胴部の境には段を有している。**178・179**は頸部を持たず、内湾気味の口縁部から丸く胴部に至る椀形を呈する鉢である。**179**は口縁が波状を呈すと見られる。口縁外面の縄文帯の下には一条の沈線を廻らせている。**180**は底部まで残されている浅鉢である。底部から外に低く大きく広がり、頸部でやや立ち上がり、すぐ外反して口縁部へと至る器形となる。底部は少々凹レンズ状の軽い上げ底となっている。口縁部は軽い波状を呈しており、波頂部の内面（上面）にはノの字状の突起が付けられている。内面の調整は非常に丁寧である。これらのような頸部無文の縄文地鉢は東九州において後期中葉の小池原上層式・鐘崎式・北久根山式期の各時期においてセットを為す一器種として見られるものである。**165〜180**のほとんどは、その器形などから北久根山式期のものと見て大過ないと思われるが、前述の**011〜036**に本来伴っていたものも含まれているかもしれない。が、何れにしても断定は出来ない。

181〜186は無文土器である。**181**は口縁部から胴部にかけてはなだらかであり、目立った屈曲は無い。**182**は頸部の屈曲部から大きく外側にカーブし、外傾する口縁部へと至るものである。**183**は穿孔が見られる。位置的に補修孔であろうか。**184**は頸部から胴部にかけての破片である。胴部には巻貝擬似縄文のような痕跡が認められるが、器面調整具である巻貝をたまたま転がしてしまったという感じであることから、擬似縄文を胴部に施そうとしたわけではないと思われる。**185**はやや膨らむ胴部



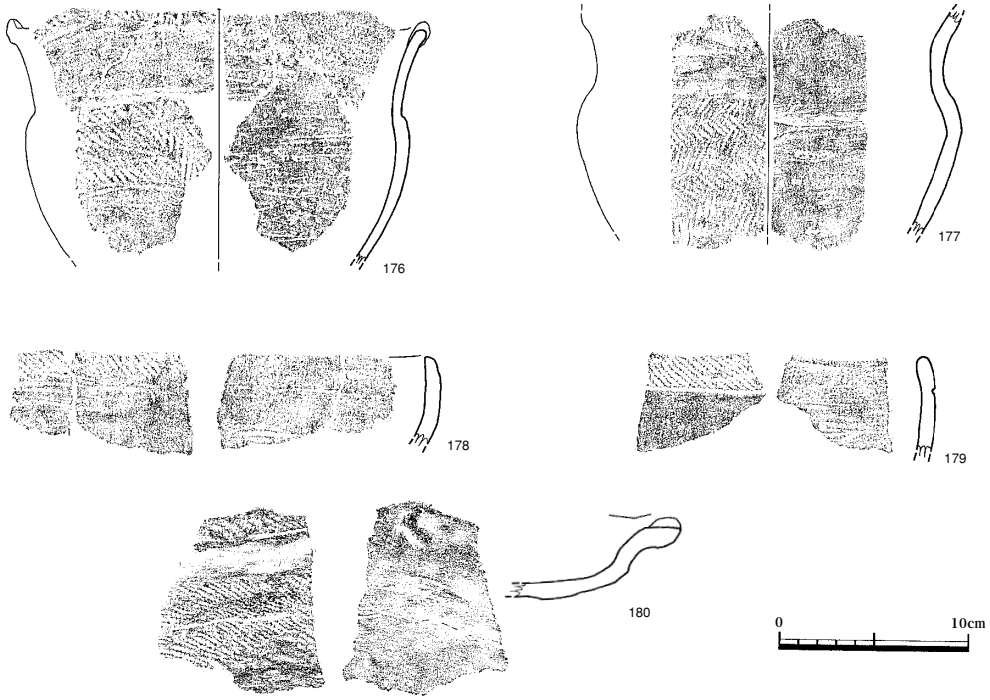
第67図　縄文土器出土遺物実測図⑬　(1/4)

が真っ直ぐ立ち上がり、外傾する口縁部へと至るものである。口縁部は若干肥厚させている。**186**も胴部があまり膨らまず、真っ直ぐ立ち上がるものである。頸部と胴部の境には、くっきりとした段が残されている。口縁部は緩い波状を呈している。これら無文土器も厳密には、それぞれがどの時期に伴うものなのかは確定出来ない。しかし、器形などから北久根山式期のものと見て大過ないものと思われる。

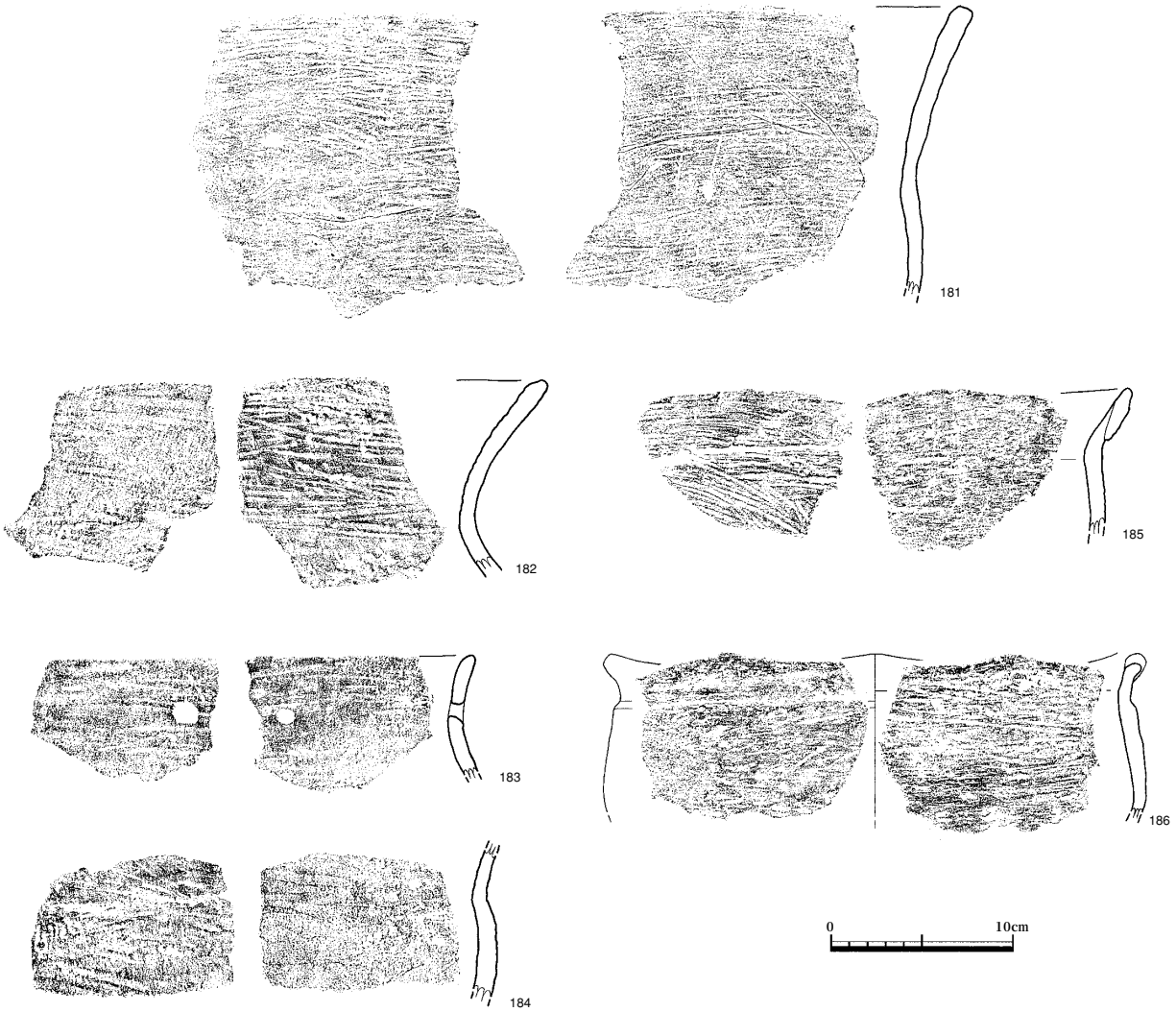
187・188は北久根山式に後続すると考えられるものである。**187**は内湾する口縁を持つものである。口縁部文様帯には縄文を施しており、三条の沈線を廻らせ、一部磨消部がある。**188**は頸部から胴部文様帯の上位までの破片である。頸部の屈曲は外面にはほとんど無く滑らかなカーブとなっている。文様帯は縄文部と無文部で構成されている。

189〜191は西平式土器である。**189**は口縁部片であり、口縁を断面三角形に肥厚させ３本の沈線、そして押点を施している。なお、口縁内面に屈曲は見られない。**190・191**は頸部から胴部にかけての破片である。胴部文様帯の上端の連続する刻み目が見られる。

192〜199は晩期前半ないしその前後に位置付けられるものである。**192**はいわゆる無刻目突帯文土器である。口縁外面に一条の突帯を廻らせ、口唇部には連続する短沈線ないし斜め刻み目を施している。**193〜195**は有文の深鉢形土器の口縁部片である。やや外傾する口縁部外面には、数条の細い沈線を廻らせている。**196〜198**は浅鉢形土器である。196は口縁端部が屈曲し、短く立ち上がり、外面には一条の沈線が廻るものである。**197**は外傾し、波状を呈す口縁部片である。口縁内外面は肥厚しており、波頂部の内外面に縦に粘土を隆起させ、口唇端部は柱頭状となっている。このような特徴を有するものは今のところ類例を知らないが、その断面の形状は滋賀里式の浅鉢のものと類似する。あるいは滋賀里式の何らかの影響の下で生まれたものかもしれない。**198**は長く延びる口縁の内側端部が断面三角に肥厚するものである。**199**は浅鉢のものと思われる口縁部片である。口縁部に一条の沈線



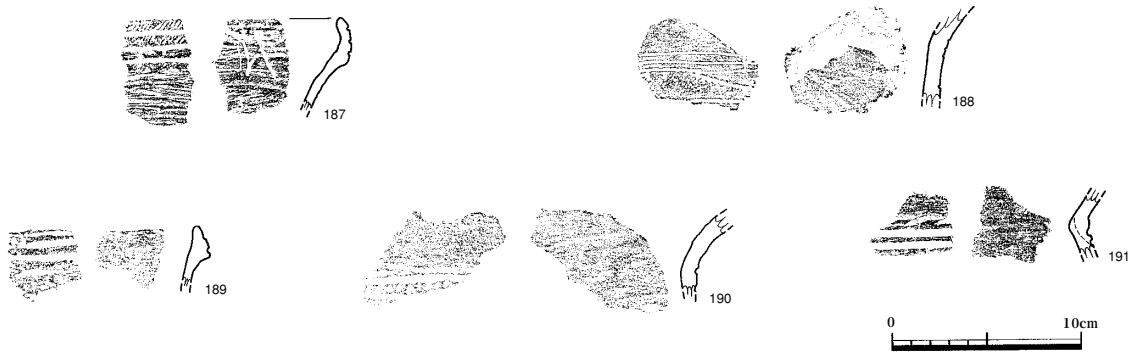
第68図　縄文土器出土遺物実測図⑭　(1/4)



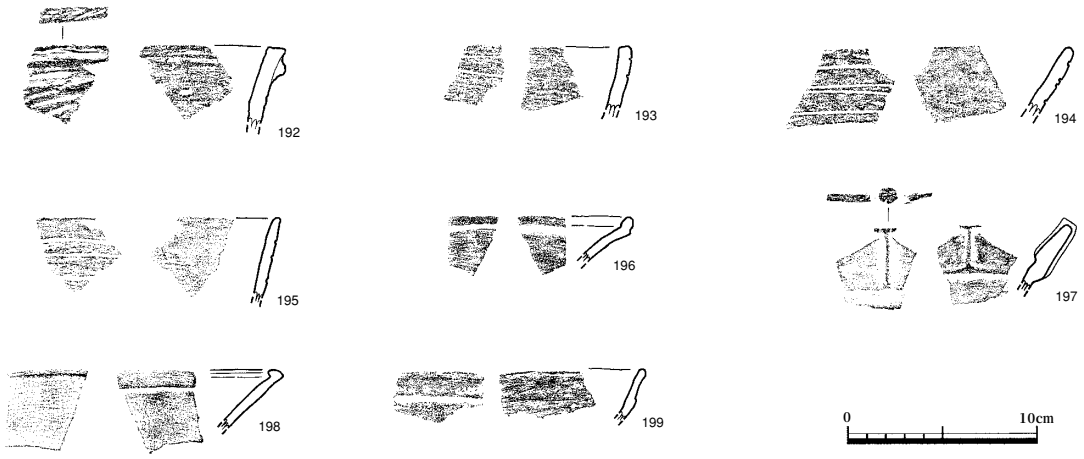
第69図　縄文土器出土遺物実測図⑮　(1/4)

を廻らせている。

200〜210には底部片を一括した。200・201・210は上げ底、その他は平底となるものである。200は高台的となる。205には胴部の欠損部分間際に縄の目を見ることが出来る。ただし、それが施文の痕跡なのか、圧痕的なものなのかは判断し難い。209の底面には、植物（堅果類か？）の種子の可能性のある圧痕が残されている。210は他のものと違い底面から外側に丸みを持ってひろがるものである。

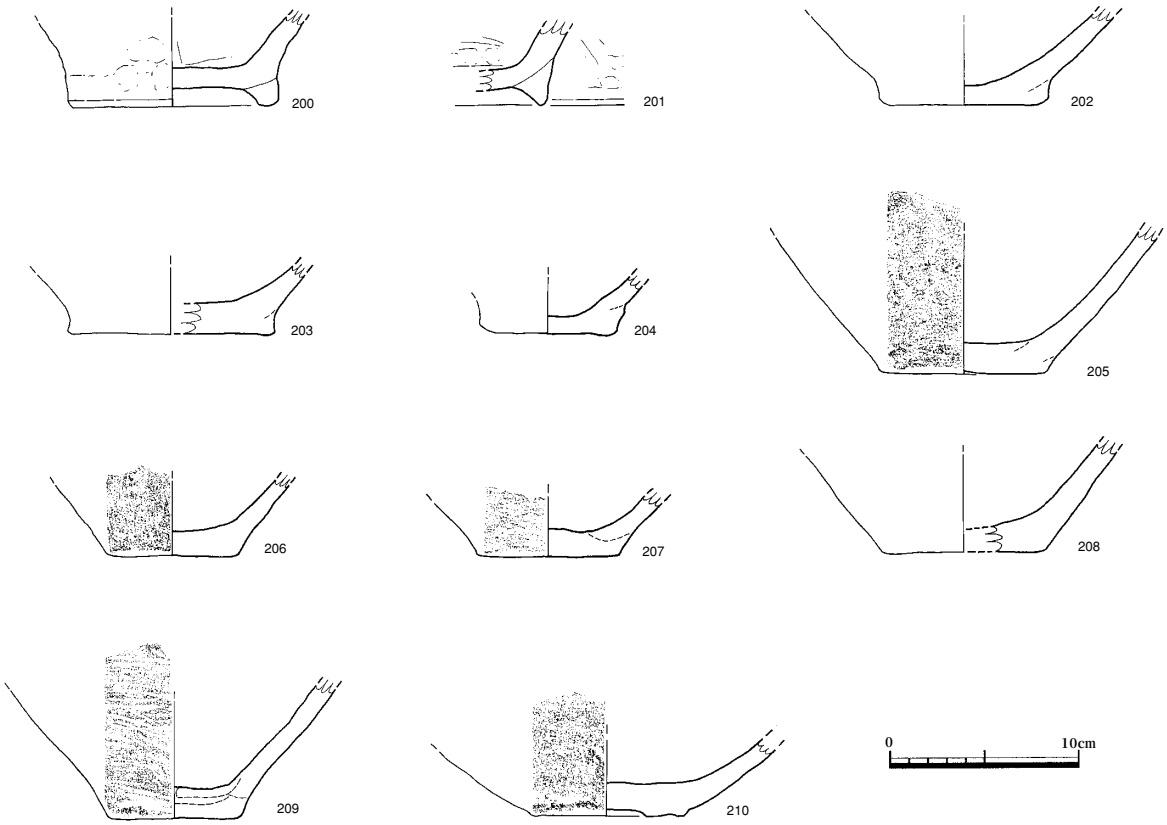


第70図　縄文土器出土遺物実測図⑯　(1/4)



第71図　縄文土器出土遺物実測図⑰　(1/4)

これら底部は、前述までのどの時期のものなのかは、やはり特定し難い。しかし、多少窺うことの出来る器面調整などから、後期中葉の幅の中で捉えても大過ないものと思われる。



第72図　縄文土器出土遺物実測図⑱　(1/4)

木器

木器はそのほとんどが第Ⅲ層中から出土した。鍬、鋤、又鍬、諸手鍬、柱状片刃石斧の柄、および柄頭、太型蛤刃石斧の柄、弓、木製容器およびその未製品、舟形模造品、杭、用途不明木製品等があり、その内容は多彩なものとなっている。出土状況としては、流木間に製品、未製品が散見される状況で検出されており、明らかに自然営力による流水作用によるものであり、原位置を保持しているものはない。

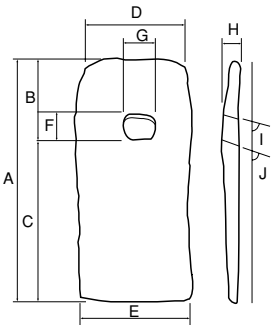
平鍬（第78・79図）

方形に成形した板に柄孔をあける特徴的な平鍬が12点検出されている。

本鍬は、柄孔部に隆起部や意識的に厚く成形するなどの加工はせず、基本的に中軸線は頂部から刃部へほぼ同じような厚みで移行し、刃部で先細る形態をなしている。両側面は刃部以上に薄く仕上げられる点も大きな特徴となっている。木取りはすべて柾目であり、アカガシ亜属が選定されている。柄孔の形態は円形、楕円、隅丸方形などがあり、いくつかのバリエーションが認められる。**002**のように欠損部が炭化しているものもあり、**005**は唯一柄壺の隆起を作出するためと考えられる加工痕が認められるが、それでも明瞭な隆起部は形成していない。**006**は楕円形の柄孔をもつ平鍬であるが、内側頭部付近に削り痕跡が明瞭に残り、厚みも他のものに比して大きい点などから、未製品である可能性も考えられる。

第２表　出土木器一覧表①

遺物番号	挿図番号	出土地点	器種	樹種	木取り	柄孔	法量									
							A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
025**SWO**-001	78	⑧Ⅲ**b**層	平鍬	アカガシ亜属	柾目	楕円	28.9	10.0	18.9	10.0	7.5	2.8	3.4	2.0	70°	70°
025**SWO**-002	78	⑭Ⅲ**b**層	平鍬	アカガシ亜属	柾目	楕円	24.8	9.7	15.1	8.4＋α	8.4＋α	3.2	3.7	2.2	71°	68°
025**SWO**-003	78	①Ⅲ**a**層	平鍬	アカガシ亜属	柾目	隅丸方形	26.2	9.0	17.2	12.8	10.5	3.0	3.6	1.9	60°	59°
025**SWO**-004	78	①Ⅲ**a**層	平鍬	アカガシ亜属	柾目	隅丸方形	26.6	9.4	17.2	9.2＋α	8.6	3.2	3.9	1.8	51°	53°
025**SWO**-005	78	⑪Ⅲ**b**層	平鍬	アカガシ亜属	柾目	隅丸方形	25.6	9.2	16.4	10.8	11.6＋α	3.0	3.4	1.9	77°	70°
025**SWO**-006	78	⑪Ⅲ**a**層	平鍬	アカガシ亜属	柾目	楕円	23.4	10.8	12.6	11.4	9.0＋α	2.8	3.8	2.6	72°	70°
025**SWO**-007	78	⑥たまり	平鍬	アカガシ亜属	柾目	楕円	24.0	7.8	16.2	6.2＋α	8.6	3.6	4.6	1.3＋α	不明	不明
025**SWO**-008	78	⑦Ⅲ**a**層	平鍬	アカガシ亜属	柾目	楕円	24.0	8.4	15.6	11.2	10.8	3.2	3.9	1.6＋α	74°	76°
025**SWO**-009	79	①Ⅲ**a**層	平鍬	アカガシ亜属	柾目	円形	21.6	7.6	14.0	8.0＋α	4.4＋α	3.8	3.9	1.2＋α	60°	不明
025**SWO**-010	79	⑩Ⅲ**a**層	平鍬	アカガシ亜属	柾目	円形	23.4	6.8	16.6	11.2	10.4＋α	3.6	3.8	1.2＋α	57°	60°
025**SWO**-011	79	⑭Ⅲ**a**層	平鍬	アカガシ亜属	柾目	隅丸方形	26.0	10.4	15.6	2.8＋α	12.0	3.5	2.5＋α	2.4	74°	64°
025**SWO**-012	79	③Ⅲ砂下	平鍬	アカガシ亜属	柾目	楕円	23.4	9.1	14.3	10.8	8.7＋α	4.2	3.4	1.8	72°	63°



A 全長　F 柄孔長
B 頭部長　G 柄孔幅
C 刃部長　H 最大厚
D 頭部幅　I 着柄角
E 刃部幅　J 着柄角

第３表　出土木器一覧表②

遺物番号	挿図番号	出土地点	器種	樹種	木取り	備考
025**SWO**-013	79	**SX**008Ⅲ**b**	鍬未製品	アカガシ亜属	柾目	
025**SWO**-014	79	**SX**008Ⅲ**a**	鍬未製品	アカガシ亜属	柾目	
025**SWO**-015	79	**SX**008Ⅲ**a**	鍬未製品	アカガシ亜属	柾目	
025**SWO**-016	80	**SX**008Ⅲ**a**	諸手鍬	アカガシ亜属	板目	
025**SWO**-017	80	**SX**008Ⅲ**a**	諸手鍬	アカガシ亜属	板目	
025**SWO**-018	80	**SX**006	鋤	アカガシ亜属	柾目	
025**SWO**-019	80	**SX**008Ⅲ**c**	三又鍬	アカガシ亜属	柾目	
025**SWO**-020	80	**SX**008Ⅲ**a**	又鍬	アカガシ亜属	柾目	
025**SWO**-021	80	**SX**006	農具柄	チシャノキ	－	
025**SWO**-022	80	**SX**008Ⅲ**b**	農具柄？	ヤマグワ	－	
025**SWO**-023	81	**SX**008Ⅲ**a**	柱状片刃石斧柄	クヌギ節	－	
025**SWO**-024	81	**SX**008Ⅲ**a**	扁平片刃石斧柄	クヌギ節	－	
025**SWO**-025	81	**SX**008Ⅲ**a**	太型蛤刃石斧柄	アカガシ亜属	－	
025**SWO**-026	81	**SX**008Ⅲ**a**	太型蛤刃石斧柄	アカガシ亜属	－	
025**SWO**-027	81	**SX**008Ⅲ**a**	弓	サカキ	丸木	
025**SWO**-028	81	**SX**008Ⅲ**a**	弓	ヤマグワ	－	
025**SWO**-029	81	**SX**008Ⅲ**b**	丸木弓	イヌガヤ	丸木	
025**SWO**-030	81	**SX**008Ⅲ**a**	弓状木製品	イヌガヤ	丸木半割	
025**SWO**-031	81	**SX**008Ⅲ**a**	弓状木製品	マキ属	丸木	
025**SWO**-032	81	**SX**008Ⅲ**a**	弓状木製品	イスノキ	—	
025**SWO**-033	82	**SX**008Ⅲ**b**	木包丁？	イヌガヤ	—	
025**SWO**-034	82	**SX**008Ⅲ**b**	舟型模造品？	イヌガヤ	横木取り	
025**SWO**-035	82	**SX**008Ⅲ**b**	高坏	サクラ属	横木取り	
025**SWO**-036	82	**SX**008Ⅲ**c**	脚付小型槽	サクラ属	縦木取り	
025**SWO**-037	82	**SX**008Ⅲ**a**	槽？	トチノキ	横木取り	
025**SWO**-038	82	**SX**008Ⅲ**a**	楕円形容器未製品	－	横木取り	
025**SWO**-039	82	**SX**008Ⅲ**a**	脚付容器	－	柾目	
025**SWO**-040	83	**SX**008Ⅲ**b**	脚付容器未製品	ムクロジ	横木取り	
025**SWO**-041	83	**SX**008Ⅲ**b**	鉢未製品	クスノキ	横木取り	
025**SWO**-042	83	**SX**008Ⅲ**a**	大鉢未製品？	クスノキ	横木取り	
025**SWO**-043	84	**SX**008Ⅲ**a**	剣形木製品	アカガシ亜属	－	
025**SWO**-044	84	**SX**009Ⅳ	糸巻	アカガシ亜属	－	
025**SWO**-045	84	**SX**008Ⅲ**b**	編錘	ツバキ属	丸木	
025**SWO**-046	84	**SX**008Ⅲ**b**	不明	－	丸木	
025**SWO**-047	84	**SX**008Ⅲ**b**	横槌	－	丸木	
025**SWO**-048	84	**SX**008Ⅲ**b**	えぶり？	アカガシ亜属	柾目	
025**SWO**-049	84	**SX**008Ⅲ**a**	舟形破片	マテバシイ	柾目	
025**SWO**-050	84	**SX**008Ⅲ**a**	不明	カヤ	柾目	
025**SWO**-051	84	不明	建築部材？	イヌガヤ	柾目	
025**SWO**-052	84	**SX**008Ⅲ**b**	建築部材？	イヌガヤ	丸木半割	
025**SWO**-053	85	**SX**008Ⅲ**a**	両端切断丸木	クヌギ節	丸木	
025**SWO**-054	85	**SX**006	加工木	－	丸木	
025**SWO**-055	85	**SX**008Ⅲ**b**	加工木	ムクロジ	－	
025**SWO**-056	85	**SX**008Ⅲ**a**	加工木	－	丸木	
025**SWO**-057	85	**SX**008Ⅲ**a**	丸木棒	サカキ	丸木	
025**SWO**-058	85	**SX**008Ⅲ**b**	加工木	－	丸木	
025**SWO**-059	85	**SX**008Ⅲ**a**	丸木棒	スダジイ	丸木	
025**SWO**-060	85	**SX**008Ⅲ**b**	丸木棒	イヌビワ	丸木	
025**SWO**-061	85	**SX**008Ⅲ**a**	杭	－	丸木	
025**SWO**-062	85	**SX**008Ⅲ**a**	加工木	－	丸木	
025**SWO**-063	85	**SX**008Ⅲ**b**	すりこぎ状木製品	アオキ	丸木	
025**SWO**-064	85	**SX**008Ⅲ**a**	構造材	トチノキ	丸木	
025**SWO**-065	85	**SX**008Ⅲ**a**	加工木	－	丸木	
025**SWO**-066	85	**SX**008Ⅲ**a**	加工木	－	丸木	
025**SWO**-067	85	**SX**008Ⅲ**a**	不明	－	丸木	
025**SWO**-068	85	**SX**008Ⅲ**c**	丸木棒	ツバキ属	丸木	
025**SWO**-069	86	**SX**008Ⅲ**c**	加工木	－	丸木	
025**SWO**-070	86	**SX**008Ⅲ**a**	両端切断丸太	－	丸木	
025**SWO**-071	86	**SX**008Ⅲ**b**	先端尖り丸木	クヌギ節	丸木	
025**SWO**-072	86	**SX**008Ⅲ**a**	角材	サカキ	割材	
025**SWO**-073	86	**SX**008Ⅲ**b**	両端切断割材	スダジイ	半割材	
025**SWO**-074	86	**SX**008Ⅲ**a**	加工木	スダジイ	丸木	
025**SWO**-075	86	**SX**008Ⅲ**b**	加工木	イヌビワ	丸木	
025**SWO**-076	86	**SX**008Ⅲ**a**	加工材	ムクロジ	－	
025**SWO**-077	86	**SX**008Ⅲ**a**	杭？	－	－	
025**SWO**-078	86	**SX**008Ⅲ**b**	杭？	アカガシ亜属	－	

第 4 表　出土木器一覧表③

遺物番号	挿図番号	出土地点	器種	樹種	木取り	備考
025**SWO**−079	87	**SX**008Ⅲ**a**	加工材	—	柾目	
025**SWO**−080	87	**SX**008Ⅲ**a**	加工材	—	柾目	
025**SWO**−081	87	**SX**008Ⅲ**a**	加工材	サカキ	柾目	
025**SWO**−082	87	**SX**008Ⅲ**a**	鍬の歯？	スダジイ	柾目	
025**SWO**−083	87	**SX**008Ⅲ**a**	加工材	スダジイ	柾目	
025**SWO**−084	87	**SX**008Ⅲ**a**	板目板	カヤ	柾目	
025**SWO**−085	87	**SX**008Ⅲ**a**	板材	スダジイ	柾目	
025**SWO**−086	87	**SX**008Ⅲ**b**	板材	スダジイ	柾目	
025**SWO**−087	87	**SX**008Ⅲ**a**	加工板材	—	柾目	
025**SWO**−088	87	**SX**008Ⅲ**a**	加工板材	—	柾目	
025**SWO**−089	87	**SX**008Ⅲ**b**	加工材	—	柾目	
025**SWO**−090	87	**SX**008Ⅲ**a**	板材	ツブラジイ	柾目	
025**SWO**−091	87	**SX**008Ⅲ**a**	加工材	ツブラジイ	柾目	
025**SWO**−092	88	**SX**008Ⅲ**a**	両端切断角材	スダジイ	—	
025**SWO**−093	88	**SX**008Ⅲ**a**	両端切断角材	チシャノキ	—	
025**SWO**−094	88	**SX**008Ⅲ**a**	板材	—	柾目	
025**SWO**−095	88	**SX**008Ⅲ**a**	加工材	アカガシ亜属	柾目	
025**SWO**−096	88	**SX**008Ⅲ**a**	板材	アカガシ亜属	ななめ	
025**SWO**−097	88	**SX**008Ⅲ**a**	板材	アカガシ亜属	—	
025**SWO**−098	88	**SX**008Ⅲ**b**	板材	クスノキ	板目	



第73図　遺物出土状況①



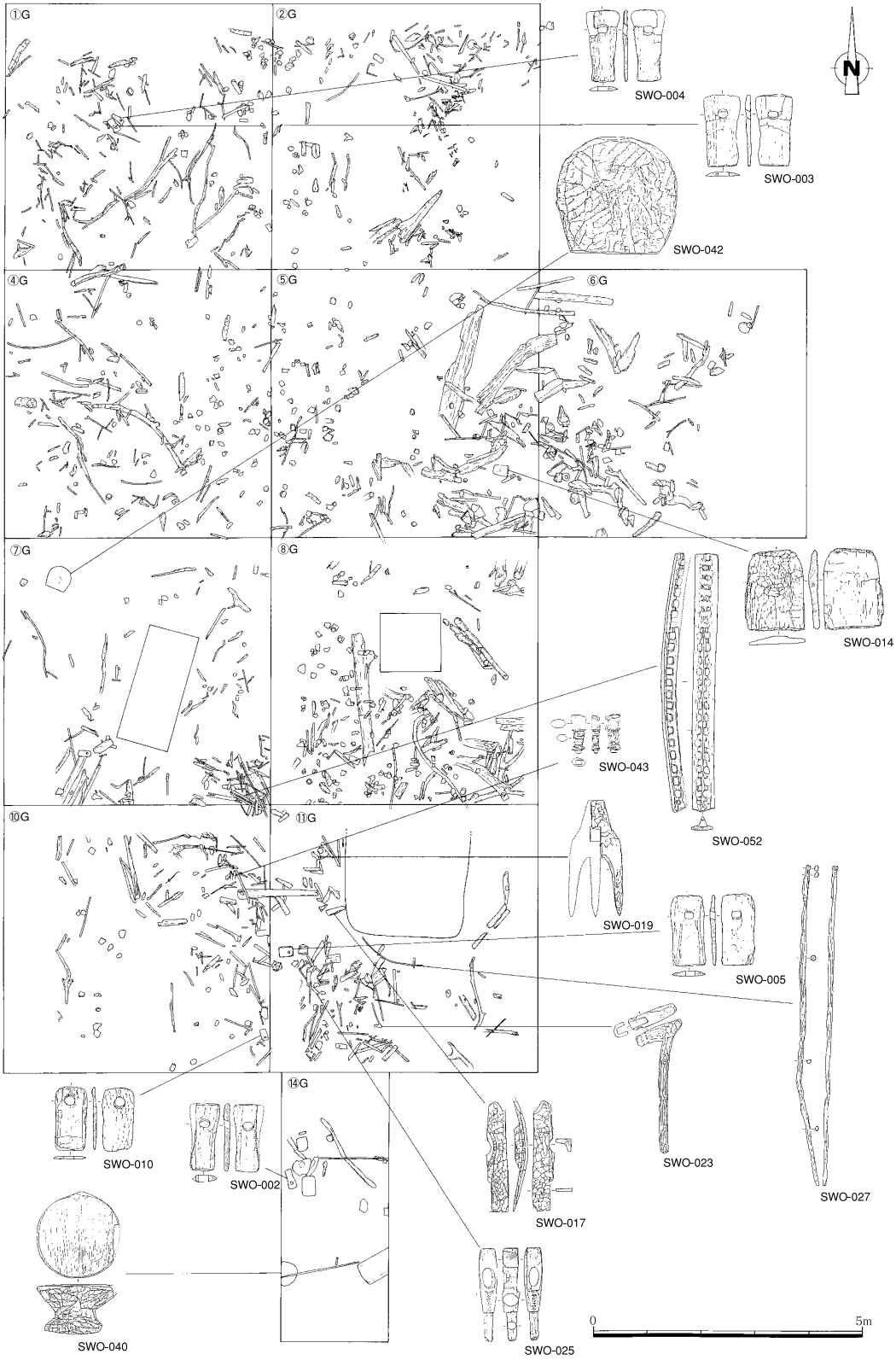
第74図　遺物出土状況②



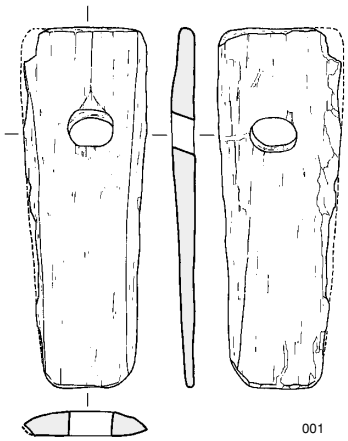
第75図　遺物出土状況③

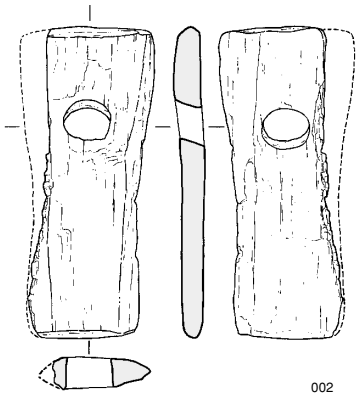


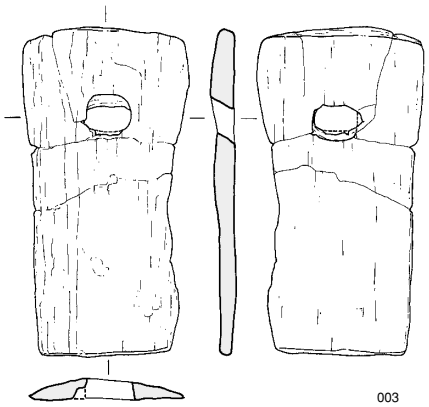
第76図　SWO−023出土状況

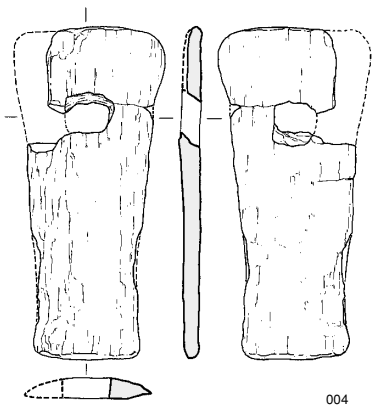


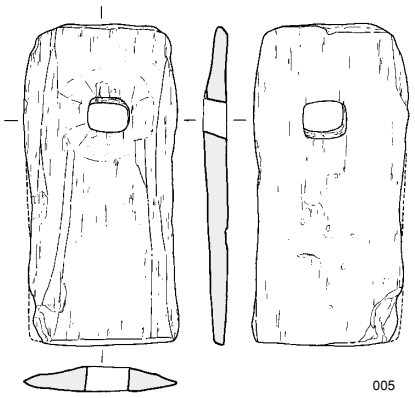
第77図　木器出土地点位置図　(1/120)

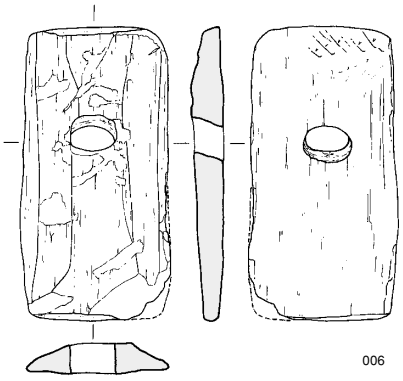


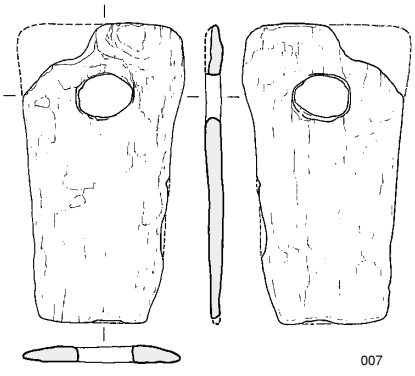


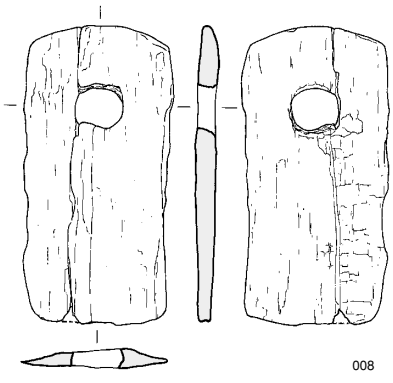




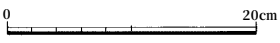


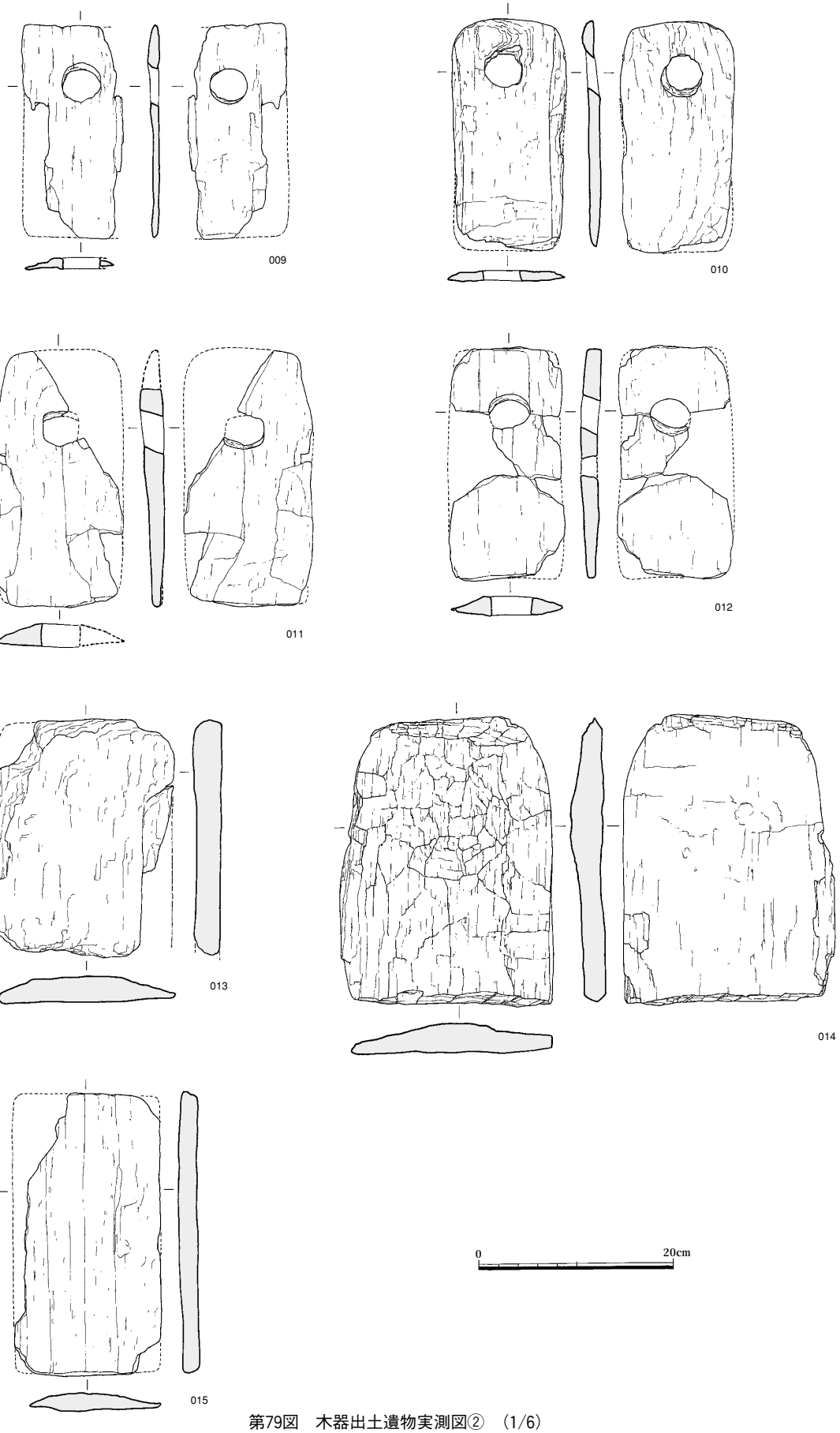






第78図　木器出土遺物実測図①　(1/6)





第79図　木器出土遺物実測図②　(1/6)

013は鍬の未製品である。アカガシ亜属を選定し、柾目の木取りが行われている。全長24.2cm、最大幅18.0cm、最大厚2.8cmを測る。サイズの点から先述した平鍬の未製品である可能性が高い。

014もまた鍬の未製品である。全長28.9cm、最大幅21.4cm、最大厚3.2cmを測る。頭部、刃部、柄孔隆起を削り出し、削り痕が明瞭である。アカガシ亜属の樹種選定が行われている。

015は方形板状を呈する鍬未製品である。柾目の木取りが行われ、アカガシ亜属が使用される。全長28.7cm、最大幅14.8cm、最大厚2.0cmを測る。

016・017は諸手鍬である。016は一方の側縁部は欠損し、全長51.0cmを測る。中央部に舟型隆起をもち、反高8.0cmを測る。舟型隆起は長さ15.6cm、幅6.8cm＋α、高さ3.5cmを測る。017は半欠し、刃部の片面は欠損する。現存長43.0cm、反高は5.2cmを測る。中央の舟型隆起は長さ16.8cm（推定)、幅3.8cm（推定)、高さ2.8cmの規模を有し、表面には焼痕が認められる。016・017ともアカガシ亜属の板目材が使用される。

018は長柄鋤である。刃部は欠損し、現存長71.5cmを測る。アカガシ亜属が使用され、柾目の木取りが行われている。

019は三又鍬である。約１/３遺存し方形の柄孔を確認できる。全長42.8cm、刃部長22.0cmを測り、着柄角は55°前後となっている。表面に焼痕が認められる。アカガシ亜属の樹種が選定される。

020は又鍬の刃部破片である。全長29.6cm＋α、刃部幅2.8cm、刃部厚9.0cmを測る。

021は農具柄である。チシャノキが使用され、全長68.8cmを測る。断面形状は多角形を呈している。

022は農具柄と推定されるヤマグワ製の棒状加工品である。先端部が欠損しており、現存長111.0cmを測る。

023は柱状片刃石斧柄でありクヌギ節材が使用されている。直柄部分には縦方向の削り痕が残り、石斧台部には緊縛用の溝がある。また、柄部二ヶ所には紐通孔が認められる。

024は扁平片刃石斧柄であり、023と同様にクヌギ節材が使用される。損傷が著しい。

025は太型蛤刃石斧柄であり、アカガシ亜属の樹種が選定されている。全長34.6cm、最大幅5.4cm、最大厚5.6cm、柄孔長は7.4cm×4.2cmを測る。両面に緊縛用刻みが認められる。

026は025と同種の太型蛤刃石斧柄であるが、損傷が著しく、辛うじて直柄部分の刻み部が遺存する。アカガシ亜属材が使用され、上端部は焼け焦げている。

027はサカキの丸木を使用した弓である。全長118.5cm＋αを測り、先端部には乳頭状突起を造り出している。

028はヤマグワを使用した弓である。先端近くで少し湾曲し、弦縄縛用の造り出しを確認できる。表面には縦方向の削り痕が明瞭に残る。

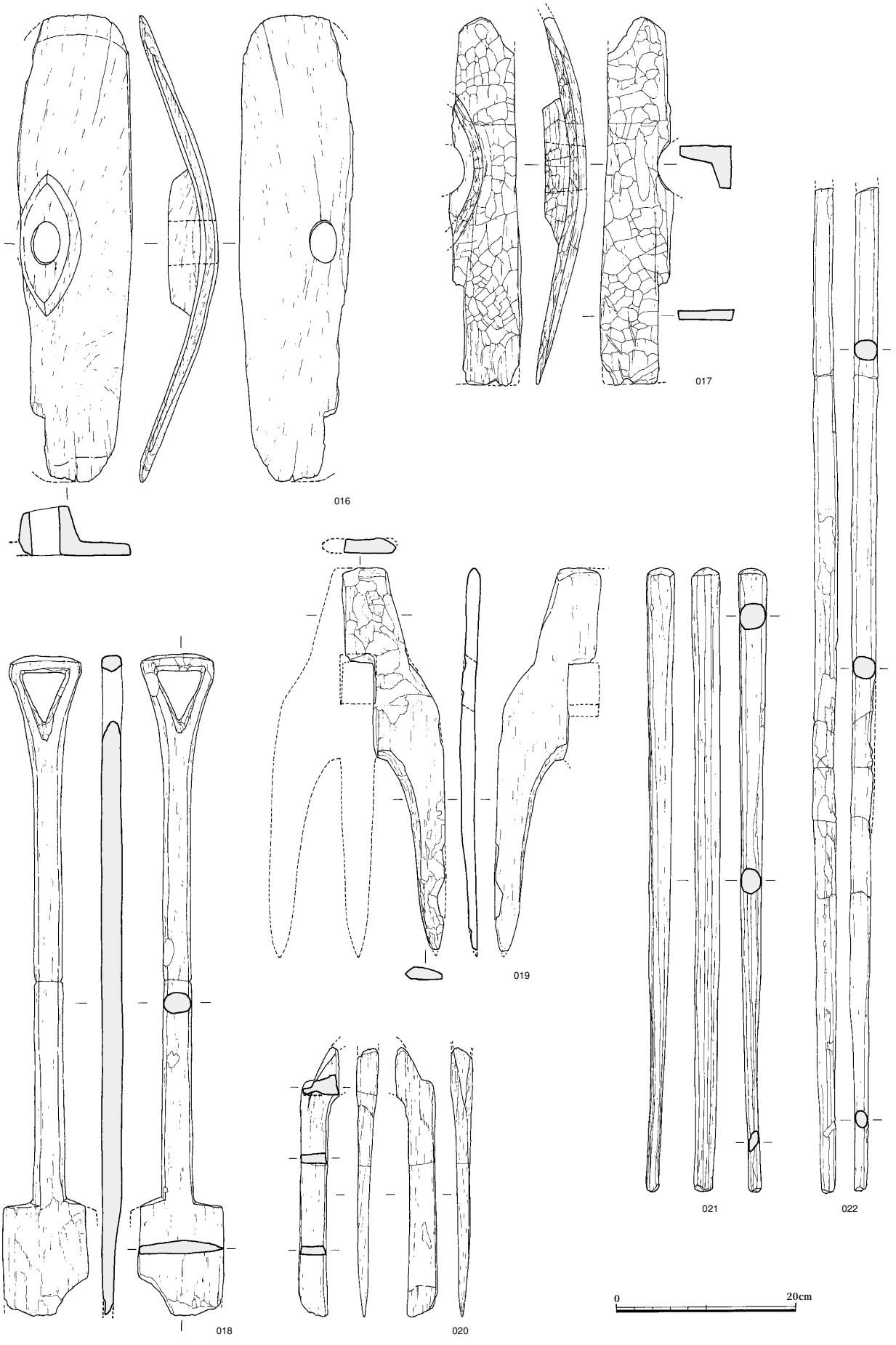
029はイヌガヤの丸木を使用した丸木弓である。片面を欠損し、全長146.0cm＋αを測る。片面削り込みで、先端は細くなるが、縄縛用の特殊加工等は認められない。

030は弓状木製品でありイヌガヤの丸木半割りで片面は削り込み、先端は尖る。

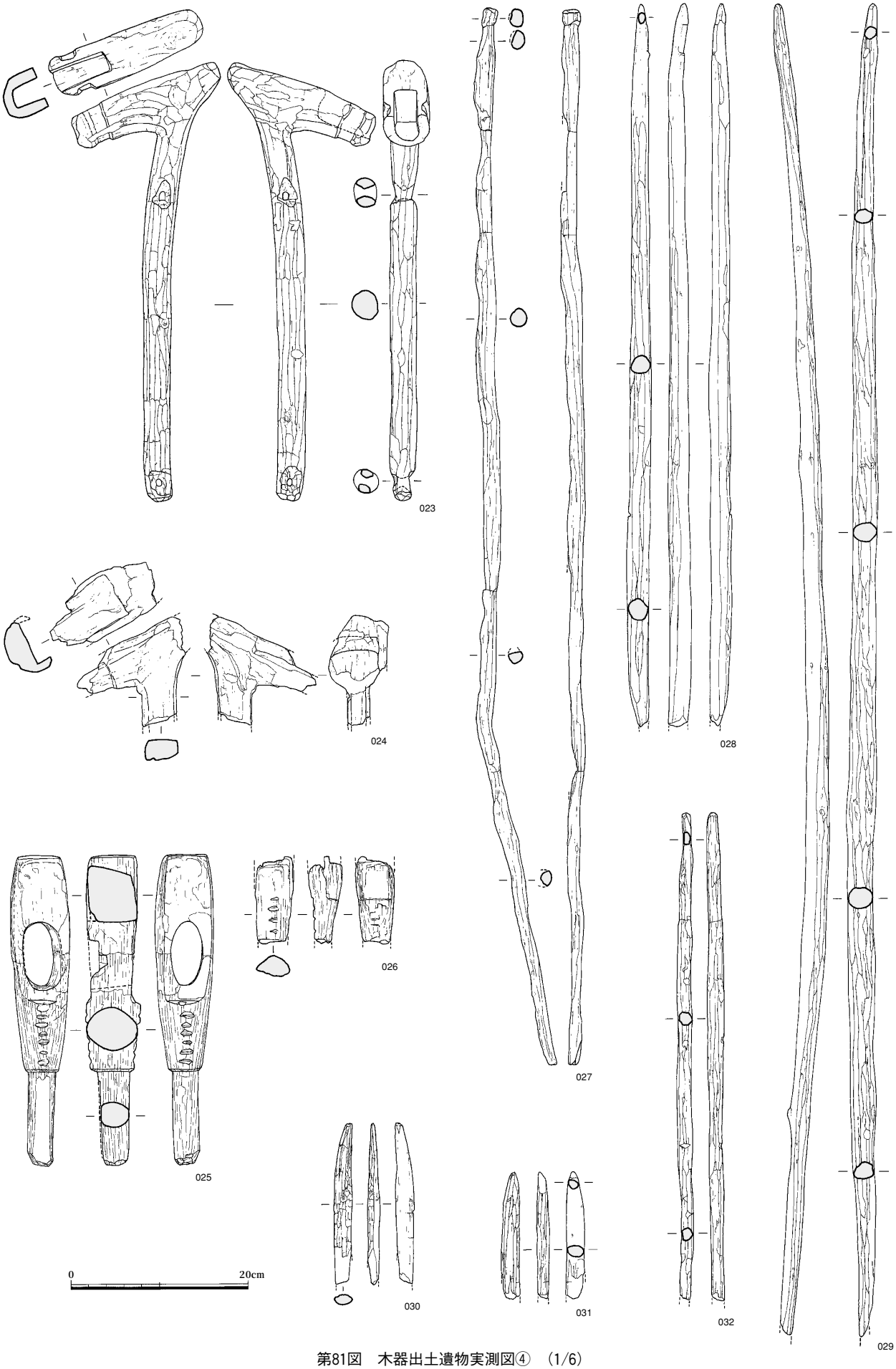
031はマキ属の丸木による弓状木製品である。片面削り込みで、先端は尖る。

032は弓状木製品であり、イスノキが使用される。削り出しにより成形され、表面にはタテ方向の削り痕が残る。

033は用途不明木製品であり、木包丁、あるいは機織具等の一部と推定される。イヌガヤ製であり、



第80図　木器出土遺物実測図③　(1/6)



第81図　木器出土遺物実測図④　(1/6)

削り出しにより成形される。大部分が欠損し、全形は把握できない。遺存部分に両面穿孔による小孔（径5.0㎜）二ヶ所と、楕円状の孔が一ヶ所見られる。

034は舟形模造品あるいはウケ状の木製品と想定されるものである。イヌガヤの横木取りによるものであり、削り出しによる成形を行う。全長53.6㎝＋αを測る。全面に細かい削り痕が認められ、薄手である。

035は高坏の坏部片である。サクラ属材の横木取りによるもので、全面黒漆が塗布される。脚部は欠損し、口径28.4㎝、深さ5.6㎝を測る。両面とも擦痕状の調整痕が見られ、内底面の塗装がはがれた部分にケズリ痕が認められる。

036は脚付容器である。サクラ属材の縦木取りによるもので、全長14.0㎝、器高7.0㎝＋αを測る。槽部分は一方の長側縁部と上部を欠損。削り出しにより一木により成形される。

037は槽と推定される容器片である。トチノキの横木取りにより成形される。長側縁部を欠損する。全長38.2㎝を測る。

038は楕円形容器の三連の未製品である。全面にケズリ痕が認められる。使用樹種等は不明である。横木取りによる。

039は脚付の容器である。一面に立ち上がりがわずかに見られ、他の一面に脚部がかすかに遺存する。

040は脚付容器の未製品である。ムクロジを横木取りする。器高約37.5㎝、容器部分の直径約30.0㎝、脚部底面は隅丸方形をなし、一辺は約20.0㎝を測る。

041は鉢未製品と思われる。クスノキを横木取りしたものを使用する。全長28.8㎝×26.8㎝、最大厚5.3㎝を測り、表面には加工痕が残る。中央部に隆起を削り出している。

042は大鉢の未製品と推定される資料である。**041**と同じくクスノキの横木取りしたものを使用する。全長42.8㎝、最大幅44.0㎝、最大厚5.0㎝を測り、両面とも削り痕が見られ、中央付近に隆起部を造り出している。

043は剣形木製品である。形状が剣柄部分に近似しており、便宜的に剣形木製品としている。削り出しにより成形されており、下端の方形の一端をはめこみ式としたものと考えられる。アカガシ亜属材が使用される。

044は糸巻と推定される。全長6.0㎝、径4.2㎝×3.7㎝を測る。削り出しにより両端を尖らせる。

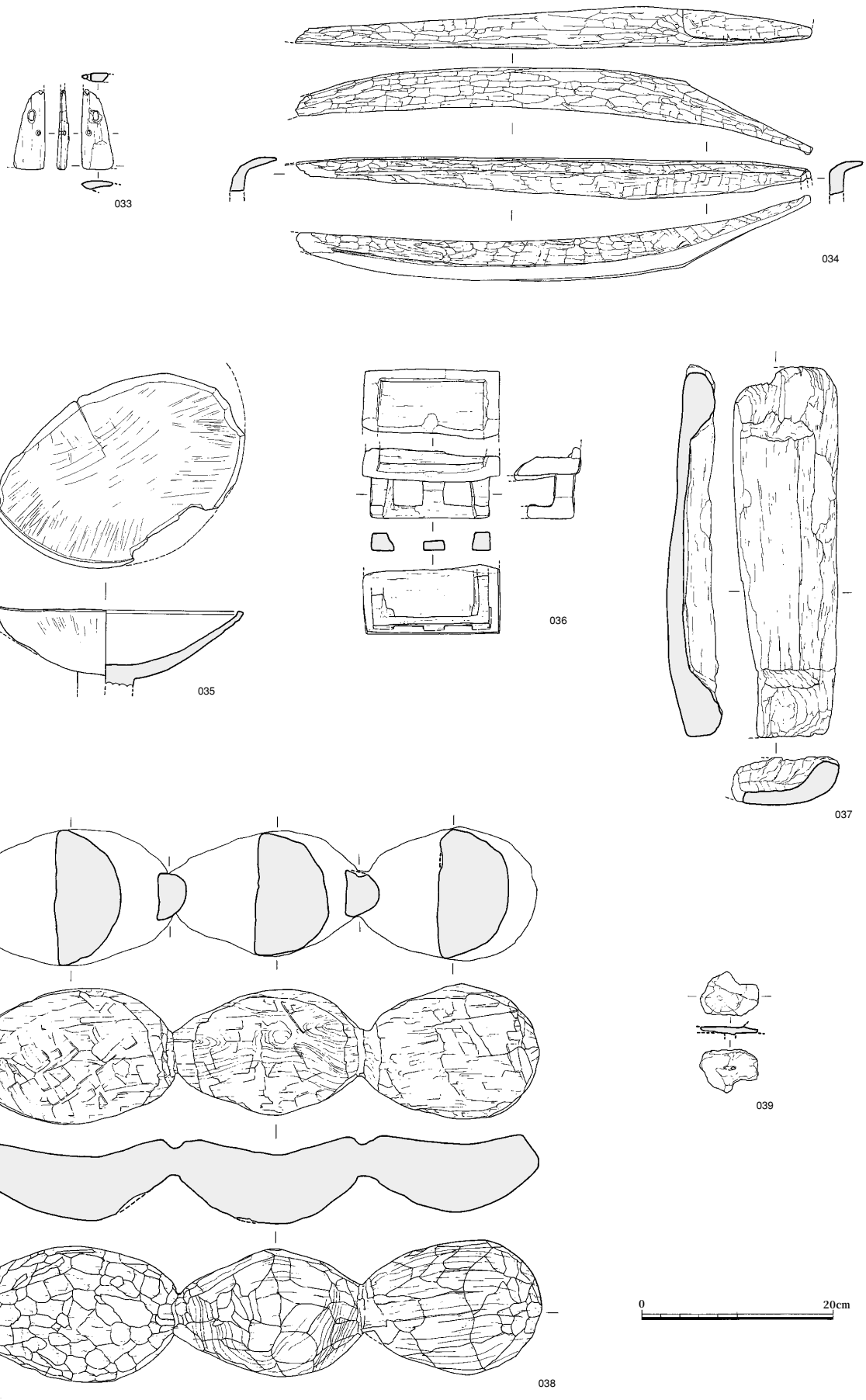
045は編錘と考えられる資料である。約１／４が遺存し、全長4.4㎝、径4.3㎝を測る。ツバキ属の丸木材により製作されている。

046は丸木材で作られた木製品であり、器種、樹種等は不明である。径3.4㎝、最大厚2.0㎝を測り、表面の削り痕ははっきりしない。

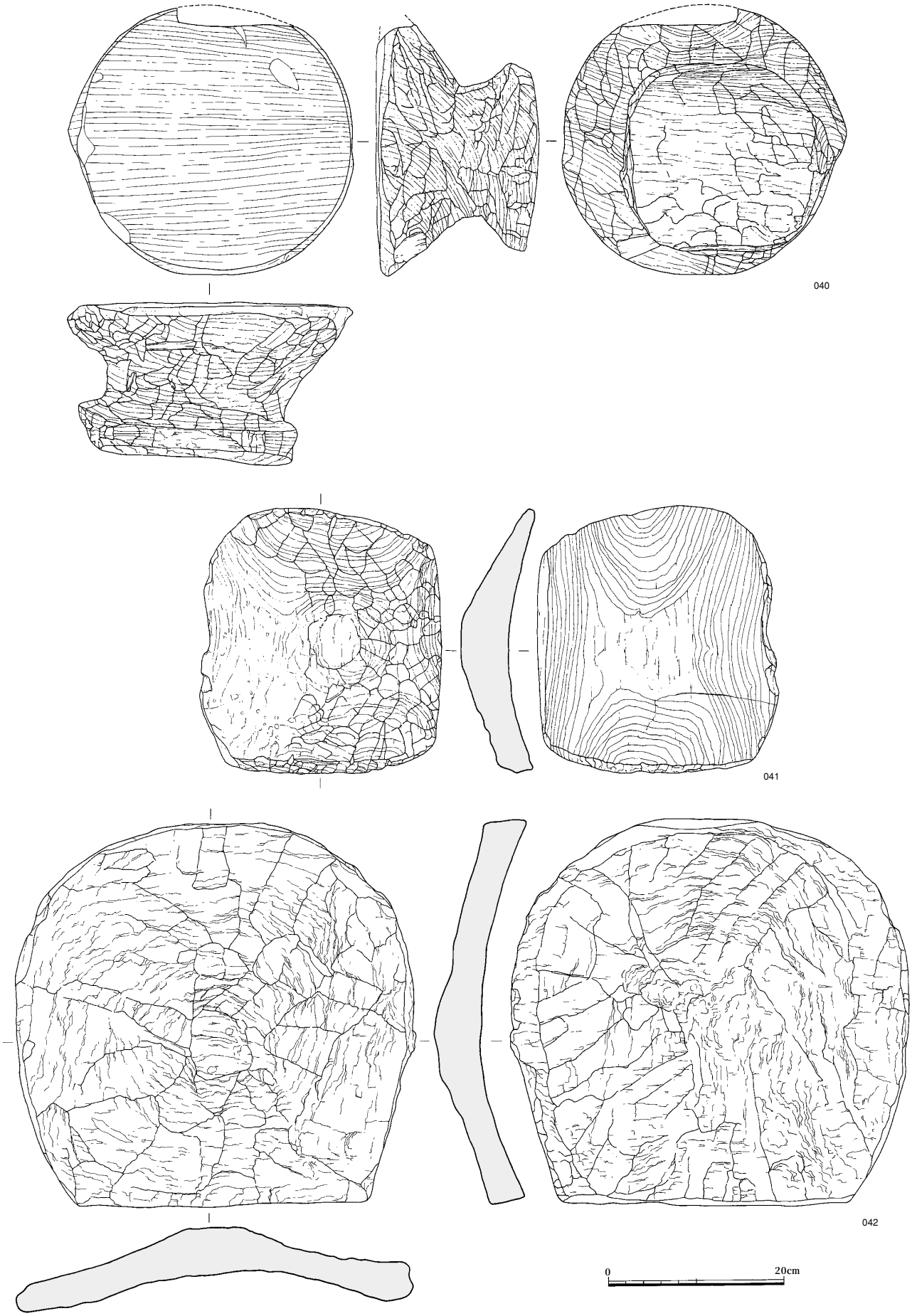
047は丸木材により製作された横槌である。芯持ち材であり、全長19.9㎝、槌部長14.0㎝、槌部径5.5㎝×4.8㎝を測る。槌上部には使用痕跡があり、また焼痕も認められる。

048はえぶりであろうか。アカガシ亜属の柾目板を削り出し製作されている。長側縁部は連続山形状をなす。２穿孔のうち１つは２度の穿孔が連なって楕円状を呈している。また一端に柄孔の一部が認められる。

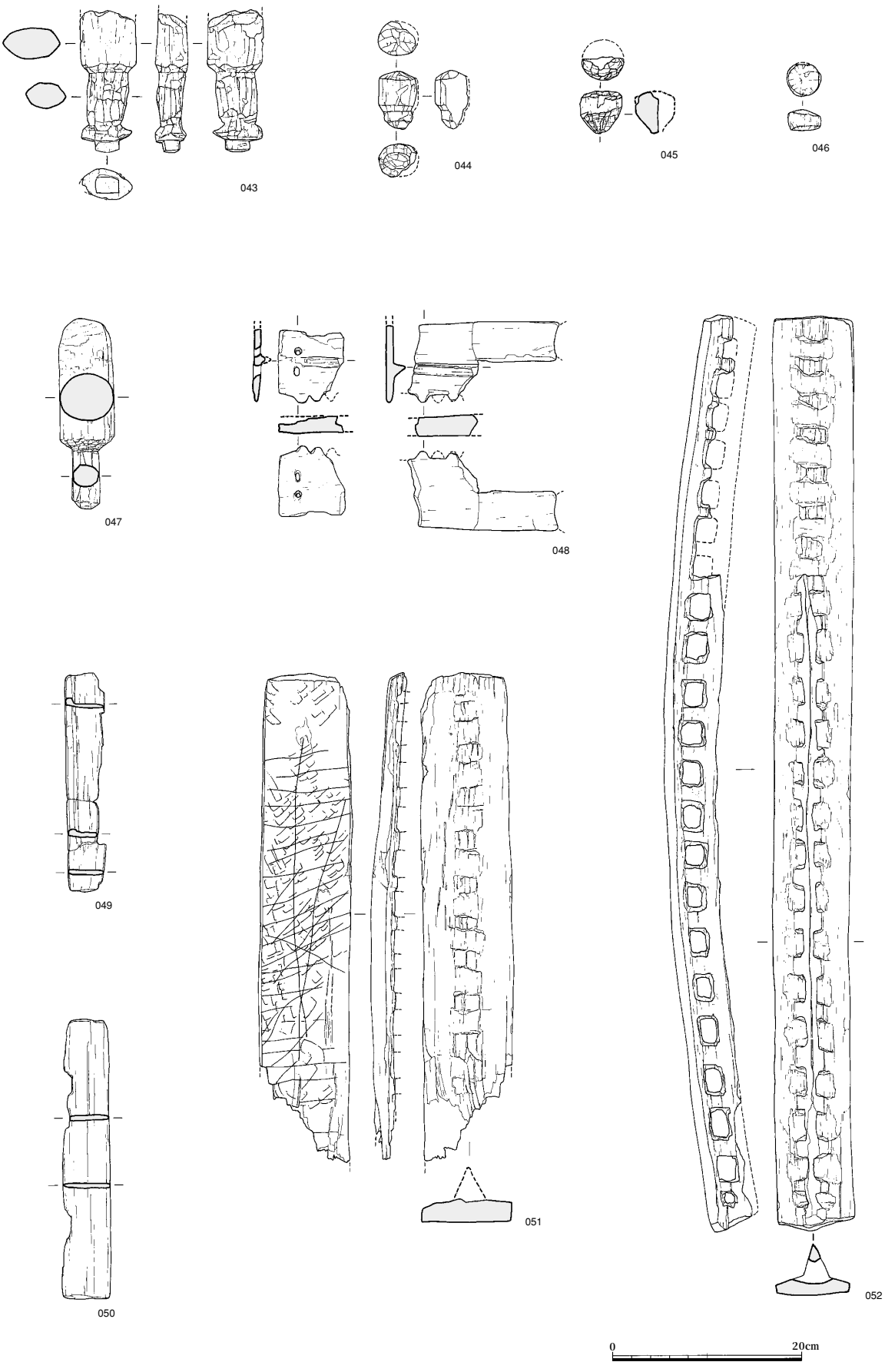
049は小片のため詳細は不明であるが、側縁部がわずかに立ち上がり舟形の破片と推定される。片



第82図　木器出土遺物実測図⑤　(1/6)



第83図　木器出土遺物実測図⑥　(1/6)



第84図　木器出土遺物実測図⑦　(1/6)

面に赤色塗装が遺存する。マテバシイの柾目板によるものである。

050は器種不明の木製加工品である。カヤの柾目薄板であり、一方の側縁部に三ヶ所、浅い**U**字状の抉りを入れている。

051は器種不明の木製品である。建築部材であろうか。イヌガヤの柾目板であり、芯持ち材である。**052**と同種の木製品である。端部はややそっている。下面には細かい削り痕が残り、また縦横に線刻が入っている。

052はイヌガヤの丸木半割材を加工したものであり、削り出しにより成形される。全長95.2㎝、幅およそ8.0㎝、高さ6.0㎝を測り、両端に向かってそり上がっている。

053は丸木の両端を切断したものであり、両端を加工する。全長9.8㎝、径3.5㎝を測る。

054は皮つきの丸木加工木である。全長10.8㎝、径2.2㎝を測る。両端を加工する。

055はムクロジの加工木であり、削り出しにより成形する。全長13.0㎝＋α、径4.4㎝×3.0㎝を測る。片端は欠損しており、一端に加工痕を認めることができる。

056は皮つき丸木の加工木であり、全長12.0㎝、径4.3㎝×3.6㎝を測る。先端は加工される。

057は先端を加工するサカキの丸木棒である。全長16.9㎝＋α、径2.7㎝×2.2㎝を測る。

058は先端を加工した丸木材であり、全長17.2㎝、最大径3.6㎝×3.4㎝を測る。樹種等は不明である。

059は先端を加工したスダジイの丸木棒であり、全長24.2㎝、径4.8㎝×4.4㎝を測る。表面には樹皮が残る。

060は先端を加工したイヌビワの丸木棒であり、全長18.4㎝＋α、径4.8㎝×4.3㎝を測る。表面の一部焼痕が認められる。

061は先端を加工した杭状の木製品である。樹皮が残る。全長29.4㎝＋α、径4.9㎝×4.4㎝を測る。

062は皮つきの丸木加工木である。全長26.8㎝＋α、径5.2㎝×5.0㎝を測る。

063はアオキの丸太材を使用したすりこぎ状木製品である。両端は加工され、全長26.4㎝、径3.2㎝×2.6㎝を測る。

064はトチノキの丸木を使用した構造材である。先端に削りが認められ、他端に結束用溝が彫られる。全長20.2㎝、径5.6㎝×3.5㎝を測る。

065は両端を加工した丸木加工木である全長21.4㎝、径4.7㎝×4.0㎝を測る。

066は両端に加工を加える丸木加工木である。全長51.4㎝、径4.4㎝を測る。

067は両端が欠損する丸木加工材である。全長71.1㎝＋α、径3.0㎝×2.8㎝を測り、円周上の二ヶ所には削り込みが認められる。

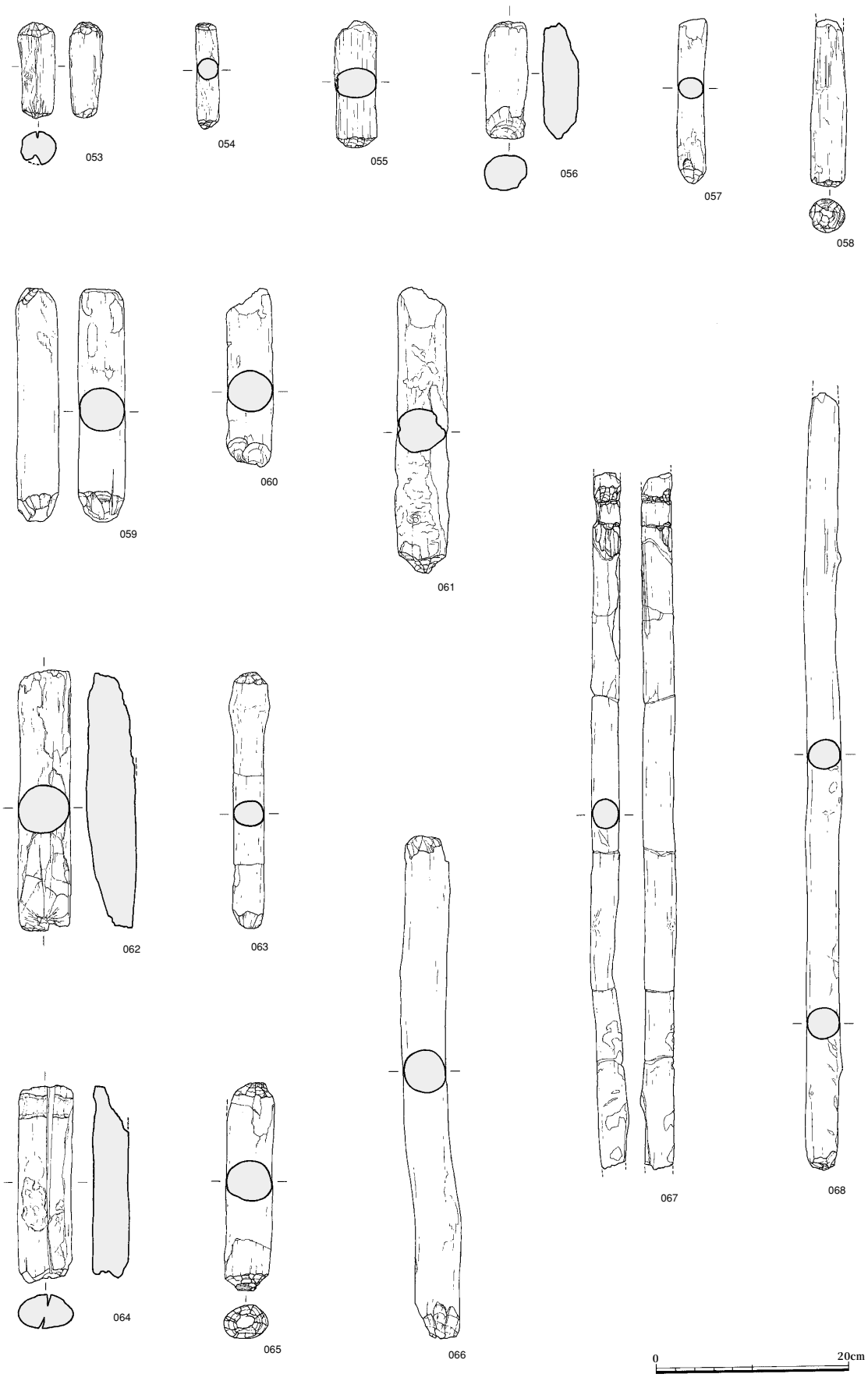
068はツバキ属の丸木棒である。先端を加工する。全長79.8㎝＋α、径3.5㎝×3.1㎝を測る。

069は両端を加工する丸木加工木である。径6.7㎝×6.2㎝を測る。

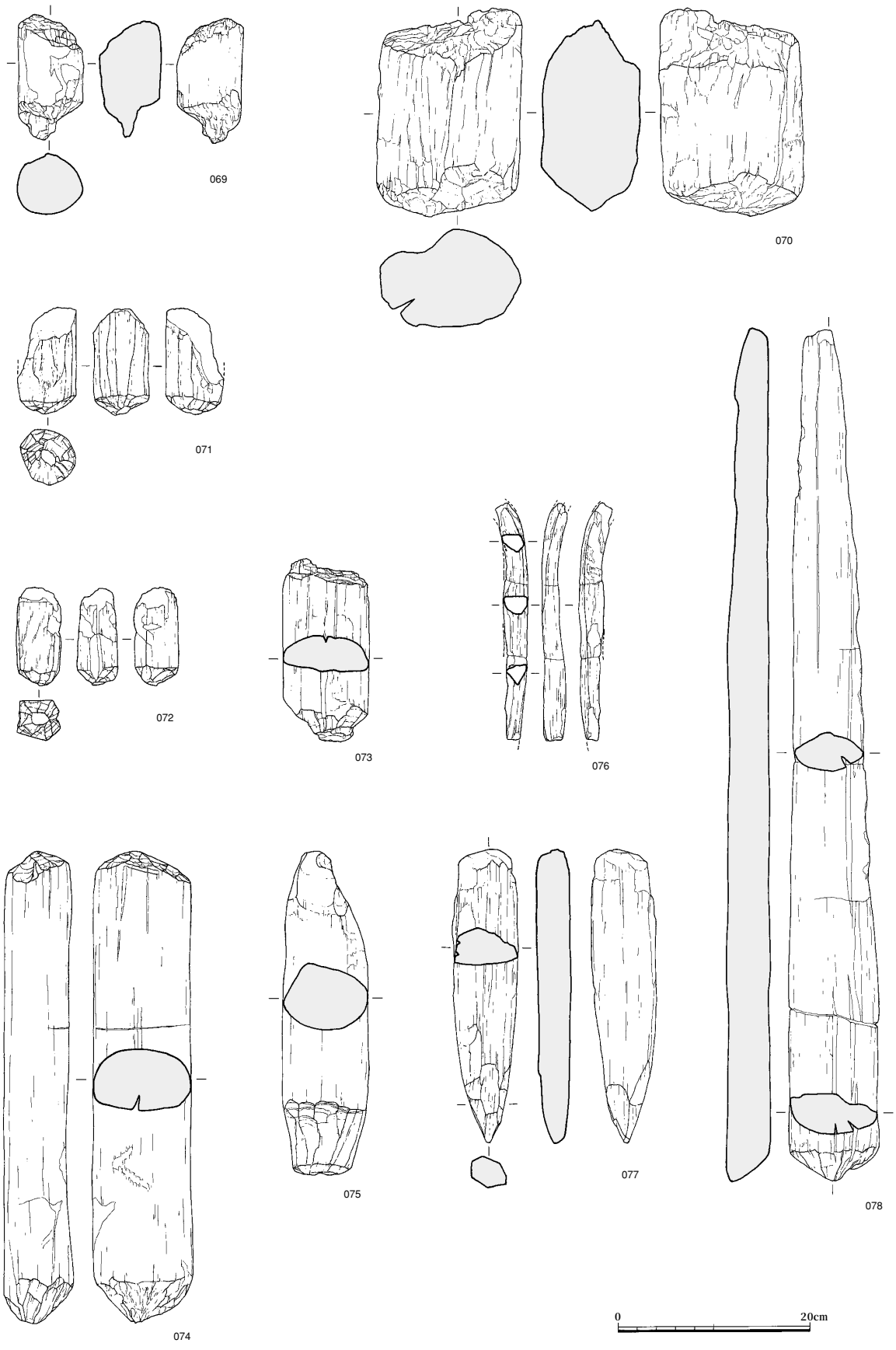
070は両端を切断した丸太加工材であり、両端を加工する。全長19.5㎝、径14.5㎝×10.2㎝を測る。

071は先端を尖らせた丸木加工材である。先端を加工する。全長11.0㎝＋α、径5.8㎝を測る。丸木の表面に一部面出しを行う。

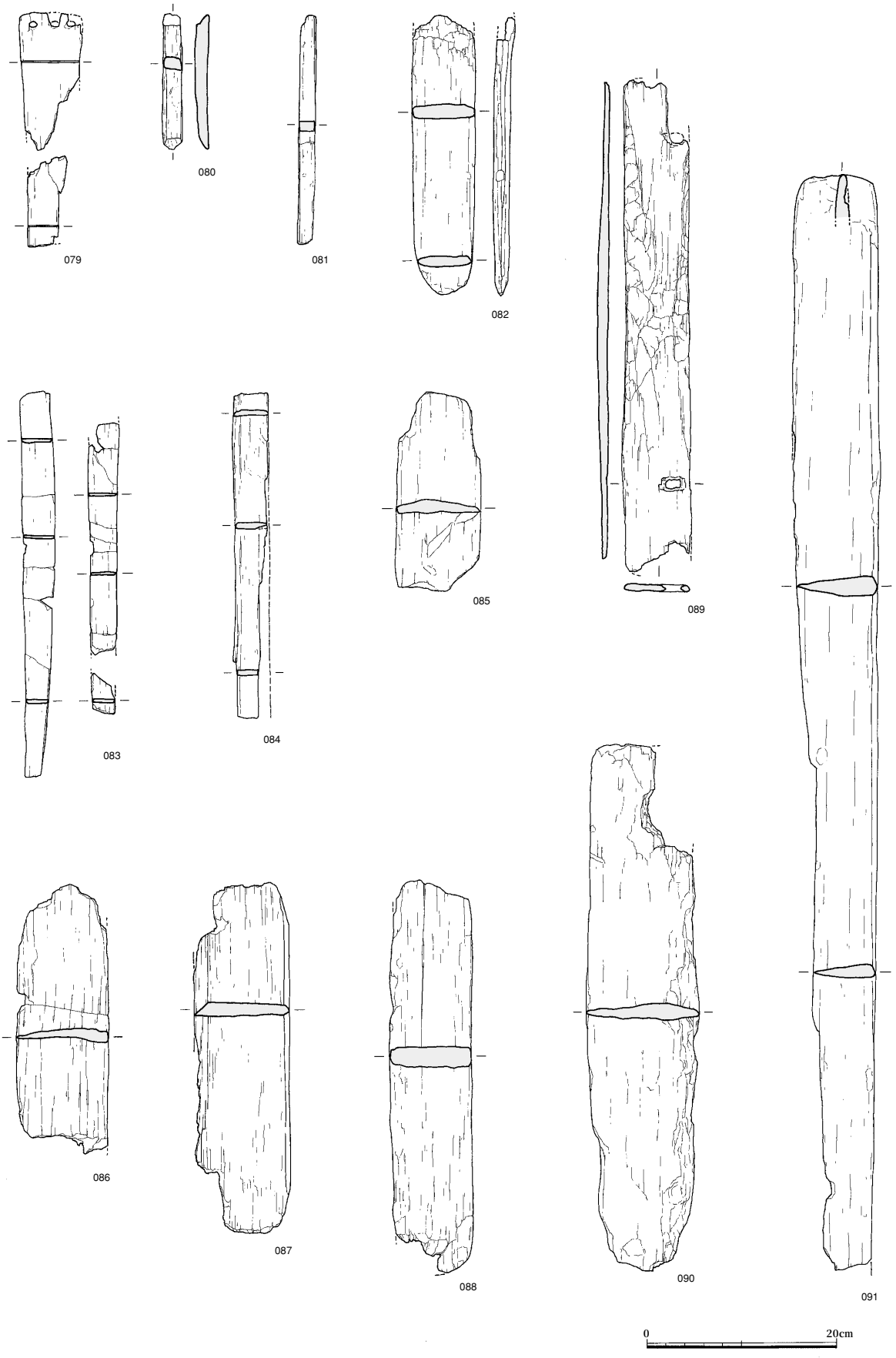
072はサカキの丸木から割り出した角材であり、断面形は五角形を呈する。全長10.0㎝＋αを測り、先端を加工する。



第85図　木器出土遺物実測図⑧　(1/6)



第86図　木器出土遺物実測図⑨　(1/6)



第87図　木器出土遺物実測図⑩　(1/6)

073はスダジイの両端切断半割材であり、全長18.8㎝、径8.9㎝を測る。両端を加工する。

074はスダジイの丸木加工材であり、両端を加工する。全長48.4㎝、径10.0㎝×6.4㎝を測る。

075はイヌビワの丸木加工材であり、全長33.6㎝、径8.4㎝を測る。先端を加工する。縦半分は損傷し、欠損する。

076はムクロジのみかん割材の加工木であり、一端が婉曲する。

077は先端を加工した杭状木製品である。みかん割材が使用される。全長30.1㎝、最大幅6.8㎝を測る。

078はアカガシ亜属のみかん割材であり、全長87.6㎝、最大幅9.2㎝を測る。先端を加工しており、杭であると考えられる。

079は柾目の加工材である。片面のみに赤漆を塗布する。ごく薄い板で、先端近くに三ヶ所の穿孔を有する。

080は柾目材の加工材である。全長14.2㎝、断面長方形で1.8㎝×1.3㎝を測る。

081はサカキ柾目板の加工材である。全長24.0㎝＋α。断面長方形で1.5㎝×1.1㎝を測る。

082はスダジイの柾目板の加工材である。全長29.0㎝＋α、最大幅6.5㎝、最大厚1.5㎝を測り先端は丸く造り出す。一部を除いてほとんどが炭化する。鍬の歯であると考えられる。

083はスダジイの加工材である。最大幅3.4㎝、最大厚0.4㎝を測る。片面の全面に赤漆を塗布する。

084はカヤの加工材である。全長33.8㎝、最大幅3.7㎝、最大厚0.8㎝を測る。

085はスダジイの柾目板材である。全長20.7㎝＋α、最大幅8.7㎝、最大厚1.5㎝を測る。

086もスダジイの柾目板材である。全長26.7㎝＋α、最大幅9.6㎝、最大厚1.2㎝を測る。

087は加工板材であり全長36.5㎝、最大幅10.0㎝、最大厚1.4㎝を測る。

088は柾目の加工板材であり全長40.2㎝＋α、最大幅8.4㎝、最大厚2.4㎝を測る。

089は柾目の加工板材であり、全長51.2㎝＋α、最大幅7.0㎝、最大厚1.4㎝を測る。二ヶ所に穿孔、片面に削り痕が認められる。

090はツブラジイの柾目板材であり、全長55.0㎝＋α、最大幅11.2㎝、最大厚1.8㎝を測る。

091はツブラジイの柾目板加工材であり、全長114.0㎝＋α、最大幅8.6㎝、最大厚2.3㎝を測る。

092はスダジイの皮つきの芯持ち材加工木である。両端を切断し角材風に加工する。全長23.2㎝、最大幅12.6㎝、最大厚4.8㎝を測る。両端は加工される。

093はチシャノキの両端切断角材である。全長11.6㎝、最大幅5.3㎝、最大厚2.4㎝を測る。

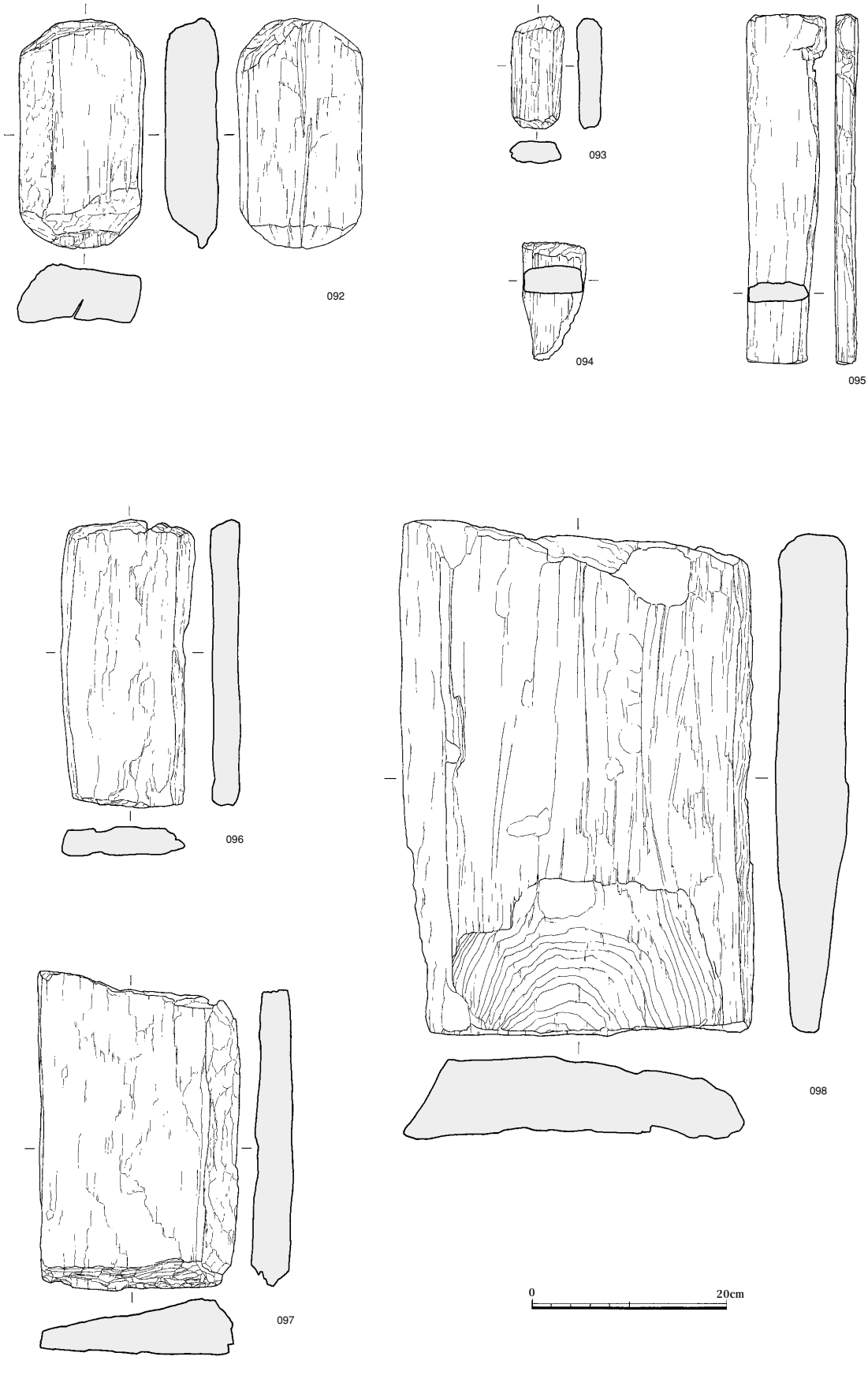
094は柾目板材であり、半分以上の表面が炭化する。最大幅6.2㎝、最大厚2.8㎝を測る。

095はアカガシ亜属の柾目加工材である。一方の長側縁部に加工が認められる。全長35.6㎝、最大幅8.0㎝、最大厚2.3㎝を測る。

096はアカガシ亜属の板材である。全長29.0㎝、最大幅13.6㎝、最大厚3.0㎝を測る。

097はアカガシ亜属のみかん割材であり、樹皮が一部に残る。全長32.2㎝、最大幅20.3㎝、最大厚5.6㎝を測る。先端には加工痕が認められる。農具の原材であると考えられる。

098はクスノキの板目板材である。全長52.0㎝、最大幅35.0㎝、最大厚7.6㎝を測る。



第88図　木器出土遺物実測図⑪　(1/6)

石器

025SST006出土石器（第89～92図）

001は姫島産黒曜石製の石鏃。右脚末端を僅かに、左脚を裏から表への折れで大きく欠損している。脚部の抉りが深く、いわゆる鍬形を呈し、縄文時代早期の所産である可能性が高い。

002は姫島産黒曜石製の石鏃。右脚部を裏面から表面への折れによって欠損している。脚部の抉り深く、長脚。

003は佐賀産と考えられるサヌカイト製の石鏃。裏面から表面への折れにより右脚を欠損している。中央部が左右に張り出した後、両側縁に若干の抉りが見られる形状で、縄文時代後・晩期の所産と考えられる。

004は姫島産黒曜石製の石鏃。裏面から表面への折れによって尖端を欠損している。中央部が僅かに左右に若干張り出す形状で、縄文時代後・晩期の所産と考えられる。

005はサヌカイト製の石鏃。右脚部を若干、裏面から表面への折れによって欠損している。かなり薄く仕上げられてり、脚部の抉りも浅く、弥生時代の所産と考えられる。

006は姫島産黒曜石製の石鏃。裏面から表面への折れにより尖端を欠損しており、左右脚部も僅かに欠ける。

007はサヌカイト製の石鏃。正三角形に近い形状をしている。縄文時代後・晩期の所産と考えられる。

008は緑泥片岩製の磨製石鏃未成品。表裏面及び左右側面に磨き整形が認められるが、各面とも打製の面的な調整痕が若干残存する。基部に左右から抉りを入れようとして失敗し、放棄したものと考えられる。

009は姫島産黒曜石製の石核。節理面を持つ分割礫ないしは剥片を素材にしていると考えられる。少なくとも、まず裏面左半を打面に、正面右半を作業面として剥離→90度転回して、上端を打面に、正面を作業面として剥離→90度転回して、正面右半を打面に、裏面を作業面として剥離しようとして、下半を欠損したために、放棄したと推測される。

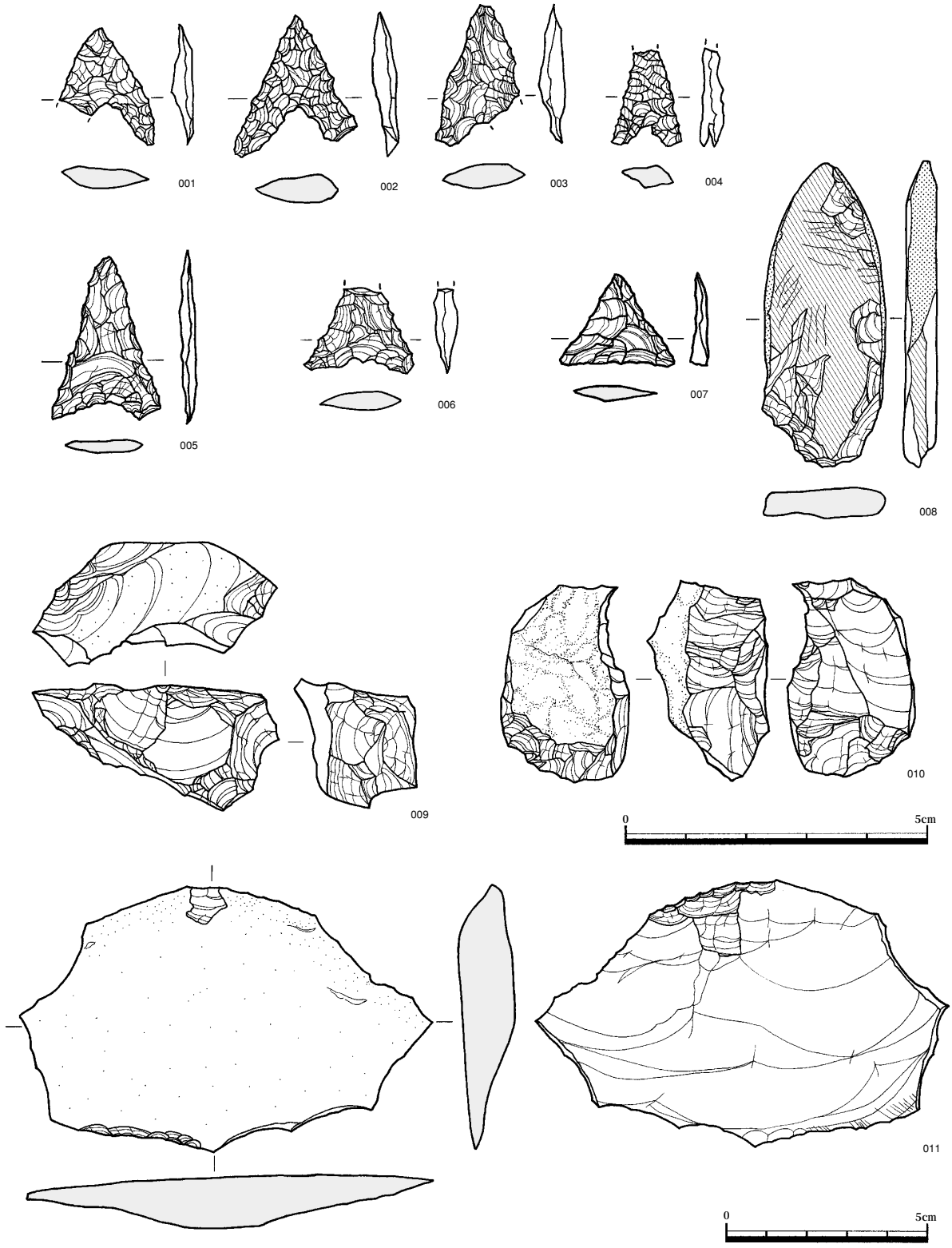
010は姫島産黒曜石製の石核。表面の全面に自然面を残す剥片を素材にしていると考えられる。素材剥片の打面を石核の打面に、素材剥片の右側縁を作業面に設定して、打面及び作業面を固定して剥離している。

011はガラス質安山岩製の使用痕を有する剥片。表面は全面が自然面で、かなり初期に剥離された剥片を素材にしており、末端左半に使用痕が認められる。左右側縁を欠損している。

012は結晶片岩製の打製石斧。背面が礫面からのみ成る剥片を素材としており、基部を裏面から表面への折れによって欠損している。左側縁にのみ若干の整形加工が認められ、下端左半に裏面からのみ刃部形成のための二次加工が見られるが、右半は剥片の自然面と剥離面の成す角度をそのまま刃部に利用している。また、刃部右半の裏面には使用による剥落が看取される。

013は結晶片岩製の扁平打製石斧の刃部片。薄い剥片を素材としており、上半は表から裏への折れによって欠損している。裏面からのみの加工によって刃部が形成されている。

014は緑泥片岩製の局部磨製石斧。ノミ的な使用が想定される。刃部のみに磨きが認められる。表裏面には整形のための平坦加工が残存し、左側縁に近い上半は薄い剥落状の欠損が看取される。

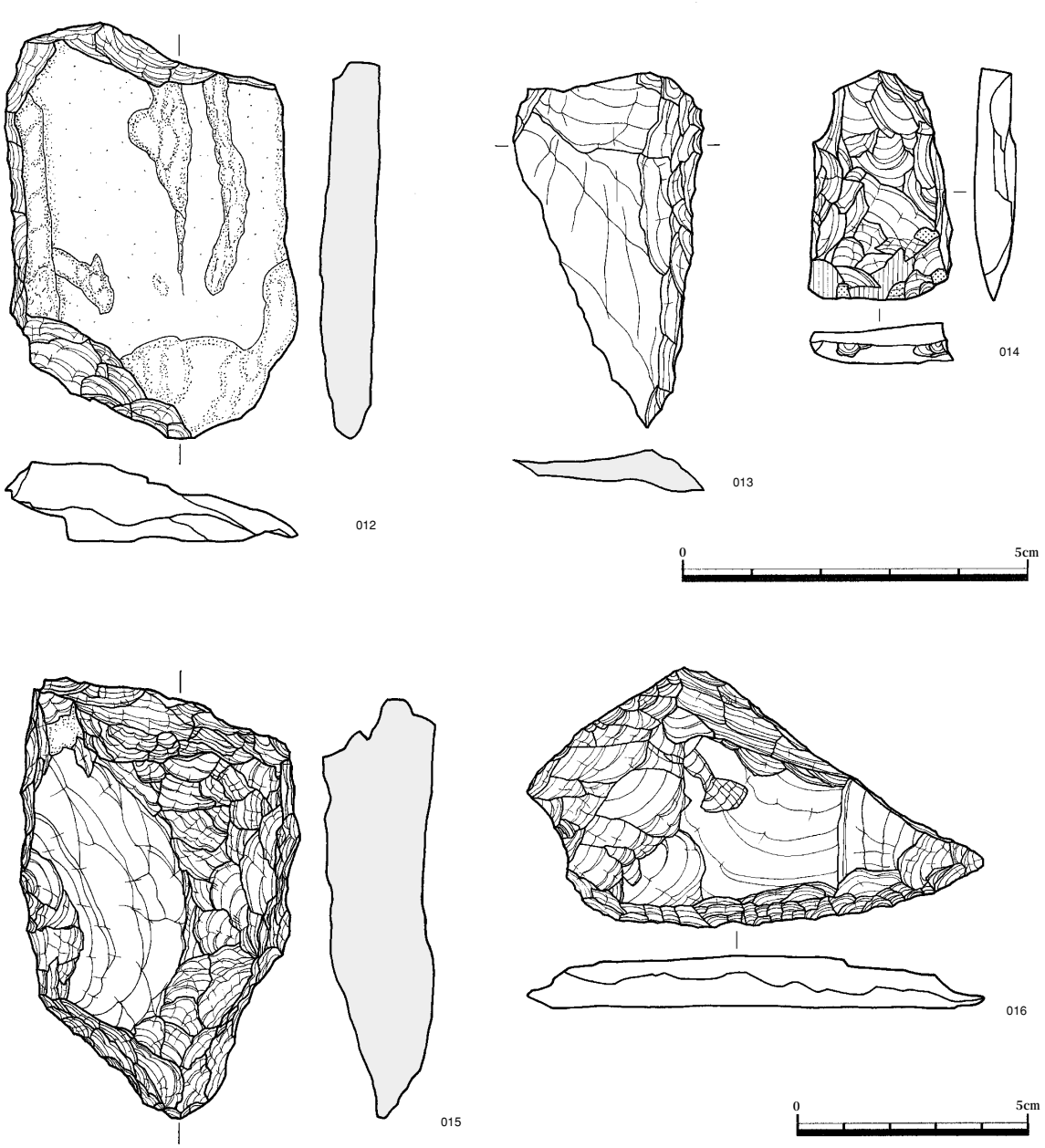


第89図　石器出土遺物実測図①　(1/1、但し011は2/3)

015は結晶片岩製の石鏃の未成品。基部側を裏面からの折れによって欠損している。表面に僅かに自然面を残していることから、表面に自然面を大きく残す剥片を素材にしていると考えられる。表裏面に面的な加工を施した後、右側縁は表面から→裏面からの順で、左側縁は裏面から→表面からの順で整形加工を行っている。

016は緑泥片岩製の石包丁状打製石製品。節理面を持つ扁平な剥片を素材としており、左側縁を若干、右側縁を全体の１/３程度欠損している。周縁部に表裏面から二次加工を施して、整形を行うと共に、両刃を形成している。上半の整形加工は表面から→裏面、下半の整形加工は裏面から→表面からの順で加工している。

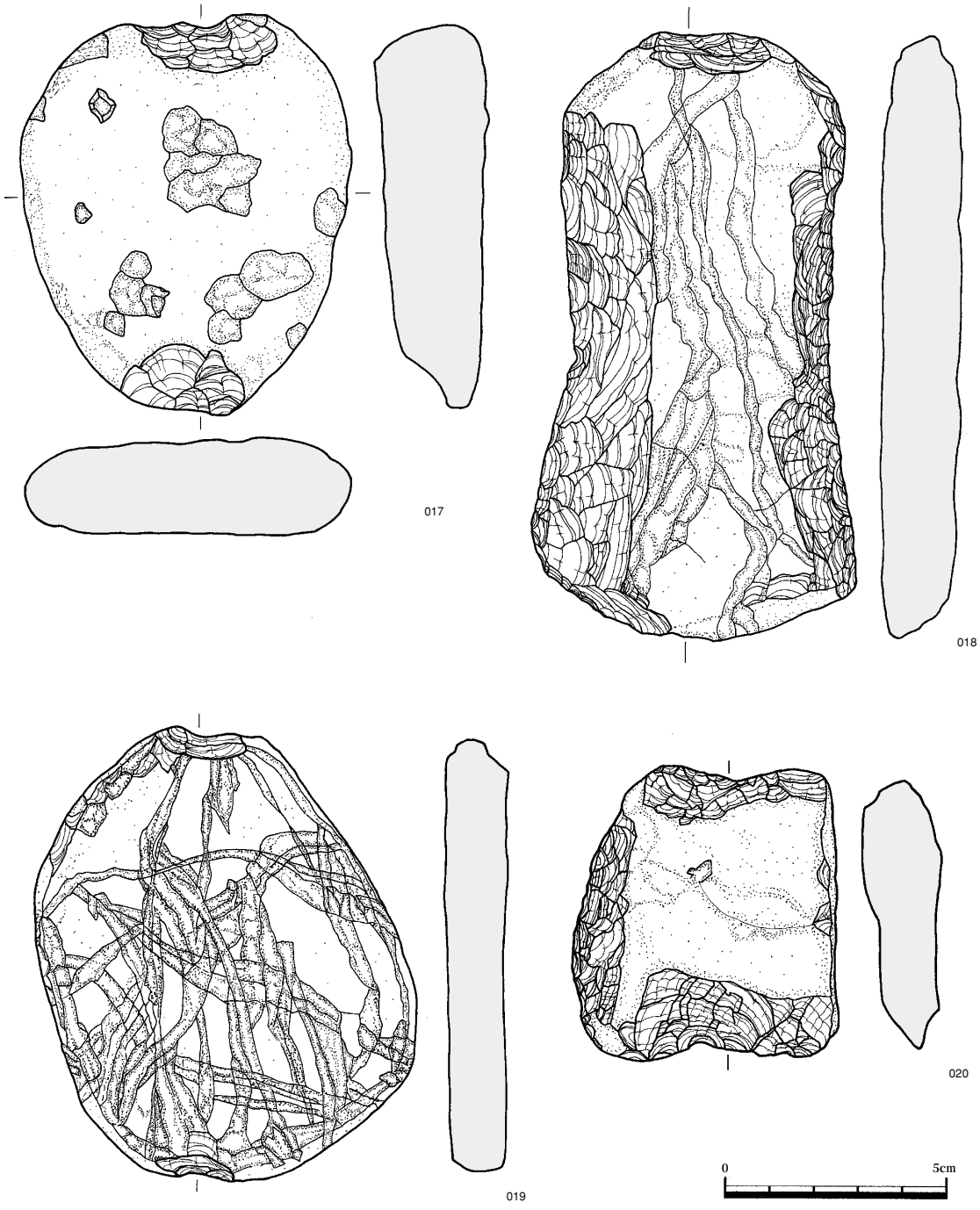
017は凝灰岩製の石錘。楕円形の自然礫を素材とし、上下端に裏面からのみ複数回二次加工を加え、打ち欠きの石錘に仕上げている。



第90図　石器出土遺物実測図②　(2/3､但し013･014は1/1)

018は結晶片岩製の石錘。扁平な自然礫を素材にしていると考えられる。表面の右側縁＋裏面の右側縁→表面の左側縁＋裏面の左側縁の順で整形加工を施して、左右側縁が浅く抉入状を呈する短冊形に仕上げられた後、上端中央に裏面から、下端中央に表面から打ち欠きにより抉りを入れている。表裏面に掛け紐によると推測される、縦方向の浅い窪みが複数看取される。

019は結晶片岩製の石錘。扁平で楕円形の自然礫を素材としており、周縁に整形のための若干の調整の後、上下端に打ち欠きによって抉りを入れている。表裏面に縦方向及び横方向の浅い窪みと、上端抉入部付近に薄い剝落が看取され、縦横に掛け紐が掛けられていたものと推測される。



第91図　石器出土遺物実測図③　(2/3)

020は安山岩製の石錘。扁平な自然礫を素材とし、表裏面・右側縁には自然面が大きく残る。裏面上下端の抉りを入れる加工→裏面右側縁の整形加工→表面の上下端の抉りを入れる加工及び左側縁の整形加工、の順で調整している。

021は砂岩製の砥石。全ての面に研ぎによる磨きが認められる。下半は裏から表への折れによって欠損している。表面には、縦方向と左上～右下方向の擦痕が若干認められ、下方向に高さが減少していることから、研ぎによって中央部分が窪んだと推測される。また、左側面には縦方向の、裏面には横方向の擦痕が若干看取される。表面右側縁近くには薄い剝落が見られる。

022は砂岩製の砥石。楕円形の自然礫を素材としており、裏面及び下端を欠損している。中央部分に縦向きの長楕円形の窪みを磨き整形で形成した後、その中央部分に縦向きの使用痕と、その右側に縦向きの多数の擦痕が認められる。使用の後焼成を受けており、表面の右半が赤化し、左半はススが付着しており、上端付近は被熱により弾けたような小円形の剝落痕が看取される。

023は安山岩製の敲石。棒状の自然礫をそのまま使用しており、上下端に顕著な潰れ痕・剝落が認められる。

024は凝灰岩製の石皿片。表面には、多数の敲打痕や使用による摩耗が看取される。上端を除く左右側縁・下端側縁は破損面で、破損後に焼けにより全面が赤化している。

025SST008Ⅲ出土石器（第93～96・98図）

025は姫島産黒曜石製の石鏃。右脚部を若干、裏面から表面への折れによって欠損している。脚部の抉りはやや深い。

026は姫島産黒曜石製の石鏃。左脚を若干欠損している。中央部が若干左右に張り出した後、両側縁に若干の抉りが見られる、縄文時代後・晩期の所産と考えられる形態である。

029は姫島産黒曜石製の石鏃。尖端を僅かに欠損している。やや短形だが、五角形に近い形状を呈し、縄文時代後・晩期の所産と考えられる。

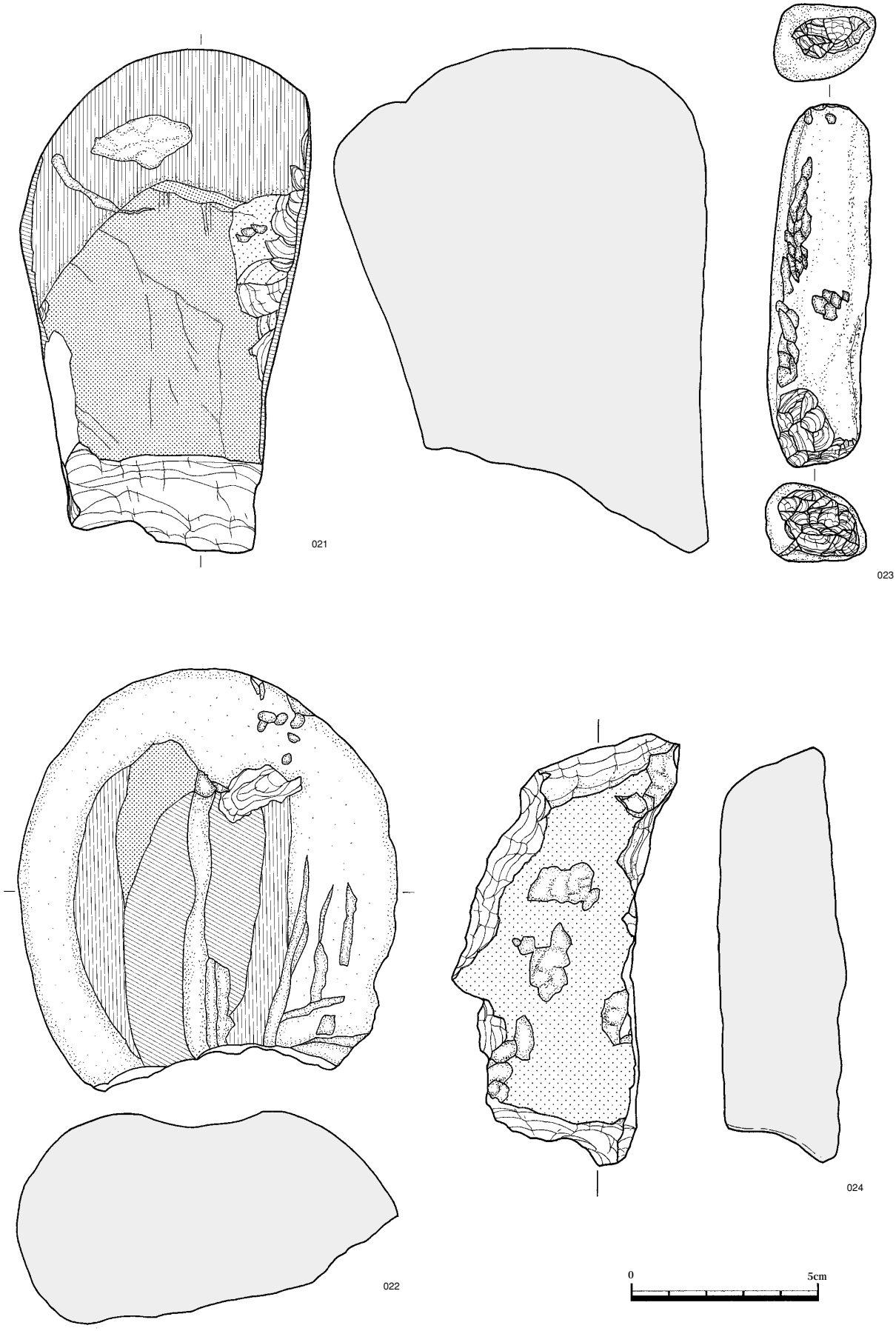
031は姫島産黒曜石製の石鏃の未成品。比較的初期段階の未成品で、形状もまだ整っておらず、厚みもかなり残る。剝離面の観察から、表面右半と裏面右半に押圧剝離が認められ、表面左半と裏面左半にはなお素材の面が残存しており、調整が及んでいない。

038は流紋岩製の石核。上面の自然面を打面とし、正面を最終作業面として剝離しているが、その前段階として90度の打面転回で幅広剝片を剝離している。裏面は節理による欠損面である。正面の作業面には頭部調整が顕著に残る。

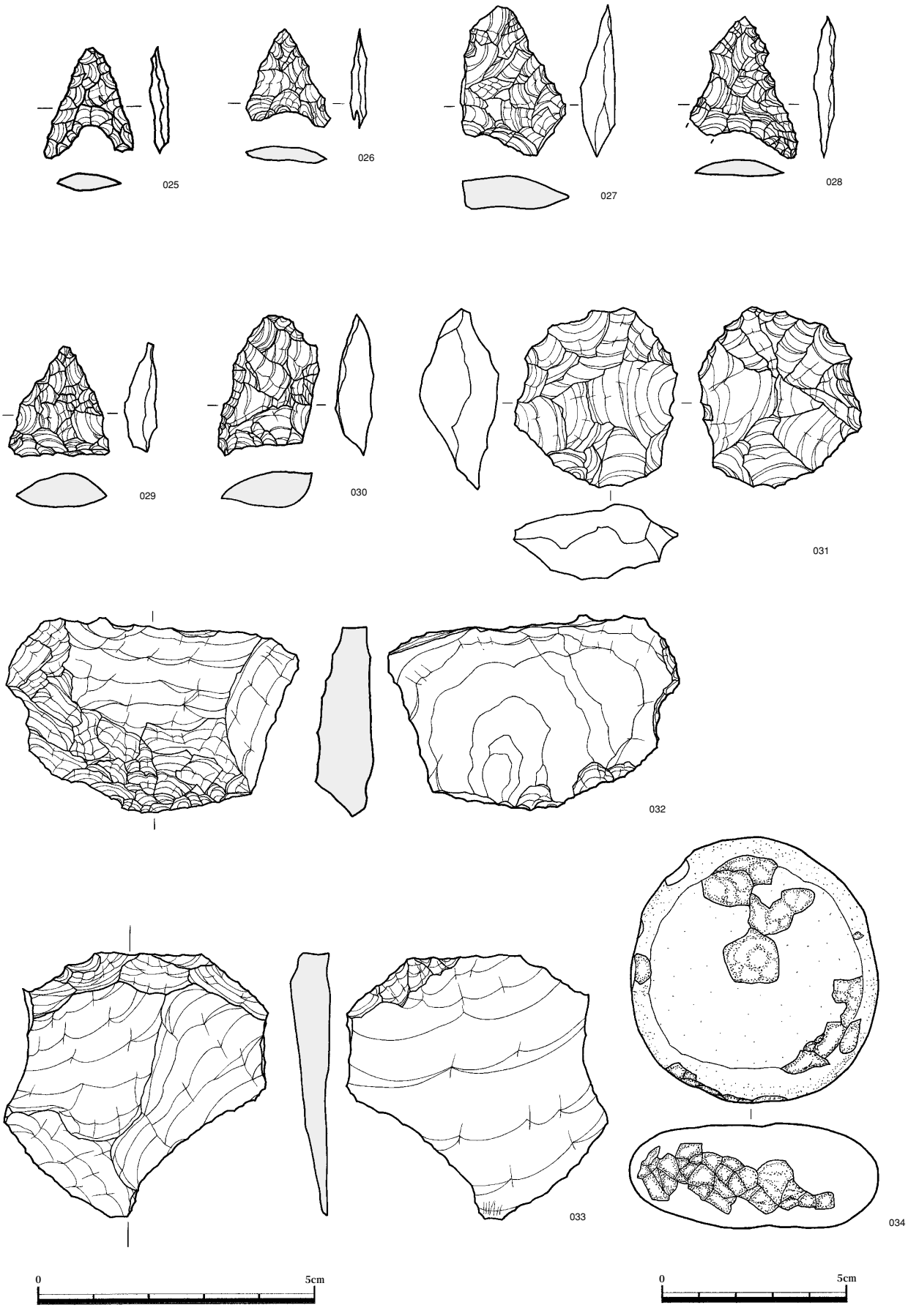
043は結晶片岩製の小形の磨製石斧で、工具として用いられたと推測される。扁平な剝片を素材にしていると考えられる。表裏面に面的な調整→磨き整形を施した後、周縁部に整形と刃部形成のための二次加工を行っている。但し、表裏面共に磨き残された調整痕が割合見られる。

044は安山岩製の柱状片刃石斧。基部を右側縁から左側縁方向への折れによって欠損しており、右半も失われている。打製の面的な調整の後、磨きによって表面を深い角度で、裏面を浅い角度で整形し、片刃を形成している。左側面は平坦剝離が大きく残存するが、若干の磨き整形も認められる。刃部には若干の浅い剝離が看取され、使用痕と推察される。

045はサヌカイト製の柱状片刃石斧。小形でノミ的な用途が予想される。刃部を欠損している。左



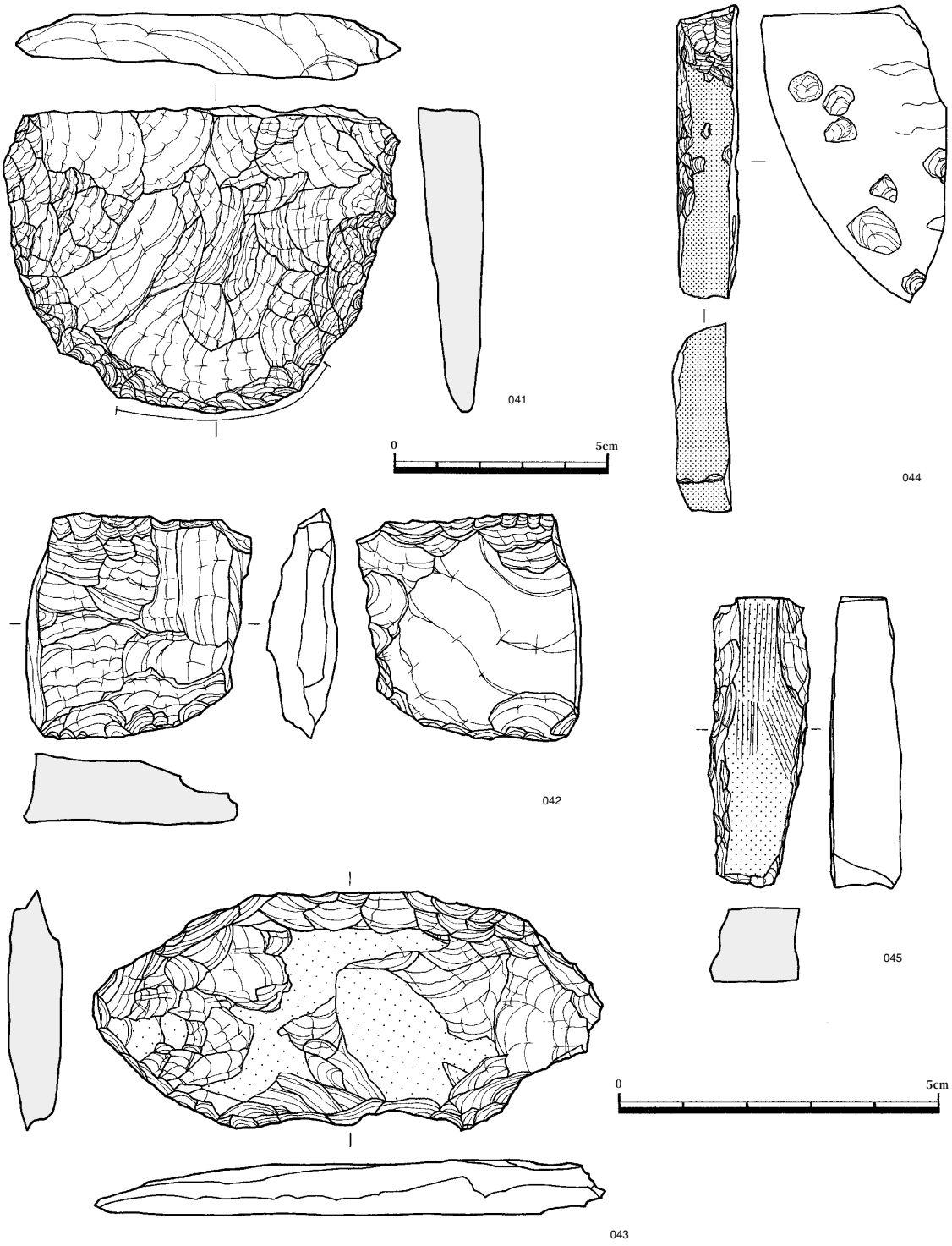
第92図　石器出土遺物実測図④　(2/3)



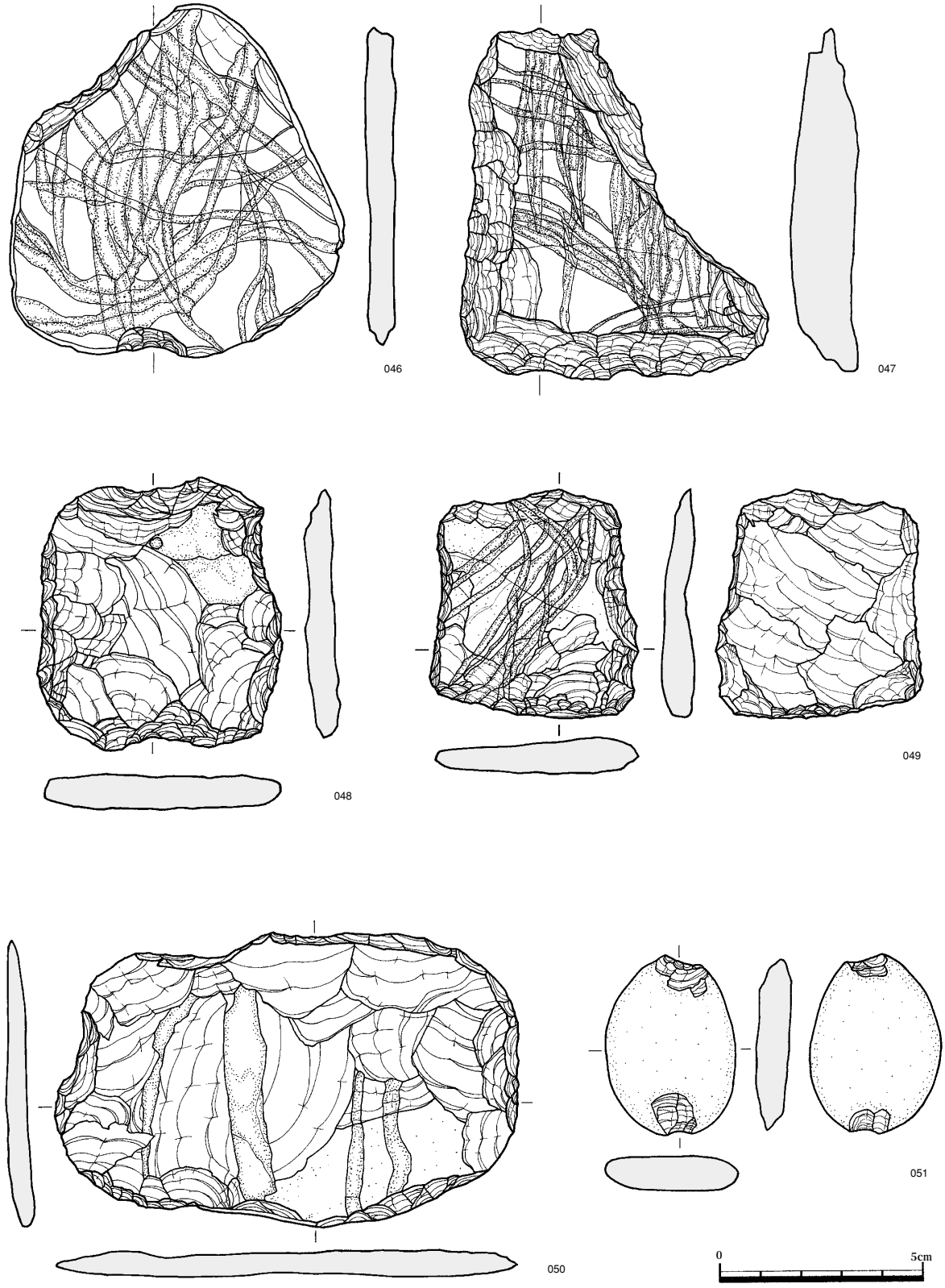
第93図　石器出土遺物実測図⑤　(1/1、但し034は2/3)



第94図　石器出土遺物実測図⑥　(1/1)



第95図　石器出土遺物実測図⑦　(1/1、但し041・044は2/3)



第96図　石器出土遺物実測図⑧　(2/3)

右側縁は面的な加工が残存し、表裏面及び上端は磨き整形が認められる。裏面には一部平坦加工が磨き残されている。また、表裏面に磨き時と考えられる擦痕が看取される。

046は結晶片岩製の石錘。扁平で薄い板状剥片を素材としており、上端右半を裏から表への折れによって欠損している。周縁部は折り取ることで整形しており、その後、下端の中央には表裏面からの打ち欠きによって抉りを入れている。表裏面に縦横二方向の掛け紐によると考えられる薄い窪みが看取される。

047は結晶片岩製の石錘。扁平な剥片を素材としており、右側縁を裏面から表面への折れによって欠損している。周縁部に表裏面からの整形のための二次加工を施しており、右側縁には若干の抉りが認められる。表裏面に縦横の掛け紐によると考えられる浅い窪みが複数看取される。また下端中央には掛け紐によると推測される抉入状の欠損が認められる。

050は緑泥片岩製の石錘。表面に分割面ないしは自然面を残す剥片を素材とし、裏面には主要剥離面が大きく残る。表面全体に面的な加工を施した後、表面周縁部に整形のための二次加工を施し、更に裏面周縁部にも若干の整形加工が為されており、最後に上下端に打ち欠きによって抉りを入れている。表面に横方向の４条の掛け紐によると考えられる圧痕が見られ、裏面にもそれに対応する位置に６条の同方向の圧痕が認められる。上端の抉入部に連結する薄い剥落は掛け紐による可能性がある。

057は軽石製の浮子。成品に近い自然礫を素材にしていると考えられる。右側面を除き、磨き整形が認められる。右側面中央部上寄りから裏面中央上寄りに向けて穿孔しており、右側面の孔から縦方向に掛け紐によると推測される圧痕が左側面にも対応するように圧痕が見られる。また、裏面右側縁下半には用途不明の磨き整形された抉りが看取される。

025SST008Ⅲａ出土石器（第93・94・96～98図）

034は花崗岩製の敲石。楕円形の自然礫をそのまま使用しており、下端側縁を中心に潰れ痕が顕著に認められる。

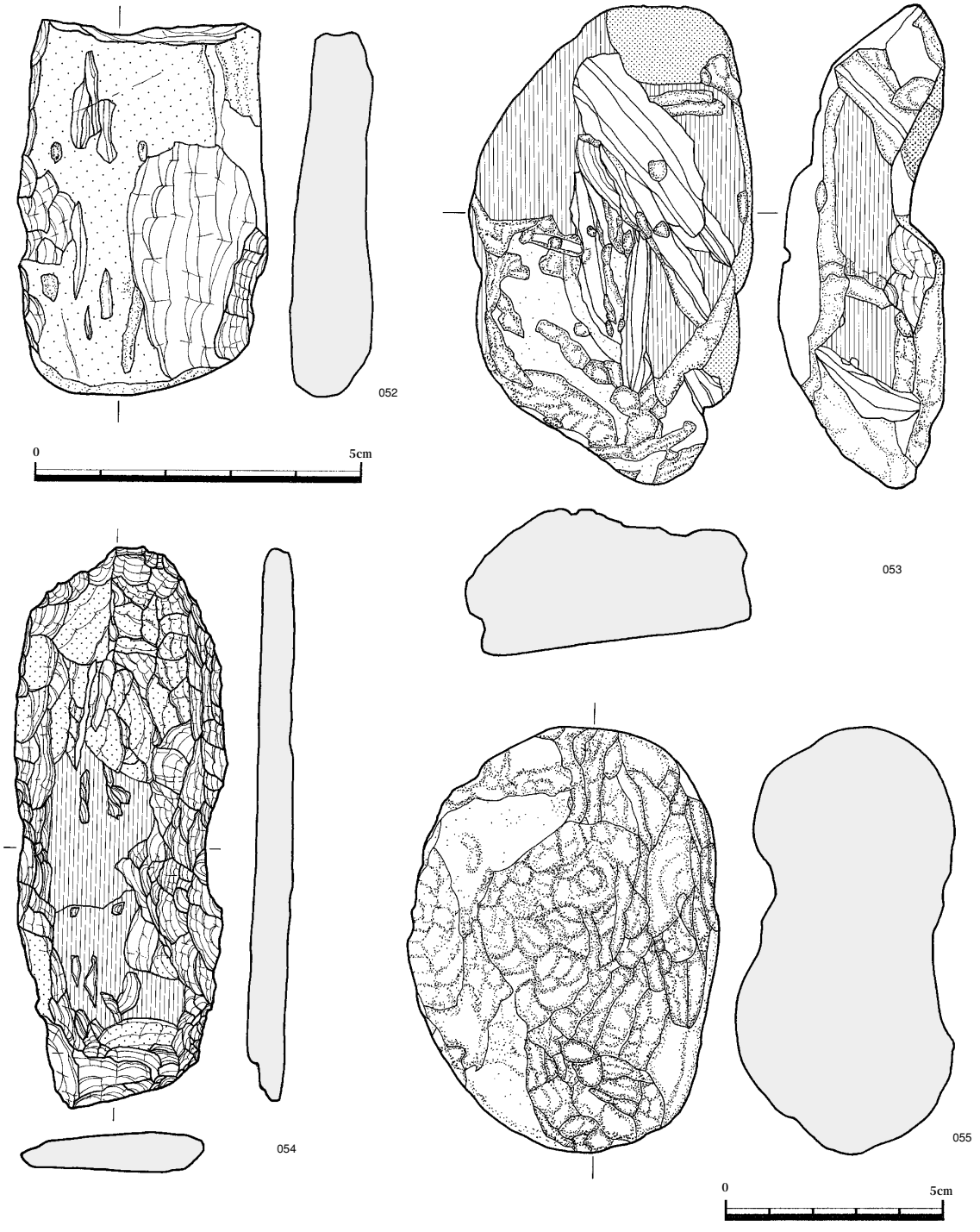
036は姫島産黒曜石製の石核。まず、正面を打面をとし、上側縁手前を作業面として剥離→180度打面転回し、裏面を打面とし、上側面奥側を作業面として剥離→90度転回し、最終的に上端を打面とし、正面を作業面として剥離した後、遺棄されたと考えられる。

039は金山産と考えられるサヌカイト製の削器。上端に自然面を残す幅広剥片を素材にしており、右側縁を表面から裏面への折れによって欠損している。左側縁に裏面からのみ刃部形成のための二次加工を施しており、裏面には若干の使用痕も認められる。

048は結晶片岩製の石錘。扁平な礫片を素材にしていると推測され、裏面には大きく礫面が残り、表面にも一部残存する。表面に面的な加工を施した後、周縁部に整形のための二次加工を為し、更に上下端及び右側縁上半に表裏面から打製の打ち欠きにより抉りを入れている。

053は軽石製の砥石。自然礫を素材にしていると考えられる。表裏面・右側縁に磨き整形が認められる。表面から右側面にかけて、左上–右下方向の研ぎによる深く鋭角的な抉りが、裏面に横方向の広くなだらかな抉りが看取される。

055は角閃石安山岩の自然礫を素材とする石製品で、表裏面の中央に凹みが認められ、凹石と推測されるが、表裏面の縦横に紐を掛けたと思われる浅い凹みが複数看取される。



第97図　石器出土遺物実測図⑨　(1/1・2/3)

056は軽石製の浮子。扁平な楕円形に近い自然礫を素材にしていると考えられる。表裏面及び側面に磨き調整を施して整形している。表面上端付近及び裏面上下端付近と、表裏面の左側縁中央に掛け紐によると推測される剝落痕が看取されるため、十字に掛け紐を掛けていたものと思われる。

058は角閃石安山岩製の石包丁状石製品ないしは砥石と考えられる。扁平な礫片を素材としており、左右側縁側は欠損している。周縁に片刃を形成する表裏面からの二次加工が、裏面には若干の擦痕が認められる。

025SST008Ⅲb（第93・95～97・99図）

027は姫島産黒曜石製の石鏃未成品。表面は調整が面全体に及んでいるが、裏面は半ばしか及んでおらず、右脚及び左側縁の欠損は両者とも裏面から表面への折れなので、裏面の調整中に欠損して製作を放棄したと考えられる。

028は姫島産黒曜石製の石鏃。表から裏への折れにより左脚部を欠損している。上端に近い部分の左右が張り出し、中央部の左右側縁にくびれが入る形態で、縄文時代後・晩期特有のものである。

030は姫島産黒曜石製の石鏃。尖端の作り出しが進んでおらず、右脚部が裏面部の調整の際に欠損したと考えられ、未成品と推測される。中央部が左右に張り出し、五角形に近い形状を呈すると思われ、縄文時代後・晩期の所産と考えられる。

041は安山岩製の石鏃と考えられる。基部側を表から裏への折れによって半損している。扁平な礫片ないしは剝片を素材としており、裏面は中央部に大きな自然面を残す。表面にまず面的な調整を施した後、裏面の周縁→表面の周縁に整形のための二次加工を施し、最後に片刃となるような刃部調整を行っている。表面の刃部には使用による摩耗痕が看取される。

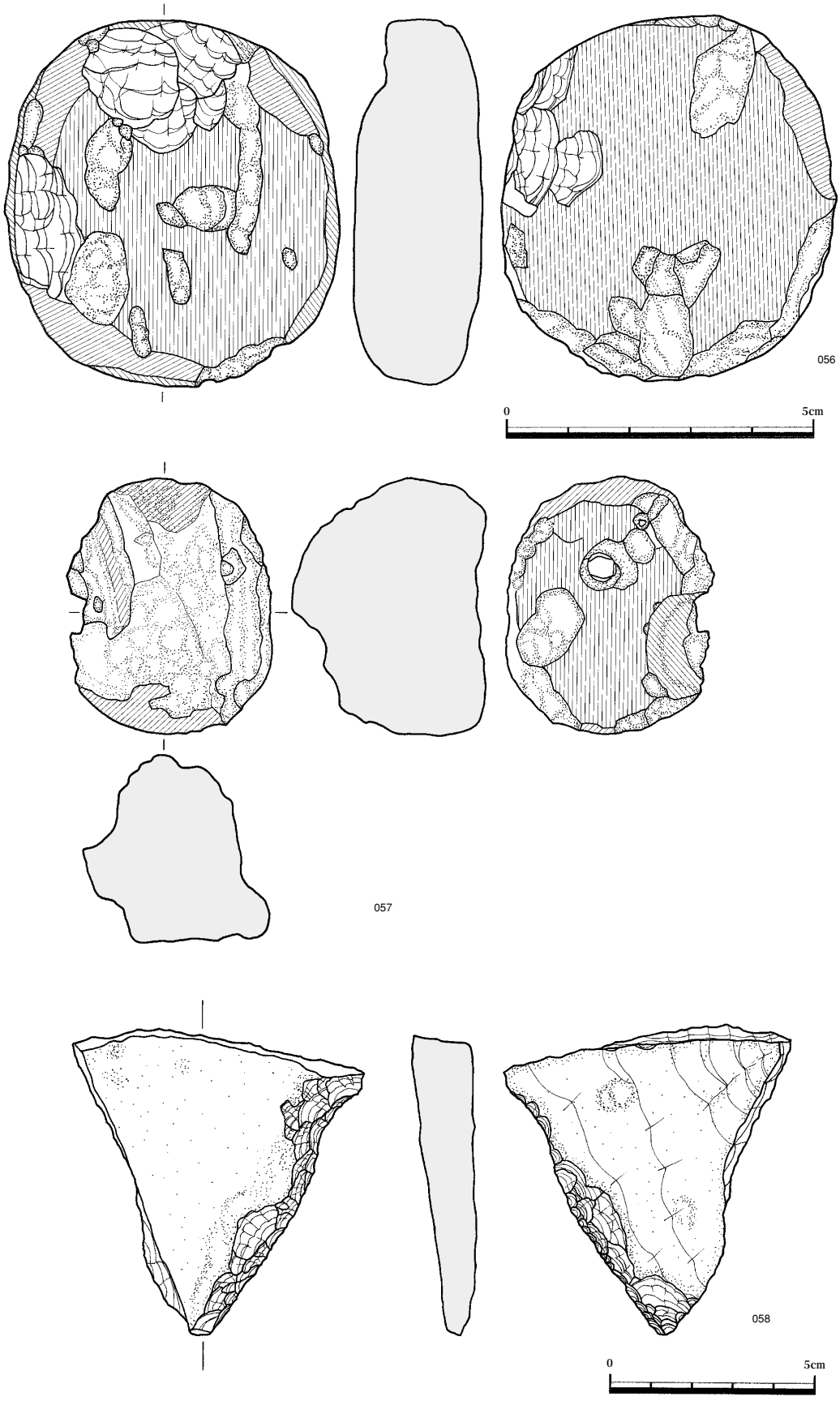
049は結晶片岩製の石錘。正面に大きく礫面ないしは節理面を残しており、扁平で薄い剝片を素材にしていると考えられる。表裏面に面的な調整を施した後、周縁に整形のための二次加工を行い、更に上下端の側縁に打ち欠きによる抉りを入れている。左右側縁も整形の段階で浅い抉入状となっている。表裏面に掛け紐によると考えられる、右上～左下方向の浅い窪みが看取される。

051は佐賀関産と考えられる蛇紋岩製の石錘。海岸部に産する玉礫を素材とし、上下端に表裏から複数回の打製の打ち欠きが入れられている。

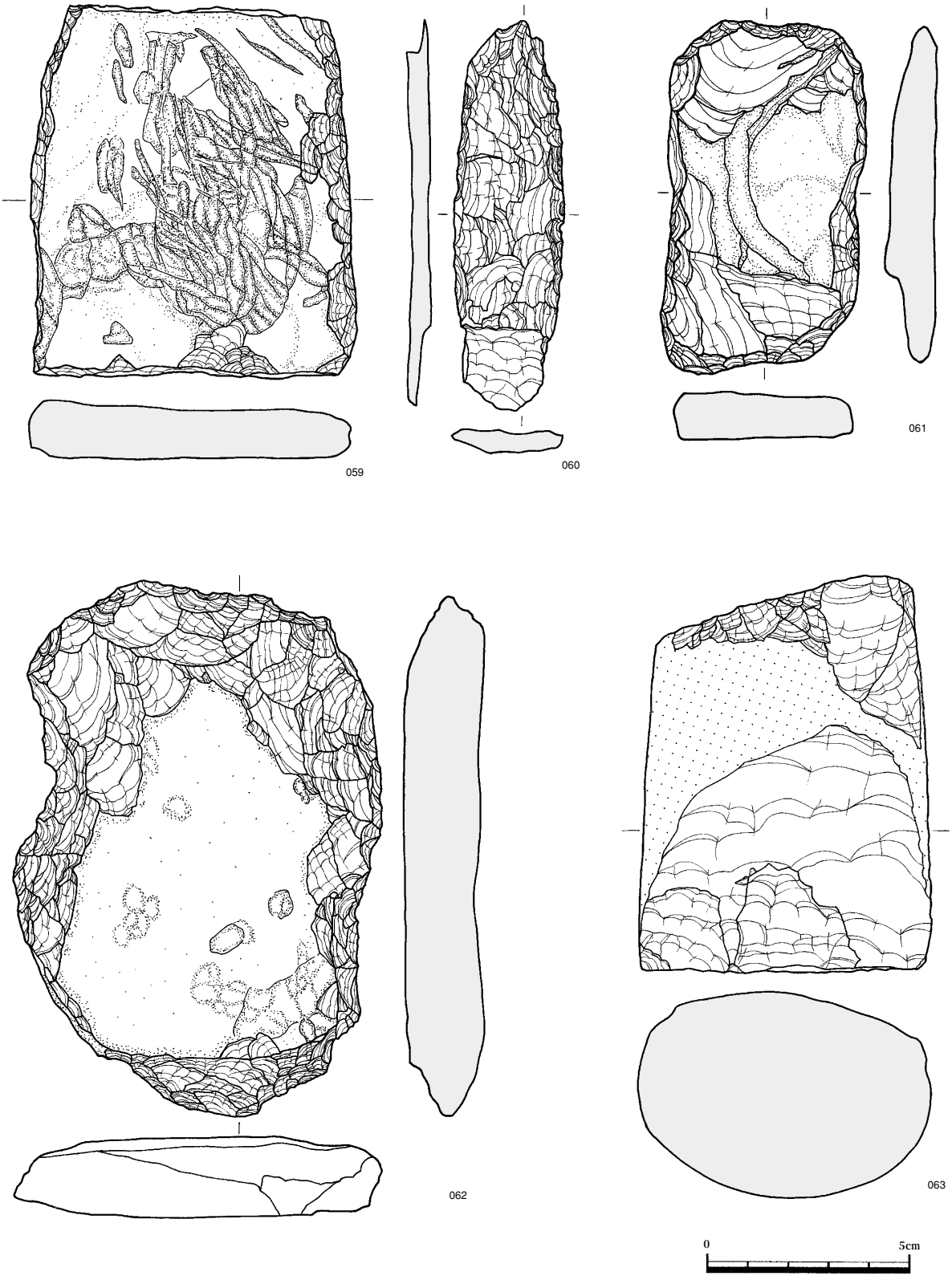
052は結晶片岩製の砥石。剝片ないしは扁平な礫片を素材としていると考えられ、表裏面に面的な調整を施した後、周縁部に整形のための二次加工を為し、更に表裏面に磨き整形を行っているが、面的な加工はかなり磨き残されている。

054は結晶片岩製の砥石。剝片ないしは扁平な礫片を素材としていると考えられ、表裏面に面的な調整を施した後、周縁部に整形のための二次加工を為し、更に表裏面に磨き整形を行っているが、面的な加工はかなり磨き残されている。

059は角閃石安山岩製の砥石。扁平な自然礫を素材としており、上端は分割面である。整形のため、左側縁に若干の打ち欠きと、右側縁に表裏面からの顕著な二次加工が認められる。表面に縦及び横方向の、裏面には斜め方向の、研ぎによる擦痕や窪みが看取される。



第98図　石器出土遺物実測図⑩　(1/1・2/3)



第99図　石器出土遺物実測図⑪　(2/3)

025SZ008Ⅲc（第93～95図）

032は佐賀産と考えられるサヌカイト製の掻器。幅広剥片を素材としており、下端は裏から表への折れにより欠損している。打面部に急斜度の調整が施されて刃部を形成している。刃部の裏面部には使用によると推測される微細な剥落が見られる。

033は金山産と考えられるサヌカイト製の二次加工を有する剥片。裏面の打面付近に若干の二次加工が見られる。表面打面付近には頭部調整が顕著に認められる。

035は姫島産黒曜石製の石核。正面右半を打面として下端から、裏面左半を剥離→正面を先ず打面として右側面を作業面として剥離→右側面を打面として剥離→石核調整時と考えられる剥離面の上端を打面として、正面を最終作業面として剥離している。

037は姫島産黒曜石製の石核。少なくとも、正面を打面として右側面を作業面に剥離した後、正面を最終作業面として剥離している。

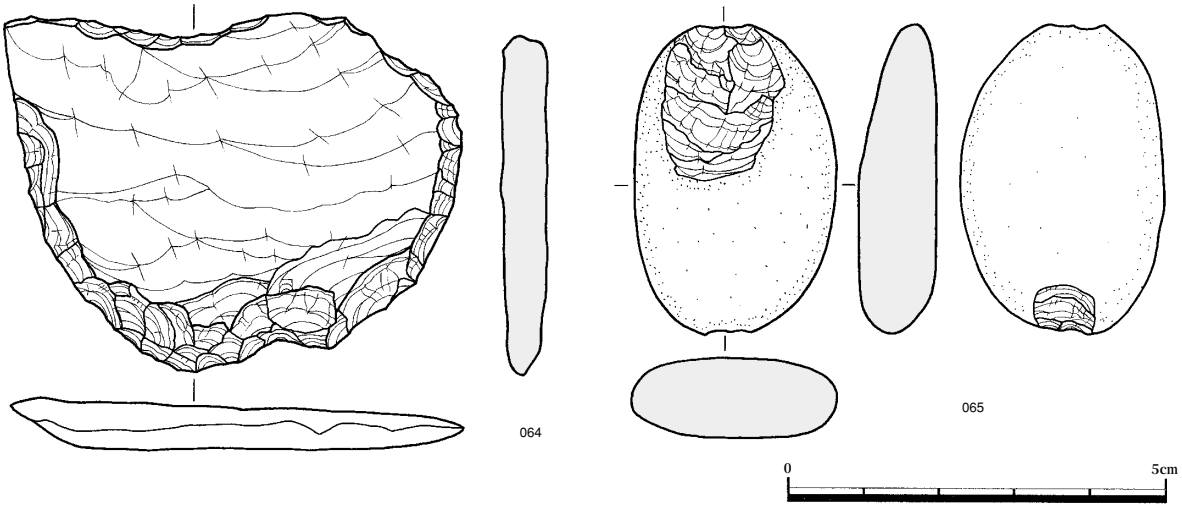
040は安山岩製の垂飾状石製品。表面が礫面のみで構成される剥片を素材としている。周縁部に整形のための二次加工を施した後、上端付近に裏面から穿孔を行っている。

042は安山岩製の打製石斧。剥片を素材とし、裏面中央に主要剥離面が大きく残る。小形で工具的な用途が推測される。左半は裏から表への、右側縁は表から裏への折れによる欠損である。表面全面に平坦化のための面的な調整の後、上下端に表裏面から二次加工を施し、刃部を形成している。

025SST009Ⅳ（第99～102図）

060は結晶片岩製の磨製石鏃の未成品と考えられる。基部の表面が剥落している。表裏面から全周縁に整形のための二次加工が施されて、上端は尖頭状に、基部は丸い形状になっている。それ以前に、表面には平坦剥離が顕著に為されて、厚さが0.90㎝とかなり薄くされている。

061は緑泥片岩製の石錘。表面の中央部と裏面部に大きく礫面を残し、扁平な礫片を素材にしていると考えられる。表面に面的な加工を施した後、周縁部に整形のための二次加工を為し、最後に上下端及び左右側縁の中央部に打製の打ち欠きにより抉入部を形成している。表面中央部に縦向きの蛇行



第100図　石器出土遺物実測図⑫ （1/1）

した、掛け紐によると推測される圧痕が認められる。裏面上端右端に若干の剥落が看取される。

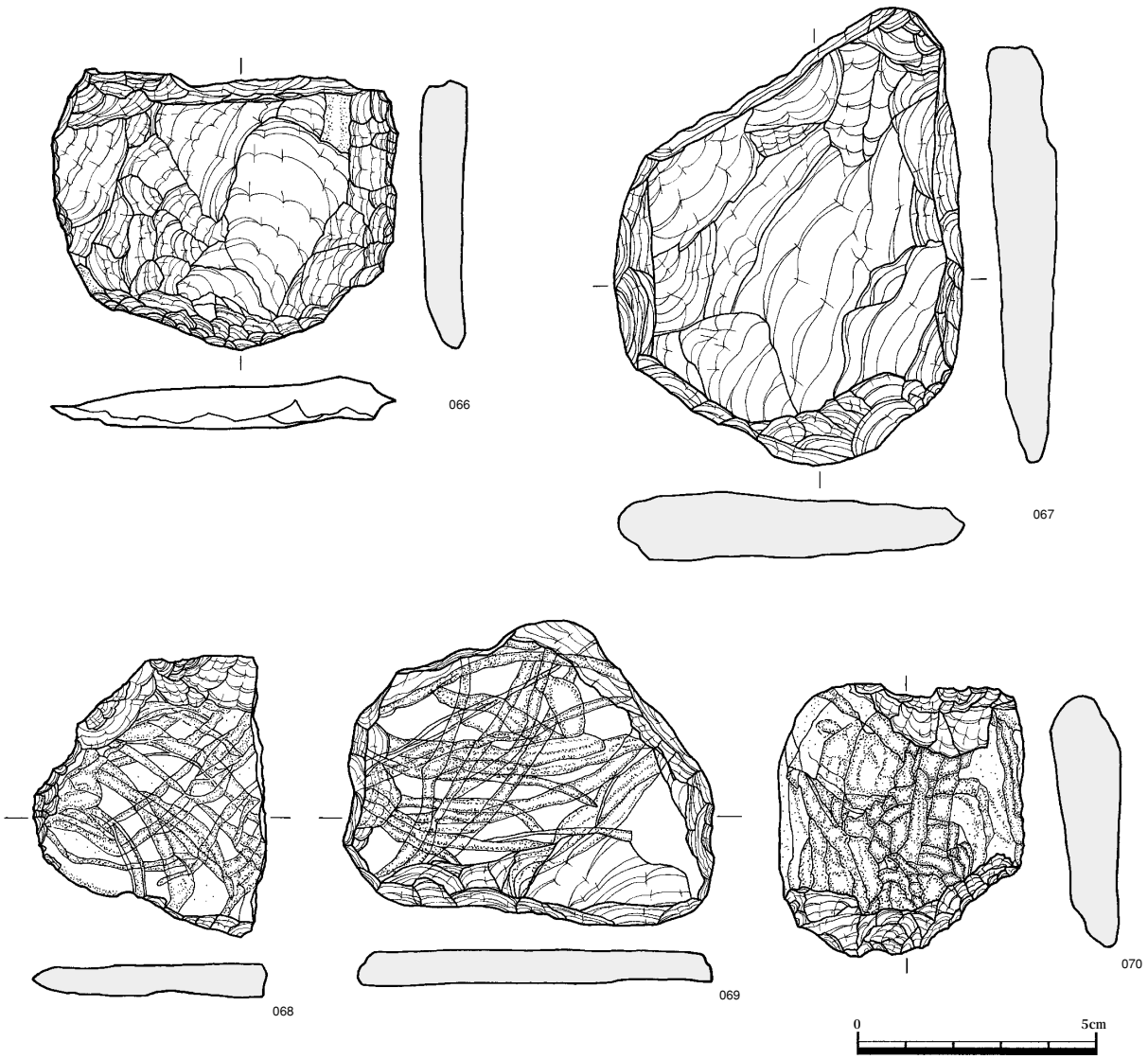
062は結晶片岩製の石鍬。扁平な自然礫を素材とし、周縁部に裏面→表面の順で整形のための二次調整を加えている。左側縁は若干抉入状となっている。刃部は両刃で、裏面は使用によってか、若干の摩耗が認められる。

063は安山岩製の蛤刃磨製石斧。基部・刃部を欠損しており、身部のみ残存。基部側は欠損後に若干の二次加工が認められる。

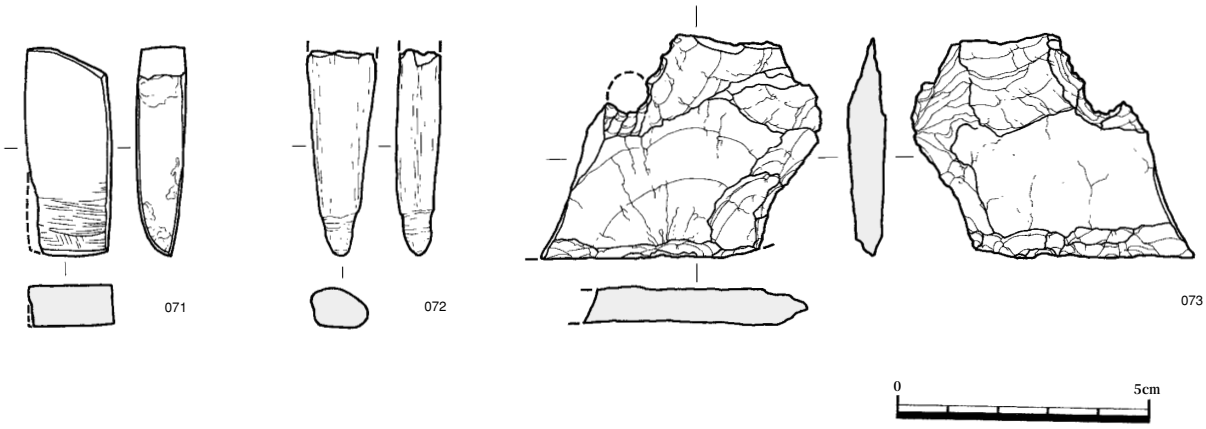
064は結晶片岩製の扁平打製石斧で、縄文時代後・晩期の所産と考えられる。基部側を裏から表への折れによって欠損している。裏面に平坦な自然面を大きく残す剥片を素材とし、自然面の端のなだらかな曲面を形状に生かしている。裏面から周縁に二次加工を施して整形している。刃部中央の抉入部は使用による欠損と考えられる。

065は佐賀関産と考えられる蛇紋岩製の石錘。円礫を素材としており、整形加工は為されず、裏面から上端に、表面から下端に打ち欠きによる抉りが施されている。

066は結晶片岩製の扁平打製石斧。表面に礫面を残す剥片ないしは礫片を素材にしていると考えら



第101図　石器出土遺物実測図⑬　(2/3)



第102図　石器出土遺物実測図⑭　(2/3)

れる。基部側を半ば以上、裏から表への折れによって欠損している。表裏面に面的な調整を施した後、周縁部に整形のための二次加工を表裏面から行い、更に裏面から刃部形成のための加工を施しており、片刃となっている。

067は結晶片岩製の扁平打製石斧。表裏面に扁平化するための面的な調整を施した後、周縁部に整形のための二次加工を行うと共に刃部を形成している。基部は表から裏への折れによって欠損しており、刃部左半は使用による欠損の後、リダクションで刃部再生している。

068は結晶片岩製の石錘。表裏面に一部礫面を残しており、扁平な礫ないしは礫片を素材にしていると考えられる。右半は表から裏への折れによって欠損している。表裏面に面的な調整を施した後、周縁部に整形のための二次加工を行っている。その後、下端左半と右側縁中央部に、表面から打ち欠きによって抉りを入れている。それぞれの抉入部付近を起点とする掛け紐によると推測される、複数の浅い窪みが表裏面に看取され、抉入部に接する部分には薄い剝落も認められる。

069は結晶片岩製の石錘。薄い剝片を素材としており、右側縁上半を裏面から表面への折れによって欠損している。周縁部に整形のための二次加工を施した後、上下端中央部に裏面からの打ち欠きによって抉りを入れている。それぞれの抉入部付近を起点とする掛け紐によると推測される、複数の浅い窪みが表裏面に看取され、抉入部に接する部分には薄い剝落も認められる。

070は結晶片岩製の石錘。平坦な自然礫を素材にしており、右側縁を表から裏への折れによって欠損している。下側縁に整形加工を施した後、上下端中央に打ち欠きによって抉りを形成している。表面下端抉入部付近に掛け紐によると考えられる薄い剝落が見られ、また表面に複数の縦方向・横方向の浅い窪みが看取されるが、これも掛け紐の圧痕と推測され、掛け紐が縦横に掛けられていたと思われる。

071はノミ形刃石斧である。粘板岩製であり、暗灰緑色を呈する。全面が研磨され、刃部に擦痕が認められる。現存重量13.9g、長さ41㎝、幅1.7㎝、厚さ0.9㎝を測る。

072は片岩製の穿孔具である。先端部のみ遺存し、基部は欠損する。暗青灰色を呈し、現存長4.1㎝＋α、径0.8～1.4㎝、現存重量6.7g を測る。

073は結晶片岩製の石包丁状打製石製品の一部である。破片のほぼ中央付近に両側からによる穿孔が１ヶ所認められる。灰黒色を呈し、厚さ0.75㎝を測る。

第５表　石器組成表　上段個数　下段重量(g)

器種 / 石材	磨製石鏃	石鏃	削器類	尖頭状石器	垂飾状石製品	石鍬	打製石斧	磨製石斧	石包丁	石錘	浮子	砥石	敲石	石皿	凹石	二次加工剝片	剝片類	原石	石核	合計
姫島産黒曜石		12 24.0														1 2.6	108 656.3		20 372.2	141 1055.1
姫島産ガラス質安山岩																	3 119.2			3 119.2
ガラス質安山岩										1 390.0							1 14.0			2 404.0
金山産サヌカイト		3 2.3	2 41.8					1 15.5								1 4.7				7 64.3
チャート																1 9.3	3 13.0			4 22.3
結晶片岩				1 23.5	1 0.6	2 520.1	5 332.5	1 39.0	1 39.9	9 995.4		3 133.0		1		8 367.7	25 197.7			57 2640.4
緑泥片岩	1 9.2							1 6.3	1 76.3	2 174.0										5 265.8
蛇紋岩										2 36.9								1 2.9		3 39.8
流紋岩																	4 45.9		1 18.0	5 63.9
安山岩					1 4.9	1 137.7	1 16.7	2 759.1		1 104.0			1 87.6				6 147.3			13 1257.3
角閃石安山岩									1 88.5			1 212.0		2	1 442.0					5 742.5
凝灰岩										1 191.5				1 172.0						2 363.5
軽石											3 106.2	1 72.4								4 178.6
砂岩												1 635.0								1 635.0
花崗岩													1 200.1							1 200.1
シルト岩													1 214.0							1 214.0
合計	1 9.2	15 26.3	2 41.8	1 23.5	2 5.5	3 657.8	6 349.2	5 819.9	3 204.7	16 1891.8	3 106.2	6 1052.4	3 501.7	4 172.0	1 442.0	11 384.3	150 1193.4	1 2.9	21 390.2	254 8265.8

動物遺体

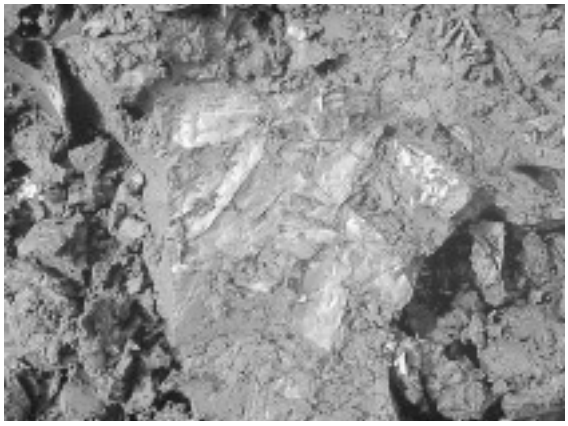
動物遺体に関しては、総数六百数十点におよぶ獣骨類を検出することができ、これらの中には完存する頭骨数点も含まれる。内容的には、下郡桑苗遺跡においてブタと認定されたものと同種の頭骨をはじめ、タイと推定される魚骨、シカ、カワウソ、ナベツルなどがある。これらは、下郡桑苗遺跡において問題提起された弥生時代のブタを初め、当該期の動物相を考えるにあたり極めて貴重な資料と言える。そのほとんどが木製品と同様に第Ⅲ層土からの出土であり、洪水等の自然営力によって上流部より運ばれてきたものと推定される。これらの動物遺体に関しては、現在もなお分析中であり、その結果については後続刊に掲載する予定である。



第103図　動物遺体頭骨出土状況

植物遺体

植物遺体は第Ⅳ層を中心に出土し、オニグルミ、イモイガシ、トチノキなどの出土が認められた。第Ⅲ層土にもオニグルミなどの出土が少量ながら認められるものの、非常に強い粘性を有する第Ⅳ層土は第Ⅲ層に比して、多量の植物遺体を内包しており、これらの量の違いは土層の堆積環境の差異に起因するものである。



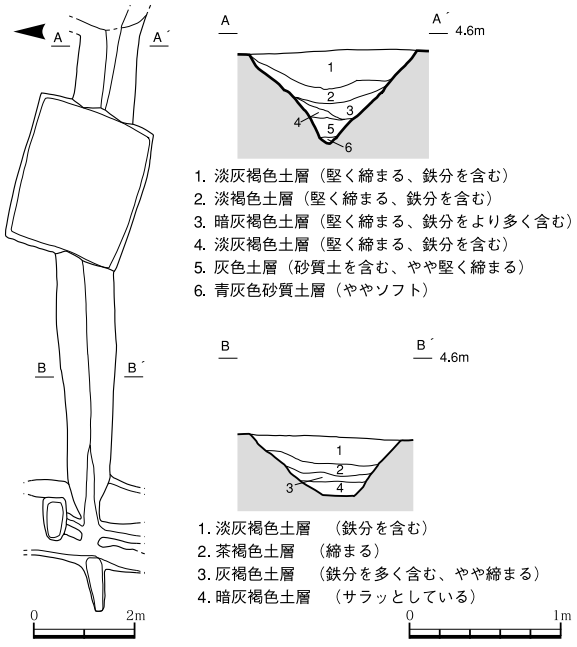
第104図　植物遺体出土状況



第105図　出土オニグルミ

025SD010（第106図）

調査区南東角から西方向へ延びる溝状遺構である。今次の調査対象範囲内において約12.0m検出することができた。溝の断面形状はV字形をなすが、西側へ緩傾斜をもって推移する中で、次第にU字形へと変化する。規模は検出面での幅1.1m、深さ0.6mを測るが、西側は幾分規模を減じる状況を看取することができる。西端は東側底面と0.2mレベル差をもって流路へ接続する。溝内堆積土層は、東側セクションの断面観察所見から、複数回におよぶと推定される掘り返し痕跡が認められ、溝機能当時に溝の改修、浚渫が実施されたことを示している。堆積土層の下部には砂質土層の堆積が認められ、当時溝内に流水するような状況があったことが看取される。土層の堆積状況等を考慮すると、本溝状遺構は流路（SD001）の存続期間内に同時併存していた可能性を指摘することができ、溝底の傾斜等から、東側集落域の排水機能を担っていたのではないかと考えられる。東方面で存在が確認されている当該時期の遺構群との関連が注目される。出土遺物は概して少なく、いわゆる下城式甕形土器の破片が数点出土したのみである。厳密な時期比定は行えないが、おおむね流路跡（SD001）の第Ⅲ層出土土器の様相に近似する。弥生時代前期末～中期前葉前後の時期のものとして大過ないであろう。

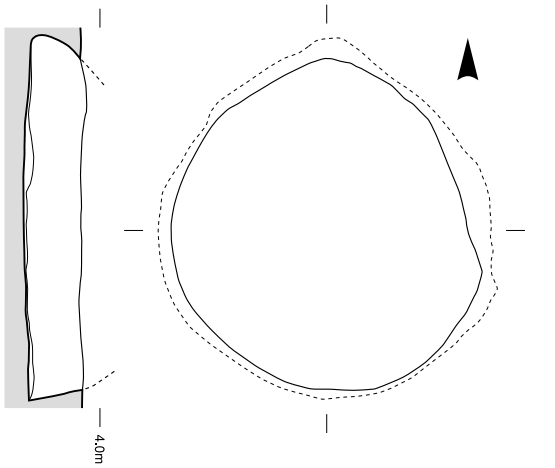


第106図　SD010平面・土層断面実測図　（1/150・1/50）

貯蔵穴（SK）

025SK002（第107図）

SK002はSX003の東側約4.0mに検出された貯蔵穴である。平面プランは円形を呈し、検出面での径1.7mを測る。断面形状は袋状をなし、底面はフラットに成形される。底面の径1.85m、現存深度0.3mを測る。遺構内堆積埋土は大きく４層に分別できるが、いずれも人為的な埋め戻し痕跡を示すような状況はなく、自然堆積によるものと判断される。出土遺物としては下城式甕形土器の破片を遺構内に少量内包するが、いずれも小片のみであり、良好な出土状況を示すものではない。



1. 茶褐色土層
2. 淡茶褐色土層(鉄分を含む)
3. 淡灰褐色土層(鉄分を含む)
4. 灰褐色土層(より多く鉄分を含む、やや硬く締まる)
5. 淡灰褐色土層(ややソフト、ブロック状の硬い淡黄灰色土を含む)

第107図　SK002遺構実測図　(1/40)

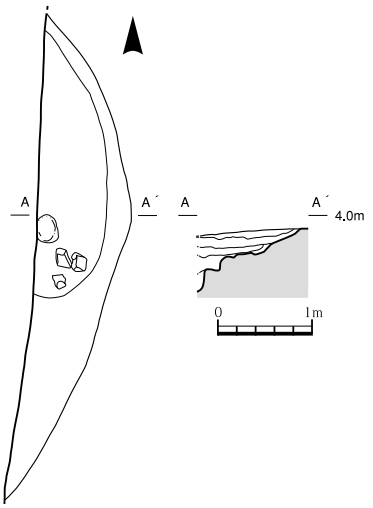
その他の遺構（SX）

025SX003（第108図）

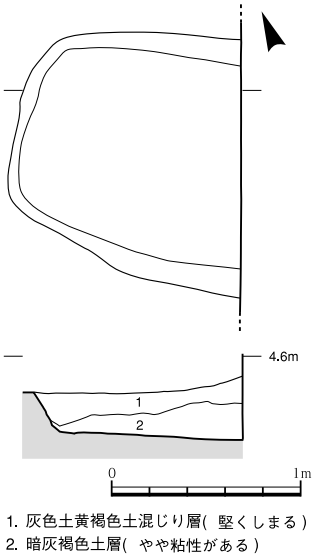
SX003は西側部分を流路跡の肩部確定のための掘削時に欠失しており、全体形状、全体規模を知ることはできないが、北側の遺構最深部に拳大の３個からなる河原石による集石がみられる。埋土から丹塗りの高杯脚部、土師器甕底部片などが出土しており、この資料の存在から古墳時代の所産になることが明らかになった。底面はフラットでなく、北側、西側部分が次第に深くなる。堆積土層の観察から、第２層と第３層の間に不整合面が認められ、上部層と下部層には掘り返し等による時間差の存在が想定される。ちなみに上述した遺物は下部層から出土したものである。

025SX004（第109図）

調査区東南付近の壁際で検出した土坑である。全体形状は略方形を呈すると推定されるが、遺構の西半が調査区外に存するため、具体的な全体形状は不明である。現状で確認できる平面規模は1.4m×1.2m+αであり、現存深度0.35mを測る。遺構内堆積埋土は現状で灰色土と黄褐色土の混土、下部層は暗灰褐色土により構成される上部２層を確認することができる。なかでも上部層には黄褐色土



第108図　SX003平面・土層断面実測図　(1/80)



1. 灰色土黄褐色土混じり層(堅くしまる)
2. 暗灰褐色土層(やや粘性がある)

第109図　SX004平面・土層断面実測図　(1/40)

との混土であり、人為的な埋め戻しによるものと考えられる。

025SX005

調査区東南付近の南壁部分で確認した土坑である。遺構の大半が調査区南側に展開しているため、詳細は不明である。堆積埋土は単層であり、暗茶褐色土により構成される。出土遺物は皆無であり、所産時期等も明示することはできない。

025SX020

調査区の中央南側において確認される柱穴状の遺構である。円形基調の平面プランを呈し、直径0.6m、現存深度0.15m を測る。遺構内堆積埋土は暗茶褐土である。**SX**021と切り合い関係を有するが、出土遺物が皆無であり、所産時期等は不明である。

025SX021（第110図）

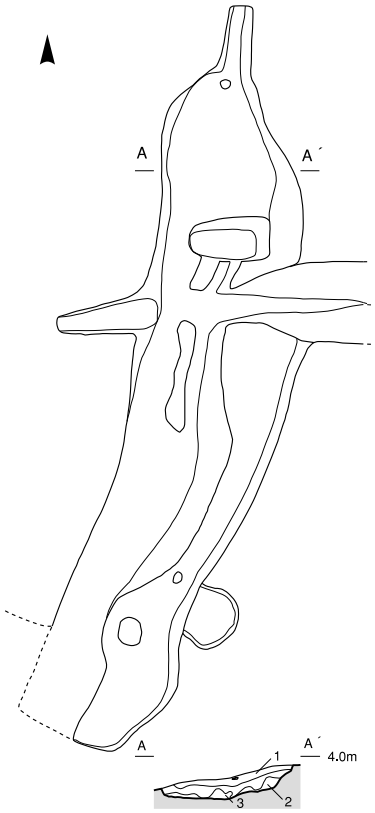
流路跡（**SD**001）の際、**SD**010と直交する形で検出された溝状の遺構である。不定な形状を示し、人工的に掘削されたものかどうか現段階では判断できない。**SD**010と切り合い関係にあり、**SD**010構築以前の所産になる。現存深度は最深部で0.25m を測り、３層の堆積埋土を確認することができる。出土遺物は皆無である。

025SX022

SX003に近接する地点で確認されたピット状の遺構である。径約0.6m、現存深度0.17m を測る。遺構内堆積埋土は暗茶褐色土による単一土である。

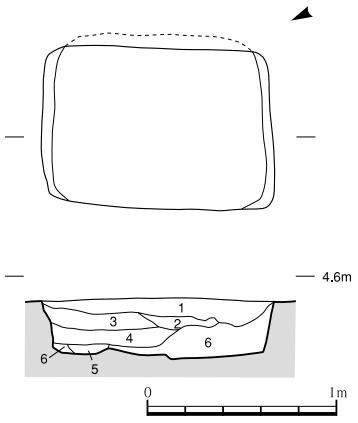
025SX023（第111図）

調査区東部において確認した方形土坑である。平面プランは1.2m×0.8m の長方形を呈し、現存深度0.18m を測る。底面はフラットであり、四方の壁面はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土層断面観察の結果、堆積土層に不整合面が認められ、上位に位置する土層には、粘土ブロックを内包するといった状況が認められる。裏込め土等の存在は確認されず、あくまで推測の域をでないが、堆積土層の状況からは木蓋土



1. 黄灰色土層(締まる、鉄分含む）
2. 暗黄灰色土層（下層よりやや締まる）
3. 黄灰色土層（砂質土層で粘りがない）

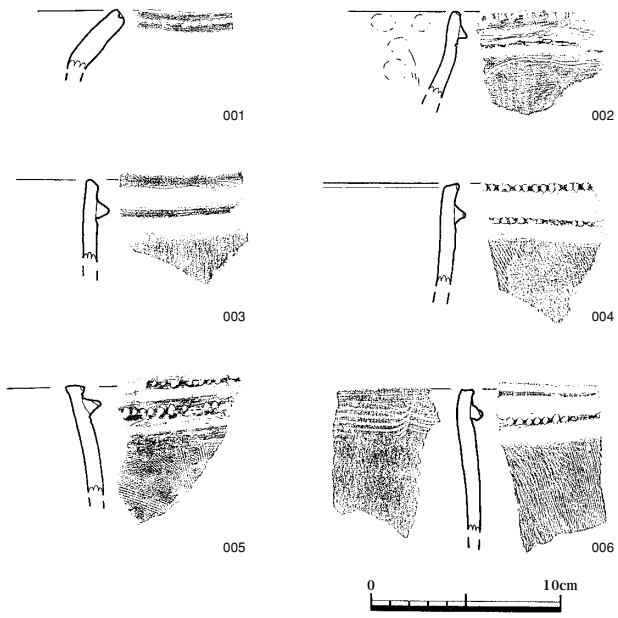
第110図　SX021平面・土層断面実測図
（1/80）



1. 灰白色土層
（黄褐色の斑状のシミがある、 堅く締まる）
2. 暗灰白色土層
（ブロック状の粘質土がある、
斑状に黄褐色土がある、堅く締まる ）
3. 淡灰褐色土層
（粘質土が混在する、 堅く締まる）
4. 灰褐色土層
（灰色砂質土と灰褐色粘質土が混在する）
5. 暗灰褐色粘質土層
6. 暗灰褐色砂質土・粘質土混在層

第111図　SX023平面・土層断面実測図
（1/40）

坑の可能性も想定される。



第112図　表土出土遺物実測図　(1/4)

表土出土遺物（第112図）

本項には上記において記載した土層よりも上位の土層から出土した土器資料を掲載した。壺、甕資料がある。

001は壺の口縁部資料である。内外面ともナデにより調整され、外面・茶褐色、内面・淡茶褐色を呈している。口唇部には刺突連点文が施文される。

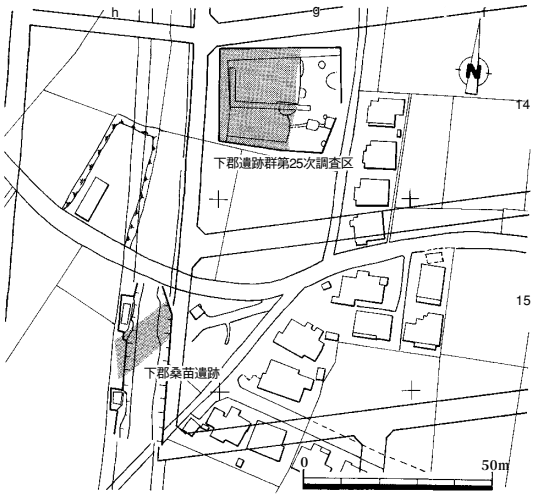
002〜006は甕口縁部資料である。**002**は直立する口縁部をもつ資料であり、内外面とも淡黄褐色を呈する。外器面・ナデ・ハケ目、内器面・ナデにより調整され、胎土中には角閃石、長石、橙色粒子を含む。**003**は直立する口縁部の口縁端部外面下位に三角突帯を貼付する甕口縁部資料である。突帯、および口縁部には刻みは施文されない。胎土中には石英、角閃石、長石粒を含み、内外面とも淡赤褐色を呈する。器表面の調整は内外器面ともナデによる。**004**は口縁端部を外反気味に整形し、頂部に刻目を施文する。口縁部の外面下位には断面三角形の刻目突帯を貼付する。外器面・ハケ目、内器面・ナデ後ミガキという調整パターンにより器面の調整が行われ、内外面とも茶褐色を呈する。**005**は内湾タイプの口縁形状を呈する甕口縁部資料である。口縁端部には強いヨコナデ調整が行われ、内外方向に口縁部を張り出させるように拡張する。刻みは外側拡張部端部、その下位に貼付される刻目突帯に施文される。外器面は淡褐灰色を呈し、タテ方向のハケ目、内器面は淡赤褐色〜黒褐色を呈しナデにより調整される。胎土中には石英、角閃石、長石粒などを含んでいる。**006**は口縁端部を僅かに外反させる甕口縁部資料である。外器面は暗茶黒色を呈し、タテ方向のヘラミガキ後ナデ、内器面は暗茶褐色を呈し、ヨコ方向のハケ目後ヘラミガキの組み合わせにより器面調整が行われる。

以上が検出した遺構・遺物の概要である。流路跡は弥生時代前期末から中期初頭に洪水等の自然営力により埋没したと推定された。流路跡（025**SD**001）の東側では、下郡遺跡群第29次調査において弥生前期末から中期の集落の一部が検出されており、その関係が注目される。しかしながら、調査所見から推定される集落の中心時期は中期中葉から後葉を主体とするものであり、第25次調査での流路跡の帰属年代とは若干異なる様相を示す。前期末から中期初頭に比定される遺構も少ないながらも存在はするものの、流路跡（025**SD**001）出土遺物量に見合うものとは考え難い。このような状況から、もう少し上流（南方）に当該期の集落の中心が存在する可能性が想定される。

（3）小　結

1．はじめに

下郡遺跡群第25次調査地点は、昭和63年９月～10月、平成２年９月～10月に大分県教育委員会により調査が実施された「下郡桑苗遺跡」の北方約50m に位置する。「下郡桑苗遺跡」に関しては、大分県教育委員会により『下郡桑苗遺跡』(註1)、『下郡桑苗遺跡Ⅱ』(註2)として調査報告書がすでに刊行されており、調査内容が明らかにされている。



第113図　調査地点位置図　(1/2000)

下郡桑苗遺跡では、幅8.15m から8.55m の規模をもつ河道跡が確認されており、第16層まで区分される堆積土層が認められている。この中で第８層から第13層が溝状遺構（旧河道）の堆積埋土であり、第11層から第13層に多量な遺物の出土が確認されている。特に第11層中に出土量のピークがあり、その下位に位置する第12層には少量の貝が、第13層内には小規模な混貝土が認められている。

出土土器の分析から、第10層は櫛描の沈線文土器の存在や、１点のみの出土であるが、東北部九州系の跳ね上げ口縁をもつ甕の存在から中期前半に比定され、第11層が文様構成上にヘラ描沈線を少量含み半截竹管による文様が多い特徴などから中期初頭に照応されるとしている(註3)。加えて第14層出土土器の特徴から当該層は前期後葉と判断される。このような点から、両層の間に堆積する第12層・第13層を前期末を中心とした前後の時期に位置づけている。これらの下郡桑苗遺跡と第25次調査との層対応に関しては、第25次調査地点の第７a 層（Ⅰ層）の上部にみられる黄色粒子の沈殿する特徴が下郡桑苗遺跡における第９層と類似しており、層対比が可能であると考えられる。第９層以下に関しては、下郡遺跡群第25次調査出土土器の時期的な位置づけを明らかにした上で層対応を行いたい。

2．下郡遺跡群第25次調査出土弥生土器について

（1）出土土器について

流路跡（**SD**001）からは、第Ⅲ層を中心に大量の弥生土器資料が出土している。

第６層中には弥生時代中期に編年される東北部九州系の跳ね上げ口縁甕、二叉状工具による施文が行われる下城式壺形土器、中期末に比定される口縁部上面に浮文をもつ壺などを含みながら古墳時代前期を中心とする土器資料が認められる。

第６層の下位に位置する第Ⅲ層は第Ⅲａ層、第Ⅲｂ層、第Ⅲｃ層と３層に分層が可能であるが、各層中から出土する土器資料に明確な差異は認められず、明瞭な時期差を抽出することは困難である。

第Ⅲ層出土土器の器種には甕・壺・高坏・蓋・鉢があり、甕はいわゆる「下城式甕形土器」が主体を占める。

甕形土器

甕はいわゆる「下城式」と称されるものが主体を占めるが、その口縁部形状は極めてバラエティに富んでいる。下城式土器は大分県佐伯市下城遺跡出土土器を指標としたものであり(註4)、設定当初は主として縄文系の甕を祖形とする特徴的な甕を対象としていた。器面調整は基本的にはハケ目仕上げであるが、最終調整にヘラミガキを施すものも少なからず存在し、当該期の甕の特徴のひとつとなっている。さらに、複数におよぶ横位の刻目突帯をタテ方向の刻目突帯で接続する下城式甕形土器**B**タイプ(註5)もⅢ層（031・071・072)、Ⅲa層（038・044)、Ⅲc層（027・028）で出土が確認されている。

第6表は下城式系甕の口縁部資料を下記のような分類基準により分類し、層別に破片数量を示したものである。

突帯の数	口縁形状	刻目の位置
Ⅰ・・・1本	**a**・・・外反	0・・・刻み無し
Ⅱ・・・2本	**b**・・・直口	1・・・口唇部と突帯に刻み
Ⅲ・・・3本	**c**・・・内湾	2・・・口唇部無・突帯に刻み
Ⅳ・・・4本		

この表から読み取れる出土甕の口縁部形状の傾向を列挙すると

・口縁部形態は直口タイプのものが最も多く、全体の約58％を占める。

・突帯数は1本のものが77％もの高比率を示し、これは他の外反、内湾タイプの口縁形態においても同様の状況が看取される。

・刻みの施文部位については、直口口縁の60％が口縁部と突帯の両方に刻みを施し、この属性も突帯数と同じく他の口縁部形態でも60～75％という高比率を示している。

以上の点を特徴とする。

第7表は同じ分類基準によって、大分県教育委員会が実施した下郡桑苗遺跡第2次調査の甕口縁部属性を、時期比定が行われている第10層から第14層までの資料について層別に集計したものである。

口縁部形状については、前期後葉に比定されている第14層では、外反口縁（**a**類）と直口口縁（**b**類）がほぼ半々であったものが、上層資料へと推移するに伴い、直口口縁（**b**類）の比率が増大する傾向を明確に示している。次に突帯本数に着目すると、各類型とも圧倒的に1本突帯の資料が多く、刻み施文パターンに関しては、口縁部と突帯の両者に刻みを施文する資料が多く、しかも、内湾口縁（**c**類）を除き、下層→上層へと割合は増加する傾向にある。

両遺跡のデータを比較すると、下郡桑苗遺跡第2次調査の第11層と第12・13層を合算した割合比が下郡遺跡群第25次調査の数字に近似する点は極めて示唆的である。

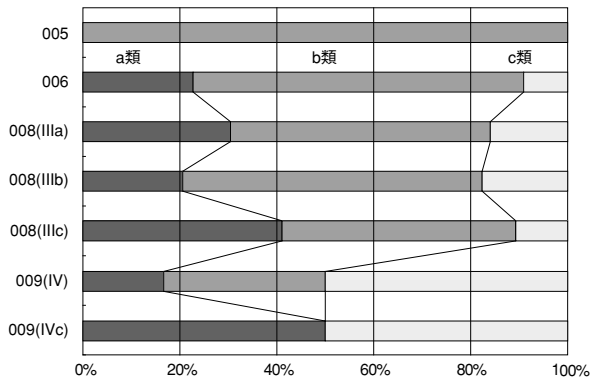
出土した甕の中には、下城式甕の他、西部瀬戸内に起源をもつ多条沈線甕が出土している。口縁部断面形状には**L**字状・三角形を呈するものが第6層（040)、第Ⅲ層（078・079・080・083・084)、第Ⅲa層（026・027・030)、第Ⅲc層（029・030・031・032・033・034・039）において出土している他、口縁部形状が如意状を示すものが第Ⅲa層（021・022・023・024)、第Ⅲc層（046・047）で

第６表　下郡遺跡群第25次調査甕タイプ別出土比率表

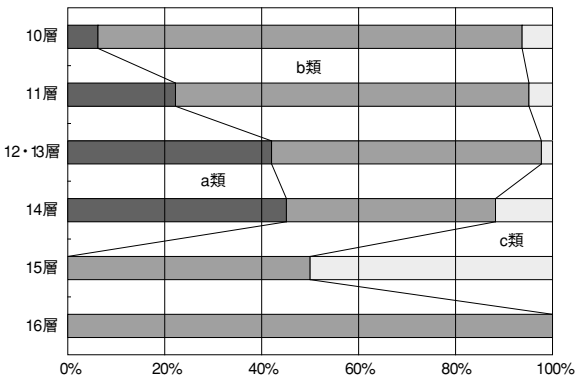
層/類	Ⅰa1	Ⅰa2	Ⅰa0	Ⅱa1	Ⅱa2	Ⅳa2	Ⅰb1	Ⅰb2	Ⅰb0	Ⅱb1	Ⅱb2	Ⅲb1	Ⅳb1	Ⅰc1	Ⅰc2	Ⅰc0	Ⅱc1
005								1									
006	3	2					4	3	1	4	3				2		
008Ⅲ	12	3	1	5			25	4	1	4	1	1	1	5	3	1	2
008(Ⅲa)	6	1					6	5	3	6			1	3	1		2
008(Ⅲb)	9	5	4	4	1		17	1	1	5	2	1		4	2		
008(Ⅲc)	8		1	2	1	1	6	2	1	2				2			
009(Ⅳ)				1			1			1				2	1		
009(Ⅳc)				1												1	
小計1	71						114							31			
比　率	33%						53%							14%			
小計2	55			15		1	82			28		2	2	27			4
比　率	25%			7%		0%	38%			13%		1%	1%	13%			2%
合　計	38	11	6	13	2	1	59	16	7	22	6	2	2	16	9	2	4
比　率	18%	5%	3%	6%	1%	0%	27%	7%	3%	10%	3%	1%	1%	7%	4%	1%	2%

第７表　下郡桑苗遺跡甕タイプ別出土比率表

層/類	Ⅰa1	Ⅰa2	Ⅰa0	Ⅱa1	Ⅱa2	Ⅰb1	Ⅰb2	Ⅰb0	Ⅱb1	Ⅱb2	Ⅲb1	Ⅲb2	Ⅰc1	Ⅰc2	Ⅰc0	Ⅱc1	Ⅱc2	
10層(中期前半)	1	1				18	8			2			1	1				点数
	6%					88%							6%					比率
	2			0		26			2		0		2			0		点数
11層(中期初頭)	26	1		5		62	34		3	5		1	4	2			1	点数
	22%					73%							5%					比率
	27			5		96			8		1		6			1		点数
12･13層(前期末)	23	3	1	10		32	8	1	7	1			2					点数
	42%					56%							2%					比率
	27			10		41			8		0		2			0		点数
14層(前期後葉)	15	4	1	3		20			2				4	1		1		点数
	45%					43%							12%					比率
	20			3		20			2		0		5			1		点数
15層						1							1					点数
	0%					50%							50%					比率
	0			0		1			0		0		1			1		点数
16層									1									点数
	0%					100%							0%					比率
	0			0		0			1		0		0			0		点数



第114図　下郡遺跡群第25次調査甕タイプ別出土比率表



第115図　下郡桑苗遺跡甕タイプ別出土比率表

出土している。これらは、愛媛県松山平野における梅木前期編年Ⅳ期[註6]に照応する内容をもっており、前期末に比定されると考えられる。

また、今回の調査においては、第Ⅲ層からの出土ではないが、第6層（017・018）中から山形口縁をもつ甕が2点出土している。口縁部形状を除けば、他の諸属性は下城式甕に極めて類似しており、強い関連性を窺わせる。類例は他に宇佐市川部遺跡[註7]、福岡県苅田町葛川遺跡環濠資料[註8]、近世府内城下町跡[註9]などが知られる。

壺形土器

壺は前代からの型式変化をたどることのできる口縁屈曲部、および頸部と胴部の境に沈線を施す資料、さらに器表面をヘラ描きにより二条、あるいは三条を単位とする文様で加飾する壺などが出土する。これに西部瀬戸内起源の内面に突帯をもち、外面に多条沈線文を施す資料が第6層（023・024）中より出土している。また、破片資料のため詳細は不明であるが、貝殻により文様が施文された土器破片も少量であるが出土している。第6層出土資料（022）は貝殻腹縁により平行線文を施文したものであり、第Ⅲa層出土資料（052・056）には横方向の無軸羽状文が施文される。また、第Ⅲa層資料の中には平行線文と木葉文を施文したもの（059）があり、東北部九州、周防灘沿岸地域の影響を僅かながら垣間見ることができる。第Ⅲ層出土資料（141）は連鎖状刻目文と呼ばれる突帯をもつ壺であり、東海から中四国の広い範囲に分布する特徴的な突帯である[註10]。突帯を押圧した後にヘラ先状の工具により刺突を加えることにより連鎖状に突帯を成形するものであり、九州内では類例を知らない。おそらく分布の西限になるものと考えられる。

高坏形土器

高坏は充実した脚柱部に小さく開く裾部をもち、これに鉢形の坏部が接続する。脚柱部と坏部との接合部には一条ないし二条の刻目突帯が貼付される。

大分平野には弥生時代中期になると、方形透かしを脚部にもち、円盤充填技法により成形される台付鉢が盛行し、高坏の機能を代替する[註11]。今次の調査では、このような台付鉢の出土は認められず、高坏形土器のみが出土する。これは時期的な様相差を示していると考えられ、定型化した台付鉢が第Ⅲ層の段階以降に出現、盛行したことを示唆している。

蓋形土器

蓋は、甕に伴うものが出土しており、頂部に大きな平坦面を形成するタイプのものが少量出土する。甕の出土量と比較して圧倒的に量が少ない点が注意される。

鉢形土器

下城式土器が口縁部に最大径をもつ鉢タイプの体部形状を示すものが比較的多い点と関連するのであろう。出土量は少なく、しかも小型品が多い。

（2）出土土器の時期的検討

前項では、第Ⅲ層出土土器を中心に出土土器の様相を概観した。本項ではこれらの土器群が時間軸上のどのような位置に配置されるものであるのか、また、その作業過程において、大分県教育委員会が調査を実施した下郡桑苗遺跡との土層対応を行いたい。

出土土器の多くは甕形土器が主体を占めるが、口縁部の形態分類の数量比較では、下郡桑苗遺跡において前期末、中期初頭に比定される第11層・第12層・第13層と類似する点はすでに指摘した。また、下郡桑苗遺跡の第10層中に認められた口縁端部を跳ね上げ状に成形する東北部九州系の甕資料の出土は確認されていない。さらに、伴出する西部瀬戸内起源の多条沈線甕についても、施文にあたって櫛状工具に移行したものはなく、二叉状工具により施文が実施されるものが極少量存在するのみであり、大半がヘラ状工具による１本描きのものである。これらの様相は愛媛県松山平野での前期末段階での様相に照応されるものであり、前期末を中心とする所産になるものと推定される。ちなみに、今回出土している西部瀬戸内系の土器は、すでに下郡桑苗遺跡の報文中でも指摘されているように、豊後水道に面した海浜の至近な位置に遺跡が立地しているという地理的位相を反映した出土状況と判断される。そうしたなかでも器種に片寄りが認められない点、土器胎土が肉眼観察による限り在地産の土器と異同がない点が注意される。

壺に関して削り出し突帯をもつもの、頸部に刻目突帯をもつものなどが少量存在するものの、主体はヘラ描き沈線文が施文されるものであり、これらの文様構成要素の中には中期前半に盛行するいわゆる下城式壺[註12]と共通するものが数多く存在する。したがって、下城式壺形土器の成立にあたっては、その前段階に相当するこれらの土器群の中にすでに文様モチーフが完成し、それが西部瀬戸内系の多条沈線甕の文様施文技術の変遷にみられる、ヘラ描き沈線から二叉状工具による施文という経年変化と同調する形で成立した可能性が高い[註13]。

施文原体の変遷という視点で下郡桑苗遺跡出土土器の内容をみると、「14層から下は全てヘラ描き沈線である。13層になると半截竹管を施紋具とするものが一部に現れ、前回の資料を含め11層では割合が逆転する。９・10層ではほとんどが半截竹管によるものである。」[註14]とする観察結果が示されており、経年変化に対応し段階的な変化が認められる。この施文原体における変遷過程に第Ⅲ層出土土器の様相を対応させると、二叉状工具の使用が極微量認められる第Ⅲ層出土土器の内容は第13層の状況に最も近いといえよう。

次に高坏については、前項で触れたように、円盤充填技法をもつ台付鉢は出現しておらず、その初現的な資料が下郡桑苗遺跡第11層から出土[註15]している状況を考慮すると、台付鉢は下城式壺の成立とパラレルに出現するものと捉えられよう。したがって第Ⅲ層出土土器の様相はその前段階に位置付けられることになる。

以上の出土土器の状況を整理すると、下郡遺跡群第25次調査第Ⅲ層出土土器は下郡桑苗遺跡の第12・13層にほぼ対応すると判断され、その時期は弥生時代前期末として大過ないであろう。しかも中期的な様相は極めて少なく、前期末の資料状況を良好に示す資料群と判断される。

３．下郡遺跡群第25次調査地点出土の木製品について

出土した木製品には容器、農耕具、丸木弓、石斧柄などや、紡織具と見られるものがあり、非常に多彩な内容をもっている。なかでも、出土量が最も多い平鍬は着柄部の隆起が不明瞭で、小型のタイプが主体を占める。同タイプの平鍬は、北部九州をはじめ、九州島内に類例は顕著でなく、資料数は少量ながら、瀬戸内海沿岸地域に若干の分布が認められ、同地域に流行した特有タイプとしての可能性も指摘されていた。その後10年以上が経過したが、いまだに下郡遺跡にみられるような主体的な出土状況は他の遺跡では認められていない。このような状況を踏まえ、概報刊行の段階では便宜的に「下郡タイプ」と仮称した資料群であるが、現在もその伝播経路や分布、出自などは不明なままである。

『下郡桑苗遺跡』[註16]中で指摘されている特徴を改めて示すと

（１）時期的に弥生時代前期に出現し、中葉までで消滅したか、あるいは後期に特徴的な山口分類による平鍬**G**と呼ばれる釣鐘状の形態をし、隆起部がなく、方形孔をもつタイプに変移する可能性がある。

（２）分布が九州では確認できないことから、下城式土器に伴う独自のタイプとして捉えられるが、類例が主として瀬戸内海沿岸地域で確認できることから、同地域流行タイプとしてみることも可能である。

これらの評価はいまだ変更する必要がない。

また、今回の出土鍬類の中には上述の下郡タイプとした特徴的なものの他に２例の又鍬の出土も確認されている。特に025**SWO**−019は北部九州における山口分類の三又鍬**G**類に属する形態[註17]をもっており、今回の出土土器の検討から第Ⅲ層が限りなく前期末の時期所産であることが示されたことにより、従来考えられている同種の鍬の出現・盛行時期よりも若干遡る所見となる。今後検討すべき課題のひとつといえよう。

ところで、大分県内では、国東町安国寺遺跡[註18]や大分市丹生川遺跡[註19]での木器の出土が古くから知られているが、いずれも後期を中心とするものであり、前期末を中心とするものの出土事例は乏しい。上記の課題解決のためにも県内での類例の増加がのぞまれる。

木製品の出土状況に関しては、未製品が高比率で存在する点が大きな特徴となっており、上流域に存在した貯木施設等が洪水等の自然営力により流出したものを含んでいるものと推定される。

４．下郡遺跡群第25次調査地点出土家畜動物遺体について

下郡遺跡群第25次調査地点は下郡桑苗遺跡に近接し、遺跡状況もよく類似する。下郡桑苗遺跡では弥生時代の包含層から出土した動物頭骨が「ブタ」と判定され、家畜の飼育が伴わない農耕社会という点を基本的な特色としてきた日本の弥生時代像に一石を投じた[註20]。今次の調査においても下郡桑苗遺跡と同様に多量の獣骨が出土している。これらの骨は現在も分析作業中であり、詳細な内容については、後続刊に掲載する予定である。

下郡桑苗遺跡出土獣骨は、歯槽膿漏の存在や骨の形態から「ブタ」と判断され、にわかに「ブタ」の渡来説にまで発展したが、その後、発見から15年以上が経過し、その間、小澤智生氏による骨の**DNA**鑑定により下郡遺跡から出土した頭骨が遺伝学的にはニホンイノシシそのものであり、大陸か

ら日本に移入されたブタではないことを指摘された[註21]。この段階で「ブタ」渡来説は否定されたかと思われたが、石黒直隆氏らによるDNAの分析により愛媛県松山市宮前川遺跡（弥生時代末）、愛媛県今治市阿方遺跡（弥生時代）、長崎県富江町宮下貝塚（縄文後期）のものがアジア系ブタと極めて近いタイプのものである点が提示され[註22]、下郡遺跡のものはニホンイノシシ系ながら、他遺跡には渡来系のものが存在していた可能性が示された。

このように近年、大きな動きのある「弥生時代のブタ」論争であるが、いずれにしても今は確実な資料の蓄積が急務であり、下郡遺跡群第25次調査出土獣骨の資料化を急ぎたい。

5．まとめ

第25次調査地点は大分県教育委員会が調査を実施した下郡桑苗遺跡に近接する。遺物出土状況も類似し、連続する遺跡と考えて大過ないであろう。

土層堆積状況は下郡桑苗遺跡に比べ、時期幅は短く、弥生時代についてみると前期末を中心とするものだけであり、下郡桑苗遺跡のように中期初頭、あるいは中期前半に比定される土層は認められない。第Ⅲ層直上には古墳時代の包含層が存在し、堆積土層に差異が認められる。

第25次調査地点の弥生時代に比定される土層には第Ⅲ層、第Ⅳ層が相当する。第Ⅳ層は非常に強い粘性を有しており、滞水状況での堆積環境が想定され、部分的にⅣc層とした砂質土を含むラミナ状堆積物を含んでおり、一時的に洪水等の自然営力による環境変化が想定される。これに対し、遺物出土量が最も多い第Ⅲ層は、第Ⅲc層としてラミナ状堆積土層が随所に認められる他、第Ⅲa層、第Ⅲb層ともに土層内には大粒のブロック土を含んでおり、激しい環境での堆積状況が想定される。したがって、第Ⅲ層土は極めて短期間に堆積したものと判断されよう。調査での溝幅は15mを確認しているが、調査区の西側にさらに展開しており、広範に低湿地帯が拡がっていたと考えられる。下郡桑苗遺跡との堆積土層対比においては、第Ⅲ層土が桑苗遺跡の第12、13層にほぼ対応できると判断された。この点についても「11層の堆積物には、木材や植物遺体などが多量に含まれているが、これより下位の12・13層およびハンドボーラーで採取した13層以下の堆積物とともに、花粉化石は殆ど検出されない。おそらく近くを流れる大分川の氾濫によって上流から運ばれてきた土砂が一時的に堆積したものと推定される。」[註23]とする花粉分析の所見とも符号する。したがって、弥生時代前期当時の調査地点周辺の環境は、「弥生時代の溝は、当時ほとんど流れのない湿地を伴った水溜りのような状況で、周辺部にはひらかれた畑地や荒地に水田があり、住居址も遠くはなかったと思われる」[註24]という推定どおりの状況が考えられる。

以上の点から、第25次調査地点は、当該時期集落西端の水際に相当し、前期末の段階に複数回におよぶ洪水等の大規模な災害に見舞われた状況を示していると考えられる。

註１　大分県教育委員会1989『下郡桑苗遺跡』七歩川河川改修工事に伴う発掘調査報告書　大分県文化財調査報告書　第80輯

註２　大分県教育委員会1992『下郡桑苗遺跡Ⅱ』－弥生時代のブタ－　大分県文化財調査報告書　第89輯

註３　高橋信武1992「２弥生土器について」『下郡桑苗遺跡Ⅱ』－弥生時代のブタ－　大分県文化財調査報告書　第89輯　大分県教育委員会

註４　賀川光夫1951「東九州に於ける押型文土器と弥生式土器」『考古学雑誌』37-1

註５　高橋徹1979「廃棄された鏡片－豊後における弥生時代の終焉－」『古文化談叢』第６集　九州古文化研究会

註６　梅木謙一1994「西瀬戸内地方の弥生時代前期土器－松山平野を中心として－」『牟田裕二君追悼論集』

註７　大分県立歴史博物館2003『2003特別展　二千年の鼓動－弥生土器の世界－』

註８　武末純一2004「九州地方の土器」『考古資料大観』１　小学館

註９　讃岐和夫他1994「府内城・城下町遺跡（大分合同新聞社屋建設予定地）」『大分市埋蔵文化財調査年報』５　大分市教育委員会

註10　秋山浩三1992「弥生前期土器－遠賀川式土器の地域色と吉備－『吉備の考古学的研究』上　山陽新聞社

梅木謙一2004「中国・四国地方の土器」『考古資料大観』１　小学館

註11　坪根伸也1993「弥生土器の成形技法について－東九州における円盤充填技法－」『下郡遺跡群』大分市下郡地区土地区画整理事業に伴う発掘調査概報（４）大分市教育委員会

註12　小田富士雄1958「下城式土器考」『白潟遺跡』佐伯市教育委員会

註13　坪根伸也1992「**B** 区 **g**-14地点出土の弥生土器について」『下郡遺跡群』大分市下郡地区土地区画整理事業に伴う発掘調査概報（３）大分市教育委員会

註14　註３文献に同じ。

註15　註１文献・註11文献に同じ。

註16　牧尾義則1989「２木器について」『下郡桑苗遺跡』七歩川河川改修工事に伴う発掘調査報告書　大分県文化財調査報告書　第80輯　大分県教育委員会

註17　山口譲治1988「福岡における弥生木製農具」『考古学ジャーナル』No.292　ニューサイエンス社

註18　国東町教育委員会1989『安国寺遺跡』

註19　大分大学学芸部1962『丹生川　大分大学学芸部総合調査報告（一木中安遺跡）』

註20　西本豊弘1989「下郡桑苗遺跡出土の動物遺体」『下郡桑苗遺跡』七歩川河川改修工事に伴う発掘調査報告書　大分県文化財調査報告書　第80輯　大分県教育委員会

西本豊弘1992「下郡桑苗遺跡出土の動物遺体」『下郡桑苗遺跡Ⅱ』－弥生時代のブタ－　大分県文化財調査報告書　第89輯　大分県教育委員会

註21　小澤智生2000「縄文・弥生時代に豚は飼われていたか？」『季刊　考古学』第73号　雄山閣出版株式会社

註22　2002年11月４日（月）山陰中央新報記事

註23　畑中健一1989「大分市下郡桑苗遺跡第Ⅲ区堆積物の花粉分析」『下郡桑苗遺跡』七歩川河川改修工事に伴う発掘調査報告書　大分県文化財調査報告書　第80輯　大分県教育委員会

註24　粉川昭平1989「下郡桑苗遺跡出土の大型植物遺体」『下郡桑苗遺跡』七歩川河川改修工事に伴う発掘調査報告書　大分県文化財調査報告書　第80輯　大分県教育委員会

第８表　遺物観察表①

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
025**SX**005-001	7	弥生	甕	石英 角閃石 長石	暗茶黒色	茶褐色	ナデ 指オサエ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	下城式 ハケ目（４本・７～８本／cm） 内外面スス
025**SX**006-001	8	土師器	高坏	石英 角閃石 橙色粒子	淡橙褐色	淡橙褐色	工具ナデ	ナデ					脚上部のみ	
025**SX**006-002	8	土師質	鉢	角閃石 長石 橙色粒子	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ	指オサエ ヨコナデ ハケ目後 ナデ	(9.4)				上部１／３	ハケ目（８本／cm）
025**SX**006-003	8	土師質	甕	石英 角閃石 長石	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ 工具ナデ 後ケズリ	ハケナデ					底部のみ	外面環状にスス
025**SX**006-004	8	土師質	不明	石英 角閃石 長石	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ 工具ナデ 指オサエ	ナデ				5.7	底部のみ	
025**SX**006-005	9	弥生	甕	角閃石 長石	淡黄色	淡黄褐色	ナデ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	東北部九州系 ハケ目（10本／cm）
025**SX**006-006	9	弥生	甕	角閃石 長石 橙色粒子	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ	ハケ目 ナデ ヨコナデ					口縁部片	東北部九州系 ハケ目（５本／cm）
025**SX**006-007	9	弥生	高坏	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡橙褐色	赤色	ナデ 絞り痕	ナデ ミガキ					脚上部のみ	外面赤色塗彩
025**SX**006-008	9	弥生	壺	角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ヨコナデ	ナデ ヨコナデ					口縁部片	
025**SX**006-009	9	弥生	壺	石英 長石	淡茶褐色	暗茶褐色	ナデ 指オサエ	ミガキ					肩部片	下城式
025**SX**006-010	9	弥生	壺	角閃石 長石	淡橙褐色	淡橙褐色	工具ナデ	ハケ目					肩部片	ハケ目（６本／cm）
025**SX**006-011	9	弥生	壺	石英 角閃石 長石	淡黄褐色	淡黄褐色	ヨコナデ	ナデ					口縁部片	
025**SX**006-012	9	弥生	壺	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ヨコナデ	ナデ ヨコナデ					口縁部片	
025**SX**006-013	10	弥生	蓋	角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ 指オサエ	ハケ目 ナデ	6.1				頂部のみ	ハケ目（５・10本／cm） ※口径は頂部径
025**SX**006-014	10	弥生	蓋	石英 砂粒	黒色	黒色	指オサエ ミガキ	ハケ目 指オサエ ミガキ	6.0	14.0		(25.7)	頂部完存 下部１／２	ハケ目（５～６本／cm） ※口径は頂部径・底径は口径
025**SX**006-015	10	弥生	鉢	角閃石 長石	暗茶褐色	暗茶褐色	ミガキ ヨコナデ	ハケ目 ミガキ ヨコナデ					口縁部片	ハケ目（８本／cm）
025**SX**006-016	10	弥生	不明	角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ 指オサエ ミガキ	ハケ目 ナデ ミガキ					裾部片	ハケ目（７本／cm）
025**SX**006-017	10	弥生	鉢	長石	淡茶黒色	茶褐色	ナデ 指オサエ ミガキ	ハケ目 指オサエ ヨコナデ					口縁部片	ハケ目（４本／cm）
025**SX**006-018	10	弥生	鉢	長石	黒色	淡茶褐色	ナデ 指オサエ ミガキ	ハケ目 ナデ ヨコナデ					口縁部片	ハケ目（12本／cm） 内面スス
025**SX**006-019	10	弥生	壺	石英 長石	淡黄褐色	淡黄褐色 ～淡黒色	ナデ ミガキ	ハケ目 ナデ ミガキ					口縁部片	ハケ目（７本／cm）
025**SX**006-020	10	弥生	壺	石英 角閃石 長石	灰黄褐色	褐灰色	ハケ目 ミガキ	ハケ目 ミガキ ヨコナデ					口縁部片	ハケ目（８本／cm）
025**SX**006-021	10	弥生	無頸壺	長石	茶褐色	暗茶褐色	ナデ 指オサエ	ナデ ヨコナデ					口縁部～胴部片	
025**SX**006-022	10	弥生	小壺	長石	淡黒色	淡黒色	ナデ 指オサエ	ナデ 指オサエ			8.5	4.1	頸部以下完存	ミニチュア
025**SX**006-023	10	弥生	壺	石英 長石	淡茶褐色	淡橙褐色	ナデ ミガキ	ハケ目 ミガキ					口縁部片	ハケ目（６本／cm）
025**SX**006-024	10	弥生	壺	石英 砂粒	淡暗茶褐色	黒色～暗茶褐色	ミガキ ヨコナデ	ミガキ					口縁部片	
025**SX**006-025	10	弥生	壺	長石	淡灰褐色	淡黒色	ナデ 指オサエ	ハケ目 ナデ 指オサエ			14.6	(6.3)	口縁部欠損	
025**SX**006-026	10	弥生	壺	石英 角閃石 長石	淡黄褐色	淡茶褐色	指オサエ ミガキ	ナデ 指オサエ ミガキ				(7.0)	胴下部～ 底部１／２	内面黒斑
025**SX**006-027	10	弥生	壺	石英 角閃石 長石	黒色	淡黄褐色	指オサエ ミガキ	ナデ 工具ナデ 指オサエ ミガキ				7.6	底部のみ	
025**SX**006-028	11	弥生	甕	石英 角閃石 長石	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ 指オサエ	ナデ ヨコナデ					口縁部～胴部片	

第９表　遺物観察表②

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
025**SX**006-029	11	弥生	甕	石英 角閃石 長石 雲母	明褐灰色	橙色～褐灰色	ナデ 指オサエ ミガキ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部～胴部片	ハケ目（６本／cm）
025**SX**006-030	11	弥生	甕	石英 長石	黒色	黒色	ナデ 指オサエ ミガキ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部～胴部片	ハケ目（３～４本／cm） 内外面スス
025**SX**006-031	11	弥生	甕	石英 角閃石 長石	淡黄褐色	淡黄褐色	指オサエ ヨコナデ	ヨコナデ					口縁部片	
025**SX**006-032	11	弥生	甕	石英 角閃石 長石	暗茶黒色	黒色	ハケ目 指オサエ ナデ後ミガキ	ハケ目 ヨコナデ ナデ後ミガキ					口縁部片	下城式 ハケ目（８～９本／cm） 内外面スス
025**SX**006-033	11	弥生	甕	石英 角閃石 長石	黒色～灰黄褐色	黒褐色～黄褐色	ハケ目 指オサエ ナデ後ミガキ	ハケ目 ナデ後ミガキ					口縁部～胴部片	下城式 ハケ目（６・７本／cm）
025**SX**006-034	11	弥生	甕	石英 角閃石 長石	黄褐色	黄褐色	ナデ ヨコナデ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	下城式 ハケ目（８本／cm）
025**SX**006-035	11	弥生	甕	角閃石 長石	灰黒色	黒灰色	ナデ後ミガキ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部～胴部片	下城式 ハケ目（５本／cm） 外面スス
025**SX**006-036	12	弥生	甕	角閃石 長石	黄茶褐色	黄茶褐色	ナデ 指オサエ	ナデ ヨコナデ					口縁部片	
025**SX**006-037	12	弥生	甕	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	暗茶黒色	指オサエ ナデ後ミガキ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	ハケ目（７本／cm） 外面スス
025**SX**006-038	12	弥生	甕	石英 角閃石 長石	淡茶褐色	暗茶褐色	ナデ ヨコナデ	ナデ ヨコナデ					口縁部～胴部片	外面スス 一部剥落
025**SX**006-039	12	弥生	甕	石英 角閃石 長石	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ ミガキ	ハケ目 ナデ					口縁部片	瀬戸内系 ハケ目（４～５本／cm）
025**SX**006-040	12	弥生	甕	石英 角閃石 長石	暗褐灰色	暗褐茶色	ナデ	ナデ					口縁部片	瀬戸内系
025**SX**006-041	12	弥生	甕	石英 長石	茶褐色	暗茶褐色	ハケ目 指オサエ ナデ後ミガキ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部～胴部片	下城式 ハケ目（内面６本　外面５～６本／cm）
025**SX**006-042	12	弥生	甕	石英 角閃石 橙色粒子	暗褐色	淡褐色	ナデ 指オサエ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部～胴部片	下城式 ハケ目（９～12本／cm）
025**SX**006-043	12	弥生	甕	石英 角閃石 長石 橙色粒子	灰黒褐色	黒灰色～淡黄灰色	ナデ後ミガキ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	下城式 ハケ目（６本／cm） 外面スス
025**SX**006-044	12	弥生	甕	石英 角閃石 長石	淡褐灰色	黒灰色	ハケ目 ナデ 指オサエ	ナデ ヨコナデ					口縁部片	下城式 ハケ目（９本／cm）
025**SX**006-045	13	弥生	甕	角閃石 長石 橙色粒子	暗茶黒色	暗茶黒色	指オサエ ナデ後ミガキ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	ハケ目（７～８本／cm） 外面スス
025**SX**006-046	13	弥生	甕	石英 角閃石 長石	暗茶褐色	暗茶褐色	ナデ後ミガキ ヨコナデ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	下城式 ハケ目（５～６本／cm）
025**SX**006-047	13	弥生	甕	角閃石 長石	淡茶褐色	暗黄褐色	ナデ 指オサエ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	下城式 ハケ目（６～７・14～15本／cm） 外面スス
025**SX**006-048	13	弥生	甕	石英 長石	茶褐色	茶褐色	ナデ ヨコナデ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	ハケ目（７本／cm）
025**SX**006-049	13	弥生	甕	石英 角閃石 長石	淡黄色	淡黄色	ナデ ミガキ	ハケ目 ナデ ヨコナデ					口縁部片	下城式
025**SX**006-050	13	弥生	甕	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	明茶褐色	ナデ ミガキ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	下城式 ハケ目（８～９本／cm）
025**SX**006-051	13	弥生	不明	石英 角閃石 長石	茶褐色	黒色	ハケ目 ミガキ ヨコナデ	ハケ目 ミガキ ヨコナデ					口縁部片	ハケ目（３・13～14本／cm）
025**SX**006-052	13	弥生	甕	石英 長石	茶褐色	黒色	ナデ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	下城式 ハケ目（８～９本／cm） 外面スス
025**SX**006-053	13	弥生	甕	角閃石 長石	黒色	淡茶褐色	ナデ 指ナデ	ハケ目 ナデ ミガキ				7.7	底部のみ	ハケ目（10本／cm） 内面スス
025**SX**006-054	13	弥生	不明	角閃石 長石	茶褐色	茶褐色	ナデ	ハケ目 ナデ ヨコナデ				7.4	底部のみ	ハケ目（７・８本／cm）
025**SX**006-055	14	土錘												別表

第10表　遺物観察表③

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
025 SX 008 III－001	15	弥生	甕	角閃石 長石	茶褐色	赤褐色	ナデ後ミガキ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	下城式 ハケ目（6～7本／cm）
025 SX 008 III－002	15	弥生	甕	石英 角閃石 長石 雲母	黒色～灰黄褐色	黄橙色～褐灰色	ナデ後ミガキ	ナデ ヨコナデ ハケ目後ミガキ					口縁部片	下城式
025 SX 008 III－003	15	弥生	甕	石英 長石	茶褐色	茶黒色	指オサエ ミガキ	ナデ ヨコナデ					口縁部片	下城式
025 SX 008 III－004	15	弥生	甕	角閃石 長石	黒色	黒色	ミガキ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部～胴部片	下城式 ハケ目（5～6本／cm） 内外面スス 器面剥離
025 SX 008 III－005	15	弥生	甕	石英 長石	暗茶褐色	赤茶色	ハケ目 ナデ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部～胴部片	下城式 ハケ目（9～12本／cm）
025 SX 008 III－006	15	弥生	甕	角閃石 長石 白色粒子	茶褐色	黄茶褐色	ハケ目 ナデ 指オサエ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部～胴部片	下城式 ハケ目（内面7～8本　外面10～11本／cm）
025 SX 008 III－007	15	弥生	甕	石英 角閃石 長石 雲母	黄褐色	黄灰色	ナデ 指オサエ ミガキ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部～胴部片	下城式 ハケ目（6～13本／cm）
025 SX 008 III－008	15	弥生	甕	石英 角閃石 長石 雲母	灰褐色	橙色～褐灰色	ナデ ミガキ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部～胴部片	下城式 ハケ目（6本／cm）
025 SX 008 III－009	15	弥生	甕	角閃石 長石	暗茶褐色	黒色	ナデ 指オサエ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部～胴部片	下城式 ハケ目（7～8本／cm）
025 SX 008 III－010	15	弥生	甕	石英 長石	黄橙色	黄橙色	ナデ後ミガキ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部～胴部片	下城式 ハケ目（7本／cm）
025 SX 008 III－011	15	弥生	甕	石英 角閃石	淡黄褐灰色	黒灰色～黄灰褐色	ナデ 指オサエ ヨコナデ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部～胴部片	下城式 ハケ目（7～13本／cm） 外面スス 一部剥落
025 SX 008 III－012	16	弥生	甕	石英 長石	黄黒色	黒色	ナデ 指オサエ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部～胴部片	下城式 ハケ目（7本／cm） 内外面スス
025 SX 008 III－013	16	弥生	甕	石英 角閃石 長石	淡茶灰色	淡茶灰色	ナデ	ナデ ヨコナデ					口縁部片	下城式
025 SX 008 III－014	16	弥生	甕	角閃石	黒色	黒色	ナデ	ナデ後ミガキ					口縁部片	下城式
025 SX 008 III－015	16	弥生	甕	角閃石 長石	淡灰黒色	淡灰黒色	ナデ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	下城式 ハケ目（4・8本／cm） 外面スス
025 SX 008 III－016	16	弥生	甕	石英 長石 雲母	黄橙色～褐灰色	黒褐色	ナデ後ミガキ	ハケ目 ナデ ヨコナデ					口縁部～胴部片	下城式 ハケ目（6本／cm）
025 SX 008 III－017	17	弥生	甕	石英 長石	茶褐色	橙茶褐色	ナデ	ナデ					口縁部片	下城式
025 SX 008 III－018	17	弥生	甕	石英 長石	茶褐色	茶褐色	ナデ後ミガキ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	下城式 ハケ目（3本／cm）
025 SX 008 III－019	17	弥生	甕	石英 角閃石 長石	暗茶黒色	暗茶黒色	ハケ目 指オサエ ナデ後ミガキ	ヨコナデ ハケ目後ナデ					口縁部～胴部片	下城式 ハケ目（6～7・12～13本／cm）
025 SX 008 III－020	17	弥生	甕	石英 長石	黒灰褐色	黒灰褐色	ナデ後ミガキ	ナデ ヨコナデ					口縁部片	下城式 外面スス
025 SX 008 III－021	17	弥生	甕	長石	淡茶褐色	茶黒色	ナデ後ミガキ	ナデ ヨコナデ					口縁部片	下城式 外面スス 一部剥落
025 SX 008 III－022	17	弥生	甕	角閃石 長石	茶褐色	茶褐色	ナデ後ミガキ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	下城式 ハケ目（5本／cm）
025 SX 008 III－023	17	弥生	甕	長石	暗茶褐色	黒色	ナデ	ハケ目 ナデ ヨコナデ					口縁部片	下城式 ハケ目（5本／cm）
025 SX 008 III－024	17	弥生	甕	石英 角閃石 長石	暗茶褐色	暗茶褐色	指オサエ ヨコナデ ナデ後ミガキ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部～胴部片	下城式 ハケ目（3本・6～7本／cm） 内外面スス
025 SX 008 III－025	17	弥生	甕	石英 長石	黄褐色～黒色	黄褐色～黒色	ナデ後ミガキ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部～胴部片	下城式 ハケ目（5本／cm） 内外面スス
025 SX 008 III－026	17	弥生	甕	石英 長石	黄褐色～黒褐色	黄褐色～黒褐色	指オサエ ミガキ	ハケ目 ミガキ ヨコナデ					口縁部～胴部片	下城式 ハケ目（6本／cm）

第11表　遺物観察表④

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
025 SX 008 III－027	17	弥生	甕	石英 角閃石 長石	黒色	黒色	ナデ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部～胴部片	下城式 ハケ目（6～10本／cm） 外面スス
025 SX 008 III－028	17	弥生	甕	石英 角閃石 長石	褐灰色	灰黄褐色	ナデ後ミガキ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部～胴部片	下城式 ハケ目（8本／cm）
025 SX 008 III－029	17	弥生	甕	石英 角閃石 長石	茶褐色	赤茶褐色	ナデ 指オサエ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部～胴部片	下城式 ハケ目（14～17本／cm）
025 SX 008 III－030	17	弥生	甕	石英 角閃石 長石	灰黄褐色	橙色～黒色	指オサエ ナデ後ミガキ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	下城式 ハケ目（6本／cm）
025 SX 008 III－031	17	弥生	甕	石英 長石	褐灰色	灰黄色	指オサエ ナデ後ミガキ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	下城式
025 SX 008 III－032	18	弥生	甕	長石	黄茶褐色	黄茶褐色	ナデ後ミガキ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	下城式 ハケ目（6～7本／cm）
025 SX 008 III－033	18	弥生	甕	角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ後ミガキ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	下城式 ハケ目（8～9本／cm）
025 SX 008 III－034	18	弥生	甕	石英 長石	赤茶褐色	暗茶褐色	ナデ ミガキ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	ハケ目（13～14本／cm）
025 SX 008 III－035	18	弥生	甕	石英 角閃石 長石	橙褐色	橙褐色～ 淡黄褐色	ナデ 指オサエ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	ハケ目（7～9本／cm）
025 SX 008 III－036	18	弥生	甕	石英 角閃石 長石	暗茶褐色	茶黒色	ナデ後ミガキ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	下城式
025 SX 008 III－037	18	弥生	甕	石英 角閃石 長石	淡茶褐色 ～黒色	淡茶褐色 ～黒色	ミガキ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	ハケ目（8～9本／cm） 外面スス
025 SX 008 III－038	18	弥生	甕	石英 角閃石 長石	黒灰色	黒灰色	ナデ ミガキ ヨコナデ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	ハケ目（7本／cm） 外面スス
025 SX 008 III－039	18	弥生	甕	角閃石 長石	淡茶褐色	暗茶褐色	ハケ目 ナデ 指オサエ	ナデ ヨコナデ					口縁部片	
025 SX 008 III－040	18	弥生	甕	石英 長石	黒色	暗茶褐色	ナデ後ミガキ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	ハケ目（5本／cm）
025 SX 008 III－041	18	弥生	甕	石英 角閃石 長石	黄橙褐色	黄橙褐色	ナデ ヨコナデ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	下城式 ハケ目（4～6本／cm）
025 SX 008 III－042	18	弥生	甕	石英 角閃石 長石	黒褐色～ 黄橙色	黒褐色	ナデ 指オサエ ミガキ	ハケ目 ミガキ ヨコナデ					口縁部～胴部片	下城式 ハケ目（5本／cm）
025 SX 008 III－043	19	弥生	甕	角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ	ナデ ヨコナデ					口縁部片	
025 SX 008 III－044	19	弥生	甕	石英 角閃石 長石	褐茶色	淡褐色	ナデ後ミガキ	ハケ目 ナデ					口縁部片	ハケ目（8～11本／cm）
025 SX 008 III－045	19	弥生	甕	石英 角閃石 長石	黒色	黒色	指オサエ ナデ後ミガキ	ハケ目 ナデ ヨコナデ					口縁部片	下城式 ハケ目（12本／cm）
025 SX 008 III－046	19	弥生	甕	長石	暗茶黒色	暗茶黒色	ハケ目後ミガキ	ヨコナデ ハケ目後ミガキ					口縁部片	下城式 ハケ目（内面8本　外面7～8本／cm）
025 SX 008 III－047	19	弥生	甕	角閃石 長石	淡褐灰色	淡灰褐色	ミガキ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	下城式 ハケ目（7本／cm）
025 SX 008 III－048	19	弥生	甕	石英 長石	暗茶褐色	茶褐色	ナデ後ミガキ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	ハケ目（11～12本／cm）
025 SX 008 III－049	19	弥生	甕	石英 角閃石 長石	黄橙色	灰黄褐色	指オサエ ナデ後ミガキ後あとヨコナデ	ハケ目後 ナデ後あとヨコナデ					口縁部～胴部片	外面スス
025 SX 008 III－050	19	弥生	甕	石英 角閃石	淡灰黄色	黒灰色	ナデ 指オサエ ヨコナデ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	ハケ目（7本／cm） 外面スス
025 SX 008 III－051	19	弥生	甕	長石	暗茶褐色	橙茶褐色	ヨコナデ ナデ後ミガキ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	下城式 ハケ目（9～10本／cm）
025 SX 008 III－052	20	弥生	甕	角閃石 長石	淡茶褐色	淡灰黄色	ナデ ミガキ	ナデ ヨコナデ					口縁部片	下城式
025 SX 008 III－053	20	弥生	甕	石英 角閃石 長石	黒色	暗茶黒色	ミガキ ヨコナデ	ヨコナデ					口縁部片	下城式
025 SX 008 III－054	20	弥生	甕	長石 橙色粒子	淡茶褐色	黄褐色～ 暗茶黒色	ハケ目 指オサエ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	下城式 ハケ目（内面6本　外面7本／cm）
025 SX 008 III－055	20	弥生	甕	石英 長石	黄褐色～ 灰褐色	褐灰色	ナデ 指オサエ ミガキ	ハケ目 ナデ ヨコナデ					口縁部片	下城式 ハケ目（8本／cm） 外面スス

第12表　遺物観察表⑤

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
025 SX 008 III－056	20	弥生	甕	角閃石 長石	淡灰茶色	黒灰色	ハケ目 ナデ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	下城式 ハケ目（7本／cm）
025 SX 008 III－057	20	弥生	甕	角閃石 長石	淡灰茶褐色	淡灰黒色	ハケ目 ナデ ミガキ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部～胴部片	下城式 ハケ目（6本／cm）
025 SX 008 III－058	20	弥生	甕	石英 角閃石 長石	淡橙褐色	淡橙褐色	ナデ 指オサエ ミガキ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	下城式 ハケ目（4～5本／cm）
025 SX 008 III－059	20	弥生	甕	石英 角閃石	淡灰色	黒灰色	ナデ ヨコナデ	ナデ ヨコナデ					口縁部片	下城式 外面スス
025 SX 008 III－060	21	弥生	甕	角閃石 長石 橙色粒子	茶褐色	茶褐色	指オサエ ナデ後ミガキ	ナデ					口縁部片	下城式
025 SX 008 III－061	21	弥生	甕	石英 角閃石 長石 橙色粒子	黄褐色	黄褐色	ハケ目 ミガキ	ヨコナデ					口縁部片	下城式
025 SX 008 III－062	21	弥生	甕	石英 長石	赤茶褐色	赤茶褐色	ナデ 指オサエ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	下城式 ハケ目（7～8本／cm）
025 SX 008 III－063	21	弥生	甕	角閃石 長石	淡茶色	淡茶色	ナデ 指オサエ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	下城式 ハケ目（9～10本／cm）
025 SX 008 III－064	21	弥生	甕	石英 角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ミガキ ハケ目後ナデ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	下城式 ハケ目（8～9本／cm）
025 SX 008 III－065	21	弥生	甕	石英 角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	指オサエ ナデ後ミガキ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	下城式 ハケ目（10本／cm）
025 SX 008 III－066	21	弥生	甕	石英 角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色～黒色	ナデ 指オサエ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	下城式 ハケ目（7～8本／cm） 外面スス
025 SX 008 III－067	21	弥生	甕	角閃石 長石	黒色	黒色	ナデ後ミガキ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部～胴部片	下城式 ハケ目（7～8本／cm） 内外面スス
025 SX 008 III－068	21	弥生	甕	石英 長石 白色粒子	淡灰褐色	暗灰褐色	ハケ目 ナデ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	下城式 ハケ目（8本／cm）
025 SX 008 III－069	21	弥生	甕	石英 長石	茶褐色	茶褐色～黒色	指オサエ ナデ後ミガキ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部～胴部片	下城式 ハケ目（6～7本／cm） 外面スス
025 SX 008 III－070	21	弥生	甕	角閃石 長石	茶褐色～淡茶黒色	黄褐色～黒色	ヨコナデ	ハケ目 ナデ ヨコナデ					口縁部～胴部片	下城式 ハケ目（7～8本／cm）
025 SX 008 III－071	21	弥生	甕	石英 長石	灰褐色	黄灰色～黒褐色	ナデ ミガキ	ハケ目 ヨコナデ					胴部片	ハケ目（5～8本／cm）
025 SX 008 III－072	21	弥生	甕	角閃石 長石	淡黒色	黒色	ナデ ミガキ	ハケ目 ナデ					胴部片	ハケ目（6本／cm）
025 SX 008 III－073	22	弥生	甕	長石	暗茶黒色	暗茶黒色	ヨコナデ	指オサエ ヨコナデ					口縁部片	内外面スス
025 SX 008 III－074	22	弥生	甕	長石 白色粒子	淡茶褐色	暗茶黒色	ミガキ ヨコナデ	ハケ目 ナデ					口縁部片	ハケ目（7～8本／cm）
025 SX 008 III－075	22	弥生	甕	石英 角閃石 長石	茶褐色	暗茶黒色	ナデ 指オサエ	ナデ ヨコナデ					口縁部片	
025 SX 008 III－076	22	弥生	甕	角閃石 長石	暗茶褐色	暗茶褐色	ミガキ ヨコナデ	ハケ目 ミガキ					口縁部片	ハケ目（6本／cm） 外面スス
025 SX 008 III－077	22	弥生	甕	石英 角閃石 長石	茶褐色	茶褐色	指オサエ ナデ後ミガキ	ヨコナデ ハケ目後ミガキ					口縁部～胴部片	ハケ目（6本／cm）
025 SX 008 III－078	22	弥生	甕	石英 長石	茶褐色	黄茶褐色	指オサエ ミガキ ヨコナデ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	瀬戸内系 ハケ目（5～6本／cm）
025 SX 008 III－079	22	弥生	甕	石英 長石	黒色	黒色	指オサエ ヨコナデ ナデ後ミガキ	不明瞭					口縁部片	瀬戸内系
025 SX 008 III－080	22	弥生	甕	石英 角閃石 長石	黄茶褐色	暗茶褐色	ミガキ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	瀬戸内系 ハケ目（6～7本／cm）
025 SX 008 III－081	22	弥生	鉢	角閃石 長石	暗茶褐色	暗茶黒色	ミガキ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	瀬戸内系 ハケ目（6本／cm）
025 SX 008 III－082	22	弥生	甕	石英 角閃石 長石	淡灰黒色	黒灰色	ヨコナデ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部～胴部片	ハケ目（6本／cm） 外面スス
025 SX 008 III－083	22	弥生	甕	角閃石 長石	暗茶黒色	暗茶黒色	ナデ 指オサエ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	ハケ目（7本／cm）
025 SX 008 III－084	22	弥生	甕	石英 橙色粒子	暗褐茶色	黒灰色	ナデ ヨコナデ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	瀬戸内系 ハケ目（6本／cm） 外面スス

第13表　遺物観察表⑥

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
025 SX 008 III－085	22	弥生	甕	角閃石 長石	暗茶褐色	赤茶褐色	ミガキ	ヨコナデ ハケ目後 ミガキ					口縁部片	ハケ目（5・6本／cm）
025 SX 008 III－086	22	弥生	甕	石英 角閃石	淡茶褐色	黒灰色～ 灰褐色	ナデ ヨコナデ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	ハケ目（6本／cm） 外面スス
025 SX 008 III－087	23	弥生	甕	長石	淡茶褐色	茶褐色	ナデ ミガキ	ハケ目 ミガキ ヨコナデ					口縁部片	ハケ目（14～15本／cm）
025 SX 008 III－088	23	弥生	甕	石英 角閃石 長石	淡茶黒色	淡茶褐色	ナデ ミガキ	ナデ ヨコナデ					口縁部片	
025 SX 008 III－089	23	弥生	甕	石英 角閃石 長石	淡茶褐色	黒色	ナデ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	ハケ目（7～8本／cm）
025 SX 008 III－090	23	弥生	甕	石英 角閃石 長石	暗茶褐色	茶褐色	ナデ ミガキ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部～胴部片	ハケ目（6本／cm）
025 SX 008 III－091	23	弥生	甕	角閃石 長石	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ	ハケ目 ナデ ヨコナデ					口縁部片	ハケ目（6～7本／cm）
025 SX 008 III－092	23	弥生	甕	角閃石 長石	黒色	黒色	ナデ ミガキ ヨコナデ	ハケ目後 ミガキ					口縁部～胴部片	ハケ目（6～7本／cm）
025 SX 008 III－093	23	弥生	甕	角閃石 長石	茶褐色～ 黒色	黒色	ナデ ミガキ	ハケ目後 ミガキ ヨコナデ					口縁部～胴部片	ハケ目（12～13本／cm）
025 SX 008 III－094	24	弥生	甕	石英 角閃石 長石	暗茶黒色	茶褐色	ナデ 指オサエ	ハケ目 ナデ ミガキ				6.4	底部	ハケ目（6本／cm）
025 SX 008 III－095	24	弥生	甕	角閃石 長石	黒色	橙茶色	ナデ 指オサエ	ナデ ハケ目後 ミガキ				7.2	底部	ハケ目（12本／cm） 内面スス
025 SX 008 III－096	24	弥生	甕	石英 角閃石 長石	黒色	暗茶褐色	ナデ 指オサエ	ハケ目後 ナデ ミガキ				6.5	底部	ハケ目（7本／cm）
025 SX 008 III－097	25	弥生	鉢	角閃石 長石	茶褐色	黒色	ヨコナデ ハケ目後 ミガキ	ヨコナデ ハケ目後 ミガキ					口縁部片	ハケ目（6本／cm）
025 SX 008 III－098	25	弥生	鉢	角閃石 長石	茶褐色～ 黒色	茶褐色	指オサエ ナデ後ミガキ	ハケ目後 ミガキ					口縁部～胴部片	ハケ目（5本／cm）
025 SX 008 III－099	25	弥生	鉢	角閃石 長石 橙色粒子	茶褐色	茶褐色	ナデ ミガキ ヨコナデ	ハケ目 ミガキ					口縁部～胴部片	ハケ目（6本／cm） 外面黒斑 剥落
025 SX 008 III－100	25	弥生	鉢	角閃石 長石	赤褐色	黒色	ミガキ	ミガキ ヨコナデ					口縁部片	
025 SX 008 III－101	25	弥生	鉢	石英 角閃石 長石	茶褐色～ 黒色	茶褐色～ 黒色	ミガキ	ミガキ					口縁部片	内外面スス
025 SX 008 III－102	25	弥生	鉢	角閃石 長石 橙色粒子	赤褐色～ 黒色	赤褐色～ 茶褐色	ナデ	ハケ目後 ミガキ					口縁部～胴部片	ハケ目（8本／cm）
025 SX 008 III－103	25	弥生	台付鉢	角閃石 長石	淡茶褐色 ～黒色	淡茶褐色 ～黒色	ヨコナデ	ハケ目 ヨコナデ					裾部片	ハケ目（7本／cm）
025 SX 008 III－104	26	弥生	蓋	長石	暗茶褐色	暗茶褐色	ハケ目 ナデ 指オサエ	ナデ 指オサエ ミガキ ヨコナデ					口縁部片	
025 SX 008 III－105	26	弥生	蓋	石英 角閃石 長石 雲母	橙色	橙色～黒色	ナデ 指オサエ	ナデ ハケ目後 ミガキ				8.0	上部のみ	ハケ目（5・6本／cm） ※底径は口径
025 SX 008 III－106	26	弥生	蓋	石英	淡赤褐色 ～淡灰茶 褐色	淡黒色～ 淡灰茶褐 色	ハケ目 指オサエ ヨコナデ	ハケ目 ヨコナデ	7.0	11.0		(27.0)	全体1／3	ハケ目（3～5・10～12本／cm） ※口径は頂部径・底径は口径
025 SX 008 III－107	26	弥生	高坏	石英 角閃石 長石 雲母	橙色	褐灰色～ 橙色	ナデ	ハケ目後 ミガキ					坏部～脚部片	ハケ目（7本／cm） 赤色塗彩
025 SX 008 III－108	26	弥生	高坏	石英 角閃石 長石	茶褐色～ 黒色	茶褐色～ 黒色	ナデ 指オサエ ミガキ	ハケ目 ミガキ				(10.0)	脚部2／3	ハケ目（6・7本／cm）
025 SX 008 III－109	26	弥生	高坏	石英 砂粒	黒色～淡 灰黒色	黒色～淡 灰黒色	指オサエ ハケナデ ミガキ風 ナデ	ナデ ハケ目後 ミガキ				(14.0)	坏部～脚部	ハケ目（5～7本／cm）
025 SX 008 III－110	27	弥生	小壺	角閃石 長石	黒色	暗茶黒色	工具ナデ 指オサエ ミガキ	ミガキ					頸部～胴部片	ミニチュア 内面スス
025 SX 008 III－111	27	弥生	小壺	石英 角閃石	淡灰黒色 ～淡茶褐 色	淡灰黒色 ～淡茶褐 色	ナデ 指オサエ	ハケ目 ミガキ風 ナデ ヨコナデ			5.5	3.0	口縁部欠損	ミニチュア
025 SX 008 III－112	27	弥生	無頸壺	角閃石	黒色	黒色	指オサエ ミガキ	ミガキ					口縁部片	

第14表　遺物観察表⑦

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
025 SX 008 III－113	27	弥生	広口壺	角閃石 長石	茶褐色	暗茶黒色	不明瞭 ヘラミガキ	不明瞭 ヘラミガキ	9.8				上部３／４	
025 SX 008 III－114	27	弥生	壺	石英 角閃石 長石	茶褐色	茶褐色	指オサエ ミガキ	ミガキ ヨコナデ					口縁部～胴上部片	
025 SX 008 III－115	27	弥生	壺	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡橙茶色	暗茶褐色	ハケ目 ナデ 指オサエ	ハケ目 指オサエ ミガキ ヨコナデ	(16.0)				口縁部～胴上部１／４	ハケ目(内面８本 外 面12本／cm)
025 SX 008 III－116	27	弥生	壺	石英 橙色粒子 金雲母	茶褐色	暗茶褐色	ナデ 指オサエ ミガキ ヨコナデ	ヨコナデ ハケ目後 ミガキ	(16.0)				口縁部～胴上部１／２	ハケ目（５本／cm）
025 SX 008 III－117	27	弥生	壺	角閃石 長石 金雲母	暗茶黒色	暗茶黒色	ハケ目 ミガキ	ミガキ ヨコナデ					口縁部片	ハケ目（７本／cm） 内外面スス
025 SX 008 III－118	27	弥生	壺	石英 角閃石 長石	茶褐色	暗茶褐色	ナデ ミガキ	ナデ ミガキ					肩部片	
025 SX 008 III－119	28	弥生	広口壺	角閃石 長石	茶褐色	茶褐色	ヨコナデ	ヨコナデ					口縁部片	
025 SX 008 III－120	28	弥生	壺	長石	茶褐色	暗茶黒色	ナデ ミガキ	ナデ ミガキ ヨコナデ					口縁部片	
025 SX 008 III－121	28	弥生	壺	角閃石 長石 白色粒子	黄褐色	暗茶黒色	ナデ	ミガキ ヨコナデ					口縁部片	
025 SX 008 III－122	28	弥生	広口壺	角閃石	茶褐色	暗茶黒色	ハケ目後 ミガキ	ヨコナデ ハケ目後 ミガキ					口縁部片	ハケ目（４本／cm）
025 SX 008 III－123	28	弥生	不明	角閃石 長石	淡黒色	淡茶褐色	ナデ	ハケ目					胴部片	ハケ目（５本／cm）
025 SX 008 III－124	28	弥生	壺	角閃石 長石	茶褐色	暗茶褐色	ナデ	ハケ目 ミガキ					肩部片	外面赤色塗彩 ハケ目（６本／cm）
025 SX 008 III－125	28	弥生	壺	角閃石 長石	灰茶褐色	茶褐色	ナデ ミガキ	ハケ目後 ミガキ					胴部片	ハケ目（６本／cm）
025 SX 008 III－126	28	弥生	壺	角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ミガキ	ハケ目					肩部片	ハケ目（６本／cm）
025 SX 008 III－127	28	弥生	壺	角閃石 長石 白色粒子	暗茶褐色	黒色	ハケ目 ナデ ミガキ ヨコナデ	ミガキ ヨコナデ					口縁部片	ハケ目（８本／cm）
025 SX 008 III－128	28	弥生	広口壺	石英 角閃石 長石	黒色	黒色	ハケ目	ハケ目 ミガキ ヨコナデ					口縁部片	ハケ目（８本／cm）
025 SX 008 III－129	28	弥生	壺	角閃石 長石	黒色	橙褐色	ミガキ	ミガキ					胴部片	
025 SX 008 III－130	28	弥生	壺	角閃石 長石	灰黒色	暗茶黒色	ミガキ	ミガキ					肩部片	
025 SX 008 III－131	28	弥生	壺	角閃石	黒色	暗茶褐色	指オサエ ミガキ	ハケ目 ミガキ					肩部片	ハケ目(10～14本／cm)
025 SX 008 III－132	28	弥生	壺	石英 角閃石 長石	暗茶黒色	暗茶黒色	ナデ ミガキ	ハケ目 ミガキ					肩部片	ハケ目（６本／cm）
025 SX 008 III－133	28	弥生	壺	角閃石 長石	黒色	黒色	ナデ 指オサエ ミガキ	ナデ ミガキ					肩部片	
025 SX 008 III－134	28	弥生	壺	石英 砂粒	暗黒茶褐色	黒色	ナデ	ハケ目後 ミガキ					肩部片	ハケ目（５～６本／cm）
025 SX 008 III－135	28	弥生	壺	石英 長石 橙色粒子	淡茶褐色	茶褐色	ナデ 指オサエ ミガキ 指ナデ	ハケ目 ナデ ミガキ					胴部片	外面赤色塗彩 ハケ目（５本／cm）
025 SX 008 III－136	29	弥生	壺	角閃石 長石	茶褐色	茶褐色	ナデ後ミガキ	ハケ目 ミガキ ヨコナデ					口縁部片	ハケ目（６本／cm）
025 SX 008 III－137	29	弥生	壺	角閃石 長石	暗茶褐色	黒色	ミガキ	ミガキ ヨコナデ					口縁部片	
025 SX 008 III－138	29	弥生	広口壺	石英 長石	黒色	黒色	ミガキ	ミガキ					口縁部片	
025 SX 008 III－139	29	弥生	広口壺	石英 角閃石 長石	黄褐色～ 黒褐色	赤褐色	ハケ目後 ミガキ	ハケ目 ナデ ミガキ					頸部片	ハケ目（５本／cm）
025 SX 008 III－140	29	弥生	壺	石英 長石	褐色	黒色	ナデ ミガキ	ミガキ ヨコナデ					頸部片	外面スス
025 SX 008 III－141	29	弥生	壺	石英 角閃石 橙色粒子	淡茶黒色	黒茶褐色	ミガキ	ミガキ			(31.8)	(9.6)	胴部～底部	内外面一部剥離 内外面スス
025 SX 008 III－142	29	弥生	壺	石英 角閃石 長石	淡黄褐色	黒色	ミガキ	ハケ目 工具ナデ 指オサエ ミガキ				7.4	底部のみ	ハケ目（５本／cm） 内面一部剥離
025 SX 008 III－143	29	弥生	小壺	角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ 指オサエ	ハケ目 ナデ 指オサエ				3.4	底部のみ	ハケ目（６本／cm）

第15表　遺物観察表⑧

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
025SX008III−144	29	土錘												別表
025SX008IIIa−001	30	弥生	甕	角閃石 長石	暗茶黒色	淡茶黒色	ヨコナデ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	下城式 ハケ目（5～6本／cm）
025SX008IIIa−002	30	弥生	甕	角閃石 長石 橙色粒子	茶褐色	黒色	ヨコナデ	ハケ目 ナデ ヨコナデ					口縁部片	下城式 ハケ目（6～7本／cm）
025SX008IIIa−003	30	弥生	甕	石英 角閃石	淡褐灰色	灰黒色～ 淡茶褐色	ナデ ヨコナデ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	下城式 ハケ目（12本／cm） 外面スス
025SX008IIIa−004	30	弥生	甕	角閃石	赤褐色～ 暗灰色	黄褐色	ナデ ヨコナデ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	下城式 ハケ目（7本／cm）
025SX008IIIa−005	30	弥生	甕	石英 角閃石	淡赤褐色	淡白褐色	ナデ ヨコナデ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	下城式 ハケ目（9本／cm）
025SX008IIIa−006	30	弥生	甕	角閃石 長石	茶褐色	淡茶褐色	ヨコナデ ナデ後ミガキ	ハケ目 ナデ ヨコナデ					口縁部片	下城式
025SX008IIIa−007	30	弥生	甕	角閃石 長石 白色粒子	淡灰黒色	灰黒色	ハケ目 ヨコナデ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部～胴部片	下城式 ハケ目（9～12本／cm） 外面スス
025SX008IIIa−008	30	弥生	甕	石英 長石	黒色	黒褐色	ナデ 指オサエ ミガキ	ハケ目 ナデ ヨコナデ					口縁部～胴部片	下城式 ハケ目（7・12本／cm） 内外面スス
025SX008IIIa−009	31	弥生	甕	石英 角閃石	黒灰色	黒灰色	ナデ 指オサエ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部～胴部片	ハケ目（7本／cm） 外面スス
025SX008IIIa−010	31	弥生	甕	石英 角閃石 長石 雲母	黄橙色～ 褐灰色	灰褐色	ナデ 指オサエ ミガキ	ハケ目 ミガキ ヨコナデ					口縁部～胴部片	ハケ目（7本／cm）
025SX008IIIa−011	31	弥生	甕	石英 角閃石 長石	褐色	褐色	ナデ ミガキ ヨコナデ	ハケ目 ミガキ ヨコナデ					口縁部～胴部片	ハケ目（7本／cm）
025SX008IIIa−012	31	弥生	甕	石英 角閃石 長石	茶褐色	茶褐色	ナデ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	ハケ目（8～9本／cm）
025SX008IIIa−013	31	弥生	甕	角閃石 長石	暗茶黒色	暗茶黒色	ナデ後ミガキ	ヨコナデ ナデ後ハケ目					口縁部片	ハケ目（4～5本／cm）
025SX008IIIa−014	31	弥生	甕	石英 橙色粒子	淡灰褐色	暗黄褐色	ナデ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部～胴部片	ハケ目（9～11本／cm）
025SX008IIIa−015	32	弥生	甕	角閃石 長石	淡黄褐色	淡黄褐色	ハケ目 ナデ 指オサエ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	下城式 ハケ目（5本／cm）
025SX008IIIa−016	32	弥生	甕	角閃石 長石	暗茶褐色	暗茶褐色	ミガキ	ハケ目 ナデ ヨコナデ					口縁部片	下城式 ハケ目（5～6本／cm）
025SX008IIIa−017	32	弥生	甕	石英	暗茶褐色	暗茶黒色	ナデ	ナデ ヨコナデ					口縁部片	下城式 外面炭化物 一部剥落
025SX008IIIa−018	32	弥生	甕	石英 角閃石 長石	淡茶褐色	茶褐色	ミガキ	ハケ目 ナデ ヨコナデ					口縁部片	下城式
025SX008IIIa−019	32	弥生	甕	角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ハケ目 ナデ ミガキ	ハケ目 ナデ ヨコナデ					口縁部片	下城式 ハケ目（6～7本／cm）
025SX008IIIa−020	32	弥生	甕	石英 角閃石 長石	橙褐色	橙褐色	ナデ	ナデ ヨコナデ					口縁部片	突帯剥落 外器面剥離
025SX008IIIa−021	32	弥生	甕	角閃石 長石	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ	ナデ ヨコナデ					口縁部片	
025SX008IIIa−022	32	弥生	甕	角閃石 長石	茶褐色	茶褐色	ナデ後ミガキ	ナデ					口縁部片	外面スス
025SX008IIIa−023	32	弥生	甕	石英 角閃石 長石	茶褐色	茶褐色	ナデ 指オサエ	ハケ目 ナデ ヨコナデ					口縁部片	ハケ目（4本／cm）
025SX008IIIa−024	32	弥生	甕	角閃石 長石	淡茶褐色	黄茶褐色	ナデ 指オサエ ヨコナデ	ナデ ヨコナデ					口縁部片	
025SX008IIIa−025	32	弥生	甕	角閃石	暗茶褐色	黒色	ナデ 指オサエ ミガキ	ハケ目 ナデ ヨコナデ					口縁部片	ハケ目（9本／cm）
025SX008IIIa−026	32	弥生	甕	角閃石 長石 橙色粒子	茶褐色	暗茶褐色	ナデ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	下城式系 ハケ目（8～9本／cm） 内外面スス
025SX008IIIa−027	32	弥生	甕	石英 角閃石 長石	淡茶黒色	淡茶色	ナデ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	ハケ目（7～8本／cm）

第16表　遺物観察表⑨

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
025SX008IIIa−028	32	弥生	甕	石英 角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ヨコナデ	ハケ目 ナデ ヨコナデ					口縁部片	下城式系 ハケ目（7～8本／cm） 外面スス
025SX008IIIa−029	32	弥生	甕	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡橙褐色	淡橙褐色 ～暗茶黒色	ナデ 指オサエ	ハケ目 ナデ 指オサエ ヨコナデ					口縁部～胴部片	下城式系 ハケ目（5本／cm）
025SX008IIIa−030	32	弥生	甕	石英 角閃石 長石	黒灰色	黒灰色	ナデ 指オサエ ミガキ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部～胴部片	下城式系 ハケ目（9～11本／cm）
025SX008IIIa−031	33	弥生	甕	石英 角閃石 長石	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	ハケ目（6本／cm）
025SX008IIIa−032	33	弥生	甕	石英 角閃石	淡灰色	淡茶色	ナデ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部～胴部片	ハケ目（9～11本／cm）
025SX008IIIa−033	33	弥生	甕	角閃石 長石	淡茶色	淡茶色	ナデ	指オサエ ヨコナデ ナデ後ハケ目					口縁部片	ハケ目（5～6本／cm）
025SX008IIIa−034	33	弥生	甕	角閃石 長石	黒灰色	黒灰色	ナデ ヨコナデ	ヨコナデ ナデ後ハケ目					口縁部～胴部片	ハケ目（9～11本／cm） 外面スス
025SX008IIIa−035	33	弥生	甕	石英 角閃石	淡灰茶色	黒灰褐色	ハケ目 ミガキ	ハケ目 ミガキ ヨコナデ					口縁部～胴部片	ハケ目（6本／cm）
025SX008IIIa−036	33	弥生	甕	石英 角閃石 長石	暗茶褐色	茶褐色	ナデ ヨコナデ	ハケ目 ナデ ヨコナデ					口縁部～胴部片	瀬戸内系 ハケ目（6～7本／cm）
025SX008IIIa−037	33	弥生	甕	石英 長石	淡茶褐色	橙褐色	指オサエ ナデ後ミガキ	ハケ目 ナデ					口縁部～胴部片	瀬戸内系 ハケ目（6本／cm）
025SX008IIIa−038	33	弥生	甕	石英 橙色粒子	明褐灰色	黒灰色～ 明褐茶色	ヨコナデ ナデ後ミガキ	ヨコナデ ナデ後ハケ目					口縁部～胴部片	瀬戸内系 ハケ目（6本／cm） 外面スス
025SX008IIIa−039	33	弥生	甕	石英 長石	茶褐色	黒色	指オサエ ミガキ ヨコナデ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部～胴部片	瀬戸内系 ハケ目（3・4本／cm） 外面スス
025SX008IIIa−040	33	弥生	台付鉢	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	黒色	ナデ ミガキ ヨコナデ	ハケ目 ナデ ヨコナデ					口縁部～胴部片	ハケ目（5本／cm） 外面スス 一部剥離
025SX008IIIa−041	34	弥生	甕	石英 角閃石 長石	茶褐色	黄褐色	ナデ 指オサエ ミガキ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	ハケ目（7～8本／cm）
025SX008IIIa−042	34	弥生	甕	石英 長石	暗茶褐色	暗茶黒色	ナデ ミガキ ヨコナデ	ハケ目 ナデ ヨコナデ					口縁部片	ハケ目（7～8本／cm）
025SX008IIIa−043	34	弥生	甕	石英 角閃石 長石	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ 指オサエ ヨコナデ	ハケ目 ナデ ヨコナデ					口縁部～胴部片	ハケ目（8～9本／cm）
025SX008IIIa−044	34	弥生	甕	石英 長石	淡茶褐色	暗茶褐色	ナデ	ハケ目 ナデ ヨコナデ					口縁部片	
025SX008IIIa−045	34	弥生	甕	角閃石 長石	暗茶褐色	暗茶黒色	ミガキ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	外面スス
025SX008IIIa−046	34	弥生	甕	石英 角閃石 長石	灰黄褐色	黒灰色	ナデ ヨコナデ	ハケ目 ナデ ヨコナデ					口縁部片	ハケ目（12本／cm） 外面スス
025SX008IIIa−047	34	弥生	甕	角閃石 長石	暗茶黒色	暗茶黒色	ナデ ミガキ	ハケ目 ナデ					口縁部～胴部片	ハケ目（4本・6～7本／cm） 内外面スス
025SX008IIIa−048	34	弥生	甕	角閃石 長石 橙色粒子	淡橙褐色	淡橙褐色	ナデ 指オサエ	ハケ目 ナデ ヨコナデ					口縁部片	
025SX008IIIa−049	35	弥生	甕	石英 角閃石 長石	淡茶黒色	橙褐色	ナデ 指オサエ	ハケ目 ヨコナデ				5.9	底部のみ	ハケ目（7本／cm） 内面スス
025SX008IIIa−050	35	弥生	甕	長石	黒色	淡茶褐色	ナデ	ハケ目 ナデ				7.7	底部のみ	ハケ目（4本／cm） 内面炭化物
025SX008IIIa−051	35	弥生	甕	石英 角閃石 長石	黒色	淡茶褐色	ナデ 指オサエ	ハケ目 ナデ				8.3	胴下部～底部	ハケ目（6本／cm） 内面炭化物
025SX008IIIa−052	36	弥生	鉢	角閃石 長石	茶褐色	茶褐色	ナデ 指オサエ ミガキ	ナデ ヨコナデ					口縁部片	
025SX008IIIa−053	36	弥生	鉢	角閃石 橙色粒子	淡橙褐色	淡橙褐色	ナデ	ナデ					口縁部片	
025SX008IIIa−054	36	弥生	鉢	石英 長石	淡黄褐色	暗茶褐色	ミガキ	ナデ ヨコナデ					胴部片	
025SX008IIIa−055	36	弥生	台付鉢	長石	黒色	淡橙褐色	指オサエ ナデ後ミガキ	ナデ ミガキ					裾部片	
025SX008IIIa−056	36	弥生	不明	角閃石 長石	茶褐色	茶褐色	ナデ 指オサエ ミガキ	ナデ					胴部片	

第17表　遺物観察表⑩

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
025SX008IIIa−057	37	弥生	壺	石英 角閃石 長石	茶褐色	茶褐色	ナデ ミガキ	指オサエ ヨコナデ ハケナデ					口縁部片	
025SX008IIIa−058	37	弥生	壺	角閃石 長石 白色粒子	淡茶褐色	黒色	ナデ 指オサエ ミガキ ヨコナデ	ハケ目 ミガキ ヨコナデ					口縁部～頸部片	ハケ目（4・5本／cm） 外面スス
025SX008IIIa−059	37	弥生	壺	長石	淡茶褐色	暗茶褐色	ミガキ ヨコナデ	ミガキ ヨコナデ					口縁部片	
025SX008IIIa−060	37	弥生	壺	石英 角閃石 長石	茶褐色～ 暗茶褐色	茶褐色～ 暗茶褐色	ナデ 指オサエ ミガキ ヨコナデ	ナデ ミガキ ヨコナデ	(14.8)		(25.0)		口縁部～ 胴部1／4	
025SX008IIIa−061	37	弥生	壺	角閃石	淡黒褐色	淡黒褐色	ミガキ	ハケ目後 ミガキ	(27.2)				口縁部1／2	ハケ目（6～8本／cm）
025SX008IIIa−062	37	弥生	壺	石英 角閃石 長石	褐灰色	褐灰色	ナデ 指オサエ	ナデ ミガキ					肩部片	
025SX008IIIa−063	37	弥生	壺	石英 角閃石 長石 片岩	淡茶灰色	茶褐色	ミガキ	ナデ ミガキ					肩部片	外面黒斑
025SX008IIIa−064	37	弥生	壺	石英 角閃石 長石	茶褐色	淡黄褐色	ナデ	ハケ目 ミガキ					胴部片	ハケ目（11本／cm）
025SX008IIIa−065	37	弥生	壺	角閃石 長石	淡茶褐色	橙褐色	ナデ ミガキ	ミガキ					胴部片	
025SX008IIIa−066	37	弥生	壺	石英 長石	淡黄褐色	淡橙褐色	指オサエ ミガキ	ミガキ					胴部片	
025SX008IIIa−067	37	弥生	壺	角閃石 長石	灰白色	暗黄褐色 ～灰褐色	ミガキ風 ナデ	ハケ目					胴部片	ハケ目（8～10本／cm）
025SX008IIIa−068	37	弥生	壺	石英 角閃石	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ 指オサエ	ハケ目					肩部片	ハケ目（7本／cm）
025SX008IIIa−069	37	弥生	壺	石英 角閃石 長石 金雲母	淡茶褐色	暗茶褐色	ナデ 指オサエ	ハケ目 ナデ					肩部片	ハケ目（6～8本／cm）
025SX008IIIa−070	37	弥生	壺	石英 角閃石 長石 橙色粒子	茶褐色	茶褐色	ミガキ	ミガキ					肩部片	
025SX008IIIa−071	37	弥生	壺	石英 角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	指オサエ ミガキ	ミガキ					胴部片	
025SX008IIIa−072	37	弥生	壺	石英	灰褐色～ 黒色	灰褐色～ 黒色	ナデ	ハケ目後 ミガキ					胴部片	ハケ目（8～10本／cm）
025SX008IIIa−073	37	弥生	壺	角閃石 長石	黄茶色	黄茶色	ナデ	指オサエ ナデ後ミガキ				5.0	底部のみ	
025SX008IIIa−074	37	弥生	壺	石英 角閃石 長石 橙色粒子 金雲母	茶褐色	黒茶色	ナデ 指オサエ ミガキ	ハケ目 ナデ 指オサエ ミガキ 指ナデ				6.4	底部のみ	ハケ目（8本／cm）
025SX008IIIa−075	37	弥生	壺	角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ 指オサエ ミガキ	ナデ ミガキ				8.4	底部のみ	外面スス
025SX008IIIa−076	37	弥生	壺	石英	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ	ハケ目 ナデ				5.3	底部のみ	ハケ目（6本／cm）
025SX008IIIa−077	37	弥生	壺	角閃石 長石	暗茶褐色	暗茶褐色	ナデ 指オサエ ミガキ	ハケ目 指オサエ ミガキ				8.7	底部のみ	ハケ目（5～7本／cm）
025SX008IIIb−001	38	弥生	甕	角閃石 長石	淡茶褐色	黒色	ミガキ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	ハケ目（5～6本／cm） 外面スス
025SX008IIIb−002	38	弥生	甕	石英 角閃石 長石	淡茶黒色	淡黄褐色	ナデ	ナデ ヨコナデ					口縁部片	
025SX008IIIb−003	38	弥生	甕	長石	茶褐色	茶褐色	ハケ目 ミガキ	ハケ目 ミガキ ヨコナデ					口縁部片	ハケ目（内面6～7本　外面5～6本）
025SX008IIIb−004	38	弥生	甕	角閃石 長石	黒色	黒色	ナデ ミガキ	ナデ ミガキ ヨコナデ					口縁部片	内外面スス
025SX008IIIb−005	38	弥生	甕	石英 角閃石 長石	茶褐色	黄茶褐色	ナデ 指オサエ ミガキ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部～胴部片	ハケ目（7～8本／cm）
025SX008IIIb−006	38	弥生	甕	石英 角閃石 長石	淡橙褐色	橙褐色	ナデ 指オサエ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部～胴部片	ハケ目（5本／cm）
025SX008IIIb−007	38	弥生	甕	石英 角閃石 長石	灰黒色	黒灰色	ナデ ミガキ	ハケ目 ナデ ヨコナデ					口縁部～胴部片	ハケ目（6本／cm） 外面スス
025SX008IIIb−008	38	弥生	甕	角閃石	灰黒色	灰黒色	ナデ ミガキ ヨコナデ	ナデ ヨコナデ					口縁部～胴部片	外面スス

第18表　遺物観察表⑪

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
025SX008IIIb−009	38	弥生	甕	長石	暗茶褐色	黒色	ハケ目 ナデ 指オサエ	ハケ目 ナデ					口縁部～胴部片	ハケ目(内面10～12本　外面7～9本／cm) 炭化物
025SX008IIIb−010	38	弥生	甕	角閃石 長石	暗茶黒色	暗茶黒色	ナデ ミガキ ヨコナデ	ナデ ヨコナデ					口縁部片	
025SX008IIIb−011	38	弥生	甕	角閃石 長石	灰黒茶色 ～白灰色	灰黒色	ナデ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	ハケ目(4本／cm)
025SX008IIIb−012	38	弥生	甕	石英 長石	暗茶褐色	暗茶褐色	ハケ目 ナデ	ヨコナデ					口縁部片	ハケ目(5～6本／cm)
025SX008IIIb−013	38	弥生	甕	角閃石 長石	淡茶褐色	茶褐色～ 黒色	ナデ 指オサエ	ハケ目 ナデ ヨコナデ					口縁部片	ハケ目(7～8本／cm)
025SX008IIIb−014	38	弥生	甕	角閃石 長石	茶黒色	茶褐色	ナデ 指オサエ ミガキ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部～胴部片	ハケ目(7～8本／cm)
025SX008IIIb−015	38	弥生	甕	石英 角閃石 長石	茶褐色	黒色	ナデ ヨコナデ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部～胴部片	ハケ目(4～5本／cm) 外面スス
025SX008IIIb−016	38	弥生	甕	角閃石 長石	淡赤褐色	赤褐色	ハケ目後 ナデ後あ とミガキ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部～胴部片	ハケ目(7～12本／cm)
025SX008IIIb−017	38	弥生	甕	石英 角閃石 長石	橙色～褐 灰色	黒色	ナデ後ミ ガキ	ハケ目 ナデ ヨコナデ					口縁部～胴部片	ハケ目(11本／cm) 外面スス
025SX008IIIb−018	39	弥生	甕	石英 長石	淡茶褐色	淡黄褐色	ナデ後ミ ガキ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	ハケ目(8本／cm)
025SX008IIIb−019	39	弥生	甕	石英	暗茶褐色	暗茶黒色	ナデ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部～胴部片	ハケ目(7～8本／cm) 外面スス
025SX008IIIb−020	39	弥生	甕	石英 角閃石 長石	暗茶褐色	暗茶黒色	ナデ 指オサエ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	ハケ目(7本／cm) 外面スス
025SX008IIIb−021	39	弥生	甕	石英 長石	橙茶褐色	黄茶褐色	ナデ 指オサエ ヨコナデ	ハケ目 ナデ ヨコナデ					口縁部片	ハケ目(3～4本／cm)
025SX008IIIb−022	39	弥生	甕	角閃石 橙色粒子	淡茶褐色	淡褐灰色	ナデ 指オサエ ヨコナデ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	ハケ目(7～9本／cm)
025SX008IIIb−023	39	弥生	甕	石英 長石	灰黄褐色	橙色	ハケ目後 ナデ後あ とミガキ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	ハケ目(4本／cm)
025SX008IIIb−024	39	弥生	甕	石英 長石	赤褐色	赤褐色	ナデ ミガキ	ヨコナデ ハケ目後 ナデ					口縁部片	ハケ目(4本／cm)
025SX008IIIb−025	39	弥生	甕	石英 角閃石 長石	灰褐色～ 橙色	褐色	ヨコナデ ナデ後ミ ガキ	ヨコナデ ハケ目後 ミガキ					口縁部片	ハケ目(6・7本／cm)
025SX008IIIb−026	39	弥生	甕	角閃石 長石	黒色	黒色	ナデ ヨコナデ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	ハケ目(6～7本／cm) 内外面スス
025SX008IIIb−027	39	弥生	甕	石英 角閃石 長石	褐色	褐色	ナデ 指オサエ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部～胴部片	ハケ目(8～12本／cm) 外面スス
025SX008IIIb−028	39	弥生	甕	石英	淡灰褐色 ～黒色	淡灰褐色 ～黒色	ナデ 指オサエ ヨコナデ	ハケ目 ナデ ヨコナデ	(23.6)				口縁部～ 胴部1／3	ハケ目(11～14本／cm)
025SX008IIIb−029	39	弥生	甕	石英 角閃石 長石 雲母	黒色	黒色	指オサエ ナデ後ミ ガキ	ヨコナデ ナデ後ハ ケ目後あ とミガキ					口縁部～胴部片	ハケ目(6本／cm)
025SX008IIIb−030	39	弥生	甕	石英 長石	茶褐色	黒色	ハケ目後 ミガキ	ヨコナデ ハケ目後 ミガキ					口縁部～胴部片	ハケ目(5～7本／cm) 外面スス
025SX008IIIb−031	40	弥生	甕	石英 角閃石	淡灰褐色	暗灰褐色	ナデ ハケ目後 ミガキ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	ハケ目(5本／cm)
025SX008IIIb−032	40	弥生	甕	角閃石 長石	淡茶褐色	黄褐色	ナデ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	ハケ目(7～8本／cm)
025SX008IIIb−033	40	弥生	甕	石英 角閃石 長石	灰黄褐色	橙色～褐 灰色	ナデ後ミ ガキ	ナデ ヨコナデ					口縁部片	下城式
025SX008IIIb−034	40	弥生	甕	石英 長石	黒褐色	灰黒色	ハケ目 ナデ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部～胴部片	下城式 ハケ目(6本／cm) 外面スス
025SX008IIIb−035	40	弥生	甕	石英 角閃石 長石	暗茶褐色	暗茶黒色	ナデ 指オサエ	ハケ目 ナデ ヨコナデ					口縁部～胴部片	下城式 ハケ目(8～9本／cm) 外面スス
025SX008IIIb−036	40	弥生	甕	石英 角閃石	明茶褐色	暗灰黒色	ナデ	ハケ目 ナデ ヨコナデ					口縁部～胴部片	下城式 ハケ目(7本／cm) 外面スス
025SX008IIIb−037	40	弥生	甕	石英 角閃石 長石	黄褐色～ 黒色	黒色	ナデ 指オサエ ミガキ	ハケ目 ナデ ヨコナデ					口縁部～胴部片	ハケ目(3本・7～8本／cm) 外面スス

第19表　遺物観察表⑫

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
025SX008IIIb−038	40	弥生	甕	角閃石 長石	黄灰色	黒黄茶色	ナデ 指オサエ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部～胴部片	ハケ目（9～12本／cm）
025SX008IIIb−039	40	弥生	甕	石英 長石	灰褐色	黄褐色	ナデ	ハケ目 ナデ ヨコナデ					口縁部～胴部片	下城式
025SX008IIIb−040	40	弥生	甕	石英 長石	褐色	橙色～黒褐色	ナデ 指オサエ	ハケ目 ヨコナデ	36.2				口縁部～ 胴部3／4	下城式 ハケ目（8～13本／cm）
025SX008IIIb−041	41	弥生	甕	石英 角閃石	淡灰褐色	黒茶褐色	ナデ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	ハケ目（7本／cm）
025SX008IIIb−042	41	弥生	甕	角閃石 長石	淡灰色	黒灰色	ナデ ヨコナデ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	ハケ目（6・7本／cm） 外面スス
025SX008IIIb−043	41	弥生	甕	石英 角閃石	淡茶褐色	黄茶褐色	ハケ目	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	ハケ目（7本／cm）
025SX008IIIb−044	41	弥生	甕	石英 角閃石 長石	茶褐色	橙褐色	ナデ 指オサエ ミガキ	ハケ目 ミガキ ヨコナデ					口縁部片	ハケ目（5～6本／cm）
025SX008IIIb−045	41	弥生	甕	石英 長石	暗茶褐色	暗茶褐色	ナデ ミガキ ヨコナデ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	ハケ目（7～8本／cm） 外面スス 外面一部剥落
025SX008IIIb−046	41	弥生	甕	角閃石	淡茶褐色	暗茶黒色	ナデ 指オサエ	ナデ ヨコナデ					口縁部片	
025SX008IIIb−047	41	弥生	甕	石英 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ハケ目 ナデ 指オサエ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	ハケ目（内面8～9本　外面9本／cm）
025SX008IIIb−048	41	弥生	甕	石英 角閃石	灰黒褐色	黒色	ナデ 指オサエ ミガキ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部～胴部片	ハケ目（5・6本／cm） 外面スス
025SX008IIIb−049	41	弥生	甕	石英 角閃石 長石	灰褐色	黄橙色	ナデ ミガキ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部～胴部片	ハケ目（5～8本／cm）
025SX008IIIb−050	41	弥生	甕	角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ 指オサエ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	ハケ目（5～6本／cm）
025SX008IIIb−051	42	弥生	甕	長石	暗茶褐色	黒色	ナデ 指オサエ ミガキ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部～胴部片	ハケ目（6本／cm） 外面スス
025SX008IIIb−052	42	弥生	甕	石英 長石	淡灰色	黒灰色～淡灰黄色	ナデ後ミガキ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部～胴部片	ハケ目（5本／cm）
025SX008IIIb−053	42	弥生	甕	石英 長石	黒褐色	黒褐色	指オサエ ミガキ	ハケ目 ナデ ヨコナデ					口縁部～胴部片	ハケ目（7～9本／cm） 外面スス
025SX008IIIb−054	42	弥生	甕	長石	暗茶褐色	黒色～淡茶褐色	ナデ 工具ナデ 指オサエ	ハケ目 ナデ	(26.2)				口縁部～胴部片	ハケ目（10～12本／cm） 外面炭化物
025SX008IIIb−055	42	弥生	甕	石英 角閃石 長石	暗茶褐色	暗茶褐色	指オサエ ナデ後ミガキ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部～胴部片	ハケ目（6～7本／cm）
025SX008IIIb−056	42	弥生	甕	長石 金雲母	淡黄白色～黒茶褐色	黒色～灰黒色	指オサエ ミガキ ヨコナデ	ナデ 指オサエ ハケ目後ミガキ	17.7	20.0		7.9	ほぼ完存	ハケ目（8～9本／cm）
025SX008IIIb−057	43	弥生	甕	石英 角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ミガキ	ハケ目 ミガキ					口縁部片	ハケ目（6～7本／cm）
025SX008IIIb−058	43	弥生	甕	石英 長石	淡黄褐色	淡黒色	ミガキ ヨコナデ	ハケ目後 ミガキ					口縁部片	瀬戸内系 ハケ目（6本／cm）
025SX008IIIb−059	43	弥生	甕	石英 長石	暗茶褐色	黒色	ミガキ	ナデ ミガキ ヨコナデ					口縁部～胴部片	瀬戸内系 外面スス
025SX008IIIb−060	43	弥生	甕	石英 角閃石	黒灰色	淡灰黒褐色	ヨコナデ ハケ目後ミガキ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部～胴部片	ハケ目（8～12本／cm）
025SX008IIIb−061	43	弥生	甕	石英 長石	暗茶褐色	黒色	ナデ ミガキ	ハケ目 ナデ					口縁部片	瀬戸内系 ハケ目（6本／cm）
025SX008IIIb−062	43	弥生	甕	石英 角閃石 長石	黒色	淡茶褐色	ナデ ミガキ	ハケ目					口縁部片	ハケ目（4～5本／cm） 内面スス
025SX008IIIb−063	43	弥生	甕	石英 角閃石 長石	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ ミガキ	ナデ ヨコナデ					口縁部片	
025SX008IIIb−064	43	弥生	甕	石英 角閃石 長石	暗茶褐色	淡橙褐色	ミガキ	ハケ目後 ナデ後あとミガキ					口縁部片	ハケ目（5本／cm）
025SX008IIIb−065	43	弥生	甕	石英 長石	暗茶褐色	暗茶黒色	ナデ 指オサエ	ヨコナデ ナデ後ハケ目後あとミガキ	(23.2)				口縁部～胴中央 1／4	ハケ目（5～6本／cm） 内外面スス
025SX008IIIb−066	43	弥生	甕	石英 長石	茶褐色～黒色	暗茶褐色	指オサエ ミガキ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部～胴部片	ハケ目（6本／cm） 外面スス
025SX008IIIb−067	44	弥生	甕	角閃石 長石	暗茶褐色	橙褐色	ナデ	ハケ目 ナデ				7.2	底部のみ	ハケ目（5本／cm）

第20表　遺物観察表⑬

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
025SX008IIIb−068	44	弥生	甕	角閃石 長石	黒色	橙茶色	ナデ 指オサエ ミガキ	ハケ目 ナデ				6.8	底部のみ	ハケ目（5本／cm） 内面スス
025SX008IIIb−069	44	弥生	甕	石英 角閃石 長石	黒色	茶褐色	指オサエ ナデ後ミガキ	ハケ目 ナデ				7.6	底部のみ	ハケ目（5・11本／cm） 内面スス
025SX008IIIb−070	44	弥生	甕	角閃石 長石	黒色	淡茶褐色	ナデ 指オサエ	ハケ目 ナデ				6.9	底部のみ	ハケ目（6・7本／cm） 内面炭化物
025SX008IIIb−071	44	弥生	甕	角閃石 長石	黒色	橙茶色	ナデ 指オサエ	ハケ目 ナデ				8.8	底部のみ	ハケ目（5本／cm） 内面炭化物
025SX008IIIb−072	45	弥生	壺	石英 角閃石	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ	ナデ					胴部片	
025SX008IIIb−073	45	弥生	壺	石英 角閃石 長石	茶褐色	茶褐色	ミガキ	ミガキ					一部片	
025SX008IIIb−074	45	弥生	壺	角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ 指オサエ ミガキ	ミガキ					肩部片	
025SX008IIIb−075	45	弥生	壺	石英 砂粒	暗黒茶褐色	黒色	ミガキ	ハケ目 ミガキ					肩部片	赤色塗彩 ハケ目（8～10本／cm）
025SX008IIIb−076	45	弥生	壺	石英 砂粒	暗黒茶褐色	黒色	ミガキ	ナデ ミガキ					口縁部～胴部	
025SX008IIIb−077	45	弥生	壺	石英 雲母	黒色	淡黄茶褐色	ミガキ	ミガキ					肩部片	
025SX008IIIb−078	45	弥生	壺	角閃石 長石	黒色	淡茶褐色～黒色	ナデ 指オサエ ミガキ	ハケ目 ナデ ミガキ					肩部片	ハケ目（6本／cm）
025SX008IIIb−079	45	弥生	壺	石英	黒色	黒色	ミガキ	ミガキ					胴部片	
025SX008IIIb−080	45	弥生	壺	石英 角閃石 長石	褐灰色	褐灰色～黄橙色	ナデ ミガキ	ナデ ミガキ ヨコナデ					胴部片	
025SX008IIIb−081	45	弥生	壺	石英 角閃石 長石	褐灰色～黄橙色	黒褐色	ナデ ミガキ	ハケ目 ミガキ ヨコナデ					胴部片	赤色塗彩
025SX008IIIb−082	45	弥生	壺	雲母	暗茶褐色	黒色	ナデ 指オサエ ミガキ風ナデ	ハケ目 ナデ ミガキ	(11.0)		(26.4)		口縁部1／5～胴部片	ハケ目（9～11本／cm）
025SX008IIIb−083	45	弥生	壺	石英 角閃石 長石 雲母	明黄褐色～褐灰色	黄橙色～褐灰色	ナデ 指オサエ ミガキ	ハケ目 ナデ ミガキ					胴部片	ハケ目（7本／cm）
025SX008IIIb−084	46	弥生	無頸壺	角閃石 長石 橙色粒子	茶褐色	黒色	指オサエ ミガキ	ヨコナデ ハケ目後ミガキ					口縁部～胴部片	ハケ目（5本／cm） 外面スス
025SX008IIIb−085	46	弥生	無頸壺	石英 角閃石 長石	淡橙白色	淡橙褐色	ナデ 指オサエ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部～胴部片	ハケ目（7本／cm）
025SX008IIIb−086	46	弥生	壺	石英 砂粒	淡灰茶褐色	灰白色～黒色	ナデ 指オサエ	ナデ ミガキ ハケナデ			14.9	6.9	口縁部欠損	
025SX008IIIb−087	46	弥生	壺	角閃石 長石	暗茶褐色	黒色	ナデ ミガキ	ハケ目 ミガキ					胴部片	彩文土器 ハケ目（6本／cm）
025SX008IIIb−088	46	弥生	壺	角閃石 長石	黒色	黒色	ナデ 指オサエ ミガキ	ハケ目 指オサエ ミガキ				7.1	底部のみ	ハケ目(12本／cm) 内外面スス
025SX008IIIb−089	47	弥生	蓋	石英 橙色粒子	黒色	黒色	ナデ 指オサエ	ハケ目 ナデ 指オサエ	4.0	4.2		6.0	全体2／3	ハケ目（5～7本／cm） ※口径はツマミ径・底径は口径
025SX008IIIb−090	47	弥生	小型蓋	角閃石 長石 砂粒	淡黄茶褐色	黒色～淡灰色	ナデ 指オサエ ミガキ	ハケ目 ナデ 指オサエ	4.0	6.0		10.0	完存	内面スス ※口径はツマミ径・底径は口径
025SX008IIIb−091	47	弥生	高坏	石英 角閃石 長石 雲母	暗灰色～橙色	黄橙色	ミガキ	ハケ目 ミガキ ヨコナデ					坏部～脚部片	ハケ目（7本／cm）
025SX008IIIb−092	47	弥生	台付鉢	角閃石 長石	淡茶褐色	黒色	指オサエ ミガキ	ミガキ					底部のみ	
025SX008IIIc−001	48	弥生	甕	石英 角閃石 長石	茶褐色	茶褐色	ナデ ミガキ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	ハケ目（4～5本／cm）
025SX008IIIc−002	48	弥生	甕	角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ミガキ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	下城式系 ハケ目（7本／cm）
025SX008IIIc−003	48	弥生	甕	石英 角閃石 長石	褐灰色	黄橙色	ナデ 指オサエ ミガキ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	
025SX008IIIc−004	48	弥生	甕	角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ後ミガキ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	

第21表　遺物観察表⑭

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
025**SX**008IIIc−005	48	弥生	甕	石英 角閃石 長石 橙色粒子	灰茶褐色	淡灰黒色	ナデ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	ハケ目（6本／cm） 外面スス
025**SX**008IIIc−006	48	弥生	甕	石英 角閃石 長石 雲母	黒褐色～ 黄橙色	黒色～灰 黄褐色	ナデ 指オサエ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部～胴部片	ハケ目（8本／cm）
025**SX**008IIIc−007	48	弥生	甕	石英 長石	灰褐色	黒色～暗 灰黄色	指オサエ ナデ後ミガキ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部～胴部片	ハケ目（7・8本／cm） 外面スス
025**SX**008IIIc−008	48	弥生	甕	石英 角閃石 長石	淡灰色	黒色～淡 灰白色	ナデ 指オサエ ミガキ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部～胴部片	ハケ目（9本／cm） 外面スス
025**SX**008IIIc−009	48	弥生	甕	石英 角閃石 長石	茶褐色	暗茶褐色	ナデ ミガキ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	ハケ目（6本／cm）
025**SX**008IIIc−010	49	弥生	甕	角閃石 長石	茶褐色	黒色	ナデ	ハケ目 ミガキ ヨコナデ					口縁部片	ハケ目（9～10本／cm） 外面スス
025**SX**008IIIc−011	49	弥生	甕	石英 角閃石 長石	橙茶褐色	淡茶黒色	ナデ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	ハケ目（4～5本／cm）
025**SX**008IIIc−012	49	弥生	甕	石英 長石	淡茶褐色	暗茶褐色	ハケ目 ナデ	ナデ ヨコナデ					口縁部片	
025**SX**008IIIc−013	49	弥生	甕	石英 角閃石 長石	赤茶褐色	橙茶褐色	ナデ 指オサエ	ナデ ヨコナデ					口縁部片	
025**SX**008IIIc−014	49	弥生	甕	石英 角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ハケ目後 ミガキ	ヨコナデ ハケ目後 ナデ					口縁部片	ハケ目(内面7本　外面8本／cm）
025**SX**008IIIc−015	49	弥生	甕	角閃石 長石	黄褐色～ 黒色	淡茶褐色 ～黒色	ハケ目後 ナデ	ヨコナデ ハケ目後 ナデ					口縁部～胴部片	ハケ目(内面6～7本　外面8～9本／cm） 外面スス
025**SX**008IIIc−016	49	弥生	甕	石英 角閃石 長石	赤橙褐色	橙茶褐色	ナデ 指オサエ ミガキ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部～胴部片	ハケ目（3本・5～6本／cm）
025**SX**008IIIc−017	49	弥生	甕	角閃石 長石	茶褐色	茶褐色～ 黒色	指オサエ ミガキ ヨコナデ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部～胴部片	ハケ目（6本／cm）
025**SX**008IIIc−018	49	弥生	甕	角閃石 長石	茶褐色	暗茶褐色	ナデ 指オサエ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部～胴部片	ハケ目（7～8本／cm）
025**SX**008IIIc−019	49	弥生	甕	長石	黒色	黒色	ハケ目 ナデ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	ハケ目(内面5～6本　外面5本／cm）
025**SX**008IIIc−020	50	弥生	甕	石英 角閃石 長石	暗灰黄色	黄灰色	ナデ 指オサエ ミガキ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部～胴部片	ハケ目(12本／cm）
025**SX**008IIIc−021	50	弥生	甕	石英 長石	茶褐色	黒色	ナデ 指オサエ	ナデ ヨコナデ					口縁部片	外面スス
025**SX**008IIIc−022	50	弥生	甕	石英 角閃石 長石	灰黒色	黒灰色	ナデ	ナデ ヨコナデ					口縁部片	外面スス
025**SX**008IIIc−023	50	弥生	甕	石英 長石	暗茶褐色	黒色	ハケ目 ナデ 指オサエ ミガキ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	ハケ目(内面6～7本　外面6本／cm） 外面炭化物
025**SX**008IIIc−024	50	弥生	甕	角閃石 長石 白色粒子	黒灰色～ 灰白色	淡灰黒色	ハケ目 ナデ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	ハケ目（5本／cm）
025**SX**008IIIc−025	50	弥生	甕	石英 角閃石 長石	淡灰茶色	暗灰茶褐 色	ナデ 指オサエ	ナデ ヨコナデ					口縁部片	
025**SX**008IIIc−026	50	弥生	甕	角閃石 長石	黄褐色	茶黒色	ナデ ハケ目後 ミガキ	ヨコナデ ハケ目後 ミガキ					口縁部片	ハケ目（5～6本／cm）
025**SX**008IIIc−027	50	弥生	甕	石英 角閃石 長石	黒色	黄褐色	ナデ ミガキ	ハケ目 ミガキ ヨコナデ					胴部片	ハケ目（8本／cm）
025**SX**008IIIc−028	50	弥生	甕	角閃石 長石	黒色	黒色	ナデ後ミ ガキ	ナデ					胴部片	
025**SX**008IIIc−029	51	弥生	甕	石英 角閃石 長石	黄褐色	橙褐色	ナデ 指オサエ ヨコナデ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	ハケ目（4～5本／cm）
025**SX**008IIIc−030	51	弥生	甕	角閃石 長石	黒色	黒色	指オサエ ミガキ	ハケ目 ミガキ ヨコナデ					口縁部片	瀬戸内系 ハケ目（7本／cm） 外面スス
025**SX**008IIIc−031	51	弥生	甕	角閃石 長石	暗茶褐色	暗茶褐色	指オサエ ミガキ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	ハケ目（8～9本／cm）
025**SX**008IIIc−032	51	弥生	甕	角閃石 長石	淡黒色	暗茶褐色	ナデ ヨコナデ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	瀬戸内系 ハケ目（5～6本／cm）

第22表　遺物観察表⑮

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
025SX008IIIc−033	51	弥生	甕	角閃石 長石	黒色	黒色	ミガキ	ハケ目					口縁部片	瀬戸内系 ハケ目（6～7本／cm）
025SX008IIIc−034	51	弥生	甕	角閃石 長石	暗茶褐色	黒色	指オサエ ミガキ	指オサエ ミガキ					口縁部片	瀬戸内系 外面スス
025SX008IIIc−035	51	弥生	甕	石英 角閃石 長石	淡橙褐色	橙褐色	ナデ ミガキ	ハケ目 ミガキ ヨコナデ					口縁部片	ハケ目（7本／cm）
025SX008IIIc−036	51	弥生	甕	石英 長石	茶褐色	黒色	ミガキ ヨコナデ	ナデ					口縁部片	
025SX008IIIc−037	51	弥生	甕	長石	淡黄褐色	茶褐色	ナデ	ナデ ヨコナデ					口縁部片	
025SX008IIIc−038	51	弥生	甕	石英 角閃石 長石	暗茶黒色	茶黒色	ナデ	ナデ ヨコナデ					口縁部片	
025SX008IIIc−039	51	弥生	甕	石英 長石	茶褐色	黒色	ナデ ヨコナデ	ナデ ミガキ					口縁部片	瀬戸内系
025SX008IIIc−040	51	弥生	甕	長石	黒色	黒色	ナデ ミガキ	ハケ目 ミガキ					口縁部片	ハケ目（6～7本／cm） 内外面スス
025SX008IIIc−041	51	弥生	甕	角閃石 長石	暗茶褐色	暗茶褐色	ミガキ	ハケ目 ミガキ ヨコナデ					口縁部片	ハケ目（8本／cm）
025SX008IIIc−042	51	弥生	甕	角閃石 長石	淡黄褐色	暗茶黒色	ナデ	ナデ					口縁部片	
025SX008IIIc−043	51	弥生	壺	角閃石	暗茶褐色	暗茶黒色	ミガキ	指オサエ ヨコナデ					口縁部片	
025SX008IIIc−044	51	弥生	不明	長石 白色粒子	茶褐色	黒色	ミガキ	ナデ ミガキ ヨコナデ					口縁部片	
025SX008IIIc−045	51	弥生	甕	石英 角閃石 長石	淡茶褐色	茶褐色	不明	ミガキ ヨコナデ					口縁部片	内面剥離
025SX008IIIc−046	51	弥生	甕	角閃石 長石	淡茶褐色	淡灰茶褐色	ハケ目 ナデ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	ハケ目(内面8本　外面13本／cm)
025SX008IIIc−047	51	弥生	甕	石英 角閃石 長石 橙色粒子	暗茶黒色	暗茶黒色	ハケ目 ナデ 指オサエ	ハケ目 指オサエ ヨコナデ					口縁部片	ハケ目（6・7本／cm） 内外面スス
025SX008IIIc−048	51	弥生	甕	石英 角閃石 長石	暗茶黒色	茶褐色	ナデ 指オサエ	ハケ目 ナデ 指オサエ				(7.2)	胴下部～底部1／2	ハケ目（4本／cm） 内面炭化物
025SX008IIIc−049	52	弥生	無頸壺	角閃石 長石	暗茶褐色	暗茶褐色	ミガキ	ミガキ ヨコナデ					口縁部片	
025SX008IIIc−050	52	弥生	無頸壺	角閃石 長石	茶褐色	暗茶褐色	ナデ 指オサエ ミガキ	ナデ					胴部片	
025SX008IIIc−051	52	弥生	無頸壺	石英 角閃石 長石	暗茶褐色	茶褐色	ナデ ミガキ	ナデ					胴部片	
025SX008IIIc−052	52	弥生	壺	石英 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ミガキ	ハケ目					胴部片	ハケ目（8本／cm）
025SX008IIIc−053	52	弥生	壺	角閃石 長石	茶褐色	茶褐色～黒色	指オサエ ナデ後ミガキ	ミガキ ハケナデ					肩部片	
025SX008IIIc−054	52	弥生	壺	砂粒	黒色	黒色～淡黒褐色	ナデ 指オサエ	ミガキ					肩部片	
025SX008IIIc−055	52	弥生	壺	石英 角閃石 長石	暗茶褐色	暗茶褐色	ナデ ミガキ	ハケ目 ミガキ ヨコナデ					口縁部片	ハケ目（8本／cm）
025SX008IIIc−056	52	弥生	壺	角閃石 長石	暗茶褐色	黒色	ミガキ	ヨコナデ ハケ目後ミガキ					口縁部片	ハケ目（5本／cm） 内面一部剥離
025SX008IIIc−057	52	弥生	壺	砂粒	淡黒茶褐色	淡黒茶褐色	ミガキ	指オサエ ミガキ					口縁部片	
025SX008IIIc−058	52	弥生	壺	石英 長石	茶褐色	茶褐色	ナデ ミガキ	ミガキ ヨコナデ					口縁部片	
025SX008IIIc−059	52	弥生	壺	石英 角閃石 長石	茶褐色	暗茶黒色	ハケ目 ミガキ	ナデ ミガキ ヨコナデ					口縁部1／4	ハケ目（3・4本／cm）
025SX008IIIc−060	52	弥生	壺	石英 角閃石 長石	褐灰色～黄橙色	黒褐色	ナデ 指オサエ ミガキ ヨコナデ	ハケ目 ミガキ ヨコナデ	(11.1)				口縁部1／2	ハケ目（6本／cm）
025SX008IIIc−061	52	弥生	脚付壺	角閃石 長石	淡茶黒色	茶褐色～黒色	指オサエ ミガキ ヨコナデ	指オサエ ハケ目後 ナデ後あとミガキ	8.9	15.9	11.9	5.2	口縁部1／4 欠損	ハケ目（4本／cm）
025SX008IIIc−062	52	弥生	壺	石英	暗茶褐色	黒色	指オサエ ミガキ ミガキ風 ナデ	指オサエ ミガキ			13.0	5.9	口縁部欠損	

第23表　遺物観察表⑯

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
025**SX**008**III**c−063	52	弥生	壺	石英 角閃石 長石	淡黄褐色	暗茶褐色	指オサエ ミガキ	ナデ 指オサエ ミガキ				(9.8)	胴下部～ 底部１／２	
025**SX**009**IV**−001	53	弥生	甕	長石	淡茶褐色	茶褐色	ナデ 指オサエ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	ハケ目(11～12本／cm)
025**SX**009**IV**−002	53	弥生	甕	石英 角閃石	淡黄灰色	淡黄褐色	ナデ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	ハケ目(６・７本／cm)
025**SX**009**IV**−003	53	弥生	甕	角閃石 長石	暗茶褐色	黒色	ミガキ ヨコナデ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	ハケ目(７～８本／cm)
025**SX**009**IV**−004	53	弥生	甕	石英 角閃石 長石 橙色粒子	暗茶褐色	暗茶黒色	指オサエ ミガキ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	ハケ目(５本／cm)
025**SX**009**IV**−005	53	弥生	甕	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡黄褐色	黒色	ハケ目 ナデ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	ハケ目(内面６本　外面５本／cm) 外面スス
025**SX**009**IV**−006	53	弥生	甕	長石	暗茶褐色	暗茶黒色	ナデ 指オサエ ミガキ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	外面炭化物
025**SX**009**IV**−007	53	弥生	鉢	角閃石 長石	茶褐色	茶褐色	ミガキ	ハケ目後 ミガキ					口縁部～胴部片	ハケ目(９本／cm)
025**SX**009**IV**−008	53	弥生	甕	角閃石 長石	黒色	橙茶色	指オサエ ミガキ	指オサエ ハケ目後 ナデ後あとミガキ				6.3	底部のみ	ハケ目(７本／cm) 内面スス
025**SX**009**IV**−009	53	弥生	甕	角閃石 長石	淡茶褐色	茶褐色～ 黒色	ナデ後ミガキ	ハケ目 ナデ				7.3	底部のみ	ハケ目(５本／cm) 内面一部剥離
025**SX**009**IV**−010	53	弥生	蓋	角閃石 砂粒	赤褐色～ 暗赤褐色	赤褐色～ 淡赤褐色	指オサエ ミガキ後 ヨコナデ	指オサエ ナデ後工具ナデ後あとミガキ	(6.6)	9.7		(24.4)	全体１／４	※口径はツマミ径・底径は口径
025**SX**009**IV**−011	53	弥生	無頸壺	石英 角閃石	淡黒色	淡黒色	ナデ 指オサエ	ナデ 指オサエ ヨコナデ	(6.4)	9.7	(11.3)	(6.3)	全体１／２	
025**SX**009**IV**−012	53	弥生	壺	石英 長石 金雲母	橙茶褐色	橙茶褐色	ミガキ	ハケ目後 ミガキ					頸部片	ハケ目(６本／cm)
025**SX**009**IV**−013	53	土錘												別表
025**SX**009**IVc**−001	54	弥生	甕	石英 角閃石 長石	暗茶褐色	橙茶褐色	ナデ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	ハケ目(５～６本／cm)
025**SX**009**IVc**−002	54	弥生	甕	石英 角閃石 長石	茶褐色	茶褐色	ハケ目 ナデ ミガキ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	ハケ目(４～５本／cm)
025**SX**009**IVc**−003	54	弥生	甕	角閃石 長石	灰茶褐色	灰茶褐色	ミガキ	ナデ					口縁部片	瀬戸内系
025**SX**009**IVc**−004	54	弥生	壺	角閃石 長石	淡黄褐色	淡黄褐色	指オサエ ナデ後ミガキ	指オサエ ヨコナデ ナデ後ミガキ				5.2	底部１／２	外面黒斑
025**SZ**000−001	112	弥生	壺	角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	茶褐色	ナデ	ヨコナデ					口縁部片	
025**SZ**000−002	112	弥生	甕	角閃石 長石 橙色粒子	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ 指オサエ	ハケ目 ナデ					口縁部片	ハケ目(３本／cm)
025**SZ**000−003	112	弥生	甕	石英 角閃石 長石	淡赤褐色	淡赤褐色	ナデ 指オサエ	ナデ ヨコナデ					口縁部片	
025**SZ**000−004	112	弥生	甕	角閃石 長石	茶褐色	茶褐色	ナデ後ミガキ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	ハケ目(７本／cm)
025**SZ**000−005	112	弥生	甕	石英 角閃石 長石 白色粒子	淡赤褐色 ～黒褐色	淡褐灰色	ナデ ヨコナデ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	ハケ目(10本／cm)
025**SZ**000−006	112	弥生	甕	長石	暗茶褐色	暗茶黒色	ナデ ハケ目後 ミガキ	ヨコナデ ナデ後ハケ目					口縁部～胴部片	下城式 ハケ目(内面３本　外面10～11本／cm)

第24表　土錘観察表

遺物番号	挿図番号	器種	胎土	法量（cm）			備考
		種類		長さ	幅	重さ（g）	
025**SX**006−055	14	土錘	角閃石 長石	3.8	3.4	41.9	完存
025**SX**008**III**−144	29	土錘	長石	(2.6)	1.0	(1.8)	
025**SX**009**IV**−013	53	土錘	長石	(3.9)	1.4	(4.5)	

第25表　縄文遺物観察表①

遺物番号	挿図番号	器種 種類	胎土	色調 内面	色調 外面	器面調整 内面	器面調整 外面	法量（cm） 口径	法量（cm） 器高	法量（cm） 最大胴部	法量（cm） 底径	遺存率	備考
025**SZYO**-001	55	縄文	角閃石 長石	黄褐色	暗黄褐色	巻貝条痕 後丁寧な ナデ	ナデ					口縁部片 （口唇部欠損）	宿毛式
025**SZYO**-002	55	縄文	長石	淡黒色	淡黄褐色	不明瞭	不明瞭					胴部片	福田**K**Ⅱ式
025**SZYO**-003	55	縄文	角閃石 長石	暗茶褐色	淡茶褐色	不明瞭	縄文後ミガキ					胴部片	福田**K**Ⅱ式
025**SZYO**-004	55	縄文	角閃石 白色粒子	黒褐色	灰褐色	ナデ	不明瞭					口縁部片	
025**SZYO**-005	55	縄文	角閃石 長石 白色粒子	褐色	褐色	ナデ	ナデ					口縁部片	
025**SZYO**-006	55	縄文	石英 角閃石 白色粒子	灰白色	黄橙色	巻貝条痕 後ナデ	巻貝条痕 後ナデ					口縁部片	
025**SZYO**-007	55	縄文	石英 角閃石 白色粒子	灰黄褐色	灰白色	不明瞭	不明瞭					口縁部片	
025**SZYO**-008	55	縄文	角閃石 白色粒子	褐色	褐色	巻貝条痕 後丁寧な ナデ	巻貝条痕 後丁寧な ナデ					口縁部片	
025**SZYO**-009	55	縄文	角閃石 金雲母	黄橙色	黄橙色	巻貝条痕 後ミガキ	巻貝条痕 後ミガキ					口縁部片	
025**SZYO**-010	55	縄文	石英 角閃石 長石 白色粒子	黄橙色	黄橙色	ナデ	ナデ					把手部	
025**SZYO**-011	56	縄文	角閃石 長石	暗黄灰褐 色	橙褐色	不明瞭	丁寧なナ デ					口縁部片	鐘崎式
025**SZYO**-012	56	縄文	角閃石 長石	淡黄褐色	淡黄褐色	条痕後ナ デ	ナデ					口縁部片	鐘崎式
025**SZYO**-013	56	縄文	石英 角閃石 白色粒子	黄橙色	黄橙色	不明瞭	不明瞭					口縁部片	鐘崎式
025**SZYO**-014	56	縄文	石英 角閃石 長石	淡茶褐色	茶褐色	不明瞭	不明瞭					口縁部片	鐘崎式
025**SZYO**-015	56	縄文	石英 角閃石 長石 白色粒子	暗灰褐色	暗灰褐色	不明瞭	不明瞭					口縁部片	鐘崎式
025**SZYO**-016	56	縄文	長石	灰褐色	暗灰褐色	不明瞭	不明瞭					胴部片	鐘崎式
025**SZYO**-017	56	縄文	石英 角閃石 長石	暗茶褐色	暗灰褐色	丁寧なナ デ	不明瞭					胴部片	鐘崎式
025**SZYO**-018	56	縄文	角閃石 長石	淡黄灰褐 色	淡黄灰褐 色	巻貝条痕 後ナデ	不明瞭					胴部片	鐘崎式 鉄分付着
025**SZYO**-019	56	縄文	石英 角閃石 長石	淡黄褐色	淡黄灰褐 色	丁寧なナ デ	不明瞭					胴部片	鐘崎式
025**SZYO**-020	56	縄文	角閃石 長石	茶褐色	茶褐色	ミガキ	ナデ					胴部片	鐘崎式
025**SZYO**-021	56	縄文	角閃石 長石 白色粒子	淡橙褐色	淡茶黒色	不明瞭	不明瞭					胴部片	鐘崎式
025**SZYO**-022	56	縄文	石英 角閃石 長石	黒色	淡茶褐色	不明瞭	不明瞭					胴部片	鐘崎式 内面剥離
025**SZYO**-023	56	縄文	角閃石 長石 白色粒子	黄橙色	黄橙色	不明瞭	不明瞭					胴部片	鐘崎式
025**SZYO**-024	57	縄文	角閃石 長石	黄灰褐色	黄褐色	不明瞭	不明瞭					口縁部片	緑帯文
025**SZYO**-025	57	縄文	角閃石 白色粒子	淡黄橙色	淡黄橙色	巻貝条痕 後ナデ	巻貝条痕 後ナデ					口縁部片	緑帯文
025**SZYO**-026	57	縄文	角閃石 長石 白色粒子	黄橙色	黄橙色	巻貝条痕 後ナデ	巻貝条痕 後ナデ					口縁部片	緑帯文
025**SZYO**-027	57	縄文	角閃石 長石	淡黄褐色	淡橙褐色	ミガキ	不明瞭					口縁部片	小池原上層式
025**SZYO**-028	57	縄文	石英 角閃石 長石	暗灰褐色	黄灰褐色	条痕後ナ デ	不明瞭					口縁部片	小池原上層式
025**SZYO**-029	57	縄文	角閃石 長石	黄褐色	黄褐色	条痕後ナ デ	縄文後ナ デ					胴部片	小池原上層式
025**SZYO**-030	57	縄文	石英 角閃石 長石	暗黄灰褐 色	黄灰褐色	不明瞭	不明瞭					胴部片	小池原上層式
025**SZYO**-031	57	縄文	角閃石 長石	黄褐色	黄褐色	巻貝条痕 後ミガキ	不明瞭					胴部片	内面擦痕
025**SZYO**-032	57	縄文	角閃石 長石	暗茶褐色	暗茶褐色	不明瞭	不明瞭					胴部片	

第26表　縄文遺物観察表②

遺物番号	挿図番号	器種 種類	胎土	色調 内面	色調 外面	器面調整 内面	器面調整 外面	法量（cm） 口径	法量（cm） 器高	法量（cm） 最大胴部	法量（cm） 底径	遺存率	備考
025**SZYO**-033	57	縄文	角閃石 長石 白色粒子	黄橙色	黄橙色	不明瞭	巻貝条痕 後ナデ					胴部片	
025**SZYO**-034	57	縄文	角閃石 長石	淡黄灰褐色	淡黄灰褐色	ミガキ	不明瞭					口縁部片	小池原上層式
025**SZYO**-035	57	縄文	角閃石 長石 白色粒子 金雲母	黄橙色	黄橙色	不明瞭	不明瞭					口縁部片	
025**SZYO**-036	57	縄文	角閃石 長石 白色粒子 赤色粒子	黄橙色	黄橙色	巻貝条痕 後ナデ	不明瞭					口縁部片	
025**SZYO**-037	58	縄文	石英 角閃石 長石	暗黄褐色	暗黄褐色	巻貝条痕 後丁寧な ナデ	丁寧なナデ 縄文後ナデ					口縁部片	
025**SZYO**-038	58	縄文	角閃石 長石 赤色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ	縄文後ナデ 条痕後ナデ					口縁部片	
025**SZYO**-039	58	縄文	角閃石 長石 白色粒子	褐灰色	橙色～黒褐色	巻貝条痕 後丁寧な ナデ	巻貝条痕 後ナデ					口縁部片	
025**SZYO**-040	58	縄文	角閃石 長石 白色粒子	灰白色	灰白色	不明瞭	不明瞭					口縁部片	
025**SZYO**-041	58	縄文	角閃石 長石 白色粒子	灰黄褐色	灰黄褐色	丁寧なナデ	不明瞭					口縁部片	
025**SZYO**-042	58	縄文	角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	条痕後丁寧なナデ	縄文後丁寧なナデ					口縁部片	赤色顔料付着
025**SZYO**-043	58	縄文	角閃石 長石 白色粒子	黄橙色	黄橙色	丁寧なナデ	ナデ 縄文					口縁部片	赤色顔料付着
025**SZYO**-044	58	縄文	角閃石 長石 金雲母	淡茶褐色	淡茶褐色	丁寧なナデ	縄文後丁寧なナデ					胴部片	赤色顔料付着
025**SZYO**-045	58	縄文	石英 角閃石 長石	淡灰黄褐色	淡茶褐色	不明瞭	縄文後丁寧なナデ					口縁部片	
025**SZYO**-046	58	縄文	角閃石 白色粒子	黄橙色	黄橙色	条痕後ナデ	縄文後ナデ					口縁部片	
025**SZYO**-047	58	縄文	角閃石 長石	茶褐色	茶褐色	条痕後粗いミガキ	粗いミガキ 縄文					口縁部片	
025**SZYO**-048	58	縄文	石英 角閃石 長石	暗黄褐色	暗黄褐色	不明瞭	不明瞭					口縁部片	
025**SZYO**-049	58	縄文	石英 角閃石 長石	淡灰褐色	淡黄褐色	不明瞭	不明瞭					口縁部片	
025**SZYO**-050	58	縄文	石英 白色粒子	橙色	橙色	不明瞭	不明瞭					口縁部片	
025**SZYO**-051	58	縄文	角閃石 白色粒子	黄灰色	黄灰色	条痕後ナデ	不明瞭					口縁部片	
025**SZYO**-052	58	縄文	角閃石 白色粒子	灰黄褐色	灰黄褐色	巻貝条痕 後ナデ	不明瞭					口縁部片	
025**SZYO**-053	58	縄文	石英 角閃石 長石	黄褐色	黄褐色	不明瞭	不明瞭					口縁部片	
025**SZYO**-054	59	縄文	角閃石 長石 白色粒子	黄橙色	黄橙色	不明瞭	不明瞭					口縁部片	
025**SZYO**-055	59	縄文	角閃石 白色粒子	黄橙色	黄橙色	不明瞭	縄文後ナデ					口縁部片	
025**SZYO**-056	59	縄文	石英 角閃石	黄橙色	黄橙色	ナデ	縄文後ナデ					口縁部片	
025**SZYO**-057	59	縄文	角閃石 白色粒子	灰黄色	暗灰黄色	条痕後粗いミガキ	縄文後ナデ					口縁部片	
025**SZYO**-058	59	縄文	角閃石 長石 白色粒子	黄橙色	灰褐色	丁寧なナデ	縄文後ナデ					口縁部片	
025**SZYO**-059	59	縄文	角閃石 長石 白色粒子	褐色	褐色	不明瞭	縄文後ナデ					口縁部片	
025**SZYO**-060	59	縄文	石英 角閃石 白色粒子	灰黄色	灰黄色	丁寧なナデ	縄文					口縁部片	
025**SZYO**-061	59	縄文	角閃石 白色粒子	黄橙色	黄橙色	ナデ	縄文					口縁部片	
025**SZYO**-062	59	縄文	角閃石 長石 白色粒子	黄橙色	黄橙色	巻貝条痕 後ナデ	縄文後ナデ					口縁部片	

第27表　縄文遺物観察表③

遺物番号	挿図番号	器種	胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
025**SZYO**-063	59	縄文	角閃石 白色粒子	黄褐色	黄褐色	条痕後ナデ	縄文					口縁部片	
025**SZYO**-064	59	縄文	角閃石 白色粒子	灰黄色	褐灰色	丁寧なナデ	縄文後ナデ					口縁部片	
025**SZYO**-065	59	縄文	石英 角閃石 白色粒子	黄橙色	黄橙色	不明瞭	不明瞭					口縁部片	
025**SZYO**-066	60	縄文	角閃石 長石	黒褐色	淡黄褐色	不明瞭	縄文後ナデ					胴部片	
025**SZYO**-067	60	縄文	石英 角閃石 長石	茶褐色	黒褐色	巻貝条痕後丁寧なナデ	縄文後ナデ					胴部片	
025**SZYO**-068	60	縄文	石英 角閃石 長石	黒褐色	淡黒褐色	巻貝条痕後丁寧なナデ	縄文後ナデ					胴部片	
025**SZYO**-069	60	縄文	角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	巻貝条痕後ナデ	縄文後ナデ					胴部片	土器加工品
025**SZYO**-070	60	縄文	角閃石 長石	淡黒褐色	暗茶褐色	不明瞭	不明瞭					胴部片	
025**SZYO**-071	60	縄文	石英 角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	巻貝条痕後丁寧なナデ	不明瞭					胴部片	
025**SZYO**-072	60	縄文	角閃石 長石 金雲母	茶褐色	黒褐色	不明瞭	ミガキ 縄文					頸部～胴部片	
025**SZYO**-073	60	縄文	角閃石 長石	暗茶褐色	暗茶褐色	不明瞭	ミガキ 縄文					頸部片	内面一部剥落
025**SZYO**-074	60	縄文	角閃石 長石	暗茶褐色	淡茶褐色	ナデ	縄文後ナデ					頸部片	
025**SZYO**-075	60	縄文	角閃石 長石 白色粒子	灰黄褐色	褐灰色	巻貝条痕後ミガキ	ナデ 縄文					頸部片	内面工具による擦痕
025**SZYO**-076	60	縄文	角閃石 長石	淡黄褐色	淡黄褐色	ミガキ	不明瞭					胴部片	
025**SZYO**-077	60	縄文	角閃石 白色粒子	褐灰色	黒褐色	丁寧なナデ	不明瞭					頸部片	
025**SZYO**-078	60	縄文	角閃石 白色粒子	褐色	黄橙色	不明瞭	縄文 条痕後ミガキ					胴部片	
025**SZYO**-079	60	縄文	角閃石 長石 白色粒子	黒褐色	灰黄褐色	不明瞭	縄文後ナデ					胴部片	
025**SZYO**-080	60	縄文	石英 角閃石 長石 白色粒子	淡黄色	灰黄色	不明瞭	不明瞭					胴部片	
025**SZYO**-081	60	縄文	角閃石 長石 白色粒子 雲母	黄橙色	灰黄色	巻貝条痕後丁寧なナデ	不明瞭					胴部片	
025**SZYO**-082	60	縄文	角閃石 長石	淡茶褐色	淡灰黄褐色	ナデ	ナデ					胴部片	
025**SZYO**-083	60	縄文	角閃石 長石 金雲母	淡茶褐色	淡茶褐色	不明瞭	巻貝条痕後ナデ					胴部片	土器片加工品
025**SZYO**-084	60	縄文	角閃石 長石	暗茶褐色	暗茶褐色	巻貝条痕後ナデ	不明瞭					胴部片	
025**SZYO**-085	60	縄文	角閃石 長石	淡茶褐色	淡黒褐色	ナデ	巻貝条痕後ナデ					胴部片	
025**SZYO**-086	60	縄文	石英 角閃石 長石	淡茶褐色	暗茶褐色	ナデ	ナデ					胴部片	
025**SZYO**-087	61	縄文	石英 角閃石 長石	淡黒褐色	黒褐色	縄文 丁寧なナデ	縄文 丁寧なナデ					口縁部片	
025**SZYO**-088	61	縄文	角閃石 長石 白色粒子 赤色粒子	灰黄褐色	灰黄褐色	縄文 丁寧なナデ	ナデ					口縁部片	
025**SZYO**-089	61	縄文	石英 白色粒子	黒褐色	黄灰色	不明瞭	縄文					口縁部片	
025**SZYO**-090	61	縄文	石英 角閃石 長石	灰黄色	黄色	丁寧なナデ 縄文	丁寧なナデ 縄文					口縁部片	
025**SZYO**-091	61	縄文	石英 角閃石 白色粒子	黄橙色	黄色	不明瞭	不明瞭					口縁部片	
025**SZYO**-092	61	縄文	角閃石 長石 白色粒子	褐色	褐色	ミガキ 縄文	丁寧なナデ 縄文					口縁部片	
025**SZYO**-093	61	縄文	角閃石 長石 白色粒子	黒褐色	黒褐色	不明瞭	ミガキ 縄文					口縁部片	
025**SZYO**-094	61	縄文	角閃石 長石 白色粒子	黄灰色	黄灰色	不明瞭	不明瞭					口縁部片	

第28表　縄文遺物観察表④

遺物番号	挿図番号	器種 種類	胎土	色調 内面	色調 外面	器面調整 内面	器面調整 外面	法量（cm） 口径	法量（cm） 器高	法量（cm） 最大胴部	法量（cm） 底径	遺存率	備考
025**SZYO**-095	61	縄文	石英 角閃石 長石 砂粒	黄色	黄色	丁寧なナデ	丁寧なナデ 縄文					口縁部片	
025**SZYO**-096	61	縄文	角閃石 長石 白色粒子	暗灰褐色	暗灰黄色	巻貝条痕後ナデ	縄文 巻貝条痕後ナデ					口縁部片	
025**SZYO**-097	61	縄文	石英 角閃石 長石 白色粒子	褐色	褐色	ナデ	巻貝条痕後ナデ縄文					口縁部片	
025**SZYO**-098	61	縄文	石英 角閃石 長石 白色粒子 金雲母	黄褐色	黄褐色	ナデ	ナデ 縄文					口縁部片	
025**SZYO**-099	61	縄文	長石 白色粒子	赤褐色	赤褐色	丁寧なナデ	ナデ 縄文					口縁部片	
025**SZYO**-100	61	縄文	石英 長石 赤色粒子	褐色	灰褐色	不明瞭	不明瞭					口縁部片	
025**SZYO**-101	61	縄文	角閃石 長石 白色粒子	褐色	褐色	丁寧なナデ	縄文後丁寧なナデ					口縁部片	
025**SZYO**-102	61	縄文	角閃石 長石 金雲母	淡茶褐色	黒褐色	巻貝条痕後ナデ	巻貝条痕後ナデ					口縁部～胴上部片	
025**SZYO**-103	61	縄文	石英 角閃石 白色粒子	黄色	暗黄灰色	巻貝条痕後ナデ	縄文 巻貝条痕後ナデ					口縁部片	
025**SZYO**-104	61	縄文	石英 角閃石 長石	灰褐色	淡灰茶褐色	条痕後ナデ	ナデ 縄文					口縁部片	
025**SZYO**-105	61	縄文	石英 角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ 条痕後ナデ	ナデ 縄文 条痕後ナデ					口縁部片	
025**SZYO**-106	62	縄文	角閃石 長石	暗灰褐色	淡黄褐色	ミガキ	縄文後ミガキ					頸部～胴部片	
025**SZYO**-107	62	縄文	角閃石 長石	茶褐色	暗茶褐色	条痕後ミガキ	ミガキ 縄文 条痕					頸部～胴部片	
025**SZYO**-108	62	縄文	石英 白色粒子 雲母	灰黄褐色	褐灰色	ミガキ	縄文後ミガキ					胴部片	
025**SZYO**-109	62	縄文	角閃石 長石	灰色	褐色	条痕後ミガキ	縄文後ミガキ					胴部片	
025**SZYO**-110	62	縄文	角閃石 長石	淡黄褐色	暗灰褐色	巻貝条痕後丁寧なナデ	縄文後ナデ					胴部片	
025**SZYO**-111	62	縄文	角閃石 長石	淡黄褐色	暗灰褐色	条痕後ミガキ	不明瞭					胴部片	
025**SZYO**-112	62	縄文	石英 長石	暗茶褐色	暗茶褐色	丁寧なナデ	縄文後ミガキ					胴部片	
025**SZYO**-113	62	縄文	角閃石 長石	淡黄褐色	淡黄褐色	丁寧なナデ	縄文後ナデ					胴部片	
025**SZYO**-114	62	縄文	角閃石 長石	暗茶褐色	淡黒褐色	巻貝条痕後粗いミガキ	縄文後ミガキ					胴部片	
025**SZYO**-115	62	縄文	長石 金雲母	茶褐色	黒褐色	ナデ	縄文後丁寧なナデ					胴部片	
025**SZYO**-116	62	縄文	角閃石 長石	暗灰褐色	暗黄褐色	不明瞭	不明瞭					胴部片	
025**SZYO**-117	62	縄文	角閃石	淡茶褐色	茶褐色	丁寧なナデ	不明瞭					頸部～胴部片	
025**SZYO**-118	62	縄文	石英 赤色粒子 砂粒	黄褐色	暗灰黄色	ミガキ	ナデ 不明瞭					頸部～胴部片	
025**SZYO**-119	62	縄文	石英 長石	黒色	褐色	丁寧なナデ	縄文 丁寧なナデ					胴部片	
025**SZYO**-120	62	縄文	石英 角閃石 長石	淡茶褐色	暗黄褐色	不明瞭	縄文後ナデ					胴部片	
025**SZYO**-121	62	縄文	長石	暗茶褐色	暗茶褐色	不明瞭	縄文					胴部片	外面一部剥落
025**SZYO**-122	62	縄文	角閃石 長石	淡茶褐色	淡灰褐色	不明瞭	縄文後ナデ					胴部片	
025**SZYO**-123	62	縄文	角閃石 長石	灰褐色	灰褐色	条痕後ナデ	縄文後粗いナデ					胴部片	

第29表　縄文遺物観察表⑤

遺物番号	挿図番号	器種 種類	胎土	色調 内面	色調 外面	器面調整 内面	器面調整 外面	法量（cm） 口径	法量（cm） 器高	法量（cm） 最大胴部	法量（cm） 底径	遺存率	備考
025**SZYO**-124	62	縄文	角閃石 赤色粒子 砂粒 金雲母	淡茶褐色	淡茶褐色	不明瞭	ナデ					胴部片	
025**SZYO**-125	62	縄文	角閃石 長石	黒褐色	淡黒褐色	ナデ	縄文後丁寧なナデ					胴部片	
025**SZYO**-126	62	縄文	角閃石 白色粒子	褐灰色	黄橙色	ミガキ						胴部片	
025**SZYO**-127	62	縄文	角閃石 長石 赤色粒子 雲母	黒色	橙色	丁寧なナデ	ミガキ 縄文					胴部片	赤色顔料付着
025**SZYO**-128	62	縄文	角閃石 長石	黒褐色	暗茶褐色	ミガキ	縄文後ナデ					胴部片	赤色顔料付着
025**SZYO**-129	62	縄文	角閃石 長石 砂粒	暗茶灰褐色	暗茶灰褐色	ミガキ	ナデ					胴部片	赤色顔料付着
025**SZYO**-130	62	縄文	石英 角閃石 長石	暗茶灰褐色	黒褐色	ミガキ	ミガキ					胴部片	赤色顔料付着
025**SZYO**-131	62	縄文	角閃石 長石 砂粒	暗茶灰褐色	暗茶灰褐色	ミガキ	不明瞭					胴部片	
025**SZYO**-132	62	縄文	角閃石 長石 白色粒子	灰黄色	黄灰色	巻貝条痕後丁寧なナデ	丁寧なナデ					胴部片	
025**SZYO**-133	62	縄文	角閃石 長石	灰褐色	灰褐色	丁寧なナデ	丁寧なナデ					胴部片	
025**SZYO**-134	62	縄文	石英 角閃石 長石	灰褐色	灰褐色	ナデ	丁寧なナデ					胴部片	
025**SZYO**-135	62	縄文	角閃石 長石 赤色粒子	黒褐色	灰黄褐色	不明瞭	不明瞭					胴部片	
025**SZYO**-136	62	縄文	角閃石 長石 白色粒子	暗灰黄色	灰黄色	不明瞭	不明瞭					胴部片	
025**SZYO**-137	62	縄文	角閃石 長石	黄灰色	暗灰黄色	不明瞭	巻貝条痕後ナデ					胴部片	内面巻貝などの擦痕
025**SZYO**-138	62	縄文	石英 角閃石 長石	黄灰褐色	黄灰褐色	不明瞭	不明瞭					胴部下半片	
025**SZYO**-139	63	縄文	角閃石 長石	暗灰褐色	暗黄褐色	不明瞭	巻貝条痕後ミガキ	(30.0)		(31.4)		口縁部～胴部1／5	
025**SZYO**-140	63	縄文	角閃石 長石	暗灰褐色	暗黄褐色	丁寧なナデ	丁寧なナデ					口縁部～胴部片	
025**SZYO**-141	64	縄文	角閃石 長石 白色粒子	黄灰色	黄灰色	不明瞭	不明瞭					口縁部片	
025**SZYO**-142	64	縄文	石英 角閃石 長石 白色粒子	黄褐色	黄灰色	巻貝条痕後ケズリ状ナデ	縄文後ミガキ					口縁部片	
025**SZYO**-143	64	縄文	石英 長石	茶褐色	暗茶褐色	縄文後ミガキ	縄文後ミガキ					口縁部片	
025**SZYO**-144	64	縄文	石英 長石	暗茶褐色	暗茶褐色	ミガキ	縄文後ミガキ					口縁部片	
025**SZYO**-145	64	縄文	角閃石 白色粒子	暗褐色	暗褐色	ナデ	縄文後丁寧なナデ					口縁部片	
025**SZYO**-146	64	縄文	角閃石 長石	黄褐色	暗茶褐色	不明瞭	縄文後ナデ					口縁部片	
025**SZYO**-147	64	縄文	石英 角閃石 長石 白色粒子 赤色粒子	灰色	灰色	不明瞭	不明瞭					口縁部片	
025**SZYO**-148	64	縄文	角閃石 長石 白色粒子	黄褐色	黄橙色	巻貝条痕後ナデ	縄文後ナデ					口縁部片	
025**SZYO**-149	64	縄文	角閃石 長石	淡茶褐色	暗茶褐色	巻貝条痕後粗いミガキ	巻貝条痕後縄文後ミガキ					口縁部片	
025**SZYO**-150	64	縄文	石英 角閃石 砂粒	灰白色	灰黄色	条痕後ナデ	縄文後ナデ					口縁部片	
025**SZYO**-151	64	縄文	角閃石 長石	茶褐色	茶褐色	ナデ	縄文後ナデ					口縁部片	内面工具による擦痕
025**SZYO**-152	65	縄文	角閃石 長石	淡茶褐色	暗茶褐色	縄文 条痕後ミガキ	丁寧なナデ					口縁部片	
025**SZYO**-153	65	縄文	角閃石 長石	淡茶褐色	茶褐色	縄文 条痕後ミガキ	条痕後丁寧なナデ					口縁部片	
025**SZYO**-154	65	縄文	石英 砂粒	暗灰黄色	黄色	不明瞭	ナデ 縄文					脚部片	

第30表　縄文遺物観察表⑥

遺物番号	挿図番号	器種	胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
025**SZYO**−155	65	縄文	石英 長石 金雲母	灰茶褐色	灰茶褐色	丁寧なナデ	縄文後丁寧なナデ					肩部片	
025**SZYO**−156	66	縄文	石英 角閃石 長石 赤色粒子	黄橙色	黄橙色	不明瞭	不明瞭					口縁部片	
025**SZYO**−157	66	縄文	角閃石 長石 白色粒子	灰黄褐色	黄橙色	粗いミガキ	縄文後ナデ					口縁部片	
025**SZYO**−158	66	縄文	角閃石 長石 白色粒子	黄褐色	黄褐色	ケズリ状ナデ	縄文後ナデ					口縁部片	
025**SZYO**−159	66	縄文	角閃石 雲母	黄橙色	黄橙色	条痕後ナデ	縄文後ナデ					口縁部片	口縁部丁寧なナデ
025**SZYO**−160	66	縄文	角閃石 白色粒子	暗灰色	黄橙色	ナデ	ナデ 縄文					口縁部片	
025**SZYO**−161	66	縄文	角閃石 白色粒子 砂粒	褐灰色	黄褐色	不明瞭	不明瞭					口縁部片 （口唇部欠損）	
025**SZYO**−162	66	縄文	石英 角閃石 長石 白色粒子	黄橙色	黄橙色	ミガキ	ミガキ					口縁部片	
025**SZYO**−163	66	縄文	角閃石 長石 白色粒子 砂粒	黄橙色	黄橙色	巻貝条痕	巻貝条痕後丁寧なナデ					口縁部片	
025**SZYO**−164	66	縄文	角閃石 長石 白色粒子	黒色	黄橙色	ケズリ状ナデ	条痕後ナデ					口縁部片	
025**SZYO**−165	67	縄文	石英 角閃石 長石 白色粒子 砂粒	淡黄色	黄褐色	不明瞭	縄文後ナデ	(25.6)		(26.6)		口縁部～胴部1／5	
025**SZYO**−166	67	縄文	石英 角閃石 長石	暗黄褐色	暗黄褐色	不明瞭	縄文 巻貝条痕後ナデ					口縁部～胴部片	
025**SZYO**−167	67	縄文	石英 角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	丁寧なナデ	縄文後ナデ					口縁部片	
025**SZYO**−168	67	縄文	石英 角閃石 長石	淡黒褐色	淡茶褐色	条痕後ナデ	縄文後ナデ					口縁部片	
025**SZYO**−169	67	縄文	石英 角閃石 長石	淡茶褐色	暗茶褐色	縄文 ケズリ状条痕	縄文 ケズリ状条痕後ナデ					口縁部片	
025**SZYO**−170	67	縄文	角閃石 長石 白色粒子	黄灰色	黄灰色	条痕	縄文 ナデ					口縁部片	
025**SZYO**−171	67	縄文	角閃石 長石 白色粒子	黄褐色	黄橙色	巻貝条痕後ナデ	縄文後ナデ					口縁部片	
025**SZYO**−172	67	縄文	石英 角閃石 砂粒	灰黄色	淡黄橙色	ナデ	ナデ 縄文	(37.4)		(34.6)		口縁部～ 胴部1／4	
025**SZYO**−173	67	縄文	角閃石 長石 白色粒子	淡黄色	灰黄色	不明瞭	ナデ 縄文					頸部～胴部片	
025**SZYO**−174	67	縄文	石英 角閃石 長石	黒褐色	黄色	不明瞭	ナデ 縄文			(26.9)		頸部～ 胴部1／5	
025**SZYO**−175	67	縄文	石英 角閃石 長石	灰黄褐色	灰黄色	条痕後ナデ	縄文 条痕			(34.2)		頸部～ 胴部1／5	
025**SZYO**−176	68	縄文	石英 角閃石 長石	黒褐色	暗橙褐色	巻貝条痕後ミガキ	縄文後ナデ	(22.0)		(20.4)		口縁部～ 胴部1／6	内面工具による擦痕
025**SZYO**−177	68	縄文	角閃石 長石 金雲母	暗茶褐色	明茶褐色	条痕後丁寧なナデ	縄文 条痕後丁寧なナデ			(20.2)		口縁部～ 胴部1／4 （口唇部欠損）	
025**SZYO**−178	68	縄文	角閃石 長石	茶褐色	茶褐色	巻貝条痕後丁寧なナデ	巻貝条痕後ナデ					口縁部片	
025**SZYO**−179	68	縄文	角閃石 長石	淡茶褐色	暗灰褐色	巻貝条痕後ナデ	縄文後ナデ					口縁部片	
025**SZYO**−180	68	縄文	角閃石 長石 白色粒子 赤色粒子	褐灰色	橙色	丁寧なナデ	巻貝条痕後縄文後ナデ					口縁部～底部片	
025**SZYO**−181	69	縄文	石英 角閃石 長石	暗茶褐色	淡茶褐色	巻貝条痕後ナデ	巻貝条痕後ナデ					口縁部～胴部片	
025**SZYO**−182	69	縄文	角閃石 長石 白色粒子	黄橙色	灰黄色	巻貝条痕後ミガキ	不明瞭					口縁部～頸部片	

第31表　縄文遺物観察表⑦

遺物番号	挿図番号	器種 種類	胎土	色調 内面	色調 外面	器面調整 内面	器面調整 外面	法量（cm） 口径	法量（cm） 器高	法量（cm） 最大胴部	法量（cm） 底径	遺存率	備考
025**SZYO**-183	69	縄文	角閃石 白色粒子	黄橙色	黄橙色	条痕後ナデ	不明瞭					口縁部片	
025**SZYO**-184	69	縄文	角閃石 長石 白色粒子	褐灰色	灰黄褐色	ナデ 一部ケズリ状	巻貝条痕後粗いナデ					頸部～胴部片	
025**SZYO**-185	69	縄文	石英 角閃石 長石 白色粒子	灰黄褐色	灰黄褐色	不明瞭	巻貝条痕後ナデ					口縁部～胴部片	
025**SZYO**-186	69	縄文	角閃石 長石 白色粒子	黄橙色	暗灰黄色	巻貝条痕後ナデ	丁寧なナデ	(29.3)				口縁部～胴部 1／7	
025**SZYO**-187	70	縄文	角閃石 長石 白色粒子	黄灰色	淡黄色	条痕後ナデ	縄文 巻貝条痕後ナデ					口縁部片	
025**SZYO**-188	70	縄文	石英 角閃石 長石	淡黄黒色	淡黄黒色	不明瞭	縄文後丁寧なナデ					頸部～胴部片	
025**SZYO**-189	70	縄文	角閃石 白色粒子 赤色粒子 砂粒	灰黄色	灰黄色	不明瞭	不明瞭					口縁部片	西平式
025**SZYO**-190	70	縄文	石英 角閃石 長石 白色粒子	橙色	灰褐色	巻貝条痕後丁寧なナデ	ナデ 巻貝条痕後丁寧なナデ					頸部～胴部片	西平式
025**SZYO**-191	70	縄文	石英 角閃石 長石 白色粒子	黄橙色	黒褐色	不明瞭	不明瞭					頸部～胴部片	西平式
025**SZYO**-192	71	縄文	角閃石 長石 白色粒子	黄灰色	黄灰色	条痕	不明瞭					口縁部片	
025**SZYO**-193	71	縄文	石英 角閃石 長石 白色粒子	褐灰色	灰黄褐色	不明瞭	丁寧なナデ					口縁部片	
025**SZYO**-194	71	縄文	石英 角閃石 白色粒子	黄灰色	灰黄色	不明瞭	不明瞭					口縁部片	
025**SZYO**-195	71	縄文	角閃石	黄橙色	黄橙色	不明瞭	不明瞭					口縁部片	
025**SZYO**-196	71	縄文	角閃石 長石 白色粒子	黄褐色	黄褐色	ミガキ	ミガキ					口縁部片	
025**SZYO**-197	71	縄文	角閃石 長石 白色粒子	黄灰色	灰白色	丁寧なナデ	不明瞭					口縁部片	
025**SZYO**-198	71	縄文	角閃石 長石	暗茶褐色	暗茶褐色	ミガキ	ミガキ					口縁部片	
025**SZYO**-199	71	縄文	角閃石 長石	黄橙色	灰黄色	丁寧なナデ	不明瞭					口縁部片	
025**SZYO**-200	72	縄文	角閃石 長石	黄茶色	黄褐色	ナデ	ナデ				10.4	底部	
025**SZYO**-201	72	縄文	角閃石 長石	淡黄灰色	淡茶褐色	不明瞭	ナデ					底部片	
025**SZYO**-202	72	縄文	角閃石 長石	暗茶褐色	暗茶褐色	ナデ	ナデ				(9.0)	底部	
025**SZYO**-203	72	縄文	石英 角閃石 長石	暗茶褐色	淡茶褐色	不明瞭	ナデ				(11.0)	底部 1／3	
025**SZYO**-204	72	縄文	角閃石 長石	暗茶褐色	茶褐色	ナデ	不明瞭				7.2	底部	
025**SZYO**-205	72	縄文	石英 角閃石 長石	黒褐色	淡茶褐色	丁寧なナデ	不明瞭				(8.8)	底部	
025**SZYO**-206	72	縄文	角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	不明瞭	不明瞭				7.0	底部	
025**SZYO**-207	72	縄文	角閃石 長石	淡茶褐色	明茶褐色	丁寧なナデ	不明瞭				7.6	底部	
025**SZYO**-208	72	縄文	石英 角閃石 長石	淡褐色	淡褐色	ナデ	ナデ				(8.6)	底部 1／4	
025**SZYO**-209	72	縄文	角閃石 長石	暗茶褐色	茶褐色	巻貝条痕後ナデ	巻貝条痕後粗いナデ				6.6	底部	
025**SZYO**-210	72	縄文	石英 角閃石 長石	暗灰褐色	明茶褐色	ナデ	ナデ				(8.2)	底部 1／2	

第32表　石器観察表①

遺物番号	挿図番号	器種	石材	時期	法量（cm）				備考
		種類			長さ	幅	厚さ	重さ（g）	
025**SST**006-001	89	石鏃	姫島産黒曜石	縄文早期	2.00	1.50	0.35	0.50	左脚欠損
025**SST**006-002	89	石鏃	姫島産黒曜石	縄文後・晩期	2.40	2.10	0.40	0.90	右脚欠損
025**SST**006-003	89	石鏃	サヌカイト	縄文後・晩期	2.35	1.45	0.45	0.80	右脚欠損
025**SST**006-004	89	石鏃	姫島産黒曜石	縄文後・晩期	(2.00)	1.20	0.40	0.50	尖端欠損
025**SST**006-005	89	石鏃	サヌカイト	弥生時代	2.75	1.80	0.25	0.80	右脚欠損
025**SST**006-006	89	石鏃	姫島産黒曜石	縄文時代	(1.45)	1.80	0.40	0.70	尖端欠損
025**SST**006-007	89	石鏃	サヌカイト	縄文後・晩期	1.55	1.90	0.30	0.60	
025**SST**006-008	89	磨製石鏃未製品	緑泥片岩	弥生時代	5.10	2.05	0.55	9.20	刃部欠損
025**SST**006-009	89	石核	姫島産黒曜石	縄文～弥生時代	2.15	4.10	2.00	13.20	下半欠損
025**SST**006-010	89	石核	姫島産黒曜石	縄文～弥生時代	3.30	2.15	2.00	13.10	
025**SST**006-011	89	使用痕剥片	ガラス質安山岩	縄文～弥生時代	6.60	10.20	1.40	89.30	左右側縁欠損
025**SST**006-012	90	打製石斧	結晶片岩	縄文後・晩期	(9.10)	6.40	1.75	98.30	基部欠損
025**SST**006-013	90	打製石斧	結晶片岩	縄文後・晩期	(5.15)	(2.85)	0.65	8.60	上半欠損
025**SST**006-014	90	局部磨製石斧	緑泥片岩	弥生時代	3.40	2.10	0.60	6.30	上半欠損
025**SST**006-015	90	石鍬未製品	結晶片岩	縄文～弥生時代	(9.60)	6.10	2.45	167.60	基部欠損
025**SST**006-016	90	石包丁状石製品	緑泥片岩	弥生時代	5.75	(9.95)	1.15	76.30	右側縁欠損
025**SST**006-017	91	石錘	凝灰岩	縄文～弥生時代	9.10	7.55	2.60	191.50	
025**SST**006-018	91	石錘	結晶片岩	縄文～弥生時代	13.90	7.40	1.90	321.50	
025**SST**006-019	91	石錘	結晶片岩	縄文～弥生時代	10.35	8.70	1.45	192.50	
025**SST**006-020	91	石錘	安山岩	縄文～弥生時代	6.75	6.00	1.80	104.00	
025**SST**006-021	92	砥石	砂岩		(13.55)	7.85	10.20	1515.00	下半欠損
025**SST**006-022	92	砥石	砂岩		(11.35)	10.25	5.90	635.00	裏面・下端欠損
025**SST**006-023	92	敲石	安山岩	縄文～弥生時代	9.75	2.70	2.10	87.60	
025**SST**006-024	92	石皿片	凝灰岩	縄文～弥生時代	(12.20)	(6.20)	3.50	172.00	左右側・下端欠損
025**SST**008III-025	93	石鏃	姫島産黒曜石	縄文後・晩期	2.00	1.60	0.35	0.60	右脚欠損
025**SST**008III-026	93	石鏃	姫島産黒曜石	縄文後・晩期	1.80	1.55	0.30	0.50	左脚欠損
025**SST**008III**b**-027	93	石鏃未製品	姫島産黒曜石	縄文時代	2.75	(1.90)	0.60	2.50	右脚・左側縁欠損
025**SST**008III**b**-028	93	石鏃	姫島産黒曜石	縄文後・晩期	2.60	2.00	0.35	1.00	左脚欠損
025**SST**008III-029	93	石鏃	姫島産黒曜石	縄文後・晩期	2.05	1.80	0.60	1.70	尖端欠損
025**SST**008III**b**-030	93	石鏃未製品	姫島産黒曜石	縄文後・晩期	2.55	1.85	0.65	2.40	右脚欠損
025**SST**008III-031	93	石鏃未製品	姫島産黒曜石	縄文後・晩期	3.30	3.00	1.35	12.00	
025**SST**008III**c**-032	93	掻器	サヌカイト	縄文後・晩期	(4.55)	5.35	1.10	22.20	下半欠損
025**SST**008III**c**-033	93	二次加工剥片	サヌカイト	縄文～弥生時代	4.80	4.80	0.80	14.00	
025**SST**008III**a**-034	93	敲石	花崗岩	縄文～弥生時代	7.30	6.25	2.90	200.10	
025**SST**008III**c**-035	94	石核	姫島産黒曜石	縄文後・晩期	2.50	2.45	1.20	6.80	打製打ち欠き
025**SST**008III**a**-036	94	石核	姫島産黒曜石	縄文～弥生時代	1.65	3.50	2.10	11.20	
025**SST**008III**c**-037	94	石核	姫島産黒曜石	縄文後・晩期	2.20	4.95	1.65	12.90	

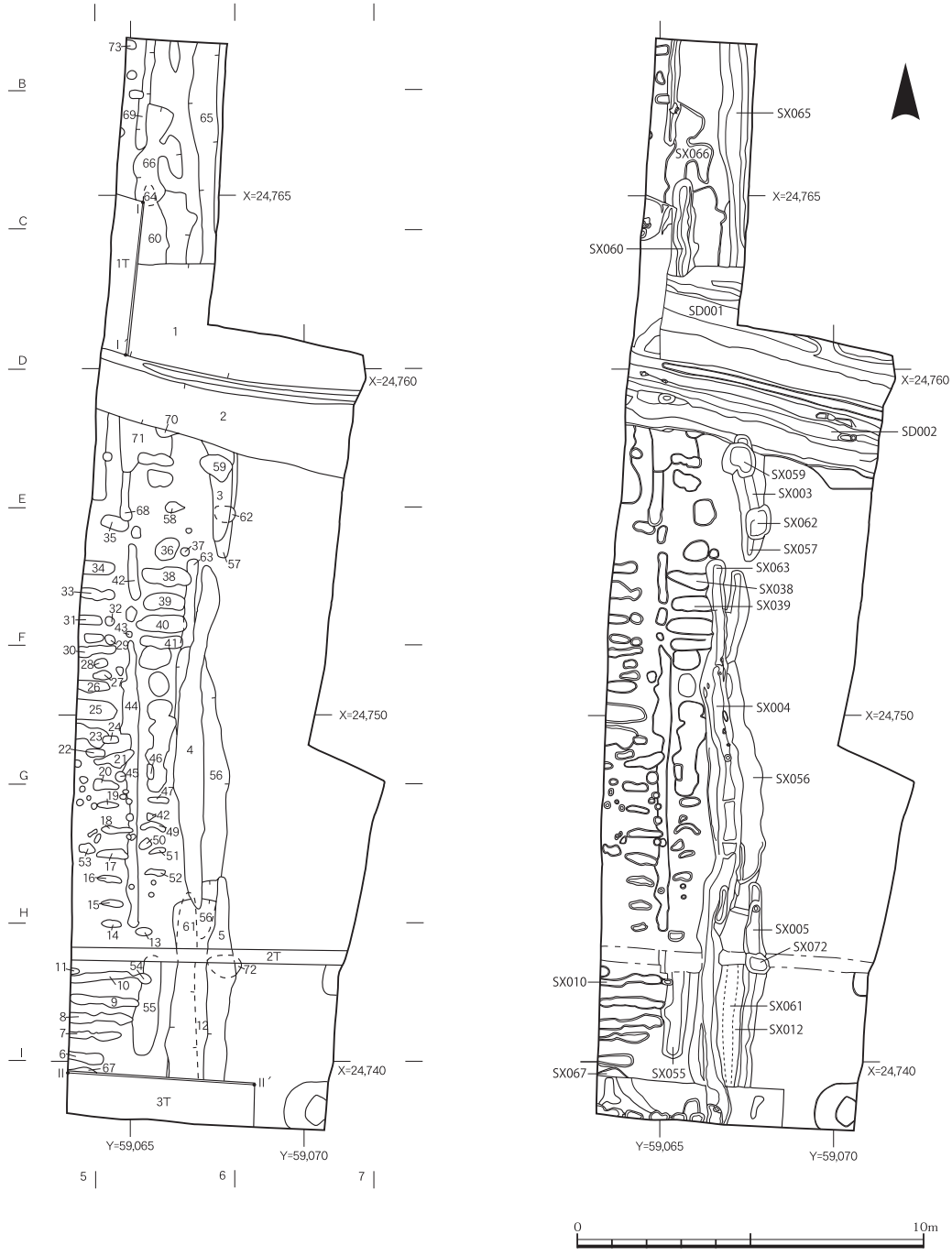
第33表　石器観察表②

遺物番号	挿図番号	器種 種類	石材	時期	法量（cm） 長さ	幅	厚さ	重さ（g）	備考
025**SST**008III-038	94	石核	流紋岩	後期旧石器時代	2.95	2.60	(3.05)	18.00	裏面欠損
025**SST**008IIIa-039	94	削器	サヌカイト	縄文～弥生時代	7.70	(4.00)	0.80	19.60	右側縁欠損
025**SST**008IIIc-040	94	垂飾状石製品	安山岩	縄文～弥生時代	2.25	2.65	0.90	4.70	
025**SST**008IIIb-041	95	石鏃	安山岩	縄文～弥生時代	(7.30)	9.30	1.55	137.70	基部欠損
025**SST**008IIIc-042	95	打製石斧	安山岩	弥生時代	3.55	(3.50)	1.05	16.70	左半・右側縁欠損
025**SST**008III-043	95	局部磨製石斧	結晶片岩	縄文～弥生時代	8.05	3.75	0.85	39.00	
025**SST**008III-044	95	柱状片刃石斧	安山岩	弥生時代前期	(6.95)	(1.50)	6.45	69.10	左右側縁・右半欠損
025**SST**008III-045	95	柱状片刃石斧	サヌカイト	弥生時代前期	(4.55)	1.60	1.15	15.40	刃部欠損
025**SST**008III-046	96	石錘	結晶片岩	縄文～弥生時代	8.80	8.25	0.80	64.60	上端右半欠損
025**SST**008III-047	96	石錘	結晶片岩	縄文～弥生時代	8.70	7.60	1.70	106.60	右側縁欠損
025**SST**008IIIa-048	96	石錘	結晶片岩	縄文～弥生時代	6.80	6.15	0.95	64.60	
025**SST**008IIIb-049	96	石錘	結晶片岩	縄文～弥生時代	5.65	5.15	0.95	36.20	
025**SST**008III-050	96	石錘	緑泥片岩	縄文～弥生時代	11.40	7.30	0.85	85.20	裏面欠損
025**SST**008IIIb-051	96	石錘	蛇紋岩	縄文後・晩期	4.50	3.25	0.85	19.10	
025**SST**008IIIb-052	97	砥石	結晶片岩		(5.80)	3.85	1.30	39.30	上半欠損
025**SST**008IIIa-053	97	砥石	軽石		11.10	6.70	3.80	72.40	
025**SST**008IIIb-054	97	砥石	結晶片岩		12.95	4.95	1.10	83.60	
025**SST**008IIIa-055	97	凹石	角閃石安山岩	縄文～弥生時代	9.85	7.10	5.05	442.00	
025**SST**008IIIa-056	98	浮子	軽石	縄文～弥生時代	6.00	5.50	2.10	36.00	
025**SST**008III-057	98	浮子	軽石	縄文～弥生時代	6.30	5.05	4.75	34.20	
025**SST**008IIIa-058	98	不明	角閃石安山岩	縄文～弥生時代	(7.60)	(7.20)	2.10	88.50	左右側縁欠損
025**SST**008IIIb-059	99	砥石	角閃石安山岩	縄文～弥生時代	9.30	8.15	1.50	212.00	
025**SST**009IV-060	99	尖頭状石器	結晶片岩	縄文後・晩期	9.70	2.75	0.70	23.50	刃部のみ
025**SST**009IV-061	99	石錘	緑泥片岩	縄文～弥生時代	8.80	5.10	1.25	88.80	
025**SST**009IV-062	99	石鏃	結晶片岩	縄文晩～弥生前	13.30	9.20	2.00	352.50	
025**SST**009IV-063	99	蛤刃石斧	安山岩	弥生時代	(9.80)	7.30	5.05	690.00	基部・刃部欠損
025**SST**009IV-064	100	扁平打製石斧	結晶片岩	縄文後・晩期	(4.80)	6.05	0.70	30.40	基部・刃部中央欠損
025**SST**009IV-065	100	石錘	蛇紋岩	縄文～弥生時代	4.10	2.70	1.05	17.80	
025**SST**009IV-066	101	扁平打製石斧	結晶片岩	縄文後・晩期	(5.90)	7.25	1.10	57.00	基部欠損
025**SST**009IV-067	101	扁平打製石斧	結晶片岩	縄文後・晩期	9.65	7.40	1.45	128.20	基部欠損・打製打ち欠き
025**SST**009IV-068	101	石錘	結晶片岩	縄文～弥生時代	(4.95)	5.90	0.75	26.90	右半欠損
025**SST**009IV-069	101	石錘	結晶片岩	縄文～弥生時代	7.80	6.40	0.70	52.50	右側縁欠損
025**SST**009IV-070	101	石錘	結晶片岩	縄文～弥生時代	5.80	5.20	1.45	55.40	右側縁欠損
025**SST**009IV-071	102	ノミ形刃石斧	粘板岩		41.00	1.70	0.90	13.90	
025**SST**009IV-072	102	穿孔具	片岩		(4.10)	0.80～1.40		6.70	基部欠損 ※幅は径
025**SST**009IV-073	102	石包丁状打製石製品	結晶片岩				0.75		

第２節　下郡遺跡群第98次調査

（１）はじめに

今回の調査は、平成７年度に調査を実施した第69次、および後述する第99次調査と同様に区画街路・下郡南北線の築造に伴う事前調査として行ったものである。当調査区は第69次調査区の北側隣接地に相当し、下郡遺跡群Ｅ区 p–15・16地点に相当する。207㎡を対象に平成９年11月１日～12月26日に第99次調査と並行して調査を実施した。調査の結果、８世紀中頃～９世紀に比定される道路状遺構を確認し、最終的には遺構の重要性にかんがみ、完掘は行わず、現状のまま約30cmの砂を遺構保護層として被覆し、道路下に盛土による保存措置を実施している。このような経緯から遺構の掘り下げは最小限に留め、近世以降のものと推定される東西溝、道路側溝と想定される長土坑状の溝、波板状凹



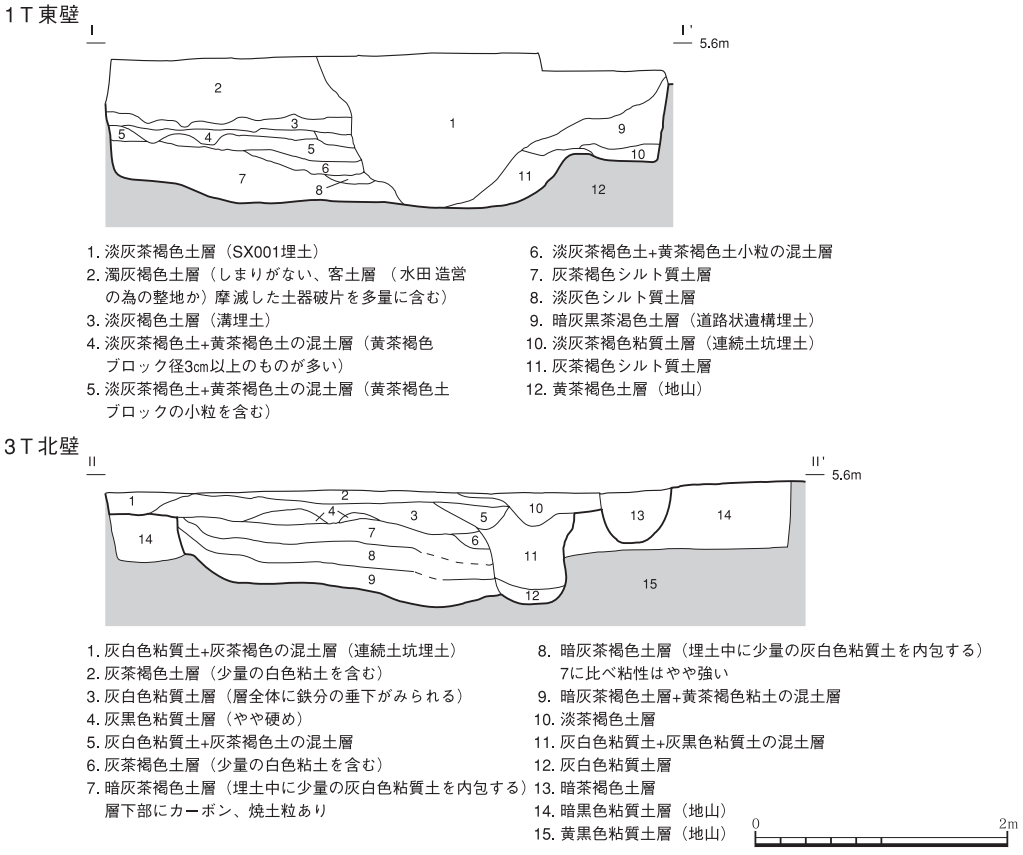
第116図　遺構配置図・全体遺構図　(1/200)

凸面と呼称される連続土坑の一部のみを対象としている。こうした作業を実施した上で第１から第３の三地点にトレンチを設定し、下層の状況を確認している。

（２）土層

表土を除去すると暗黒色粘質土が現れ、この土層の上面において遺構を検出することができる。本層は無遺物層であり、基盤を形成するものと考えられる。層厚40㎝を測り、当該土層の下位には黄黒色粘質土層が存在する。いずれも無遺物層であり基盤土層となるものである。道路の路面部分は周囲に対して溝状に掘りこみ形成されており、この一段低い面が路面として使用されていた状況が看取される。第３トレンチ北壁の土層断面図（第117図）をみると、最初期の路面は、調査時の検出面から約28㎝下位に構築されており、部分的ながら舗装材として使用されたと考えられる硬質の灰黒色粘質土（第４層）が遺存する。この段階の側溝は明確でないが、第６層として確認される部分が側溝に相当する可能性がある。次の段階において、路面は第３層（灰白色粘質土層）により被覆され新たな路面を形成したようである。098SX061が側溝として機能していたのであろう。引き続き第２層、および第10層により路面は被覆され、新たな路面が形成される。この段階に波板状の連続土坑群と側溝（098SX005）が機能していたものと推定される。遺構上面が削平を受けているため詳細は不明であるが、土層の切りあい関係から第10層を埋土とする098SX012を側溝とする段階を設定することも可能である。

以上の点から都合、５段階以上の道路改修の段階設定を堆積土層と遺構の平面分布の状況から判断することができる。ここで注目されるのは、遺構の上面削平を考慮すれば、想定した全ての段階において、路面が周囲より低い位置にあるという点を読み取ることができ、当該遺構の大きな特徴といえる。ちなみに、土層断面で確認される道路遺構の下面に存在する溝状遺構（第７・８・９層を埋土とする）は第69次で検出された069SF001の延長部に相当するものである。



1. 淡灰茶褐色土層（SX001埋土）
2. 濁灰褐色土層（しまりがない、客土層 （水田造営の為の整地か）摩滅した土器破片を多量に含む）
3. 淡灰褐色土層（溝埋土）
4. 淡灰茶褐色土+黄茶褐色土の混土層（黄茶褐色ブロック径3㎝以上のものが多い）
5. 淡灰茶褐色土+黄茶褐色土の混土層（黄茶褐色土ブロックの小粒を含む）
6. 淡灰茶褐色土+黄茶褐色土小粒の混土層
7. 灰茶褐色シルト質土層
8. 淡灰色シルト質土層
9. 暗灰黒茶渇色土層（道路状遺構埋土）
10. 淡灰茶褐色粘質土層（連続土坑埋土）
11. 灰茶褐色シルト質土層
12. 黄茶褐色土層（地山）

1. 灰白色粘質土+灰茶褐色の混土層（連続土坑埋土）
2. 灰茶褐色土層（少量の白色粘土を含む）
3. 灰白色粘質土層（層全体に鉄分の垂下がみられる）
4. 灰黒色粘質土層（やや硬め）
5. 灰白色粘質土+灰茶褐色土の混土層
6. 灰茶褐色土層（少量の白色粘土を含む）
7. 暗灰茶褐色土層（埋土中に少量の灰白色粘質土を内包する）層下部にカーボン、焼土粒あり
8. 暗灰茶褐色土層（埋土中に少量の灰白色粘質土を内包する）7に比べ粘性はやや強い
9. 暗灰茶褐色土層+黄茶褐色粘土の混土層
10. 淡茶褐色土層
11. 灰白色粘質土+灰黒色粘質土の混土層
12. 灰白色粘質土層
13. 暗茶褐色土層
14. 暗黒色粘質土層（地山）
15. 黄黒色粘質土層（地山）

第117図　1T・3T 土層断面実測図　(1/60)

第34表　遺構一覧表①

S番号	遺構番号	遺物・その他	時期	地区
001	098**SD**-001	漳州窯系青花碗片、備前壺片、陶胎染付、須恵質壺口縁部片、瓦質土器、磨製石斧、弥生土器片		**D**-6～**E**-7
002	098**SD**-002	中国産青花皿、同安窯系青磁皿口縁部片、備前擂鉢片、唐津系陶磁器片、土師器坏、土師質甕口縁部片、須恵器坏、須恵質甕、瓦質鉢口縁部片、東北部九州系甕、土錘、弥生土器片		**E**-6～7
003	098**SX**-003	須恵質甕片、企救型甕、弥生土器片		**E**～**F**-6
004	098**SX**-004	土師器坏口縁部片、都城系土師器坏口縁部片、土師質甕口縁部片、土師質鉢片、須恵器高台付坏底部、企救型甕口縁部片		**F**～**H**-6
005	098**SX**-005	土師器坏、土師器高台付坏、土師質鉢口縁部片、土師質甑片、須恵質長胴壺片、企救型甕、弥生鉢		**H**～**J**-6
006	098**SX**-006	須恵質甕、企救型甕口縁部片、豊後大分形甕片		I-5～6
007	098**SX**-007			I-5～6
008	098**SX**-008	須恵器高台付坏		I-5～6
009	098**SX**-009	土師器坏底部片、須恵器片		I-5～6
010	098**SX**-010	須恵質長胴壺底部片、須恵器片		I-5～6
011	098**SX**-011			I-5
012	098**SX**-012	土師質鉢片、須恵質甕口縁部片、企救型甕片、下城式甕片、東北部九州系甕片、豊後大分形甕片、弥生鉢片、石器		I-6
013	098**SX**-013	東北部九州系甕片、須恵器片		I-6
014	098**SX**-014	須恵器片		**H**～I-6
015	098**SX**-015			**H**-6
016	098**SX**-016	土器片		**H**-6
017	098**SX**-017	須恵質甕片、土器片		**H**-6
018	098**SX**-018	土器片		**H**-6
019	098**SX**-019	土器片		**H**-6
020	098**SX**-020	土器片		**G**～**H**-6
021	098**SX**-021	土師質壺片、須恵質甕片、豊後大分形甕		**G**-5～6
022	098**SX**-022	弥生甕底部片		**G**-5～6
023	098**SX**-023	東北部九州系甕片、土師器片		**G**-5～6
024	098**SX**-024			**G**-6
025	098**SX**-025	須恵質甕片、東北部九州系甕片		**G**-5～6
026	098**SX**-026	須恵質甕片、土師質片		**G**-5～6
027	098**SX**-027	土器片		**G**-5～6
028	098**SX**-028	土器片		**G**-5～6
029	098**SX**-029			**F**-6
030	098**SX**-030	東北部九州系甕片、須恵器片		**G**-5～6
031	098**SX**-031	土器片		**F**-5～6
032	098**SX**-032	須恵質胴部片、弥生甕底部片		**F**-6
033	098**SX**-033	土器片		**F**-5～6
034	098**SX**-034	土器片		**F**-5～6
035	098**SX**-035	土器片		**F**-6
036	098**SX**-036	須恵質甕片、東北部九州系甕片		**F**-6
037	098**SX**-037	須恵器片		**F**-6
038	098**SX**-038	須恵器蓋口縁部片、須恵質片		**F**-6
039	098**SX**-039	須恵器高台付坏片、須恵質甕片、須恵質長頸壺底部片		**F**-6
040	098**SX**-040	土師質壺片、須恵質甕片、弥生甕底部片		**F**-6
041	098**SX**-041	須恵質甕片		**F**～**G**-6
042	098**SX**-042	土器片		**H**-6
043	098**SX**-043	土器片		**F**-6
044	098**SX**-044			**F**～I-6
045	098**SX**-045	須恵器片		**G**-6
046	098**SX**-046	須恵質甕片、豊後大分形甕片		**G**-6
047	098**SX**-047	土器片		**H**-6
048	098**SX**-048	欠番		
049	098**SX**-049	土器片		**H**-6
050	098**SX**-050	須恵器片、土器片		**H**-6
051	098**SX**-051	土器片		**H**-6
052	098**SX**-052	企救型甕片		**H**-6
053	098**SX**-053	須恵器片、土器片		**H**-5
054	098**SX**-054	土器片		I-6
055	098**SX**-055	土師質甑片、須恵質甕、企救型甕口縁部片、東北部九州系甕片、豊後大分形土器片、石器		I-6
056	098**SX**-056	土師器坏片、土師器高坏、土師器高台付坏、土師器蓋片、土師質壺片、土師質甑片、須恵器高坏、須恵器高台付坏、須恵器蓋、須恵質甕、企救型甕口縁部片、下城式甕片、東北部九州系土器片、豊後大分形甕、弥生甕片、土師器片		**G**～I-6
057	098**SX**-057	企救型甕、豊後大分形甕口縁部片		**E**-6～7･**F**-6

第35表　遺構一覧表②

S 番号	遺構番号	遺　物　・　そ　の　他	時　期	地区
058	098**SX**–058	須恵質甕、豊後大分形甕片		**E**～**F**–6
059	098**SX**–059	土師器坏、須恵質甕、土器片		**E**–6
060	098**SX**–060	土師器坏片、土師質壺、須恵質甕片、須恵質長頸壺片、下城式甕片、東北部九州系甕、豊後大分形甕片、須恵器片、瓦片		**C**～**D**–6
061	098**SX**–061	備前擂鉢片、土師器高台付坏片、須恵器蓋片、須恵質壺片、瓦質甕片、企救型甕、下城式甕口縁部片、下城式壺片、東北部九州系甕片、豊後大分形甕片、豊後大分形甑片、土師器片		**H**～**J**–6
062	098**SX**–062	土師器坏、土師質壺胴部片、土師質短頸壺、須恵器坏、製塩土器		**F**–6
063	098**SX**–063	須恵質長頸壺片、須恵器片		**F**～**G**–6
064	098**SX**–064	豊後大分形甕、下城式土器片		**C**–6
065	098**SX**–065	土師器坏底部片、土師質甕、須恵質甕片、企救型甕、東北部九州系甕、豊後大分形甕		**B**～**D**–6
066	098**SX**–066	土師器坏、土師質甕胴部片、土師質甑底部片、須恵器蓋		**C**–6
067	098**SX**–067	土師器高台付坏底部片		**J**–5
068	098**SX**–068	須恵器片		**E**～**F**–6
069	098**SX**–069	須恵器蓋片、須恵質甕口縁部片、東北部九州系壺、豊後大分形壺		**B**～**C**–6
070	098**SX**–070	須恵質甕片、製塩土器		**E**–6
071	098**SX**–071	東北部九州系甕、豊後大分形甕		**E**–6
072	098**SX**–072	須恵器蓋口縁部片、須恵器片		I–6～7
073	098**SX**–073	須恵質甕胴部片		**B**–6
	098**T**–001	銅製品		**C**～**D**–6
	098**T**–002			I–5～7
	098**T**–003	土師器坏、企救型甕片		**J**–5～7
	098**SZ**–000	龍泉窯系青磁碗、漳州窯系染付、同安窯系青磁皿、備前甕、備前擂鉢、唐津系皿、肥前系磁器碗、肥前系陶胎染付碗、白磁碗、緑釉陶器、焼締蓋、土師器坏、土師器高台付坏、土師器蓋、京都系土師器、土師質鉢、土師質壺、須恵器坏、須恵器高坏、須恵器高台付坏、須恵器蓋、須恵質壺、須恵質甕、企救型甕、下城式甕、下城式壺、東北部九州系甕、豊後大分形甕、豊後大分形甑、弥生甕、弥生鉢、製塩土器、土師器片、須恵器片、羽口、羽釜、瓦、土錘、石器、土器片		

（３）遺構と遺物

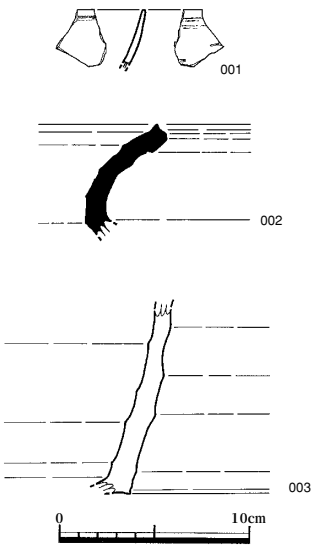
溝状遺構（SD）

098SD001

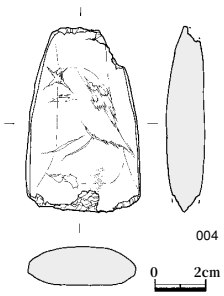
調査区北側において東西に展開する溝状遺構である。検出面での溝幅約3.2m、現存深度1.16m を測る。淡灰茶褐色土を埋土とし、溝の断面形状は U 字形を呈する。溝位置は、現在の字境と一致しており、この溝を境に南北でレベル差が生じている。水田構築に伴い水掛の関係で地下げされた結果であると考えられる。出土遺物内容から18世紀以降に構築されたものであることが判明する。

出土遺物（第118・119図）

出土遺物には、弥生時代中期土器片、８世紀を中心とする土器破片、中世後半期のものと考えられる瓦質土器、備前焼破片、18世紀前半に比定される陶胎染付片などがある。しかしながら、いずれも小破片であり、図化が可能なものは極めて少ない。直接溝の構築時期を示すものではないが、周辺に展開する遺跡様相を把握する手掛かりとするため、図化の可能な４点の遺物を掲載した。001は磁器碗である。口縁部の小片であるが、中国漳州窯系のものと推定される。002は須恵質壺の口縁部破片である。淡灰褐色を呈し、内外面とも回転ナデにより調整される。003は備前焼の壺の胴部片と考えられるものである。茶褐色を呈し、回転ナデにより調整される。004は扁平な磨製石斧である。基部は欠損し、刃部は潰れている。安山岩製であり、現存重量80.5g を測る。



第118図　SD001
出土遺物実測図①　(1/4)



第119図　SD001
出土遺物実測図②　(1/3)

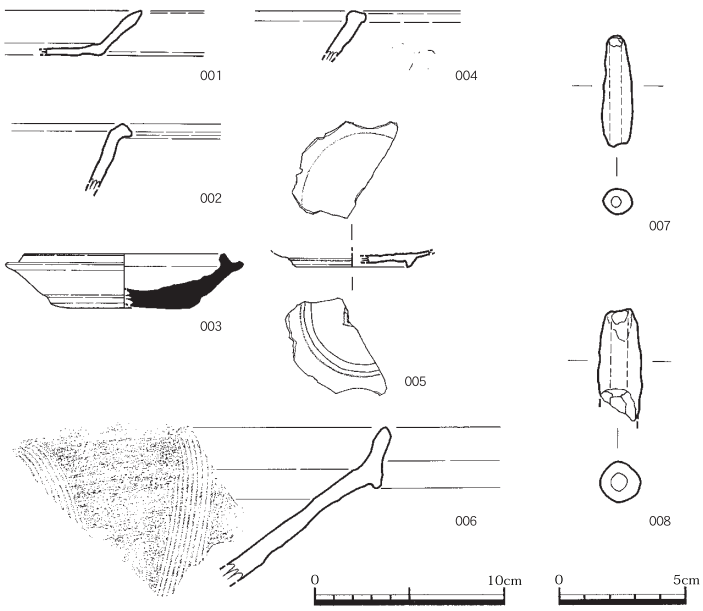
098SD002

098SD001と並走する形で検出した溝状遺構である。検出面での溝幅約1.8m を測る。現存深度1.0m、断面形状は V 字形を呈する。暗茶褐色土を埋土とする。

出土遺物（第120図）

SD001と同様に遺物は小片が多く、弥生時代中期土器から唐津焼と推定される陶器破片などの出土が認められ、広い時期幅を示している。しかしながら、最新の遺物様相は SD001に見られるように江戸時代中期まで下る遺物は認められず、感覚的なイメージとなるが、SD001よりも若干古い様相を示している可能性がある。SD001との切りあい関係が判明しないため、具体的な新旧関係は断定できないが、出土遺物の様相から看取される溝の埋没時期は17世紀の初頭を下らない。本項においても SD001の出土遺物の項で示した理由と同様の事由により、遺存率の高い遺物８点を図化し、掲載した。したがって、これらの遺物が必ずしも溝の帰属年代を示すものではない。001は淡茶褐色を呈する土師器坏である。全体の１/４が遺存し胎土中には長石、橙色粒子を含みナデにより仕上げられる。風化のため明瞭でないが、底部にはヘラ切り離しの痕跡が僅かに残る。002は土師質甕の口縁部破片である。胎土中には角閃石、橙色粒子を含み、淡茶褐色を呈する。８世紀後半～９世紀に比定される

ものであろうか。003は須恵器坏身破片であり、６世紀末～７世紀に比定されるものである。全体の１／４が遺存する。内面・黒褐色、外面・淡灰褐色を呈し、復元口径10.6cm、器高2.8cm、復元底径7.8cmを測る。底部にはヘラ切り離し痕が残る。004は瓦質土器鉢の口縁部片である。口縁部内面を肥厚させる点が特徴的である。防長系か。胎土中には長石粒を含み、器表面はナデ調整により仕上げられる。005は中国青花皿の破片である。底部の１／３が遺存し、高台内部にはカンナ削り痕が認められる。復元底径6.0cmを測る。006は備前焼擂鉢片である。淡茶褐色を呈している。擂目は単位８本であり、口縁部形状から乗岡編年中世第５期、15世紀後半に比定される資料である。007・008は土師質の土錘である。007は淡茶褐色を呈する。長軸4.4cm、径1.2cm、重量5.4g を測る。ナデが施され、胎土中には角閃石、長石粒を含む。008は復元長4.4cmを測り淡茶褐色を呈する。胎土中には角閃石、長石、橙色粒子を含む。



第120図　SD002出土遺物実測図　(1/4)(1/3)

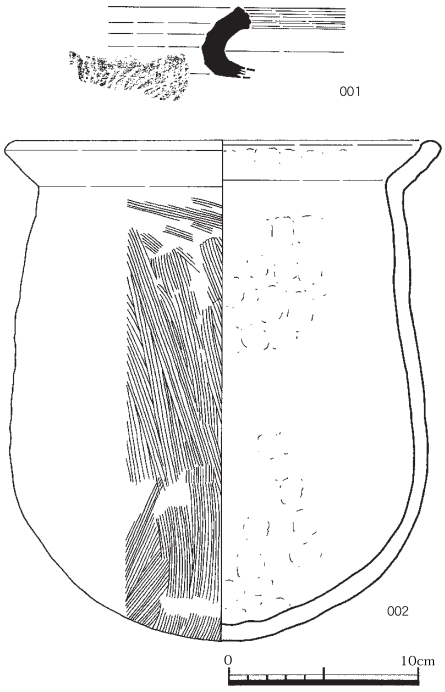
その他の遺構（SX）

098SX003

098SD002の南側、098SD002と切りあい関係を有する長土坑である。現存する部分での長軸2.8m、幅0.98m、最深部での深さ0.4m を測る。詳細は後述するが、道路状遺構の側溝として機能していたものと推定される。淡茶褐色土を埋土とする。098SX057に重複する形で構築されている。

出土遺物（第121図）

001は須恵質甕の口縁部破片である。外面はヨコナデ、内面にはタタキあて具痕が明瞭に残る。暗灰色～淡灰褐色を呈する。002は、いわゆる企救型甕である。全体の３／４が遺存し、接合作業により図上復元が可能になった。口径21.8cm、器高26.5cm、胴部最大径22.0cmを測る。内面はナデにより調整されるのに対し、外面はタテ方向の粗いハケ目が施される。淡茶褐色～赤褐色を呈し、胎土中には石英、角閃石、長石などが比較的大粒のまま内包されている。胎土内に封入される特徴的なものに緑色結晶片岩片がある。これは、大分平野内においても市域の東部、大野川以東に分布するものであ



第121図　SX003出土遺物実測図　(1/4)

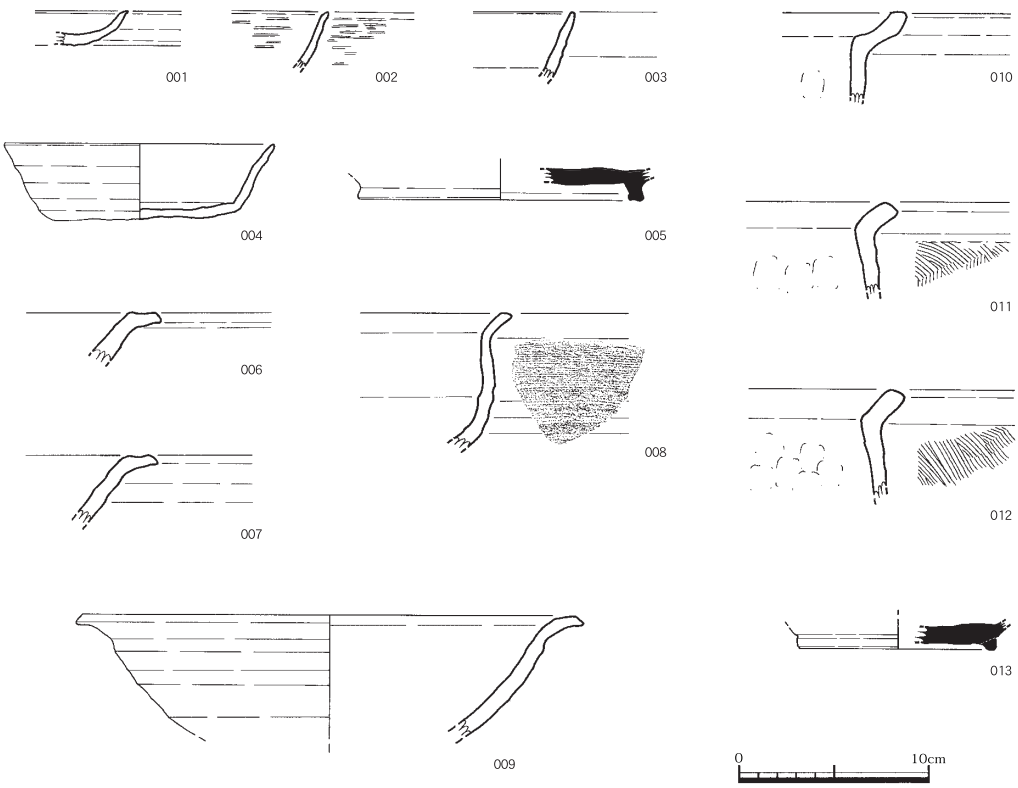
り、土器製作地を示唆する可能性のある要素として注目される。８世紀後半～末を中心に盛行するものに類似する。

098SX004（第134図）

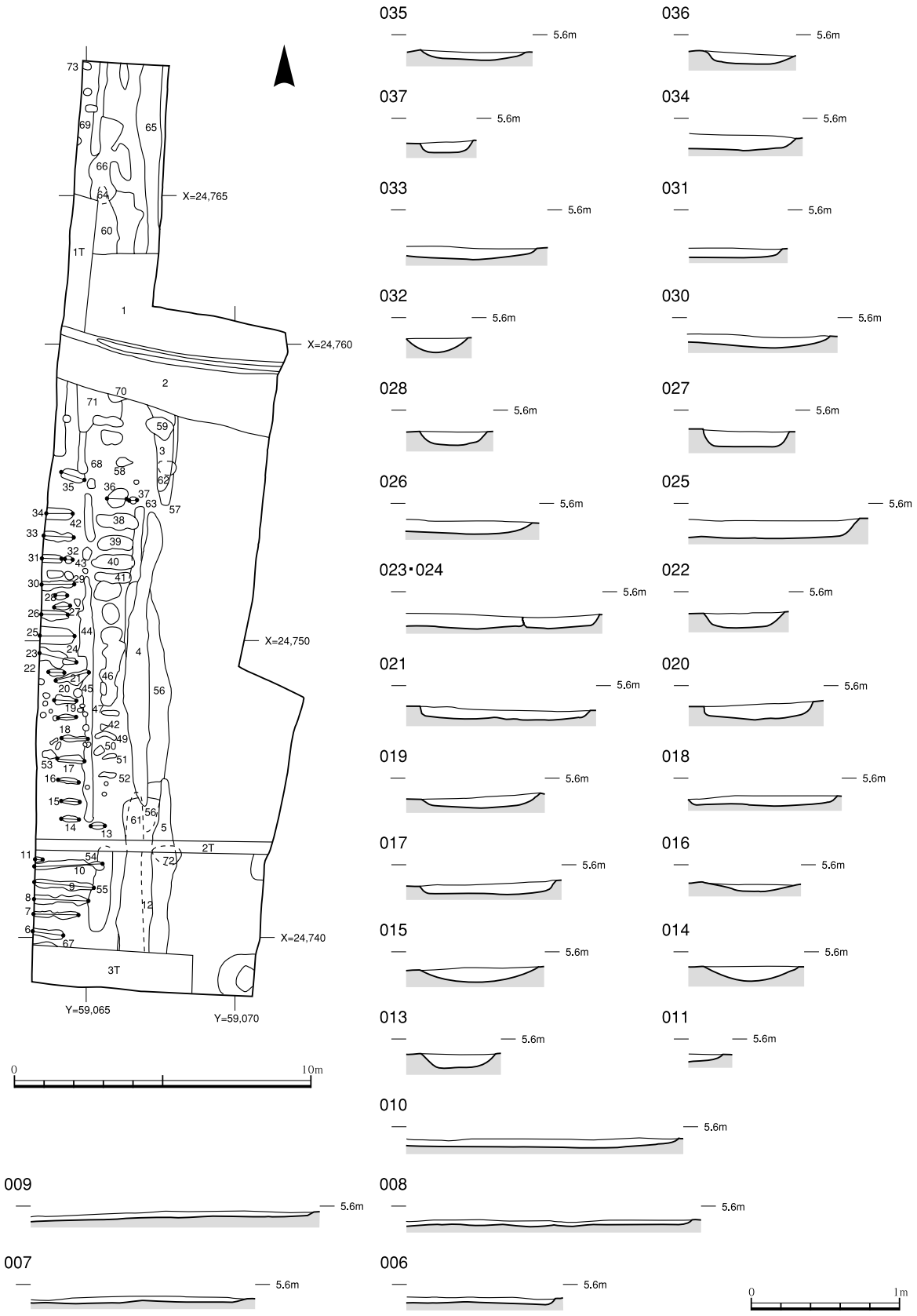
098SX003の南側延長部、約0.8mの間隔をもって構築された長土坑である。検出長9.8m、最大幅0.9mを測る。最深部で0.84mを測り、堆積埋土は３～４層に分層される。底面は基本的には舟底状を呈するが、随所に段を有し、底面レベルは厳密には一様ではない。最も上位に存在する第１層は茶褐色土層であり、その下位の第２層、第３層は、それぞれ暗茶褐色土、暗黄褐色土により構成され、両者とも若干の粘性を帯びている点で共通する。第４層は、底面に認められる部分的な深部にのみ認められる土層であり、多量のブロック土を含有する点を大きな特徴とする。明黄褐色のブロック土を含む黄褐色土層である。098SX003と同時に道路側溝として機能していたものと考えられる。

出土遺物（第122図）

098SX003出土遺物などのように遺存率の高いものはなく、いずれも破片という形で埋土内から出土する。001はいわゆる都城系土師器と呼称される内面に放射状暗文を施す資料である。風化のため明瞭でないが、微かに暗文を確認することができる。口縁端部内面には平坦面を形成し、胎土中には角閃石、長石の微粒を含む。002は土師器坏口縁部破片であり、内外面とも回転ヘラミガキによって仕上げられる。坏ｄに分類されるものであり、淡茶褐色～淡橙褐色を呈する。003は内外面ともヨコナデによって調整される土師器坏ａの口縁部破片である。淡茶褐色を呈している。004も土師器坏ａ資料である。口径14.2cm、器高4.0cm、底径10.3cmを測り、底部には明瞭な回転ヘラ切り離し痕が残る。



第122図　SX004出土遺物実測図　(1/4)



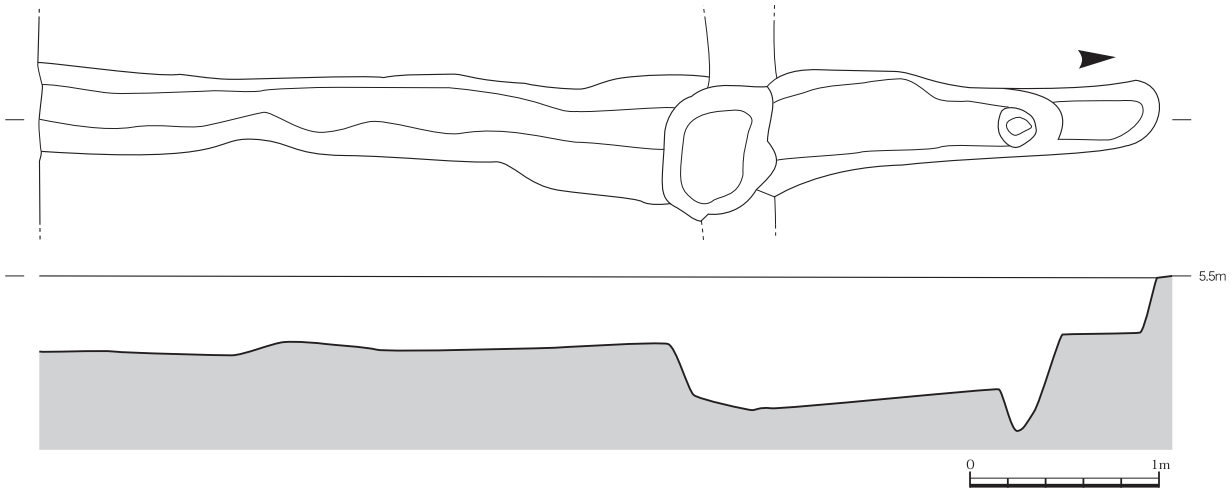
第123図　連続土坑平面・断面実測図　(1/200・1/40)

005は須恵器高台付坏破片であり、灰白色を呈する焼成不良品である。SX055からの出土破片が接合した。復元底径15.0㎝を測り、器表面は回転ナデにより調整される。006・007・009は土師質鉢の口縁部破片である。洗面器状の器形を呈するものである。006は淡茶褐色を呈し、内外面ともナデが施される。胎土中には石英、角閃石、長石を含む。007も同様の破片資料である。淡茶褐色を呈し、胎土中には角閃石、長石を含む。009もまた同タイプの鉢形土器であり、比較的遺存率が高く、全体の約１/３が残る。復元口径26.0㎝を測り、胎土中には角閃石、長石、橙色粒子、金雲母を含む。内面・淡茶褐色、外面・橙褐色を呈し、器面はナデにより調整される。008は深いタイプの鉢形土器であり、体部外面上部にカキ目調整を最終調整として施す点を大きな特徴とする。010は企救型甕タイプの口縁を有しながら、体部はヨコナデ調整を行う種類の甕の特徴をもつ折衷土器口縁部破片である。内湾気味に立ち上がる口縁部形状を有し、内外面とも淡茶褐色を呈する。胎土中には、角閃石、長石、橙色粒子、緑色結晶片岩片を含み、体部はヨコナデにより調整される。011・012は企救型甕の口縁部破片である。短く外方へ開く口縁部をもち、外器面には粗いハケ目が施される。淡茶褐色を呈する。013は須恵器高台付坏である。断面台形の角高台が貼付される。淡灰白色を呈し、高台内面にはヘラ切り離し後ナデが施される。復元底径10.4㎝を測る。

出土遺物の様相としては、８世紀後半からの連続した遺物群として捉えることが可能である。その下限については、004の坏ａ２底部の立ち上がりが不明瞭になりつつある点、011・012の企救型甕の口縁部が８世紀に盛行するものと比較して歪小化しており、明らかに後出の要素を具備している。また、009の鉢なども深さが浅くなり、外面底部付近の回転ヘラケズリが省略されるなど、８世紀後半代のものに比して手抜き現象が明瞭であり、総じて時期的に下るものと判断されよう。これらの遺物様相から、およそ９世紀初頭～前葉の年代観が想定される。

098SX005（第124図）

098SX004の南側に配置された長土坑状の遺構である。南側は調査区外に展開しており、南端は不明である。検出長6.1ｍを測り、底面はほぼフラットな状況を示す。検出面から0.36ｍの深さを有するが、北端付近に深部が認められ、ここでは、検出面から0.66ｍの深度を示している。この深部に関しては、検出面から0.36ｍで確認される底面を検出した段階で確認したものであり、098SX005とは別遺



第124図　SX005 平面・断面実測図　(1/40)

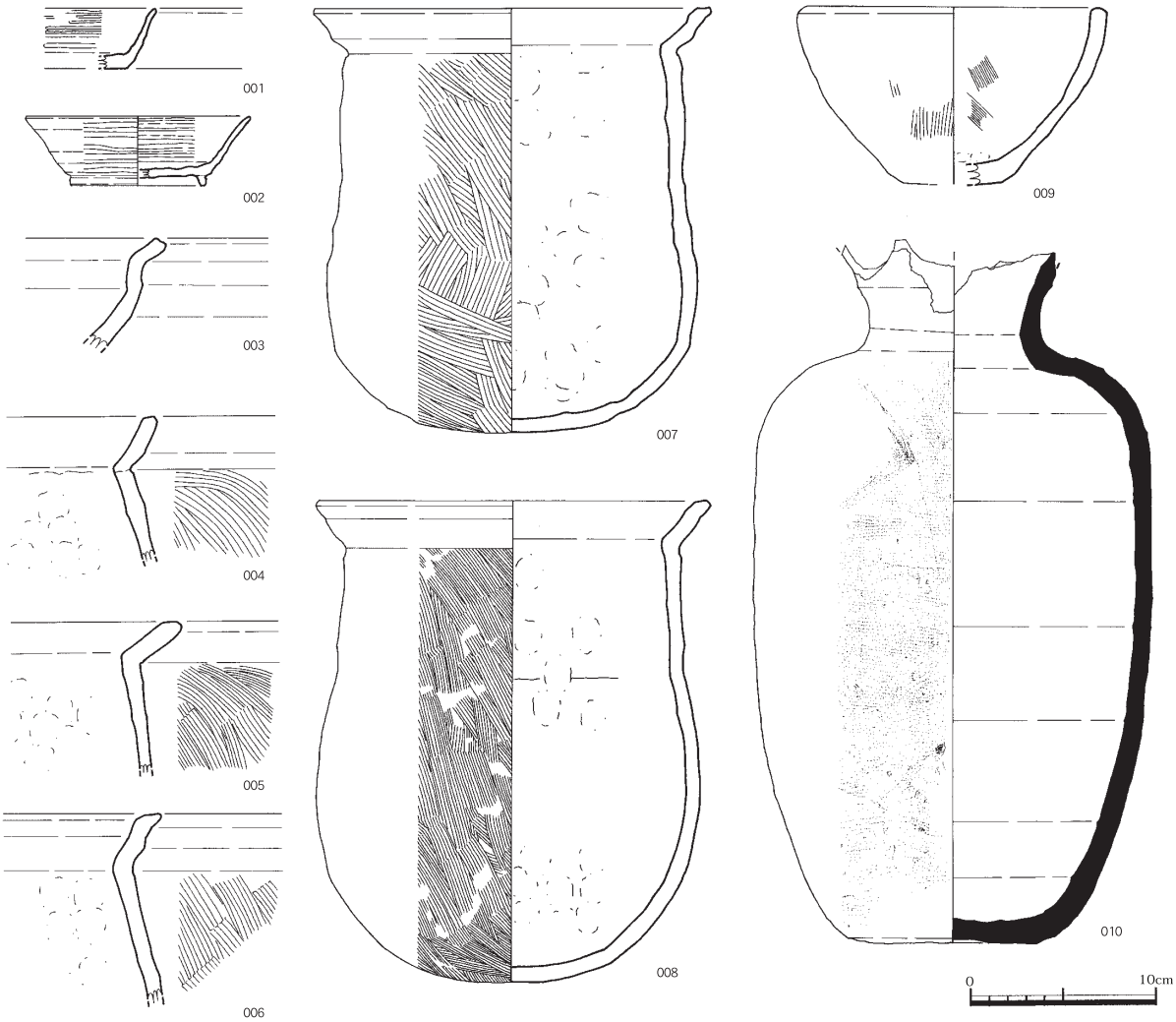
構として認識すべきものかもしれないが、掘り下げ時、検出時とも098SX005の埋土とは差異を認めることができなかったことから、098SX005下層遺構とした。暗茶褐色土を埋土とし、底面直上には口縁部を意図的に打ち欠いた須恵質長胴壺（010）が破砕された状態で検出された。

出土遺物（第126図）

001は土師器坏ｄ破片である。内面・淡茶褐色、外面・淡橙褐色を呈し、内外面には回転ヘラミガキが施される。胎土中には角閃石、長石を含む。002は土師器高台付坏破片である。全体の約１／４が遺存する。復元口径12.0㎝、器高3.7㎝、復元底径7.2㎝を測る。淡茶褐色を呈し、内外面とも回転ヘラミガキにより仕上げられる。胎土中には角閃石、長石、橙色粒子を含む。003は土師質鉢の口縁部破片である。口縁部はＳ字に屈曲し、ヨコナデにより仕上げられ、淡橙褐色を呈し、胎土中には角閃石、長石、橙色粒子を含む。004～006は企救型甕の口縁部破片である。いずれも口縁端部上面に水平面を形成する対応のものであるが、口縁部の断面形状が内湾するもの（004）、直線的に



第125図　SX005遺物出土状況



第126図　SX005出土遺物実測図　(1/4)

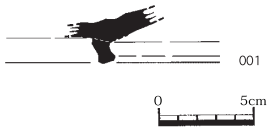
展開するもの（005）、口縁部に強いヨコナデにより段を形成するもの（006）に分類することができる。004は淡茶褐色を呈し、胎土中に長石、石英、橙色粒子、白色粒子を含む。005は004に比して細かいタテ方向のハケ目が施される。胎土中には角閃石、長石などを内包するが、なかでも緑色結晶片岩片を胎土内に含む点を大きな特徴とする。006は淡茶褐色を呈し、胎土中に角閃石、長石、橙色粒子を含んでいる。007・008もまたいわゆる企救型甕である。007は全体の約１/６、008は約１/２遺存しており、図上において完形に復元することができた。007は淡茶褐色を呈し、外面は粗いハケ目、内面はナデにより調整されるが、指オサエが随所に認められる。008は007のハケ目よりもはるかに細密なハケ目工具により外器面が調整される。内外面とも淡赤褐色を呈する。復元口径22.0㎝、器高26.0㎝、胴部最大径20.6㎝を測る。胎土中には石英、角閃石、長石、橙色粒子を含んでいる。内面は007と同様にナデにより仕上げられる。指オサエが随所に認められる。009は弥生時代中期の鉢形土器である。全体の３/４が遺存する遺存率の高い遺物であったため掲載した。明らかに混入品である。口径16.7㎝、器高9.6㎝、復元底径5.4㎝を測る。淡黄褐色を呈している。010は須恵質長胴壺である。098SX005の下層遺構底面において破砕された状況で検出された。接合作業の結果、ほぼ完形に復元することができた。口縁部は意図的に打ち欠かれている。最大胴部21.3㎝、底径9.5㎝を測る。灰白色～灰黒色を呈する。内器面は回転ナデにより調整され、外器面にはタタキ痕が部分的に残り、胴部上半を中心にカキ目により調整される。

098SX010

098SX010は、波板状凹凸面を構成する連続土坑のひとつである。暗灰茶色土の単一土を埋土とする。道路方向に直交する状況で東西方向に配置される。西端は調査区外に存し、検出長1.8m、幅0.25m、現存深度0.05m を測る。同様の土坑は道路想定面の南北方向に規則的に認められる。

出土遺物（第127図）

001は須恵質長頸壺の底部破片である。淡灰褐色を呈し、器表面はヨコナデにより調整される。



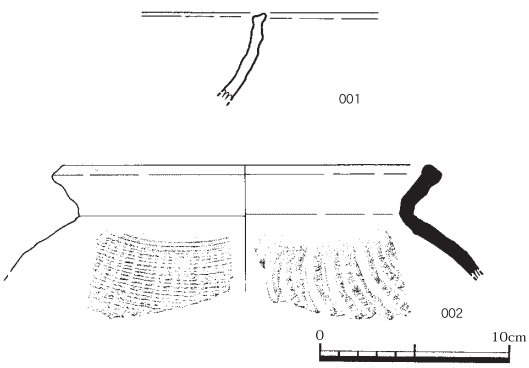
第127図　SX010出土遺物実測図　(1/4)

098SX012

道路側溝と考えられる長土坑のひとつで、東端を098SX005によって切られている。現存深度0.32m を測り、淡茶褐色土の単一土層を埋土とする。

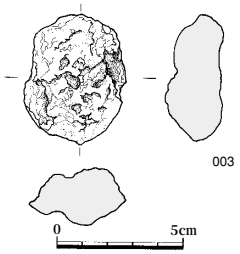
出土遺物（第128・129図）

遺構の規模の割には出土遺物の量は少なく、小破片のみである。３点の資料を図化し掲載した。001は土師質鉢の口縁部破片である。内外面とも淡茶褐色を呈する。内面はナデ調整、外面はヨコナデ調整により仕上げられる。８世紀段階のものか。002は須恵質甕の口縁部である。内外面とも淡灰白色を呈する。復元口径19.5㎝を測り、外器面はカキ目による調整、内器面にはタタキあて具



第128図　SX012出土遺物実測図①　(1/4)

痕が明瞭に残る。003は軽石加工品である。上面と下面に窪みを形成する。



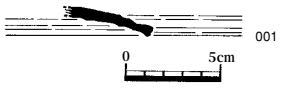
第129図　SX012出土遺物実測図②
(1/3)

098SX038

調査区の中央付近で検出された波板状凹凸面を形成する連続土坑のひとつである。長軸を東西方向に向け、長軸長1.4m、短軸長0.6m を測る。断面形状は皿形を呈し、現存深度は最深部で0.08m、淡灰茶褐色粘質土を埋土とする。

出土遺物（第130図）

001は須恵器蓋の端部破片である。外器面の頂部近い部分には回転ヘラケズリが施され、他の部分はナデにより調整される。端部形状は、比較的厚く成形される。淡灰褐色を呈する。８世紀前半～中頃に比定される。



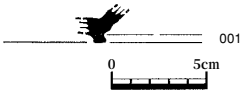
第130図　SX038出土遺物実測図
(1/4)

098SX039

098SX038の南側に位置する波板状凹凸面を形成する連続土坑の一部である。098SX038と同様の様相を示し、淡灰茶褐色粘質土を埋土とする。長軸長1.2m、短軸長0.4m を測る。

出土遺物（第131図）

001は須恵質長頸壺の底部破片である。器表面は回転ナデにより調整され、淡灰褐色を呈する。底部には断面形状が台形を呈する低平な角高台が貼付されており、これらの特徴から８世紀中頃以降の所産になるものと考えられる。



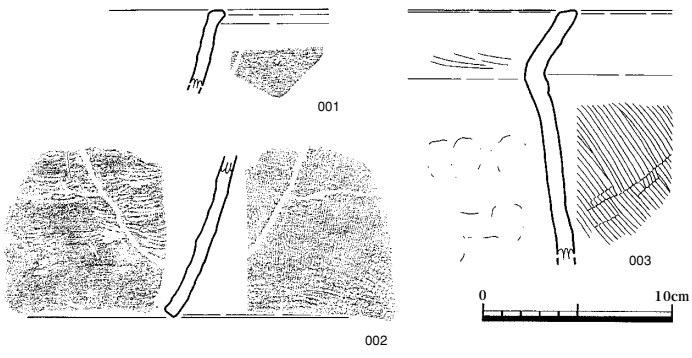
第131図　SX039出土遺物実測図
(1/4)

098SX055

側溝として利用されたと考えられる長土坑である。調査区南端付近で検出した。検出長2.6m、幅0.8m、最深部で0.15m を測る。暗茶褐土を遺構埋土とする。

出土遺物（第132図）

001は土師質甑の口縁部破片である。外方へ直線的に展開する口縁部の上端に平坦面を形成し、端部を僅かに外方へ張りだすような形状を呈している。内外面とも淡茶褐色を呈し、内器面はナデ、外器面については、カキ目風のナデ調整がなされている。002は、土師質甑基部破片である。基部内面には明瞭な反りをもたない。内面には同心円状のタタキあて具痕がみられ、基底部に近い部分にはケズリ調整が認められる。外器面には、格子状のタタキ痕が残り、その上面をタテ方向のハケ目により調整される。淡橙褐色を呈し、角閃石、長石、橙色粒子、金雲母を胎土中に内包する。003は企救型甕の口縁部破片である。淡茶褐色を呈し、胎土中には石英、長石を含む。内面はナデ、及び工具ナデにより調整され、外面はハケ目後ナデ調整が施されている。



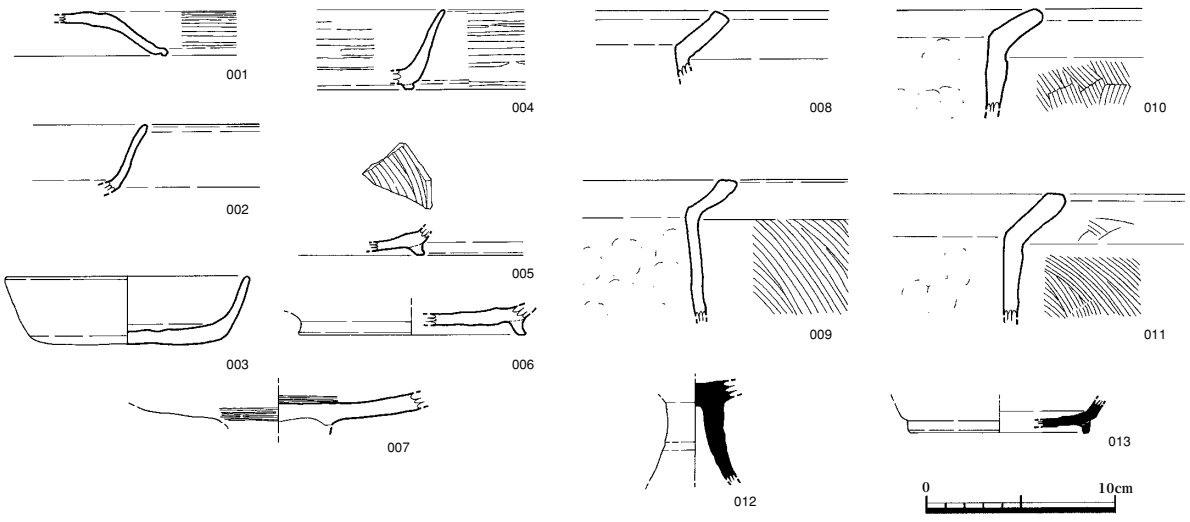
第132図　SX055出土遺物実測図　(1/4)

098SX056（第134図）

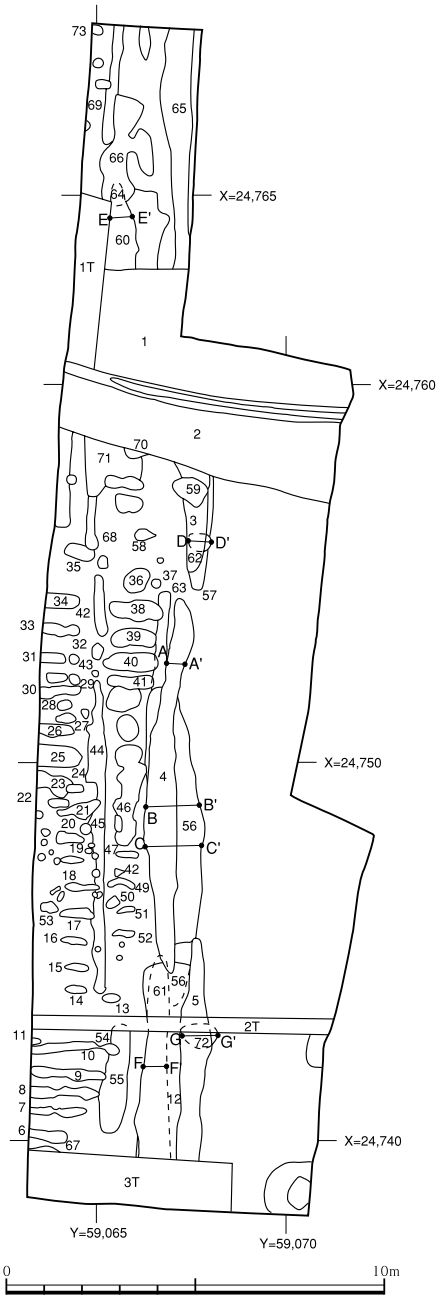
調査区のほぼ中央において南北方向に検出された長土坑で検出長8.3m を測る。現存深度0.2m 程度を示しているが、中央部分は098**SX**004により切られており、本来の底面はさらに深かったものと推察される。やや粘性を帯びる暗黄茶褐色土を埋土とする。

出土遺物（第133図）

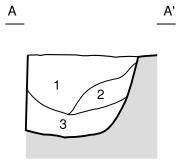
001は土師器蓋の端部破片である。胎土中には角閃石、長石、橙色粒子、金雲母を含み、淡茶褐色を呈する。内面はナデ調整、外面は回転ヘラミガキにより調整される。**002**は土師器坏**a**の口縁から体部の破片である。淡茶褐色を呈し、内外面ともナデにより仕上げられる。**003**もまた、土師器坏**a**資料である。全体の約１/４が遺存する。復元口径12.8㎝、器高3.5㎝、復元底径9.7㎝を測る。淡茶褐色～淡橙褐色を呈する。**004**は土師器高台付坏破片である。淡橙褐色を呈し、内外面とも回転ヘラミガキ（ミガキ$\mathbf{a}_2$）が施される。底面に貼付される高台は歪小化しており、極めて低平なものである。**SX**056堆積土層の上位から出土した。**005**も**004**と同種の高台付坏の底部破片である。淡橙褐色を呈し、胎土中には、角閃石、長石、橙色粒子を含む。内面は回転ヘラミガキ（ミガキ$\mathbf{a}_2$）が施されるが、外面には最終調整としてのミガキが省略され、ナデにより仕上げられる。**006**も土師器高台付坏の底部破片である。約１/４が遺存する。角閃石、長石などを胎土中に含み、淡橙褐色を呈する。復元底径11.9㎝を測る。内外器面ともミガキは省略されナデにより調整される。**007**は土師器高坏の坏部と脚部との接合部である。遺構堆積埋土の最下部から出土した。淡茶褐色～淡灰褐色を呈する。内外器面はミガキにより調整される。坏部と脚部の接点は、粘土接合部から剥がれるように剥落しており、接合部は疑口縁状になっている。**008～011**は企救型甕の口縁部破片である。**008**は堆積埋土の最下部から出土した資料であり、淡橙褐色を呈する。内外面ともナデ調整が施されている。**009**は、内湾気味に立ち上がる口縁部に平坦面を形成する口縁端部形状を有する資料である。淡橙褐色を呈する。胎土中には角閃石、長石、橙色粒子の他、緑色結晶片岩片を含んでおり注目される。**010**は外反気味に展開し、端部を丸くおさめるタイプの口縁部形状を示す。**009**ほどではないが、口縁端部にはわずかに平坦面を意識した整形が認められる。内面・淡橙褐色、外面・淡灰白色を呈する。外器面の一部には黒斑がみられる。**011**は直線的に外方へ延びる口縁部形状を呈している。口縁部の断面形状



第133図　SX056出土遺物実測図　(1/4)

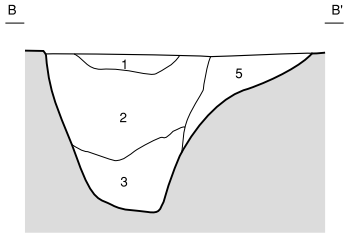


SX004

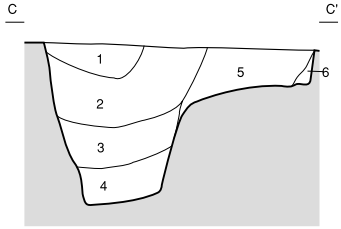


1.暗茶褐色土層（やや粘性有）
2.茶褐色土層（暗黄褐色のブロック含む）
3.暗黄褐色土層（やや粘性有、茶褐色のブロック含む）

SX056(北側)

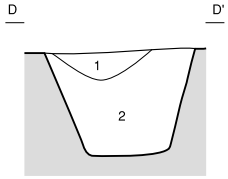


SX056(南側)



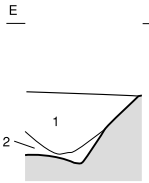
1.茶褐色土層（硬質）
2.暗茶褐色土層（やや粘性有）
3.暗黄褐色土層（やや粘性有）
4.黄褐色土層（明黄褐色のブロックを含む、赤褐色の粒子を含む）
5.暗灰褐色土層（やや粘性有）
6.灰茶褐色土層

SX057



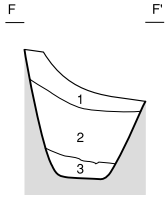
1.淡茶褐色土層
2.暗黄茶褐色土層（粘性有）

SX060



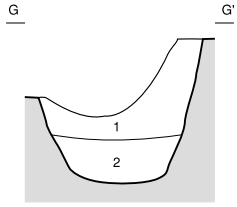
1.灰色粘質土層
2.暗茶褐色粘質土層

SX061



1.淡灰色粘質土層（しまりがない）
2.淡灰茶褐色粘質土層（しまりがない）
3.暗灰茶褐色粘質土層（比較的硬くしまっている）

SX072



1.暗茶褐色土層
2.暗茶褐色土層+黄茶褐色土ブロック

0 1m

第134図　長土坑断面実測図　(1/200・1/40)

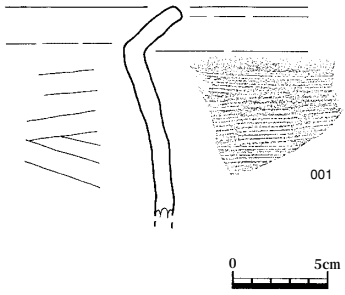
は**009**などと大きく異なるが、端頂部に平坦面を形成する要素は共通する。内外面とも淡茶褐色を呈し、外面にはタテ方向の粗いハケ目が施される。**012**は須恵器高坏の脚部の一部である。淡茶褐色～淡灰褐色を呈し、内外面とも回転ナデ調整が施される。**013**は須恵器高台付坏の底部破片である。淡茶褐色～淡橙褐色を呈する。

098SX057（第134図）

098**SX**003と重複する長土坑である。同地点で4基の遺構が切りあうが、新→古で示すと新旧関係は、059→003→062→057となり、098**SX**057は切りあい関係からこれら4基の中で最も古い遺構であることが分かる。現存深度0.3**m**を測る。

出土遺物（第135図）

001はかつて豊後大分形甕[註1]と呼称した甕の口縁部破片である。淡茶褐色を呈し、胎土中には角閃石、長石、橙色粒子を含む。内器面は工具ナデおよびヨコナデ、外器面はヨコナデとカキ目風のナデ調整により仕上げられる。



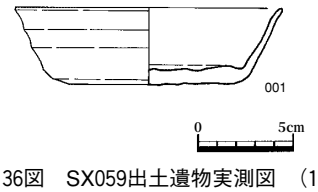
第135図　SX057出土遺物実測図　(1/4)

098SX059

098**SX**057を含む複数の遺構が切りあっている中で最も新出の遺構である。平面プランは不定円形を呈し、径0.95**m**を測る。現存深度0.70**m**を測り、暗黒茶土を遺構埋土とする。

出土遺物（第136図）

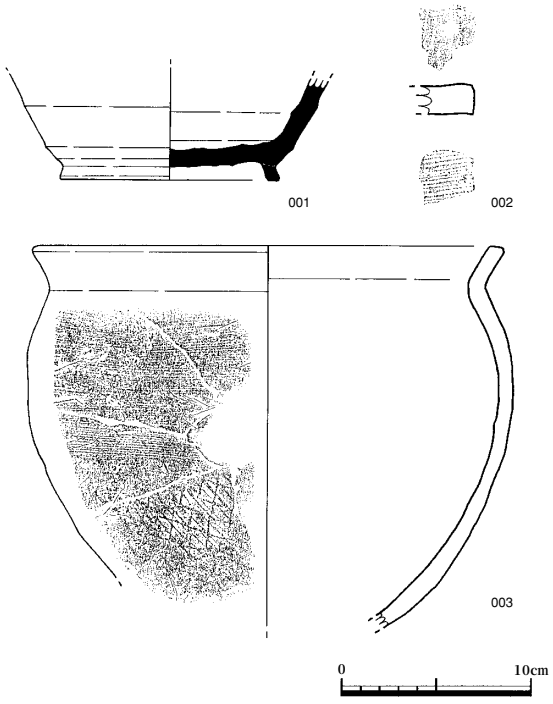
001は土師器坏**a**の完存資料である。口径14.0㎝、器高4.1㎝、底径8.6㎝を測る。底部にはヘラ切り離し痕が残り、器表面はヨコナデにより調整される。淡茶褐色を呈し、胎土中には石英、角閃石、長石を含む。



第136図　SX059出土遺物実測図　(1/4)

098SX060（第134図）

調査区の北端、098**SD**001の北側で検出した長土坑である。南端を098**SD**001に切られており、全体様相は不明である。検出面からの深さ0.36**m**を測り、掘り返しによると考えられる上下二層の埋土を確認することができる。上層、掘り返しに伴うと思われる第1層は灰色粘質土層であり、下層は暗茶褐色粘質土により構成される。



第137図　SX060出土遺物実測図　(1/4)

出土遺物（第137図）

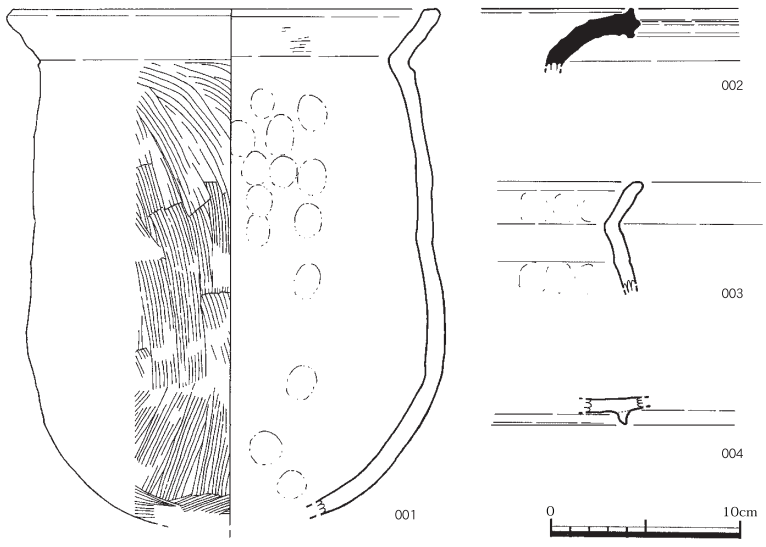
001は須恵質長頸壺の底部破片である。胴部から底部の約１／５が遺存する。底部には外方へふんばり気味の形状を呈する高台が貼付される。淡灰白色を呈し、内外面とも回転ナデ調整により仕上げられる。002は平瓦の小破片である。上面には細密な布目の痕が残り、下面にはタタキの痕跡が残る。淡灰褐色を呈し、胎土中には石英、白色粒子を含む。003は豊後大分形甕破片である。口縁部から胴部下半まで約１／２が遺存する。胴部外面下半部にはタタキ痕が明瞭に残り、上半部にはカキ目風の調整が施されている。復元口径23.6㎝を測る。

098SX061（第134図）

098SX012の下層において確認された長土坑である。検出長5.4m を測る。現状で約0.9m の深さをもち、遺構埋土は上下二層に分層可能である。特に上層は灰白色粘質土と灰黒色粘質土の混土層であり、人為的に埋め戻された土層であると判断される。底面付近には灰白色粘質土が堆積する。南端は調査区外に展開する。

出土遺物（第138図）

出土遺物には、企救型甕、豊後大分形甕、須恵質甕、土師器高台付坏破片などが出土している。001は、口径21.6㎝、胴部最大径22.0㎝を測る企救型甕である。全体の２／３が遺存する資料である。淡茶褐色を呈し、胎土中には石英、角閃石、長石、金雲母等を含む。002は須恵質壺の口縁部破片である。内面は黒灰色、外面は淡灰褐色を呈する。003は豊後大分形甕の口縁部破片である。淡茶褐色を呈し、内外面ともヨコナデにより調整される。胎土中には角閃石、長石、橙色粒子、金雲母を含む。004は土師器高台付坏の底部破片である。底部には断面三角形気味の高台が貼付される。淡橙褐色を呈し、内外面とも回転ヘラミガキにより仕上げられる。



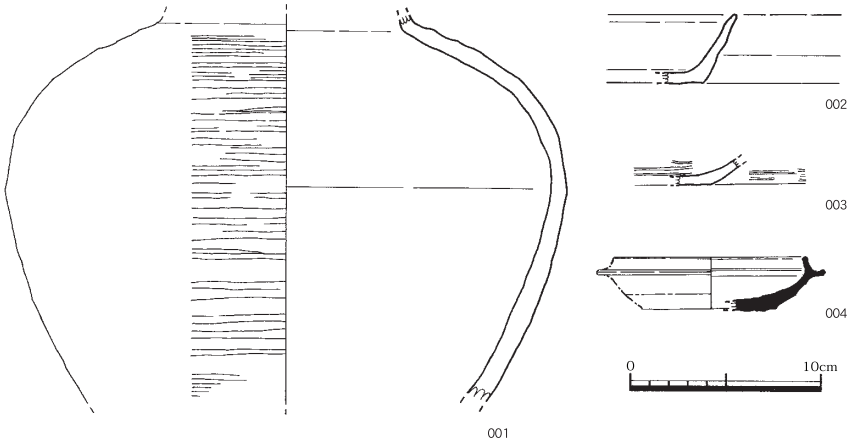
第138図　SX061 出土遺物実測図　(1/4)

098SX062

098SX003・057・059などと重複して検出した土坑である。新旧関係は新→古の順位で示すと098SX059→003→062→057となり、098SX062は003と057の機能期間の間において構築されたものであることが分かる。平面プランは上面を新出の遺構により削平されているため、詳細は不明であるが、現状で東西に長軸をもつ楕円形を呈している。現状での長軸0.63m、短軸0.48m、現存深度0.4m を測る。

出土遺物（第139図）

001は土師質壺の胴部破片である。胴部の１／２が遺存し、口縁部と底部は欠損する。内器面はナデにより調整され、外器面には回転ヘラミガキが施される。復元胴部最大径29.3㎝を測り、器内外面は淡茶褐色を呈する。002は土師器坏ａの口縁から底部の破片である。淡茶褐色を呈し、胎土中には角閃石、長石、橙色粒子を含む。003は土師器坏ｄの底部破片である。098SX062の埋土内の比較的下位において確認された。橙褐色を呈し、内外器面には回転ヘラミガキ（ミガキａ$_2$）が最終調整として施される。004は須恵器坏身破片である。陶邑編年Ⅱ型式３段階前後のものであり、６世紀前半頃の所産のものである。混入品であるが、周囲に当該期の遺構が存在することを示している。淡灰褐色を呈する。復元口径10.0㎝、器高2.8㎝を測る。



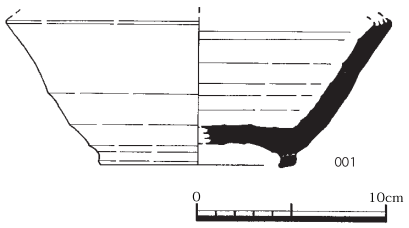
第139図　SX062出土遺物実測図　(1/4)

098SX063

調査区のほぼ中央で検出した長土坑である。098SX004・098SX056などにより切られており、南端は欠失する。現状での検出長2.6m を測る。幅0.3m、深さ0.2m である。

出土遺物（第140図）

001は須恵質長頸壺の底部破片である。内面・淡灰褐色、外面・黒灰色～淡灰褐色を呈し、内外面とも回転ナデにより調整される。復元底径10.1㎝を測る。



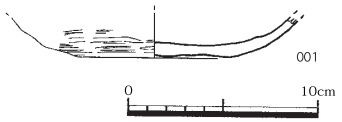
第140図　SX063出土遺物実測図　(1/4)

098SX065

調査区北端において確認された南北方向の溝状遺構である。南端を098SD001に切られ、北端は調査区外に展開する。検出長6.4m、幅0.85m、現存深度0.2m を測る。

出土遺物（第141図）

001は土師器坏ｄの底部である。外器面には回転ヘラミガキ（ミガキａ$_2$）がみられるが、内器面には最終調整としてのミガキが省略されている。胎土中には角閃石、長石、橙色粒子を含み、淡橙褐色を呈する。



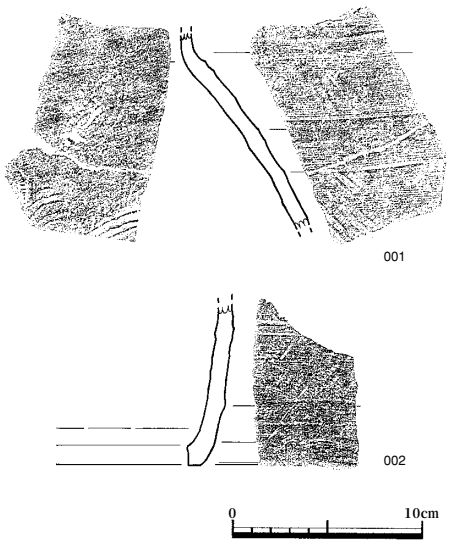
第141図　SX065出土遺物実測図　(1/4)

098SX066

調査区北半で検出した不定形の土坑群である。平面プランからも複数遺構の存在が想定されるが、遺存深度が0.04m以下であり、切りあい関係は押さえられていない。底面もほぼ同一である。

出土遺物（第142図）

001は土師質甕の胴部破片である。内面にはタタキあて具痕が残り、最終調整としてナデが施される。外器面にはタタキ痕が残り、カキ目による最終調整がなされている。内面・黄褐色、外面・橙褐色を呈し、胎土中には角閃石、橙色粒子を含む。002は、土師質甑の基部である。基部内面には明確な反りはないものの、内面端部には面取りがなされている。外器面にはタタキ痕が残る。内外面とも淡茶褐色を呈している。



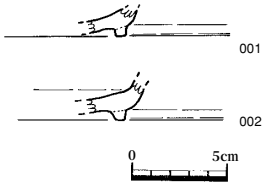
第142図　SX066出土遺物実測図　(1/4)

098SX067

調査区南端で検出した道路面の波板状凹凸面を構成する連続土坑のひとつである。現存深度0.16mを測り、断面形状は皿形を呈する。埋土は灰白色粘質土と灰茶褐色の混土層により構成される。

出土遺物（第143図）

001は土師器高台付坏の底部破片である。断面方形の角高台が貼付され、淡橙褐色を呈する。器面調整は内外面ともナデである。002も同種の土師器高台付坏である。淡茶褐色～淡橙褐色を呈し、胎土中には角閃石、長石、橙色粒子を含む。内外面ともナデにより調整される。



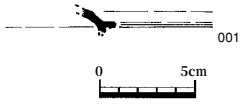
第143図　SX067出土遺物実測図
(1/4)

098SX072（第134図）

調査区南側、第２トレンチ部分において確認した楕円形状を呈する土坑である。長軸長1.1m、短軸長6.25mを測る。現状での深さ0.55mを測り、暗黄茶褐色土を遺構埋土とする。

出土土器（第144図）

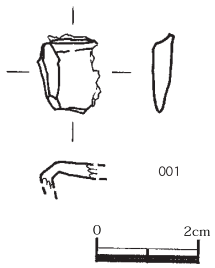
001は須恵器蓋の端部破片である。淡茶褐色を呈し、器表面は内外面ともヨコナデにより調整される。小片のため、詳細は不明であるが、端部反り部分の諸特徴から陶邑編年Ⅲ型式２段階前後のものと想定され、おおよそ７世紀中頃の所産年代が考えられる。



第144図　SX072出土遺物実測図
(1/4)

トレンチ出土遺物

協議の上、未掘のまま現状で保存することになったため、下層の状況を確認するために三ヶ所のトレンチを設定した。第１トレンチは098SD001の西側において設定し、0.8m×4.6m の規模を有する。098SD001をはじめ、多くの遺構が重複している。注目される事象としては、底面において南西方向から北東方向へ延びる溝状遺構を検出しており、出土遺物から弥生時代中期に比定される可能性が高いという点である。遺構の推定年代、規模、位置関係等から、本調査地点の南西部分にある第92次調査区等で確認されている溝（092SD300[註2]）などの延長に相当するものと考えられる。第２トレンチは、調査区の南側部分に調査区を横断する位置に設定したトレンチである。0.35m×7.9m の規模で設定している。第３トレンチは調査区南端部分に設定したトレンチである。トレンチ規模は1.3m×5.4m である。第１トレンチ、第３トレンチにおいて遺物を確認している。



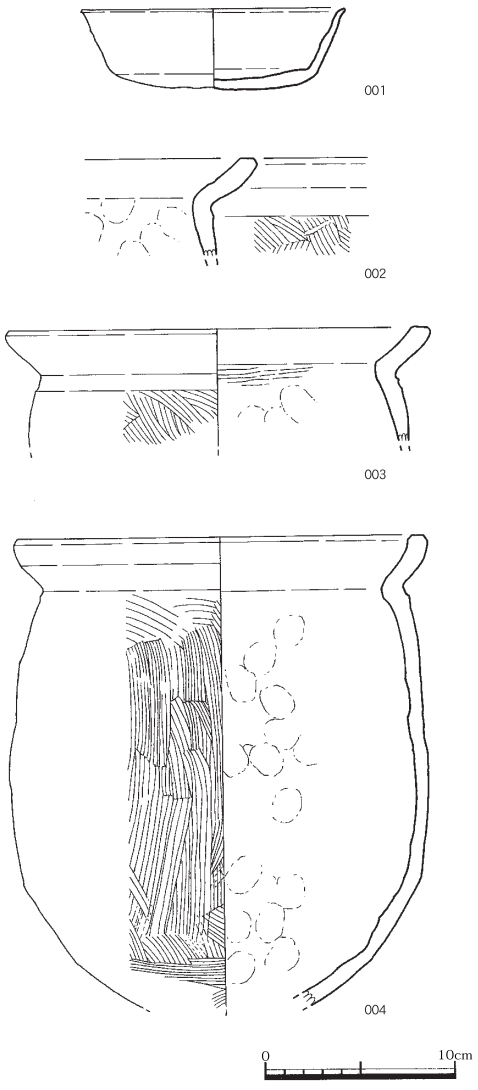
第145図　第１トレンチ出土遺物実測図 (2/3)

第１トレンチ出土遺物（第145図）

001は第１トレンチの埋土内から出土した銅製の金具片である。現状で1.5㎝×1.1㎝、厚さ0.3㎝、重量0.9g を測る。第１トレンチには SD001をはじめ、多くの遺構が錯綜しており、帰属遺構、年代等の詳細は不明である。

第３トレンチ出土遺物（第146図）

001は土師器坏ａである。口縁部の一部を欠損するが、下半はほぼ完存する。口径14.0㎝、器高4.2㎝、底径8.7㎝を呈する。底部には回転ヘラ切り離し後ナデ調整がなされ、体部および口縁部はヨコナデにより調整される。淡茶褐色を呈し、胎土中には角閃石、長石、橙色粒子を含む。002～004は企救型甕破片である。002は若干内湾気味に立ちあがる口縁断面形状を呈する資料である。胎土中には石英、角閃石、橙色粒子、金雲母を含む。003は口径22.0㎝を測る企救型甕口縁部破片である。淡橙褐色を呈する。004は淡茶褐色を呈し、外器面は粗いハケ目、内面はナデにより調整される、底部を欠損するが、全体の約２/３が遺存する資料であり、口径22.5㎝、胴部最大径22.0㎝を測る。

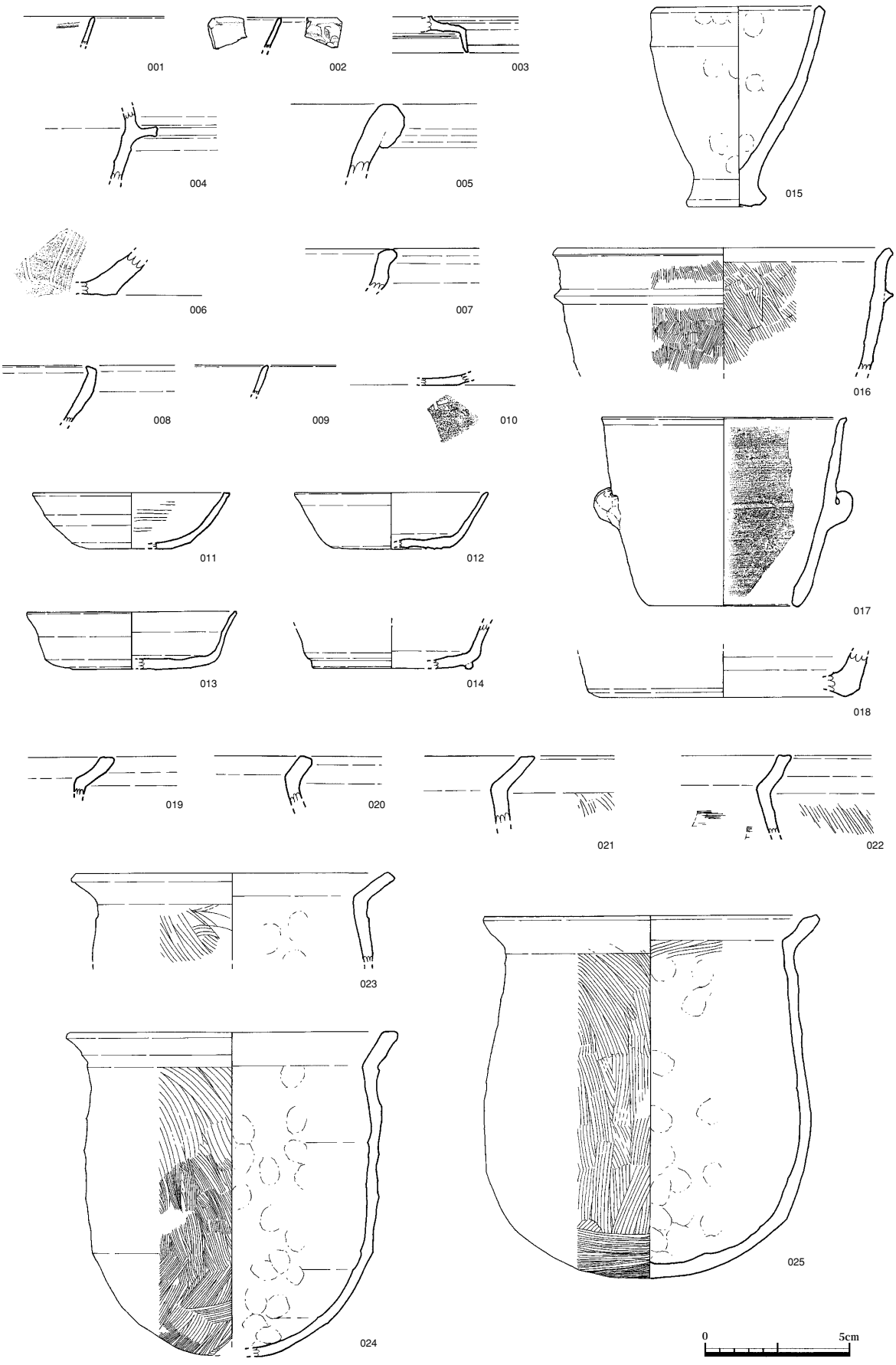


第146図　第３トレンチ出土遺物実測図　(1/4)

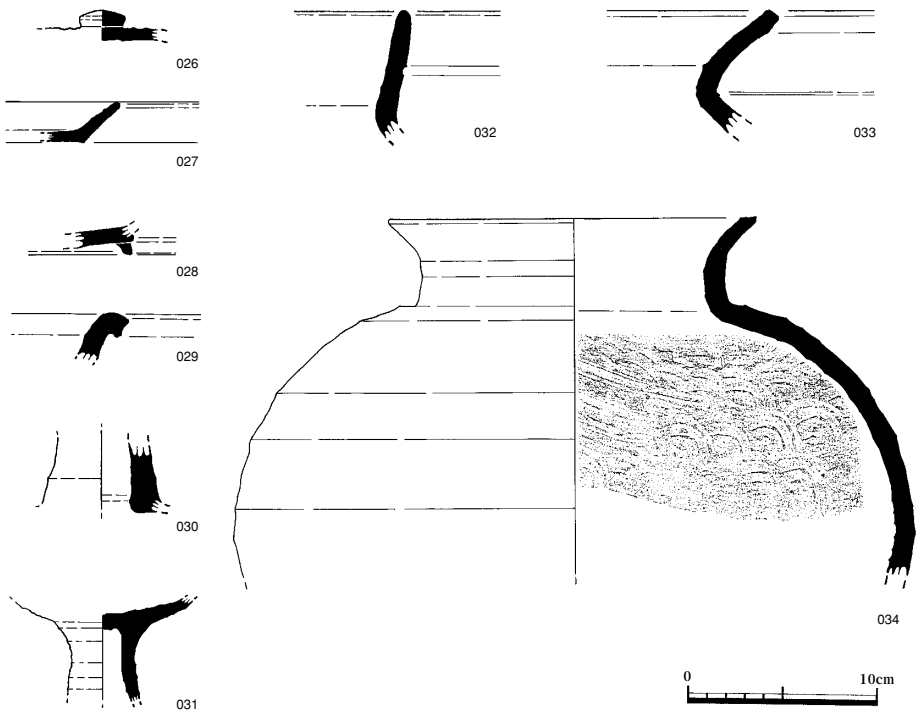
その他遺物（第147～152図）

本項目には、表土除去時に検出し、帰属する遺構を明示することができなかった遺物について図化し、掲載をおこなっている。特に遺存率の高い遺物については、先述した側溝として機能したと考えられる溝状遺構の西側部分で検出されたものも多く、想定される路面内埋土、あるいは側溝状の溝状遺構の埋土最上部に帰属するものである可能性が高いものと考えられる。

001・002は肥前系の近世陶磁器である。**001**は陶胎染付碗の口縁部破片であり、口縁部内面に圏線を施している。18世紀前半以降の所産となる。**002**は肥前系磁器碗の口縁部破片である。口縁部内面に二条の圏線を施文する。**003**は蓋の端部と考えられる資料であり、淡茶褐色を呈し、焼締めにより焼成される。産地、時期ともに不明である。**004**は羽釜の口縁部下位の胴部に相当する資料である。強いヨコナデにより整形された鍔が口縁部より若干下がった外面に貼付される。淡灰褐色を呈している。**005**は備前焼甕の口縁部破片である。口縁部は断面蒲鉾状に成形されるもので、乗岡編年中世３期に相当するものであり、15世紀前葉頃に比定される。**006**は備前焼擂鉢の底部破片である。単位６本以上の擂目が底面から放射状に配置される。**007**は玉縁状の口縁に「く」の字状に屈曲する胴部を有する土師質土器口縁部破片である。内外面ともナデにより調整される。淡茶褐色を呈し、胎土中には石英、橙色粒子を含む。器種、所産時期等に関しては不明である。**008**は内湾気味に立ちがる土師質鉢の口縁部破片である。口縁端部内面はナデにより強調されている。淡黄白色を呈し、胎土中には角閃石、長石、橙色粒子を含む。**009～013**は土師器坏破片である。**009**は土師器坏**a**の口縁部破片であり、淡赤褐色を呈する。**010**は土師器坏**a**の底部破片であり、内面・黄褐色、外面・橙褐色を呈している。破片資料のため判読は難しいが、底面には焼成前に刻まれた刻書が認められる。**011**は土師器坏**d**資料である。口縁端部は平坦に仕上げられ、外面は調整不明瞭であり、内器面には回転ヘラミガキ（ミガキ$\mathbf{a}_2$）が施されている。内外面とも淡橙褐色を呈し、胎土中には角閃石、長石、橙色粒子を含む。**012**は坏**a**資料である。全体の約１/２が遺存する。復元口径13.4㎝、器高3.8㎝、復元底径8.5㎝を測る。淡茶褐色を呈し、器内外面はナデ、底面は回転ヘラ切り離し後ナデ調整が施される。胎土中には角閃石、長石、橙色粒子を含む。**013**もまた土師器坏**a**資料である。全体の１/３が遺存し、図上復元の可能な資料である。復元口径14.4㎝、器高3.9㎝、復元底径8.0㎝を測る。淡茶褐色を呈している。**014**は土師器高台付坏資料である。器内外面はナデにより調整され、底面には体部立ち上がり部より若干内側に入った位置に低平な角高台が貼付される。淡茶褐色～淡橙褐色を呈し、胎土中には角閃石、長石、橙色粒子を含む。**015**は直立にした口縁部をもつ弥生時代中期に比定される鉢である。口径11.2㎝、器高13.8㎝、底径4.9㎝を測り、器表面は全面ナデにより仕上げられる。外方に若干開く厚手の底部形態を有し、胎土中には石英、角閃石、長石、橙色粒子を含む。**016**は外方に短く外反する口縁部外器面下位に、一条の三角突帯を貼付する弥生土器甕の破片である。淡茶褐色を呈し、胎土中には角閃石、長石、橙色粒子を含む。内外面ともハケ目により調整されるが、外面と内面では異なるハケ目原体を使用し、内面に比べ、外面には細密なハケ目が施される。**017**は豊後大分形甑破片である。口径部で全体の約１/10が遺存する資料であるが、基底部から口縁部までかろうじて遺存しており、図上復元をおこなうことができた。淡茶褐色を呈し、内面はナデ調整、外面は胴部上半部を中心にカキ目風の調整が施される。握手の形状は、一般的にみられる上方へ長く延びるタイプのものではなく、接合部で丸く納めている。握手部分には、貼付位置確認のために付けられた



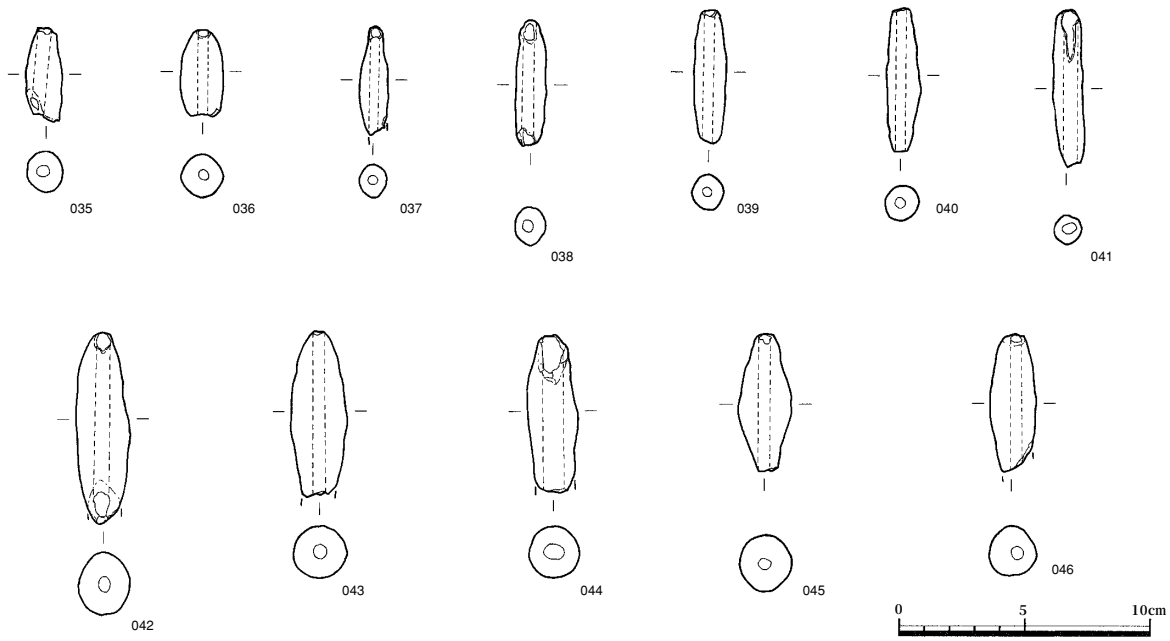
第147図　表土出土遺物実測図①　(1/4)



第148図　表土出土遺物実測図②　(1/4)

と考えられる一条の沈線が認められる。**018**は土師質甑の基底部の破片である。基底部内面に明確な反りが付けられていた状況を看取することができるが、欠損しており詳細は不明である。淡茶褐色を呈し、胎土中には角閃石、長石、橙色粒子を含む。**019～025**はいわゆる企救型甕資料である。**019**は甕の口縁部破片であり、内湾気味に立ちあがる。平坦な口縁端部を形成するタイプである。淡茶褐色を呈し、胎土中には石英、角閃石、長石、橙色粒子を含む。口縁部分に関しては強いナデにより調整される。**020**は、外方へ短く延びるタイプの企救型甕口縁部破片である。淡茶褐色を呈し、胎土中には角閃石、橙色粒子を含む。口縁端部はナデにより仕上げられる。**021**は直線的に外方へ開く口縁形態を呈する企救型甕口縁部である。淡赤褐色を呈し、胎土中には石英、角閃石、長石、緑色結晶片岩片を含む。**022**も企救型甕の口縁部破片である。外面に粗いハケ目を施した胴部から内湾気味に立ち上がり、外面には稜を有し、段を形成する。淡茶褐色を呈し、胎土中に石英、角閃石、長石、橙色粒子を含む。**023**は淡茶褐色を呈する企救型甕口縁部である。口縁部約１/３が遺存し、復元口径21.4cmを測る。胎土中には石英、角閃石、長石、橙色粒子を含む。**024**も企救型甕の範疇で捉えられる甕資料であり、全体の１/２が遺存する。他の企救型甕の全体形状は、底部付近が下膨れ気味になるのが一般的であるが、本資料は、底部が凸レンズ状に成形される点が大きく異なり、器形の上で違和感を醸している。また、外器面のハケ目調整は他の資料と共通する属性であり、上半部の粗い斜め方向のハケ目は通有のものである。しかし、下半部を細密なハケ目により最終的に調整しており、このような状況は一般的な企救型甕には認められない。口径22.4cm、復元胴部最大径20.2cmを測り淡茶褐色～淡橙褐色を呈する。**025**は全体の約３/４が残る最も遺存率の高い資料である。口径23.0cm、器高25.1cm、胴部最大径22.6cmを測る。淡茶褐色を呈し、胎土中には石英、角閃石、長石、緑色結晶片岩片を内包する。

026は須恵器蓋のツマミ部分の破片である。扁平な宝珠形をなし、淡灰褐色を呈する。内外面とも



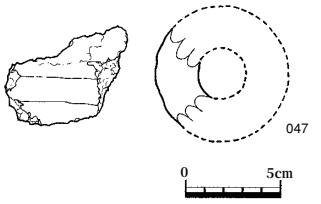
第149図　表土出土遺物実測図③　(1/3)

ナデにより仕上げられる。027は須恵器坏破片である、平底の底部から外反気味に開く体部を有する。器表面はナデにより仕上げられ、淡茶褐色～暗緑灰色を呈する。028は須恵器高台付坏の底部破片である。淡灰褐色を呈し、断面台形の高台が貼付される。029は須恵質甕の口縁部破片である。暗灰色を呈している。030は須恵器高坏の脚部破片である。内外面とも回転ナデにより調整され、淡灰白色を呈する。031は須恵器高坏の脚接合部の破片である。淡灰褐色～暗灰色を呈し、内外面とも回転ナデにより調整される。032は須恵質壺の口縁部破片である。端部が丸く納められ、内外面とも回転ナデにより最終調整がなされている。内面・暗緑褐色、外面・淡灰褐色を呈している。033は須恵質壺の口縁部破片である。頸部から直線的に延びる口縁部の端部は面取りがなされ、ナデにより調整される。034もまた須恵質壺である。口縁部から胴部上半にかけて約１/２が遺存する。外器面はナデ、内器面には同心円状のタタキあて具痕が残る。内外面とも暗茶褐色～黒灰色を呈し、復元口径19.2㎝を測る。

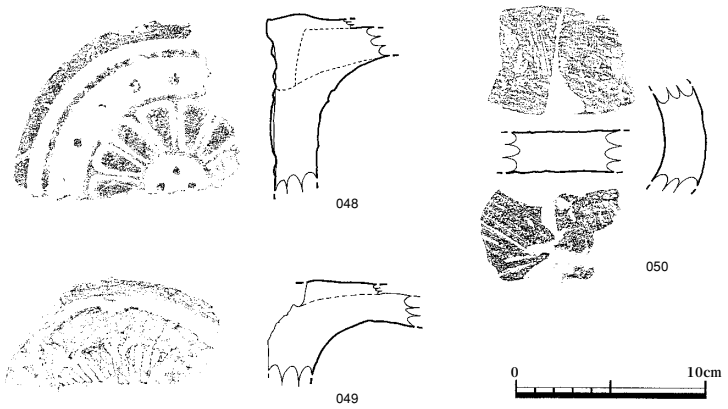
035～046は調査区内から出土した土錘である。035は淡茶褐色を呈する土錘片であり、両端を欠損する。胎土中には角閃石、橙色粒子を含む。036もまた淡茶褐色を示す土錘片である。現存重量8.0gを測る。037は胎土中に角閃石、橙色粒子を含み、全面ナデにより仕上げられる。現存重量4.5gを測る。038は両端の一部を欠損する土錘である。現存長4.9㎝、現存重量8.0gを測る。039は今回の出土資料の中では数少ない完存品である。現存長5.2㎝、重量7.4gを測る。胎土中には角閃石を含む。040も完存資料のひとつである。細身の形態、法量ともに039に類似する。淡灰褐色を呈し、重量9.0gを測る。器面調整はナデによるものである。041も細身の土錘であり、淡橙褐色を呈する。胎土中には長石、白色粒子を含み、重量7.7gを測る。042～046は一回り大きい土錘の一群である。042は淡茶褐色を呈し、角閃石、長石、橙色粒子を含む。端部両端を欠損し、現存重量31.5gを測る。043は淡橙褐色を呈し、全面ナデにより仕上げられる。現存重量23.5gを測る。044は筒形をなすタイプの土錘片である。片面端部を欠損する。淡茶褐色を呈し、現存重量20.5gを測る。045は紡錘形を呈す

る土錘片である。ナデにより調整される器表面は淡茶褐色を呈し、胎土中には角閃石、橙色粒子、金雲母を含む。端部の一部を僅かに欠損し、現存重量16.7g を測る。**046**も土師質の土錘片であり、淡茶褐色を呈する。胎土中には角閃石、長石を含み、現存重量15.6g を測る。

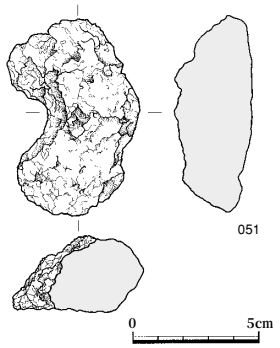
047はフイゴの羽口片である。全周の約１/６が遺存する。淡橙褐色を呈し、外器面には面取りの痕跡が認められる。器表面はナデにより仕上げられ、胎土中には角閃石、長石、橙色粒子を含む。



第150図　表土出土遺物実測図④ (1/4)



第151図　表土出土遺物実測図⑤　(1/4)



第152図　表土出土遺物実測図⑥　(1/3)

048～050は瓦破片である。**048**は軒丸瓦の瓦当部破片である。淡茶褐色を呈する。遺存する部分から豊後国分寺跡の瓦分類Ⅱ類[註3]に類似し、８世紀後半頃の所産年代が考えられる。

049もまた軒丸瓦の破片資料である。暗灰色を呈する。

050は平瓦破片である。小破片のため詳細は不明であるが、淡茶褐色を呈し外面には布目痕が認められる。

051は材質が軽石の石製加工品である。両端を欠損しており、全容は不明であるが、遺存部の状況からドーナツ状を呈していた可能性が指摘できる。用途等は不明である。

第36表　遺物観察表①

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
098**SD**001-001	118	陶磁器												別表
098**SD**001-002	118	須恵質	壺	白色粒子	淡灰褐色	淡灰褐色	回転ナデ	回転ナデ					口縁部片	
098**SD**001-003	118	陶磁器												別表
098**SD**001-004	119	石製品												別表
098**SD**002-001	120	土師器	坏	長石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ	ナデ ヘラ切り 離し		2.3			全体1／4	
098**SD**002-002	120	土師質	甕	角閃石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ	ナデ					口縁部片	
098**SD**002-003	120	須恵器	坏	角閃石 長石 白色粒子	黒褐色	淡灰褐色	ナデ	ナデ ヘラ切り 離し	(10.6)	2.8		(7.8)	全体1／4	
098**SD**002-004	120	瓦質土器	鉢	長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ	ナデ 指オサエ					口縁部片	
098**SD**002-005	120	陶磁器												別表
098**SD**002-006	120	陶磁器												別表
098**SD**002-007	120	土錘												別表
098**SD**002-008	120	土錘												別表
098**SX**003-001	121	須恵質	甕	長石 白色粒子	淡灰褐色	暗灰色～ 淡灰褐色	ヨコナデ あて具痕	ヨコナデ					口縁部片	
098**SX**003-002	121	土師質	甕	石英 角閃石 長石 緑色結晶 片岩片	淡茶褐色	淡茶褐色 ～赤褐色	ナデ ヨコナデ 指オサエ	ハケ目 ヨコナデ	21.8	26.5	22.0		全体3／4	企救型 ハケ目（7～8本／cm） スス
098**SX**004-001	122	土師器	坏	角閃石 長石	淡橙褐色	淡茶褐色 ～淡橙褐色	ナデ	ナデ		1.8			口縁部片	都城系 暗文
098**SX**004-002	122	土師器	坏	角閃石 長石 橙色粒子	淡橙褐色	淡茶褐色	回転ヘラ ミガキ	回転ヘラ ミガキ					口縁部片	
098**SX**004-003	122	土師器	坏	角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ヨコナデ	ヨコナデ					口縁部片	
098**SX**004-004	122	土師器	坏	石英 角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ヨコナデ	ヨコナデ 回転ヘラ 切り離し	14.2	4.0		10.3	ほぼ完存	
098**SX**004-005	122	須恵器	高台付坏	石英	灰白色	灰白色	ハケナデ	ヨコナデ 回転ナデ				(15.0)	底部3／4	
098**SX**004-006	122	土師質	鉢	石英 角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ヨコナデ	ナデ ヨコナデ					口縁部片	
098**SX**004-007	122	土師質	鉢	角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ヨコナデ	ナデ ヨコナデ					口縁部片	
098**SX**004-008	122	土師質	鉢	角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ	カキ目 ヨコナデ					口縁部片	
098**SX**004-009	122	土師質	鉢	角閃石 長石 橙色粒子 金雲母	淡茶褐色	橙褐色	ナデ ヨコナデ	ナデ ヨコナデ	(26.0)				口縁部～ 胴部1／3	
098**SX**004-010	122	土師質	甕	角閃石 長石 橙色粒子 緑色結晶 片岩片	淡茶褐色	淡茶褐色	ヨコナデ 指オサエ	ヨコナデ					口縁部片	
098**SX**004-011	122	土師質	甕	角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ	ハケ目 ナデ 指オサエ					口縁部片	企救型 ハケ目（5～6本／cm）
098**SX**004-012	122	土師質	甕	角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ	ハケ目 ナデ 指オサエ					口縁部片	企救型 ハケ目（4～5本／cm）
098**SX**004-013	122	須恵器	高台付坏	長石 白色粒子	淡灰白色	淡灰白色	ナデ	ナデ ヘラ切り 離し後ナデ				(10.4)	底部片	
098**SX**005-001	126	土師器	坏	角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	淡橙褐色	回転ヘラ ミガキ	回転ヘラ ミガキ		3.2			全体片	
098**SX**005-002	126	土師器	高台付坏	角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	回転ヘラ ミガキ	ナデ 回転ヘラ ミガキ	(12.0)	3.7		(7.2)	全体1／4	

第37表　遺物観察表②

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
098**SX**005-003	126	土師質	鉢	角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	淡橙褐色	ナデ	ナデ ヨコナデ					口縁部片	
098**SX**005-004	126	土師質	甕	石英 長石 白色粒子 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ 指オサエ	ハケ目 ナデ					口縁部片	企救型 ハケ目（3本／cm）
098**SX**005-005	126	土師質	甕	角閃石 長石 橙色粒子 緑色結晶片岩片	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ 指オサエ	ハケ目 ナデ					口縁部片	企救型 ハケ目（5～7本／cm）
098**SX**005-006	126	土師質	甕	角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ヨコナデ 指オサエ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	企救型 ハケ目（4本／cm）
098**SX**005-007	126	土師質	甕	石英 角閃石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ 指オサエ	ハケ目	(21.6)	23.0	(19.9)		全体1／6	企救型 ハケ目（3～4本／cm）
098**SX**005-008	126	土師質	甕	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡赤褐色	淡赤褐色	ナデ 指オサエ	ハケ目 ナデ	(22.0)	26.0	(20.6)		全体1／2	企救型 ハケ目（7～8本／cm）
098**SX**005-009	126	弥生	鉢	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ ハケナデ 指オサエ	ヨコナデ ハケ目後 ナデ	16.7	9.6		(5.4)	全体3／4	黒斑
098**SX**005-010	126	須恵質	長胴壺	長石 白色粒子	暗茶褐色 ～淡灰黒色	灰白色～ 灰黒色	回転ナデ	ナデ カキ目 ヨコナデ タタキ タタキ後 ヨコナデ			21.3	9.5	頸部～胴部完存	
098**SX**010-001	127	須恵質	長頸壺	長石 白色粒子	淡灰褐色	淡灰褐色	ナデ ヨコナデ	ヨコナデ					底部片	
098**SX**012-001	128	土師質	鉢	角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ	ヨコナデ					口縁部～胴部片	
098**SX**012-002	128	須恵質	甕	石英 角閃石 白色粒子	淡灰白色	淡灰白色	あて具痕	カキ目 タタキ	(19.5)				口縁部片	
098**SX**012-003	129	石製品												別表
098**SX**038-001	130	須恵器	蓋	白色粒子	淡灰褐色	淡灰褐色	回転ナデ	回転ヘラケズリ 回転ナデ					口縁部片	
098**SX**039-001	131	須恵質	長頸壺	白色粒子 橙色粒子	淡灰褐色	淡灰褐色	回転ナデ	回転ナデ					底部片	
098**SX**055-001	132	土師質	甑	角閃石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ	ナデ カキ目風 ナデ					口縁部片	
098**SX**055-002	132	土師質	甑	角閃石 長石 橙色粒子 金雲母	淡橙褐色	淡橙褐色	ナデ ヘラケズリ あて具痕	ハケ目 ナデ タタキ					底部片	ハケ目（9～10本／cm）
098**SX**055-003	132	土師質	甕	石英 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ 工具ナデ ハケ目後 ナデ 指オサエ	ハケ目 ナデ					口縁部片	企救型 ハケ目（4本／cm）
098**SX**056-001	133	土師器	蓋	角閃石 長石 橙色粒子 金雲母	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ	回転ヘラミガキ					全体1／5	
098**SX**056-002	133	土師器	坏	角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ	ナデ					口縁部～体部片	
098**SX**056-003	133	土師器	坏	角閃石 長石 橙色粒子 金雲母	淡茶褐色 ～淡橙褐色	淡茶褐色 ～淡橙褐色	ナデ ヨコナデ	ナデ ヨコナデ	(12.8)	3.5		(9.7)	全体1／4	
098**SX**056-004	133	土師器	高台付坏	石英 角閃石 白色粒子 橙色粒子	淡橙褐色	淡橙褐色	回転ヘラミガキ	回転ヘラミガキ		4.2			全体1／5	
098**SX**056-005	133	土師器	高台付坏	角閃石 長石 橙色粒子	淡橙褐色	淡橙褐色	回転ヘラミガキ	ナデ					底部片	
098**SX**056-006	133	土師器	高台付坏	角閃石 長石	淡橙褐色	淡橙褐色	ナデ	ナデ				(11.9)	底部1／4	
098**SX**056-007	133	土師器	高坏	角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色 ～淡灰褐色	ミガキ	ミガキ					坏～脚部の接合部片	
098**SX**056-008	133	土師質	甕	角閃石 長石 橙色粒子	淡橙褐色	淡橙褐色	ナデ	ナデ					口縁部片	企救型

第38表　遺物観察表③

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
098**SX**056-009	133	土師質	甕	角閃石 長石 橙色粒子 緑色結晶片岩片	淡橙褐色	淡橙褐色	ナデ 指オサエ	ハケ目 ナデ					口縁部片	企救型 ハケ目（３～４本／cm）
098**SX**056-010	133	土師質	甕	角閃石 長石	淡橙褐色	淡灰白色	ナデ 指オサエ	ハケ目 ナデ					口縁部片	企救型 ハケ目（３～５本／cm） 黒斑
098**SX**056-011	133	土師質	甕	石英 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ 指オサエ	ハケ目 ハケ目後ナデ					口縁部片	企救型 ハケ目（５本／cm）
098**SX**056-012	133	須恵器	高坏	角閃石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色～淡灰褐色	回転ナデ	回転ナデ					脚部上半部完存	
098**SX**056-013	133	須恵器	高台付坏	白色粒子	淡茶褐色～淡橙褐色	淡茶褐色～淡橙褐色	ナデ	ナデ				(9.4)	底部片	
098**SX**057-001	135	土師質	甕	角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	工具ナデ ヨコナデ	ヨコナデ カキ目風ナデ					口縁部～胴部片	豊後大分形
098**SX**059-001	136	土師器	坏	石英 角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ヨコナデ	ヨコナデ ヘラ切り離し	14.0	4.1		8.6	完存	
098**SX**060-001	137	須恵質	長頸壺	石英 角閃石 長石	淡灰褐色	淡灰白色	ナデ 回転ナデ	ナデ 回転ナデ				(11.5)	胴部～底部１／５	
098**SX**060-002	137	瓦	平瓦	石英 白色粒子	淡灰褐色	淡灰褐色	布目 タタキ						一部片	
098**SX**060-003	137	土師質	甕	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色～淡赤褐色	ヨコナデ	カキ目風 タタキ後ナデ	(23.6)				口縁部～胴部１／２	豊後大分形
098**SX**061-001	138	土師質	甕	石英 角閃石 長石 金雲母	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ハケ目後ナデ 指オサエ	ハケ目 ナデ	21.6		22.0		口縁部～胴部２／３	企救型 ハケ目（４・６本／cm）
098**SX**061-002	138	須恵質	壺	石英 長石 白色粒子	黒灰色	淡灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ					口縁部片	
098**SX**061-003	138	土師質	甕	角閃石 長石 橙色粒子 金雲母	淡茶褐色	淡茶褐色	ヨコナデ 指オサエ	ヨコナデ					口縁部片	豊後大分形
098**SX**061-004	138	土師器	高台付坏	橙色粒子	淡橙褐色	淡橙褐色	回転ヘラミガキ	回転ヘラミガキ					底部片	
098**SX**062-001	139	土師質	壺	角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ヨコナデ	回転ヘラミガキ			(29.3)		胴部１／２	
098**SX**062-002	139	土師器	坏	角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ヨコナデ	ナデ		3.5			全体１／５	
098**SX**062-003	139	土師器	坏	角閃石 橙色粒子	橙褐色	橙褐色	回転ヘラミガキ	ヘラ切り離し後ミガキ 回転ヘラミガキ					底部片	
098**SX**062-004	139	須恵器	坏	長石 白色粒子	淡灰褐色	淡灰褐色	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ ヘラ切り離し後ナデ	(10.0)	2.8		(7.0)	全体１／４	
098**SX**063-001	140	須恵質	長頸壺	白色粒子	淡灰褐色	黒灰色～淡灰褐色	ナデ 回転ナデ	ナデ 回転ナデ				(10.1)	胴部～底部１／３	
098**SX**065-001	141	土師器	坏	角閃石 長石 橙色粒子	淡橙褐色	淡橙褐色	ナデ	回転ヘラミガキ				8.1	底部のみ	
098**SX**066-001	142	土師質	甕	角閃石 橙色粒子	黄褐色	橙褐色	ナデ 指オサエ あて具痕	カキ目 タタキ後カキ目					胴部片	
098**SX**066-002	142	土師質	甑	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ 面取り	ヨコナデ 後タタキ					底部片	
098**SX**067-001	143	土師器	高台付坏	角閃石 長石 橙色粒子	淡橙褐色	淡橙褐色	ナデ	ナデ					底部片	
098**SX**067-002	143	土師器	高台付坏	角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色～淡橙褐色	ナデ	ナデ					底部片	
098**SX**072-001	144	須恵器	蓋	石英 白色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ヨコナデ	ヨコナデ					口縁部片	

第39表　遺物観察表④

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
098**T**001-001	145	金属製品												別表
098**T**003-001	146	土師器	坏	角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ヨコナデ	ヨコナデ 回転ヘラ切り離し後ナデ	14.0	4.2		8.7	ほぼ完存	
098**T**003-002	146	土師質	甕	石英 角閃石 橙色粒子 金雲母	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ 指オサエ	ナデ ヨコナデ ハケ目					口縁部片	企救型 ハケ目（3～4本／cm）
098**T**003-003	146	土師質	甕	石英 角閃石 橙色粒子	淡橙褐色	淡橙褐色	ヨコナデ ハケ目後ナデ 指オサエ	ハケ目 ヨコナデ	22.0				口縁部3／4	企救型 ハケ目（4～5本／cm） スス
098**T**003-004	146	土師質	甕	石英 角閃石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ 指オサエ	ハケ目 ナデ	22.5		(22.0)		口縁部～胴部2／3	企救型 ハケ目（4・5～6本／cm）
098**SZ**000-001	147	陶磁器												別表
098**SZ**000-002	147	陶磁器												別表
098**SZ**000-003	147	陶磁器												別表
098**SZ**000-004	147	瓦質	羽釜	白色粒子	淡灰褐色	淡灰褐色	ナデ	ナデ ヨコナデ					胴部片	
098**SZ**000-005	147	陶磁器												別表
098**SZ**000-006	147	陶磁器												別表
098**SZ**000-007	147	土師質	不明	石英 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ	ナデ					口縁部片	
098**SZ**000-008	147	土師質	鉢	角閃石 長石 橙色粒子	淡黄白色	淡黄白色	ナデ	ナデ					口縁部片	
098**SZ**000-009	147	土師器	坏	角閃石 橙色粒子	淡赤褐色	淡赤褐色	ナデ	ナデ					口縁部片	
098**SZ**000-010	147	土師器	坏	角閃石 長石 橙色粒子	黄褐色	橙褐色	ナデ	ナデ					底部片	刻書
098**SZ**000-011	147	土師器	坏	角閃石 長石 橙色粒子	淡橙褐色	淡橙褐色	回転ヘラミガキ	不明瞭	(13.5)	3.8		(5.6)	全体1／5	
098**SZ**000-012	147	土師器	坏	角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ヨコナデ	ヨコナデ 回転ヘラ切り離し後ナデ	(13.4)	3.8		(8.5)	全体1／2	
098**SZ**000-013	147	土師器	坏	角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ヨコナデ	ナデ ヨコナデ ヘラ切り離し後ナデ	(14.4)	3.9		(8.0)	全体1／3	
098**SZ**000-014	147	土師器	高台付坏	角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色～淡橙褐色	ナデ ヨコナデ	ナデ				(10.8)	底部片	
098**SZ**000-015	147	弥生	鉢	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色～橙色	淡茶褐色	ナデ 指オサエ	ナデ 指オサエ	11.2	13.8		4.9	ほぼ完存	
098**SZ**000-016	147	弥生	甕	角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ハケ目 ナデ	ハケ目 ナデ ヨコナデ	(23.0)				口縁部～胴部片	ハケ目（内面5～6本　外面5～6・9～10本／cm）
098**SZ**000-017	147	土師質	甑	角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ 指オサエ	カキ目風	(16.8)	12.9			全体片	豊後大分形
098**SZ**000-018	147	土師質	甑	角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ	ナデ				(16.8)	底部片	
098**SZ**000-019	147	土師質	甕	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ	ナデ					口縁部片	企救型
098**SZ**000-020	147	土師質	甕	角閃石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ	ナデ					口縁部片	企救型
098**SZ**000-021	147	土師質	甕	石英 角閃石 長石 緑色結晶片岩片	淡赤褐色	淡赤褐色	ナデ	ハケ目 ナデ					口縁部片	企救型 ハケ目（4～5本／cm）
098**SZ**000-022	147	土師質	甕	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ 工具ナデ	ハケ目 ナデ					口縁部片	企救型 ハケ目（4～5本／cm）

第40表　遺物観察表⑤

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
098**SZ**000-023	147	土師質	甕	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ヨコナデ 指オサエ	ハケ目 ヨコナデ	(21.4)				口縁部1／3	企救型 ハケ目（4本／cm）
098**SZ**000-024	147	土師質	甕	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色 ～淡橙褐色	ナデ ヨコナデ 指オサエ	ハケ目 ヨコナデ	22.4		(20.2)		全体1／2	企救型 ハケ目（3・7～8・9本／cm）
098**SZ**000-025	147	土師質	甕	石英 角閃石 長石 緑色結晶片岩片	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ハケ目後ナデ 指オサエ	ハケ目 ナデ	23.0	25.1	22.6		全体3／4	企救型 ハケ目（4～5本／cm）
098**SZ**000-026	148	須恵器	蓋	白色粒子 橙色粒子	淡灰褐色	淡灰褐色	ナデ	ナデ	2.5				ツマミ部片	※口径はツマミ径
098**SZ**000-027	148	須恵器	坏	白色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色 ～暗緑灰色	ナデ	ナデ		2.2			全体片	
098**SZ**000-028	148	須恵器	高台付坏	白色粒子	淡灰褐色	淡灰褐色	ナデ	ヨコナデ					底部片	
098**SZ**000-029	148	須恵質	甕	長石 白色粒子	淡灰褐色	暗灰色	ナデ	ナデ 回転ナデ					口縁部片	
098**SZ**000-030	148	須恵器	高坏	白色粒子 橙色粒子	淡灰褐色	淡灰白色	回転ナデ	回転ナデ					脚部片	
098**SZ**000-031	148	須恵器	高坏	白色粒子	暗灰色	淡灰褐色 ～暗灰色	回転ナデ	回転ナデ					坏底部～脚上部片	
098**SZ**000-032	148	須恵質	壺	長石 白色粒子 橙色粒子	暗緑褐色	淡灰褐色	回転ナデ	回転ナデ					口縁部片	
098**SZ**000-033	148	須恵質	壺	白色粒子	淡灰褐色	淡灰褐色 ～暗灰色	ナデ 回転ナデ	ナデ 回転ナデ 面取り					口縁部片	
098**SZ**000-034	148	須恵質	壺	石英 長石 白色粒子	暗茶褐色 ～黒灰色	暗茶褐色 ～黒灰色	ヨコナデ あて具痕	ナデ ヨコナデ	(19.2)				口縁部～胴上半部1／2	
098**SZ**000-035	149	土錘												別表
098**SZ**000-036	149	土錘												別表
098**SZ**000-037	149	土錘												別表
098**SZ**000-038	149	土錘												別表
098**SZ**000-039	149	土錘												別表
098**SZ**000-040	149	土錘												別表
098**SZ**000-041	149	土錘												別表
098**SZ**000-042	149	土錘												別表
098**SZ**000-043	149	土錘												別表
098**SZ**000-044	149	土錘												別表
098**SZ**000-045	149	土錘												別表
098**SZ**000-046	149	土錘												別表
098**SZ**000-047	150		羽口	角閃石 長石 橙色粒子	淡橙褐色	淡橙褐色	ナデ	ナデ 面取り					全周1／6	
098**SZ**000-048	151	瓦	軒丸瓦		淡茶褐色	淡茶褐色							瓦当部分の1／4	
098**SZ**000-049	151	瓦	軒丸瓦		暗灰色	暗灰色							一部片	
098**SZ**000-050	151	瓦	平瓦	橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色		布目					一部片	
098**SZ**000-051	152	石製品												別表

第41表　陶磁器観察表

遺物番号	挿図番号	器種		装飾		法量（cm）			産地	備考
		種類	器種	絵付 釉薬	文様	口径	器高	底径		
098**SD**001-001	118	磁器	碗	青花	内 圏線				中国産	漳州窯系
098**SD**001-003	118	焼締	壺						備前	回転ナデ
098**SD**002-005	120	磁器	皿	青花	内 圏線			(6.0)	中国産	内底･落款 高台内部にカンナ削り
098**SD**002-006	120	焼締	擂鉢						備前	擂り目･ヨコナデ乗岡編年中世5期
098**SZ**000-001	147	陶器	碗	染付	内 圏線				肥前系	陶胎染付
098**SZ**000-002	147	磁器	碗	染付	内 圏線 外 草花				肥前系	
098**SZ**000-003	147	焼締	蓋							
098**SZ**000-005	147	焼締	甕						備前	乗岡編年中世3期
098**SZ**000-006	147	焼締	擂鉢						備前	擂り目

第42表　土錘観察表

遺物番号	挿図番号	器種	胎土	法量（cm）			備考
		種類		長さ	径	重さ（g）	
098**SD**002-007	120	土錘	角閃石 長石	4.4	1.2	5.4	完存
098**SD**002-008	120	土錘	角閃石 長石 橙色粒子	(4.4)	1.6	(9.7)	
098**SZ**000-035	149	土錘	角閃石 橙色粒子	(3.7)	1.6	(7.1)	
098**SZ**000-036	149	土錘	角閃石	(3.4)	1.6	(8.0)	
098**SZ**000-037	149	土錘	角閃石 橙色粒子	4.3	1.3	(4.5)	
098**SZ**000-038	149	土錘	角閃石 橙色粒子	4.9	1.5	(8.0)	
098**SZ**000-039	149	土錘	角閃石	5.2	1.4	7.4	完存
098**SZ**000-040	149	土錘	角閃石 長石	5.6	1.4	9.0	完存
098**SZ**000-041	149	土錘	長石 白色粒子	6.1	1.2	(7.7)	
098**SZ**000-042	149	土錘	角閃石 長石 橙色粒子	7.5	2.5	(31.5)	
098**SZ**000-043	149	土錘	角閃石 長石 橙色粒子	6.5	2.1	(23.5)	
098**SZ**000-044	149	土錘	角閃石 長石 橙色粒子	(6.2)	2.0	(20.5)	
098**SZ**000-045	149	土錘	角閃石 橙色粒子 金雲母	5.4	2.1	(16.7)	
098**SZ**000-046	149	土錘	角閃石 長石	5.4	1.9	(15.6)	

第43表　金属製品観察表

遺物番号	挿図番号	器種	素材	法量（cm）				備考
		種類		長さ	幅	厚さ	重さ（g）	
098**T**001-001	145	金具	銅	1.5	(1.1)	0.3	(0.9)	一部片

第44表　石器観察表

遺物番号	挿図番号	器種	石材	法量（cm）				備考
		種類		長さ	幅	厚さ	重さ（g）	
098**SD**001-004	119	石斧	安山岩	(7.3)	(4.4)	1.5	(80.5)	磨製石斧
098**SX**012-003	129	加工品	軽石	(5.2)	(3.8)	(2.1)	(13.3)	
098**SZ**000-051	152	加工品	軽石	(7.7)	(3.2)	(3.0)	(43.9)	

第３節　下郡遺跡群第99次調査地点

（１）はじめに

今回の調査は、平成７年度に調査を実施した第69次、および先述した第98次調査と同様に区画街路・下郡南北線の築造に伴う事前調査としておこなったものである。当調査区は第69次調査区の南側隣接地に相当し、下郡遺跡群Ｄ区 q−17・18地点に相当する。313㎡を対象に平成９年11月１日～12月26日に第98次調査と並行して調査を実施した。調査の結果、８世紀中頃～９世紀に比定される道路状遺構を確認した。最終的には遺構の重要性にかんがみ完掘は行わず、現状のまま約30㎝の砂を遺構保護層として被覆し、道路下に盛土による保存措置を実施している。このような経緯から遺構の掘り下げは最小限に留め、近世以降のものと推定される東西溝、道路側溝と想定される長土坑状、波板状凹凸面と呼称される連続土坑の一部のみを対象としている。そうした作業の上で第１から第３の三地点にトレンチを設定し、下層の状況を確認している。

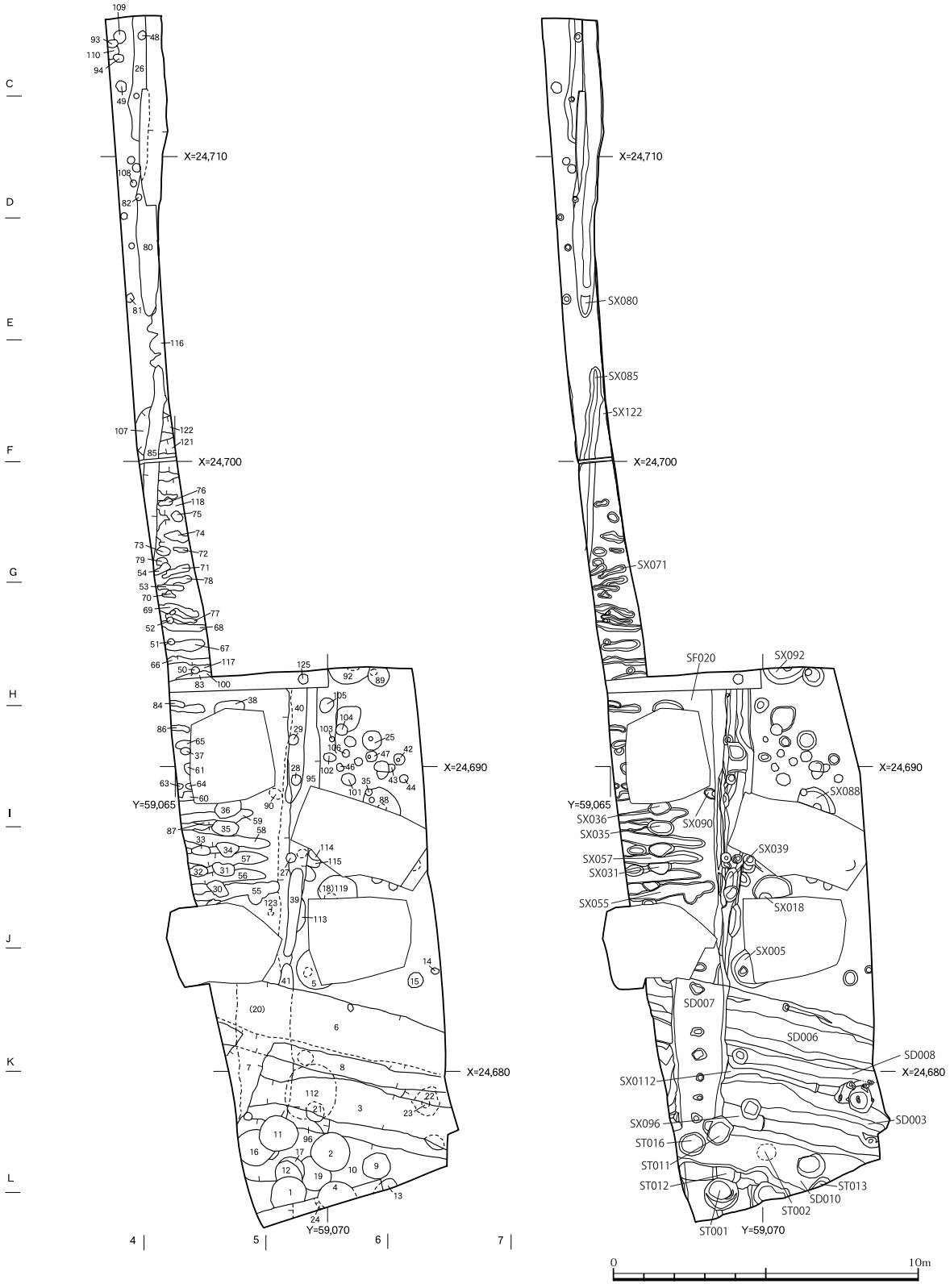
（２）土層

表土を除去すると暗黒色粘質土が現れ、この土層の上面において遺構を検出することができる。本層は無遺物層であり、基盤を形成するものである。当該土層の下位には黄黒色粘質土層が存在するがいずれも無遺物層であり基盤土層となるものである。第98次調査の所見と同様に道路部分は周囲に対して溝状に掘りこみ形成しており、この一段低く掘りくぼめられて使用されていた状況が看取される。

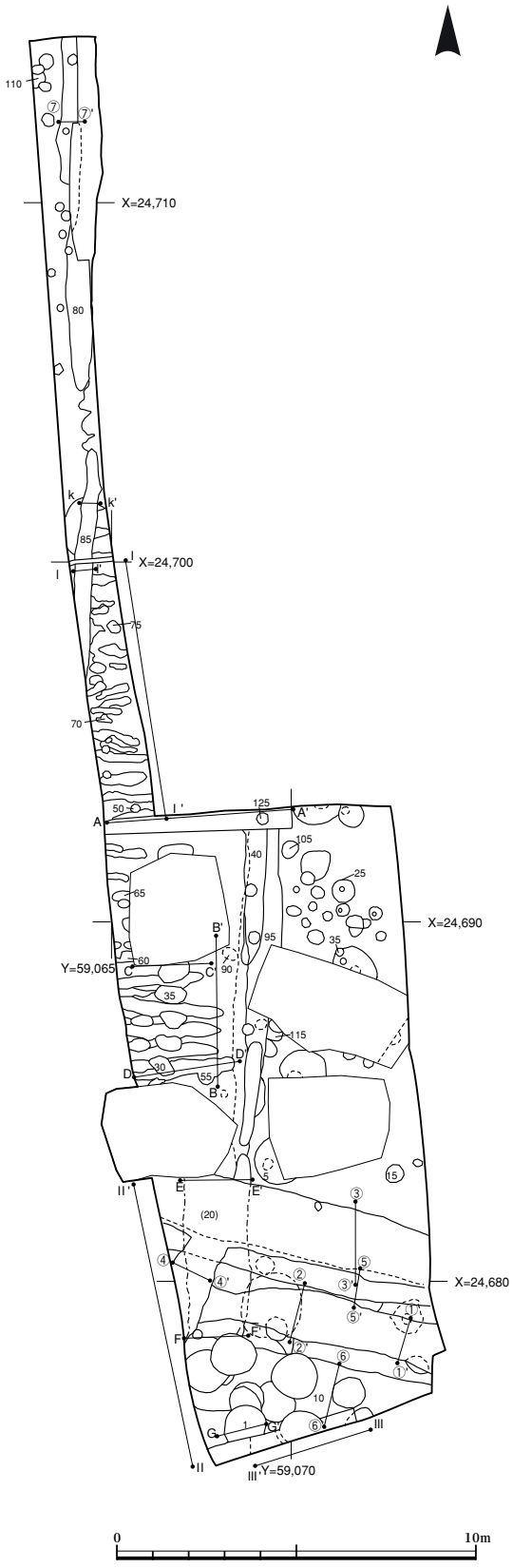
第３トレンチ南壁の土層断面図（第155図）をみると、最初期の路面は、調査時の検出面から約28㎝のところに構築されており、部分的ながら舗装材として使用されたと考えられる硬質の灰黒色粘質土（第４層）が遺存する。この段階の側溝は明確でないが、第６層として確認される部分が側溝に相当する可能性がある。次の段階において、路面は第３層（灰白色粘質土層）により被覆され新たな路面を形成したようである。SX061が側溝として機能していたのであろう。引き続き第２層、および第10層により路面は被覆され、新たな路面が形成されたのであろう。この段階に波板状の連続土坑群と側溝（SX005）が機能していたものと推定される。遺構上面が削平を受けているため詳細は不明であるが、土層の切りあい関係から第10層を埋土とするSX012を側溝とする段階を設定することも可能である。以上の点から、都合５段階以上の道路改修の段階設定を堆積土層と遺構の平面分布の状況から判断することができる。ここで注目されるのは、遺構の上面削平を考慮すれば、想定した全ての段階において、路面が周囲より低い位置にあるという点を読み取ることができ、当該遺構の大きな特徴といえる。ちなみに、土層断面で確認される道路遺構の下面に存在する溝状遺構（第７・８・９層を埋土とする）は第69次で検出された069SF001の延長部に相当するものである。

第45表　遺構一覧表①

S番号	遺構番号	遺物・その他	時期	地区
001	099ST−001	陶器片、白磁口縁部片		K・L−7
002	099ST−002	磁器片、白磁底部片、須恵器、東北部九州系土師質甕底部片、新寛永通宝、古寛永通宝、須恵質脚付鉢胴部～脚部片、下城式甕底部片		K−7
003	099SD−003	肥前系染付碗、陶胎染付片、瓦片、中国産青磁碗、唐津系陶器、外青磁筒型碗、菊ちらし文筒型碗、石帯		K−6～8

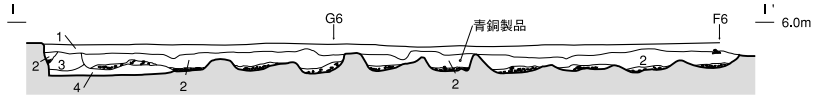


第153図　遺構配置図・全体遺構図　(1/200)



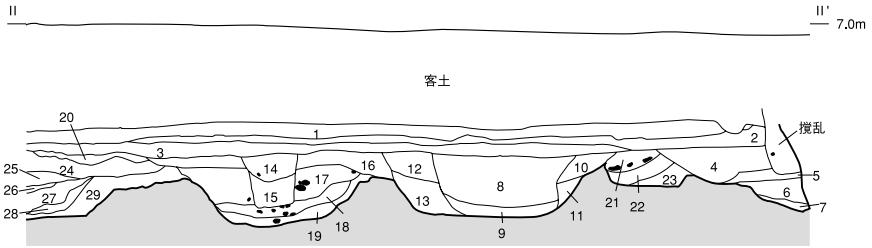
第154図　土層断面位置図　(1/200)

H6-G6-F6連続土坑



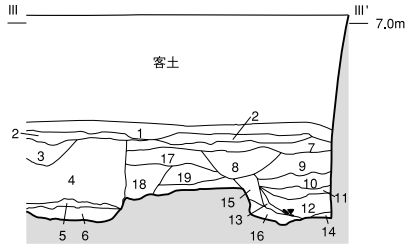
1. 明茶灰色砂質土（橙色粒子等を多量に含む）
2. 淡灰色粘土十暗茶灰褐色砂質土の混土層（鉄分・橙色粒子を多く含む、下部に土器バラスあり）
3. 暗褐色粘質土（灰色粘土ブロック・黄褐色粒子等を含む）
4. 暗茶褐色土（灰色粘土ブロック・明黄色砂質粒子・黄褐色ブロックを含む)

西壁



1. 水田盤
2. 明灰茶色砂質土（シルト系・鉄分を含む）‥‥水田盤
3. 暗茶灰褐色土（やや砂質）
4. 淡褐灰色土（やや砂質、灰茶褐色ブロックを含む）
5. 明茶灰褐色土（やや砂質）
6. 明茶灰褐色土（明黄茶色砂質ブロック・淡褐色ブロック・黄色粒子・鉄分等を含む）
7. 淡茶灰褐色土（やや砂質、灰色砂質ブロックを含む）
8. 明茶灰褐色砂質土（褐色ブロックを含む）
9. 淡褐灰色砂質土（やや粘性あり、黄褐色硬質ブロックを含む）
10. 明褐灰色砂質土
11. 暗褐灰色砂質土（淡白色粒子ブロックを含む）
12. 明褐灰色砂質土
13. 暗褐灰色砂質土（淡白色粒子ブロックを含む）
14. 明灰褐色砂質土（褐色ブロックを全体に含む）
15. 明茶灰褐色土（橙色粒子・炭化物・灰色砂質ブロック・鉄分を含む、しまりがよい）
16. 明灰茶褐色土（やや砂質、灰色砂質ブロックを含む）
17. 暗茶灰褐土（橙色粒子・炭化物・灰色砂質ブロックを含む）
18. 明灰茶色砂質土（橙色粒子・茶褐色粒を含む、しまりがよい）
19. 明茶灰褐色粘質土（淡褐色ブロックを多量に含む）
20. 暗褐灰色粘質土（褐色ブロックを含む）
21. 淡褐灰色砂質土（やや粘質）
22. 暗茶灰褐色土（しまりがよい、橙色粒子、黄色粒子を多く含む）
23. 暗褐灰色粘質土（黄褐色ブロックを含む）
24. 明茶褐色土（やや砂質、橙色粒子・褐色粒子を含む、灰色砂質ブロックを少量含む）
25. 暗灰褐色土十灰色粘土の混土層（鉄分を含む）
26. 灰色粘土十暗灰褐色粘質土の混土層（鉄分を多く含む）
27. 灰色粘土十暗灰褐色粘質土の混土層（鉄分を多く含む、灰色シルト質土を含む）
28. 暗灰褐色粘質土（鉄分を含む）
29. 淡灰褐色粘質土（地山ブロックを含む）

南壁



1. 水田盤（明灰色シルト質土）
2. 淡灰茶色砂質土（シルト系・鉄分を多く含む）※水田盤
3. 暗茶灰色砂質土（橙色粒子を多量に含む）
4. 暗茶褐色土（淡黄褐色硬質ブロックを多量に含む、やや粘性あり）
5. 淡褐色土（淡黄褐色硬質ブロックを僅かに含む）
6. 淡茶褐色土（地山ブロックを多量に含む、やや粘性あり）
7. 暗茶灰褐色土（やや砂質、橙色粒子・鉄分等を含む）
8. 暗茶褐色土（橙色粒子・炭化物を含む）
9. 明茶褐色土（やや砂質、橙色粒子・褐色粒子を含む、灰色砂質ブロックを少量含む）
10. 暗灰褐色土十灰色粘土の混土層（鉄分を含む）
11. 灰色粘土十暗灰褐色粘質土の混土層（鉄分を多く含む）
12. 11層とほぼ同じ（灰色シルト質土を含む）
13. 暗灰褐色粘質土（鉄分を含む）
14. 淡灰褐色粘質土（地山ブロックを含む）
15. 明茶褐色土（橙色粒子・黄褐色粒子を多く含む）
16. 淡灰褐色粘質土（しまりがよい、淡黄白色粒子ブロックを多く含む）
17. 明茶灰褐色土（やや砂質、暗褐色ブロック・灰色砂質ブロック・橙色粒子を含む）
18. 暗褐色粘質土（灰色粘土粒子ブロック・橙色粒子・地山ブロック・鉄分を含む）
19. 暗褐色土（暗褐色ブロック・地山ブロック・橙色粒子・炭化物等を含む）



第155図　調査区西壁・南壁基本土層断面実測図　(1/80)

第46表　遺構一覧表②

S番号	遺構番号	遺物・その他	時期	地区
004	099**SX**-004	須恵器片、土器片		**K**・**L**-7
005	099**SX**-005	須恵器胴部片		**J**-7
006	099**SD**-006	天目茶碗、唐津系擂鉢、陶器擂鉢、焼締土器片、肥前系陶胎染付筒型碗、肥前系陶胎染付碗、京・信楽系碗、唐津系焼締陶器片口部片		**J**-6～8
007	099**SD**-007	磁器染付片、肥前系染付碗、肥前系染付瓶		**J**・**K**-6
008	099**SD**-008	須恵器片、弥生土器片、須恵器底部片、土師器坏口縁部片		**J**-6
009	099**ST**-009	新寛永通宝、古寛永通宝、古銭、櫛片		**K**-7
010	099**SD**-010	白磁底部片、軒丸瓦、瓦質土器鉢口縁部片、瓦質土器擂鉢胴部片		**K**-7
011	099**ST**-011	白磁片、瓦質土器鉢口縁部片、須恵器坏口縁部片、研磨土師器椀底部片		**K**-7
012	099**ST**-012	磁器片		**K**-7
013	099**SX**-013	土師器片		**K**-7
014	099**SX**-014	東北部九州系はね上げ口縁甕		**J**-8
015	099**SX**-015	土器片		**J**-8
016	099**ST**-016	瓦片、弥生甕口縁部片		**K**-6
017	099**SX**-017	磁器片		**K**-7
018	099**SX**-018	土器片、弥生土器把手部、弥生直口壺口縁部片、弥生壺胴部片、弥生壺胴部～底部片		**I**-7
019	099**ST**-019	白磁片		**K**-7
020	099**SF**-020	須恵器蓋ツマミ部、須恵器蓋口縁部片、須恵器坏口縁部片、須恵質壺口縁部片、豊後大分形甕口縁部片、土師器高台付坏底部、土師器坏ほぼ完存、土師器坏片、土師質甑胴部～底部片、土師質甑口縁部片、土錘		
021	099**SX**-021			**K**-7
022	099**SX**-022			**K**-8
023	099**SX**-023			**K**-8
024	099**SX**-024			**K**-7
025	099**SX**-025	弥生土器片		**H**-7
026	099**SD**-026			**B**-5・6
027	099**SX**-027	土師器片、土器片		**I**-7
028	099**SX**-028	土師質甕、甕口縁部片、土器片		**H**-7
029	099**SX**-029	土師器片、土器片		**H**-7
030	099**SX**-030	土師器蓋ツマミ、土師器杯高台、須恵器片、土師器底部片、土師器片		**I**-6
031	099**SX**-031	須恵器片、須恵器口縁部片、土師器片、須恵質甕口縁部片		**I**-6
032	099**SX**-032	須恵器片、土師器片、姫島産黒曜石		**I**-6
033	099**SX**-033	須恵器片、土師器片、甕口縁部片		**I**-6
034	099**SX**-034	須恵器片、須恵器高杯片、大形土師器底部片、土師器片		**I**-6
035	099**SX**-035	内黒土師器、須恵器胴部片、土器片、土錘、馬の歯、須恵質甕口縁部片		**H**-6
036	099**SX**-036	須恵器高台片、須恵器片、甕口縁部片、底部片、須恵質壺底部片		**H**-6
037	099**SX**-037	須恵器片、土器胴部片		**H**-6
038	099**SX**-038	須恵器片、土器胴部片		**G**-6
039	099**SX**-039			
040	099**SX**-040			
041	099**SX**-041			
042	099**SX**-042	土師器片、土器片		**H**-7
043	099**SX**-043	土器片		**H**-7
044	099**SX**-044	弥生土器片、金属製品		**H**-7
045	099**SX**-045	下城式甕、東北部九州系甕口縁部片、弥生土器片		**H**-7
046	099**SX**-046	土器片		**H**-7
047	099**SX**-047	土器片		**H**-7
048	099**SX**-048	土師器片、土器片		**B**-6
049	099**SX**-049	須恵器胴部片、土師器片、土器片		**B**-6
050	099**SX**-050			**G**-6
051	099**SX**-051			**G**-6
052	099**SX**-052			**G**-6
053	099**SX**-053			**G**-6
054	099**SX**-054			**F**-6
055	099**SX**-055	須恵器蓋ツマミ部、鉄釘、鉄製品		**I**-6
056	099**SX**-056			**I**-6
057	099**SX**-057	円筒埴輪胴部片		**I**-6
058	099**SX**-058			**I**-6
059	099**SX**-059	須恵器胴部片、土師器片、タタキ甕		**H**-6
060	099**SX**-060	須恵器胴部片、土師器片		**H**-6
061	099**SX**-061	土師器片、土器片		**H**-6
062	099**SX**-062	土師器片		**H**-6
063	099**SX**-063	土器片		**H**-6
064	099**SX**-064	土師器片、弥生土器片		**H**-6
065	099**SX**-065	須恵器片、土師器片		**H**-6

第47表　遺構一覧表③

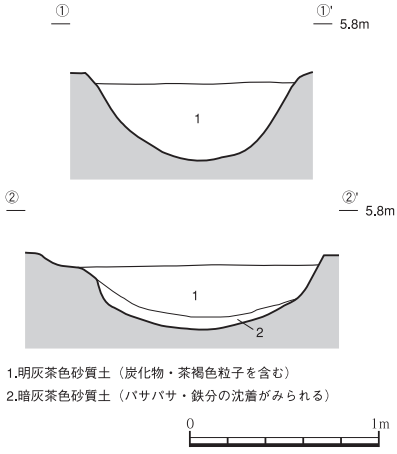
S番号	遺構番号	遺物・その他	時期	地区
066	099**SX**-066			**G**-6
067	099**SX**-067			**G**-6
068	099**SX**-068			**G**-6
069	099**SX**-069			**G**-6
070	099**SX**-070			**G**-6
071	099**SX**-071	石鏃		**F**-6
072	099**SX**-072			**F**-6
073	099**SX**-073			**F**-6
074	099**SX**-074			**F**-6
075	099**SX**-075			**F**-6
076	099**SX**-076			**F**-6
077	099**SX**-077			**G**-6
078	099**SX**-078			**F**-6
079	099**SX**-079			**F**-6
080	099**SX**-080			**D**-6
081	099**SX**-081			**D**-5
082	099**SX**-082			**C**-5
083	099**SX**-083			**G**-6
084	099**SX**-084	土器片		**G・H**-6
085	099**SD**-085	須恵器高台付坏底部片、土師器坏底部片、土師器高坏脚部片		**E**-6～
086	099**SX**-086	土器片		**H**-6
087	099**SX**-087	須恵器片、土師器片		**H**-6
088	099**SX**-088	須玖式土器、弥生土器片、弥生甕底部片		**H**-8
089	099**SX**-089	甑片、製塩土器口縁部片		**G**-7
090	099**SX**-090	土師器小坏完存、土師器坏、土師器高台付坏		**H**-7
091	099**SX**-091	土器バラス		**H**-6～
092	099**SX**-092	土器片、下城式甕口縁部～胴部片		**G**-7
093	099**SX**-093			**B**-5
094	099**SX**-094			**B**-5
095	099**SX**-095	土器片		**H**-7～
096	099**SX**-096			**K**-7
097	099**SX**-097	欠番		
098	099**SX**-098	欠番		
099	099**SX**-099	欠番		
100	099**SX**-100	土器バラス		**G**-6
101	099**SX**-101			**H**-7
102	099**SX**-102			**H**-7
103	099**SX**-103			**H**-7
104	099**SX**-104			**H**-7
105	099**SX**-105			**H**-7
106	099**SX**-106			**H**-7
107	099**SX**-107	須恵器片、土師器片、石包丁		**E**-6
108	099**SX**-108			**C**-5
109	099**SX**-109			**B**-5
110	099**SX**-110			**B**-5
111	099**SX**-111	欠番		
112	099**SX**-112	土師質片、口縁部片、弥生土器底部片		**K**-7
113	099**SX**-113	土器片		**I**-7
114	099**SX**-114	土師器片他		**I**-7
115	099**SX**-115	弥生土器片、土師器片		**I**-8
116	099**SX**-116			**E**-6
117	099**SX**-117			**G**-6
118	099**SX**-118			**F**-6
119	099**SX**-119	弥生土器片		**I**-7
120	099**SX**-120			
121	099**SX**-121	須恵器胴部片、土師器片		**E**-6
122	099**SX**-122	土師器片、土器片、青銅製品		**G**-6
123	099**SX**-123	土器片		**I**-7
124	099**SX**-124	土器片		**I**-7
125	099**SX**-125			**G**-7
000	099**SZ**-000	中国産白磁碗、陶器甕、備前擂鉢、中国産磁器皿、白色系研磨土師器椀底部、土師器坏、土師器高坏坏部～脚部片、須恵器高坏坏部～脚上部片、須恵器高坏脚部片、円筒埴輪、丸瓦、土錘、石器、砥石		

（３）遺構と遺物

溝状遺構（SD）

099SD003（第156図）

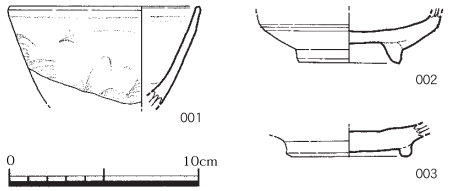
調査区南端において確認された東西方向に展開する溝状遺構である。断面Ｕ字形を呈し、溝底は西→東に向かって深度を増す。堆積埋土は基本的に明灰茶色砂質土の単一土層であるが、西側部分の底面には、土層断面観察において不整合な面を形成する第２層暗灰茶色砂質土の存在が認められる。したがって、明灰茶色砂質土は最終的な掘り返しに伴う堆積土層である可能性が示唆され、溝自身は複数回の掘り直しが行われた可能性が考えられる。検出面での溝幅1.0m～1.3m、現存深度0.3m～0.4m を測る。出土遺物の様相から最終埋没は18世紀末前後の年代が想定される。



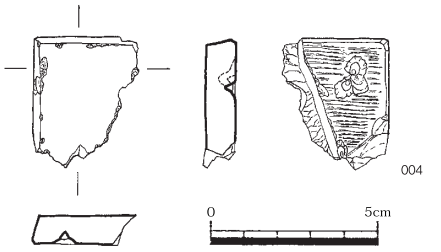
第156図　SD003土層断面実測図　(1/40)

出土遺物（第157・158図）

001は肥前系の染付碗である。口縁部から胴部にかけて約１/３が遺存する。復元口径10.0㎝を測る。いわゆる広東碗であり、おおよそ18世紀末～19世紀前半の所産年代が推定される。002は陶器の底部破片である。底部部分のみで約２/３が遺存する。復元底径5.2㎝を測る。唐津系の碗あるいは火入れの底部と推定される。003は中国産青磁碗の底部破片である。内面見込み内には釉剥ぎが認められ、高台内は無釉となる。磁胎は灰色を呈し、復元底径6.2㎝を測る。15世紀前後の所産と推定される混入品である。004は頁岩製の石帯である。厚さ0.6㎝、残存重量5.1g を測り、潜り穴は長辺に対角で二ヶ所認められる。古代の道路からの掻きあげられた遺物の可能性が考えられる。



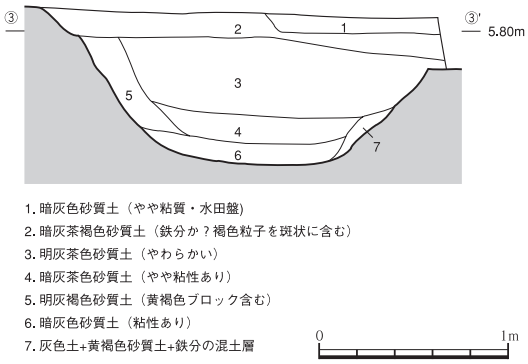
第157図　SD003出土遺物実測図①　(1/4)



第158図　SD003出土遺物実測図②　(2/3)

099SD006（第159図）

099SD003とほぼ同様の掘削方位により掘削された溝状遺構である。099SD003の北約１m に位置する。この両溝状遺構の時間的関係であるが、後述する099SD007が099SD003に直交する位置に掘削され、両者に切りあい関係が認められないことから同時に機能していたものと推定される。さらに099SD003はこの099SD007に切られていることが確認されているので、099SD003（旧）→099SD006（新）の時間的先後関係を確かめることができる。検出面での幅約2.0m を測り、完掘時の溝断面形状はＵ字形を呈している。土層断面観察結果から最少でも６回以上の掘り返しの痕跡が認められ、特に下層埋土にはブロック土を内包している土層が多く、人為的に埋め戻された可能性も想定さ

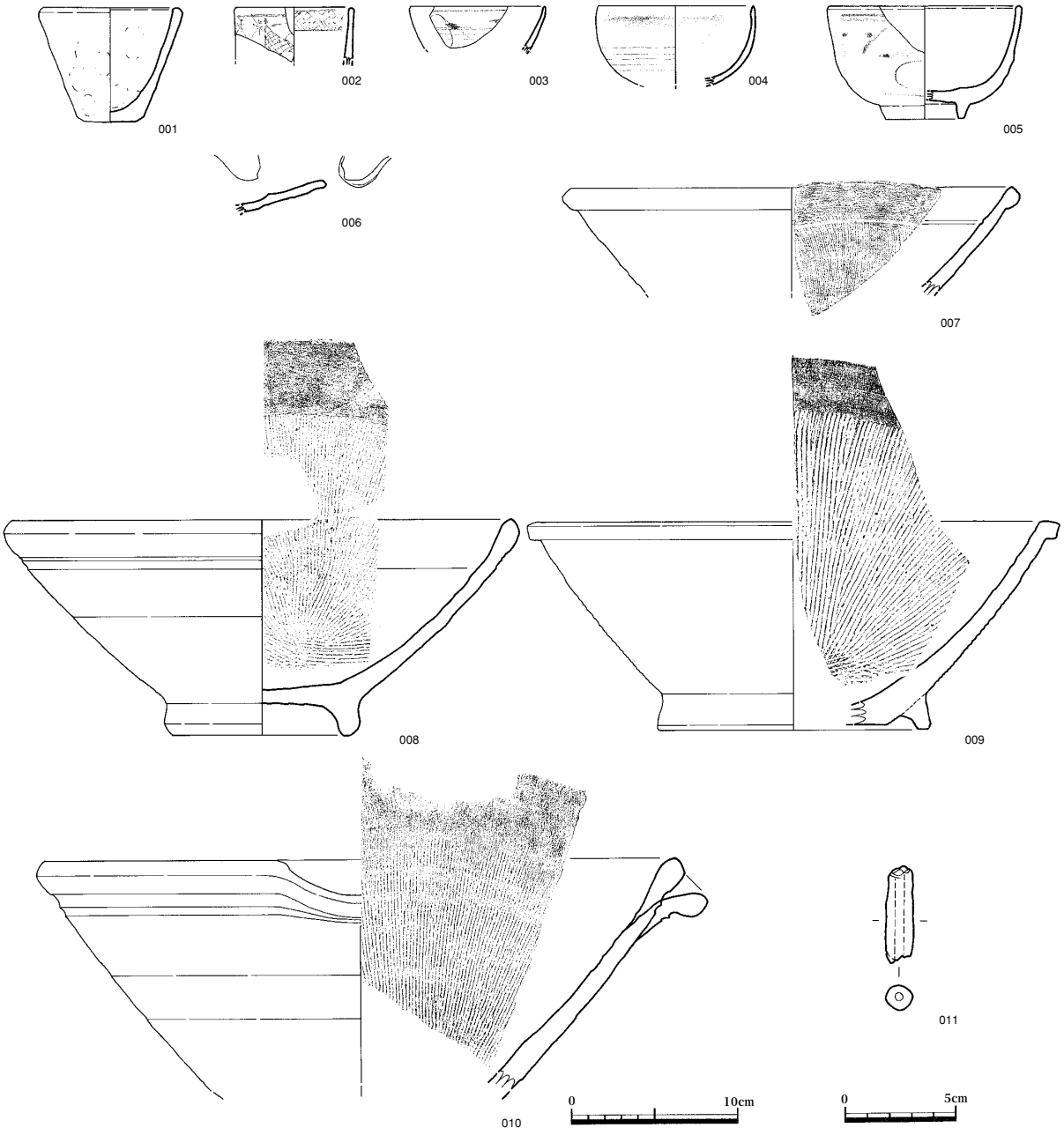


第159図　SD006土層断面実測図　(1/40)

れる。いずれの堆積土層とも砂質土であり、積極的に滞水していた状況は認められない。また、これらの砂質土層の中にはラミナ状の堆積物も確認することはできず、流水した状況の想定も難しい。

出土遺物（第160図）

001は弥生時代中期のものと考えられる小鉢である。全体のおよそ１/２が遺存する資料であり、復元口径8.0cm、器高6.9cm、底径3.0cmを測る。淡茶白色を呈し、胎土中には角閃石、長石、橙色粒子を含む。内外面ともナデにより調整される。第３層中から出土した、周辺遺構からの混入品である。**002**は肥前系筒型碗の口縁部破片で内面口縁部直下に四方襷がめぐらされていると想定される。**003**は18世紀前半に比定される陶胎染付碗の口縁部片で、復元口径8.0cmを測る。**004**は18世紀後半に比定される京・信楽系の碗である。復元口径9.4cmを測り、底部を欠損する。**005**は約１/２が遺存する肥前系陶胎染付碗である。復元口径11.4cm、器高6.8cm、復元底径4.6cmを測る。第３層土中から出土し

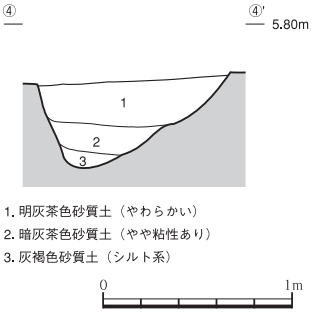


第160図　SD006出土遺物実測図　(1/4･1/3)

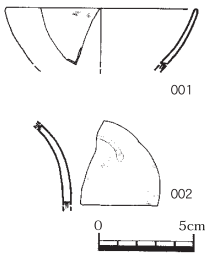
た。006は唐津系焼締陶器の片口部破片である。007は玉縁状の口縁部を呈する擂鉢口縁部破片である。復元口径26.6cmを測り赤茶褐色を呈する。008は内湾気味に立ち上がる口縁形態をもつ擂鉢資料であり、復元口径30.2cm、器高12.8cm、復元底径10.6cmを測る。擂目は放射状に密に施される。009は復元口径30.2cm、器高12.4cm、復元底径16.0cmを測る。口縁部分で約１／５が遺存する資料であり、胎土色調は淡茶褐色を呈する。010は第３層土中から出土した陶器擂鉢資料であり、復元口径38.0cmを測る。口縁端部は玉縁状を呈しており、片口の部分が遺存する。011は溝埋土最上層から出土した土錘資料である。淡茶褐色を呈し、胎土中には角閃石、長石を内包する。端部を欠損し、現状で長さ4.3cm、重さ4.6cm、径1.2cmを測る。

099SD007（第161図）

調査区南端において確認され、099SD006と直交する形で掘削された溝状遺構である。切り合い関係は認められず、同時に機能していたものと推定される。断面はにぶいＶ字形を呈し、堆積埋土は３層に分層することができる。なかでも第１層と第２・３層との間には断面形状の一部に不整合面が認められ、掘り返しが行われた可能性を指摘できる。出土遺物の様相から18世紀後半前後の機能年代が想定される。



第161図　SD007土層断面実測図
(1/40)



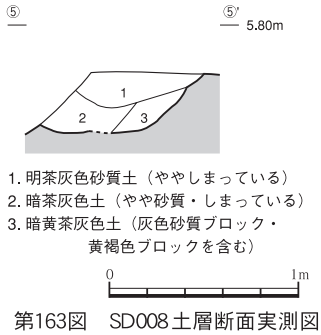
第162図　SD007
出土遺物実測図　(1/4)

出土遺物（第162図）

001は肥前系のいわゆるくらわんか碗と呼称される染付磁器碗である。復元口径10.0cmを測る。18世紀末～19世紀の所産となるものである。002は肥前系の染付瓶の胴部破片と推定される。小片のため詳細は不明であるが、外器面には唐草文と思われる文様が施文される。内面は無釉であり露胎となる。

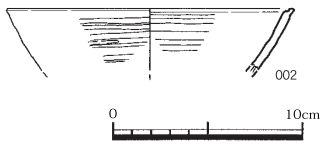
099SD008（第163図）

099SD003、099SD006との間において検出された溝状遺構である。検出長7.5m、現存深度0.3m を測る。099SD003 とは切り合い関係をもたないが、北側の大部分は099SD006により欠失し、溝の本来の規模を想定することができない。土層断面観察から、埋土最上層に位置する第１層とその下位にある第２、第３層間にはいずれも不整合面が形成されており、本溝も複数回の掘り返しが行われた可能性を指摘することができる。本遺構は出土遺物の内容から古代に比定されると推定されるが、当該期の溝が先述の近世溝と同一の方向性を示す点は極めて興味深い。



第163図　SD008土層断面実測図
(1/40)





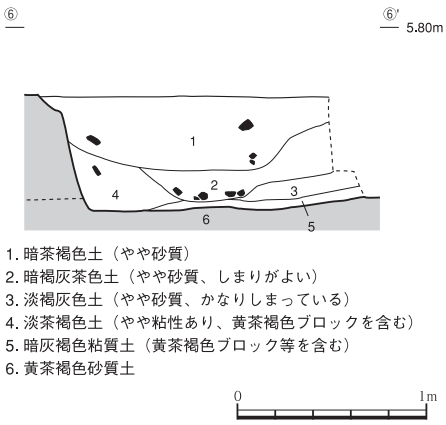
第164図　SD008出土遺物実測図
(1/4)

出土遺物（第164図）

001は須恵器高台付坏あるいは盤の底部破片である。内外面とも淡灰色を呈し、器表面は回転ナデにより調整される。貼りつけによる高台は畳付部が欠損しているが、断面台形を呈していたものと推定され

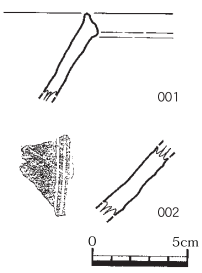
る。002は土師器坏の口縁部破片である。口縁端部内面に沈線状の窪みを有する。内外面とも淡橙褐色を呈し、ミガキa_2が施される。これらの遺物の特徴はいずれも８世紀後半～末の様相を示し、遺構の機能年代を示唆しているものと考えられる。

099SD010（第165図）



第165図　SD010土層断面実測図　(1/40)

調査区南端で確認した溝状遺構である。先述した099SD003、099SD006、099SD008とほぼ同一の方向に掘削される。遺構の多くを近世墓地により破壊されており、溝形状の全容を押さえることは難しいが、各所の所見から幅1.7m程度の逆台形を呈していたと推定される。土層断面観察の結果、本遺構も他の溝状遺構と同様に堆積土層に不整合面の形成が認められることから、複数回の掘り返しが行われたものと推定される。他と異なる特徴としては、溝の断面形状と底面中央付近に認められる第５層・暗灰褐色粘質土の存在である。さらにこの上位にはかなりしまった第３層・淡褐灰色土もあり、当初の段階において道路状遺構として機能していた可能性についても示唆しておきたい。出土遺物から中世後半期の所産と考えられる。



第166図　SD010出土遺物実測図　(1/4)

出土遺物（第166図）

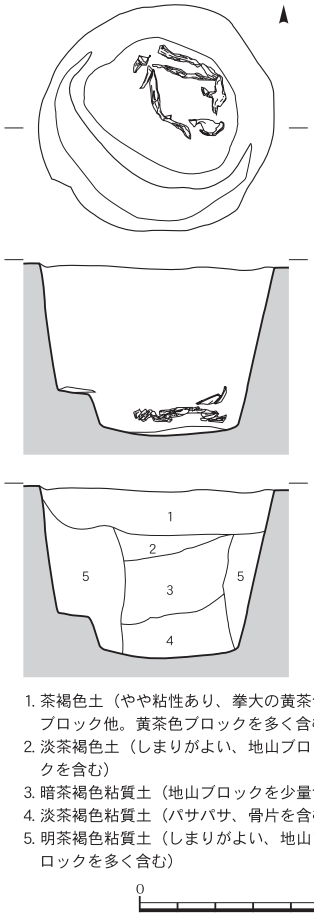
001は瓦質鉢の口縁部破片である。内外面とも淡灰褐色を呈している。口縁部形状から14世紀代の所産と考えられる。第３層からの出土である。002は瓦質の擂鉢片である。内外面とも淡灰褐色を呈する。胎土中には角閃石、長石を含む。内面には擂目の一部が認められる。

墓壙（ST）

調査区の南端において数基の墓壙を検出した。現状で８基＋αを確認することができる。いずれも近世に比定されるものである。堆積土層等の観察から桶等の棺を有するものと土壙内に直葬する土壙墓と推定されるものの２種があることが判明している。

099ST001（第167図）

099ST001は調査区の南壁際において確認した平面円形を呈する墓壙である。検出面での径１.2m、底面までの現存深度0.9mを測る。底面より若干浮いた位置において骨の痕跡を確認できる。堆積土層断面の観察から裏込め土の存在が知られ、本来の埋葬施設は径0.5m程度の桶様の施設であったことが判明する。さらに、墓壙の南側壁面にはテラスが認められ、棺の設置に伴う作業空間として機能していたものと推定される。土層断面において不整合面を形成する棺内流入土（第２・３・４層）には地山ブロック土を多く含み、その上部に位置する第１層にも同様な状況が看取されることから、埋葬時には土壙掘削によって生じた土によるマウンド状の構築物の存在が想定される。



1. 茶褐色土（やや粘性あり、拳大の黄茶色ブロック他。黄茶色ブロックを多く含む）
2. 淡茶褐色土（しまりがよい、地山ブロックを含む）
3. 暗茶褐色粘質土（地山ブロックを少量含む）
4. 淡茶褐色粘質土（パサパサ、骨片を含む）
5. 明茶褐色粘質土（しまりがよい、地山ブロックを多く含む）

0 1m

第167図　ST001遺構実測図　(1/40)

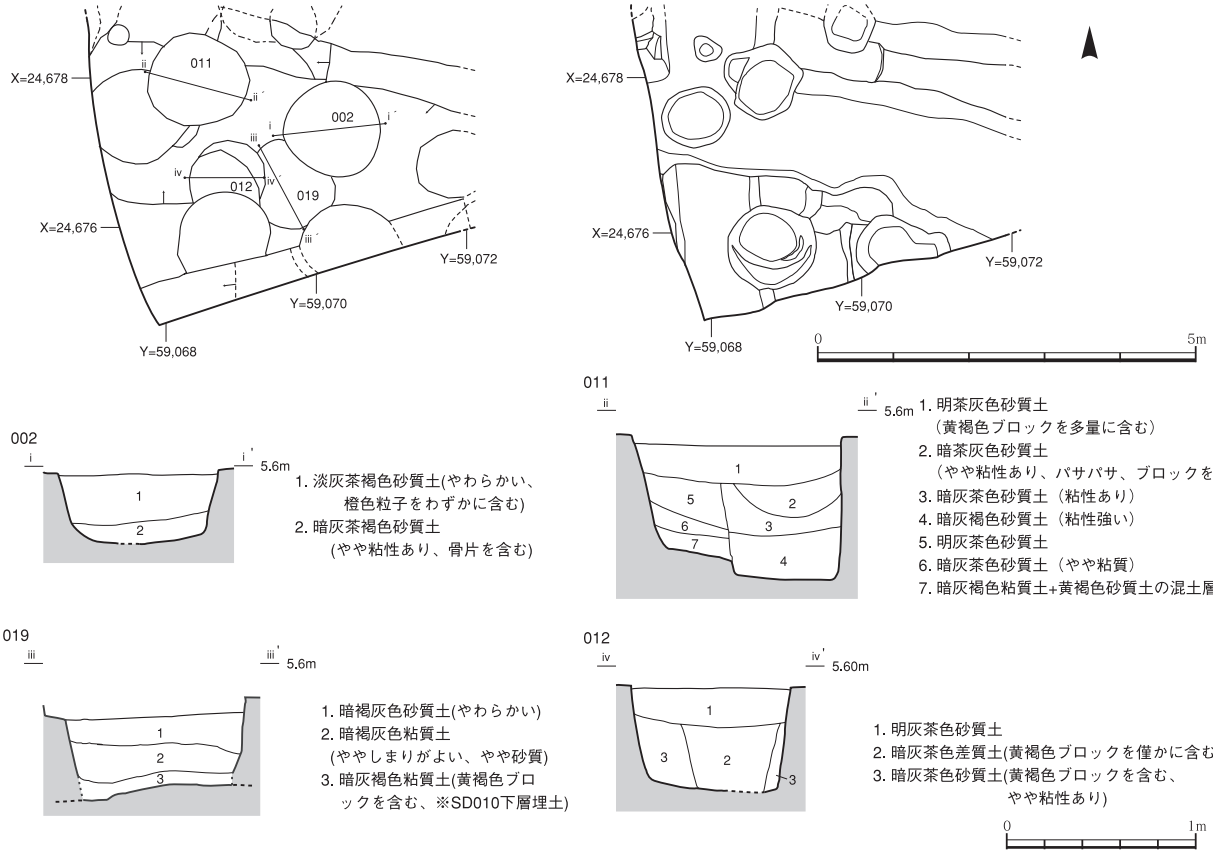
出土遺物には陶器小片や白磁破片などがあるが、いずれも小片であり、埋土内への混入品であり、墓壙の形成時期を示すものではない。

099ST002（第168図）

099ST002は099ST001の北西方向0.8m の位置で確認された墓壙である。検出面での平面プランは円形を呈しており、径約0.8m を測る。底面はフラットに整形され、検出面からの深度０.35m と他の土壙に比して浅い。底面付近から骨片が検出されており、099ST001と同様に墓壙と判断した。堆積土層断面の観察では、裏込め土の存在は確認されず、土壙墓であった可能性が高いと考えられる。

出土遺物（第169・170図）

出土遺物には、底面付近から出土した６枚の寛永通宝と弥生時代に比定される甕底部片と古代のものと推定される土師器片が出土しているが、墓壙の時期所産となるものは前者の銭貨のみであり、後者は周辺遺構からの混入品である。出土した銭貨は002が大きく欠損し、004の一部が欠けていることを除けば、他はほぼ完存する。001～004・006は寛文８年以前に鋳造された古寛永通宝であり、005はこれ以降の新寛永通宝であると推定される。出土状況からはこれらの銭貨が袋などの入れ物に挿入されていたかどうかを検証することはできなかっ



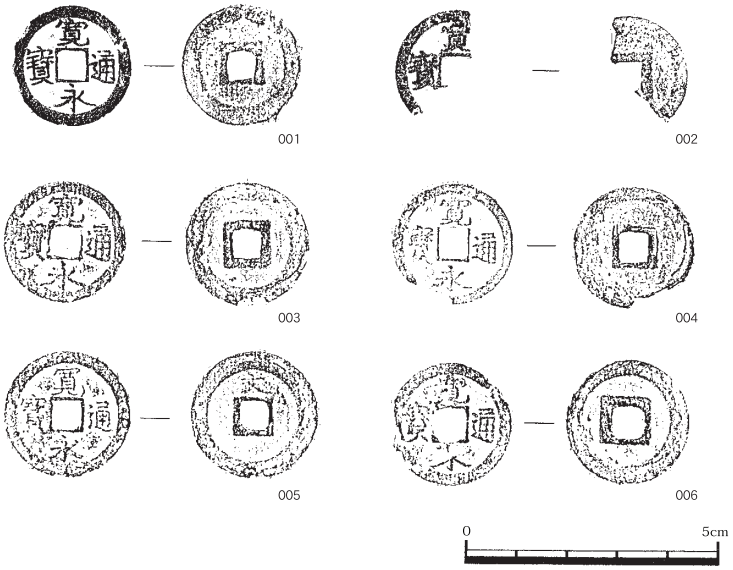
1. 淡灰茶褐色砂質土(やわらかい、橙色粒子をわずかに含む)
2. 暗灰茶褐色砂質土(やや粘性あり、骨片を含む)

1. 明茶灰色砂質土（黄褐色ブロックを多量に含む）
2. 暗茶灰色砂質土（やや粘性あり、パサパサ、ブロックを含む）
3. 暗灰茶色砂質土（粘性あり）
4. 暗灰褐色砂質土（粘性強い）
5. 明灰茶色砂質土
6. 暗灰茶色砂質土（やや粘質）
7. 暗灰褐色粘質土+黄褐色砂質土の混土層

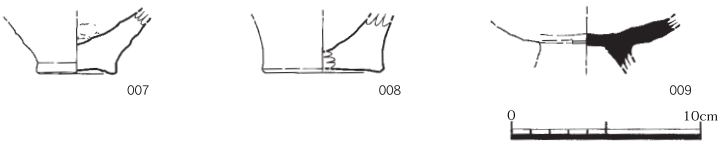
1. 暗褐灰色砂質土(やわらかい)
2. 暗褐灰色粘質土(ややしまりがよい、やや砂質)
3. 暗灰褐色粘質土(黄褐色ブロックを含む、※SD010下層埋土)

1. 明灰茶色砂質土
2. 暗灰茶色差質土(黄褐色ブロックを僅かに含む)
3. 暗灰茶色砂質土(黄褐色ブロックを含む、やや粘性あり)

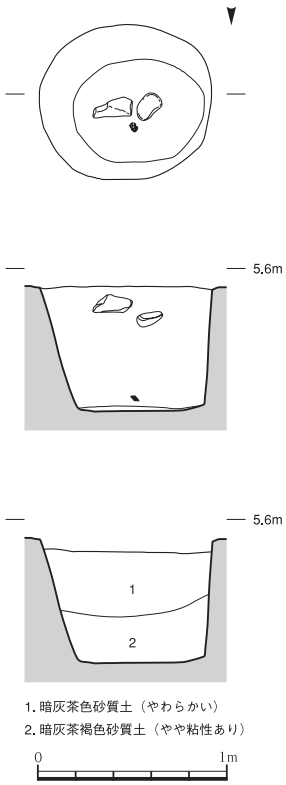
第168図　ST002・ST011・ST012・ST019平面・土層断面実測図　(1/100･1/40)



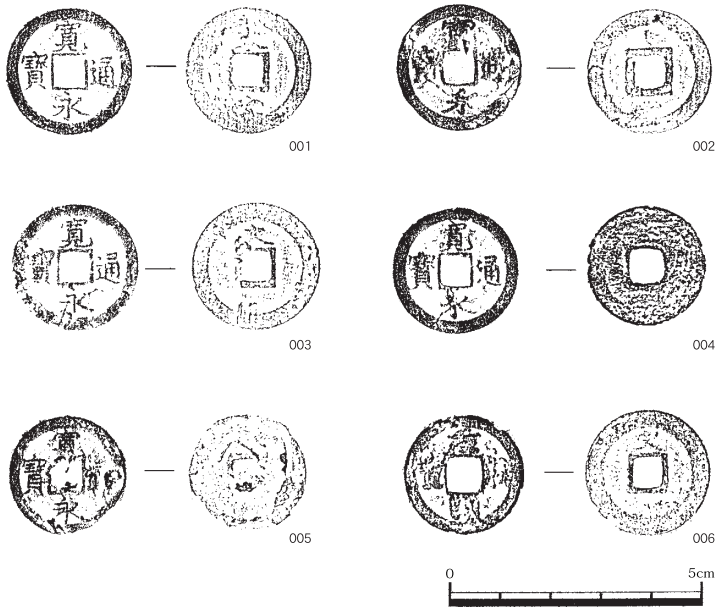
第169図　ST002出土銭　(2/3)



第170図　ST002出土遺物実測図　(1/4)



第171図　ST009遺構実測図　(1/40)



第172図　ST009出土銭　(2/3)

た。007は東北部九州系甕の底部である。淡橙褐色を呈し外面に黒斑が認められる。復元底径4.1cmを測る。008は下城式甕の底部片である。淡茶褐色を呈し復元底径6.4cmを測る。007・008とも弥生時代中期の所産となるものである。009は須恵質脚付鉢片である。内外面ともナデにより調整され淡灰白色を呈する。

099ST009（第171図）

099ST009は099ST002の南東0.5ｍのところで検出した墓壙である。円形プランを呈し、径0.85m、現存深度0.6m を測る。骨片等は遺存していなかったが、底面付近において寛永通宝６枚・櫛片などが検出され、埋土状況が099ST002と酷似することから墓壙と判断した。埋土は大きく２層に分層することができるが、上下層の特徴は極めて類似する。裏込め土などは確認されておらず、099ST002と同様に土壙墓であったと推定される。

出土遺物（第172図）

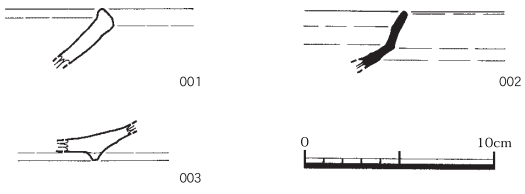
底面付近から寛永通宝６枚と櫛片が出土している。特に寛永通宝はさしの状態で出土した。005の一部が欠損するが、他はすべて完存する。006は文字の判読が困難であり、判断できないが、他の５枚に関しては、新寛永通宝と古寛永通宝の二種がある。古寛永通宝と考えられるものは002の１点のみであり、他はすべて新寛永通宝である。特に003、004などは新寛永通宝を象徴する「文」の字が裏面に認められる。これらの資料より、本遺構が寛文８年以降のものであることが判明する。櫛については、出土段階から遺存状況が極めて悪く図化することができなかった。

099ST011（第168図）

099ST011は099ST002の北西0.5m の位置で確認された墓壙である。本遺構も骨片などを直接的に確認できている訳でないが、埋土状況が他の墓壙と類似しており、墓壙と判断した。円形プランを呈する検出面での規模は、径1.1m、底面までの深さ0.7m を測り、西側には検出面から0.6m の深さのところにテラスを形成する。堆積土層の観察から、この部分が裏込めとなっており、桶等の埋葬施設を設置する際の作業空間としても機能していたと考えられる。土層観察から確認される円形の埋葬施設の径は約0.5m である。

出土遺物（第173図）

出土遺物には、瓦質の鉢口縁部片と須恵器坏、白色系の色調を呈する研磨土師器高台部片などが出土している。001は瓦質の鉢口縁部片であり、第４層土中から出土した。淡茶灰色を呈し、胎土中には角閃石、長石、橙色粒子などを含む。内外面ともナデにより調整される。002は須恵器坏の口縁部破片である。胴中位に屈曲部をもつ。淡茶灰色を呈し、内外面ともヨコナデが施される。形態的特徴から、底部に高台をもつ７世紀末～８世紀前半の所産になるものと推定される。003は淡黄褐色を呈する研磨土師器椀の高台部破片である。内面にはヘラミガキが施される。12世紀前半前後の所産になるものである。以上の３点が出土しているが、ST011と切り合い関係をもつ099SD010の所産時期との関係から、これらの遺物が099ST011の帰属年代を示しているとは考えがたく、いずれも混入資料であると考えられる。



第173図　ST011出土遺物実測図　(1/4)

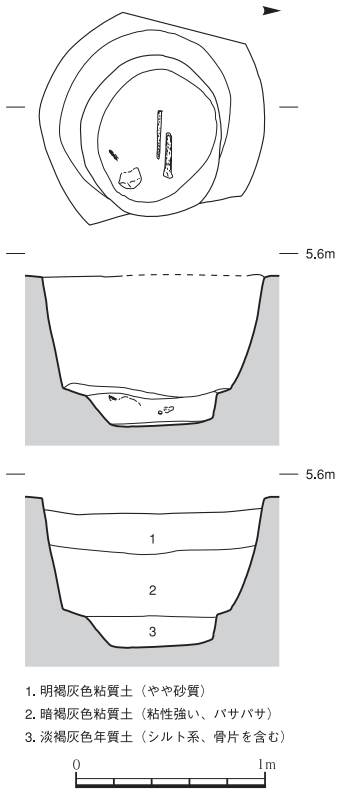
099ST012（第168図）

099ST001と切り合い関係をもつ墓壙である。099ST001の北側に約１/２が遺存する。残っている部分で判明する平面プランは円形であり、その径は0.8m を測る。底面は他の墓壙と同様にフラットに成形されている。検出面から底面までの深さは0.5m である。堆積土層の断面観察から、裏込め土の存在（第３層）が知られ、桶状の円形の埋葬施設があったことが知られる。その推定径は0.5m である。埋土内の出土遺物には近世以降のものと推定される磁器の小片が出土したのみであり、図化可能なものは皆無である。

099ST013

調査区の南壁部分で確認した墓壙である。南側半分以上が調査区外に展開している。そのため全体形状は不明であるが、底面はほぼフラットに成形され、底面までの深さ0.5m を測る。本地点では客土層下に２枚の水田基盤層を確認しているが、099ST013はこの水田基盤層下位から掘りこまれている。確認範囲内では裏込め等の痕跡は認められず、土層状況から土壙墓、あるいは木蓋土壙墓であろうと考えられる。出土遺物には近世以降のものと推定される土師質土器微細片が出土しているのみであり、具体的な所産年代を示唆するような遺物出土状況は示さない。

099ST016（第174図）

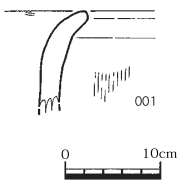


第174図　ST016遺構実測図　(1/40)

調査区の南西角に近い地点で検出され、先述の099ST011と切り合い関係を有する墓壙である。円形プランを呈し、径1.2m の規模を示す。完掘時の形状は、同心円状の二段掘り状を呈する。調査時に検証することはできなかったが、土層断面観察の結果等を考慮すると、上部（第１・２層）と下部（第３層）とは別の遺構である可能性も考えられる。第３層中からは遺存状態は極めて悪いものの、人骨が検出されている。

出土遺物（第175図）

出土遺物は微細片ばかりであり、図化が可能なものは001のみであるが、これも周辺遺構からの混入品であり、本遺構の帰属時期を示すものではない。図化することはできなかったが、近世以降のものと推定される瓦小片が埋土内から出土している。001は外反する口縁部を有する甕である。淡橙褐色を呈し、外器面はハケ目により調整される。９世紀前半頃のものであろうか。

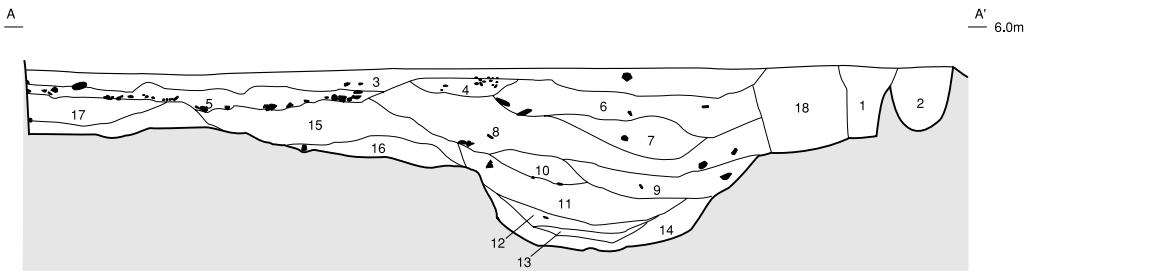


第175図　ST016出土遺物実測図　(1/4)

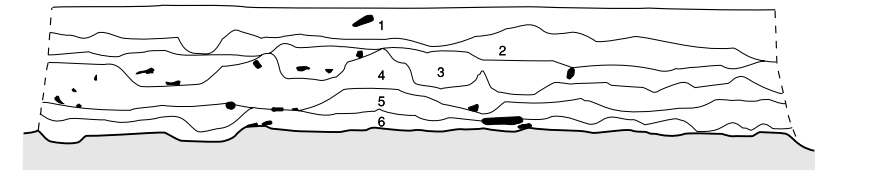
道路状遺構（SF）

099SF020（第176・177図）

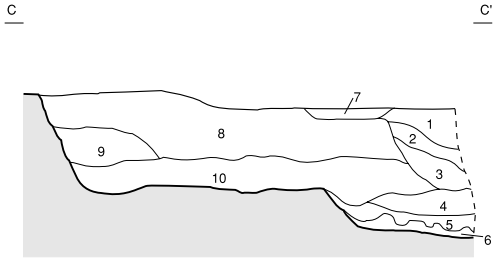
梯形をなす溝状の遺構内部に構築された道路状遺構である。溝部の検出面での幅4.0m、深さ1.0m を測り、最初期に路面として使用される溝底幅は1.2m の規模を有する。溝内堆積土には複数の路面が確認され、いずれの路面にも舗装材としての粘質土とその下部には連続土坑の組み合わせが認められる。すべての路面を面として把握することはできなかったが、堆積土層の断面観察から３面以上の路面の存在が想定され、次第に路面が上位に移動していった状況を看取することができる。最初期の路面に伴う連続土坑を道路完掘時に確認することができ、円形を基調とした大小規模の土坑がほぼ等間隔で配置される。土坑内には灰白色粘質土、暗褐色土や土器小片などが内包されている。



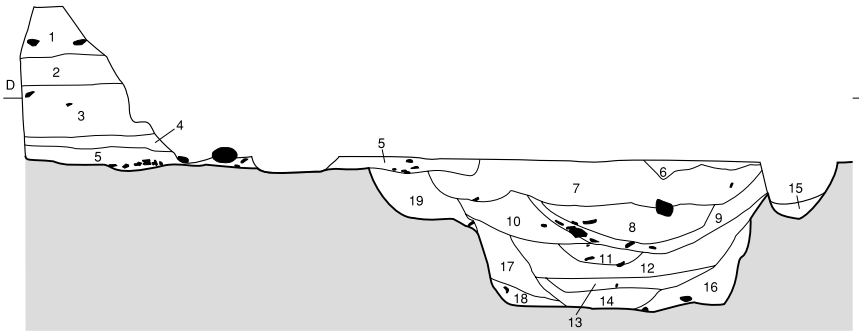
1.暗茶褐色土（橙色粒子を含む）
2.明茶色土（やや砂質・橙色粒子・黄色粒子を含む）
3.明茶灰色砂質土
4.暗灰茶色砂質土+灰色粘土の混土層　※連続土抗
5.灰褐色粘質土（やや砂質・橙色粒子等を含む）※土器敷き面
6.暗茶褐色粘質土+灰色粘土の混土層
7.灰色粘土+暗灰褐色粘質土の混土層
8.暗灰褐色粘質土+灰色粘土の混土層
9.淡灰色粘土+褐色粘質土の混土層
10.暗茶褐色土（しまりがよい・黄色粒子を多量に含む）
11.暗灰褐色粘質土+灰色粘土の混土層
12.淡灰色粘土+灰褐色粘質土層
13.淡灰色粘土層
14.暗青灰色粘質土（かなりしまりがよい）
15.暗茶褐色粘質土+灰色灰色粘土の混土層（橙色粒子・黄色粒子を多量に含む）
16.暗茶褐色土
17.暗茶褐色土
18.明茶褐色粘質土+灰色粘土の混土層（鉄分・茶褐色粒子を斑状に含む・締まっている）
※側溝（橙色粒子等を含む）※別遺構



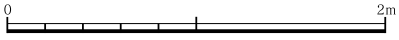
1. 暗灰褐色粘質土（暗灰色粘土ブロックを多く含む）
2. 淡灰色粘土+暗灰褐色粘質土の混土層（鉄分を多量に含む）
3. 淡灰色粘土（鉄分を多量に含む）
4. 淡灰茶色粘質土（淡灰色粘土ブロックを含む・やや砂質）
5. 暗灰茶色粘質土（鉄分・橙色粒子を含む）
6. 暗青灰褐色粘質土（かなりしまっている・やや砂質・鉄分・地山粒子を含む。一部、淡灰白色粘土を帯状に含む）



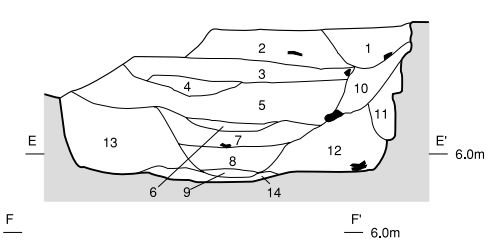
1. 暗灰褐色粘質土（暗灰色粘土ブロックを多く含む）
2. 淡灰色粘土+暗灰褐色粘質土の混土層（鉄分を多量に含む）
3. 淡灰色粘土（鉄分を多量に含む）
4. 淡灰茶色粘質土（淡灰色粘土ブロックを含む・やや砂質）
5. 暗灰茶色粘質土（鉄分・橙色粒子を含む）
6. 暗青灰褐色粘質土（かなりしまっている・やや砂質・鉄分・地山粒子を含む。一部、淡灰白色粘土を帯状に含む）
7. 淡灰色粘質土+鉄分（石+遺物小片を含む）
8. 暗茶褐色土（黄色土ブロックを含む）
9. 暗黒茶色土
10. 淡灰茶色土+暗茶褐色土（黄色土ブロックを含む）



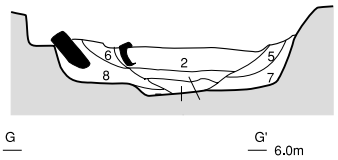
1. 表土
2. 灰茶色砂質土
3. 茶灰褐色砂質土（しまりがよい）
4. 明茶灰色砂質土
5. 茶灰褐色砂質土
6. 明茶灰色砂質土（橙色粒子を含む）
7. 暗灰褐色粘質土（暗灰色粘土ブロックを多く含む）
8. 淡灰色粘土+暗灰褐色粘質土の混土層（上部が比較的しまっている）
9. 暗灰褐色粘質土（淡灰色粘土ブロックを含む）
10. 暗茶灰褐色粘質土+灰と粘土の混土層
11. 淡灰色粘土層（鉄分等を含む）
12. 淡灰色粘土層+暗灰褐色粘質土の混土層
13. 淡灰色粘土層（暗灰褐色粘質ブロックを含む）
14. 淡灰色粘土+暗灰褐色粘質土の混土層
15. 暗茶褐色粘質土（灰褐色粘質ブロックを含む）側溝掘り残し
16. 暗灰茶色粘質土（灰色粘土ブロックを含む）
17. 暗灰茶色粘質土（灰色粘土ブロックを含む）
18. 暗茶灰褐色粘質土（しまっている）
19. 明茶褐色土（比較的しまっている・黄褐色粒子を含む）



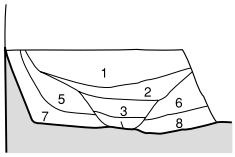
第176図　SF020土層断面実測図①　(1/40)



E-E'
1. 暗茶褐色土（やや粘質・橙色粒子、灰色粘質土を少量含む）
2. 暗灰褐色粘質土+淡灰色粘土の混土層（鉄分をかなり多く含む）
3. 淡灰色粘土と暗灰褐色粘土の帯状の層（鉄分を多く含む）
4. 淡灰色粘土+暗灰褐色粘土の混土層（鉄分を含む）
5. 暗灰褐色粘質土+淡灰色粘土の混土層
6. 淡灰色粘土層（鉄分を含む）
7. 淡灰色粘土層（若干の粘質ブロックを含む・鉄分を含む）
8. 暗灰褐色粘質土（黄褐色ブロック・鉄分を含む）
9. 淡灰色粘土層（鉄分を含む）
10. 暗茶灰褐色土（灰褐色粘質土を多く含む）
11. 明茶褐色土（黄褐色粒子を多く含む）※坑痕
12. 暗灰褐色粘質土（黄褐色ブロック・茶褐色ブロックを鉄分等を含む）
13. 暗灰褐色粘質土（黄褐色ブロック・茶褐色ブロックを鉄分等を含む）
14. 淡黄褐色硬質土+淡灰色粘土の混土層



F-F'・G-G'
1. 淡灰色粘土+淡灰褐色粘質土の混土層（鉄分・黄褐色粒子ブロックを含む）
2. 淡灰色粘土層（鉄分を含む）
3. 暗灰褐色粘質土（黄褐色粒子を含む）
4. 暗灰褐色粘質土（黄褐色ブロックを含む）
5. 暗灰茶褐色粘質土（灰色粘土ブロック・黄褐色ブロック・鉄分を含む）
6. 暗灰茶褐色粘質土（灰色粘土ブロック・黄褐色ブロック・鉄分を含む）
7. 淡灰茶色粘質土（黄褐色ブロック・灰色粘土ブロックを多量に含む）
8. 淡灰茶色粘質土（黄褐色ブロック・灰色粘土ブロックを多量に含む）

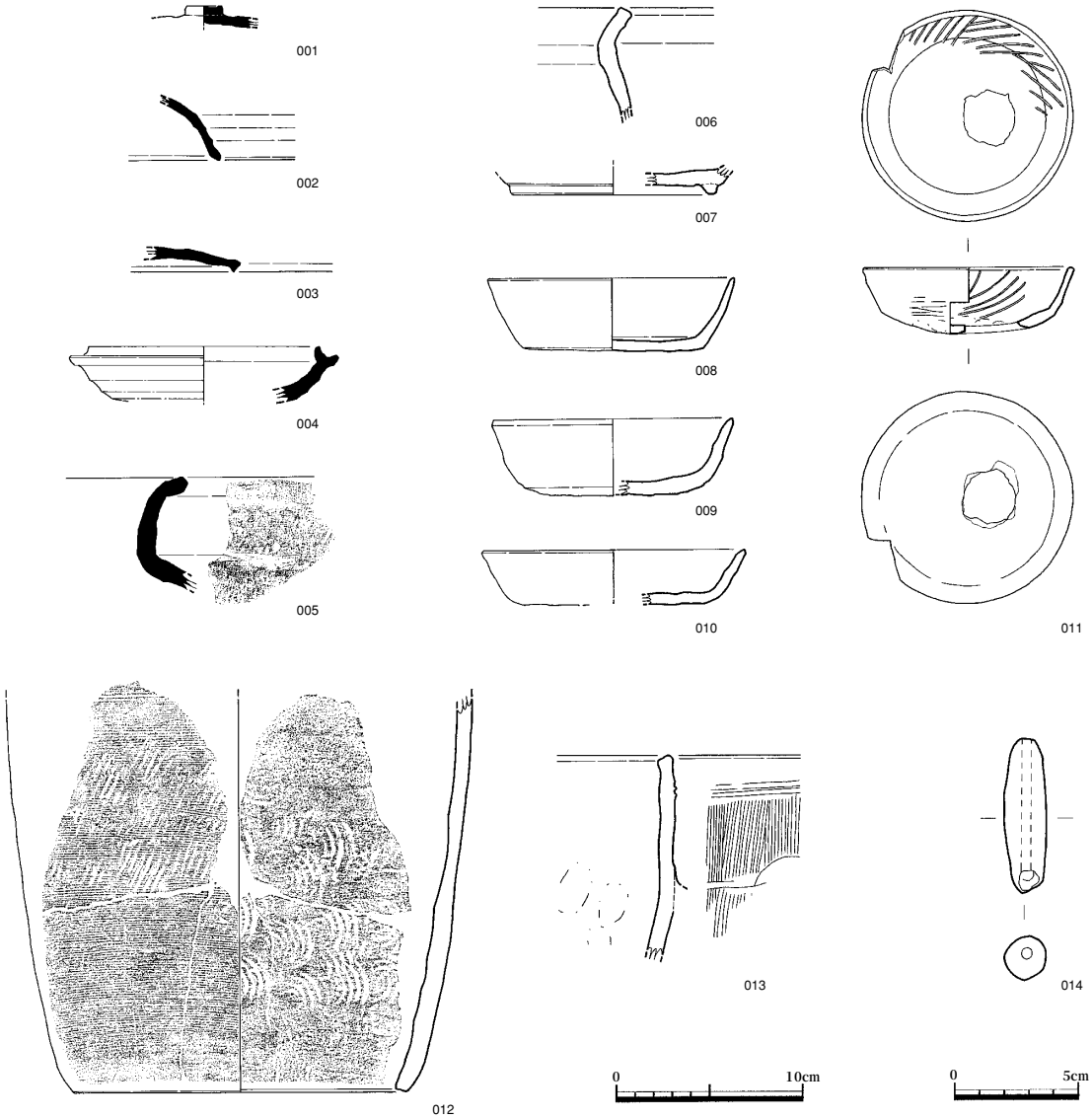




第177図　SF020土層断面実測図②　(1/40)

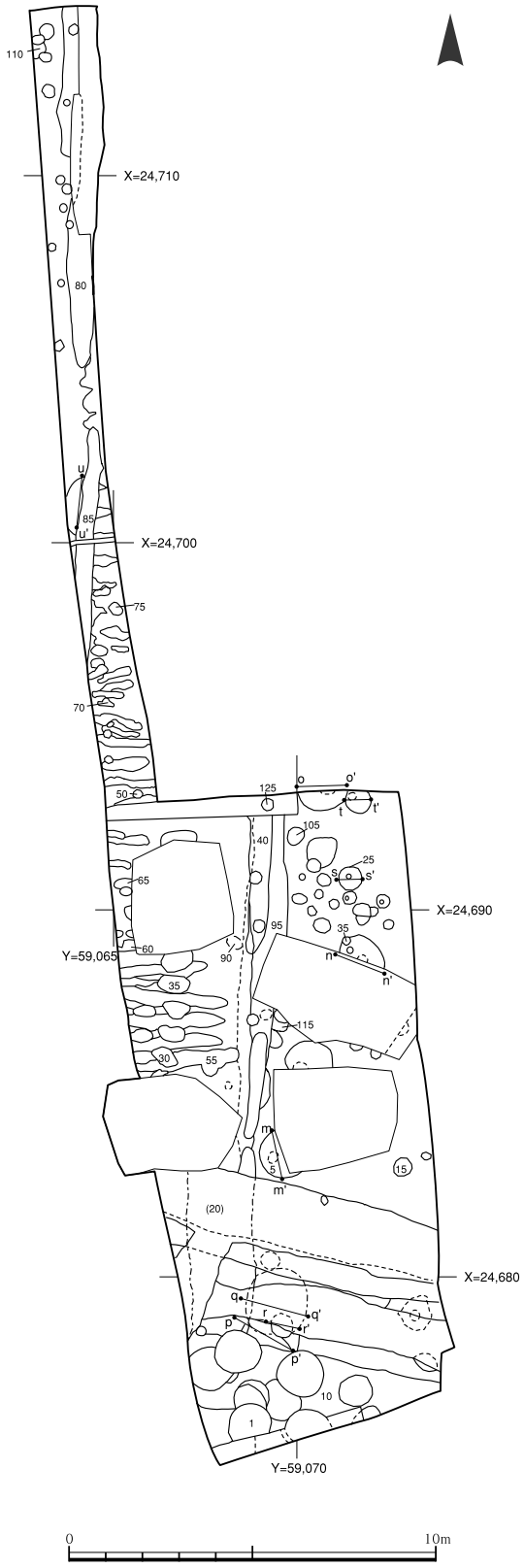
出土遺物（第178図）

001〜**003**は須恵器蓋破片である。**001**は須恵器蓋の頂部破片である。頂部には低平なボタン状のツマミが貼付される。外面・淡灰色、内面・暗茶灰色を呈し、回転ナデにより調整される。**002**は須恵器蓋の端部破片である。器表面は内外面とも回転ナデにより仕上げられる。淡灰褐色を呈する。第２層土からの出土である。**003**は端部断面が三角形を呈する須恵器蓋破片である。淡灰色を呈している。**004**は須恵器坏身である。復元口径12.4㎝を測る。淡茶褐色を呈する。形態的特徴から陶邑編年Ⅱ型式の５段階に相当し、７世紀前葉前後の所産年代を推定できる。他遺構からの混入品である。**005**は須恵器壺の口縁部破片である。肩部から直立気味に立ちあがる頸部から大きく外方向に展開する口縁部を有している。口縁部分で約１／８が遺存している。内外面とも淡灰褐色を呈する。**006**は土師質甕の口縁部破片である。いわゆる豊後大分形甕の口縁部破片であり、内外面とも淡茶褐色を呈する。胎土中には石英、角閃石、長石などを内包する。**007**は土師器高台付坏の底部破片である。復元底径10.6㎝を測り、底部は回転ヘラ切り離し後ナデにより調整される。外器面は回転ヘラミガキにより調整される。**008**は口径13.1㎝、器高3.9㎝、底径9.7㎝を測る土師器坏である。色調・淡茶褐色を呈し、胎土中には石英、角閃石、長石を内包する。内外器面はヨコナデにより調整され、底部は回転ヘラ切り離し後ナデにより仕上げられる。**009**は土師器坏である。全体のおよそ１／４が遺存しており、ここから復元される口径12.8㎝、器高4.1㎝を測る。色調は淡茶褐色を呈し、底部はヘラ切り離し後ナデにより調整される。**010**もまた土師器坏である。復元口径14.0㎝、器高2.9㎝を測り、他資料に比較して器高が低い。淡橙褐色を呈し、胎土中には石英、角閃石、長石を含む。底部はヘラ切り離し後ナデにより調整される。**011**は器内面に放射状暗文を施した土師器坏である。底部に焼成後穿孔が認めら



第178図　SF020出土遺物実測図　(1/4･1/3)

れる。手づくね成形によると考えられ、器底面には指オサエの痕跡がのこる。淡橙白色を呈し、内外面は手持ちヘラミガキとナデにより調整される。口径11.3㎝、器高3.6㎝、底径9.2㎝を測り、胎土中には橙色粒子、角閃石、石英を含む。いわゆる都城系土師器の範疇で捉えられる資料である。**012**は土師質甑の胴部から基底部にかけての破片である。内外面とも淡赤橙色を呈し、胎土中には石英、角閃石を含む。外面の器面調整は、ヨコナデ、タタキ後カキ目風のナデ調整を施す。一方、内器面は基本的にヨコナデにより調整されるが、胴中位を中心に同心円状のタタキあて具痕が残る。復元底径18.0㎝を測る。**013**もまた土師質甑の破片であるが、本資料は口縁部に相当するものであり、一部に把手の痕跡が認められる。内外面とも淡茶褐色を呈し、胎土中には石英、角閃石、長石を内包する。口縁端部付近は強いヨコナデにより調整され、外器面はタテ方向のハケ目により仕上げられる。内器面はナデにより調整される。**014**は土師質の土錘である。端部の一部を欠損するものの、ほぼ完存する。長さ6.2㎝、径1.7㎝、重さ18.4g を測る。



第179図　SX 土層断面位置図　(1/200)

道路状遺構に伴う連続土坑（SX）

099SF020が埋められた後も同地点は道路遺構として機能しており、この道路に伴う連続土坑、あるいは波板状凹凸面と呼称される帯状の連続土坑が確認されている。部分的ながらその上位には土器やバラス状の小さな礫を敷き詰めたような状況を検出することができた。検出した連続土坑は切り合い関係や位置関係、形状などを基準に３つのグループに分けることができた。それぞれ連続土坑１、連続土坑２、連続土坑３として説明を行う。これらの連続土坑内には細かく破砕された土器小片などを数多く内包する。その内容の主なものをあげると土師器蓋、土師器高台付坏、土師器底部片、須恵器片、姫島産黒曜石片、黒色土器Ｂ類小片、土錘などの他に馬の歯なども認められる。

連続土坑１（SX030～SX038・SX073・SX075）

円形基調の連続土坑群であり、切り合い関係上、比較的後出のものであると判断される一群である。深さは1.0m 程度を測り、暗青灰色粘質土を内包する他、遺構上部にかたく締った暗灰色粘質土と灰褐色粘質土の混土、あるいはバラス状の土器小片を充填する点を大きな特徴とする。

099SX031出土遺物（第181図）

001は須恵質甕の口縁部片である。内外面とも淡灰褐色を呈し、ヨコナデにより調整される。

099SX035出土遺物（第181図）

001は須恵質甕の口縁部片である。内外面とも淡灰色を呈する。外器面にはタタキ痕跡が残り、最終調整としてヨコナデが施されている。復元口径22.7㎝を測る。002は土師質の土錘片である。紡錘形の両端が欠損する。淡茶褐色を呈し、胎土中には角閃石、長石を含み、ナデにより調整される。現存長6.2㎝、重さ29.4g を測り、径は2.9㎝である。

099SX036出土遺物（第181図）

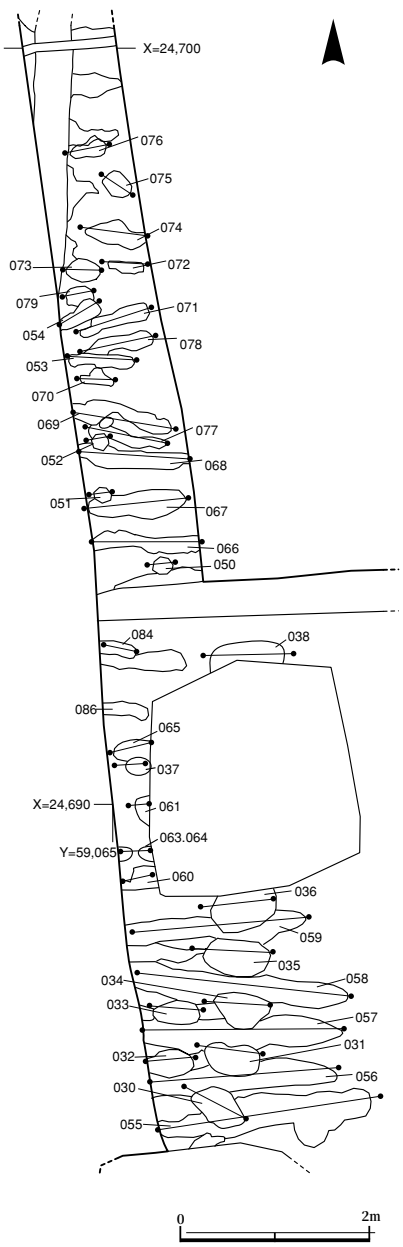
001は須恵質壺の底部破片である。復元底径10.6㎝を測る。淡灰褐色を呈し、内外面とも回転ナデ調整により仕上げられる。

連続土坑２（SX050～SX072・SX074・SX084・SX086・SX087）

小型のピット状の連続土坑である。切り合い関係から後述の連続土坑３よりも後出する連続土坑群である。規模は連続土坑１のものより小型であり、埋土内には破砕土器小片を中心としたバラス状の土器小片が充填される。

099SX055出土遺物（第181図）

001は須恵器蓋のツマミ部の破片資料である。ツマミは低平なボタン状を呈しており、器表面はナデにより調整される。淡灰色を呈する。ツマミ部の径は2.9㎝を測る。002・003は欠損しており別離



030～037
1. 土器等による土器バラス
2. 暗灰色粘土+灰褐色粘質土の混土層
3. 暗灰褐色粘土（土面に土器バラス）
4. 暗褐色粘質土（灰色粘土を若干含む）
5. 暗青灰色粘土
6. 暗褐色粘質土（灰色粘土を含む）

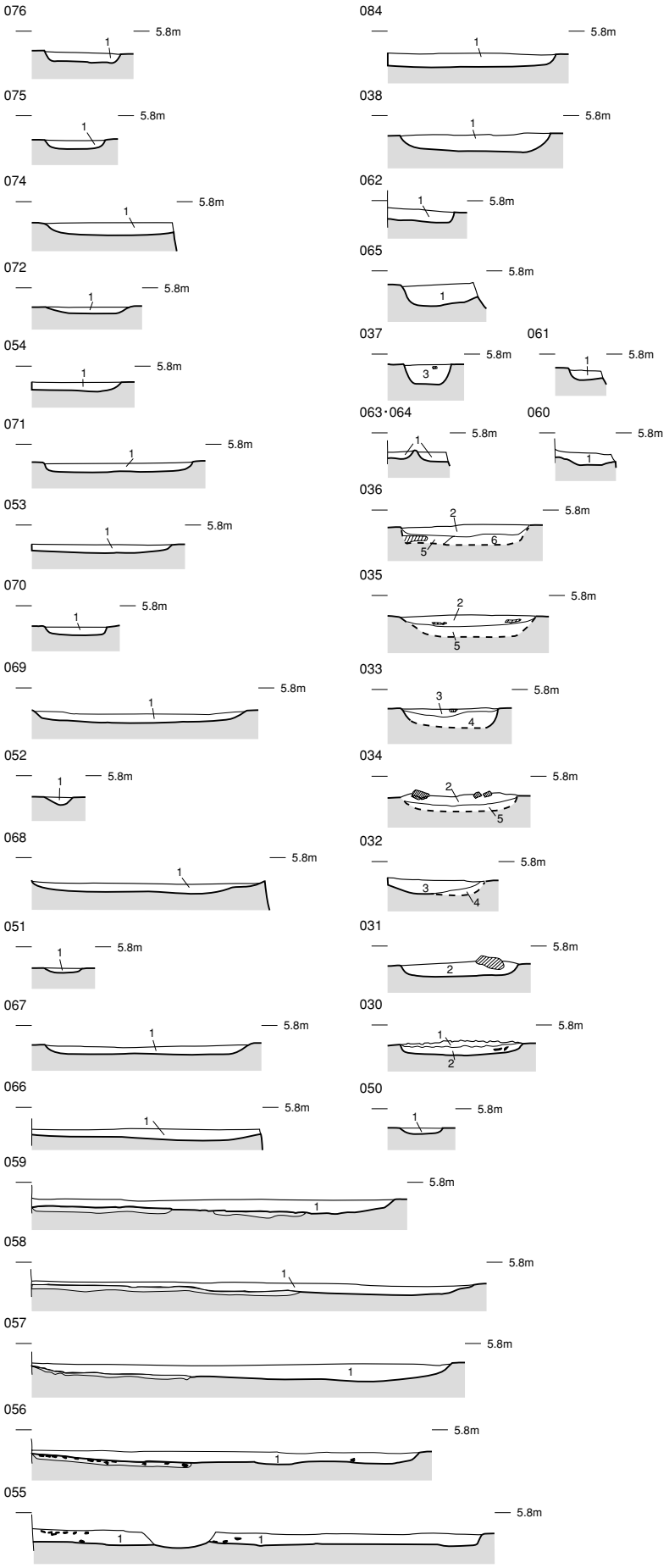
038
1. 茶灰色砂質土（鉄分をかなり多く含む）

050～054
1. 淡灰色粘土層（鉄分等を含む）+灰褐色粘質土

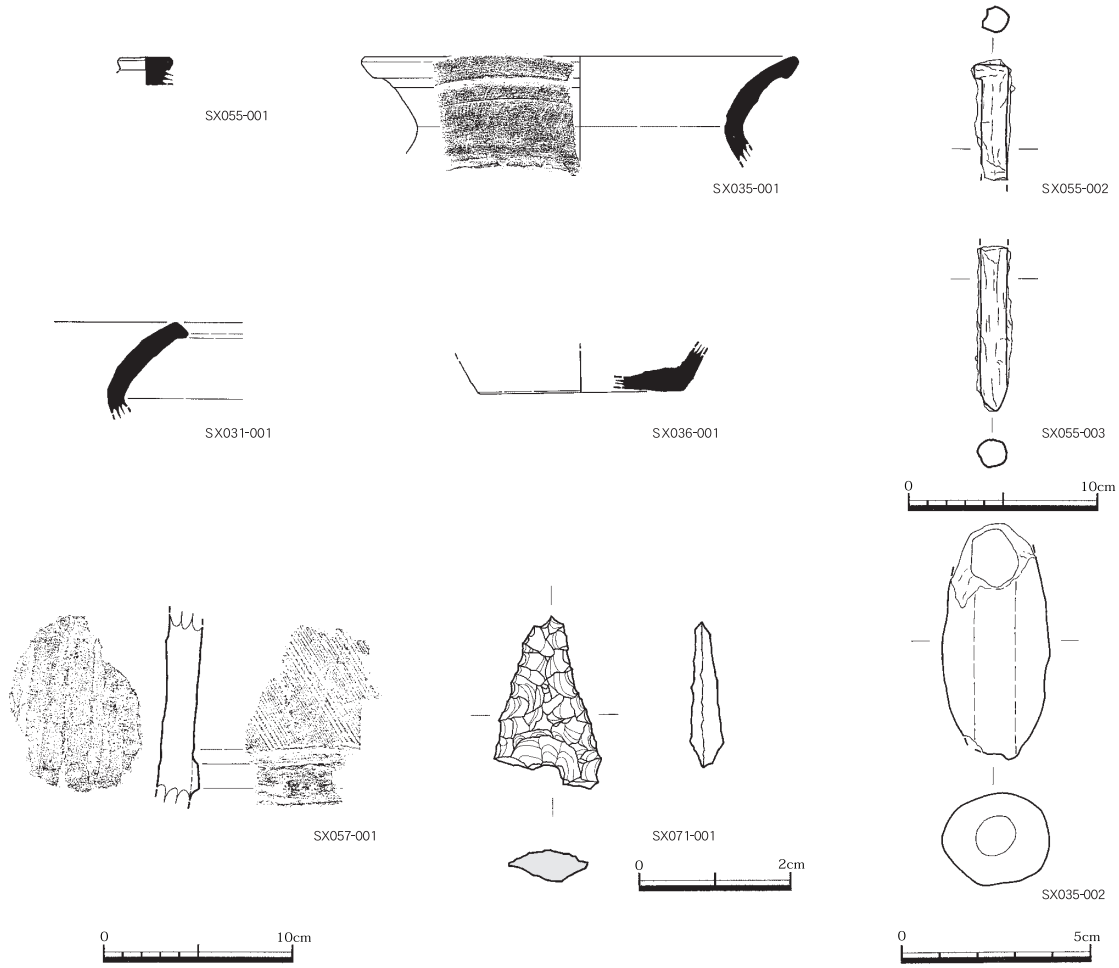
055～076
1. 淡灰色粘土+灰褐色粘質土の混土（鉄分・橙色粒子を含む）
土器片バラス

084
1. 暗灰色粘土（明茶褐色土・鉄分・黄褐色粒子を含む）





第180図　連続土坑平面・土層断面実測図①　(1/40)



第181図　SX 出土遺物実測図　(1/4・1/1・1/2)

しているが、本来は同一個体であったと考えられ、鉄釘と推測される。002は現存長3.2㎝、重さ4.4g、003は現状で長さ4.4㎝、重さ5.5g を測る。

099SX057出土遺物（第181図）

001は円筒埴輪片である。タガの部分であるが、貼り付けによるタガはすでに欠損している。外面は斜め方向のハケ目、内面には縦方向の工具ナデの痕跡が明確に残る。淡茶褐色を呈し、胎土中には石英、角閃石、長石を含む。

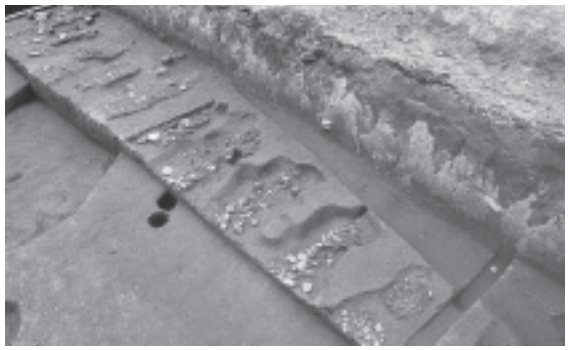
099SX071出土遺物（第181図）

001は姫島産黒曜石製の石鏃である。基部と先端部を欠損する。灰白色を呈し、現存長2.3㎝、最大幅1.1㎝、重さ0.8g を測る。

連続土坑３（帯状連続土坑（SX116・SX118・SX121・SX122））

帯状の連続土坑の一群であり、いわゆる波板状凹凸面を形成する。遺構の切り合い関係から判断される新旧関係の上では、連続土坑１～３の中で最も古いものと判断される。遺構内にはバラス状に破

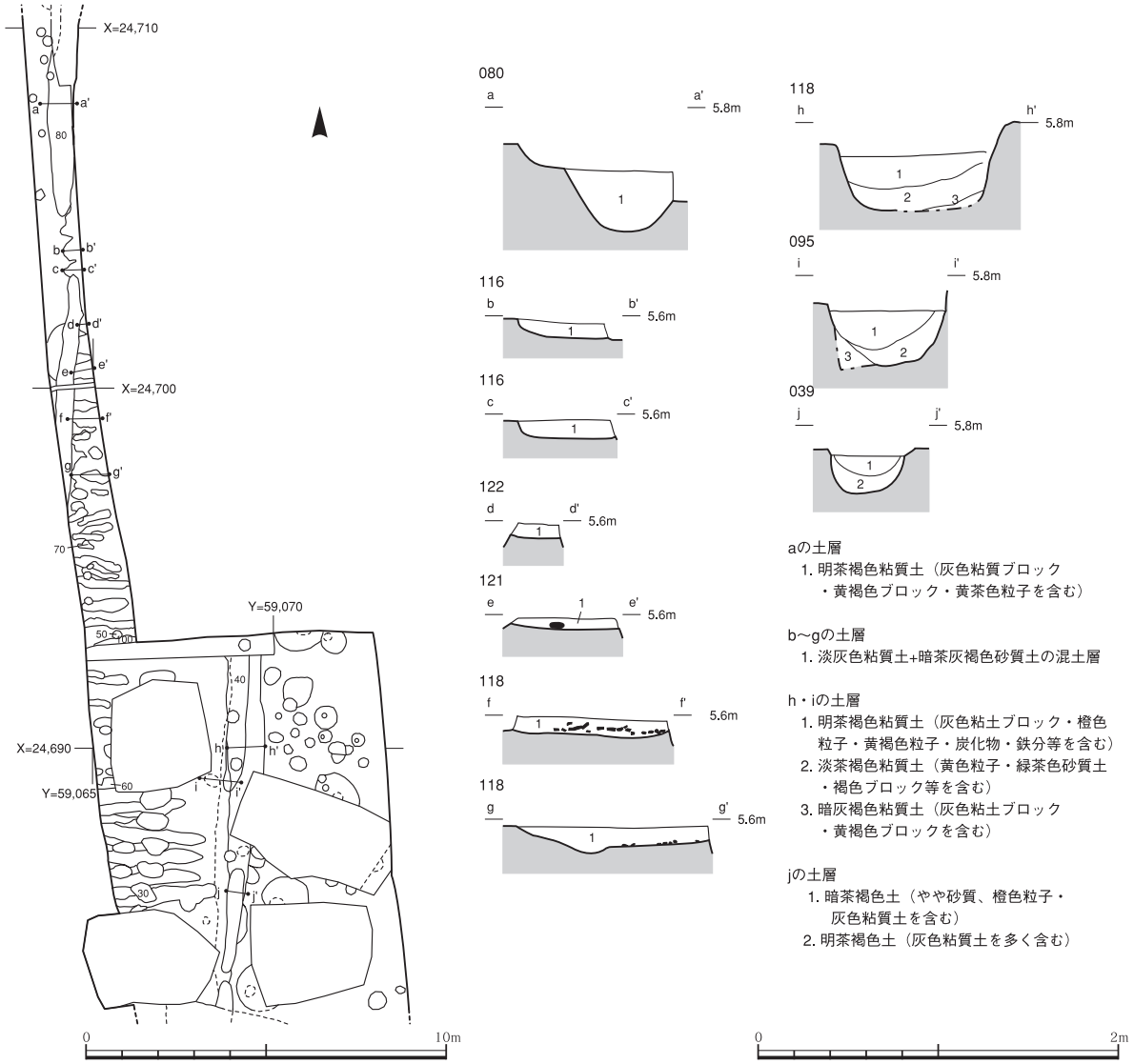
砕された土器等が充填される。これらの土器砕片は遺構埋土内に留まらず、土坑周囲にも展開しており、部分的には土器砕片バラス敷き（099SX017）といったような状況が確認される部分もある。遺存状況が良好な部位では、この土器敷を除去すると帯状連続土坑の平面プランを確認することができるといった関係が認められる。



第182図　土器バラス（SX017）観察時

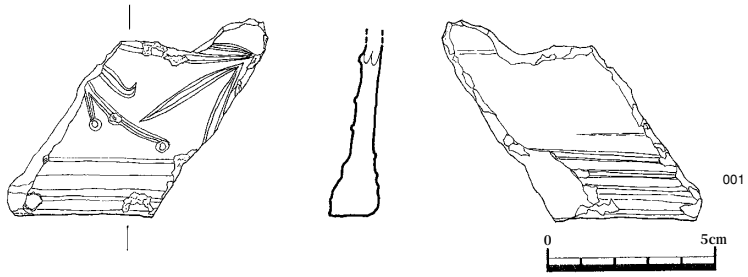
099SX122出土遺物（第184図）

第184図に掲載した金属片は連続土坑３の周囲に展開する土器砕片バラス敷き（099SX017）から出土したものである。現状で3.9㎝×5.3㎝の大きさを有し、残存重量は33.1g を測る。表面には唐草文に類似する文様が鋳出されている。内面にはなにかしらの工具による擦痕が認められる。青銅製であ

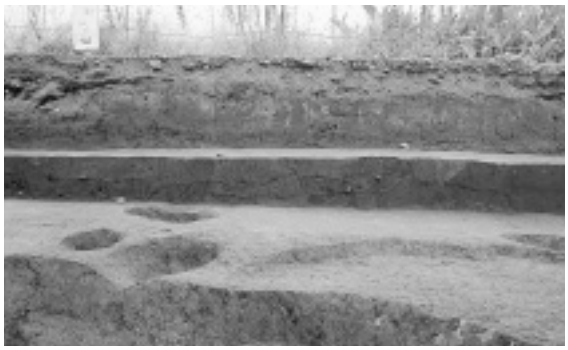


第183図　連続土坑平面・土層断面実測図②　(1/40)

り、形態的特徴から小型の梵鐘の下端部の破片、あるい青銅製の磬の一部である可能性などが考えられるが、いまだ結論は得られていない。



第184図　SX122出土遺物実測図　(2/3)



第185図　SX122周辺状況

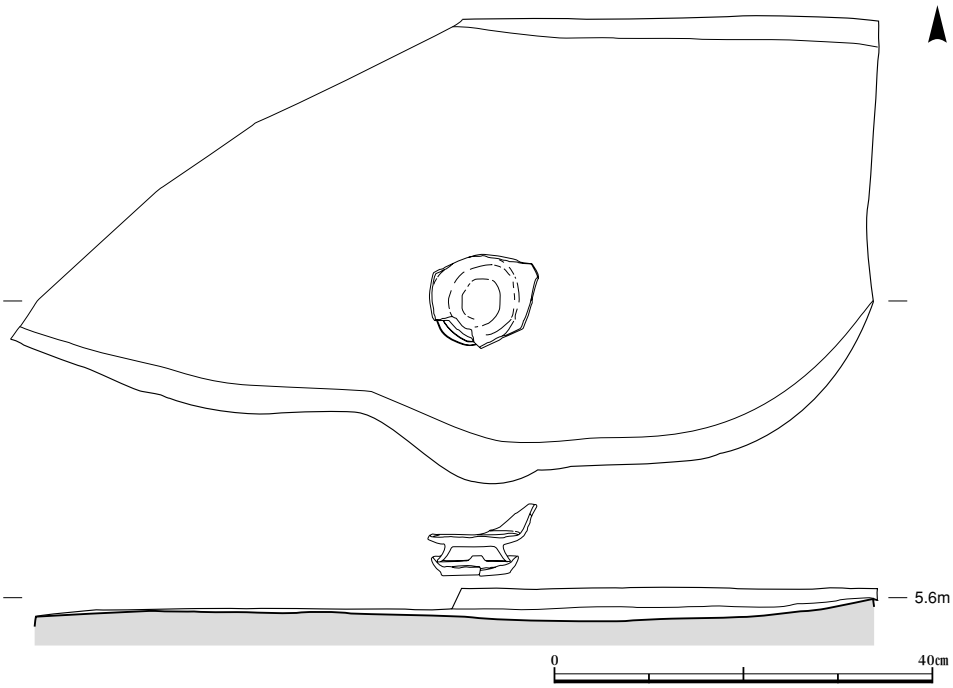


第186図　SX122遺物出土状況

土器埋設遺構（SX）

099SX090（第187図）

帯状の連続土坑の分布するエリアに位置する土坑である。土器敷きの中において確認できる遺構であり、本来はピット状を呈していたものである。上位から坏、高台付坏、小坏の3点を重ねて埋納してあった。第187図には土器の見通し断面図を掲載しているが、最上位に位置していた坏について

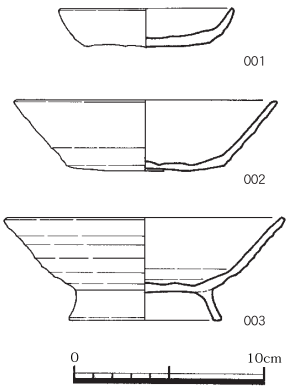


第187図　SX090平面・断面実測図　(1/80)

は検出時に原位置を移動したため、図面上には記載していない。出土位置的には先述のどの連続土坑群に伴うかは不明であるが、遺構は明らかに道路状遺構に伴う土器敷きの中に明茶灰色砂質土を充填して造られており、道路機能時に構築されたものと考えられる。

出土遺物（第188図）

001は最下部に位置した土師器小坏である。完存品であり、口径9.2cm、器高2.0cm、底径6.6cmを測る。底部には回転ヘラ切り離し痕が残る。淡黄橙色を呈し、胎土中には角閃石、橙色粒子を含む。



第188図　SX090出土遺物実測図
(1/4)

002は土師器坏である。底部は完存しているが、口縁部は８割近くが欠損する。内外面とも淡橙黄色を呈し、胎土中には石英、角閃石などを内包する。底部には回転ヘラ切り離し痕が残り、内外器面は回転ナデにより調整される。復元口径13.8cm、器高3.7cm、底径8.3cmを測る。003は高台付坏である。底部は完存するが、口縁部のかなりの部分は欠失する。内外面とも淡茶褐色を呈し、胎土中には角閃石、橙色粒子を含む。復元口径14.8cm、器高5.5cm、底径8.0cmを測る。これらの遺物は小坏の存在、003の器形的特徴の上で坏部がまだ完全に椀形状となっていない点、002の坏形状、および法量などの点からおおよそ９世紀末前後の所産年代を考えることができよう。

道路側溝（SX）

調査区内には同一方位、同一地点を意識した不連続の溝様遺構を検出している。その方向性はほぼ真南北を指向し、連続土坑、帯状連続土坑と直交するような方向性を示す。これらの点からある段階の道路側溝として機能していたと考えられる。また、お互いに切りあい関係を有している部分なども確認されることから、複数回の造り替えが行われたものと考えられる。099SX039、099SX040、099SX041はほぼ同一軸線上に構築されており、切り合い関係も持たないことから、同時期に機能した側溝の可能性が示唆される。また、099SX080、099SX085にも同様な状況が位置関係等から想定される。

099SX039

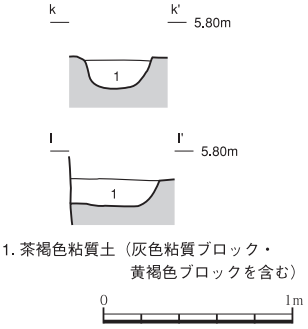
099SX039は検出面での幅0.4m を測り、深さ0.2m の規模を有している。堆積埋土は２層で構成され、上部層は暗茶褐色土、下部層は明茶褐色土による堆積を示す。特に人為的な埋め戻しを示すような状況は認められず、あるいは道路状遺構の最終機能段階での側溝として機能した可能性が考えられる。出土遺物には須恵器甕破片、須恵器高台付坏小破片などがある。

099SX080

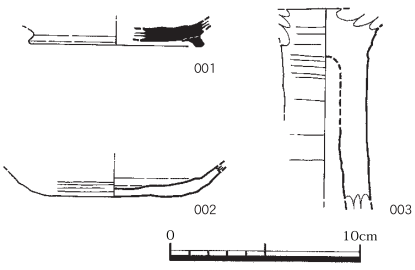
調査区北端付近で検出した遺構である。検出面での幅0.6m、現存深度0.3m を測る。遺構内堆積土層は明茶褐色粘質土の単一土層であるが、土層中には灰色粘質ブロックや黄褐色ブロックなどを内包しており、人為的な埋め戻し行為により遺構の機能が停止した可能性を指摘できる。出土遺物には須恵器甕片、弥生土器片などがある。

099SX085（第189図）

断面Ｕ字形を呈する溝様の道路側溝である。検出面での幅0.3m、現存深度0.15m を測る。埋土は茶褐色粘質土の単一土であり、099SX080と同様に人為的に埋め戻された可能性が想定される遺構である。



第189図　SX085土層断面実測図　(1/40)



第190図　SX085出土遺物実測図　(1/4)

出土遺物（第190図）

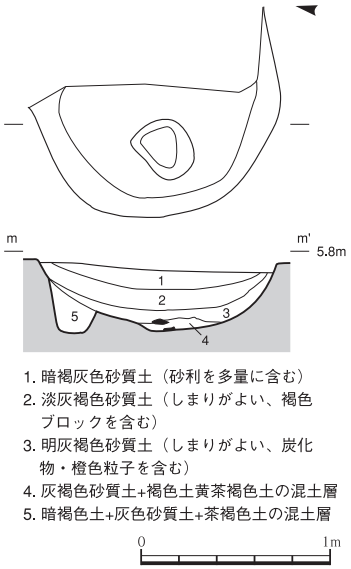
001は須恵器高台付坏の底部破片である。内外面とも淡灰色を呈し、回転ナデにより調整される。約１／４が遺存しており、復元底径9.0㎝を測る。002は土師器坏の底部片である。底部約２／３が遺存する。外面・淡黄白色～黄橙色、内面・淡黄橙色を呈し、胎土中には石英、角閃石、橙色粒子を含む。復元底径7.5㎝を測り、外器面には回転ヘラミガキ、底部付近には回転ヘラケズリが施される。003は土師器高坏の脚部片である。淡橙色を呈し、胎土中には石英、角閃石、長石、橙色粒子等を内包する。器面調整に関しては、内器面はケズリ、外器面には回転ヘラミガキが施される。

貯蔵穴（SX）

調査区内には弥生時代の貯蔵穴と考えられる円形土坑が点在する。以下には貯蔵穴と考えられる遺構について概要を記す。

099SX005（第191図）

調査区南部分の現代撹乱の間において確認された貯蔵穴である。プランの半分以上が撹乱穴により欠失する。遺存部分から推定される平面プランは円形を呈していたと思われ、推定径1.2m、底面までの現存深度0.35m を測る。底面は緩やかな皿状を呈しており、遺構中央床面からやや西に寄った部分において円形の窪みが認められる。堆積土層の観察によれば、前述の窪みを被覆する第４層土以外はレンズ状堆積を示しており、自然堆積によるものと考えられる。埋土内からの出土遺物は概して少なく、弥生時代中期に比定される土器小片が少量出土しているのみである。図化可能な資料はない。



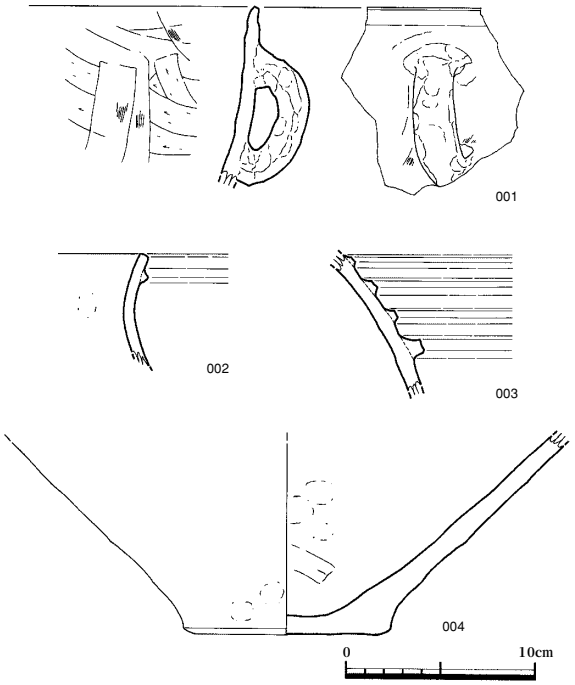
第191図　SX005平面・土層断面実測図　(1/40)

099SX018

099SX005と切り合いを有する現代撹乱穴の北側部分において検出した貯蔵穴と推定される土坑である。本遺構も099SX005と同様に半分以上を現代撹乱穴により欠失する。遺存部分から推定される平面形状は円形であり、推定径0.4m を測る。断面形状、埋土状況、規模等は099SX005に類似する。

出土遺物（第192図）

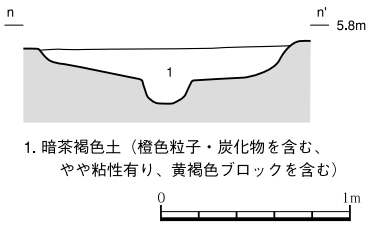
001は粘土紐によるタテ方向に貼付された把手をもつ口縁部破片である。破片資料のため全体形状は不明であるが、ジョッキ形、あるいは甑のような形状が推定される。口縁端部は舌状に整形されており、内外面の色調は淡橙白色を呈する。外器面はナデ、内器面はヘラ状工具によるナデ調整の痕跡を明瞭に残す。胎土中には石英、角閃石、長石、橙色粒子を含む。**002**は直口壺の口縁部破片である。若干外反気味に直立する口縁端部下位に一条の三角突帯が貼付される。外面・淡黄白色、内面・淡茶褐色を呈し、胎土中には石英、角閃石、橙色粒子、金雲母を内包する。器面調整は非常に丁寧なナデ調整が施される。**003**は断面**M**字状を呈する突帯をもつ壺形土器の肩部破片である。外面・淡茶褐色、内面・淡黄白色を呈し、丁寧なヨコナデ調整が施される。**004**は弥生時代中期に比定される壺の底部破片である。内外面とも淡黄白色を呈し、胎土中には石英、角閃石、長石、橙色粒子を含む。復元底径11.0㎝を測る。これらの遺物様相は弥生時代中期末を中心とする時期のものであり、本遺構の機能時期を示唆している。



第192図　SX018出土遺物実測図　(1/4)

099SX088（第193図）

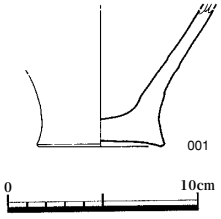
調査区の中央付近で検出した円形土坑である。南側半分を現代撹乱穴により欠失する。推定径1.3m、現存深度0.3m を測り、底面中央に径0.2m、深さ0.1m の柱穴を配置する。出土遺物には須玖式系と推定される土器破片などがあるが、出土遺物量は概して少ない。堆積埋土は暗茶褐色土の単一土層であり、黄褐色ブロック土を含むことなどから人為的に埋め戻された可能性が想定される。



第193図　SX088土層断面実測図
(1/40)

出土遺物（第194図）

001は出土遺物の中で唯一図化の可能な資料である。底部形態は底面近くで若干くびれる形状を示し、底面は若干上げ底状を呈している。復元底径6.4㎝を測り、外面・淡橙褐色、内面・淡茶黒色を呈し、胎土中には石英、角閃石、長石、白色粒子などを含む。内外器面ともナデにより調整される。底部形態から断面「く」字状を呈する東北部九州系の甕底部と推定される。



第194図　SX088出土遺物実測図　(1/4)

099SX092（第195図）

第69次調査区の南端にあたり、当調査区と接する部分に位置する土坑である。遺構の大半は第69次調査区に展開する。円形プランを呈し長径1.3m を測る。堆積埋土は上下二層に分層可能であり、特に下層には暗褐色ブロック土を内包しており、人為的な埋め戻しが行われた可能性がある。遺構底面の中央付近に相当すると考えられる部分に円形の窪みが配置される。出土遺物は概して少ないが、出土する土器小片はいずれも弥生時代中期に比定されるものである。

出土遺物（第196図）

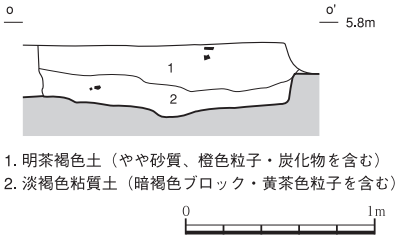
001は堆積埋土の第２層中から出土した下城式系甕形土器の口縁部破片である。口縁部で約１/８が遺存する資料である。内外面とも淡茶褐色を呈し、土器胎土中には石英、角閃石、長石などを含む。口縁端部から外面下位に貼付される１条の突帯までにある程度の長さを有し、下城式甕の中でも比較的新しい特徴を備えている。中期後半以降のものと推定される。

099SX096（第197図）

099SD003と099SD010の間において検出した土坑である。溝状遺構をはじめ、周辺の後出する遺構により平面プランを窺い知ることのできない程遺構縁辺は欠失する。検出面からの現存深度 0.3m を測る。堆積埋土は上下二層に分層することが可能であるが、第１層、第２層間には不整合面と考えられる部分もあり、第１層土は掘り返しに伴う埋土である可能性がある。第１層土、第２層土ともブロック土を含み、人為的な埋め戻しによるものと推定される。出土遺物は少なく、弥生時代中期に比定される弥生土器蓋の小片が出土したのみであり、図化可能な遺物の出土はなかった。

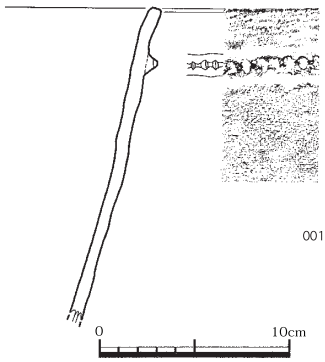
099SX112（第198図）

099SD003の底面において確認した円形の土坑である。現存径1.7m、深度0.2m を測る。埋土は上下三層に分けることができるが、出土遺物は少ない。第１層中から須玖式鉢と考えられる破片、第２層中から弥生土器甕口縁部、底部小片が出土したのみである。遺構底面中央には径0.7m 程度の窪みが配置される。堆積土内にはブロック土を内包しており、人為的な埋め戻し行為が行われた可能性を指摘することができる。

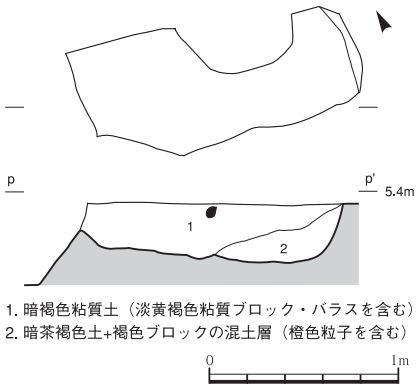


1. 明茶褐色土（やや砂質、橙色粒子・炭化物を含む）
2. 淡褐色粘質土（暗褐色ブロック・黄茶色粒子を含む）

第195図　SX092土層断面実測図　(1/40)

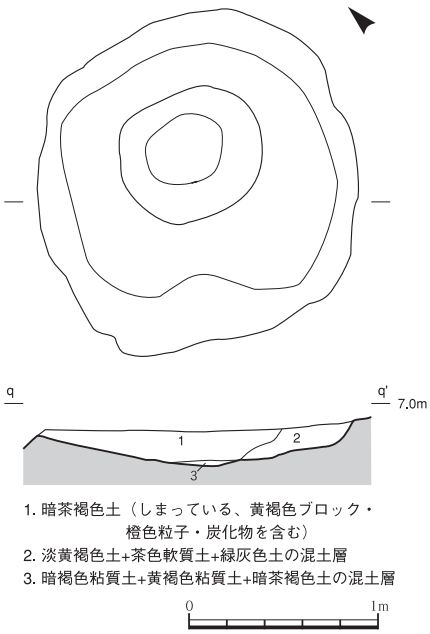


第196図　SX092出土遺物実測図　(1/4)



1. 暗褐色粘質土（淡黄褐色粘質ブロック・バラスを含む）
2. 暗茶褐色土+褐色ブロックの混土層（橙色粒子を含む）

第197図　SX096平面・土層断面実測図　(1/40)



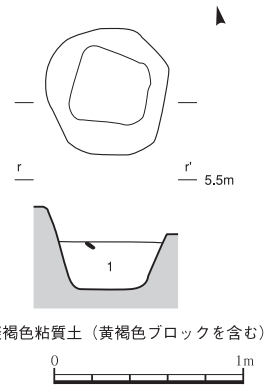
1. 暗茶褐色土（しまっている、黄褐色ブロック・
橙色粒子・炭化物を含む）
2. 淡黄褐色土+茶色軟質土+緑灰色土の混土層
3. 暗褐色粘質土+黄褐色粘質土+暗茶褐色土の混土層

第198図　SX112平面・土層断面実測図　(1/40)

その他の遺構

099SX021（第199図）

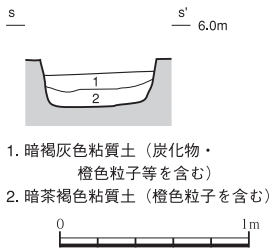
099SD003の南肩部分で確認したピット状の遺構である。円形プランを呈し、径0.6m、現存深度0.25mを測る。出土遺物には土器小片があり、弥生時代中期後半に比定される断面M字状の突帯をもつ壺小破片、須恵器甕破片、8世紀後半に比定される豊後大分形甕の破片等が出土している。



第199図　SX021平面・土層断面実測図（1/40）

099SX025（第200図）

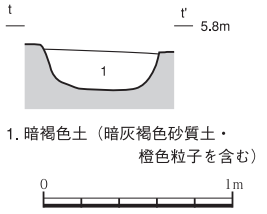
099調査区北東部分で確認された平面円形を呈するピット状の遺構である。平面径0.6m、現存深度0.2mを測る。出土遺物には弥生中期に比定される東北部九州系甕片、須恵器甕破片などが出土している。堆積埋土は上下2層に分層することができるが、いずれの土層も粘性を帯びている点を特徴とする。



第200図　SX025土層断面実測図　(1/40)

099SX089（第201図）

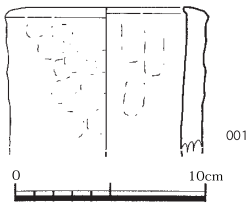
099SX092と切り合い関係を有するピット状の遺構である。円形プランを呈し、検出面での径0.6m、現存深度0.2mを測る。埋土は暗褐色土の単一土層である。出土遺物は少なく、第202図に示した製塩土器1点のみである。



第201図　SX089土層断面実測図　(1/40)

出土遺物（第202図）

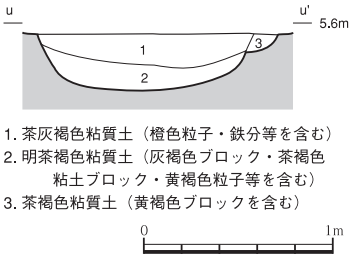
001は8世紀後半～9世紀前半に比定される製塩土器の口縁部破片である。内外面とも淡橙褐色を呈し、硬く焼き上がっている。口縁端部はヘラ切り後未調整であり、外器面には指オサエの痕跡が随所に認められる。胎土中には石英、角閃石、長石、橙色粒子を含む。復元口径8.2cmを測る。



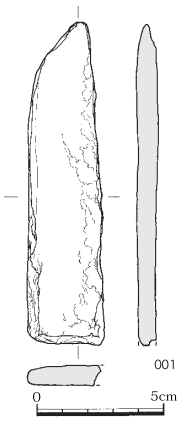
第202図　SX089出土遺物実測図　(1/4)

099SX107（第203図）

調査区北側の狭小な部分のほぼ中央地点において確認された土坑である。099SD085により切られている。半分以上が欠損し、全体形状は不明であるが、遺存部分から推定される形態は長楕円形を呈していたものと推定される。長軸径1.2mを測る。堆積埋土は大きく2層に分けることができ、特に下層埋土にはブロック土を内包する。出土遺物には土師器小片、須恵器片、石器などがある。石器以外は図化できなかったが、諸特徴から古代（8世紀代）に帰属するものであると考えられる。



第203図　SX107土層断面実測図　(1/40)



第204図　SX107出土遺物実測図　(1/3)

出土遺物（第204図）

001は緑色結晶片岩製の石器である。厚み0.8cm、重量59.1gを測り、特に刃部を形成したような痕跡は認められない。幅広い面には研磨痕が認められ、砥石として使用された可能性が考えられる。

099SX113

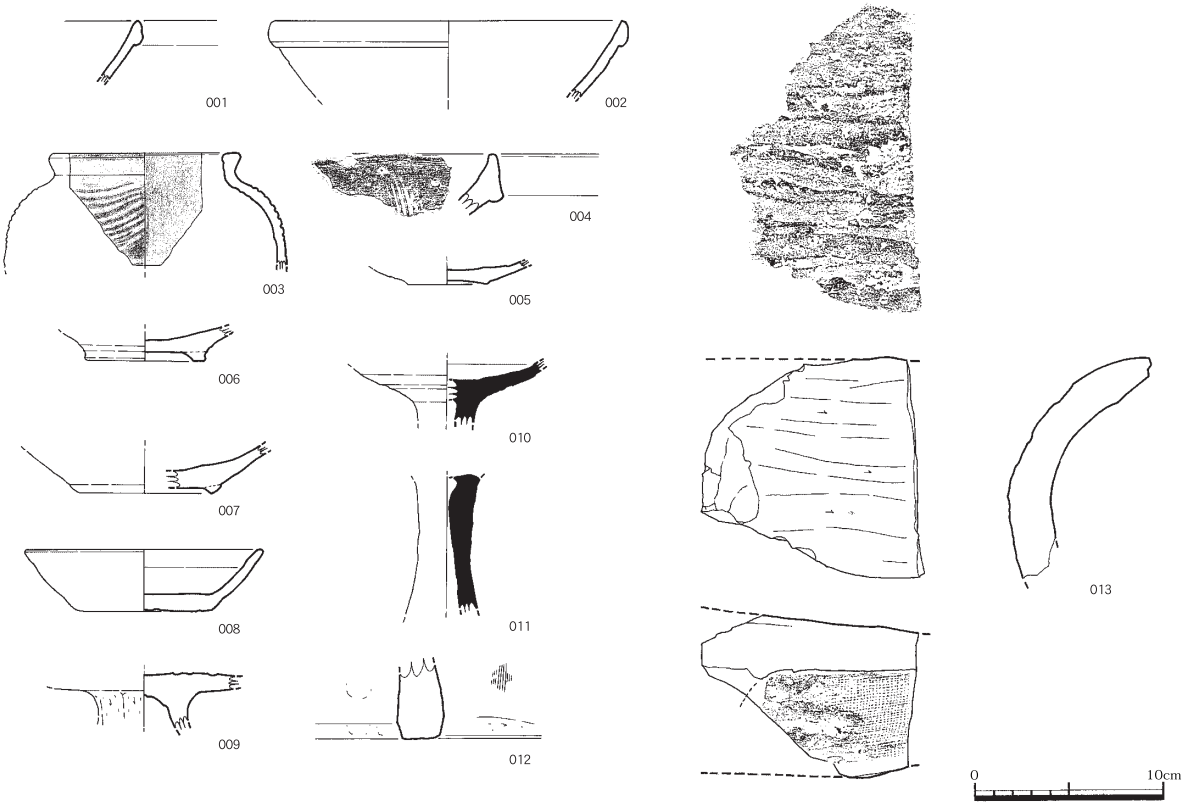
調査区南半のほぼ中央で検出した土坑である。西側部分を099SX039に切られている。遺構内堆積埋土は暗茶褐色土の単一土であり、黄褐色ブロックを多く含み、人為的に埋め戻されたものと推定される。出土遺物には土器小片が少量あるのみである。

その他の遺物

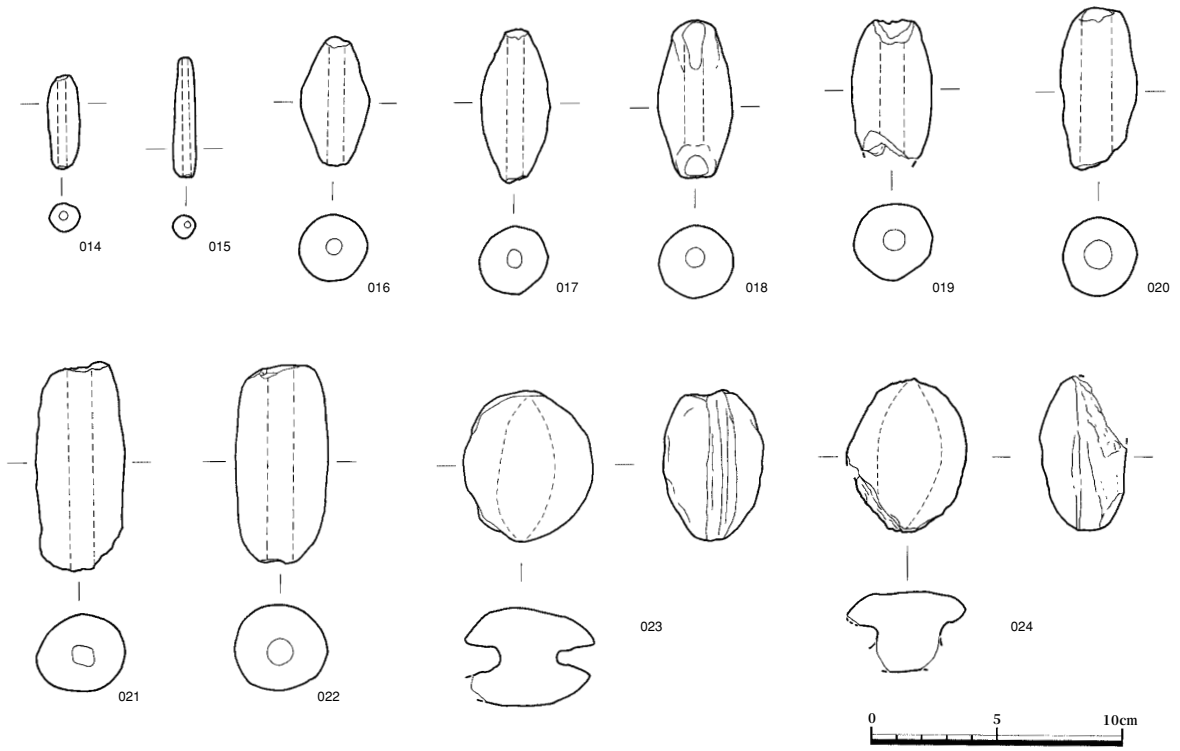
本項では、包含層ならびに道路状遺構に伴う土器敷き遺構などに伴いながら、原位置を確認できなかった遺物等について説明を加える。ちなみにこのような遺物についてはすべて「表土出土」としている。

表土出土遺物（第205～207図）

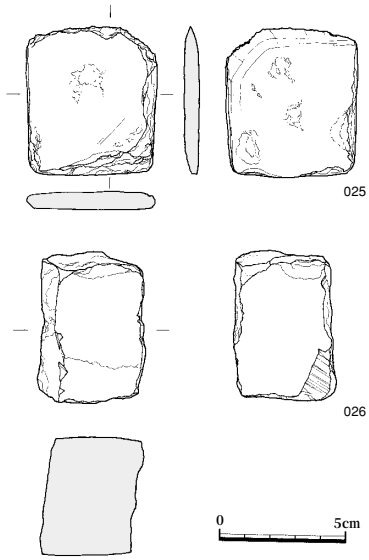
001、002は中国産白磁碗Ⅳ類の口縁部である。002は復元口径18.2cmを測る。003は陶器甕の口縁部であり、胎土色は茶褐色を呈する。平坦に成形された口縁部を有する。外器面にはタタキ痕が残り、復元口径9.8cmを測る。唐津系の陶器であろう。004は備前擂鉢の口縁部破片であり、赤茶褐色を呈す



第205図　表土出土遺物実測図①　(1/4)



第206図　表土出土遺物実測図②　(1/3)



第207図　表土出土遺物実測図③　(1/3)

る。乗岡編年中世Ⅳ期に比定され、15世紀前葉の所産年代が考えられる。**005**は碁笥底状の底部を有する磁器皿の底部破片である。淡灰色の胎土を有し、復元底径4.1㎝を測る。**006**は白色系研磨土師器椀の底部破片である。淡茶白色を呈し、内器面にはヘラミガキが施される。高台形状から12世紀初頭前後のものと推定される。胎土中には石英、長石などを内包する。復元底径6.2㎝を測る。**007**は**006**と同種の白色系研磨土師器椀の底部破片である。淡茶白色を呈し、内器面にヘラミガキを施す。胎土中には石英、長石、金雲母を含み、復元底径7.0㎝を測る。本資料は高台形状が断面三角形に変化しており、**006**に後出するものと推定される。**008**は土師器坏である。全体約１/３が遺存しており、復元口径12.6㎝、器高3.3㎝、底径7.0㎝を測る。底部はヘラ切り離し後ナデにより調整され、器表面はヨコナデにより調整される。淡赤褐色を呈し、胎土中には石英、角閃石、長石、橙色粒子を含む。８世紀末前後に比定される資料である。**009**は土師器高坏の脚柱部と坏部との接合部である。脚柱部はヘラ削りにより面取りがなされている。淡赤橙色を呈し、胎土中には石英、角閃石、長石、白色粒子、橙色粒子などを含む。８世紀中頃～後半に比定される。**010**は須恵器高坏の坏部破片である。暗灰色を呈し、器表面は回転ナデにより調整される。**011**は須恵器高坏の脚部片である。淡灰色を呈し、外器面は最終調整として回転ナデ調整がなされている。脚内面にはケズリが施される。**012**は円筒埴輪の基底部の破片である。淡茶褐色を呈し、胎土中には石英、角閃石、長石、白色粒子を含む。外器面はタテ方向のハケ目調整とナデ、ケズリ、内器面はナデによる調整が

施される。**013**は丸瓦破片である。凸面にはヘラケズリが、凹面には布目が遺存する。淡褐色を呈し、胎土中には石英、角閃石、白色粒子を含む。

014～024は土錘である。紡錘タイプのもの（**014～022**）とレモン形タイプ（**023・024**）のものの二種がある。紡錘形のものは、所産年代の推定は困難であるが、レモン形タイプのものは、８世紀後半～９世紀前半の遺構に伴う例があり、当該時期のものである可能性が高い。

025は緑色結晶片岩の石器である。現存長5.8㎝、幅5.2㎝、厚さ0.6㎝、重量46.5g を測り、端部に刃部を形成する。**026**は泥岩製の砥石である。現存長6.0㎝、重量179.2g を測る。

第48表　遺物観察表①

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（㎝）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
099**SD**003-001	157	陶磁器												別表
099**SD**003-002	157	陶磁器												別表
099**SD**003-003	157	陶磁器												別表
099**SD**003-004	158	石器												別表
099**SD**006-001	160	弥生	小鉢	角閃石 長石 橙色粒子	淡茶白色	淡茶白色 ～黒色	ナデ 指オサエ	ナデ 指オサエ	(8.0)	6.9		3.0	全体１/２	外面黒斑
099**SD**006-002	160	陶磁器												別表
099**SD**006-003	160	陶磁器												別表
099**SD**006-004	160	陶磁器												別表
099**SD**006-005	160	陶磁器	器種											別表
099**SD**006-006	160	陶磁器												別表
099**SD**006-007	160	陶磁器												別表
099**SD**006-008	160	陶磁器												別表
099**SD**006-009	160	陶磁器												別表
099**SD**006-010	160	陶磁器												別表
099**SD**006-011	160	土錘												別表
099**SD**007-001	162	陶磁器												別表
099**SD**007-002	162	陶磁器												別表
099**SD**008-001	164	須恵器	不明	角閃石 長石 白色粒子	淡灰色	淡灰色	ナデ	ナデ 回転ナデ					底部片	
099**SD**008-002	164	土師器	坏	角閃石	淡橙褐色	淡橙褐色	ミガキ **a**２	ミガキ **a**２	(15.0)				口縁部片	
099**SD**010-001	166	瓦質土器	鉢	石英 角閃石 長石 白色粒子	淡灰褐色	淡灰褐色	ナデ	ナデ					口縁部片	
099**SD**010-002	166	瓦質土器	擂鉢	角閃石 長石	淡灰褐色	淡灰褐色	ナデ スリ目	ナデ					胴部片	
099**ST**002-001	169	古銭												別表
099**ST**002-002	169	古銭												別表
099**ST**002-003	169	古銭												別表
099**ST**002-004	169	古銭												別表
099**ST**002-005	169	古銭												別表
099**ST**002-006	169	古銭												別表
099**ST**002-007	170	土師質	甕	石英 角閃石 橙色粒子	淡橙褐色	淡橙褐色	ナデ 指オサエ	ナデ				(4.1)	底部のみ	黒斑
099**ST**002-008	170	土師質	甕	石英 角閃石 長石 白色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ 指オサエ	ナデ				(6.4)	底部１/２	
099**ST**002-009	170	土師器	高坏	石英 角閃石 長石	淡灰白色	淡灰白色	ナデ	ナデ					胴部～脚部片	研磨土師器
099**ST**009-001	172	古銭												別表
099**ST**009-002	172	古銭												別表
099**ST**009-003	172	古銭												別表
099**ST**009-004	172	古銭												別表
099**ST**009-005	172	古銭												別表
099**ST**009-006	172	古銭												別表
099**ST**011-001	173	瓦質土器	鉢	角閃石 長石 橙色粒子	淡茶灰色	淡茶灰色	ナデ	ナデ					口縁部片	
099**ST**011-002	173	須恵器	坏	角閃石 長石	淡茶灰色	淡茶灰色	ヨコナデ	ナデ ヨコナデ					口縁部片	
099**ST**011-003	173	土師器	高台付坏	長石 白色粒子	淡黄褐色	淡黄褐色	ミガキ	ナデ					底部片	研磨土師器
099**ST**016-001	175	弥生	甕	角閃石 長石 橙色粒子	淡橙褐色	淡橙褐色	ナデ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	ハケ目（５本／㎝）
099**SF**020-001	178	須恵器	蓋	長石	暗茶灰色	淡灰色	回転ナデ	ナデ	2.0				ツマミ部のみ	※口径はツマミ径

第49表　遺物観察表②

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
099**SF**020-002	178	須恵器	蓋	長石	淡灰褐色	淡灰褐色	回転ナデ	回転ナデ					口縁部片	
099**SF**020-003	178	須恵器	蓋	角閃石 長石	淡灰色	淡灰色	回転ナデ	回転ナデ					口縁部片	
099**SF**020-004	178	須恵器	坏	角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	回転ナデ	ナデ 回転ナデ	(12.4)				口縁部１/８	
099**SF**020-005	178	須恵質	壺	角閃石 長石	淡灰褐色	淡灰褐色	ナデ ヨコナデ	ヨコナデ タタキ後 ナデ					口縁部片	
099**SF**020-006	178	土師質	甕	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ヨコナデ	ナデ ヨコナデ					口縁部片	豊後大分形
099**SF**020-007	178	土師器	高台付坏	石英 角閃石 長石 白色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	回転ヘラミガキ	ナデ 回転ヘラミガキ 回転ヘラ切り離し後ナデ				(10.6)	底部のみ	
099**SF**020-008	178	土師器	坏	石英 角閃石 長石	淡茶色	淡茶褐色	ナデ ヨコナデ	ヨコナデ 回転ヘラ切り離し後ナデ	13.1	3.9		9.7	ほぼ完存	
099**SF**020-009	178	土師器	坏	石英 角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ヨコナデ	ヨコナデ ヘラ切り離し後ナデ	(12.8)	4.1		(6.8)	全体１/４	
099**SF**020-010	178	土師器	坏	石英 角閃石 長石	淡橙褐色	淡橙褐色	ナデ ヨコナデ	ヨコナデ ヘラ切り離し後ナデ	(14.0)	2.9		(9.6)	全体１/４	
099**SF**020-011	178	土師器	坏	石英 角閃石 橙色粒子	淡橙白色	淡橙白色	ナデ 指オサエ 手持ちヘラミガキ	ナデ 指オサエ 手持ちヘラミガキ	11.2	3.6		9.2	ほぼ完存	都城系 暗文 穿孔
099**SF**020-012	178	土師質	甑	石英 角閃石 橙色粒子	淡赤橙色	淡赤橙色	あて具痕 ヨコナデ	タタキ後カキメ風 ナデ ヨコナデ				(18.0)	胴部～底部１/６	
099**SF**020-013	178	土師質	甑	石英 角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ヨコナデ	ハケ目 ナデ ヨコナデ					口縁部１/８	ハケ目（５～７本／cm）
099**SF**020-014	178	土錘												別表
099**SX**031-001	181	須恵質	甕	石英 角閃石 長石	淡灰褐色	淡灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ					口縁部片	
099**SX**035-001	181	須恵質	甕	角閃石 長石	淡灰色	淡灰色	ヨコナデ	ヨコナデ タタキ後 ヨコナデ	(22.7)				口縁部片	
099**SX**035-002	181	土錘												別表
099**SX**036-001	181	須恵質	壺	角閃石 長石	淡灰褐色	淡灰褐色	ナデ 回転ナデ	ナデ 回転ナデ				(10.6)	底部１/４	
099**SX**055-001	181	須恵器	蓋		淡灰色	淡灰色	ナデ	ナデ	2.9				ツマミ部のみ	※口径はツマミ径
099**SX**055-002	181	金属製品												別表
099**SX**055-003	181	金属製品												別表
099**SX**057-001	181		円筒埴輪	石英 角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	工具ナデ	ハケ目 ヨコナデ					胴部片	ハケ目（５・10本／cm）
099**SX**071-001	181	石器												別表
099**SX**122-001	184	金属製品												別表
099**SX**090-001	188	土師器	小皿	角閃石 橙色粒子	淡黄橙色	淡黄橙色	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラ切り離し	9.2	2.0		6.6	完存	
099**SX**090-002	188	土師器	坏	石英 角閃石 砂粒	淡橙黄色	淡橙黄色	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラ切り離し後ナデ	(13.8)	3.7		8.3	全体２/３	
099**SX**090-003	188	土師器	高台付坏	石英 角閃石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	回転ナデ	ナデ 回転ナデ	(14.8)	5.5		8.0	全体１/２	
099**SX**085-001	190	須恵器	高台付坏		淡灰色	淡灰色	ナデ	ナデ 回転ナデ				(9.0)	底部１/４	
099**SX**085-002	190	土師器	坏	石英 角閃石 橙色粒子	淡黄橙色	淡黄白色～黄橙色	ナデ	回転ヘラケズリ 回転ヘラミガキ				(7.5)	底部２/３	
099**SX**085-003	190	土師器	高坏	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡橙色	淡橙色	ケズリ	回転ヘラミガキ					脚部片	
099**SX**018-001	192	弥生	不明	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡橙白色	淡橙白色	ヨコナデ 工具ナ	ナデ 指オサエ ヨコナ					把手部のみ	
099**SX**018-002	192	弥生	直口壺	石英 角閃石 橙色粒子 金雲母	淡茶褐色	淡黄白色	ナデ 指オサエ	ナデ					口縁部片	

第50表　遺物観察表③

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
099**SX**018-003	192	弥生	壺	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡黄白色	淡茶褐色	ナデ 指オサエ	ヨコナ					胴部片	
099**SX**018-004	192	弥生	壺	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡黄白色	淡黄白色	ナデ 指オサエ 工具ナ	ナデ 指オサエ				(11.0)	胴下部～ 底部１／４	
099**SX**088-001	194	弥生	甕	石英 角閃石 長石 白色粒子	淡茶黒色	淡橙褐色	ナデ 指オサエ	ナデ 指オサエ				(6.4)	底部片	
099**SX**092-001	196	弥生	甕	石英 角閃石 長石 橙色粒子 緑色結晶片岩	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ヨコナデ 指オサエ	ナデ ヨコナデ					口縁部～ 胴部１／８	下城式
099**SX**089-001	202		製塩土器	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡橙褐色	淡橙褐色	ナデ 指オサエ	ナデ 指オサエ ヘラ	(8.2)				口縁部２／３	
099**SX**107-001	204	石器												別表
099**SZ**000-001	205	陶磁器												別表
099**SZ**000-002	205	陶磁器												別表
099**SZ**000-003	205	陶磁器												別表
099**SZ**000-004	205	陶磁器												別表
099**SZ**000-005	205	陶磁器												別表
099**SZ**000-006	205	土師器	椀	石英 長石 橙色粒子	淡茶白色	淡茶白色	ヘラミガキ	ナデ ヨコナ				(6.2)	底部２／３	白色研磨土師器
099**SZ**000-007	205	土師器	椀	石英 長石 金雲母	淡茶白色	淡茶白色	ヘラミガキ	ナデ				(7.0)	底部１／５	白色研磨土師器
099**SZ**000-008	205	土師器	坏	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡赤褐色	淡赤褐色 ～赤褐色	ナデ ヨコナデ	ヨコナデ ヘラ切り 離し後ナデ	(12.6)	3.3		(7.0)	全体１／３	ススス
099**SZ**000-009	205	土師器	高坏	石英 角閃石 長石 白色粒子 橙色粒子	淡赤橙色	淡赤橙色	ナデ ケズリ後ナデ	ミガキ 面取り					坏部～脚部の一部片	
099**SZ**000-010	205	須恵器	高坏	長石 白色粒子	暗灰色	暗灰色	回転ナデ	回転ナデ					坏部～脚上部片	
099**SZ**000-011	205	須恵器	高坏	石英 角閃石 長石	淡灰色	淡灰色	ケズリ	回転ナデ					脚部片	
099**SZ**000-012	205		円筒埴輪	石英 角閃石 長石 白色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ	ハケ目 ヨコナデ ケズリ					底部片	ハケ目（約９本／cm）
099**SZ**000-013	205	瓦	丸瓦	石英 角閃石 白色粒子	暗灰色	淡灰色	布目	ケズリ 面取						※内面に凹面 外面に凸面を記入
099**SZ**000-014	206	土錘												別表
099**SZ**000-015	206	土錘												別表
099**SZ**000-016	206	土錘												別表
099**SZ**000-017	206	土錘												別表
099**SZ**000-018	206	土錘												別表
099**SZ**000-019	206	土錘												別表
099**SZ**000-020	206	土錘												別表
099**SZ**000-021	206	土錘												別表
099**SZ**000-022	206	土錘												別表
099**SZ**000-023	206	土錘												別表
099**SZ**000-024	206	土錘												別表
099**SZ**000-025	207	石器												別表
099**SZ**000-026	207	石器												別表

第51表　陶磁器観察表

遺物番号	挿図番号	器種		装飾		法量（cm）			産地	備考
		種類	器種	絵付 釉薬	文様	口径	器高	底径		
099**SD**003-001	157	磁器	碗	染付	内 圏線 外 圏線	(10.0)			肥前系	
099**SD**003-002	157	陶器	不明					(5.2)	唐津系	
099**SD**003-003	157	磁器	碗	青磁				(6.2)	中国産	内面見込み釉剥ぎ 高台内無釉
099**SD**006-002	160	陶器	筒型碗	透明	外 四方襷	(7.0)			肥前系	
099**SD**006-003	160	陶器	碗	染付	外 圏線	(8.0)			肥前系	陶胎染付
099**SD**006-004	160	陶器	碗		外 沈線	(9.4)			京信楽系	
099**SD**006-005	160	陶器	碗	染付	外 圏線	(11.4)	6.8	(4.6)	肥前系	陶胎染付
099**SD**006-006	160	焼締	片口						唐津系	片口部のみ
099**SD**006-007	160	陶器	擂鉢	鉄釉		(26.6)				
099**SD**006-008	160	陶器	擂鉢			(30.2)	12.8	(10.6)	唐津系	
099**SD**006-009	160	陶器	擂鉢			(30.2)	12.4	(16.0)		
099**SD**006-010	160	陶器	擂鉢			(38.0)				
099**SD**007-001	162	磁器	碗	染付		(10.0)			肥前系	
099**SD**007-002	162	磁器	瓶	染付	外 唐草				肥前系	
099**SZ**000-001	205	磁器	碗	白磁					中国産	大宰府編年Ⅳ類
099**SZ**000-002	205	磁器	碗	白磁		(18.2)			中国産	大宰府編年Ⅳ類
099**SZ**000-003	205	陶器	甕			(9.8)				
099**SZ**000-004	205	焼締	擂鉢						備前	乗岡編年中世Ⅳ期
099**SZ**000-005	205	磁器	皿		内 圏線			(4.1)	中国産	

第52表　土錘観察表

遺物番号	挿図番号	器種	胎土	法量（cm）			備考
		種類		長さ	径	重さ (g)	
099**SD**006-011	160	土錘	角閃石 長石	(4.3)	1.2	(4.6)	
099**SF**020-014	178	土錘	石英 角閃石 橙色粒子	(6.2)	1.7	(18.4)	ほぼ完存
099**SX**035-002	181	土錘	角閃石 長石	(6.2)	2.9	(29.4)	両端欠損
099**SZ**000-014	206	土錘	角閃石 長石	3.7	1.2	4.8	完存
099**SZ**000-015	206	土錘	角閃石 長石	4.7	0.9	(3.6)	ほぼ完存
099**SZ**000-016	206	土錘	石英 角閃石	5.1	2.7	(28.4)	
099**SZ**000-017	206	土錘	石英 角閃石 長石	6.1	2.7	34.7	完存
099**SZ**000-018	206	土錘	石英 角閃石 長石	6.3	3.0	(40.7)	
099**SZ**000-019	206	土錘	角閃石 長石 橙色粒子	(5.5)	3.2	(37.8)	
099**SZ**000-020	206	土錘	石英 角閃石 長石	6.4	3.1	(40.9)	
099**SZ**000-021	206	土錘	角閃石 長石	8.3	3.6	(73.6)	
099**SZ**000-022	206	土錘	石英 角閃石 長石	7.8	3.7	92.3	完存
099**SZ**000-023	206	土錘	石英 角閃石 長石	5.9		(106.0)	幅5.1cm 厚さ3.9cm
099**SZ**000-024	206	土錘	角閃石 長石 橙色粒子	6.0		(64.6)	幅(4.7cm) 厚さ3.4cm

第53表　金属製品観察表

遺物番号	挿図番号	器種 種類	素材	法量（cm） 長さ	幅	厚さ	重さ（g）	備考
099**SX**055-002	181	釘	鉄	3.2			4.4	
099**SX**055-003	181	不明	鉄	(4.4)			(5.5)	
099**SX**122-001	184	不明	青銅	(3.9)	(5.3)	1.0	33.1	

第54表　石器観察表

遺物番号	挿図番号	器種 種類	石材	法量（cm） 長さ	幅	厚さ	重さ（g）	備考
099**SD**003-004	158	石帯	頁岩	(2.2)	(2.0)	0.6	(5.1)	
099**SX**071-001	181	石鏃	姫島産黒曜石	2.3	1.1	0.4	(0.8)	一部欠損
099**SX**107-001	204	石包丁	緑色結晶片岩	(12.8)	3.1	0.8	(59.1)	研磨痕
099**SZ**000-025	207	不明	緑色結晶片岩	5.8	5.2	0.6	46.5	
099**SZ**000-026	207	砥石	泥岩	6.0	4.0	4.7	179.2	

第55表　古銭観察表

遺物番号	挿図番号	種　　類	出土位置	出土状態	備考
099**ST**002-001	169	古寛永通宝１枚			
099**ST**002-002	169	古寛永通宝１枚			
099**ST**002-003	169	古寛永通宝１枚			
099**ST**002-004	169	古寛永通宝１枚			
099**ST**002-005	169	新寛永通宝１枚			
099**ST**002-006	169	古寛永通宝１枚			
099**ST**009-001	172	新寛永通宝１枚			
099**ST**009-002	172	古寛永通宝１枚			
099**ST**009-003	172	新寛永通宝１枚			裏に「文」
099**ST**009-004	172	新寛永通宝１枚			裏に「文」
099**ST**009-005	172	新寛永通宝１枚			
099**ST**009-006	172	不明１枚			

（４）下郡遺跡群第98・99次調査小結

今次の調査地点は、大分市大字下郡字辻2847−1番地他に所在し、調査は区画街路下郡南北線の築造に伴う事前調査として実施した。調査区はJR豊肥線軌道敷に隣接し、平成７年度に調査をおこなった第69次地点の南北両端に接するエリアに相当する。

調査の結果、弥生時代中期の貯蔵穴、溝状遺構、８世紀中頃から９世紀に比定される道路状遺構を確認することができた。道路状遺構に関しては、遺構の重要性に鑑み、盛土による保存措置をおこなっている。

本項では、第69次調査の道路遺構の調査成果を含め、今回検出した道路状遺構の構造的な特徴の抽出、下郡遺跡群内における発見の意義、さらにはそこから派生する課題等について提示する[註1]。

１．下郡遺跡群第98・99次調査地点において検出した道路状遺構の変遷について

本項では、第98・99次において検出した道路状遺構の変遷について、第69次調査[註2]の調査所見も踏まえ整理をおこなう。

本調査地点で確認された道路状遺構は、溝構造を呈する段階から路面幅が幅広の側溝を伴う道路への構造変化を調査所見により認識することができた。しかも、幅広の道路となった段階においても掘り込みを伴う点を明示することができた点は大きな成果といえる。

調査所見から６段階の時間経過に伴う変遷を明らかにすることができた。

第１段階

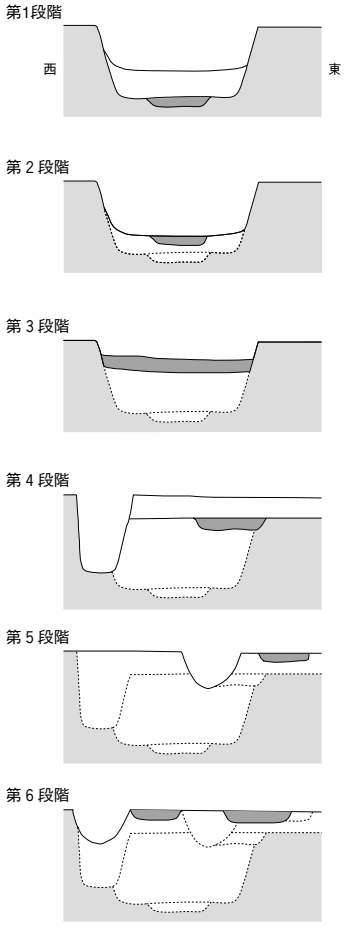
逆台形を呈する溝形状をなし、検出面での幅1.8m、深さ0.8m、路面幅1.1mを測る。底面直上には灰白色粘土を主体とした粘質土が被覆され、その下部には径0.6mを測る不定円形の連続土坑が規則的に配置される。連続土坑内には路面に被覆された灰白色粘土と同一の粘質土が充填され、上部からの加圧により硬質化する。

第２段階

第１段階の路面を暗褐色土と灰色粘土の混土により被覆する。路面を約20㎝程度かさ上げをおこない、新たな路面を形成する。この路面下にも第１段階と同様の連続土坑を確認することができる。

第３段階

第２段階の路面上に暗茶褐色土を敷設し、その上面に灰白色粘質土により路面を形成する。第１・２段階と異なる点は、先のふたつの段階がいずれも路床に連続土坑を伴っていたのに対し、第３段階には認められない。路面に帯状に分布する灰白色粘土の中央部分は周囲に比して若干窪んでいる。



第208図　道路状遺構変遷模式図



第209図　069SF001完掘状況



第210図　土師器甕埋納状況



第211図　第４段階土器敷設状況

第４段階

第１段階で掘削した溝をすべて埋めてしまい、道路構造は大きく変化する。路肩には側溝を掘削し、５m 以上の空間地（路面）を確保する。側溝は一連の溝にはならず、幅0.5～0.8m の長土坑を連続して配置する形態をとる。長土坑の底面は平坦でなく随所に凹凸が認められる。側溝の最深部分は検出面から0.8m を測る。路面に関しては後の改修等のため判然としないが、路床には長楕円形状の連続土坑を構築する。連続土坑内には底面に土器小片、小レキを充填する。随所に灰白色粘土塊が認められ、路面がこの粘質土により整備されていた可能性がある。また、土器小破片を路床上面に敷き詰めた状況が認められる部分も確認することができる。第４段階の道路築成に伴って第３段階の溝状道路が埋め戻されるが、この際に土師器甕の埋納が行われている（第69次調査）。この地点は第104・90・92次調査で確認されている東西道路[註3]との結節点にあたり、交差点を形成する地点に相当する。

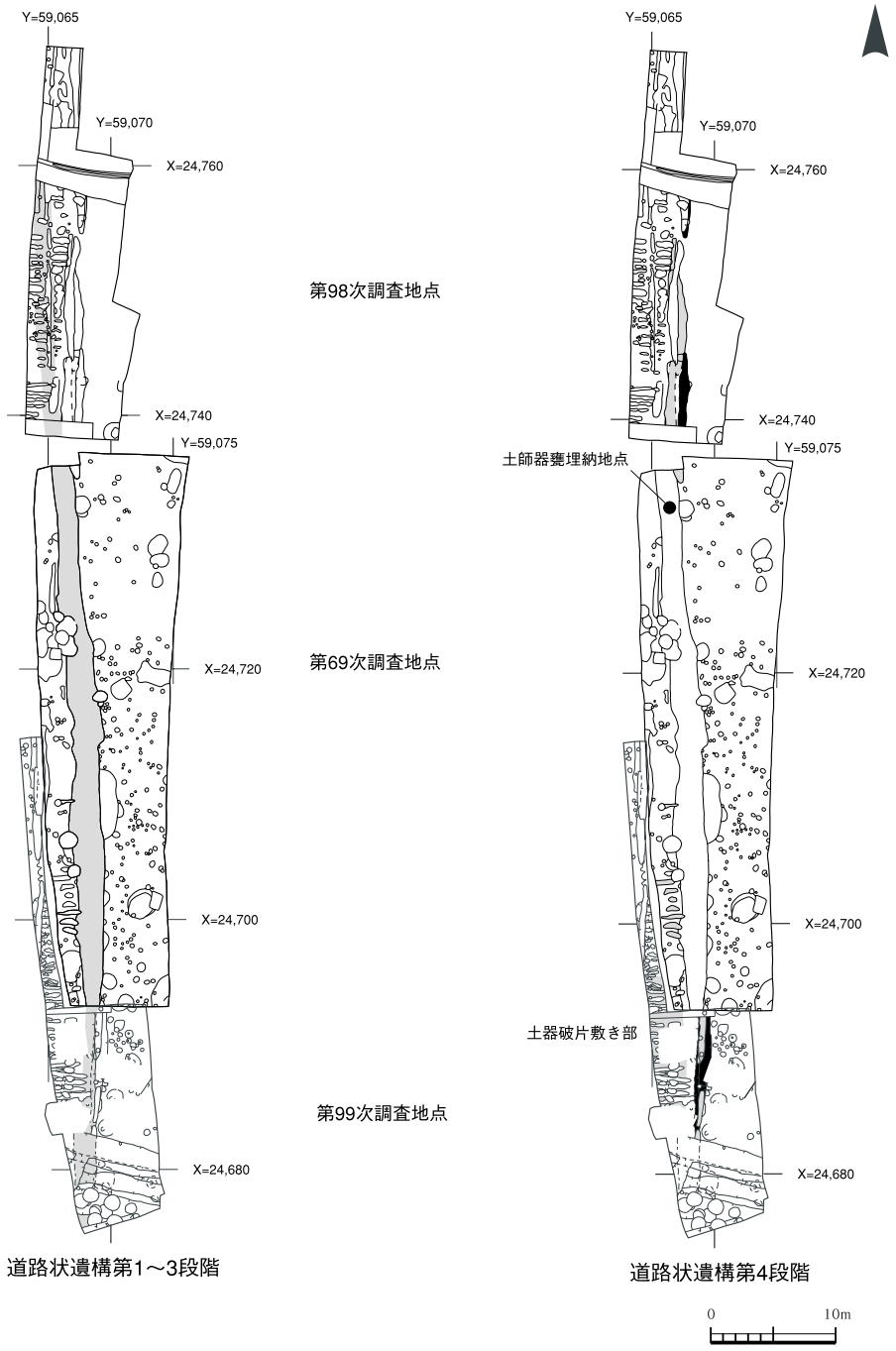
第５段階

路面幅が縮小したかあるいは道路中心部が西側へ移動したと考えられる段階。前段階の大規模な側溝は埋められ、前段階の側溝の1.2m ほど西に規模の小さな側溝が新たに造られる。

第６段階

側溝がふたたび東側に移動し、第４段階の側溝とほぼ同じ位置に掘りなおされる段階。側溝の規模は小さい。路面と推定される部分には、他の道路遺構の検出事例に通有な波板状凹凸面、連続土坑などと呼称される掘り込みを側溝にそって明瞭な形で確認することができる。道路の最終機能段階にあたる当段階には前述の波板状凹凸面、連続土坑構築面の上面に茶灰色砂質土を全面に被覆し舗装部材としている。この砂質土を敷設する際に９世紀末前後の土師器の埋納がおこなわれており、第６段階の機能時期を想定することができる。

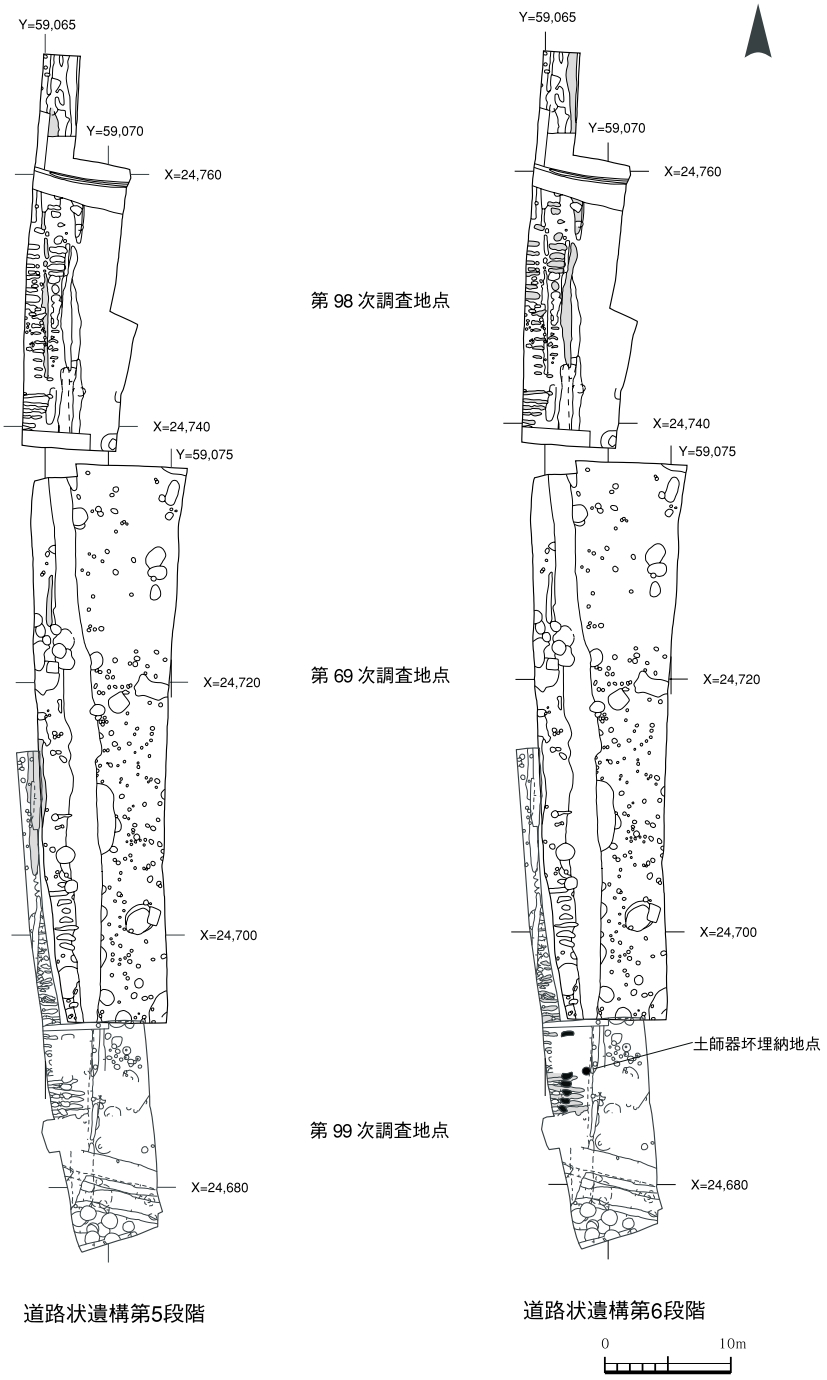
道路の路面幅については、第１段階から３段階が1.2～1.7m。第４段階から第６段階の幅員は道路



第212図　道路状遺構変遷図①

西側が JR 豊肥線下にあたり、把握することができないため、明示することはできないが、現状で確認できる路面幅から少なくとも 5 m 以上はあったものと判断される。

経年変化に伴う第 1 段階から第 6 段階の各道路状遺構の年代比定であるが、第 1 段階～ 3 段階の溝状を呈する道路状遺構が、埋土内の出土遺物から 8 世紀中頃～ 9 世紀初頭の所産年代を想定することができる。第 4 段階に相当する連続土坑内の土器小片の中には 9 世紀初頭に比定される土師器坏の破



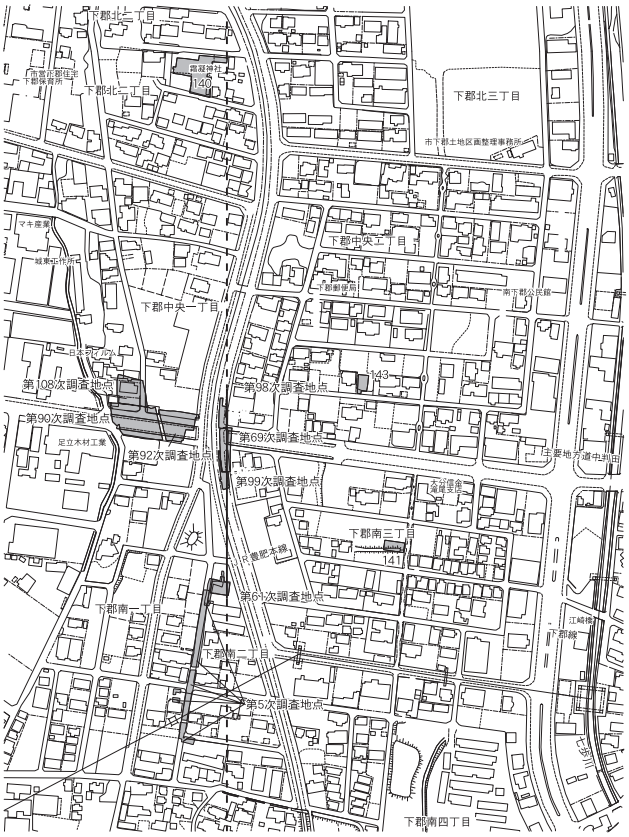
第213図　道路状遺構変遷図②

片などが散見されることから、9世紀初頭以降の構築と考えることができよう。第6段階に関しては、先述のように構築段階のものと推定される埋納土師器から9世紀末前後の年代を想定することができ、さらに、10世紀に比定される遺物の出土が認められない点から、道路の最終機能段階をほぼこの時期に求めることができよう。

2．既往の調査により検出された道路状遺構

下郡遺跡群内での古代道路状遺構は下郡遺跡群第61・69・90・92・98・99・104次調査地点で確認されている。この中で、第61・69・98・99次調査地点で確認されている道路跡は、国土座標系のほぼ同一のＹ軸上にて確認することができ、真南北基軸で構築された同一の南北道路跡と考えられる。これに対して、第90・92・104次は一連の東西道路跡であり、前述の道路から派生する道路遺構であると想定される。

これらの道路跡は、いずれも自然堤防上の最高位面にあたり、意識的に占地がおこなわれていたと考えられる。道路跡はほぼ現在のJR豊肥線と重複するように位置しており、安定ルートの確保を最優先におこなわれているJR豊肥線のルートと重なる点は偶然ではない。



第214図　下郡遺跡群古代道路推定ライン

以下では、これまで検出された道路状遺構の内容について主要な検出地点での所見を概説する。

下郡遺跡群第61次調査地点 SF003(註4)

第61次調査地点で検出された道路状遺構（061SF003）は溝形状を呈するものであり、検出面での幅2.1m、深さ0.8mを測り断面形状は逆台形をなす。路面にあたる底面の幅は約1.1mを測り、径約0.5mの連続土坑を規則的に配置する。底面で検出される連続土坑内部には灰白色粘土と黒茶褐色土、黄褐色土ブロックの混土の充填が認められ、切り合い関係を有しながら重複している部分も認められることから、複数回の改修がおこなわれたことが想定される。さらに連続土坑内の土壌は硬化しており、上部から強い加圧が行われたと考えられる。調査区北壁の土層断面観察結果によると、最下部の当初の路面築造後に２つの路面の存在が認識でき、都合３段階の道路構築を想定することができる。

第１段階

調査データから推定される道路構築変遷が、下記の第１段階から第３段階の変遷が想定される。

逆台形状の溝を掘り込み、平坦に成形した底面に約0.5mの間隔で連続土坑を構築する。内部には混土が充填され上部から加圧が加えられている。ちなみに連続土坑の掘削確認面標高、すなわち、基盤土層確認面の標高は4.99mである。

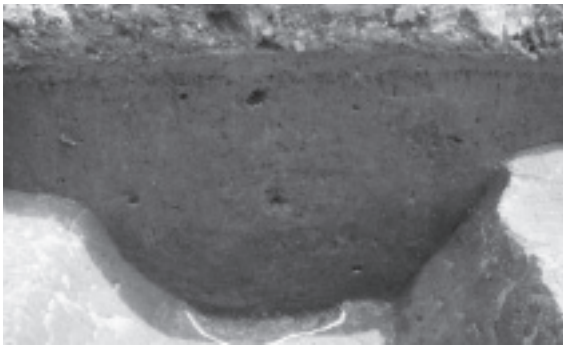
第２段階

黄茶褐色土ブロックを含む暗茶褐色土により溝底面を被覆する。この土層が第１段階の舗装部材として存在した可能性もあるが、現状では判断できない。第２段階の連続土坑は本土層の上面から掘り込まれている。灰白色粘質土を基調とするもので、この部分にも加圧行為が行われたものと推定される状況を認識できる。土坑上面には舗装部材と考えられるような土層の存在は現状では確認できない。

第３段階

第２段階道路を黄茶褐色土ブロックを含む暗茶褐色土により埋め戻し、中心軸を若干東方向に移動した位置に逆台形状の溝を掘り返し、その底面を路面とする。

構造的には、底面に暗褐色土を充填した掘り込みを行いその上面に暗白色粘質土を充填していたものと考えられる。底面掘り込み内の暗褐色土は硬質化しており、この部分にも加圧行為が行われた可能性が高い。暗灰白色粘質土の遺存する路面と想定される標高は約5.3m であり、第１段階底面の基盤土層標高から約30㎝上位に位置する。



第215図　SF003土層断面

溝様を呈する道路状遺構埋土内出土遺物には完形復元の可能な土師器坏、須恵器坏なども含み、出土遺物の時期幅はほぼ８世紀中頃～９世紀初頭のものである。第61次調査では061SF003を約23.7ｍ検出しているが、その方向はほぼ真南北方向を指向する。また、061SF003の周辺は後世の水田化に伴い地下げ地業が実施されている。そのため、遺存する遺構の上部は削平されていると考えられ、遺存状況は必ずしも良好ではない。このような状況の中で、061SF003に並行する状況で不定形の長土坑（061SK016）等が存在し、061SK016からは９世紀前半に比定される土師器坏などが出土している点などを考慮すると、061SF003が埋められた後に061SK016などを側溝とする道路状遺構が存在した可能性を想定することができる。

下郡遺跡群第５次調査第６トレンチ SD014[註５]

第５次調査は下郡遺跡群Ｈ区ｐ・ｑ－19～22地点にあたり、昭和63年５月～12月に区画街路の建設に伴う事前調査として実施した。道路状遺構は第５次調査の第６トレンチ内において検出されている。この部分は水田化に伴う後世の大規模削平を受けており、遺構の遺存状況は良好でない。道路状遺構（005SD014）は検出面から底面まで約0.6m を測る。検出長5.9m、最大幅1.4m を測り断面形状は逆台形を呈しており、第61次調査地点、第69次調査地点で検出された道路状遺構と同様の形態を有している。底面には規模は小さいながら、連続土坑状の窪みが認められている。遺構の展開方向は国土座標系の上でもＹ＝59.067軸線上に位置し、先述の第61・69次調査地点検出の道路状遺構の結線上にあたり、真南北方向に構築された同一の道路状遺構の一部と考えられる。

下郡遺跡群第90・92・104次調査 SF 310[註6]

第90・92・104次調査では東西方向に展開する道路状遺構が確認されている。その一部については、すでに報告済[註7]であるが、これにその後の下郡遺跡群第104次調査等の所見を加え、その変遷について概述する。

すでに検出されている東西道路状遺構（104SF310）は調査所見から複数回の路面ならびに路床の改修が認められている。各遺構の切り合い関係からⅠ～Ⅲ期に分期することが可能であり、時期変遷の内容を下記に示す。

Ⅰ期

路面幅員約2.5m を測り、道路方向に直交する長軸長約0.4～0.7m の長楕円形の連続土坑を路面部分に構築する。

連続土坑埋土内には灰白色粘土を充填し、路面整備をおこなっている。連続土坑は、約0.4m 間隔で配置されており、改修段階の連続土坑はこれら既存の連続土坑間の空間に造り替えがおこなわれている。あらためて造られた連続土坑の埋土には同じく灰白色粘土が充填されるが、その上部には砂質土を含む硬質化した粘質土が認められる。当該段階の南側の側溝は、大形の長土坑で構成されており、検出面から深さ約0.7m の規模を有する。側溝の内部には切り合い関係を有する掘り返しによる複数遺構の痕跡が明瞭に認められる。これに対して、北側の側溝は、深さも浅く規模も小さく、南側側溝とは様相を大きく異にする。

Ⅱ期

路面幅員が約5.0m に拡張される。連続土坑は長さ約1.2m 前後の長楕円形状のものが道路方向に直交する方位に構築される。Ⅰ期の段階の連続土坑とほぼ同じ位置に造り替えられるが形状は大きく異なっている。土坑埋土にはⅠ期段階の連続土坑と同様に灰白色粘土が充填され、その上部には土器細片が封入される。検出段階において、これらはお互いに固着しており、強い加圧が行われたものと推定される。

側溝は、南側でほぼⅠ期と同じ位置に造られ、現状で幅約0.5m～0.7m、深さ約0.5m を測る断面形状Ｕ字形の溝形状を呈する。

Ⅲ期

路面幅員が1.0m 前後に縮小される状況が看取される。連続土坑はⅡ期段階の連続土坑の間に、長さが約1.0m の楕円形のものが新たに配置される。

連続土坑の埋土は灰色粘質土で、その上面にはⅡ期段階の連続土坑と同様に土器細片が認められるが、Ⅱ期のものとは違って各連続土坑をある程度意識しながらも、全面に土器細片を敷設する状況を認めることができる。また、連続土坑の上部には灰茶色砂質土が存在し、これが舗装部材としての役割を担っていた可能性が考慮される。北側側溝は幅約0.5m、深さ約0.7m を測り、断面形状Ｕ字形を呈している。

以上が第Ⅰ期から第Ⅲ期までの変遷が認められる東西方向の道路状遺構の概要である。最も規模の

大きな第Ⅰ期の南側側溝埋土出土遺物は、８世紀末～９世紀初頭に比定されるものを下限としており、構築時期を９世紀初頭前後とする根拠となっている。第Ⅱ期、第Ⅲ期はこれに続き改修された姿を示しているものであるが、連続土坑、および側溝の中に確実に10世紀代と判断される遺物の出土は認められていない。

３．道路状遺構の構造

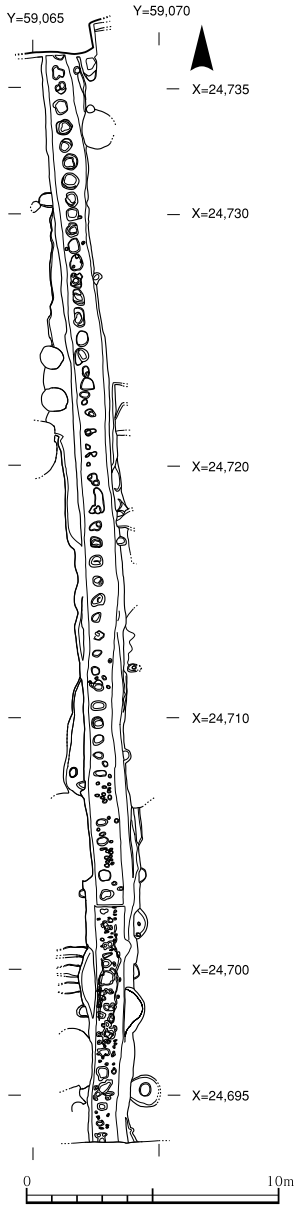
第217図は第69次・99次調査地点における道路状遺構の完掘時の底面の平面実測図である。すでに報文中において指摘しているように、底面には連続土坑が配置されるが、連続土坑の配置は検出エリア内で一様ではない。すなわち、北側を中心として円形の土坑がある程度規則的に配置されるのに対して、南側には径20㎝程度の加圧行為によるとみられる窪みが認められる。これらは明らかに分布状況を異にしており、一定の単位を有している可能性がある。このような状況は、道路施工時の作業単位あるいは「普請割的な工事の請負者の単位」[註８]の存在を示唆している可能性があり注目される。

第69次南側、第99次の底面には前述のように加圧による窪みが多数認められる。これらの窪みには直上に存在した粘質土が凹状に落ち込んでおり、舗装材としての粘質土を硬化させる目的で棒状の工具により加圧した痕跡である可能性が考えられる。

第４～６段階についても、路面幅を掘り下げ、この中に路面と側溝を構築するものであることが、明らかとなった点は大きな成果といえよう。つまり、溝状を呈する第１から第３段階の道路跡とこれ以降の第４から第６段階の道路は同様の構築哲学に基づいて造られていたことになり、路面幅の確保が必要となった場合においても、路面を周囲よりも一段掘り下げて構築するという道路築造理念は通有のものであったことが知られるのである。



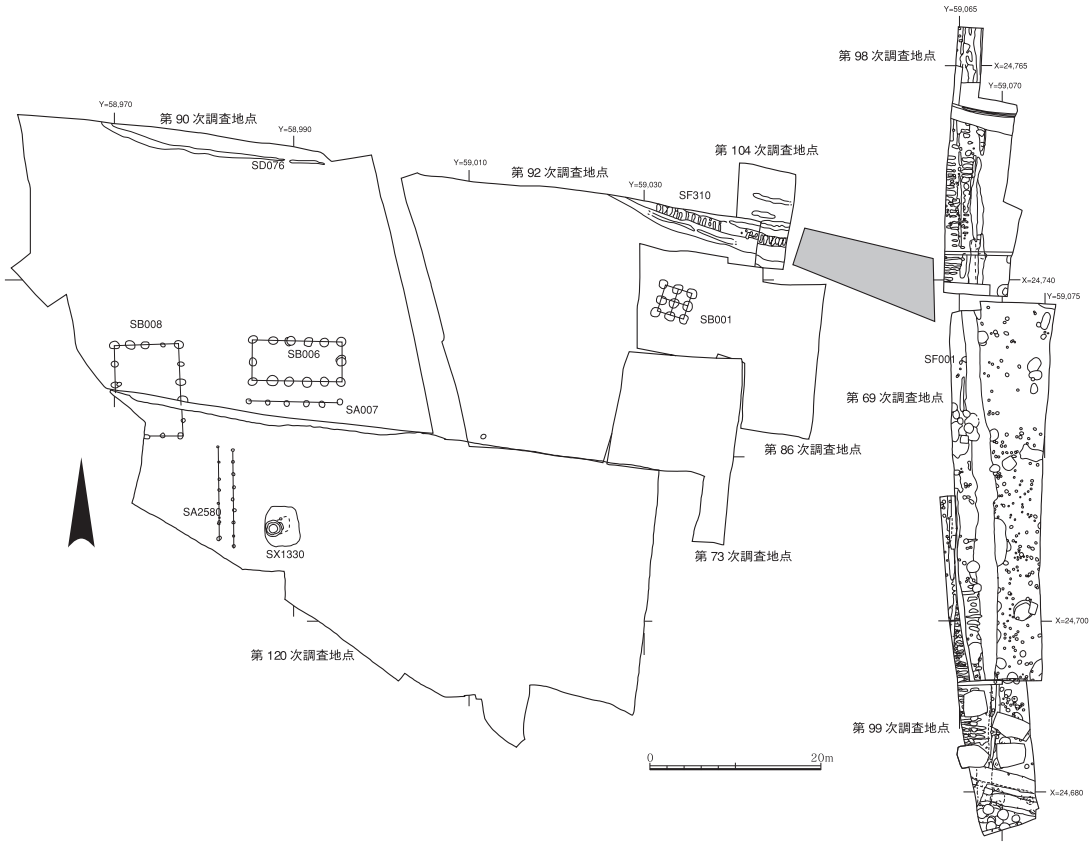
第216図　SF001底面検出状況



第217図　SF001平面実測図　(1/300)

４．南北道路状遺構の周辺状況

前節では、下郡遺跡群が所在する自然堤防上の最高位面の南北方向に掘り込みを伴う道路状遺構が存在する点を示した。道路跡は真南北を基軸に造られており、確認地点の最北端が第98次調査地点、最南端が第61次調査地点であり、その間の距離は98m を測る。道路の存在が明示されるこのエリアは、下郡遺跡群の中でもＨ区と呼称される地域であり、８世紀から９世紀に比定される遺構、遺物が集中的に分布する地域としても知られている。特に道路状遺構の存続時間幅である８世紀中頃から後半の段階に限ると、第218図に示される遺構分布が認められる。第90次で道路状遺構と同一方向、すなわち真南北方向を指向した建物群が検出され、第120次調査での所見を踏まえると井戸跡を囲むような配置が認められる。これらの建物跡の柱穴内から出土する遺物は８世紀中頃から後半に比定されるものであり、道路状遺構の第１段階から第３段階に対応するものである。第86次調査で検出されている総柱構造の086SB001は、出土遺物、建物方位から、東西道路（104SF310）の施工（第Ⅰ期）に対応するものと想定される。南北道路跡の第４段階に相当するものである。086SB001は２間×２間の規模を有する。建物跡の柱穴は一辺約１m の略方形を呈し、柱痕径約0.35m を測る。建物跡の主軸方位はN−18°−E を示しており、明らかに東西道路跡の方向と同一方位を指向する。この086SB001が構築され、東西道路が築造された段階、すなわち第４段階の整備がおこなわれるにあたり、南北道路（104SF001）との交差点部分に第３段階の道路埋め戻し作業に伴って土師器壺甕の埋納が行われた状況が確認されている。これ以降、南北道路は５m 以上の幅員をもつ道路へと変貌し、第５段階、第６段階という変遷を経た後に９世紀末前後に廃道したものと推定される。ちなみに、９世紀代においてはクスノキを使用した大規模な井戸跡[註９]を除き、周辺に顕著な遺構の検出例はない。９世紀段階には、当



第218図　古代主要遺構配置図　(1/800)

該地域は道路拡幅に伴う大量輸送路としての機能を担い、前段階とは様相を一変し、通過点としての役割が付与されたのかも知れない。ちなみに、周辺からは、近江産の緑釉陶器を伴う10世紀代の井戸跡等(註10)も検出されるが、この段階にすでに道路は廃絶している。

5．まとめ

第98・99次調査地点において確認された道路状遺構は、第１段階から第６段階へと変遷する過程の中で、掘り込みを有するという構築理念を共有しながら、道路規模において第３段階と第４段階の間に大きな画期を見出すことができた。これは、換言すれば、道路機能の変化としてもよいほど大きな変革ととらえてよいだろう。具体的には、第１段階～３段階の直線的な計画性に富んだ区画路的な道路から大量交通、大量輸送に耐えうるような規模を有する形態への変化に示される。特に第１段階から第３段階の区画路については、地面を掘り込むという排水処理上、極めてデメリットが大きな構造であり、さらに側溝を伴うことがないという悪条件ながら、複数回の改修を伴い道路として機能している点が注目される。同一時期の西側（第90次・第120次）に規格性の高い建物群を要する点などを考慮すると、当該道路の第一義的な意義が、あくまで区画を意図したものではないかといった事由が想定される。つまり、本来は区画機能を有していた溝が副次的に道路へと利用されるようになり、それが大量交通・大量輸送というニーズにより構造変化を遂げたものと推定されるのである。このような構造変化は広範な遺跡群の質的な発展状況を投影している可能性があり、遺跡群全体の様相変化に照応し、今後さらに検討していく必要があるだろう。

道路の構造面について着目すると、道路状遺構に通有な波板状凹凸面などと呼称される連続土坑等の機能について本遺跡地では、その機能に一定の見通しを推察できる所見を得ることができた点は大きな成果といえよう。下郡遺跡で確認された道路遺構に伴う波板状凹凸面、連続土坑は上部に灰白色粘土や灰茶褐砂質土などの舗装部材と考えられるものの存在を確認することができ、これにより凹凸面上部に敷かれた土器細片もふくめ、路床強化のための所作であるとする想定を補強するものであると判断されるのである。

註１　下郡遺跡群内の道路状遺構については、下記文献において一度まとめたことがある。
　　坪根伸也1999「大分市下郡遺跡群の古代道路状遺構について」『大分縣地方史』第173号　大分県地方史研究会

註２　大分市教育委員会1996「下郡遺跡群第69次調査」『大分市埋蔵文化財調査年報 **vol.** 7　1995年度』

註３　大分市教育委員会2002『下郡遺跡群Ⅰ』大分市下郡地区土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書

註４　大分市教育委員会1996「下郡遺跡群第61次調査」『大分市埋蔵文化財調査年報 **vol.** 7　1995年度』

註５　大分市教育委員会1990「下郡遺跡群 **H** 区 **p**・**q**−19～22地点の調査」『下郡遺跡群』大分市下郡地区土地区画整理事業に伴う発掘調査概報（１）

註６　大分市教育委員会1998「下郡遺跡群第90次調査」『大分市埋蔵文化財調査年報 **vol.** 9　1997年度』
　　大分市教育委員会1998「下郡遺跡群第92次調査」『大分市埋蔵文化財調査年報 **vol.** 9　1997年度』

註７　註３文献に同じ

註８　山村信榮1993「大宰府周辺の古代官道」『九州考古学』　第68号　九州考古学会

註９　註５文献に同じ

註10　大分市教育委員会1994「下郡遺跡群 **H** 区 **q**・**r**−20・21地点」『大分市埋蔵文化財調査年報５　平成５年度』

第４節　下郡遺跡群第140次調査

（１）はじめに

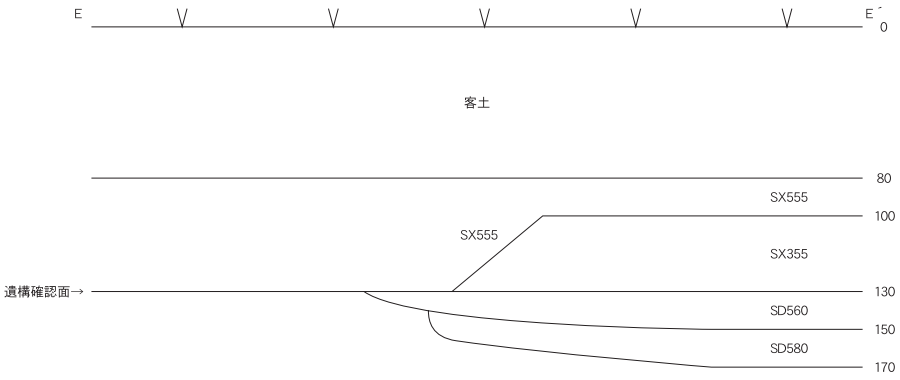
今次の調査地点は、下郡遺跡群の西側エリアに相当する。当該地域には、現在、ＪＲ豊肥本線が南北方向に走っており、ＪＲ豊肥本線西側には霜凝神社が鎮座している。第140次調査地点は、この霜凝神社の西隣に位置する。なお、調査面積は1136㎡であり、今次の調査で確認した遺構群のうち、最も新しい時期に比定される遺構の検出標高は約5.8m である。これまで周辺の調査成果により、当該地一帯には古墳時代初頭に比定される集落が展開していた状況が確認されている。また、当地域は旧字名を「城ノ内」と称し、この近辺に作成された文献資料に記載されている内容等から、戦国期における方形居館の存在が推定されていた。

今回の調査では、弥生時代後期～近代に至る遺構群が確認された。なかでも、古墳時代初頭、及び戦国期に比定される遺構が数量的にも多く今回の調査での主要遺構となっている。古墳時代初頭に比定される遺構には竪穴住居跡があり、これまでの調査成果によって想定されている当該期の推定集落範囲を追認する結果を得ることができた。また、戦国期では、当初から想定されていた方形館の存在を明示するような遺構群を確認することができた。

（２）層位

調査地の調査実施前の現況は、当該地全域において周辺の道路面より約0.3m 高い状況が認められる。重機による表土剥ぎを行った結果、現地表下に約0.8m の客土層が存在しこの下位に埋設されている状況が看取出来る。整地層（140SX555）を確認することができる。整地層（140SX555）は、淡灰色土を基調とした単一層で、微小の褐色粒子、及び炭化物を内包する。

今回の調査では、整地層（140SX555）上面より掘削される遺構は確認していない。当該層の下層には土塁基底部（140SX355）が存在する。整地層（140SX555）の所産年代であるが、当該層から出土した遺物には三島手と思われる碗の小片がある。また、後述するように、土塁基底部（140SX355）の構築年代が16世紀後半～末に比定されることから、両者の層位関係、及び140SX555からの出土遺物の様相より、整地層（140SX555）は、少なくとも16世紀末以降の所産であると判断される。



第219図　調査区西壁土層断面略図　(1/40)



第220図　遺構配置図　(1/300)



第221図　全体遺構図(1/300)

第56表　遺構一覧表①

S番号	遺構番号	遺物・その他	時期	地区
001	140SX-001	羽口		L-3
002	140SX-002	須恵器片、土師器片		M-2
003	140SX-003	白磁片、染付片、須恵器片、土師器片		N-2
004	140SX-004	白磁口縁部片		L-2
005	140SX-005	土師器片		M-3
006	140SX-006	土師器片		L-2
006	140SX-006	土師器片		L-2
007	140SX-007			K-1

第57表　遺構一覧表②

S番号	遺構番号	遺　物　・　そ　の　他	時　期	地区
008	140**SX**-008			**K**-1
009	140**SX**-009	土師器		**K**-1
010	140**SX**-010	土師器片		**K**-2
011	140**SX**-011	土師器片		**K**-3
012	140**SX**-012	土師器片		**K**-4
013	140**SX**-013	土師器片		**M**-1
014	140**SX**-014	須恵質甕片、土師器片		**N**-1
015	140**SX**-015	土師器片		**M**-1
016	140**SX**-016	土師器片、土錘		**M**-1
017	140**SX**-017	土師器片		**K**-1
018	140**SX**-018	土師器片		**KL**-2
019	140**SX**-019			**KL**-1･2
020	140**SX**-020	土師器片		**K**-1
021	140**SX**-021	青磁片、土師器片		**K**-1
022	140**SX**-022	土師器片		**K**-1
023	140**SX**-023			**I**-15
024	140**SX**-024	土師器片		**I**-15
025	140**SX**-025	土師器片		**I**-15
026	140**SX**-026	土師器片		**I**-15
027	140**SX**-027	土師器片		**I**-15
028	140**SX**-028	土師器片		**I**-15
029	140**SX**-029	土師器片		**I**-15
030	140**SX**-030	土師器片		**I**-15
031	140**SX**-031	土師器片		**I**-15
032	140**SX**-032	瓦器椀		**I**-15
033	140**SX**-033	瓦器椀口縁部片、土師器片		**H**-15
034	140**SX**-034			**H**-14
035	140**SX**-035	須恵器片		**I**-14
036	140**SX**-036	土師器片		**I**-14
037	140**SX**-037	土師器片		**I**-14
038	140**SX**-038	瓦器椀片、土師器片		**I**-14
039	140**SX**-039			**I**-14
040	140**SX**-040	須恵器口縁部片、須恵器底部片、土師器片		**I**-14
041	140**SX**-041	瓦器小皿、土師器片	12世紀中頃	**H**-14
042	140**SX**-042	土師器片		**H**-3
043	140**SX**-043	土師器片		**HI**-13
044	140**SX**-044			**I**-3
045	140**SX**-045	土師器片		**I**-3
046	140**SX**-046			**I**-2
047	140**SX**-047	土師器片		**I**-16
048	140**SX**-048			**I**-14
049	140**SX**-049	土師器片		**I**-16
050	140**SX**-050	土師器片		**I**-16
051	140**SX**-051	土師器片		**I**-16
052	140**SX**-052	土師器片		**I**-16
053	140**SX**-053	土師器片		**I**-16
054	140**SX**-054	小型丸底鉢、土師器、弥生土器、土師器片		**I**-16
055	140**SX**-055	土師器片		**I**-16
056	140**SX**-056	土師器片		**I**-16
057	140**SX**-057	土師器片		**I**-16
058	140**SX**-058	土師器、弥生土器		**I**-16
059	140**SX**-059	土師器片		**I**-15
060	140**SX**-060	土師器片		**HI**-15・16
061	140**SX**-061	土師器片		**I**-15
062	140**SX**-062	土師器片		**I**-15
063	140**SX**-063	土師器片		**I**-15
064	140**SX**-064	土師器片		**I**-15
065	140**SX**-065	土師器片		**I**-15
066	140**SX**-066	土師器坏片、土師器片		**I**-15
067	140**SX**-067	土師器片		**HI**-15･16
068	140**SX**-068	瓦器椀口縁部片、土師質甕口縁部片		**I**-15
069	140**SX**-069	瓦器小皿口縁部片、椀口縁部片、土師器片		**I**-15
070	140**SX**-070	土師器片		**I**-15
071	140**SX**-071	土師器片		**I**-14
072	140**SX**-072	瓦器椀、土師器片		**I**-14

第58表　遺構一覧表③

S番号	遺構番号	遺物・その他	時期	地区
073	140**SX**-073	瓦器椀底部片、土師器片		**H**-15
074	140**SX**-074	土師器片		**HI**-14
075	140**SX**-075	須恵器片、土師器片		**HI**-14
076	140**SX**-076	須恵器片、土師器片		**HI**-14
077	140**SX**-077	土師器片		**I**-14
078	140**SX**-078	土師器片		**I**-14
079	140**SX**-079	須恵器片、土師器片		**I**-14
080	140**SX**-080	布留系甕片、土師器小皿片、土師器片		**I**-14
081	140**SX**-081	土師器片		**I**-14
082	140**SX**-082	瓦器椀口縁部片、土師器片		**I**-14
083	140**SX**-083	土師器片		**I**-14
084	140**SX**-084	土師器片		**I**-14
085	140**SX**-085	瓦器椀、土師器片		**I**-14
086	140**SX**-086	土師器片		**H**-14
087	140**SX**-087	弥生土器、突帯甕片		**H**-14
087	140**SX**-087	弥生土器、土師器		**H**-14
088	140**SX**-088	鉄製品		**H**-14
089	140**SX**-089	弥生土器、土師器片		**H**-14
090	140**SX**-090	瓦器椀片、土師器片		**H**-14
091	140**SX**-091	土師器片		**I**-15
092	140**SX**-092	須恵器片、土師器片		**I**-15
093	140**SX**-093	須恵器坏口縁部片、土師器坏口縁部片、土師器片		**HI**-14
094	140**SX**-094	瓦器椀口縁部片、土師器片		**I**-14
095	140**SX**-095	瓦器椀口縁部片、土師器片		**I**-15
096	140**SX**-096	土師器片		**I**-15
097	140**SX**-097	土師器片		**I**-14
098	140**SX**-098	弥生土器、土師器片		**I**-16
099	140**SX**-099	土師器片		**I**-16
100	140**SX**-100	土師器片		**I**-16
101	140**SX**-101	土師器片		**I**-15
102	140**SX**-102			**I**-14
103	140**SX**-103	土師器、弥生土器		**H**-14
104	140**SX**-104	須恵器片、土師器小皿口縁部片、土師器坏口縁部片		**I**-15
105	140**SX**-105	土師器片		**I**-14
106	140**SX**-106	土師器片		**I**-14
107	140**SX**-107	土師器片		**HI**-14
108	140**SX**-108	土師器片		**L**-2
109	140**SX**-109	土師器片		**K**-2
110	140**SX**-110	陶器、須恵器片、土師器片		**K**-2
111	140**SX**-111	土師器片		**K**-2
112	140**SX**-112			**KL**-1･2
113	140**SX**-113	須恵質甕胴部片、土師器坏片、土師器片		**L**-2
114	140**SX**-114	土師器片		**L**-2
115	140**SX**-115	須恵質甕胴部片、土師器片		**L**-2
116	140**SX**-116	須恵器坏底部片、土師器坏底部片、土師器片		**L**-3
117	140**SX**-117	須恵器片、土師器片		**L**-3
118	140**SX**-118	須恵器口縁部片、土師器片		**L**-3
119	140**SX**-119	土師器片		**L**-3
120	140**SX**-120	土師器片		**L**-3
121	140**SX**-121	土師器片		**L**-2
122	140**SX**-122	白磁片、須恵器片、土師器片、鉄製品		**J**-3
123	140**SX**-123	土師器片		**J**-3
124	140**SX**-124	青磁口縁部片、土師器片		**J**-3
125	140**SX**-125			**J**-2･3
126	140**SX**-126	土師器片		**K**-2
127	140**SX**-127			**L**-2
128	140**SX**-128	土師器片、土師器坏片		**L**-2
129	140**SX**-129	土師器片		**L**-2
130	140**SX**-130	須恵質甕胴部片、土師器片		**L**-2
131	140**SX**-131	須恵質甕胴部片、土師器片		**L**-2
132	140**SX**-132	土師器片		**L**-2
133	140**SX**-133	土師器片		**L**-2･3
134	140**SX**-134	土師器片		**L**-2
135	140**SX**-135	土師器片		**K**-3
136	140**SX**-136	土師器片		**K**-2

第59表　遺構一覧表④

S番号	遺構番号	遺物・その他	時期	地区
137	140**SX**-137	磁器片、陶器胴部片、瓦器口縁部片、土師器片		**L**-2
138	140**SX**-138	青磁口縁部片、土師器片		**L**-2
139	140**SX**-139	京都系土師器片、土師器坏片、土師器片		**M**-2
140	140**SX**-140	土師器片		**J**-3
141	140**SX**-141	須恵器片、土師器片		**J**-3
142	140**SX**-142	土師器坏口縁部片		**J**-3
143	140**SX**-143	土師器片		**J**-3
144	140**SX**-144	土師器片		**J**-3
145	140**SX**-145	土師器片		**J**-3
146	140**SX**-146	須恵質甕胴部片、土師器片		**J**-3
147	140**SX**-147	土師器片		**J**-3
148	140**SX**-148	土師器片		**L**-3
149	140**SX**-149	須恵器片		**I**-2･3
150	140**SX**-150	土師器片		**I**-3
151	140**SX**-151	土師器片		**I**-3
152	140**SX**-152	土師器片		**I**-3
153	140**SX**-153	土師器片		**K**-2
154	140**SX**-154	土師器片		**L**-3
155	140**SX**-155			**I**-3
156	140**SX**-156			**I**-14
157	140**SX**-157	須恵質甕胴部片、土師器片		**K**-2
158	140**SX**-158	欠番		
159	140**SX**-159	欠番		
160	140**SX**-160			**L**-1
161	140**SX**-161	土師器片		**L**-1
162	140**SX**-162	欠番		
163	140**SX**-163	土師器片		**K**-2
164	140**SX**-164	欠番		
165	140**SX**-165	土師器片		**M**-2
166	140**SX**-166	土師器片、鉄製品		**K**-1
167	140**SX**-167	白磁碗片、土師器片		**L**-1
168	140**SX**-168			**L**-1
169	140**SX**-169	土師器片		**K**-1
170	140**SX**-170	土師器片		**K**-1
171	140**SX**-171	土師器片		**K**-1
172	140**SX**-172			**K**-1
173	140**SX**-173	土師器片		**K**-1
174	140**SX**-174			**K**-1
175	140**SX**-175	白磁碗片		**N**-2
176	140**SX**-176	須恵質甕胴部片		**N**-2
177	140**SX**-177	土師器片		**M**-1
178	140**SX**-178	土師器片		**L**-1
179	140**SX**-179	須恵器片、土師器片		**K**-1
180	140**SX**-180	土師器口縁部片	古墳初頭	**L**-1
181	140**SX**-181			**L**-1
182	140**SX**-182			**LM**-1
183	140**SX**-183	土師器坏片		**M**-1
184	140**SX**-184			**M**-1
185	140**SX**-185	土師器片		**M**-1
186	140**SX**-186	土師器片		**M**-1
187	140**SX**-187			**K**-1
188	140**SX**-188	土師器片		**K**-1
189	140**SX**-189	土師器片		**K**-1
190	140**SX**-190	白磁碗片、須恵質甕胴部片、土師器片		**L**-0
191	140**SX**-191	土師器片		**M**-1
192	140**SX**-192			**M**-1
193	140**SX**-193	白磁片		**L**-0
194	140**SX**-194			**L**-0
195	140**SX**-195			**L**-0･1
196	140**SX**-196	土師器片		**M**-19･0
197	140**SX**-197	欠番		
198	140**SX**-198	須恵器片、土師器片		**K**-0
199	140**SX**-199	須恵質甕片、土師器片		**K**-0
200	140**SX**-200	京都系土師器口縁部片、土師器片		**M**-1
201	140**SX**-201	土師器片		**L**-1

第60表　遺構一覧表⑤

S番号	遺構番号	遺　物　・　そ　の　他	時　期	地区
202	140**SX**-202	欠番		
203	140**SX**-203	欠番		
204	140**SX**-204	欠番		
205	140**SX**-205	土師器片		**O**-1
206	140**SX**-206	土師器片		**M**-0
207	140**SX**-207	土師器片		**L**-19･0
208	140**SX**-208	土師器片		**K**-0
209	140**SX**-209	土師器片		**L**-19
210	140**SX**-210	土師器片		**L**-19
211	140**SX**-211	土師器片		**LM**-19
212	140**SX**-212	土師器片		**L**-19
213	140**SX**-213	土師器口縁部片、土師器片		**LM**-19
214	140**SX**-214	土師器片		**L**-1
215	140**SX**-215	土師器片		**LM**-19
216	140**SX**-216	土師器片		**L**-19
217	140**SX**-217	土師器片		**L**-19
218	140**SX**-218	土師器片		**M**-19
219	140**SX**-219	須恵器片、土師器片		**K**-1
220	140**SX**-220	土師器片		**M**-19
221	140**SX**-221	土師器片		**M**-19
222	140**SX**-222	土師器片		**M**-19
223	140**SX**-223	白磁片、須恵器坏底部片、土師器片		**L**-0
224	140**SX**-224	土師器片		**M**-0
225	140**SX**-225	土師器片		**M**-0
226	140**SX**-226	土師器片		**K**-0
227	140**SX**-227	土師器片		**K**-0
228	140**SX**-228			**K**-1
229	140**SX**-229			**K**-0
230	140**SX**-230	土師器片		**JK**-0
231	140**SX**-231	白磁片、青磁口縁部片、土師器片		**K**-1
232	140**SX**-232	土師器片		**K**-2
233	140**SX**-233	須恵質甕胴部片、土師器片		**K**-2
234	140**SX**-234	土師器片		**K**-2
235	140**SX**-235			**K**-2
236	140**SX**-236			**L**-1
237	140**SX**-237	土師器片		**K**-2
238	140**SX**-238			**L**-3
239	140**SX**-239			**K**-1
240	140**SX**-240	瓦質土器片、土師器片		**L**-2
241	140**SX**-241	土師器片		**L**-2
242	140**SX**-242			**L**-2
243	140**SX**-243			**K**-1
244	140**SX**-244	土師器片		**KL**-1
245	140**SX**-245	土師器片		**L**-0
246	140**SX**-246			**K**-0
247	140**SX**-247			**K**-1
248	140**SX**-248	欠番		
249	140**SX**-249	須恵質甕胴部片、土師器片		**M**-0
250	140**SX**-250	土師器片		**K**-0
251	140**SX**-251	土師器片		**K**-0
252	140**SX**-252	土師器片		**K**-0
253	140**SX**-253	土師器片		**JK**-19･0
254	140**SX**-254	土師質甕底部片		**L**-0
255	140**SX**-255			**KL**-0
256	140**SX**-256			**KL**-0
257	140**SX**-257			**K**-19
258	140**SX**-258	土師器片		**K**-1
259	140**SX**-259	須恵器片、土師器片		**L**-0
260	140**SD**-260	青磁片、須恵器片、土師器片		**M**-19～3
261	140**SX**-261	土師器片		**L**-1
262	140**SX**-262	須恵質甕胴部片、土師器片		**L**-1
263	140**SX**-263	土師器片		**K**-1
264	140**SZ**-264	須恵質甕胴部片、土師器片		**L**-19
265	140**SX**-265	白磁片、青磁片、陶磁器片、土師器高台付坏片、土師器片		
266	140**SX**-266	土師器片		**M**-3

第61表　遺構一覧表⑥

S番号	遺構番号	遺物・その他	時期	地区
267	140**SX**-267	土師器片		**IJ**-1
268	140**SX**-268	土師器片		**IJ**-1
269	140**SX**-269	土師器片		**J**-1
270	140**SX**-270	陶磁器、白磁片、染付片、土師器片		**NO**-1～3
271	140**SX**-271	土師器片		**JK**-0･1
272	140**SX**-272	須恵質甕胴部片、土師器片		**K**-1
273	140**SX**-273	須恵質甕胴部片、須恵器口縁部片、土師器片		**K**-1
274	140**SX**-274	土師器片		**K**-1
275	140**SX**-275	須恵器片、土師器片		**J**-0
276	140**SX**-276	土師器片		**JK**-0
277	140**SX**-277	須恵器片、石		**K**-0
278	140**SX**-278	土師器片		**K**-0
279	140**SX**-279	中国産白磁、青磁、染付片、土師器片	近世以降	**K**-0
280	140**SX**-280	欠番		
281	140**SX**-281	土師器片		**K**-0
282	140**SX**-282	白磁		**K**-0
283	140**SX**-283	土師器片		**K**-2
284	140**SX**-284	土師器坏、土師器片		**K**-2
285	140**SX**-285	土師器片		**J**-2
286	140**SX**-286	土師器片		**H**-1
287	140**SX**-287	土師器片		**H**-2
288	140**SX**-288	瓦器口縁部片		**H**-3
289	140**SX**-289	土師器片		**I**-2
290	140**SD**-290	景徳鎮青花碗、景徳鎮青花皿、漳州窯系鍔皿、漳州窯系碗、備前擂鉢、備前甕、京都系土師器皿口縁部片、京都系土師器皿底部、京都系土師器坏、土師器坏、土師器小皿、中国産翡翠釉小皿、瀬戸・美濃卸皿、瀬戸・美濃瓶子、朝鮮舟徳利、瓦質火鉢口縁部片、青銅製品	16世紀後半～末	**F**～**L**-1～8-1･2
291	140**SX**-291	土師器片		**H**-3
292	140**SX**-292			**I**-3
293	140**SX**-293	土師器片		**I**-3
294	140**SX**-294			**L**-0
295	140**SX**-295			**I**-2
296	140**SX**-296	欠番		
297	140**SX**-297	弥生土器片	弥生後期終末期	**H**-2
298	140**SX**-298	欠番		
299	140**SX**-299	欠番		
300	140**SD**-300	景徳鎮青花皿、景徳鎮青花碗	16世紀後半～末	**H**-1･2･**L**-1
350	140**SD**-350	土師器片	18世紀後半以降	**MN**-3
351	140**SD**-351	肥前系陶胎染付碗片、瀬戸・美濃碗、青磁片、京焼風陶器底部片、土師器片、砥石片	18世紀中頃～後半	**M**-3
352	140**SZ**-352			**N**-0
353	140**SX**-353	土師器片		**M**-0
354	140**SX**-354	須恵器片		**M**-0
355	140**SX**-355	龍泉窯系青磁碗、漳州窯系染付皿、瀬戸・美濃天目茶碗、備前甕、備前擂鉢、瓦器椀、京都系土師器皿口縁部片、土師器小皿、土師器坏、茶臼、受け皿、石製羽口、五輪塔風輪、五輪塔空・風輪、軽石、加工石、鉄製品		**M**-3
356	140**SX**-356			**M**-0
357	140**SX**-357	土師器片		**L**-0
358	140**SX**-358	土師器片		**L**-0
359	140**SX**-359	土師器片		**L**-19
360	140**SD**-360	龍泉窯系青磁碗、同安窯系青磁碗、東播系須恵質鉢口縁部片、瓦器椀口縁部片、土師器小皿、青磁口縁部片、青磁片、白磁碗片、白磁片、土師器小皿片、土師器坏	12世紀中頃～後半	**L**-3
361	140**SX**-361	土師器片		**M**-19
362	140**SX**-362	土師器片		**L**-1
363	140**SX**-363			**L**-1
364	140**SX**-364			**L**-1
365	140**SX**-365			**H**-2
366	140**SX**-366	同安窯口縁部片	12世紀中頃～後半	**L**-1
367	140**SX**-367	白磁碗片、土師器片	16世紀末以降	**L**-2
368	140**SX**-368	須恵質甕胴部片、土師器片、石製品	16世紀末以降	**K**-0
369	140**SX**-369			**M**-2
370	140**SX**-370	土師器片		**J**-19
371	140**SX**-371			**H**-15
372	140**SX**-372			**H**-15
373	140**SX**-373	土師器片		**I**-15
374	140**SX**-374			**I**-16

第62表　遺構一覧表⑦

S番号	遺構番号	遺　物　・　そ　の　他	時　期	地区
375	140SX-375	加工石		K-0
376	140SX-376			L-19
377	140SX-377	土師器片		K-19
378	140SX-378			K-0
379	140SX-379			J-0
380	140SX-380			I-14
381	140SX-381			I-17
382	140SX-382			I-17
383	140SX-383			I-17
384	140SX-384	土師器片		I-17
385	140SX-385			I-16
386	140SX-386			I-15
387	140SX-387			I-15
388	140SX-388			I-15
389	140SX-389			I-15
390	140SX-390			I-15
391	140SX-391			I-15
392	140SX-392			I-15
393	140SX-393			I-14
394	140SX-394			L-3
395	140SX-395			I-0
396	140SX-396	土師器片		K-19
397	140SX-397	土師器坏、土師器片	9世紀初頭	I-19
398	140SX-398	土師器片		I-19
399	140SX-399	土師器片		I-19
400	140SX-400			I-18
401	140SX-401	土師器坏片、土師器片		J-19
402	140SX-402	土師器片		J-19
403	140SX-403			I-19
404	140SX-404	弥生土器、土師器片		I-19
405	140SX-405	土師器片		I-19
406	140SX-406	土師器片		K-19
407	140SX-407	須恵質甕胴部片、土師器片		K-0
408	140SX-408			K-18
409	140SX-409	土師器片		K-19
410	140SE-410	土師器坏底部片		I-1
411	140SX-411	土師器片		K-0
412	140SX-412	瓦器椀片		K-0
413	140SX-413	土師器片		I-0
414	140SX-414	瓦		I-0
415	140SE-415	同安窯系青磁碗、龍泉窯系青磁碗、中国産白磁碗、瓦器椀口縁部片、瓦器椀底部、研磨土師器片、土師器坏底部、木製坏、羽口、砥石	12世紀末葉から13世紀前半	I-18
416	140SX-416	土師器片		L-19
417	140SX-417	土師器片		I-0
418	140SX-418	土師器片		K-19
419	140SX-419	弥生土器、土師器片		I-16
420	140SX-420	土師器片		I-19
421	140SX-421			I-1
422	140SX-422			I-1
423	140SX-423			J-1
424	140SX-424			J-1
425	140SX-425	欠番		
426	140SH-426	土師質小型丸底鉢口縁部片、土師質甕口縁部片、土師質台付鉢底部		H-14
427	140SX-427	須恵質甕口縁部片、土師器片		I-15
428	140SX-428			H-14
429	140SX-429	土師器片		I-16
430	140SH-430	弥生複合口縁壺、土師質甕、弥生高杯、弥生鉢、弥生小型無頸壺、加工石	古墳初頭	I-0
431	140SX-431	土師器片		H-14
432	140SX-432	白磁碗、同安窯系青磁碗、青磁口縁部片、白磁片	16世紀後半～末	L-1
433	140SX-433	土師器片		H-15
434	140SX-434			H-14
435	140SX-435	龍泉窯系青磁皿、青磁碗、備前擂鉢、瓦質土器、京都系土師器、土師器片、鉄製品、砥石、瓦器小皿口縁部片		L-3
436	140SX-436	土師質甕口縁部片		I-14
437	140SX-437			J-0

第63表　遺構一覧表⑧

S番号	遺構番号	遺物・その他	時期	地区
438	140**SX**−438			**I**−0
439	140**SX**−439			**I**−0
440	140**SX**−440	欠番		
441	140**SX**−441			**J**−0
442	140**SX**−442			**J**−0
443	140**SX**−443			**J**−0
444	140**SX**−444			**J**−0
445	140**SX**−445	欠番		**I**−17
446	140**SX**−446	土師器片		**J**−0
447	140**SX**−447	土師器片		**J**−0
448	140**SX**−448			**J**−0
449	140**SX**−449	須恵質甕口縁部片、土師器片		**L**−0
450	140**SX**−450	土師質甕口縁部片、土師質鉢口縁部片、土師器高杯、ミニチュア土器、土師質壺肩部、土師質小型丸底壺口縁部片、土師質小型丸底鉢口縁部片、弥生複合口縁壺口縁部片、土師質直口壺、土器片	古墳前期	**I**−15
451	140**SX**−451	須恵器片、土師器片		**L**−19
452	140**SX**−452	土師器片		**M**−0
453	140**SX**−453	土師器片		**M**−0
454	140**SX**−454	土師質甕口縁部片		**M**−0
455	140**SH**−455			**H**−15
456	140**SX**−456	土師器片		**M**−0
457	140**SX**−457	土師器片		**M**−0
458	140**SX**−458	土師器片		**M**−0
459	140**SX**−459	土師器片		**M**−0
460	140**SX**−460	須恵質甕、石製砥石、石器		**I**−17
461	140**SX**−461	土師器片		**K**−19
462	140**SX**−462	土師器片		**L**−1
463	140**SX**−463	土師器片		**M**−0
464	140**SX**−464	土師器片		**I**−16
465	140**SH**−465	土師質甕、土師質壺、土師質鉢、土師器高杯、小型丸底鉢、小型長頸壺	古墳初頭	**I**−17
466	140**SX**−466			**H**−16
467	140**SX**−467			**H**−16
468	140**SX**−468			**H**−17
469	140**SH**−469	弥生土器、土師器坏片、土師器片	古墳初頭	**L**−2
470	140**SX**−470	土師質甕、土師質壺、土師質鉢、土師器高杯、弥生鉢、弥生直口壺口縁部片、弥生複合口縁壺口縁部片、土師質二重口縁壺、土師質直胴甕	古墳初頭	**H**−2
471	140**SX**−471		古墳初頭	**L**−19
472	140**SX**−472	土師器片	古墳初頭	**M**−18
473	140**SX**−473			**L**−2
474	140**SH**−474			**L**−3
475	140**SX**−475			**L**−3
476	140**SX**−476	弥生土器、土師器片		**L**−3
477	140**SX**−477			**L**−3
478	140**SX**−478			**L**−3
479	140**SX**−479			**M**−19
480	140**SX**−480	須恵器片		**L**−19
481	140**SH**−481	土師質甕、土師質鉢、土師器高坏	古墳初頭	**L**−18
482	140**SX**−482			**L**−19
483	140**SX**−483			**L**−18
484	140**SX**−484			**L**−19
485	140**SX**−485			**M**−19
486	140**SX**−486			**M**−19
487	140**SX**−487	土師器片		**M**−18
488	140**SX**−488			**M**−19
489	140**SX**−489			**M**−19
490	140**SX**−490	土師器片		**M**−19
491	140**SX**−491	土師器片		**M**−19
492	140**SX**−492	土師器片		**M**−19
493	140**SX**−493	**M**字状突帯甕片、土師器片		**M**−19
494	140**SX**−494			**M**−19
495	140**SX**−495	土師器片		**M**−19
496	140**SX**−496	弥生土器、土師器片		**M**−19
497	140**SX**−497	土師器片		**M**−19
498	140**SX**−498	土師器片		**L**−18
499	140**SX**−499	土師器片		**L**−19

第64表　遺構一覧表⑨

S番号	遺構番号	遺物・その他	時期	地区
500	140**SX**–500	土師器片		**M**–19
501	140**SX**–501	土師器片		**L**–19
502	140**SX**–502	土師器片		**L**–19
503	140**SX**–503	土師器片		**M**–18
000	140**T**–000	龍泉窯系青磁碗、五輪塔空風輪、礫	13世紀前半	**L**～**N**–1
000	140**T**–000			**L**～**N**–3
000	140**T**–000			**L**–1
550	140**SD**–550	青磁碗片、型紙刷り徳利口縁部片、備前擂鉢口縁部片、須恵質甕胴部片、土師器片	近代以降	**E**–17
551	140**SX**–551	型紙刷り陶磁器、土師器片、鉄釘、鉄製品		**G**–16
552	140**SX**–552	土師器片		**G**–16
553	140**SX**–553	須恵器片		**F**–19
554	140**SX**–554	土師器片	16世紀末以降	**G**–19
555	140**SX**–555	青磁碗、白磁碗、瓦器椀、研磨土器、須恵器坏、青磁片、土師器片、鉄製品	16世紀末以降	**FG**–14～17
556	140**SX**–556	土師器片、須恵器片	16世紀末以降	**F**–19
557	140**SX**–557	土師器片	16世紀末以降	**F**–19
558	140**SX**–558	土師器片	16世紀末以降	**F**–19
559	140**SX**–559	土師器片		**F**–19
560	140**SX**–560	欠番		
561	140**SX**–561	土師器片		**F**–19
562	140**SX**–562	土師器片		**F**–0
563	140**SX**–563	土師器片	16世紀末以降	**F**–0
564	140**SX**–564	土師器片	16世紀末以降	**G**–0
565	140**SX**–565	瓦質土器、鉄釘**L**字含、須恵器片、土師器片		**G**–16
566	140**SX**–566	鉄釘、須恵器片、土師器片		**H**–16
567	140**SX**–567	土師器片		**F**–19
568	140**SX**–568	瓦器椀片、瓦質土器胴片、土師器片		**F**–16
569	140**SX**–569	土師器片		**F**–16
570	140**SX**–570			**E**15·16·**F**–17～0
571	140**SX**–571	須恵器口縁部片、土師器片		**F**–16
572	140**SX**–572	弥生土器、土師質甕口縁部片		**H**–0
573	140**SX**–573	土師器片		**H**–19
574	140**SX**–574			**H**–19・0
575	140**SX**–575			**E**15·16・**F**–17～0
576	140**SX**–576	土師器片		**I**–0
577	140**SX**–577	土師器片		**I**–0
578	140**SX**–578	須恵器片、土師器片		**F**–16·**G**·**H**–16·17
579	140**SX**–579			**H**–18
580	140**SD**–580	白磁碗、備前擂鉢、京都系土師器皿、土師器坏口縁部片、青磁碗口縁部片、鉄滓	11世紀後半～12世紀後半	**E**15·16·**F**–17～0
581	140**SX**–581	須恵質甕胴部片、土師器片		**F**–16·**G**·**H**–16·17
582	140**SX**–582	須恵質甕胴部片、土師器片		**G**–15
583	140**SX**–583	土師器片		**G**–14
584	140**SX**–584	土師器片		**G**–14
585	140**SX**–585	土師器片		**F**–17～0
586	140**SX**–586	須恵器片、土師器片		**G**–15
587	140**SX**–587	土師質甕口縁部片、土師器片		**G**–15
588	140**SX**–588	土師器片		**G**–15
589	140**SX**–589	土師器片		**G**–15
590	140**SD**–590	朝鮮王朝産白磁		**F**–1～
591	140**SX**–591	土師器片		**G**–15
592	140**SX**–592	土師器片		**G**–14
593	140**SX**–593	土師器片		**F**–14
594	140**SX**–594	弥生土器、土師質甕口縁部片、土師器片		**G**–16
595	140**SB**–595		16世紀末以降	**F**–19
596	140**SX**–596	弥生土器、土師器片		**H**–16
597	140**SX**–597	土師器片		**G**–15
598	140**SX**–598	龍泉窯片、須恵質甕胴部片、土師器片		**F**–15
599	140**SX**–599	瓦器椀片、弥生土器、土師器片		**E**–15
600	140**SX**–600	須恵器片、土師器片		**E**–15・**F**–16・**G**–16・17

第65表　遺構一覧表⑩

S番号	遺構番号	遺　物　・　そ　の　他	時　期	地区
601	140**SX**-601	土師器片		**E**-16
602	140**SX**-602	土師器、弥生土器		**F**-15
603	140**SX**-603	弥生土器、土師器片		**F**-15
604	140**SX**-604	土師器片		**F**-15
605	140**SX**-605			**G**-16
606	140**SX**-606	須恵質甕口縁部片、胴部片、土師器片		**F**-15
607	140**SX**-607	須恵質甕胴部片、土師器片		**F**-15
608	140**SX**-608	土師器片		**F**-15
609	140**SX**-609	土師器片		**G**-16
610	140**SX**-610			**G**-16
611	140**SX**-611	須恵器片、土師器片		**F**-16
612	140**SX**-612	土師器片		**F**-16
613	140**SX**-613	土師器片		**F**-16
614	140**SX**-614	土師器片		**G**-14
615	140**SH**-615	弥生土器、土師器片、土師質鉢口縁部片、土師質甕口縁部片	古墳初頭	**H**-16
616	140**SX**-616	土師器片		**G**-16
617	140**SX**-617	土師器片		**G**-15
618	140**SX**-618	土師器片		**G**-16
619	140**SX**-619	土師器片		**G**-16
620	140**SH**-620			**G**-16
621	140**SX**-621	土師器片		**G**-15
622	140**SX**-622	土師器片		**G**-16
623	140**SX**-623			**G**-16
624	140**SX**-624	土師器片		**G**-14
625	140**SH**-625		古墳初頭	**H**-16
626	140**SX**-626	瓦器椀口縁部片、土師器片、鉄製品		**H**-15
627	140**SX**-627	土師器片		**G**-14
628	140**SX**-628	土師器片		**F**-16
629	140**SX**-629	須恵器坏口縁部片、土師器片		**F**-15
630	140**SX**-630	欠番		
631	140**SX**-631	須恵器片、土師器片		**G**-16
632	140**SX**-632	土師器片		**H**-16
633	140**SX**-633	土師器片		**H**-17
634	140**SX**-634	土師器片		**F**-16
635	140**SE**-635	弥生土器甕、土師質鉢、ミニチュア土器、弥生土器片、弥生壺	弥生後期後半	**G**-16
636	140**SX**-636			**G**-16
637	140**SX**-637	土師器片		**G**-16
638	140**SX**-638			**G**-16
639	140**SX**-639	土師器片		**G**-16
640	140**SX**-640			**G**-16
641	140**SX**-641	瓦器椀片、土師器片		**G**-16
642	140**SX**-642	土師器片		**G**-16
643	140**SX**-643	土師器片		**H**-16
644	140**SX**-644			**G**-16
645	140**SX**-645			**G**-16
646	140**SX**-646	欠番		
647	140**SX**-647	弥生土器、土師器片		**H**-15
648	140**SX**-648	土師器片		**H**-16
649	140**SX**-649	弥生土器、土師器片		**H**-15
650	140**SH**-650	土師質甕口縁部片	古墳初頭	**H**-16
651	140**SX**-651			**F**-2
652	140**SX**-652	土師器片		**G**-3
653	140**SX**-653	土師器坏片、土師器片		**G**-3
654	140**SX**-654	弥生土器、土師器片		**G**-2
655	140**SH**-655	土師器片	古墳初頭	**H**-17
656	140**SX**-656	土師器片		**H**-15
657	140**SX**-657	弥生土器、土師器片		**G**-16
658	140**SX**-658	土師器片		**H**-16
659	140**SX**-659			**F**-2
660	140**SX**-660	弥生土器、土師器片		**M**-15
665	140**SX**-665			**M**-15
670	140**SX**-670			**G**-16
675	140**SX**-675			**E**-6
000	140**SZ**-000	石器、羽口		

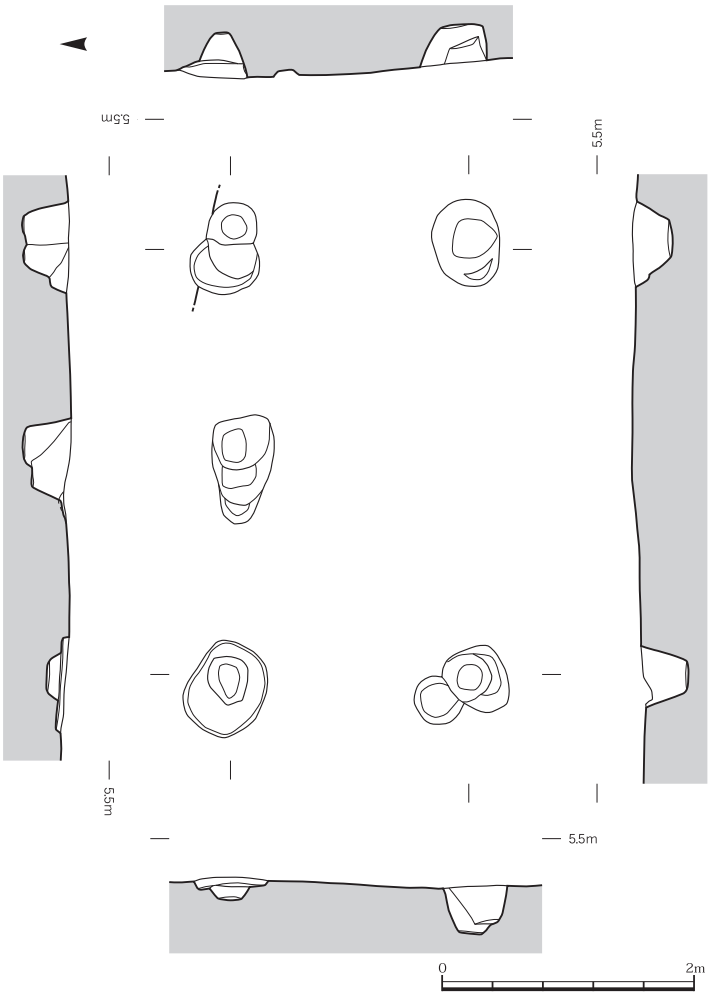
（３）遺構と遺物

掘立柱建物跡（SB）

１軒の掘立柱建物跡を調査区の北側で確認した。

140SB 595（SX554・SX556・SX557・SX563・SX564）（第222図）

140SB595は調査区北側の中央部分で検出した２間×１間＋α の建物跡である。本来は南側に展開していたと考えられるが、削平により南半部分は欠失したと考えられる。140SB595が存在する地点一帯は、現代の造成土が広域に渡り大規模に削平されている状況が看取でき、これにより遺構の大半が上部を欠失する。そのため遺構の遺存状況は総じて良好ではない。140SB595を構成する各柱穴（140SX554・556・557・563・564）の上部は削平により残存していない可能性が高く、本来は一定程度の深さを有していたものと想定される。140SB595の建物方位はN−10°−Eを示し、当該建物を構成する各柱穴のうち、南側部分に位置する柱穴間（140SX556・563，140SX554・564）の距離は約3.5ｍ、東・西側部分に位置する柱穴間（140SX554・556，140SX563・564）の距離は約2.0ｍを測る。また、140SX556・563の間には140SX557が配置される。



第222図　SB5 95遺構平面・断面実測図　（1/60）

各柱穴の検出面での規模は、0.4m～0.8m、残存深度は0.2m～0.4m を測る。遺物は建物跡140SB595を構成する柱穴140SX557より須恵器の小片が一点出土しているが、確実に建物遺構に伴う遺物の出土はなく140SB595の帰属年代に関しては不明である。ただし、遺構検出時において建物跡140SB595を構成する柱穴140SX563と140SD580の重複関係より、140SX563は140SD580に後出することが判明しており、少なくとも140SB595は140SD580が廃絶する16世紀後半～末以降に構築されたと考えられる。

溝（SD）

今回の調査では７条＋αの溝跡を確認した。

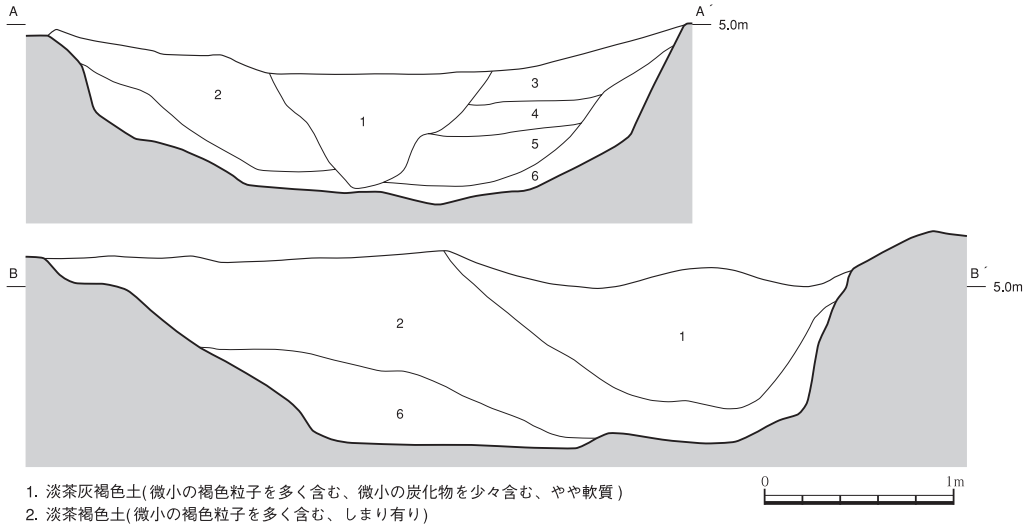
140SD 260

調査区の南端部分で検出した溝跡である。140SD260の南・東・西側部分は調査区外に展開するため全

容は不明であるが、このうち、西側部分に関しては、第125次調査で確認された125SD016に接続することが判明している。また、遺構の東側部分は、近世初期のものと考えられる方形の掘込み(140SX270)が存在し、当該遺構の構築が140SD260の下位までに達しているため、140SD260は欠失する。140SD260は、検出部分で、検出長約7.3m、検出幅約1.5m、深度約５m を測り、断面形状は逆台形を呈する。主軸方位はN−75°−W を示す。第125次調査で確認された 125SD016の所見より、当該溝本来の幅は約 7m の規模を有することが判明しており、今次の調査では、その約１/２に相当する範囲を検出したことになる。また、当該溝は第125次調査区の南側部分で、南北方向にＬ字状に屈曲することが判明しており、この溝は第125次調査の北方約70m に位置する第97次調査で確認されている溝状遺構と接続すると推定されている。なお、今回の調査で確認された140SD260も含め、溝に囲繞される範囲の推定規模であるが、溝内法で約90m、溝外法で約104m を測る大規模なものとなる。さらに、溝埋土の状況より、埋土の上部層に相当する部分から、黄灰色土を基調としたブロック土の流入が確認され、溝の内側に接する空間に土塁状の施設が存在していた可能性も指摘されている。また、下部層に相当する部分には、砂層と粘土層の交互堆積が認められ、複数回の流水・滞水していた状況を示していることが確認されている。今回の調査では出土遺物の確認は出来なかったものの、125SD016埋土中より胎土目を有する唐津皿片、小野正敏分類の青花Ｅ群碗片、華南三彩水注片等が出土しており、これらの出土遺物の様相から、当該溝は16世紀末には最終的に機能を停止したものと推定されている。

140SD 290（第223図）

調査区の東側部分で検出した溝跡である。140SD290は、検出幅約4.2m、深度約0.5m を測り、南北方向（N−10°−E）に調査区を縦走する。遺構の北・南側端部分は各々東方向（N−75°−W）へ逆コの字状に屈曲し、調査区外に展開する。この段階での溝に囲まれた南北の規模は、溝内法で約22m、溝外法で約32m を測る。断面形状は逆台形を呈し、遺構堆積埋土は６層で構成される。土層の断面観察は、当該溝の南北方向に展開する部分において、遺構に直交する形で北側部分（第220図 B−B´）・南



1. 淡茶灰褐色土(微小の褐色粒子を多く含む、微小の炭化物を少々含む、やや軟質)
2. 淡茶褐色土(微小の褐色粒子を多く含む、しまり有り)
3. 淡茶灰褐色土(微小の炭化物を僅かに含む、微小の暗茶褐色鉄分粒子を少々含む、非常に軟質)
4. 淡灰茶色土(径約1cm前後の暗茶灰色鉄分を多く含む、淡茶黄色ブロックを部分的に少々含む、非常に軟質)
5. 淡灰色土(暗茶褐色鉄分を横位に縞状に含む、やや粘質を伴う)
6. 淡灰茶色土(微小の暗茶褐色鉄分を多く含む、やや軟質を伴う)

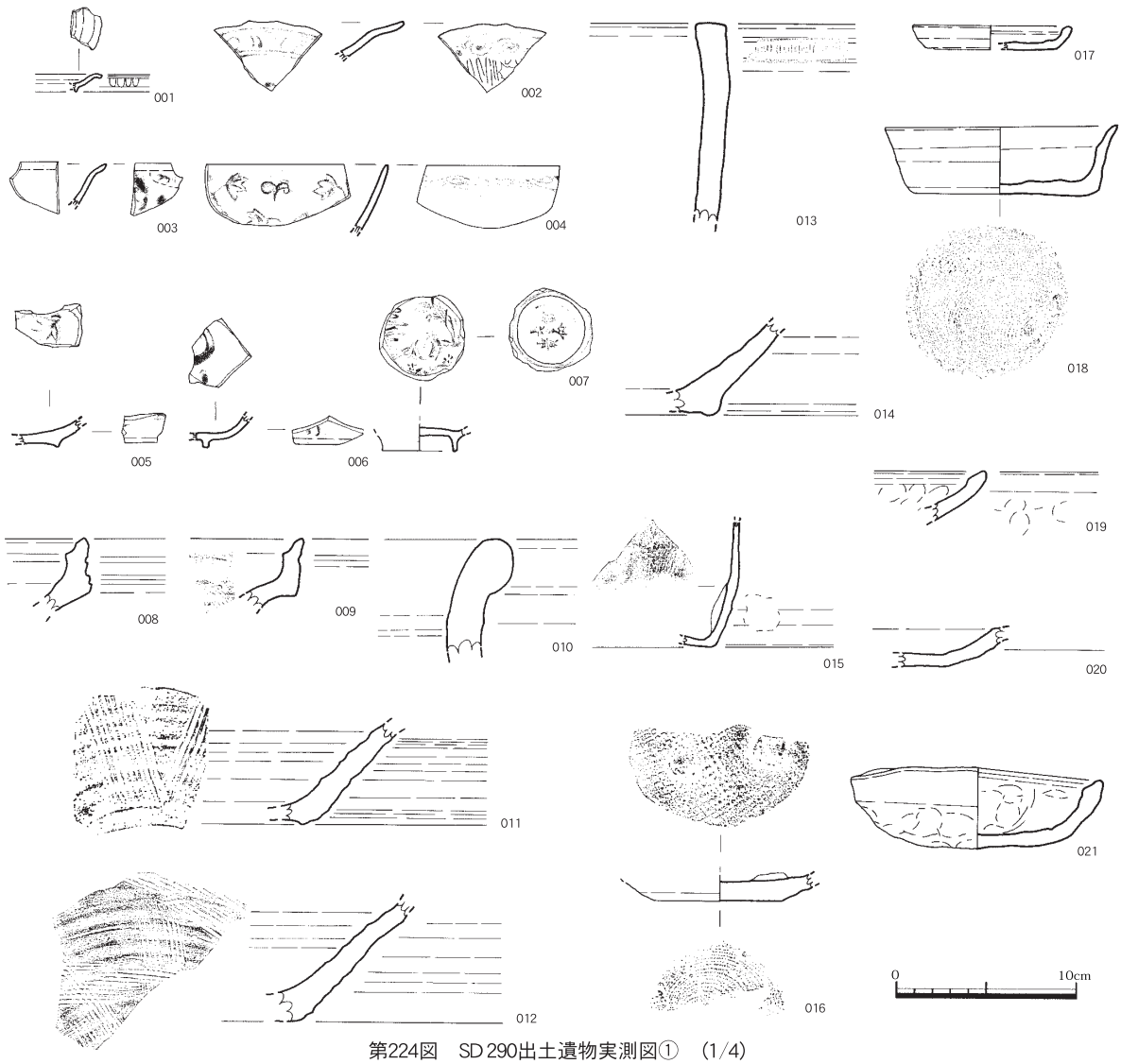
第223図　SD 290・SD 300土層断面実測図　(1/40)

側部分（同図A–A´）の２ヶ所に設定した土層観察用ベルトにおいて行った。その結果、西土層観察ベルトにおいて確認した遺構の堆積状況から次のような状況が想定された。

溝機能の廃絶後、その埋没過程は基本的には自然堆積によるもの（第６層）と想定され、その途中過程において掘り返しが実施されたと考えられる。この掘り返しに伴う埋土が第２・３・４・５層であり、南側の土層状況を考慮すると、西側に認められる第２層と東側の第３～５層の相関から、あるいは後者が後出する別の掘り返しの埋土である可能性も考えられる。そうした過程を踏まえ最終的には断面がU字形あるいはV字形を呈する溝（140SD300）が同一地点に掘削され、本遺構の廃絶をもって機能を停止したことが堆積土層の観察および遺構の平面プランの変遷から看取することができる。なお、140SD290の所産年代であるが、後述する出土遺物の様相から、16世紀後半～末に比定される。

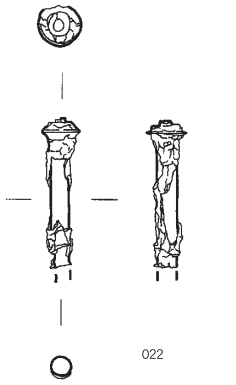
出土遺物（第224・225図）

001は翡翠釉の小皿である。型押しによる菊花状の成形がなされている。002は漳州窯系の鍔皿である。003・006は中国青花の皿である。小野分類のB群に相当する。004・007は中国青花の碗である。小野分類のE群に相当する。005は漳州窯系の青花碗の底部破片である。008・009・011・012は備前



第224図　SD290出土遺物実測図①　(1/4)

焼の擂鉢片である。これらのうち、008・009は口縁部片であり、乗岡編年の近世１期ｂに相当し、16世紀末葉前後の所産となるものである。010は備前焼甕である。乗岡編年の中世４期ｂに相当する。15世紀中葉前後に相当するものである。013は瓦質の火鉢口縁部片である。口縁部外面には雷文が型押しされる。014・016は古瀬戸である。このうち、014は瓶子の胴下半部から底部で、016は卸皿の底部である。卸皿の底部外面には糸切り痕が認められる。015は朝鮮産の舟徳利である。胴部下半から底部に相当する破片であり、内面の胴部上半には同心円状のあて具痕が認められる。017は土師器の小皿である。復元口径8.6cm、器高1.5cm、復元底径6.3cmを測る。018は土師器の坏の完存品である。口径13.0cm、器高4.0cm、底径9.6cmを計る。底部は回転糸切り離しによる。019～021は手づくね成形による京都系土師器皿である。このうち、019が皿口縁部、020が皿底部片である。021は坏の完存品である。法量は口径12.0～14.0cm、器高3.9～4.8cmを測る。022は青銅製品でなにかの部品と思われるが詳細は不明である。



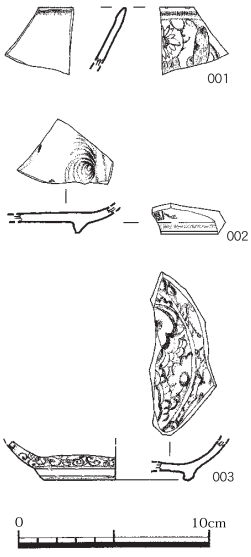
第225図　SD290出土遺物実測図②
(2/3)

140SD300（第223図）

先述の140SD290と同一地点に構築された溝状遺構である。N−10°−E方位で展開し、溝の両端は方状に終息する。南北方向に展開する溝跡は、検出幅約1.5m、検出長約22.5mを測る。遺構埋土の状況は、茶灰色土を基調とした単一層で、当該層は、前項で記載した140SD290の上層に位置しており、同溝を掘返したものであると推定される。なお、140SD300の出土遺物には16世紀後半～末に比定されるものがあり、下層の140SD290からの掻きあげ遺物の存在も想定されるが他に新出する遺物の出土は認められず、当該溝の埋没年代は概ねこの時期に比定されると考えられる。

出土遺物（第226図）

001は中国青花の碗である。小野分類のＥ群に相当する。002・003は中国青花の皿である。002は小野分類のＥ群、003はＢ群に相当する。



第226図　SD300出土
遺物実測図　(1/4)

140SD350（第227図）

調査区東端の南側部分で検出した南北方向（N−10°−E）に縦走する溝である。当該溝は、遺構の大半が調査区外に展開するため、詳細は不明であるが、現状で、遺構の検出長は約5.5m、残存深度は約0.3mを測る。遺構の堆積埋土の状況は、灰茶褐色土を基調とする単一層で、軟質である。なお、今回の調査で

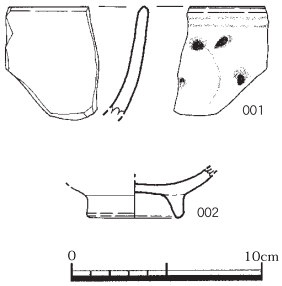


第227図　SD350・SD351
遺構平面・土層断面実測図　(1/60)

は、140SD350からの出土遺物は確認していないが、後述する140SD351との遺構の重複関係より、140SD350は140SD351に後出することが判明しており、140SD351の帰属時期が18世紀後半に比定されていることより、140SD350は近世以降の所産であることが考えられる。

140SD351（第227図）

調査区東端の南側部分で検出した南北方向（N−10°−E）に縦走する溝である。当該溝は、遺構の大半が調査区外に展開するため、詳細は不明であるが、現存部分で、遺構の検出長は約5.5m、残存深度は約0.6mを測る。遺構の検出層位は140SD350の底面であり、したがって、140SD351は140SD350に先行する溝であることが判明している。遺構の堆積埋土の状況は、灰茶色土を基調とする単一層で軟質である。なお、出土遺物の様相より、140SD351の帰属時期は18世紀後半に比定出来る。



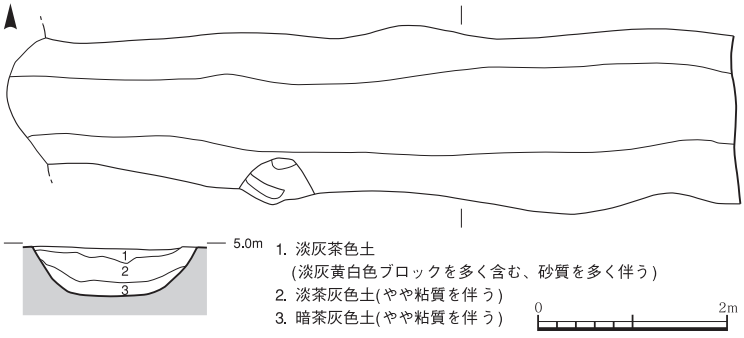
第228図　SD351出土遺物実測図　(1/4)

出土遺物（第228図）

001は陶胎染付碗の口縁部破片である。002は瀬戸・美濃産の碗である。001を内包することから140SD351は18世紀前半～中頃に廃絶したものと考えられる。

140SD360（第229図）

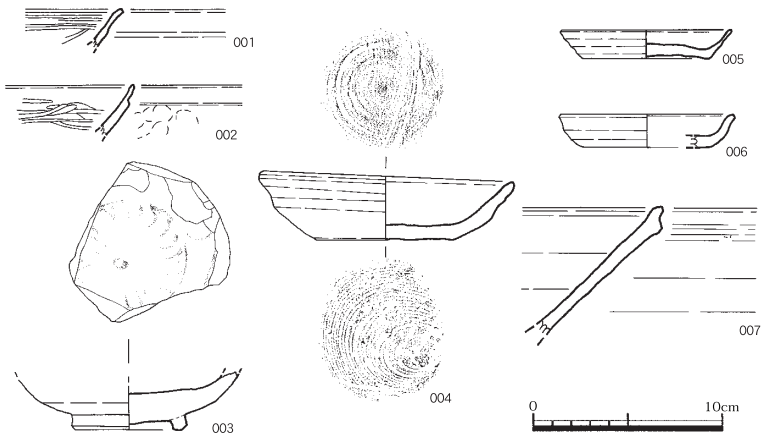
調査区の東側部分で検出した東西方向（N−80°−W）に縦走する溝跡である。遺構の東側部分は調査区外に展開し、西側部分は後出する140SD290により削平され残存していない。現存部分で検出長約7.5m、検出幅約2.0m、深度約0.5mを測る。遺構堆積埋土は3層で構成され、堆積埋土状況から自然堆積と判断される。なお、140SD360からの出土遺物の様相より、当該溝は12世紀中頃～後半には埋没していた可能性が想定される。



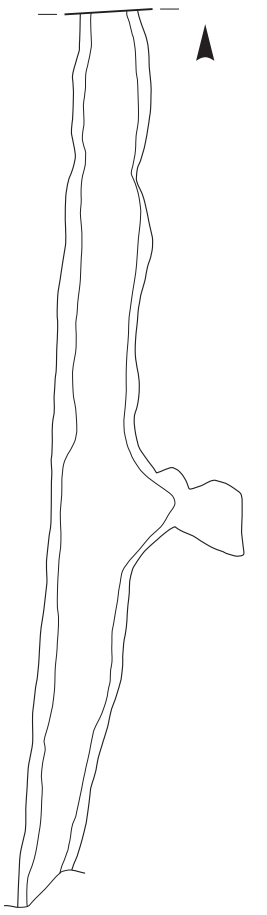
第229図　SD360平面・土層断面実測図　(1/80)

出土遺物（第230図）

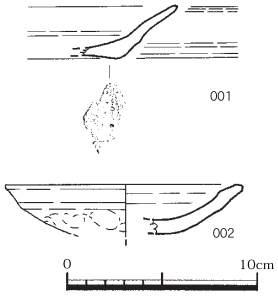
001・002は瓦器椀の口縁部である。遺構堆積埋土の第2層から出土している。諸特徴から和泉系のものと推定される。003は同安窯系青磁碗Ⅳ類（大宰府編年）である。遺構堆積埋土の第2層から出土している。004は土師器の坏のほぼ完存品である。法量は口径12.8㎝、器高



第230図　SD360出土遺物実測図　(1/4)



第231図　SD550平面・土層断面実測図　(1/50)



第232図　SD580出土遺物実測図　(1/4)

3.1～3.7cm、底径約7.0cmを測る。遺構堆積埋土の第２層から出土している。005・006は土師器の小皿である。遺構堆積埋土の最上層から出土している。このうち、005は口縁部から底部の約１/２が遺存している。法量は復元口径8.8cm、器高1.5cm、復元底径6.6cmを測る。底部は回転糸切り離しである。006は口縁部から底部の約１/４が残存している。法量は復元口径9.0cm、器高1.7cm、復元底径6.7cmを測る。007は東播系須恵器の鉢の口縁部から胴部である。遺構堆積埋土の第２層からの出土で、12世紀末葉頃に比定される。

140SD550（第231図）

調査区の西側部分を南北方向（N-10°-E）に縦走する溝である。遺構の北側部分は調査区外に展開し、南側部分は終息する。現存部分で検出長は6.0m、検出幅は約0.5m、残存深度は約0.15m を測る。遺構堆積埋土は灰色土を基調とする単一層である。堆積埋土において、近現代に比定される陶磁器類を確認している。

140SD580

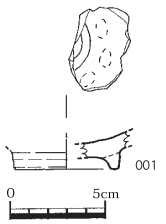
調査区の北側部分で検出した溝である。検出部分での検出幅は約0.3m、推定検出長は約22.5m、遺存深度は約0.2m を測り、断面形状は逆台形を呈する。当該溝の検出面は140SD290底面であり、主軸方位はN-75°-W を示し調査区外へと展開する。遺構内の堆積埋土の状況は灰茶褐色土を基調とする単一層である。なお、出土遺物の様相、及び140SD290との先後関係より、当該溝は16世紀末には埋没したものと考えられる。

出土遺物（第232図）

001は土師器坏の口縁部から底部片である。器高2.8cmを測り、底部外面には回転糸切り離し痕が残る。002は京都系土師器皿である。約１/２が遺存している。口径は12.2cm、器高は2.6cmを測る。

140SD590

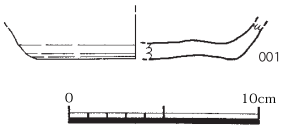
調査区の北側部分で検出した溝である。検出幅は0.4m、検出長は22.5m、現存深度は約0.3m を測り、断面形状はU 字状を呈する。当該溝の検出面は140SD580底面で、主軸方位はN-75°-W を示し調査区外西方向へと展開する。遺構埋土の状況は灰茶褐色土を基調とする単一層である。また、140SD590と並行して140SD585を検出したが、当該溝からは遺物が出土しておらず明確な時期比定には至っていない。ただし、140SD585は遺構の規模、及び形態、埋土の状況が140SD590に酷似しており、併存していた可能性も想定される。したがって、140SD590の出土遺物相様から概ね16世紀末には埋没していた可能性が考えられる。



第233図　SD590出土遺物実測図　(1/4)

出土遺物（第233図）

140SD590の出土遺物には朝鮮王朝産（李朝）の白磁碗の底部片１点がある。001は底部内外全面に施釉され、内面には三ヶ所の目跡が認められ、畳付部分は露胎となる。



第234図　SE4 10出土遺物実測図　(1/4)

井戸跡（SE）

今回の調査では総数３基の井戸跡を確認した。

140SE4 10

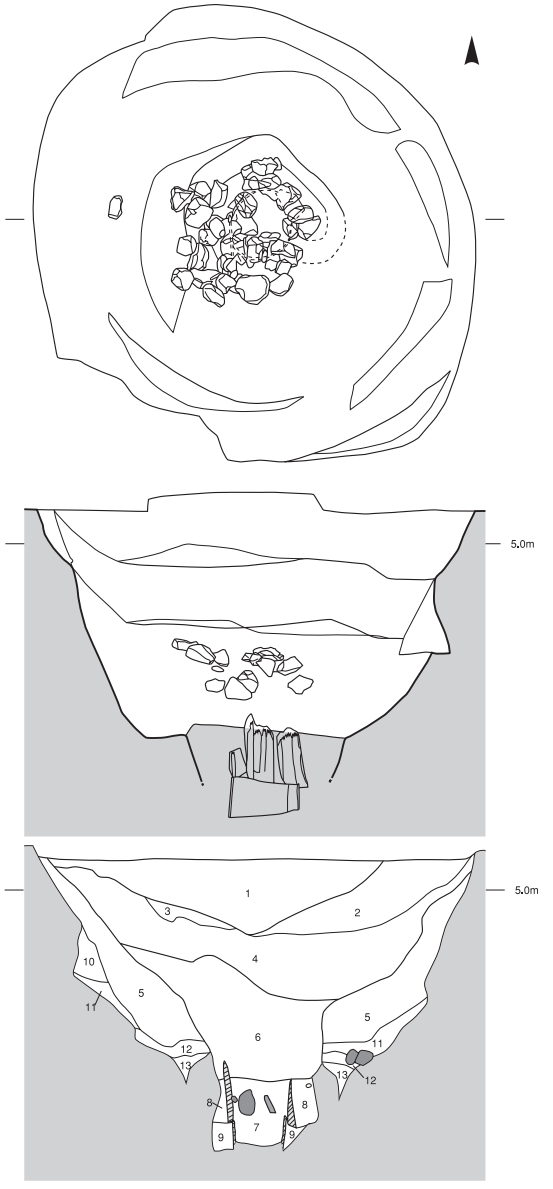
調査区の東側部分で検出した井戸跡である。140SE410は、後出する140SD290の構築により遺構上部の大半が削平されているため、遺構の詳細は不明である。なお、遺存し検出した部分は水溜部以下であり、水溜部には曲物を埋置する構造を有することを確認している。水溜部に設置された曲物には底板は認められず、破損状況も著しいため詳細は明らかにすることができなかった。土層の断面観察の結果から、曲物上端部周囲には粘土を貼っている状況が看取できる。なお、140SE410の帰属年代であるが、今次の調査、及び第125次調査において、当該遺構と同形態と考えられる井戸跡（140SE415・125SE020）が確認されており、両者の遺構の所産時期が出土遺物の様相より概ね12世紀中頃～後半前後に比定されていることから、140SE410の帰属年代もこれらに近接する時期の所産となる可能性も考えられる。

出土遺物（第234図）

土師器の坏片１点のみが出土している。001の口縁部は欠損している。底部以外の内外器面にはナデ調整が認められる。底部は回転糸切り離し痕が明瞭に残る。

140SE4 15（第235図）

調査区南端のほぼ中央部分で検出した井戸跡である。遺構の南西部分の一部は調査区外（第125次調査区）に展開する。平面形状は径約2.9mの



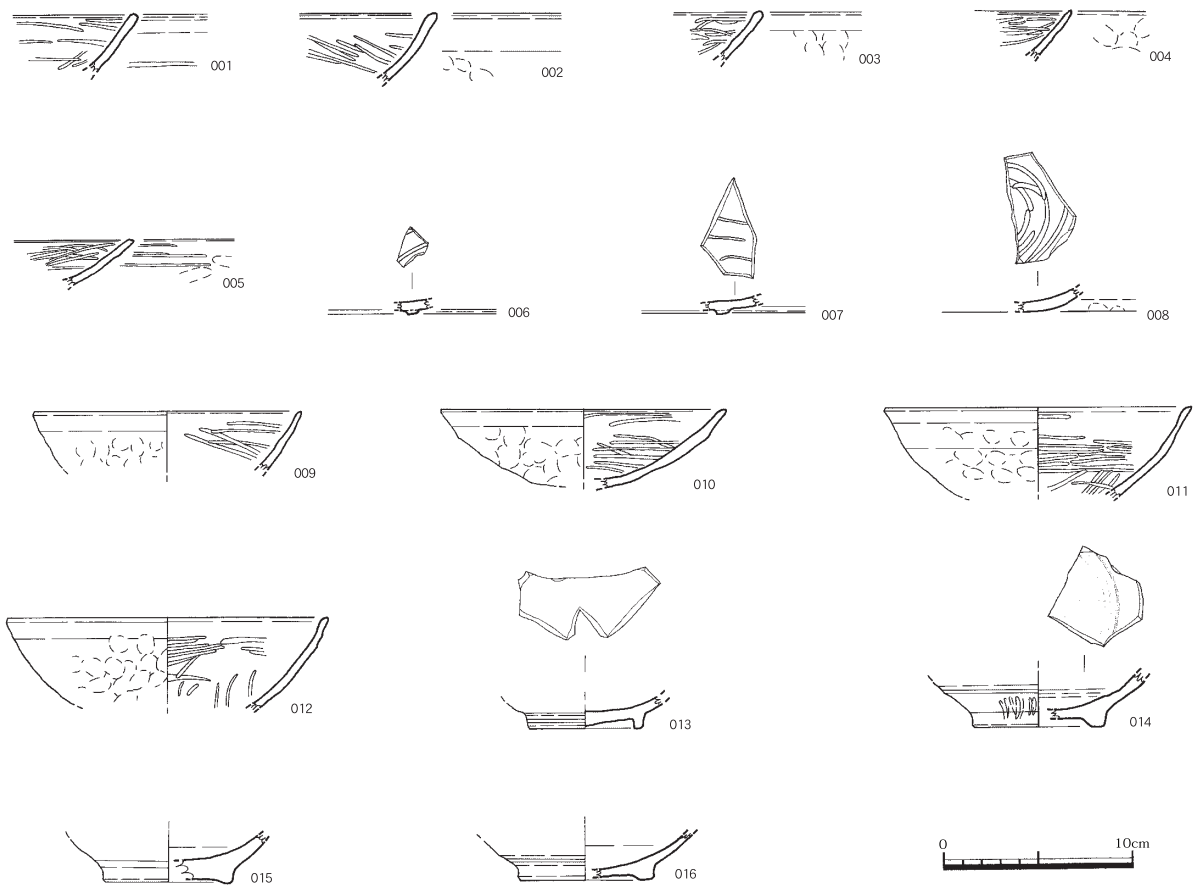
1．淡灰茶色土（径約1mm前後の褐色粒子を少々含む）
2．淡茶灰色土（1層同様の褐色粒子を若干含む、やや粘質）
3．暗灰色粘質土（径約1mm前後の褐色粒子を若干含む、炭化物を多く含む）
4．淡茶色粘質土（径約2mmの淡茶黄色粒子・炭化物を僅かに含む）
5．淡茶色土（淡茶黄色・明茶褐色ブロックを多量に含む）
6．暗灰色粘土（径約1mm前後の褐色粒子を少々含む）
7．暗灰色粘土
8．暗灰茶色粘土
9．淡灰色粘質土
10．淡茶灰色土（径約5cmの淡茶黄色ブロックを一部含む、径約1cm前後の暗茶褐色鉄分を少々含む）
11．淡灰青色砂質土（径約5cm前後の暗茶褐色鉄分を多く含む）
12．淡灰青色砂質土（淡茶黄色ブロックを部分的に含む）
13．暗灰色粘土

第235図　SE4 15遺構実測図　(1/50)

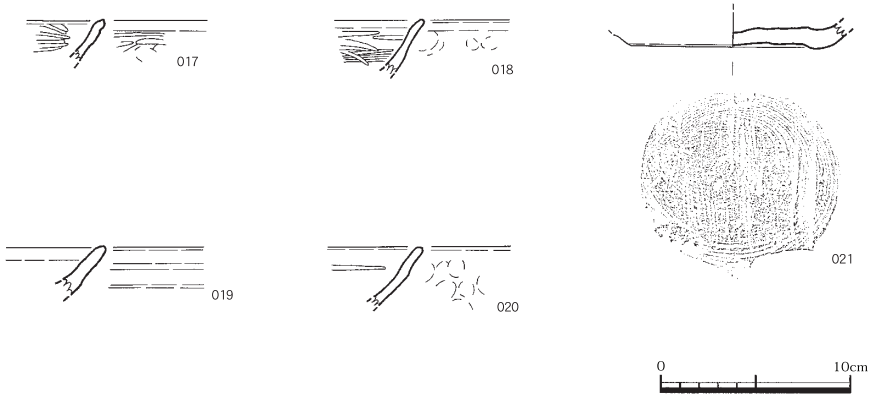
円形を呈し、現存深度は約1.9m を測る。140SE415は140SE410と同様に、水溜部に曲物を埋置する構造を有する。水溜部に設置された曲物は、現状で径約1.0m、高さ約0.5m のものを２段重ね合わせ、木製の釘状のもので閉じ合わせている。底板は存在しない。曲物上端部周囲に粘土を貼り、構造補強を図っている。水溜部に相当するこれらの曲物周囲には裏込め土が充填され、井戸廃絶時には巨大な礫が集中的に投げ込まれている状況が看取される。また、堆積埋土の最上層は掘り返し痕跡が認められる。なお、140SE415は、出土遺物の様相より12世紀末葉～13世紀前半の所産であると推定される。

出土遺物（第236・237・238図）

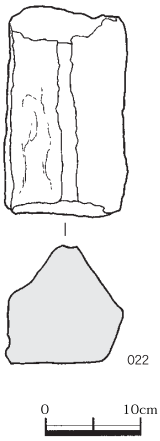
001～012・017～020は瓦器椀の破片資料である。いずれも和泉型瓦器椀の特徴を有するものであり、外器面にミガキが顕著でない点、口縁部形状、低平化しつつある器形的特徴、底部に貼付される形骸化した高台の状況等から、これらは和泉型瓦器椀のⅠ-3型式からⅡ-1型式に相当するものであり、13世紀前半頃の所産年代が推定される。013は大宰府陶磁器分類白磁碗Ⅵ類の底部破片である。底部には断面方形の高台が貼付される。014～016は削り出しにより成形された高台をもつ大宰府陶磁器分類白磁碗Ⅳ類の高台部である。底部外面から底部内面は露胎となる。021は土師器坏の底部片である。底径10.5㎝を測り、回転糸切り離し痕を明瞭に残す。022は石製加工品である。上下両端を欠損し、現存重量4800g を測る。５面に面取り加工痕がみられ、被熱を受けている。



第236図　SE415出土遺物実測図①　(1/4)



第237図　SE415出土遺物実測図②　(1/4)



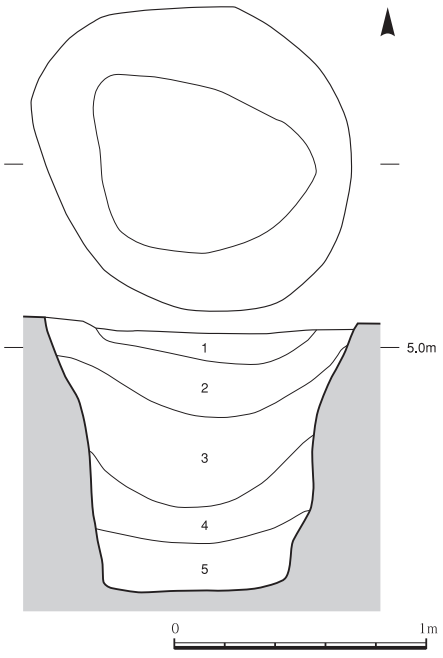
第238図　SE415出土遺物実測図③　(1/8)

140SE635（第239図）

調査区の西側部分で検出した井戸跡である。遺構検出面は140SX610底面である。平面形状は径約1.2mの円形を呈し、現存深度は約1mを測る素掘りの井戸である。遺構の上部を構成する埋土は、後出する140SX610の構築により削平され遺存していない可能性が高いが、現存部分での遺構堆積埋土の状況は、5層で構成される自然堆積の1つである。なお、遺構埋土の第5層上面より、胴部が完存し、口縁部を欠損する壺の出土を観察しており、この壺の年代観より140SE635は弥生時代終末期の所産であると推定される。

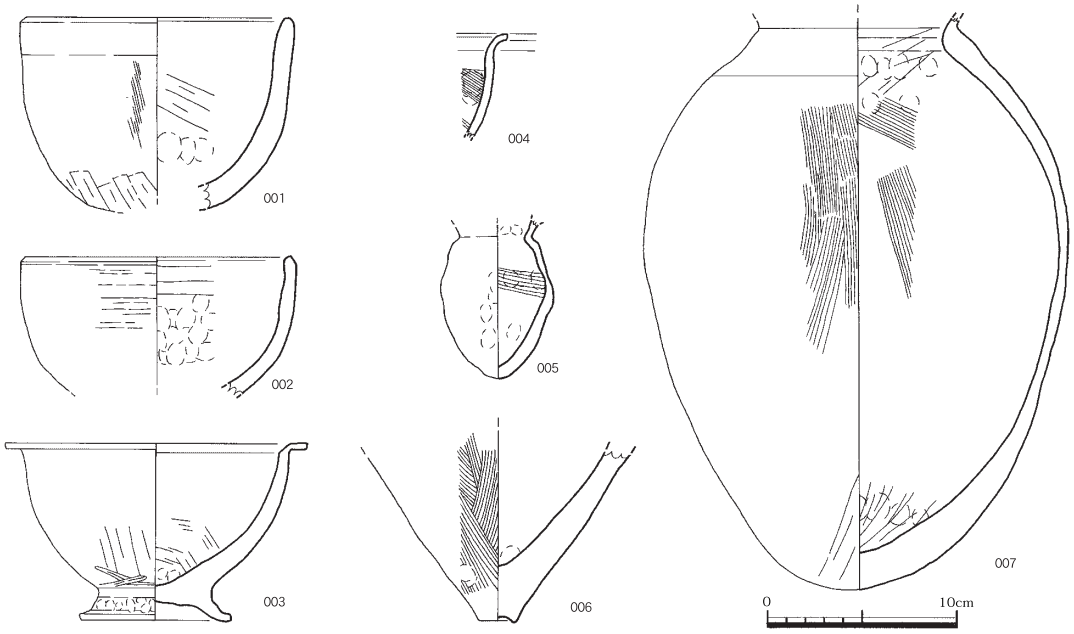
出土遺物（第240図）

001・002は鉢である。底部の一部は欠損し残っていないので詳細は不明であるが、003と同様な脚部が貼付されていた可能性も考えられる。003は台付鉢である。口縁部から底部までの約1/3が残存している。口縁端部は外面方向へ屈折する。004は小破片のため詳細は不明であるが、鉢等の口縁部である可能性が考えられる。005は甕のミニチュアである。頸部、胴部および底部の形態など当該期の甕の特徴を良く示している。006は甕の胴部から底部である。胴部には縦位の緻密なハケ目調整が認められる。底部は平坦であるが、やや尖り気味で上げ底風に仕上げられる。007は壺である。口縁部は欠損し底部はレンズ状を呈し、胴部には突帯等の装飾は認められない。



1. 暗灰茶褐色土
（焼土粒子・炭化物を若干含む、
黄色土ブロックを僅かに含む、やや粘質を伴う）
2. 暗茶褐色土
（炭化物・焼土粒子を若干含む、
黄色土ブロックをやや多く含む、粘質強い）
3. 暗茶褐色土
（炭化物・焼土粒子を若干含む、
黄色土ブロックをやや多く含む、2層より暗い）
4. 暗茶灰褐色土
（炭化物をやや多く含む、
黄色土ブロックを若干含む、粘性強い）
5. 暗灰茶褐色土
（炭化物を多く含む、橙白色粒子を若干含む）

第239図　SE635平面・土層断面実測図　(1/30)



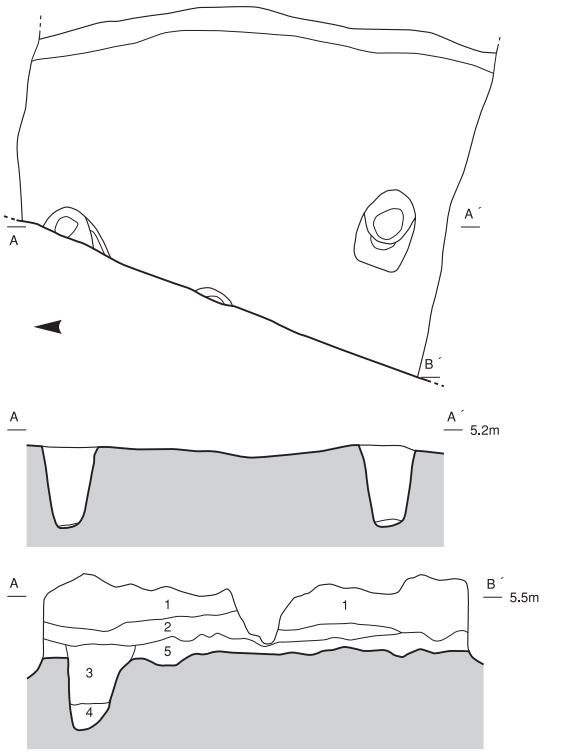
第240図　SE635出土遺物実測図　(1/4)

竪穴住居跡（SH）

今回の調査では12基＋αの竪穴住居跡を確認し、検出住居の所産時期は弥生時代後期～古墳時代初頭に比定されるものである。

140SH426（第241図）

調査区の西端部分で検出した竪穴住居である。住居の西側部分は調査区外に展開し、北・南側部分は現代の撹乱穴により削平され遺存していないが、現状での推定で一辺約４ｍの隅丸方形を呈する住居であったと推定される。140SH426の堆積埋土は柱内堆積埋土を含め５層で構成され、上部層を構成する２層は、住居としての機能停止後の廃絶段階における埋没埋土である。下部層に関しては単一層であり、ブロックを多量に内包することから住居の貼床に相当する部分である。床面で直上において主柱穴を２基確認している（140SX434・436）。この２基の主柱穴のうち、住居の北側に位置する主柱穴140SX434は、遺構の西半が調査区外に展開しているため遺構の全容は不明であるが、土層の断面観察を行った結果、堆積埋土は２層で構成されていることが判明し、柱痕が確認されない点、埋土内



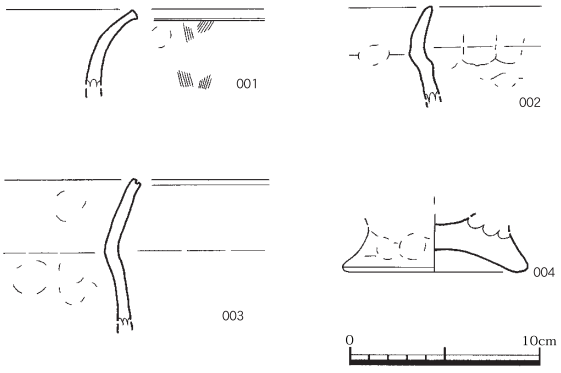
1. 暗茶灰褐色土（土器片を含む）
2. 暗灰茶褐色土(微小の炭化物・焼土粒を多く含む)
3. 暗灰茶色土(第5層同様のブロックを少々含む)
4. 暗灰茶色土(第5層同様のブロックを多量に含む、砂質を若干伴う)
5. 淡茶灰色土(径5mm前後の暗茶褐色・淡茶黄色・淡黄白色ブロックを多量に含む)

第241図　SH426遺構実測図　(1/50)

にブロック土を内包する点などから住居廃絶時に柱の抜き取りが行われたと考えられる。南側に位置する140SX436の規模は、径約0. 3m、残存深度は約0.6m を測る。なお、貼床下の住居底面は平坦ではなく、ほぼ全面で窪み状の凸凹が認められる。140SH426の出土遺物は第242図に示した。140SH426に伴うと考えられる前述の主柱穴（140SX436）の埋土中より、出土した遺物の様相から140SH426は古墳時代初頭の所産であると考えられる。

出土遺物（第242図）

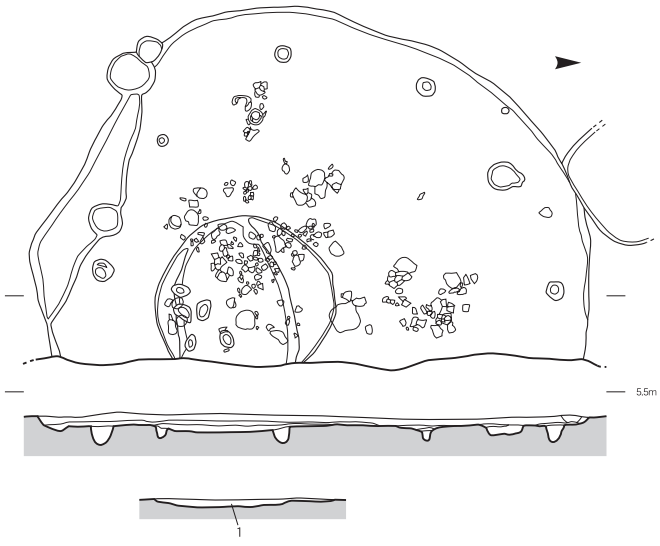
001は甕の口縁部である。比較的薄手であり端部は平坦である。外器面には細かいハケ目調整が認められる。140SX436の堆積埋土中から出土した。頸部内面の屈曲はほとんど形骸化している。002は鉢の口縁部破片である。003は甕の口縁部破片である。001と同様に口縁端部は大きく外方へ延び、内面屈曲部の稜線は不明瞭になりつつある。004は台付鉢の底部破片である。ハ字状に開く脚台部は上げ底状を呈している。



第242図　SH426出土遺物実測図　(1/4)

140SH430（第243図）

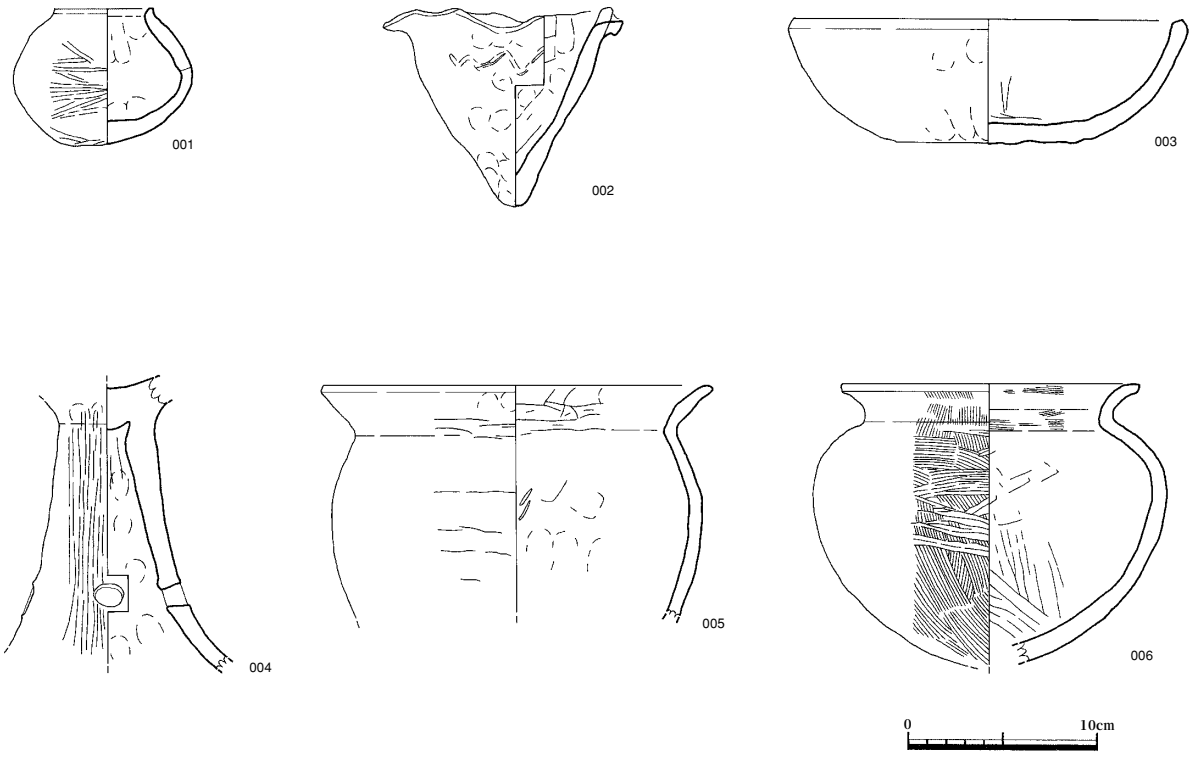
調査区のほぼ中央部分で検出した竪穴住居跡である。住居の東側部分は140SD290の構築により削平され残存していないが、現状から推定される規模は一辺が約５～６ｍを測る平面隅丸方形を呈する竪穴住居であると思われる。なお、当該住居の残存深度は0. 2m を測り、遺存状況はさほど良好ではない。なお、住居床面のほぼ中央で土坑（140SX437）を検出した。140SX437は推定で平面形状が隅丸方形を呈し、残存深度は約 0.2m を測る。堆積埋土は暗灰茶褐色土を基調とした単一層であり、炭化物を多量に内包する。また、住居壁面に沿う形でピット６基（140SX438・439・441～444）を確認した。これらのピットは、径0. 2～0. 4mを測り、当該住居の床面で検出することができ、140SH430に伴うピットであると判断される。140SH430の出土遺物は、全て当該住居の床面直上で出土したものである。したがって、住居の機能時あるいは廃絶直後の遺物と判断され、住居の直接的な年代を示す遺物と評価される。これらの出土遺物の様相より、当該住居は弥生時代終末期～古墳時代初頭の所産であると推定される。



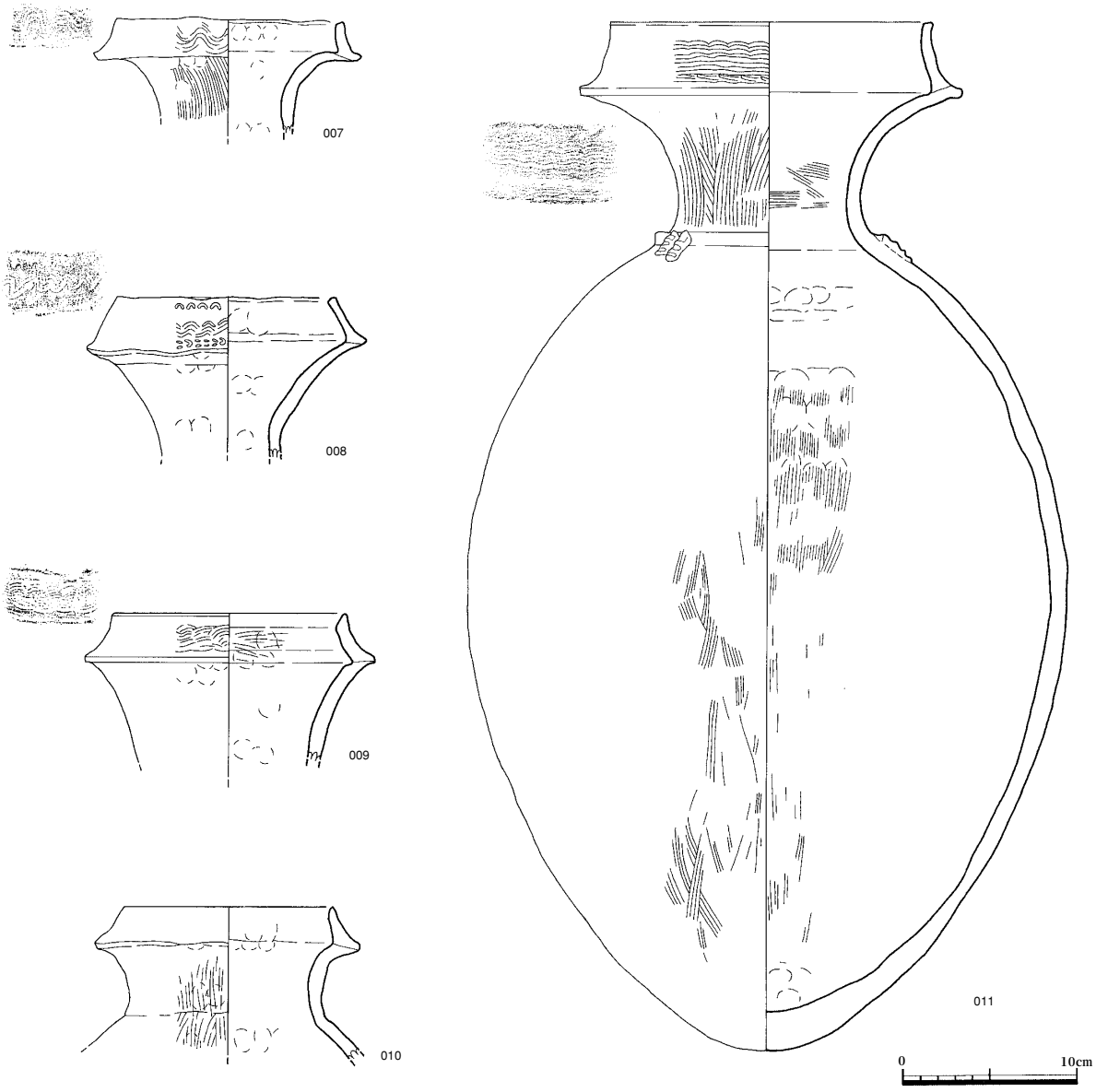
第243図　SH430遺構実測図　(1/80)

出土遺物（第244・245・246図）

001は小型無頸壺の完存品である。外面の胴部中位は横位に磨かれている。小型丸底壺を意識したものである可能性も考えられる。**002**は波状口縁を有する鉢形土器の完存品である。口縁部の四方向を片口状に成形する。内外面とも指オサエが明瞭に残存しており、胴部上位には複数本で一単位の櫛描波状紋が描かれている。**003**は鉢である。内面には工具痕が多数残存しており、内外器面とも指オサエが顕著である。**004**は高坏脚部である。裾部および坏部は欠損している。脚部外器面のほぼ全面に縦位に丁寧なミガキが施されている。下位には外方から内方へ、径約１㎝の穿孔が穿たれている。**005**は甕である。底部が欠損している。口縁部内器面には横位にケズリ調整が認められる。**006**は広口の壺である。底部の一部が欠損している。復元口径は15.6㎝、復元胴部最大径は18.6㎝と胴部最大径が口縁部径より大きくなる。外器面にはハケ目調整の後横位を主体とするミガキが施される。**007～011**は複合口縁を有する壺である。**007**は口径12.7～13.5㎝を測り淡橙色を呈する。頸は長めに成形され、外器面にはタテ方向のハケ目が施される。複合口縁部の外面には、櫛描波状文が施文される。**008**は淡茶褐色～黒色を呈し、胎土中には石英、角閃石、長石粒を内包する。口径12.5～13.5㎝を測る。複合口縁部には櫛描波状文の他、上下に横位の半截竹管状の工具による刺突連点文が施文される。**009**は復元口径13.2㎝を測り、橙褐色を呈する。胎土中には石英、角閃石、長石粒などを含み焼成は良好である。複合口縁部には櫛描波状文が施文される。**010**は直立気味に立ち上がる頸部に、断面三角状のタガを貼付する複合口縁壺の口縁部破片である。口縁部分はほぼ完存し、口径11.5～12.0

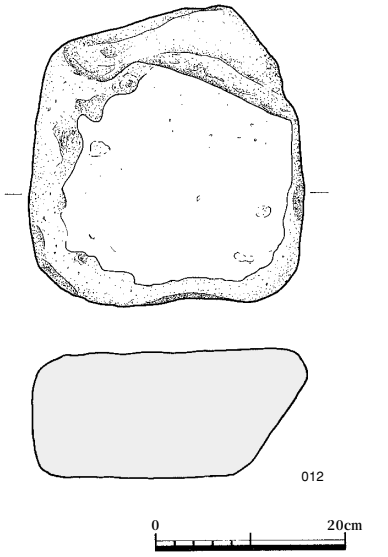


第244図　SH430出土遺物実測図①　(1/4)



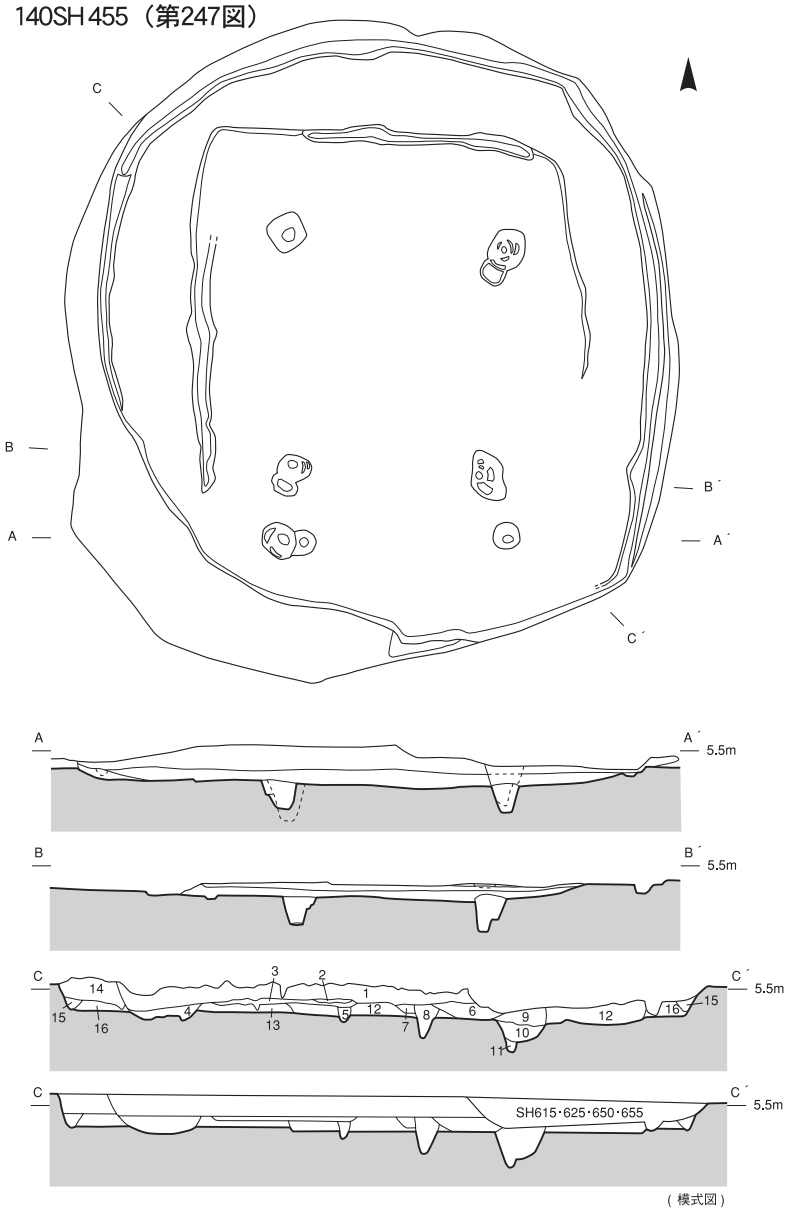
第245図　SH430出土遺物実測図②　(1/4)

cmを測る。淡茶褐色を呈し、複合口縁部はナデにより調整され文様は施文されない。**011**は全体の約１/２が遺存し、図上復元を行うことができた複合口縁壺である。復元口径18.4cm、器高58.8cmを測る。橙色を呈し、胎土中には石英、角閃石、橙色粒子を含む。複合口縁部には、櫛状工具による小波状文が施文される。頸部には一条の三角突帯が貼付され、横刻みを施す２個一単位となる棒状の浮文が貼付される。底部はレンズ状を呈している。**012**は安山岩製の石製品で、両平面は扁平であり、台石として使用された可能性が考えられる。



第246図　SH430出土遺物実測図③　(1/8)

140SH455（第247図）



SH455　1．暗灰茶褐色土(径2mm前後の褐色粒子を多く含む)
2．焼土(硬質)
3．焼土
4．淡灰茶褐色土(微小の褐色粒子を多く含む)
5．暗灰色土(径約3mmの焼土粒を疎らに含む)
6．暗灰色土(微小の褐色粒子・炭化物を若干含む)
7．暗灰色土
8．暗灰色土
9．淡灰茶色土
10. 暗灰茶色土
11. 暗茶灰色土
12. 暗灰茶色土
13. 暗茶灰色土

SH620　14. 淡灰茶褐色土
15. 暗茶灰色土（径約 3mmの淡茶黄色土ブロックを若干含む）
16. 淡灰茶色土（径約1cmの横位縞状に潰れた淡茶黄色ブロックを多量に含む）

0　4m

第247図　SH455・SH620遺構実測図　(1/100)

調査区の西側部分で検出した竪穴住居跡である。住居の中央部分は後出する140SH615・625・650・655の構築により削平され遺存状況は良好でないが、現状で推定される平面形状は一辺が約５ｍの方形を呈する竪穴住居跡で、遺構の遺存深度は約0.5m を測る。堆積埋土は灰茶褐色土を基調とする単一層で、層厚は0.15～0.20m を有する。なお、本層の直下面が当該住居の床面と考えられるが、遺物の出土は認められない。遺構の重複関係から140SH620よりも新しいことは明らかであり、今次の調査で確認した他竪穴住居の形態等の類似から、140SH455は概ね弥生時代後期～古墳時代初頭の所産である可能性が考えられる。

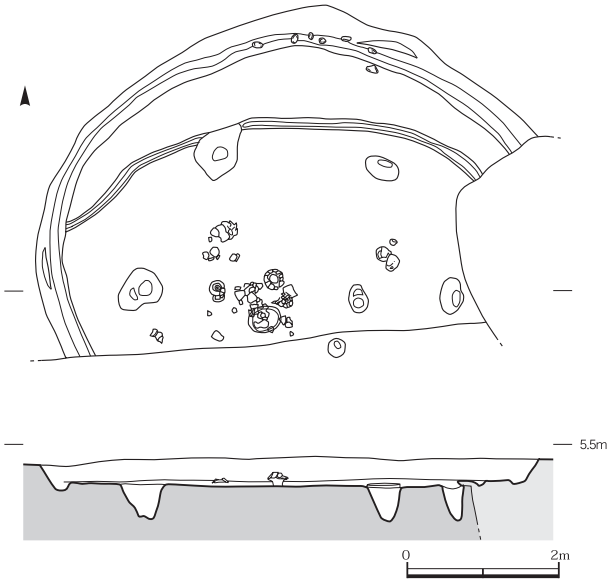
140SH620（第247図）

調査区の西側部分で検出した竪穴住居跡である。当該住居の中央部分は、140SH455の構築により削平されており遺存していない。現存部分で、平面形状は隅丸方形を呈し、一辺が約８ｍを測る大型住居である。遺構堆積埋土は３層で構成される（土層断面図第14～16層）。第14層は住居としての機能停止後の廃絶期における埋没埋土である。当該層の直下が住居床面に相当する。第15層は周壁溝埋土に相当する。検出幅は約0.3m、残存深土は約0.25m を測り、断面Ｕ字状を呈する。なお、周壁溝は住居の南側部分においては確認されてい

ない。第16層は灰茶色土を基調とし、茶黄色ブロックを多量に内包する住居機能時の貼床土である。なお、140SH620も140SH455と同様に、直接的に住居の年代を示す遺物は出土しなかった。ただし、住居の上部層に相当する埋没埋土中より、弥生時代に比定される土器片、及び古式土師器片が出土していることより、少なくとも古墳時代初頭頃には埋没していたことが想定できる。

140SH465（第248図）

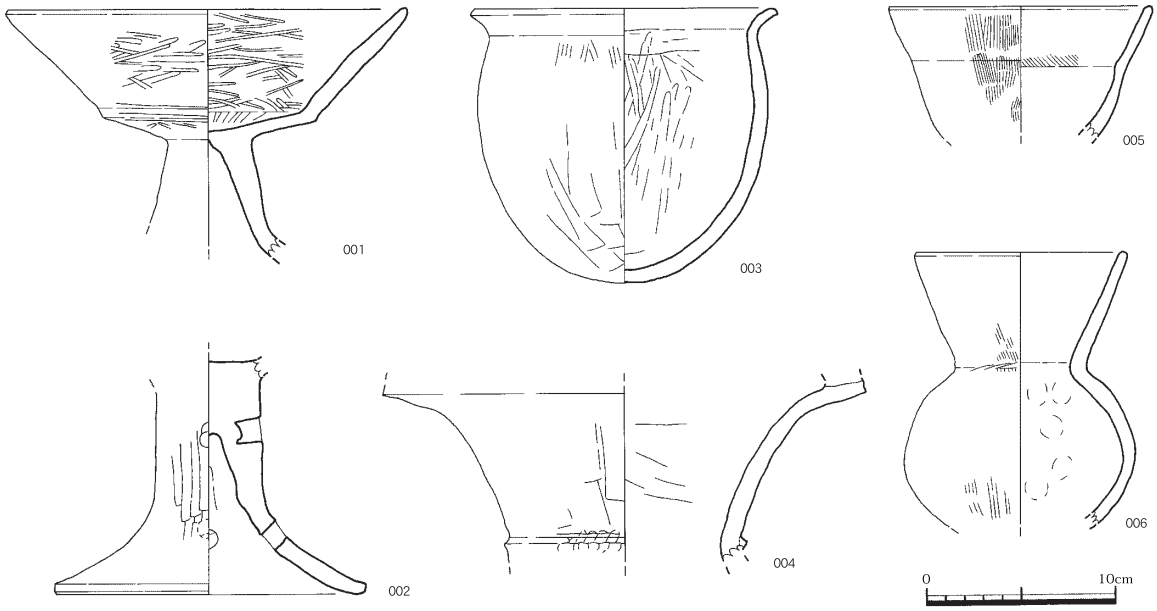
調査区の南側、西寄り部分で検出した竪穴住居である。140SH465の東側は後出する140SE415の構築により削平され遺存していない。南側部分は平成12年度に調査を実施した第125次調査地点の中に在する。現存部分で、平面形状は隅丸方形を呈し、一辺が約７ｍを測る大型住居である。140SH465の出土遺物は、当該住居の床面より古墳時代初頭のものを確認しており、住居の直接的な機能時年代を提示し、また、床面には弧状に溝が認められ、 140SH465はこの溝を壁溝とする住居を拡張することにより、形成された住居跡である可能性が想定される。



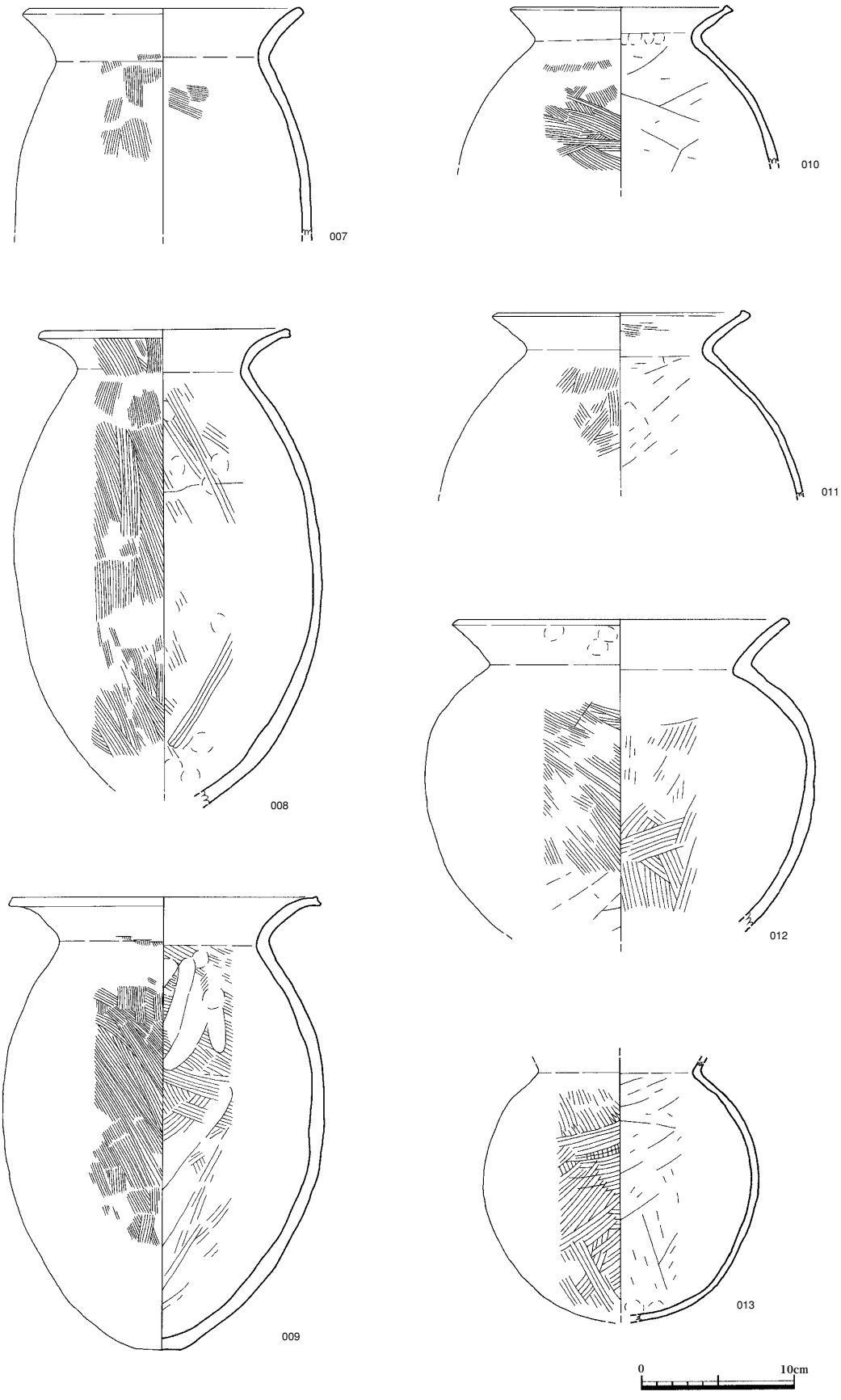
第248図　SH465平面・断面実測図　(1/100)

出土遺物（第249・250図）

001・002は高坏である。001は裾部が欠損する。坏部の内外器面とも横位の丁寧なヘラミガキが施されている。また、坏部の内側底面には暗文風に放射状のミガキが施されている。002は高坏の脚部である。外器面には縦位にミガキが施される。脚の中・下位には約0.8㎝の穿孔を有するが、中位の穿孔は貫通していない。003は鉢である。内器面は頸部に横位、胴部上半に縦位、或いは斜位にケズ

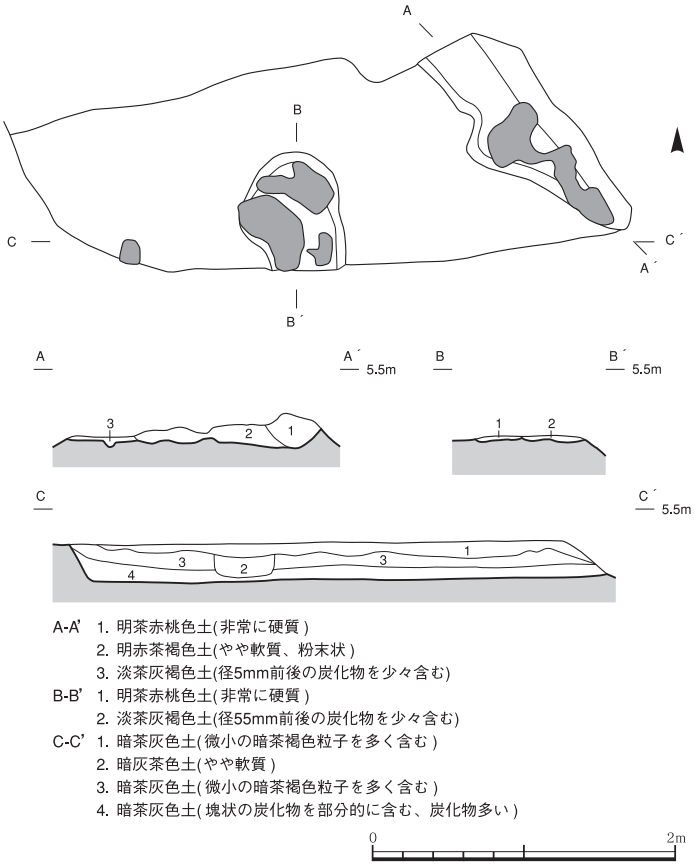


第249図　SH465出土遺物実測図①　(1/4)



第250図　SH465出土遺物実測図②　(1/4)

リ調整がなされた後、縦位のミガキが施される。外器面は胴部上半にハケ目調整が認められるが、その後のナデにより消されている。004は壺の口縁部である。頸部には断面形状が三角の貼付け突帯が一条認められ、突帯上面及び下面には意図的に付けられた指オサエが認められる。口縁部は複合部がはずれており擬口縁を形成する。005は小型丸底形の鉢である。底部は欠損している。内器面は、頸部上方に斜位にハケ目調整が認められる。外器面には、口縁部直下から胴部中半に、約８本一単位のハケ目調整がタテ方向に認められる。006は小型長頸壺である。胴部内面には指オサエが認められる。外面頸部周辺と同下半には僅かにハケ目調整が認められ、最終調整としてナデが施される。007～013は甕である。007～009は弥生時代から続く伝統的な在地系甕の系譜に連なる甕である。007は復元口径17.6cmを測り、淡黄橙色を呈する。内外器面ともハケ目とナデにより調整されている。008は頸部でしまり、口縁部が大きく外反する器形を呈する甕である。復元口径16.2cmを測り、内外面とも橙色を呈している。器面の調整はハケ目とナデにより調整される。胎土中には石英、角閃石、長石粒を内包する。009は全体の約２／３が遺存する。復元口径19.8cm、器高29.7cm、胴部最大径21.0cmを測る。器面調整は他のものと同様にハケ目、ナデを主体に施される。010・011は外来の布留式系の甕である。010は復元口径13.9cmを測り、色調・淡黄橙色を呈する。外器面は細密なハケ目により調整される。内器面にはケズリが施される。011は全体の約１／２が遺存する布留式系甕の上半部資料である。口径20.0cmを測る。橙色を呈し、外器面はハケ目とナデ、内器面はケズリが施される。胎土中には石英、角閃石、長石粒等を含む。010・011とも肉眼観察レベルでは在地産の胎土と差異はない。012・013は在地系甕と布留式系甕の折衷と考えられる甕資料である。012は球形胴を有する甕であり口縁部形状、胴部形態などに新来の布留式系甕の影響を看取でき、肩部の張り等に弥生時代後期における在地の広口壺との関連も考慮される。復元口径21.2cm、胴部最大径25.6cmを測る。内外器面ともハケ目とナデにより調整される。橙色を呈している。013は球形胴を呈する甕の胴部破片である。胴部最大径17.8cmを測る。外器面は斜方向を主体とする粗いハケ目が施される。調整状況は在地の甕に共通する。内器面にはケズリが実施されるが、010や011のような布留式系の甕に比べ雑である。黄橙色を呈する。



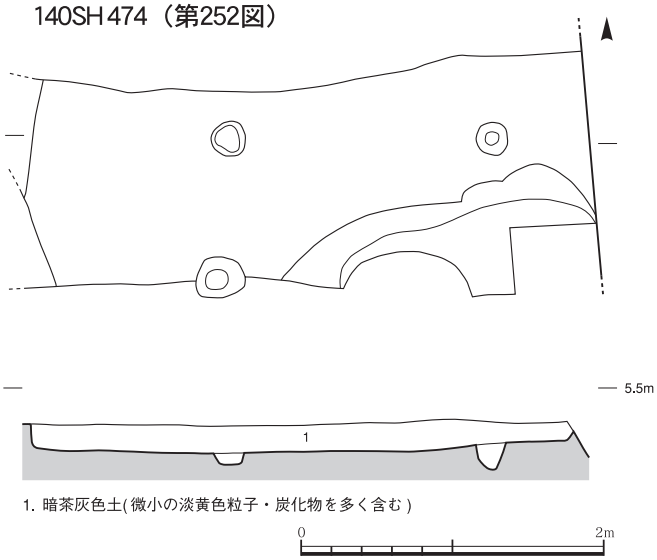
第251図　SH469平面・土層断面実測図　(1/50)

140SH469（第251図）

調査区の東南部分で検出した竪穴住居である。140SH469の北側部分は後出する140SD360、西側部分は140SD290、東側部分は140SH474の構築により削平され遺

存しておらず、床面のみが島状に残っているといった状況である。住居の検出面から底面までの深度は約0.25m を測る。主柱穴、及び貼床などは認められない。遺構内の堆積埋土は４層で構成され、この堆積層の最上層中に３ヶ所に焼土の痕跡が認められる。出土遺物には土器小片が出土しているのみである。明確に時期比定することはできなかった。

140SH474（第252図）



第252図　SH474平面・土層断面実測図　(1/50)

調査区の東南で検出した竪穴住居である。140SH474は140SH469と同様に、遺構の北側部分を後出する140SD360、南側部分を140SX367により削平される。また、遺構の東側部分は調査区外に展開し、西側部分は140SH469と重複する。遺構の堆積埋土は茶灰色土を基調とする単一層である。 住居床面においてピットを確認した（140SX477～479)。これらのピットは0.1～0.2m の深さを有し、主柱穴としては規模は小さいが埋土状況等から140SH474に伴う可能性が高いと推定される。出土遺物は概して少量であり土器小破片が出土したのみである。

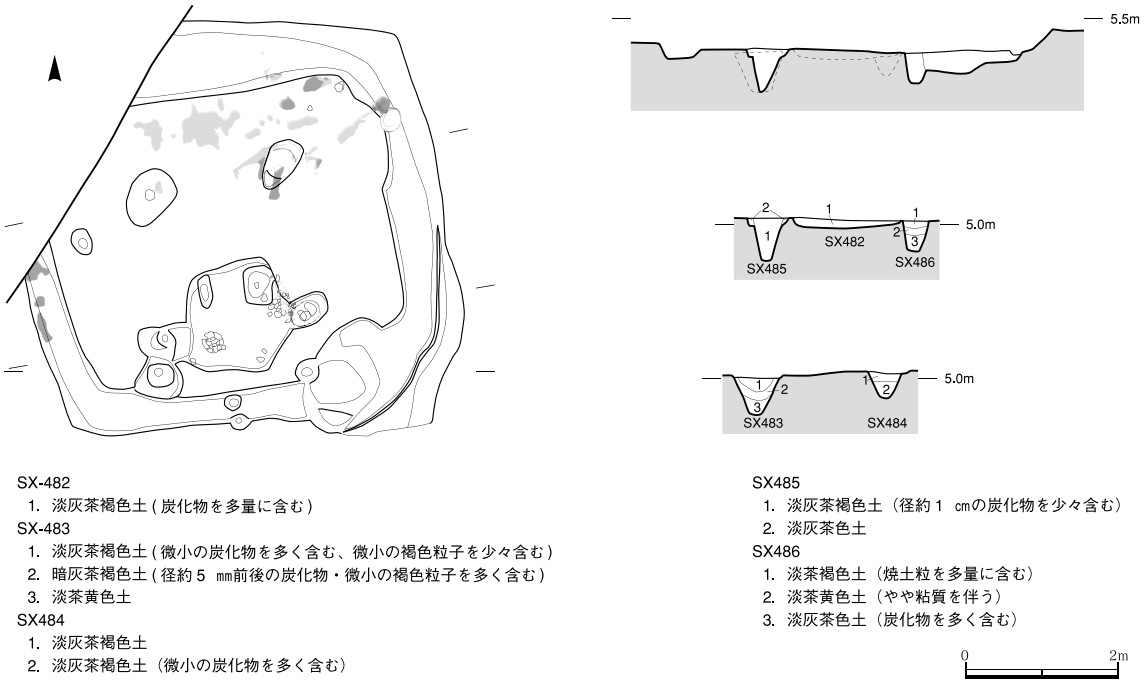
140SH481（第253図）

調査区の南側部分で検出した竪穴住居である。遺構の北西コーナーに相当する部分は、調査区外(第125次調査区）に展開する。平面形状は一辺が約5.5m を測る方形を呈し、住居床面のみが遺存する。また、当該面で確認できた４本の主柱穴（140SX483・484・488・489）と土坑（140SX482)、および周壁溝（140SX471）の存在により住居の規模を推定することができる。主柱穴の遺存深度はいずれも約0.5mであり、堆積埋土内には多くの炭化物を内包する。140SX482は住居の南側部分に位置する主柱穴（140SX488・489）の間に配置された土坑であり、平面形状は一辺が約1.5m を測る隅丸方形を呈する。遺存深度は0.1m を測り、堆積埋土は灰茶褐色土を基調とする単一層であり、多量の炭化物を内包する。なお、140SX482は、遺構の配置、及び埋土の状況より当該住居に伴う灰溜り的な機能を果たしていたものと推定される。140SX471は140SH481の竪穴部壁面沿いを全周する周壁溝である。この周壁溝は、検出幅が約0.8m、遺存深度が約0.25mを測り、比較的規模が大きい。140SH481は出土遺物の様相より、弥生時代終末～古墳時代初頭の所産であろうと考えられる。

出土遺物（第254図）

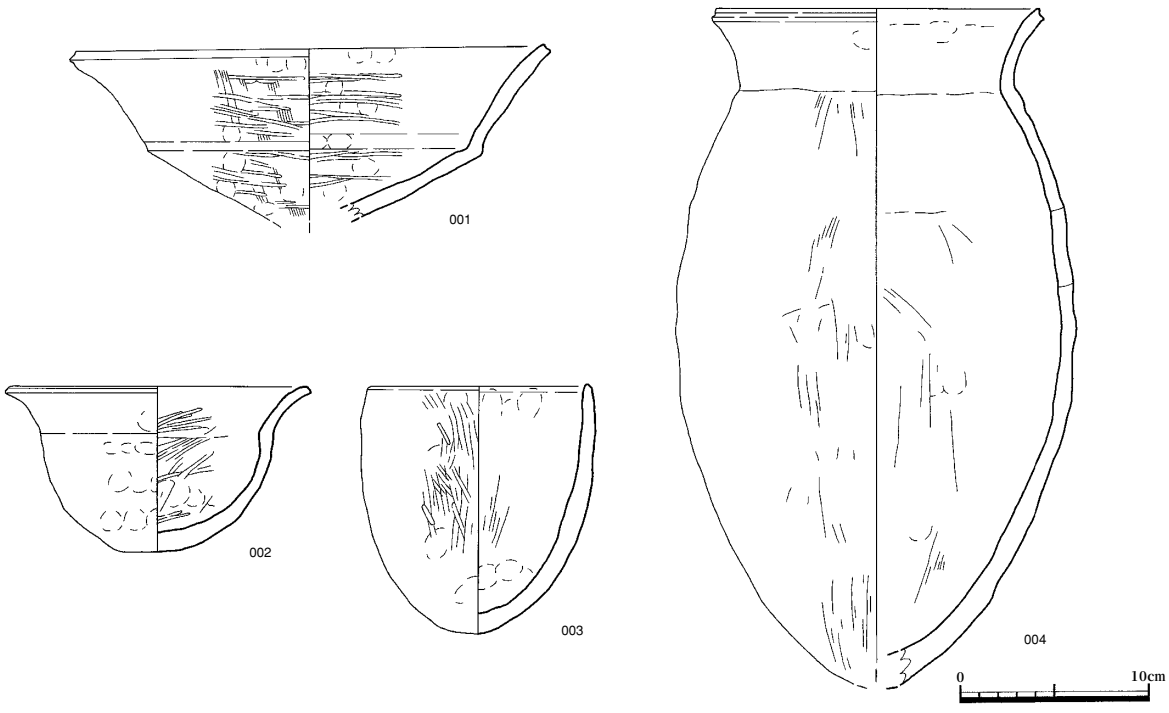
001は高坏の坏部である。内外器面とも横位のミガキが施されている。002・003は鉢である。002は内面頸部周辺に斜位にミガキ調整が認められる。外器面は頸部直下、胴部中・下位、底部に各々指オサエが並列する形で認められる。003は内器面には口縁部周辺、及び底部に指オサエが認められる。胴部中位には若干のハケ目調整が認められる。外器面はほぼ全面において指オサエが認められ、口縁部から胴部下半にかけて約四条で一単位のハケ目調整が認められる。なお、器面全体に赤色塗彩の痕

跡が認められる。004は甕である。底部は欠損しているが、口縁部から胴部下半の約１/２が残存している。復元口径17.0cmを測り、胴部最大径21.0cmを測る。橙褐色～黒色を呈し、器面は工具ナデ（ハケナデ）の後ナデにより調整される。胎土中には石英、角閃石、長石粒などを内包する。



SX-482
1. 淡灰茶褐色土（炭化物を多量に含む）
SX-483
1. 淡灰茶褐色土（微小の炭化物を多く含む、微小の褐色粒子を少々含む）
2. 暗灰茶褐色土（径約５㎜前後の炭化物・微小の褐色粒子を多く含む）
3. 淡茶黄色土
SX484
1. 淡灰茶褐色土
2. 淡灰茶褐色土（微小の炭化物を多く含む）
SX485
1. 淡灰茶褐色土（径約１㎝の炭化物を少々含む）
2. 淡灰茶色土
SX486
1. 淡茶褐色土（焼土粒を多量に含む）
2. 淡茶黄色土（やや粘質を伴う）
3. 淡灰茶色土（炭化物を多く含む）

第253図　SH481遺構実測図　(1/100)



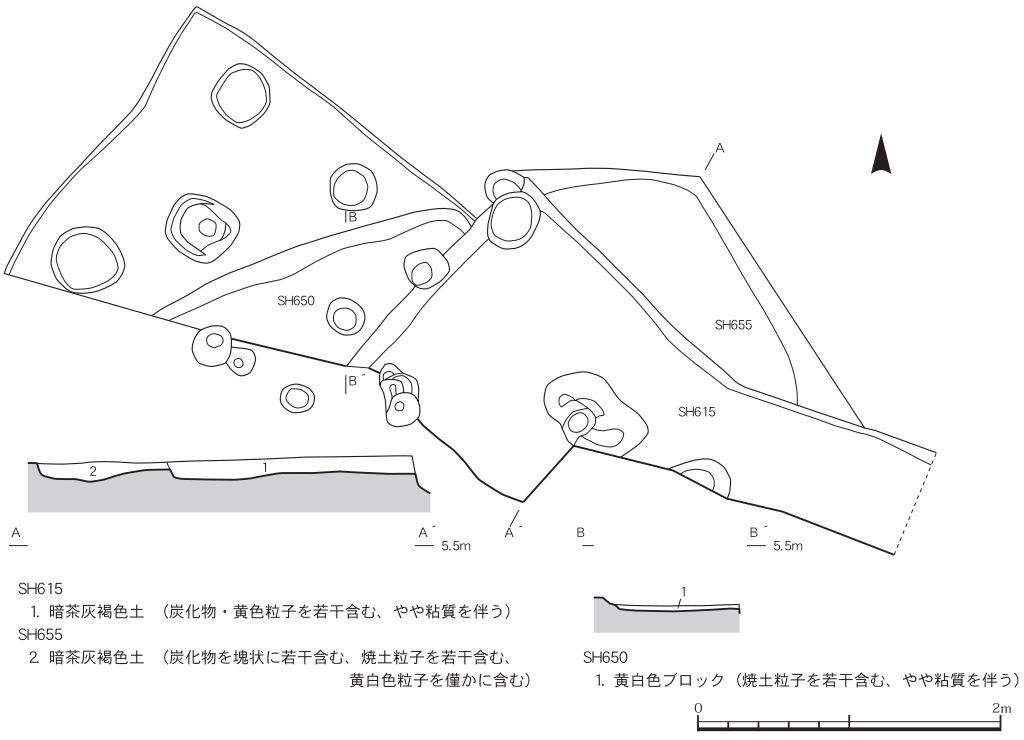
第254図　SH481出土遺物実測図　(1/4)

140SH615（第255図）

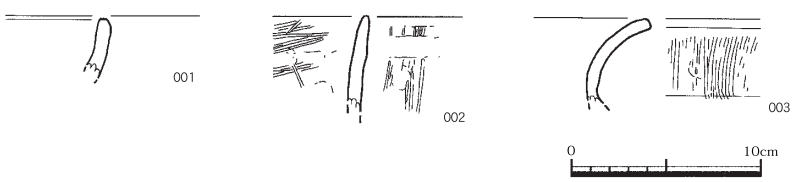
調査区の西側部分で検出した竪穴住居跡である。今回の調査では、当該住居の南側部分は確認していないが、推定で、平面形状は方形を呈する竪穴住居跡であると思われる。遺構の遺存深度は約0.15mを測り、遺存状況は良好ではないが、140SH615は、遺構の重複関係から140SH625・650・655よりも新しい遺構であることが判明している。なお、遺物は小破片ばかりであり、厳密な時期比定は行えなかったが、今次出土遺物の様相から弥生時代終末～古墳時代初頭の範疇のものと考えられる。

出土遺物（第256図）

001は鉢の口縁部破片である。淡橙色を呈し、内外器面ともヨコナデにより調整される。002は端部を舌状に整形した鉢の口縁部破片である。淡橙色を呈し、内外器面ともナデとミガキにより調整される。胎土中には角閃石、長石粒を内包する。003は甕の口縁部破片である。口縁部形状から長胴気味の体部形態を呈する在地系甕の口縁部と考えられる。外器面はタテ方向のハケ目とナデ、内器面はヨコナデにより仕上げられる。淡黄白色を呈し、胎土中には石英、角閃石、長石粒を含む。



第255図　SH615平面・土層断面実測図　(1/50)



第256図　SH615出土遺物実測図　(1/4)

140SH625

140SH640を検出した部分において、140SH615、650、655などと複雑な切り合い関係を有する竪穴住居跡である。これらの遺構の中では140SH615、650と直接的な重複関係を有しており、140SH615、650よりも古い段階のものであることを遺構の重複関係からうかがい知ることができる。コーナー部分のみが遺存するが、コーナーの形状等から平面形状は方形を呈する竪穴住居跡であると思われる。遺構の遺存深度は約0.2m を測り、遺存状況は良好ではない。なお、遺物は出土しておらず、明確な時期比定は行えなかったが、今次の調査で確認した周囲竪穴住居跡の年代観、及び形態等の類似から、140SH615は弥生時代終末期～古墳時代初頭のものであると考えられる。

140SH650

140SH625と同様に複雑な切り合い関係を有する竪穴住居跡のひとつである。140SH625と同一方位を意識して構築されており、遺存部の状況から形状についても140SH625と同様の方形プランが想定される。遺構の遺存深度は約0.1mとほぼ140SH625と同じである。 140SH625 よりも新しい段階の竪穴住居跡である。埋土中からの遺物は出土しておらず、明確な時期比定は行うことができなかった。

140SH655

140SH615と重複関係をもつ竪穴住居跡である。 140SH615の北側に位置し、僅かに残る遺存部から推定される平面形状は、隅丸方形かあるいは円形に近いものと推定される。遺構の遺存深度は0.12ｍを測る。遺物は出土しておらず、厳密な時期比定は行えなかったが、今次の調査で確認した他、竪穴住居跡の状況や重複関係から弥生時代終末～古墳時代初頭のものと想定される。

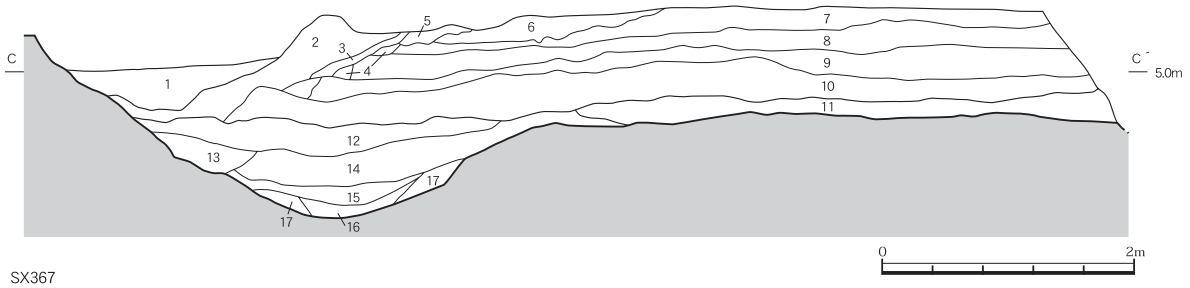
その他の遺構（SX）

今回の調査では、前述の遺構の他に土塁基底部（140SX355）、土坑（140SX367・368・470・480・610）、柱穴跡（140SX397）、溝状を呈する遺構（140SX394・462）、柵列状を呈する遺構（140SX574）を確認した。

140SX355・700（第257・258図）

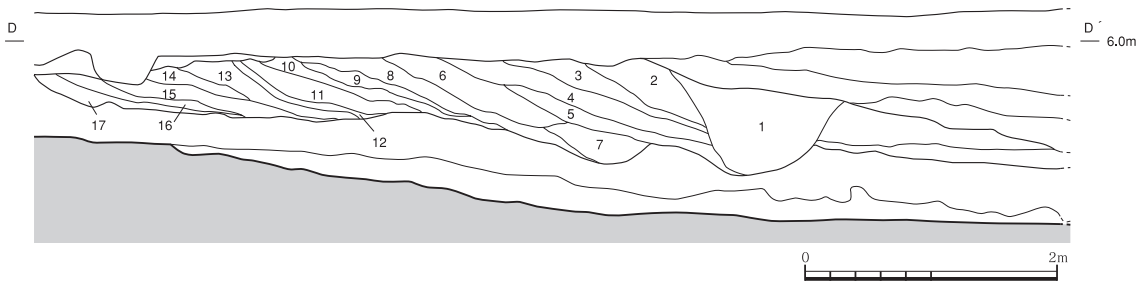
調査区の東南側、及び西側部分の調査区北壁断面において確認した土塁基底部の積み土である。調査区の東南側で検出した土塁基底部（第220図）は、現存部分で検出幅約8.2m、検出長約12.5m、高さ約0.8m を測る。この土塁基底部の横断面に相当する部分で土層の断面観察を行った結果、堆積層を構成する埋土中より、版築状に積土されたブロック土を確認した。このブロック土を内包する堆積層は、遺存する土塁基底部を構成する堆積層の上部層に相当し、北側から南側へ斜位に積み土される状況が看取できる。また、中央推定部に近い部分では水平に積土されている。すなわち斜面部では、その傾斜に整合された斜堆積により積土がなされ、中心部は順次水平単位を基準とする積土がなされているのである。第257図に示した土層断面図の中で、南側部は溝により切られているため斜堆積部が欠失してしまっているが、本来は南側で認められる斜堆積が存在していた可能性が高いものと想定される。さらにこの部分の土塁基底部の構築にあたり特徴的なのが、基盤土層を掘り込んで積土がな

されている点にある。水平堆積面を形成する基盤面と南側の基盤土層面との間には現状で0.2m の比高差が存在する。また、140SD290を埋め戻すことにより土塁の裾部を南側に拡張させている点も注意される点といえよう。最終的には土塁の内側に140SX367が構築され、残り溝状のものが伴う状況が想定される。内側の斜堆積部分のみが遺存しており、調査区西壁から本調査区の西側に位置する125SD



SX367
1. 淡灰茶色土（径約5mm前後の暗茶褐色粒子を多く含む、微小の淡茶褐色粒子を多く含む、下部に炭化物を塊状に数個含む）
SX355
2. 淡灰色土(径約１mm前後の淡茶黄色ブロックを多く含む、径約3mm前後の淡茶黄白色粒子を疎らに含む、部分的に砂質を含む)
3. 暗灰淡茶色土(径約1cmの淡灰白色ブロックを少々含む、砂質を多く伴う、やや粘質を伴う)
4. 淡灰色土(径約１cmの淡灰白色ブロックを少々含む、やや粘質を伴う)
5. 淡茶灰色土(微小の暗茶灰色粒子を多く含む、非常に硬質)
6. 淡茶灰色土(径約 10cm前後の淡茶黄色・淡茶黄白色・淡茶褐色・淡灰色・暗茶褐色ブロックを含む)
7. 淡灰茶色土(微小の炭化物・褐色粒子を多く含む、非常に硬質、締り有り)
8. 淡灰茶色土(微小の炭化物・褐色粒子を多く含む、硬質、径約5 mm前後の炭化物を疎らに含む、締り有り)
9. 淡灰茶色土(微小の炭化物・褐色粒子を多く含む、8 層より軟質、締り有 り)
10. 淡灰茶色土(微小の炭化物・褐色粒子を僅かに含む、滑らか)
SX462
11. 淡灰白色粘質 土(径約3 mm前後の暗茶褐色鉄分を多量に含む)
SD290
12. 淡灰茶色土 (7～ 10 層より暗灰色、砂質を多く伴う)
13. 暗茶灰褐色 土(径5 cm前後の淡茶褐色ブロックを多く含む、若干砂質・粘質を伴う)
14. 暗茶灰色 土(径 1cm前後の暗茶褐色粒子を若干含む)
15. 淡茶灰色 土 (6 層同様のブロックを潰れた状態に含む)
16. 暗灰茶色粘質 度(下部に明茶褐色の硬質鉄分を含む)
17. 暗灰青色粘土

第257図　SX355土層断面実測図　(1/60)



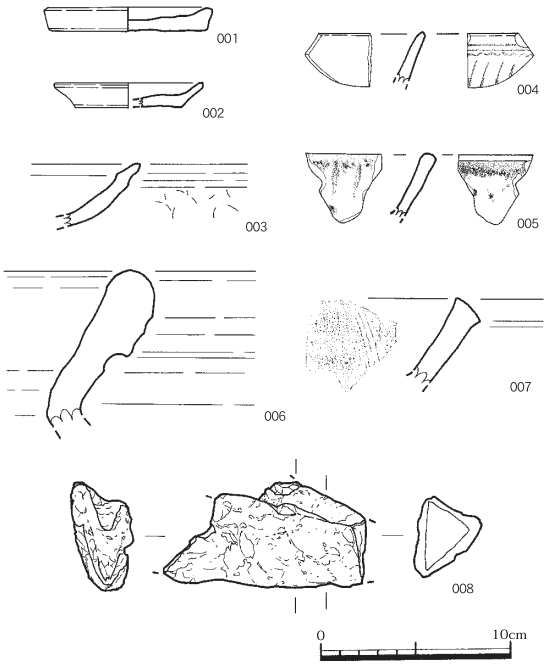
1. 淡灰茶色土(基調) ブロック：微細な砂を多量に含む、淡・明茶黄白色ブロックを多く含む
2. 淡茶灰色土(基調) ブロック：炭化物の分布集中ヶ所一部、径役3mm ～ 1cmの淡・明茶黄白・明茶褐色ブロックを含む
3. 淡灰茶色土：微細な砂を若干含む
4. 淡灰茶色土：やや砂質を伴う、鉄分を縞状に部分的に含む、径約5mm ～ 1cmの淡・明茶黄白色ブロック
5. 暗茶淡灰色土
6. 淡灰茶色土：やや砂質を伴う、鉄分を縞状に部分的に含む
7. 淡灰青緑色十径約 1cmの暗茶褐色ブロック混在層
8. 暗茶淡灰色土：微小の褐色粒子を少量含む、締り有り
9. 淡灰色砂質土：径3mm前後の淡・明茶黄白色ブロックを少々含む、径約 1cmの鉄分を少々含む
10. ブロック：径約 1～3cmの淡・明茶黄白色ブロック(量　1cm＞3cm)
11. ブロック：径約1～ 3cmの淡・明茶黄白色ブロック
12. 淡灰暗茶色土(基調) ブロック：径約1cm前後の淡・明茶黄白色ブロックを少々含む
13. 明茶淡灰色土(基調) ブロック：径3mm前後の淡黄白色ブロックを下部により多く含む
14. 淡灰茶色土(基調) ブロック：比較的小規模の淡・明茶黄白色ブロックを下部により多く含む
15. 淡灰茶色土(基調) ブロック：淡・明茶黄白色ブロック(灰色：上部＞下部)
16. 淡灰茶色土(基調) ブロック：径約 1.5cmの淡茶黄白色ブロックを少々含む
17. 暗灰茶色土(基調) ブロック：淡茶黄白色ブロックを部分的に含む

第258図　SX700調査区北壁面土層断面実測図　(1/60)

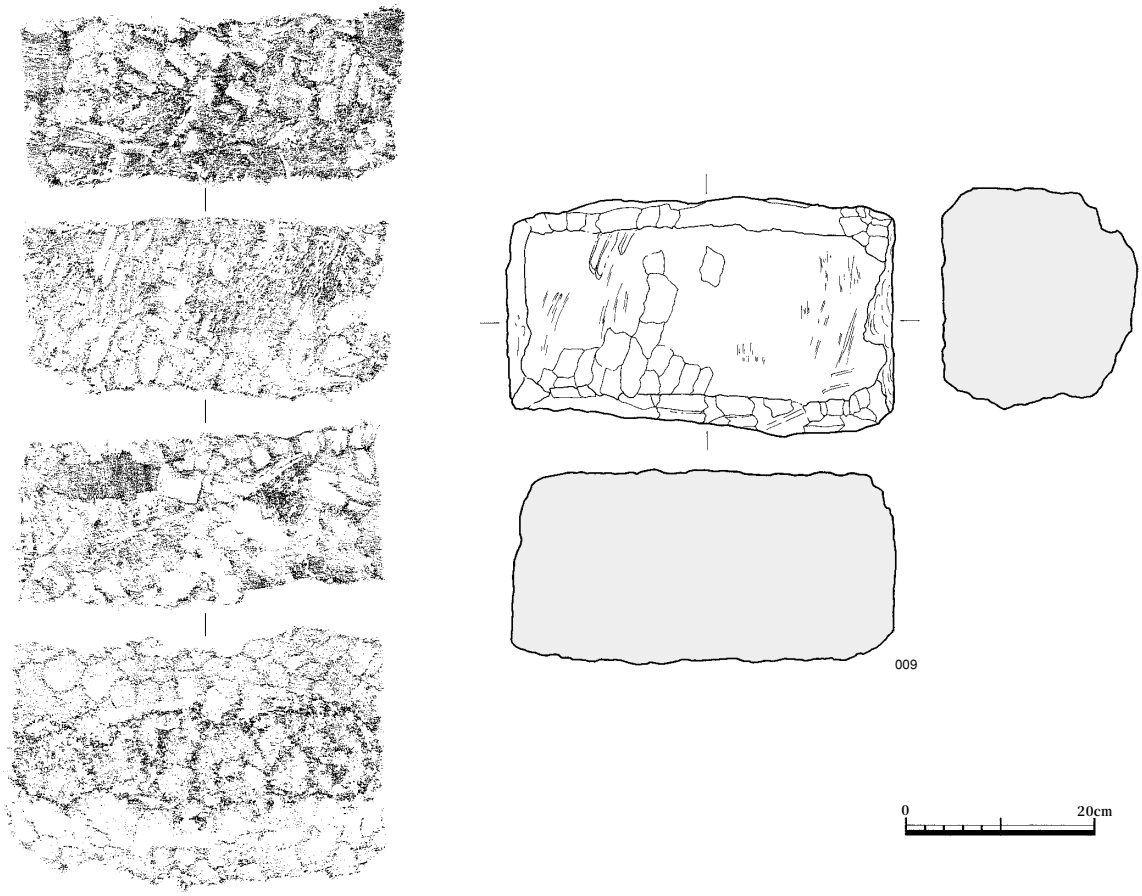
016との間（推定で6.0m）の間に140SX355のような状況が認められるものと想定される。すなわち、140SX355における140SX367と同様のものか、第258図の第１層により示される溝様のものになる可能性が高い。冒頭で記したように、「城ノ内」と呼称される地域は明治10年の水路の通水に伴い、水田への水掛りを考慮した水田単位での地下げが行われている部分があり、このため隣接する第125次調査等では明確な土塁基底部の検出は行われていないが、140SX355と140SX700の類似と第125次調査において125SD016の内接する部分には、中世後期に比定される遺構の検出がなされていない点などを考慮すると、125SD016に沿って同様の土塁遺構が存在していた可能性を指摘することができ、以上の点から140SX355、140SX700が本来一連の同一の土塁遺構であったと考えられる。現存で確認した積土部の高さは、最も依存状況が良好な部分で約0.8m、幅は8.2m を測る。なお、この土塁基底部の積み土は東側から西側へ斜堆積に積み土されている。140SX355の出土遺物は、調査区の東南側で検出した土塁基底部の積み土埋土中より、第259図に掲載したものなどが出土しており、これらの出土遺物の年代観より、140SX355は16世紀後半～末に構築されたものと考えられる。

出土遺物（第259～262図）

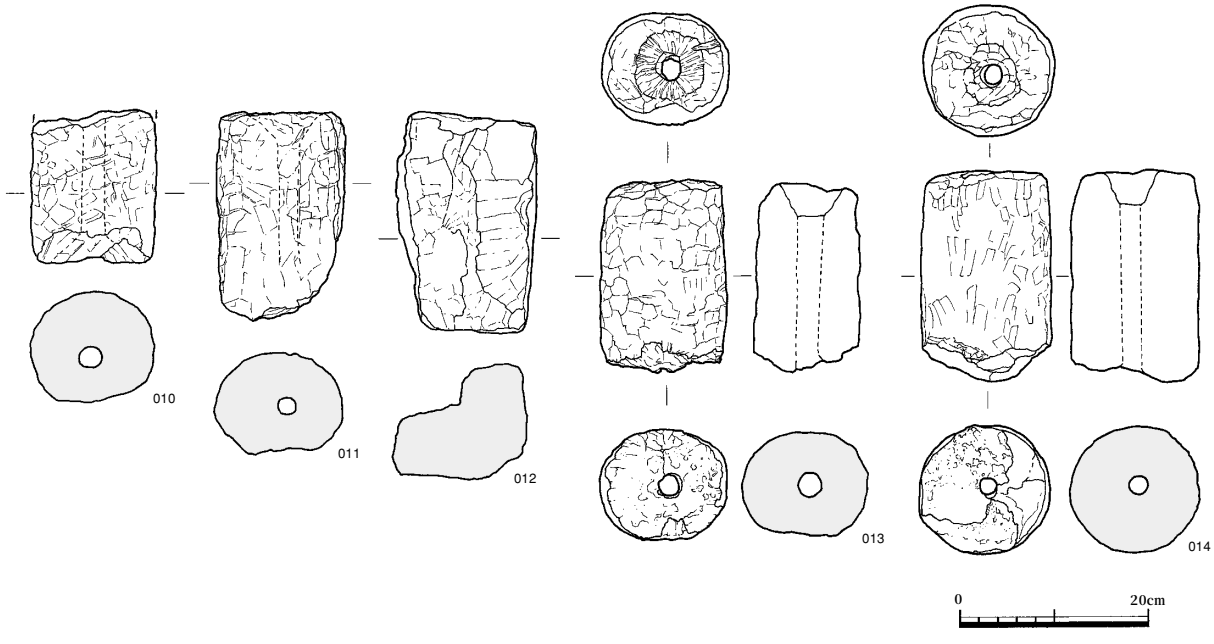
001・002は土師器の小皿である。全体の約１/２が遺存している。001は復元口径8.4cm、底径8.2cmを測り、口径と底径の差違は殆ど認められず、器高1.2cmを測る。002の法量は復元口径7.7cm、底径5.5cm、器高1.2cmを測る。001・002とも底部は回転糸切り離しである。003は京都系土師器皿の口縁部から体部片である。諸特徴から16世紀でも末葉に近い時期の所産と推定される。004は龍泉窯系青磁碗の口縁部から体部片である。体部上面に認められる剣頭は、蓮弁の単位としての特徴を失っている段階のものである。005は瀬戸・美濃産の天目茶碗の口縁部から体部片である。006・007は備前焼である。006は甕の口縁部で乗岡編年の中世６期に相当するものであり、16世紀後葉の所産時期が推定される。007は擂鉢の口縁部で乗岡編年の中世３期に比定され、15世紀の所産年代が想定される。他の遺物とは時期を異にしており、周辺遺構からの混入品と考えられる。008は鉄製品であり、断面はＶ字形を呈する鍬などの刃先であろうか。009は加工途中の石製未製品で、石材は角閃石安山岩である。長さ約40.7cm、幅約25.3cmを測り、側面の４面を面取りしている。面取り部分には、ノミのような工具で加工している痕跡が認められる。010～014は石製鞴の羽口である。石材は、010・012・014が安山岩、他は凝灰岩製である。長さは20cm前後、外径は10cm前後、ほぼ中央部分に穿たれた穿孔部は径約２cm前後を測る。015・016は五輪塔である。015は空・風輪部分で、016は風輪部分である。石材は凝灰岩製である。017は石臼片である。約１/３が残存している。厚さは約14cmを測り、臼の目の溝は８分画により配置されていると思われる。石材は安山岩である。



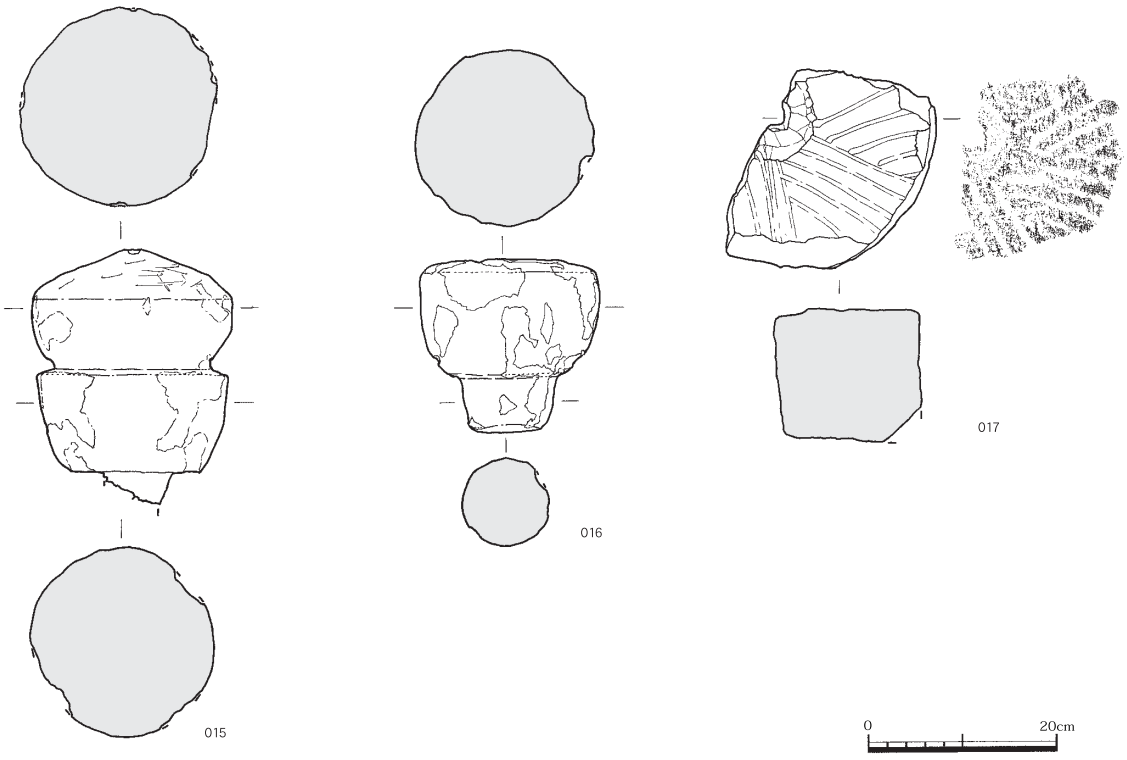
第259図　SX355出土遺物実測図①　(1/4)



第260図　SX355出土遺物実測図②　(1/8)



第261図　SX355出土遺物実測図③　(1/8)



第262図　SX355出土遺物実測図④　(1/8)

140SX367（第263図）

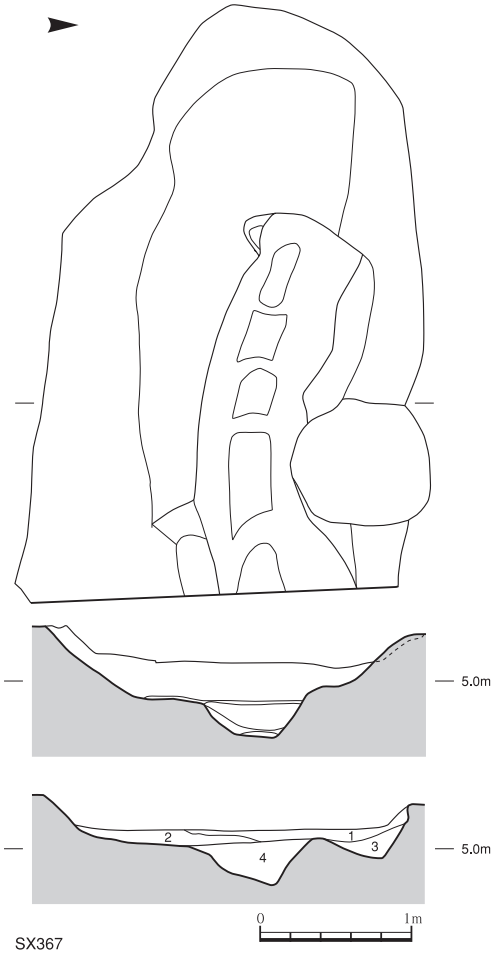
調査区の東南側で検出した土坑である。遺構の東側部分が調査区外に展開するため全容は不明であるが、現存部分での検出長は約３m、検出幅は約2.4m、残存深度は約0.4m を測り、断面形状は擂鉢状を呈する。140SX367の堆積埋土の状況は、灰茶色土を基調とする単一層で、明茶褐色を有する鉄分を多く内包し、やや粘性を伴う。出土遺物は森田勉分類の白磁碗Ⅳ類に比定されるものを確認しているが、140SX367は140SX355に後出することが、遺構検出時の重複関係より判明している。したがって、140SX367は概ね16世紀末以降の所産である可能性が考えられる。

140SX368（第264図）

調査区の西南側で検出した土坑である。今回の調査では、当該遺構の東側部分については確認していない。140SX368は、現存部分で、検出長約3.7m、検出幅約2.4m、残存深度約0.2m を測り、断面形状はにぶい逆台形状を呈する。堆積埋土の状況は２層で構成される。このうち、上層に相当する部分は、灰茶色土を基調とし、茶褐色鉄分を多く内包する。また、やや粘性を伴う。なお、140SX368からは遺物は出土しておらず、明確な時期比定は行えなかった。遺構埋土の状況、及び配置位置に関わる関係等から推察すると、当該遺構は、140SX367との間に何らかの関係をもって構築された可能性が考えられる。

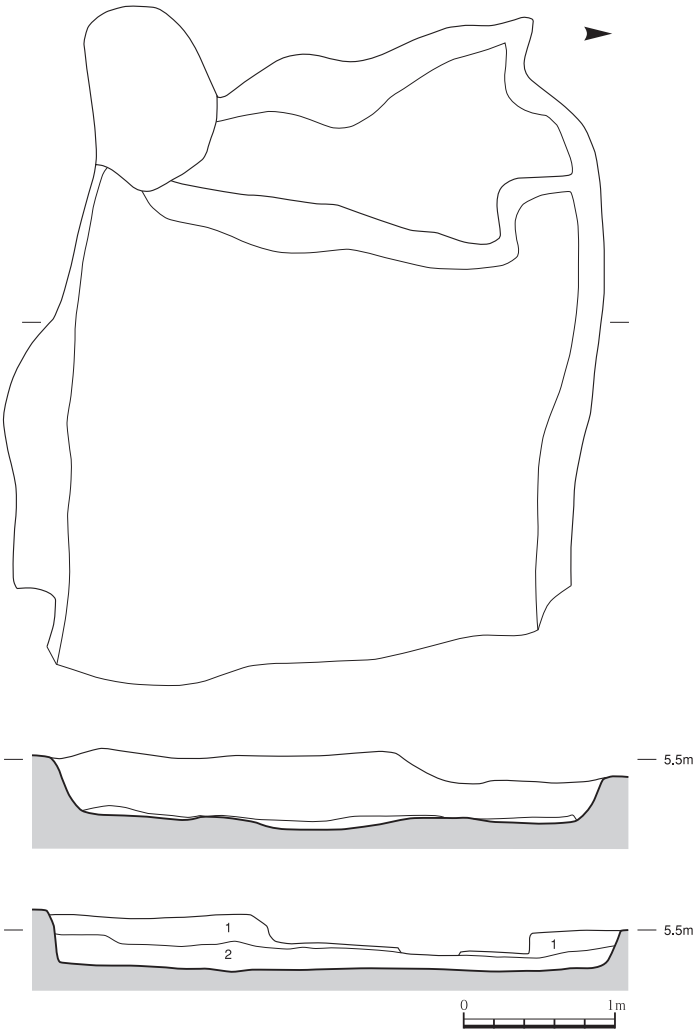
140SX394（第263図）

調査区の東南側で検出した溝状を呈する遺構である。先述の140SX367の底面において検出すること



SX367
1. 淡灰茶色土
(明茶褐色鉄分を縞状に多く含む、明茶褐色鉄分粒子・
明黄茶色粒子を多く含む、やや粘質を伴う)
2.SX355 埋土
3. 撹乱
SX394
4. 淡灰色土(暗赤褐色鉄分を縦横位縞状に大量に含む、
締り高い、硬 質)

第263図　SX367・394遺構実測図　(1/50)



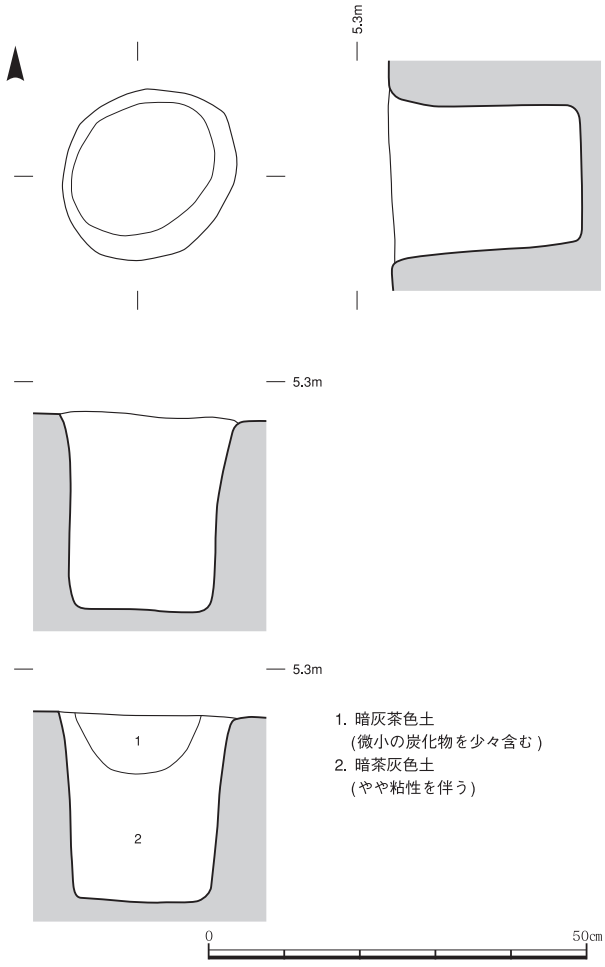
1. 淡灰茶色土ブロック
(明茶褐色鉄分を縞状に多く含む、明茶褐色粒子を多く含む、
明黄茶色粒子を多く含む、やや粘質を伴う)
2. 淡茶灰色土(微小の明茶黄色粒子を多量に含む、1 層より粘質高い)

第264図　SX368遺構実測図　(1/50)

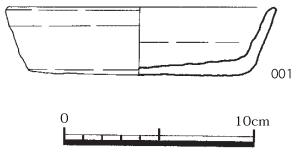
ができる。当該遺構は、遺構の東側部分が調査区外に展開するため全容は不明であるが、現存部分で、検出長約2.4m、検出幅約0.7m を測り、断面形状はＶ字状を呈する。遺構の堆積埋土の状況は灰色土を基調とする単一層で、赤褐色鉄分を多量に含み、硬質である。また、当該遺構の底面は平坦でなく、遺構の底面長軸に沿う形で、段上の小規模な掘り込みが認められる。なお、当該遺構より遺物は出土しておらず、140SX394の所産年代は不明である。140SX367との重複関係より、少なくとも16世紀末よりは古い段階の所産である可能性を指摘することができる。

140SX397（第265図）

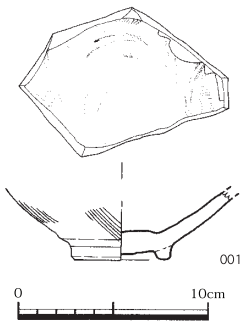
調査区の中央部分で検出した柱穴跡である。140SX397は、径約0.25m、残存深度約0.25m の規模を測る。遺構埋土の状況は２層で構成され、このうち遺構埋土の上層に相当する部分は、灰茶色土を基調とする。第１層土と第２層土の間には明確な不整合面を形成しており、一連の段階のものとは考えにくい。おそらく、柱の抜き取り等の後に第１層土の下面に後述する土師器坏の完存品が埋置されたものと考えられる。出土遺物は当該層からの出土である。



第265図　SX397遺構実測図　(1/10)



第266図　SX397出土遺物
実測図　(1/4)



第267図　SX432出土遺物
実測図　(1/4)

出土遺物（第266図）

001は土師器坏の完存品である。口径14.0㎝、底径11.5㎝、器高3.4～3.7㎝を測る。これは、『豊後国の土器編年』（坪根　塩地2001）の豊後9－Ⅰ期に相当し、９世紀初頭の時期所産が考えられる。底面には回転ヘラ切り離し痕跡を残す。

140SX432

調査区の南東側で検出した遺構である。遺構の北側部分は今回の調査では確認できなかったが、東西短軸部分の検出長は約3.0mを測る。遺構の堆積埋土の状況は茶灰色土を基調とする単一層で、これは、140SD300の堆積埋土と非常に酷似している。なお、140SX432と140SD300の遺構検出時における検出レベルには差異があり、両者の規模等に関しては相違が認められるものの、埋土の状況から判断すると、140SD300と140SX432は同一遺構である可能性が考えられる。

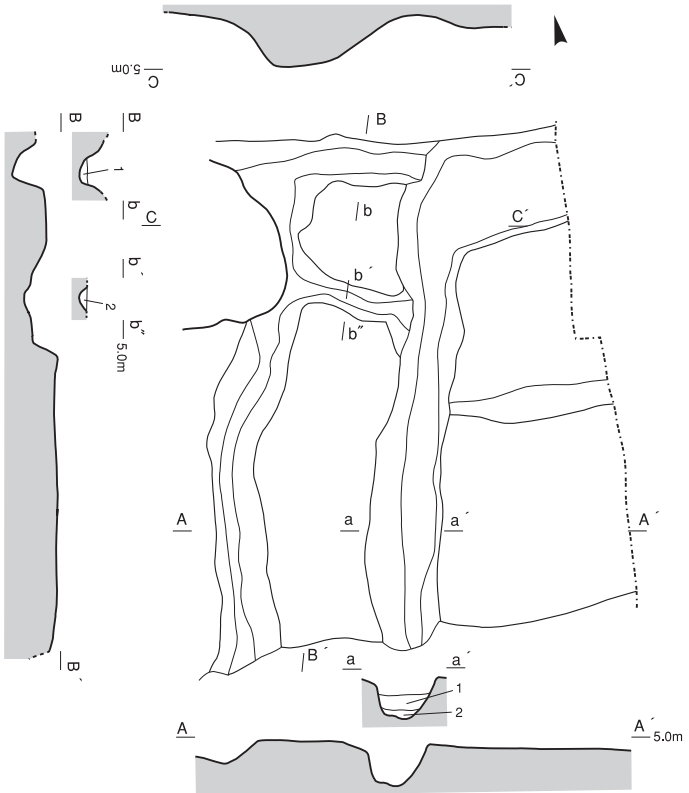
出土遺物（第267図）

001は同安窯系の青磁碗である。体部から底部のみ残存している。内面は点描き文、外面は櫛目文が施されている。大宰府編年のⅠ-1b期に相当し、12世紀中頃～後半に比定される。

140SX435（第268図）

調査区の南西側部分で検出した土橋、及び通路状の遺構である。140SX355（土塁基底部）の底面において確認することができる。したがって、当該遺構は140SX355に先行する遺構である。140SX435の検出状況は、140SD290の南辺に直交する形で検出され、北側部分に地山を削りだして成形した土橋状の遺構、南側部分に通路状の遺構が配置される。土橋状の遺構は、平面形状が一辺約1.5mを測る方形に地山を削りだすことで成形し、土橋状遺構の南側の地点で南北に幅4.5m程度の通路状遺構を確認出来る。通路状の遺構は、遺構の南側部分を後出する140SD260の構築により削平され遺存していないため、遺構の全容については明示することが出来ないものの、幅0.5～1.0mの並行する南北溝により挟まれており、先述の土橋状遺構方向へ延びる。溝の中には滞水状況を示す堆積土層を一部に確認するこ

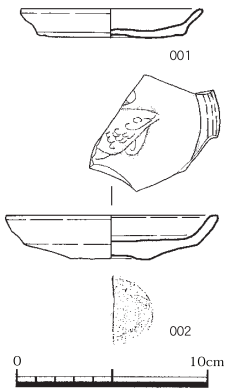
とができ、140SD290からの通水がなされていた可能性を指摘できる。これらの溝状遺構と土橋は一連のものと考えられ、土橋が地山の削りだしにより成形されている点から、これらの遺構は140SD290に付属するものであると考えられる。出土遺物は古い様相を示すが、埋土観察による遺構の切り合い状況の有無の確認などの結果から140SD290と同じく、16世紀後半頃の所産になるものと推定される。なお、土橋の南北に位置する東西溝の埋土は、上部層ならびに140SD290の埋土とは異なっており、埋没時には上部を板等により被覆されていた可能性も想定される。



第268図　SX435平面・土層断面実測図(1/100)

出土遺物（第269図）

001は瓦器小皿である。口縁部から底部の約１/４が残存している。器形は、底部から体部下半に至る部位で緩やかな段が認められ、体部から口縁部にかけてほぼ直線的に立ち上がる。口縁部は外反せず、端部は丸く納められる。なお、底部内外器面に指オサエが認められる。12世紀末葉～13世紀前葉に比定される和泉型瓦器椀に伴うものと推定される。002は龍泉窯系の青磁皿である。器形は体部中位で屈曲し、口縁部はほぼ直線的に立ち上がる。口縁端部は丸く納められる。施釉の状況は、底部外面のみ露胎である。なお、見込み部には片彫魚文が認められる。



第269図　SX435出土遺物実測図　(1/4)

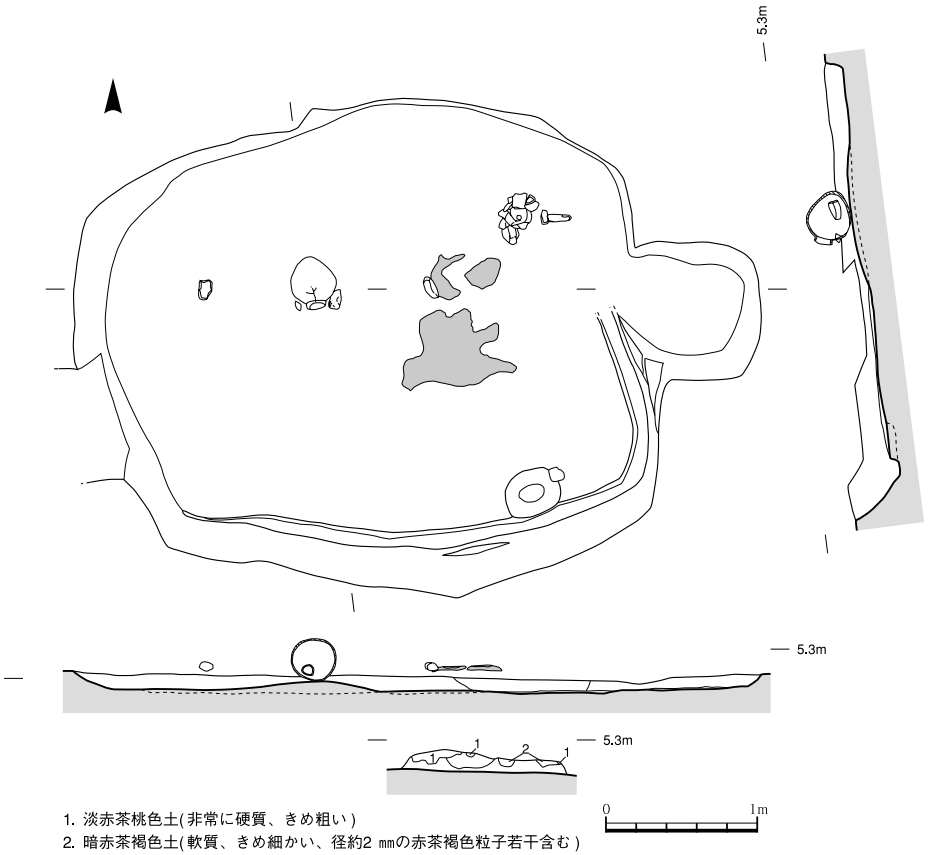
140SX450（第270図）

調査区の西南側で検出した土坑である。検出長約3.6m、検出幅約３m、残存深度は約0.1m を測り、平面形状は隅丸方形、若しくは楕円形を呈する。遺構の検出段階において、遺構埋土の上部層に相当すると思われる部分で、２層より構成される焼土を確認した。この焼土は、上部に相当する部分は非常に硬質であり、下部に相当する部分は軟質である。また、後記する014の出土遺物が当該遺構の床面から出土しており、140SX450の所産年代は古墳時代前期に比定される。

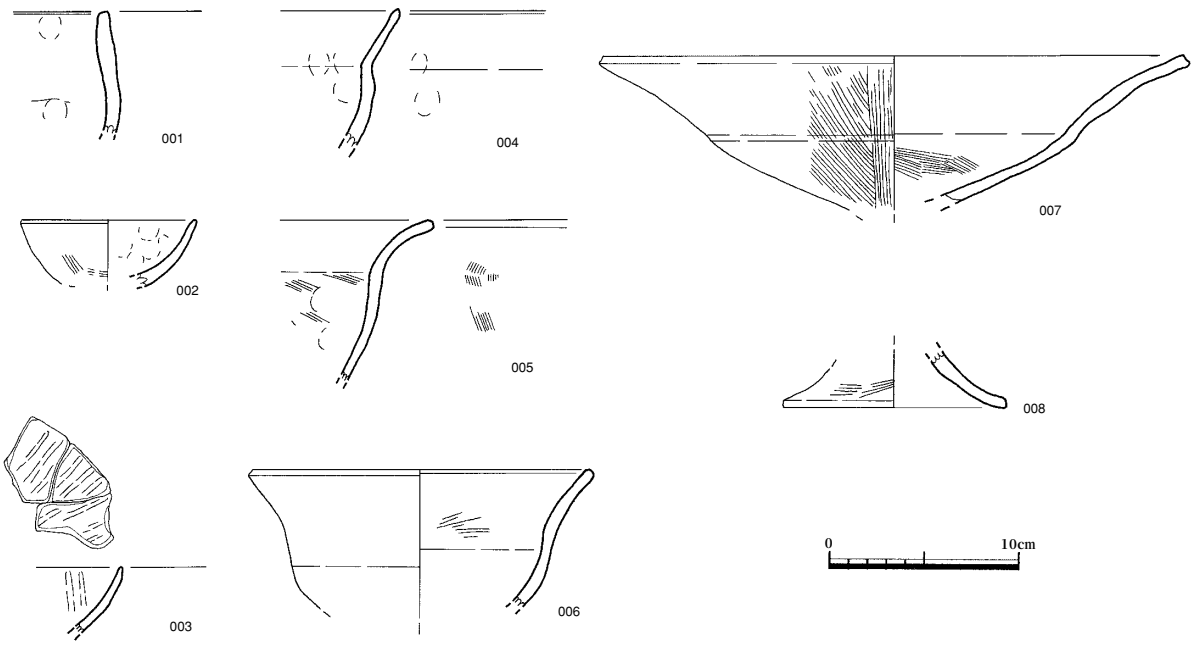
出土遺物（第271・272図）

001～003は鉢の口縁部片である。001は直立する口縁形状を呈するものである。外面・淡茶白色～暗灰色、内面・淡茶白色を呈する。内外器面ともハケ目調整後、比較的丁寧なナデにより仕上げられ

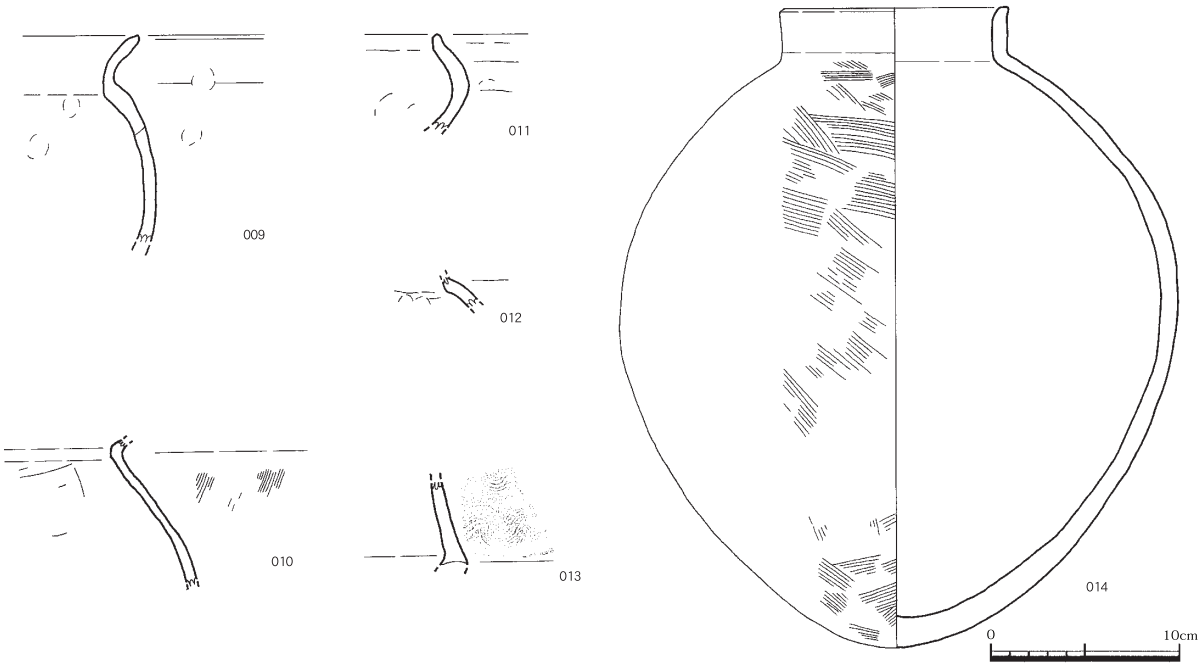
る。002は復元口径9.1cmを測る鉢である。器表面は風化のため調整痕は明瞭でないが、かすかにハケ目を認めることができる。淡茶白色を呈し、胎土中には石英、角閃石、長石粒を内包する。003は椀形を呈する小型の鉢である。橙色を呈し、外器面はナデ、内器面は暗文風の放射状のヘラミガキ痕が



第270図　SX450遺構実測図　(1/50)



第271図　SX450出土遺物実測図①　(1/4)

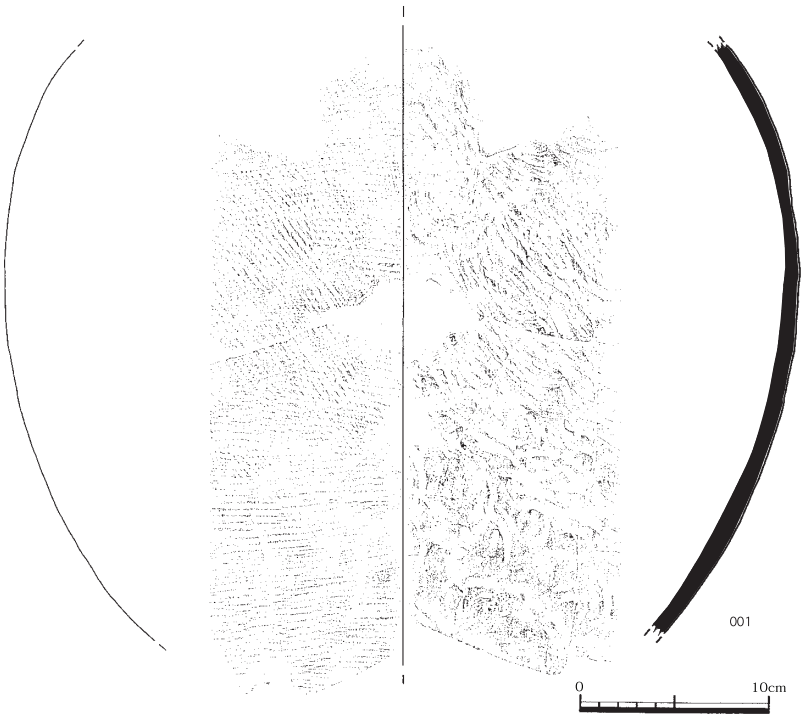


第272図　SX450出土遺物実測図②　(1/4)

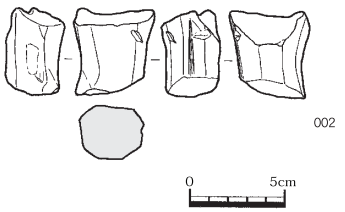
認められる。004・005は比較的大型の鉢口縁部片である。004は口縁部下位に段を有し、外面に屈曲する。005の口縁部は外反器形を呈し、端部は丸く納められる。004は淡茶褐色～淡灰色を呈し、ハケ目およびナデにより器表面は調整される。005は淡茶褐色～淡橙色を呈し、胎土中には石英、角閃石、橙色粒子を含んでいる。器表面の調整はハケ目とナデによる。006は鉢あるいは高坏の坏部と想定される資料である。復元口径17.8cmを測り黒褐色を呈する。007は高坏の坏部破片である。坏部部分は完存し、全面に赤色顔料が塗彩される。器面調整はハケ目主体で行われており、ミガキ調整は認められない。008は高坏裾部である。外器面には赤色顔料が塗彩される。外器面はハケ目、ナデにより、内器面はナデにより調整される。009は甕口縁部片である。頸部はしまり、口縁部は外方向へ展開する。淡橙褐色を呈し、器面はナデにより調整され胎土中には石英、長石粒を含む。010は甕の肩部破片である。内器面にはケズリが認められ、器壁は薄く仕上げられる。外器面はハケ目とヨコナデにより調整される。布留式系の甕である。011は短頸の小型丸底壺の口縁部破片である。製作にあたっては精製土が使用され、淡茶白色を呈している。012はミニチュア壺の肩部破片である。外面・淡灰褐色、内面・暗灰色を呈し、胎土には精製土が使用されている。外器面には赤色顔料が塗彩される。013は複合口縁壺の複合口縁部のタガに相当する部分の破片である。端部は欠損する。外器面には上下二段の櫛描波状文が施文される。014は完存状況で出土した直口壺である。口径11.7cm、器高34.0cm、胴部最大径29.7cmを測る。内外面とも橙色を呈し、胎土中に石英、角閃石粒を含む。外器面はハケ目後ナデ、内器面はナデにより調整される。器外面には黒斑が認められる。

140SX460

調査区の南側、西寄り部分で検出した大型の竪穴状を呈する土坑である。140SX460の南半部分は調査区外に展開し、東側部分は後出する140SE415の構築により削平され遺存していないため、遺構の全容



第273図　SX460出土遺物実測図①　(1/4)



第274図　SX460出土遺物実測図②　(1/4)

を判明するには至らなかった。140SX460は、現存で長軸が約5.0mを測り、平面形状が隅丸方形を呈すると推定される。遺構堆積埋土は淡灰茶色土を基調とする単一層である。また、遺構の北辺沿いにのみ周壁溝と推定される遺構の存在が認められる。この周壁溝は、幅が約0.15mを測り、断面形状はU字状を呈する。なお、当該遺構の検出段階においては、竪穴住居跡の存在を想定していたが遺構の性格を特定するには至っていない。現状では大型の竪穴状を呈する土坑として認識している。遺構の帰属年代は出土遺物の様相から、概ね古代に比定されると思われる。

出土遺物（第273・274図）

001は須恵器の甕である。口縁部、及び底部は破損している。復元胴部最大径は41.5cmを測る。内器面には同心円状のあて具痕、外器面はタタキ痕が認められる。002は石製の砥石と思われる。石材は白色泥岩である。遺物の両端部が破損しているため全容は不明であるが、現在長4.6cm、幅約3cmを測り、側面は8面に面取りされ各面が使用されている。

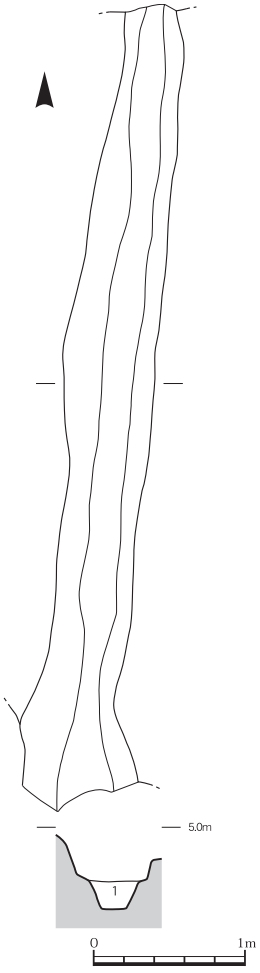
140SX462（第275図）

調査区の南側で検出した溝状を呈する遺構である。遺構の検出面は140SX355土塁基底部の積み土底面であり、当該遺構に直列する形で検出した。140SX462の検出長は約5.0m、検出幅は約0.6m、遺存深度は約0.3mを測る。遺構堆積埋土は茶灰色土を基調とする単一層で、140SX355土塁基底部の積み土に内包されるブロックが多く認められ、最終的には140SX355の構築に伴い埋め戻されたものと判断される。出土遺物は確認されていないが、遺構埋土の状況や、遺構の検出層位などから判断すると140SX462は土塁構築時に掘削された可能性が高い。

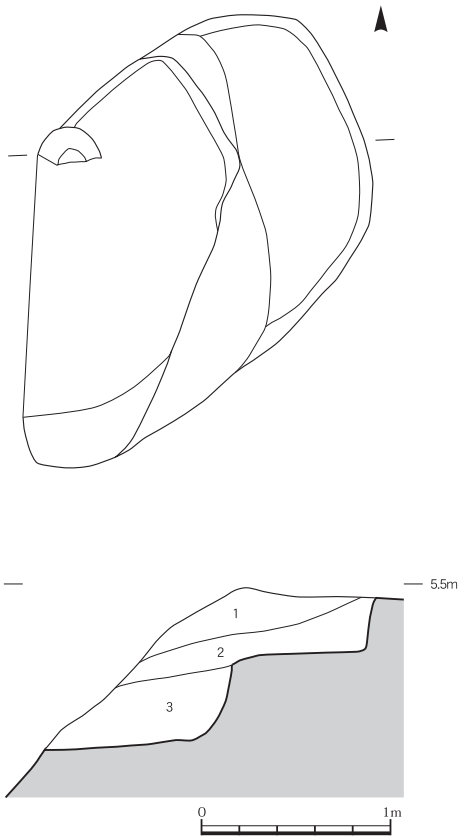
140SX470（第276図）

調査区の西北側部分で検出された土坑である。遺構の西側部分は、後出する140SD290の構築により削平され遺存していないが、推定で平面形状が隅丸長方形、若しくは不正楕円形を呈する土坑であると思われる。現存部分で、遺構の長軸と思われる部分の長さは約2.0m、短軸と思われる部分の長さ

は約1.6m、残存深度は最深部で約0.8mを測る。遺構の遺存部分の堆積埋土は３層で構成され、上部層に相当する部分の上層（第１層）は灰茶色土を基調とし、第277図に図示した土器片を多量に内包する。下層（第２層）は茶灰色土を基調とし、ブロックを多く内包しており、人為的に埋め戻された状況を看取することができる。最深部層に相当する部分（第３層）は茶灰色土を基調とし、第２層の底面より段を有する形で構築される。最下部の部分（第３層）と第１層を包む部分は別遺構である可能性も考えられるが、第３層を構成する暗茶灰色土と第２層の基本土壌である暗茶灰色土は極めて類似しており、平面プランの上でも、検出面でのプランと第２層直下で確認される第３層土によるプランは、南北辺で整合しており、同一遺構である可能性を示唆している。なお第１層中の出土遺物の様相から、140SX470は古墳時代初頭に廃棄したものと想定される。



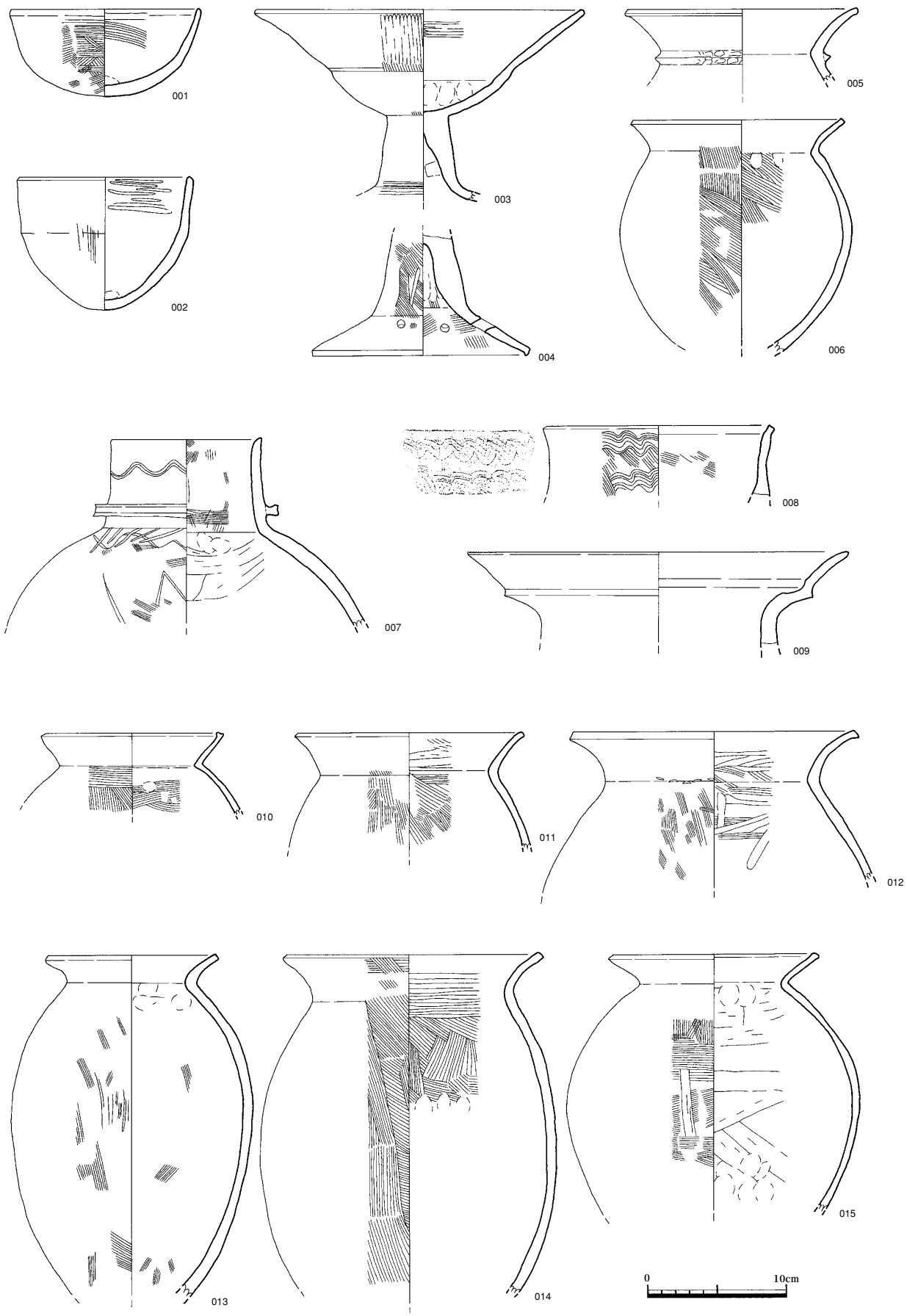
第275図　SX462平面・土層断面実測図　(1/50)



第276図　SX470平面・土層断面実測図　(1/40)

出土遺物（第277図）

出土遺物は第277図に図示した。全て140SX470の遺構埋土の上部層に相当する部分の土層（第１層）から一括廃棄されたような状況で出土した。001・002は鉢である。001は全体の約１/３が遺存している。復元口径13.6cm、器高6.3cmを測り、底部は丸底を呈する。内外器面ともハケ目により調整され、暗茶褐色を呈している。002は外面・淡黄褐色、内面・淡赤橙色を呈するレンズ状の底部形態を示す鉢である。復元口径12.6cm、器高9.6cmを測る。胎土中には石英、角閃石粒を内包し、外器面はハケ目とケズリ風の調整痕、内器面にはヨコ方向のヘラミガキが認められる。003・004は高坏である。003は口径23.5cmを測り、直線的に外方へ延びる口縁部を有するものである。赤褐色を呈し、内外器面とも最終調整としてヘラミガキが施されている。胎土中には角閃石、橙色粒子などを含み、外器面は赤色顔料により塗彩される。004は高坏の脚部片である。底径15.4cmを測り、外面は淡橙褐色を呈する。外器面はハケ目調整後に部分的にヘラミガキが施され、脚内器面はハケ目により調整される。



第277図　SX470出土遺物実測図　(1/4)

005・006は甕の口縁部片である。 005は復元口径16.4cmを測り、内外面とも黄褐色を呈し、ナデにより調整される。口縁部直下のクビレの部分に一条の三角突帯を貼付し、突帯上面には上下端からつまんだ際の指オサエが明瞭に残る。胎土中には角閃石粒を内包する。006は弥生時代から続く在地系の製作技法により作られた甕である。底部は欠損するが、口径15.0cm、胴部最大径16.8cmを測り、胴部には球形化の様相が認められる。茶褐色を呈し、内外器面ともハケ目を主体とした器面調整により仕上げられる。007は直口壺の上半部資料である。口縁部下位、頸部の少し上の部分に、断面形状が方形を呈する突帯が一条貼付される。外器面はハケ目とナデにより調整され、口縁部および肩部に波状文等が施文される。胴部内面にはヘラケズリが施される。外面・橙褐色、内面・赤褐色を呈し、胎土中には長石粒を内包する。008は複合口縁壺のタガの部分である。復元口径16.8cmを測る。口縁部外面にはハケ目調整後に２段にわたり櫛描波状文が施文される。009は二重口縁壺の口縁部資料である。復元口径27.2cmを測る。淡黄褐色を呈し、内外器面とも丁寧なナデにより仕上げられている。010〜015は甕である。器形的な特徴から011〜014は弥生時代以来の系譜に連なる在地形の甕であり、010・015は外来の布留式系の甕に分類することができる。010は、復元口径13.0cmを測り、口縁端部内面をつまみ上げ気味に整形する布留式系の甕である。淡黄茶褐色を呈し、外器面ハケ目、内器面ケズリの後、ハケ目調整がなされている。胎土中には角閃石、長石粒などを含む。011は復元口径16.2cmを測る。外面・橙褐色、内面・赤褐色を呈し、胎土中には長石粒を内包する。外器面はハケ目とヨコナデ、内器面はハケ目と部分的なヘラミガキにより調整される。012は外面・赤橙色、内面・橙褐色を呈し、胎土中には石英、角閃石粒を含む。内外器面とも基本的にはハケ目により調整されるが、内器面にはヘラミガキが部分的に認められる。013は長胴甕資料である。底部が欠損する。赤茶色を呈し、内外器面はハケ目、ナデにより調整される。復元口径12.0cm、胴部最大径17.4cmを測る。014も013と同様に在地系の長胴甕である。復元口径18.0cm、胴部最大径21.1cmを測り、黄茶褐色を呈する。外器面調整はハケ目によるが、最終的に部分的であるがヘラミガキが施される。内器面は上半部のみ外器面と同様の調整がなされるが、下半はナデにより調整される。015は復元口径14.4cm、胴部最大径20.8cmを測る布留式系の甕である。底部は欠損する。外器面は上位からヨコナデ、ハケ目により調整され、部分的にタテ方向のヘラミガキが施される。淡橙褐色を呈する。一方、内器面はヘラケズリが施され、淡黄褐色を呈する。胎土中には長石粒を内包し、胎土状況から地元で製作されたものと判断される。

140SX480（第278図）

調査区の南西側で検出した大型の竪穴遺構である。遺構の南側部分は、後出する140SD260の構築により削平され、遺存しておらず遺構の全容は不明である。推定での平面形状は、一辺が約5.0m を測る隅丸方形を呈すると考えられ、遺構堆積埋土は灰茶褐色土を基調とする単一層により構成されている。出土遺物には、須恵器小片１点がある。微細片のため図化することもできないが、この資料の存在から140SX480の所産年代は、概ね古墳時代後半以降であると判断される。

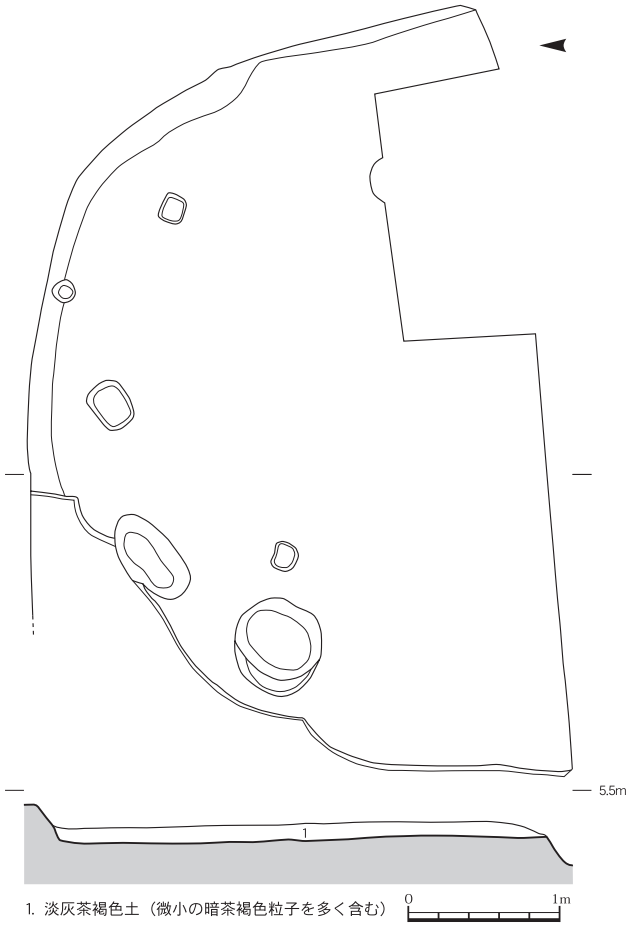
140SX574（第279図）

調査区のほぼ中央で検出された柵列状の遺構である。なお、当該遺構が存在する地点一帯は、140SB

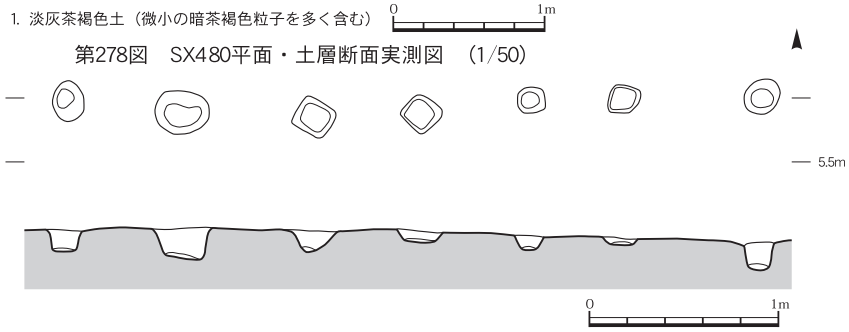
595の項で触れたように、客土を伴う削平痕が展開しており、140SX574を構成する各ピットの上部に大きく削平されている可能性が想定される。140SX574を構成する各ピット間の距離は、約0.6m、残存深度は0.05m～0.15m を測り、柱列の主軸方位は N-80°-W を指す。出土遺物には140SX574を構成する各ピットのうち、140SX573より土師器の微細片があるが、小片のため図化および遺物の時期比定は行えず、遺構の所産年代は不明である。

140SX610（第280図）

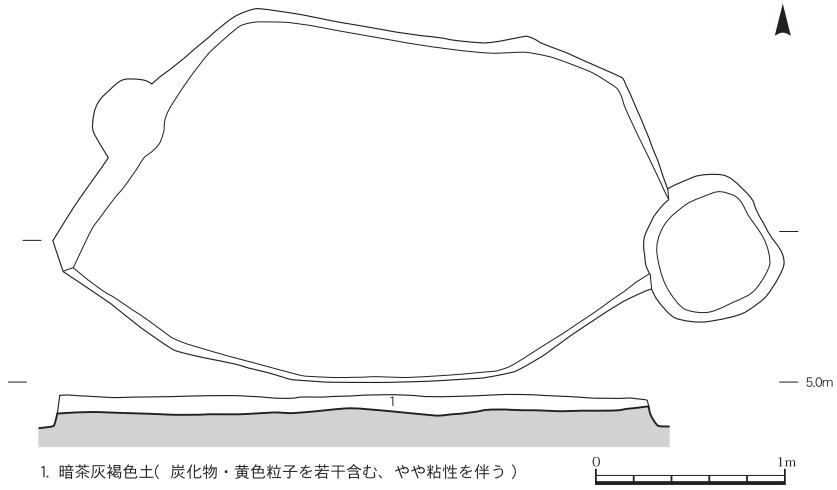
調査区の南西側で検出した土坑である。平面形状は不正楕円形を呈し、長軸は約3.0m、短軸は約1.8m、残存深度は約0.1m を測る。遺構堆積埋土は茶灰褐色土を基調とする単一層により構成される。出土遺物には、断面形状がM字状を呈する突帯を貼付する壺の口縁部小片、及び口縁部に櫛描きによる波状紋が施される壺の破片が確認されている。また、遺構の重複関係より、140SX610は140SE635に後出することが判明しており、これに140SX610の出土遺物の様相を考慮すると、140SX610は少なくとも弥生時代後期後葉以降の所産であると判断される。



第278図　SX480平面・土層断面実測図　(1/50)



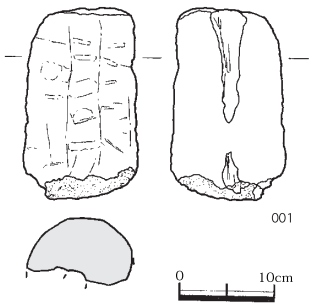
第279図　SX574平面・断面実測図　(1/40)



第280図　SX610平面・土層断面実測図　(1/40)

その他の遺物（SZ）

後記する遺物は、出土位置の詳細が不明であるため、遺構に帰属出来ないものである。ただ、140SX355土塁基底部付近で確認されており、140SX355土塁基底部の堆積埋土内に限って、同種の鞴羽口が出土していることから140SX355に帰属する可能性が高いと考えられる。



第281図　表土出土遺物実測図　(1/8)

その他遺物（第281図）

001は安山岩製のフイゴの羽口である。約１/２が破損している。現存で長さ20.3㎝、幅12.0㎝、重量は1.81kg である。残存部分の外面約１/４は被熱の痕跡が認められる。

（４）小結

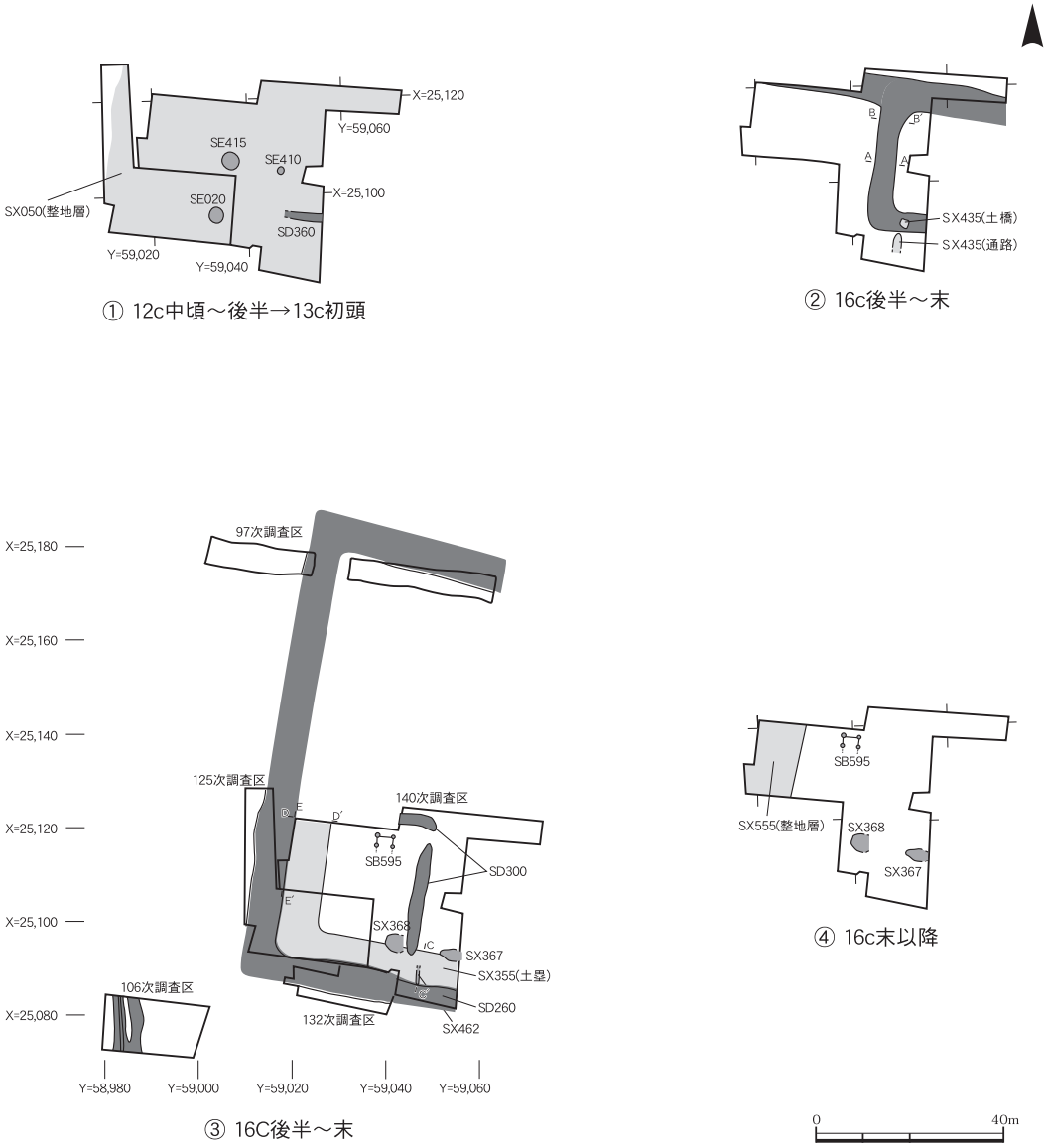
今回の調査地である下郡遺跡群第140次調査地点は、同遺跡群の西側エリアに位置する。下郡遺跡群第140次調査では、弥生時代後期から近代に至る遺構・遺物を多数確認した。特に、古墳時代初頭、中世末期において大きな成果があった。古墳時代初頭の遺構に関しては、多くの竪穴住居跡を確認し、当該期の集落分布についての新たなデータを追加することができた。中世期に関しては以前より「城ノ内」と呼ばれた本調査地一帯の旧字名との関連から居館跡の存在が推定され、既住の同辺部の調査により一部が確認されていた居住遺構の変遷を押えることができた点は大きな成果といえよう。第282図は中世に比定される遺跡群の時期別変遷を示した模式図である。

①12世紀中頃～後半→13世紀前半の様相

井戸跡が３基（125SE020・140SE410・415）、溝跡が１条（140SD360）が分布する段階である。井戸跡は水溜部に曲物を埋置する構造を有するもので、基本的な構造は３基とも共通する。溝跡（140SD360）は東側部分が調査区外に展開し、西側部分が後出する140SD290の構築により削平され遺存していないため、性格等は不明である。140SD290の西側に延長部は認められず、連続して調査区を横断するようなものでなかったと推定される。13世紀前半に、整地（125SX050）が施工される。この整地層は③段階で認められる堀（140SD260）の外側では認められず、内側のみに展開することから、両者の深い関連を示唆している。したがって、③段階での区画がすでにこの段階から意識されるような状況があったものと想定される。これ以降、14・15世紀に比定される遺構は確認されていない。

②16世紀後半

幅約６m、深度約１m の溝（堀）が逆コの字状に展開する段階である。この段階で、堀に囲繞された内部空間の規模は、溝内法で22m、溝外法で約32m である。なお堀の堆積埋土中より、ブロック土が混在する堆積層を確認したが、一部分のみの確認であったため、堀内部に土塁状の施設等が存在していたか否かは判断できていない。また、調査区内の堀内部の空間において、当該期に比定される建物等を構成する遺構は確認されていない。堀の南辺で土橋、及びこれに伴う通路状の遺構（140SX435）を確認しており、この部分が入口として機能していた可能性が考えられる。



第282図　中世遺構変遷模式図　(1/1600)

③16世紀後半～末

大規模な溝（堀）と土塁が構築される段階で、短期間にさまざまな造作がなされている。堀の幅は約７m、深度は約２m である。内側には、基底部幅約８m もの巨大な土塁が構築される。この段階で、堀に囲繞された内部空間の規模は、溝内法で約90m、溝外法で約104m の大規模なものとなっている。土塁構築後に堀と土塁の内側に、小規模な溝（140SD300）が掘削されるが、溝の性格等については不明である。

④16世紀末以降

整地層（140SX555）の分布が認められる段階である。

以上が中世段階の遺構変遷である。③段階の改修時期は大分川の対岸に位置する豊後府内でも、大規模土木工事の施工が各所で認められる時期であり、両者の関係が注目される。

第66表　遺物観察表①

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
140**SD**290-001	224	陶磁器												別表
140**SD**290-002	224	陶磁器												別表
140**SD**290-003	224	陶磁器												別表
140**SD**290-004	224	陶磁器												別表
140**SD**290-005	224	陶磁器												別表
140**SD**290-006	224	陶磁器												別表
140**SD**290-007	224	陶磁器												別表
140**SD**290-008	224	陶磁器												別表
140**SD**290-009	224	陶磁器												別表
140**SD**290-010	224	陶磁器												別表
140**SD**290-011	224	陶磁器												別表
140**SD**290-012	224	陶磁器												別表
140**SD**290-013	224	瓦質	火鉢	角閃石 白色粒子 砂粒 黒色粒子	黒褐色～ 茶褐色	黒褐色	ナデ ミガキ	ナデ ミガキ					口縁部～胴部片	雷文の型押し
140**SD**290-014	224	陶磁器												別表
140**SD**290-015	224	陶磁器												別表
140**SD**290-016	224	陶磁器												別表
140**SD**290-017	224	土師器	小皿	長石 橙色粒子	淡橙褐色	淡橙褐色 ～淡灰色	ヨコナデ	ヨコナデ	(8.6)	1.5		(6.3)	全体1／4	口縁部ス ス
140**SD**290-018	224	土師器	坏	角閃石 橙色粒子 金雲母 黒色粒子	淡橙褐色	淡橙褐色 ～黒色	ナデ ヨコナデ	ヨコナデ 糸切り離し	13.0	4.0		9.6	完存	一部ス ス
140**SD**290-019	224	土師器	皿	橙色粒子 黒色粒子	淡橙褐色	淡橙褐色	ヨコナデ 指オサエ 後ナデ	ヨコナデ 指オサエ 後ナデ					口縁部片	京都系
140**SD**290-020	224	土師器	皿	白色粒子 橙色粒子 砂粒	暗橙褐色	暗灰褐色 ～淡橙褐色	ヨコナデ 後ナデ	ナデ ヨコナデ 後ナデ					底部片	京都系
140**SD**290-021	224	土師器	坏	白色粒子 橙色粒子 黒色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ヨコナデ 指オサエ	ナデ 指オサエ ヨコナデ	12.0 ～ 14.0	3.9～ 4.8			完存	京都系 内面のの字ナデ
140**SD**290-022	225	金属製品												別表
140**SD**300-001	226	陶磁器												別表
140**SD**300-002	226	陶磁器												別表
140**SD**300-003	226	陶磁器												別表
140**SD**351-001	228	陶磁器												別表
140**SD**351-002	228	陶磁器												別表
140**SD**360-001	230	瓦器	椀	橙色粒子	灰色	灰色	ナデ後ミガキ	ヨコナデ					口縁部片	和泉型
140**SD**360-002	230	瓦器	椀	白色粒子 橙色粒子 黒色粒子	灰色	灰色	ナデ後ミガキ	ナデ ナデ後指オサエ					口縁部片	和泉型
140**SD**360-003	230	陶磁器												別表
140**SD**360-004	230	土師器	坏	長石 白色粒子 橙色粒子 金雲母 黒色粒子	淡黄褐色	淡黄褐色	ヨコナデ 後ナデ	ヨコナデ 糸切り離し	12.8	3.1～ 3.7		7.0	ほぼ完存 口縁部一部欠損	
140**SD**360-005	230	土師器	小皿	長石 白色粒子 黒色粒子	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ ヨコナデ	ヨコナデ 回転糸切り離し	(8.8)	1.5		(6.6)	全体1／2	
140**SD**360-006	230	土師器	小皿	角閃石 長石 白色粒子 橙色粒子 金雲母	淡黄灰色	灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	(9.0)	1.7		(6.7)	全体1／4	

第67表　遺物観察表②

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
140**SD**360-007	230	須恵質	鉢	白色粒子 黒色粒子	灰色	灰色	ナデ ヨコナデ	ナデ 指オサエ ヨコナデ					口縁部～胴部片	東幡系
140**SD**580-001	232	土師器	坏	角閃石 白色粒子	淡赤橙色	淡赤橙色	回転ナデ	回転ヘラ削り 回転ナデ 回転糸切り離し		2.8			口縁部～底部片	
140**SD**580-002	232	土師器	皿	石英 白色粒子 橙色粒子	淡灰黄色～暗灰茶褐色	淡灰黄色～暗灰茶褐色	ヨコナデ	ヨコナデ ナデ後指オサエ	12.2	2.6			全体１/２	京都系
140**SD**590-001	233	陶磁器												別表
140**SE**410-001	234	土師器	坏	白色粒子 橙色粒子	淡橙褐色	淡橙褐色	ナデ ヨコナデ	ヨコナデ 回転糸切り離し				(5.5)	底部１/４	
140**SE**415-001	236	瓦器	椀	白色粒子 橙色粒子	灰白色～灰色	灰色	ヨコナデ 後ミガキ	ヨコナデ 後ミガキ ヨコナデ 後ナデ					口縁部片	和泉型
140**SE**415-002	236	瓦器	椀	橙色粒子	灰白色～淡灰色	淡灰色	ヨコナデ ナデ後ミガキ	指オサエ ヨコナデ					口縁部片	和泉型
140**SE**415-003	236	瓦器	椀		灰色	灰色	ヨコナデ	ナデ後指オサエ					口縁部片	和泉型
140**SE**415-004	236	瓦器	椀		灰色	灰色	ヨコナデ 後ミガキ	ナデ後指オサエ					口縁部片	和泉型
140**SE**415-005	236	瓦器	椀		灰色	灰色	ミガキ	指オサエ ヨコナデ 後ミガキ ナデ後ミガキ					口縁部片	和泉型
140**SE**415-006	236	瓦器	椀	白色粒子	灰色	灰色	ナデ後ミガキ	ナデ					底部片	和泉型
140**SE**415-007	236	瓦器	椀	石英 白色粒子 橙色粒子	灰色	灰色	ナデ後ミガキ	ナデ後指オサエ					底部片	和泉型
140**SE**415-008	236	瓦器	椀		灰色	灰色	ナデ後ミガキ	ナデ後指オサエ					底部片	和泉型
140**SE**415-009	236	瓦器	椀	橙色粒子	灰黄色	灰黄色	ナデ後ミガキ	ヨコナデ ナデ後指オサエ	(14.0)				口縁部１/４	和泉型
140**SE**415-010	236	瓦器	椀		淡灰色	淡灰色	ナデ後ミガキ	ヨコナデ ナデ後指オサエ	(15.0)				口縁部～体部１/４	和泉型
140**SE**415-011	236	瓦器	椀		淡灰茶褐色	淡灰茶褐色	ヨコナデ ヨコナデ 後ミガキ	ヨコナデ ナデ後指オサエ	(16.0)				口縁部～体部１/４	和泉型
140**SE**415-012	236	瓦器	椀	角閃石 白色粒子	灰黄色～灰色	灰黄色～灰色	ナデ後ミガキ	ナデ後指オサエ ヨコナデ 後指オサエ	(16.9)				口縁部～体部１/４	和泉型
140**SE**415-013	236	陶磁器												別表
140**SE**415-014	236	陶磁器												別表
140**SE**415-015	236	陶磁器												別表
140**SE**415-016	236	陶磁器												別表
140**SE**415-017	237	瓦器	椀	白色粒子 橙色粒子 砂粒	橙黄褐色	橙黄褐色	ヨコナデ ミガキ	指オサエ ヨコナデ ヨコナデ 後ミガキ					口縁部片	和泉型
140**SE**415-018	237	瓦器	椀	橙色粒子	淡橙黄色	淡橙黄色	ヨコナデ ミガキ	指オサエ ヨコナデ ヨコナデ 後ナデ					口縁部片	和泉型
140**SE**415-019	237	瓦器	椀	角閃石 白色粒子 橙色粒子	淡橙黄色～淡灰黄色	淡橙黄色	ヨコナデ 後ナデ	ヨコナデ 後ナデ					口縁部片	和泉型
140**SE**415-020	237	瓦器	椀	長石 白色粒子 橙色粒子	淡灰黄色～淡黄褐色	淡灰黄色～淡橙黄色	ヨコナデ 後ミガキ	指オサエ ヨコナデ					口縁部片	和泉型
140**SE**415-021	237	土師器	坏	角閃石 白色粒子 橙色粒子	暗茶褐色～黒色	淡橙茶褐色	ナデ	ヨコナデ 回転糸切り離し				10.5	底部ほぼ完存	
140**SE**415-022	238	石製品												別表
140**SE**635-001	240	弥生	鉢	角閃石 片岩	淡茶褐色	淡茶褐色	指オサエ ヘラ削り ハケナデ	ハケ目 ヘラ削り ハケナデ	(14.4)				全体１/４ 底部欠損	

第68表　遺物観察表③

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
140**SE**635-002	240	弥生	鉢	角閃石 雲母	暗茶赤褐色	暗茶赤褐色	ナデ 指オサエ ハケナデ	ハケ目 ナデ ハケナデ	(7.0)				口縁部～ 体部１/４	
140**SE**635-003	240	弥生	台付鉢	角閃石 片岩	淡茶灰色	淡茶灰色	ナデ 指オサエ	ナデ 指オサエ ケズリ	(16.0)	9.4		(7.8)	全体１/３	
140**SE**635-004	240	弥生	不明	角閃石	淡茶褐灰色	淡茶褐灰色	ハケナデ	ナデ 指オサエ ヨコナデ					口縁部～ 体部１/３	
140**SE**635-005	240	弥生	甕	角閃石 長石	淡茶灰褐色	淡茶灰褐色	ナデ 指オサエ ハケナデ 指ナデ	ナデ 指オサエ			5.6		頸部～底部	ミニチュア土器
140**SE**635-006	240	弥生	甕	石英 角閃石 長石 雲母	淡茶灰色	淡茶灰色	ナデ 指オサエ	ハケ目 指オサエ ヨコナデ				2.0	胴部～底部	ハケ目(10～13本／cm)
140**SE**635-007	240	弥生	壺	角閃石 長石	明茶褐色	明茶褐色	ハケ目 ナデ 指オサエ ヘラケズリ	ハケ目 ヨコナデ ヘラケズリ					頸部～底部	ハケ目(内面８本　外面10本／cm) 外面黒斑
140**SH**426-001	242	土師質	甕	石英 角閃石 長石 白色粒子	橙褐色	橙褐色	ヨコナデ	指オサエ ハケ目後 ヨコナデ					口縁部片	ハケ目(11～12本／cm)
140**SH**426-002	242	土師質	小型丸底鉢	石英 白色粒子 橙色粒子	暗茶褐色	黒褐色	ナデ 指オサエ	ナデ 指オサエ					口縁部片	
140**SH**426-003	242	土師質	甕	石英 角閃石 橙色粒子	淡橙褐色	淡橙褐色	ナデ 指オサエ	ナデ ヨコナデ					口縁部片	
140**SH**426-004	242	土師質	台付鉢	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡橙褐色	淡橙褐色	ナデ	ナデ 指オサエ				9.8	底部のみ	
140**SH**430-001	244	弥生	小型無頸壺	石英 長石 白色粒子 砂粒	淡橙褐色	淡橙褐色	ナデ 指オサエ 指ナデ	指オサエ ナデ後ミガキ	5.1	7.3	9.4		ほぼ完存	
140**SH**430-002	244	弥生	鉢	石英 角閃石 白色粒子 橙色粒子	淡橙褐色	淡茶褐色	指オサエ 指ナデ 工具ナデ	ナデ 指オサエ	12.5	10.5			完存	
140**SH**430-003	244	弥生	鉢	石英 砂粒	淡橙白色～淡橙色	淡橙褐色	指オサエ 工具ナデ	ナデ 指オサエ 指ナデ	20.6	6.6		9.5	１/２残存	
140**SH**430-004	244	弥生	高坏	石英 長石 砂粒 雲母	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ 指オサエ	指オサエ ミガキ					脚部 裾部欠損	
140**SH**430-005	244	土師質	甕	石英 角閃石 橙色粒子 黒色粒子	黄橙色	黄橙色	指オサエ 後ナデケズリ 指オサエ 後ヨコナデ	工具ナデ 指オサエ 後ヨコナデ	(20.4)		(19.6)		口縁部～ 胴部１/３	接合痕
140**SH**430-006	244	土師質	甕	石英 角閃石 砂粒	黄橙色	黄橙色	ミガキ ハケ目後 ナデ 工具ナデ	ハケ目 ハケ目後 ナデ ハケ目後 ミガキ	(15.6)		(18.6)		全体１/２	ハケ目(10～11本／cm) 外面黒斑
140**SH**430-007	245	弥生	複合口縁壺	角閃石 白色粒子 橙色粒子	淡橙色	淡橙色	ナデ 指オサエ	ハケ目 指オサエ ヨコナデ	12.7～13.5				口縁部～ 頸部４/５	
140**SH**430-008	245	弥生	複合口縁壺	石英 角閃石 長石 白色粒子	淡茶褐色～黒色	淡茶褐色～黒色	ヨコナデ 指オサエ 工具ナデ 後ナデ	ナデ 指オサエ ヨコナデ	12.5～13.5				口縁部～ 頸部完存	内外黒斑
140**SH**430-009	245	弥生	複合口縁壺	石英 角閃石 長石 白色粒子 橙色粒子 砂粒	橙褐色	橙褐色	ナデ ヨコナデ 指オサエ ハケナデ	ナデ 指オサエ ヨコナデ	(13.2)				口縁部～ 頸部１/２	
140**SH**430-010	245	弥生	複合口縁壺	石英 角閃石 白色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ヨコナデ 指オサエ	ハケ目後 ヨコナデ 指オサエ ハケ目後 指オサエ	11.5～12.0				口縁部～頸部ほぼ完存	ハケ目(６本／cm)
140**SH**430-011	245	弥生	複合口縁壺	石英 角閃石 橙色粒子	橙色	橙色	ヨコナデ 指オサエ 後ハケ目	ハケ目 ヨコナデ	(18.4)	58.8			全体１/２	ハケ目（内面７～８本　外面６本・７～８本／cm) 外面黒斑
140**SH**430-012	246	石製品												別表
140**SH**465-001	249	土師器	高坏	石英 長石	橙色	橙色	ケズリ後 ナデ ヘラミガキ	ヘラミガキ	20.1				裾部欠損	

第69表　遺物観察表④

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
140**SH**465-002	249	土師器	高坏	石英 角閃石 長石 雲母	橙色	暗赤色	ナデ	ナデ ヨコナデ ミガキ				(16.0)	脚部２／３	赤色塗彩
140**SH**465-003	249	土師質	鉢	石英 角閃石 長石 白色粒子	橙色	橙色	ヨコナデ ミガキ ヘラケズリ後ミガキ	工具ナデ ヨコナデ ハケ目後ナデ	(15.8)	14.4	(15.3)		全体１／３	
140**SH**465-004	249	土師質	壺	石英 角閃石 長石	黄橙色	橙色	ナデ 工具ナデ	工具ナデ 指オサエ ヨコナデ					頸部１／３	内面黒斑
140**SH**465-005	249	土師質	小型丸底鉢	角閃石	橙色	橙色	ハケ目 ナデ ヨコナデ	ハケ目 ヨコナデ	(13.9)				口縁部～胴部１／２	ハケ目（８本／cm）
140**SH**465-006	249	土師質	小型長頸壺	石英 角閃石 長石 橙色粒子	橙色	橙色	ヨコナデ 指オサエ 後ナデ	ヨコナデ ハケ目後 ヨコナデ ハケ目後 ナデ	(11.0)				口縁部～胴部１／２	ハケ目（７本／cm） 外面黒斑
140**SH**465-007	250	土師質	甕	石英 角閃石	黄橙色	黄橙色	ヨコナデ ハケ目後 ナデ	ヨコナデ ハケ目後 ナデ	(17.6)				口縁部～胴部１／２	ハケ目（８本／cm）
140**SH**465-008	250	土師質	甕	石英 角閃石 長石 橙色粒子	橙色	橙色	ナデ 指オサエ 後ハケ目 後ナデ 指オサエ 後ナデ	ハケ目 ナデ ハケ目後 ナデ	(16.2)				口縁部～胴部２／３	ハケ目(内面４～５本　外面11～12本／cm)
140**SH**465-009	250	土師質	甕	石英 角閃石 長石 白色粒子 雲母	橙色	橙色	指オサエ ハケ目後 ナデ ミガキ 指オサエ 後ヨコナデ	ハケ目 ナデ ハケ目後 ナデ ハケ目後 ヨコナデ 指オサエ 後ヨコナデ	(19.8)	29.7	21.0		全体２／３	内面黒斑 外面スス ハケ目(内面５～６本　外面10～11本／cm)
140**SH**465-010	250	土師質	甕	石英 長石	淡黄橙色	淡黄橙色	ヨコナデ 指オサエ ケズリ	ハケ目 ヨコナデ	(13.9)				口縁部～胴部１／２	布留式系 ハケ目(10本／cm)
140**SH**465-011	250	土師質	甕	石英 角閃石 長石 雲母	橙色	橙色	ハケ目後 ヨコナデ ヘラケズリ	ハケ目 ヨコナデ	20.0				口縁部～胴部１／２	布留式系 ハケ目（７～８本／cm） 外面黒斑
140**SH**465-012	250	土師質	甕	角閃石 長石 白色粒子 橙色粒子	橙色	橙色	ハケ目 ヨコナデ	ハケ目 ヨコナデ ハケ目後 ナデ 指オサエ 後ヨコナデ	(21.2)		(25.6)		口縁部～胴部１／２	ハケ目(内面４本　外面７本／cm) 外面黒斑
140**SH**465-013	250	土師質	甕	石英 長石 橙色粒子 雲母	黄橙色	黄橙色	ナデ ヘラケズリ 指オサエ 後ナデ	ハケ目 ヨコナデ ハケ目後 ナデ			17.8		口縁部欠損	ハケ目（４本／cm） 外面黒斑
140**SH**481-001	254	土師器	高坏	石英 角閃石 長石 砂粒	橙褐色～黒色	橙褐色～黒色	指オサエ ヨコナデ 後ミガキ	指オサエ ヨコナデ ハケナデ 後ミガキ	24.0～25.0				坏部ほぼ完存	黒斑
140**SH**481-002	254	土師質	鉢	石英 角閃石 白色粒子 砂粒	暗褐色～橙色	淡茶褐色～暗灰色	指オサエ 工具ナデ 後ミガキ	ハケ目 工具ナデ 指オサエ ヨコナデ	(15.5)	8.8	12.0		口縁部一部欠損	外面黒斑
140**SH**481-003	254	土師質	鉢	角閃石 長石 砂粒	赤色	赤色	ヨコナデ 指オサエ ナデ後ミガキ 工具ナデ	ナデ ヨコナデ ハケ目後 ミガキ ミガキ	(11.3)	13.2			口縁部１／２欠損	ハケ目（４本／cm） 内外赤色塗彩
140**SH**481-004	254	土師質	甕	石英 角閃石 長石	橙褐色～黒色	橙褐色～暗褐色	ヨコナデ 指オサエ ハケナデ 後ナデ	指オサエ ヨコナデ ハケナデ 後ナデ	(17.0)		(21.0)		口縁部～胴部１／２	
140**SH**615-001	256	土師質	鉢	角閃石 橙色粒子 砂粒 金雲母	淡橙色	淡橙色	ヨコナデ	ヨコナデ					口縁部片	
140**SH**615-002	256	土師質	鉢	角閃石 長石 砂粒	淡橙色	淡橙色	指オサエ ナデ後ミガキ	指オサエ ナデ後ミガキ					口縁部片	
140**SH**615-003	256	土師質	甕	石英 角閃石 長石 砂粒	淡黄白色	淡黄白色	ヨコナデ	ハケ目 指オサエ ヨコナデ					口縁部片	ハケ目（５本／cm）
140**SX**355-001	259	土師器	小皿	角閃石 白色粒子 橙色粒子	淡橙褐色	淡橙褐色	ナデ	ナデ 回転糸切り離し	(8.4)	1.2		(8.2)	全体１／２	
140**SX**355-002	259	土師器	小皿	角閃石 長石 白色粒子 橙色粒子	淡橙褐色	淡橙褐色	ナデ	ナデ 回転糸切り離し	(7.7)	1.2		(5.5)	全体１／２	

第70表　遺物観察表⑤

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
140**SX**355-003	259	土師器	皿	角閃石 白色粒子 橙色粒子	淡赤橙色	淡赤橙色	ナデ	ナデ 指オサエ ヨコナデ					口縁部～体部片	京都系
140**SX**355-004	259	陶磁器												別表
140**SX**355-005	259	陶磁器												別表
140**SX**355-006	259	陶磁器												別表
140**SX**355-007	259	陶磁器												別表
140**SX**355-008	259	金属製品												別表
140**SX**355-009	260	石製品												別表
140**SX**355-010	261	石製品												別表
140**SX**355-011	261	石製品												別表
140**SX**355-012	261	石製品												別表
140**SX**355-013	261	石製品												別表
140**SX**355-014	261	石製品												別表
140**SX**355-015	262	石製品												別表
140**SX**355-016	262	石製品												別表
140**SX**355-017	262	石製品												別表
140**SX**397-001	266	土師器	坏	角閃石 長石 白色粒子 橙色粒子 砂粒	淡橙赤色	淡橙赤色	ナデ ヨコナデ	ヨコナデ 回転ヘラ切り離し	14.0	3.4～3.7		11.5	ほぼ完存	豊後9-Ⅰ期 （坪根・塩地）
140**SX**432-001	267	陶磁器												別表
140**SX**435-001	269	瓦器	小皿	角閃石 白色粒子	淡橙白色 ～灰白色	灰黄白色	ヨコナデ ナデ後指オサエ	ヨコナデ ナデ後指オサエ	(9.4)			(5.4)	口縁部～底部1／4	和泉型
140**SX**435-002	269	陶磁器												別表
140**SX**450-001	271	土師質	鉢	石英 角閃石 長石 砂粒	淡茶白色	淡茶白色 ～暗灰色	指オサエ ハケ目後ナデ	指オサエ ハケ目後ナデ					口縁部～胴部片	外面黒斑
140**SX**450-002	271	土師質	鉢	石英 角閃石 長石	淡茶白色 ～淡灰色	淡茶白色	ナデ ヨコナデ 指オサエ	ハケ目 不明瞭	(9.1)				口縁部～胴部1／3	
140**SX**450-003	271	土師質	鉢	角閃石 長石 白色粒子	橙色	橙色	ナデ ヘラミガキ	ナデ					口縁部片	精製土使用
140**SX**450-004	271	土師質	小型丸底鉢	角閃石 白色粒子	淡茶褐色 ～淡灰色	淡茶褐色 ～淡灰色	ナデ ヨコナデ 指オサエ	ナデ 指オサエ ヨコナデ					口縁部～胴部片	
140**SX**450-005	271	土師質	鉢	石英 角閃石 橙色粒子 砂粒	淡茶褐色 ～淡橙色	淡茶褐色 ～淡橙色	ハケ目 ナデ 指オサエ	ハケ目 ナデ					口縁部片	ハケ目（11～12本／cm）
140**SX**450-006	271	土師質	不明	角閃石 長石 橙色粒子 雲母	黒褐色	黒褐色	不明瞭	ナデ	(17.8)				口縁部～胴部1／3	
140**SX**450-007	271	土師器	高坏	角閃石 砂粒	赤色	赤色	ハケ目 ナデ	ハケ目 ヨコナデ ハケ目後ヨコナデ	30.8				坏部のみ残存	ハケ目（7～8本／cm） 内面黒斑 全面赤色塗彩
140**SX**450-008	271	土師器	高坏	石英 角閃石	赤色	赤色	ナデ	ハケ目 ナデ				11.6	裾部のみ残存	外面赤色塗彩
140**SX**450-009	272	土師質	甕	石英 長石	淡橙褐色	淡橙褐色	ナデ ヨコナデ 指オサエ	ナデ 指オサエ ヨコナデ					口縁部～胴部片	
140**SX**450-010	272	土師質	甕	石英 橙色粒子 砂粒 金雲母	橙褐色	淡橙色	ヨコナデ ケズリ	ハケ目 ヨコナデ					肩部片	布留式系 ハケ目（12～14本／cm）
140**SX**450-011	272	土師質	小型丸底壺	角閃石 長石	淡茶白色	淡茶白色	ナデ 指オサエ	ナデ 指オサエ					口縁部～胴部片	ミニチュア土器 精製土使用
140**SX**450-012	272	土師質	壺	角閃石 長石 白色粒子	暗灰色	淡灰褐色	ナデ 指オサエ	ナデ					肩部片	ミニチュア土器 赤色塗彩 精製土使用

第71表　遺物観察表⑥

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
140**SX**450-013	272	弥生	複合口縁壺	石英 角閃石 長石 砂粒	淡茶褐色～黒色	橙色～淡灰色	ヨコナデ 指オサエ	ナデ					口縁部片	
140**SX**450-014	272	土師質	直口壺	石英 角閃石 橙色粒子	橙色	橙色	ナデ	ハケ目後ナデ	(11.7)	34.0	29.7		ほぼ完存	ハケ目（6本／cm） 外面黒斑
140**SX**460-001	273	須恵器	甕	白色粒子	灰色	灰色	あて具痕	タタキ			(41.5)		胴部1／3	
140**SX**460-002	273	石製品												別表
140**SX**470-001	277	弥生	鉢	角閃石 白色粒子	暗茶褐色	暗茶褐色	ハケ目 ナデ 指オサエ	ハケ目 ナデ 指オサエ	(13.6)	6.3			全体1／3	ハケ目（内面10本　外面12本／cm）
140**SX**470-002	277	土師質	鉢	石英 角閃石	淡赤橙色	淡黄褐色	ナデ 指オサエ ヘラミガキ	ハケ目 ヨコナデ ケズリ風ナデ	(12.6)	9.6			全体1／2	ハケ目（7本／cm） 外面黒斑
140**SX**470-003	277	土師器	高坏	角閃石 橙色粒子 雲母	淡橙褐色	赤褐色	ナデ 指オサエ ヘラミガキ	ハケ目 ナデ ヘラミガキ	23.5				全体3／4 裾部欠損	ハケ目（10本／cm） 赤色塗彩
140**SX**470-004	277	土師器	高坏	角閃石 金雲母	赤黄色	淡橙褐色	ハケ目 ヨコナデ 指ナデ	ハケ目後 ヘラミガキ				15.4	脚部3／4	ハケ目（内面7本　外面8本／cm）
140**SX**470-005	277	土師質	甕	角閃石	黄褐色	黄褐色	ナデ 指オサエ	ナデ 指オサエ	(16.4)				口縁部片	
140**SX**470-006	277	土師質	甕	石英 角閃石 金雲母	茶褐色	茶褐色	ナデ 指オサエ ミガキ	ハケ目 ナデ	15.0		16.8		全体1／2 底部欠損	ハケ目（8本／cm） 黒斑
140**SX**470-007	277	弥生	直口壺	長石	赤褐色	橙褐色	ハケ目 指オサエ ヘラケズリ	ハケ目 ヨコナデ	(10.8)				口縁部～胴部1／2	ハケ目（12本／cm）
140**SX**470-008	277	弥生	複合口縁壺	角閃石 長石	橙褐色	赤褐色	ハケ目 ヨコナデ	ハケ目	(16.8)				口縁部片	ハケ目（10本／cm）
140**SX**470-009	277	土師質	二重口縁壺	雲母	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ	ナデ	(27.2)				口縁部片	
140**SX**470-010	277	土師質	甕	角閃石 長石 雲母	淡黄茶褐色	淡黄茶褐色	ハケ目 ナデ 指オサエ ケズリ	ハケ目 ナデ ミガキ	(13.0)				口縁部～胴部1／3	布留式系 ハケ目（内面7本　外面8本／cm）
140**SX**470-011	277	土師質	甕	長石 雲母	赤褐色	橙褐色	ハケ目 ヘラミガキ	ハケ目 ヨコナデ	(16.2)				口縁部～胴部	ハケ目（5本／cm）
140**SX**470-012	277	土師質	甕	石英 角閃石 雲母	橙褐色	赤橙色	ハケ目 ヨコナデ ヘラミガキ	ハケ目 ヨコナデ	(20.2)				口縁部～胴部1／4	ハケ目（5本／cm）
140**SX**470-013	277	土師質	長胴甕	角閃石 白色粒子 金雲母	赤茶色	赤茶色	ハケ目 ナデ ヨコナデ 指オサエ	ハケ目 ナデ ヨコナデ	(12.0)		(17.4)		全体1／2 底部欠損	ハケ目（内面7・10本　外面7本／cm）
140**SX**470-014	277	土師質	長胴甕	角閃石 橙色粒子 雲母	黄茶褐色	黄茶褐色	ハケ目 ナデ 指オサエ ヘラミガキ	ハケ目 ナデ ヘラミガキ	(18.0)		(21.1)		全体2／3 底部欠損	ハケ目（内面8本　外面7本／cm）
140**SX**470-015	277	土師質	甕	長石 雲母	淡黄褐色	淡橙褐色	ヨコナデ 指オサエ ヘラケズリ	ハケ目 ヨコナデ ハケナデ ヘラミガキ	(14.4)		(20.8)		口縁部～胴部1／3	布留式系 ハケ目（8本／cm）
140**SZ**000-001	281	石製品												別表

第72表　陶磁器観察表

遺物番号	挿図番号	器種		装飾		法量（cm）			産地	備考
		種類	器種	絵付釉薬	文様	口径	器高	底径		
140SD290-001	224	陶器	菊花小皿	翡翠釉			1.0		中国産	
140SD290-002	224	磁器	鍔皿	青花					中国産	漳州窯系
140SD290-003	224	磁器	皿	青花	内 圏線 外 牡丹唐草				中国産	景徳鎮窯 小野分類Ｂ群
140SD290-004	224	磁器	碗	青花	内 暗花文 外 圏線				中国産	景徳鎮窯 小野分類Ｅ群
140SD290-005	224	磁器	碗	青花					中国産	漳州窯系
140SD290-006	224	磁器	皿	青花	内 玉取獅子 外 牡丹唐草				中国産	景徳鎮窯 小野分類Ｂ群
140SD290-007	224	磁器	碗	青花	内 人物 外 長命富貴			4.0	中国産	景徳鎮窯 小野分類Ｅ群
140SD290-008	224	焼締	擂鉢						備前	乗岡編年近世１期ｂ
140SD290-009	224	焼締	擂鉢						備前	乗岡編年近世１期ｂ
140SD290-010	224	焼締	甕						備前	乗岡編年中世４期ｂ
140SD290-011	224	焼締	擂鉢						備前	
140SD290-012	224	焼締	擂鉢						備前	
140SD290-014	224	陶器	瓶子						瀬戸・美濃	古瀬戸 糸切り痕
140SD290-015	224	雑釉陶器	船徳利						朝鮮産	内面あて具痕 焼き膨れ
140SD290-016	224	陶器	卸皿					7.3	瀬戸・美濃	古瀬戸 糸切り痕
140SD300-001	226	磁器	碗	青花	内 圏線 外 暗花				中国産	景徳鎮窯 小野分類Ｅ群
140SD300-002	226	磁器	皿	青花	内 花弁樹石 外 花鳥折枝				中国産	景徳鎮窯 小野分類Ｅ群
140SD300-003	226	磁器	皿	青花	内 花樹 外 渦状の密な唐草			(7.8)	中国産	景徳鎮窯 小野分類Ｂ群
140SD351-001	228	陶器	碗						肥前系	陶胎染付 貫入
140SD351-002	228	陶器	碗					4.6	瀬戸・美濃	貫入
140SD360-003	230	磁器	碗	青磁				5.6	中国産	同安窯系 大宰府陶磁器分類
140SD590-001	233	磁器	碗	白磁					朝鮮王朝産	李朝 内面目跡
140SE415-013	236	磁器	碗	白磁				(5.8)	中国産	大宰府陶磁器分類 白磁Ⅵ類 貫入
140SE415-014	236	磁器	碗	白磁				(6.6)	中国産	大宰府陶磁器分類 白磁Ⅵ類 内面見込みに目跡 貫入
140SE415-015	236	磁器	碗	白磁				(6.8)	中国産	大宰府陶磁器分類 白磁Ⅵ類
140SE415-016	236	磁器	碗	白磁				(6.8)	中国産	大宰府陶磁器分類 白磁Ⅵ類
140SX355-004	259	磁器	碗	青磁	外 蓮弁文				中国産	龍泉窯系
140SX355-005	259	陶器	天目茶碗						瀬戸・美濃	
140SX355-006	259	焼締	甕						備前	乗岡編年中世６期ｂ
140SX355-007	259	焼締	擂鉢						備前	乗岡編年中世３期
140SX432-001	267	磁器	碗	青磁	内 点描文 外 櫛目文			(4.8)	中国産	同安窯系 大宰府陶磁器分類碗Ⅰ-1b 期
140SX435-002	269	磁器	皿	青磁	内 片彫魚文	(11.0)	2.2	(2.0)	中国産	龍泉窯系

第73表　金属製品観察表

遺物番号	挿図番号	器種	素材	法量（cm）				備考
		種類		長さ	幅	厚さ	重さ(g)	
140SD290-022	225	不明	青銅	(2.9)	0.7			※幅に径記入
140SX355-008	259	不明	鉄	(10.4)	5.6		220.0	

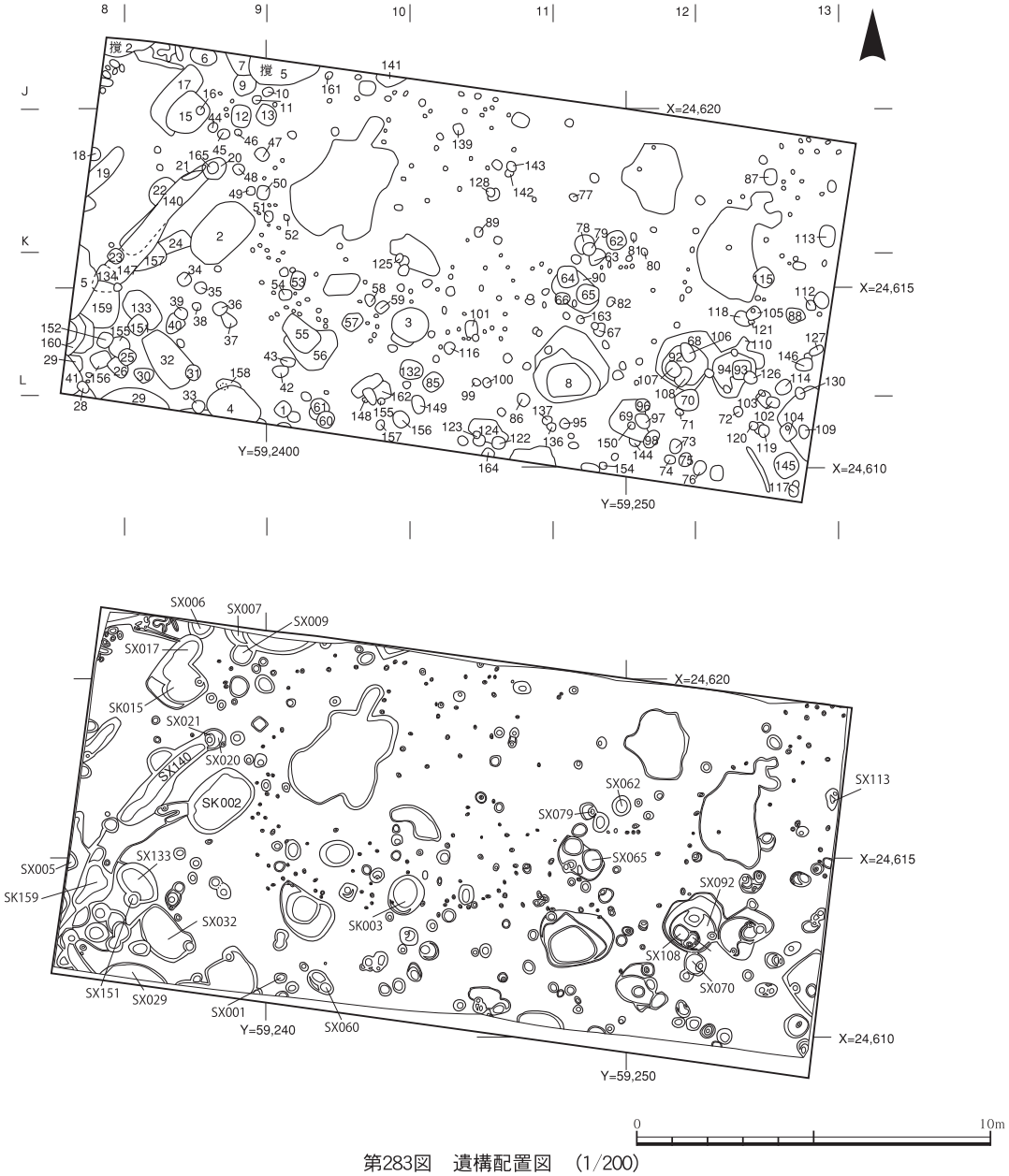
第74表　石器観察表

遺物番号	挿図番号	器種	石材	法量（cm）				備考
		種類		長さ	幅	厚さ	重さ(g)	
140SE415-022	238	不明	不明		12.1	12.4	(4800.0)	上下両端欠損　５面に面取り
140SH430-012	246	不明	安山岩	31.1	29.1	13.5	21000.0	
140SX355-009	260	不明	角閃石安山岩	40.7	25.3	20.6	29000.0	４面面取り
140SX355-010	261	羽口	安山岩		13.1	2.4	(2860.0)	※幅に径、厚さに穿孔径記入
140SX355-011	261	羽口	凝灰岩		13.4	2.0	(2120.0)	※厚さに穿孔径記入
140SX355-012	261	羽口	安山岩				(3840.0)	
140SX355-013	261	羽口	凝灰岩		13.5	2.5	(3100.0)	※幅に径、厚さに穿孔径記入
140SX355-014	261	羽口	安山岩		18.8	2.0	(46800.0)	※幅に径、厚さに穿孔径記入
140SX355-015	262	五輪塔	凝灰岩	(26.9)	21.9		(7600.0)	空、風輪部分※幅に径記入
140SX355-016	262	五輪塔	凝灰岩	(18.2)	19.8		(3500.0)	風輪部分※幅に径記入
140SX355-017	262	石臼	安山岩			14.0	(7500.0)	
140SX460-002	274	不明	白色泥岩	(4.6)	3.0		62.6	両端欠損８面面取り
140SZ000-001	281	羽口	安山岩	(20.3)	12.0		(1810.0)	外面１／４被熱痕

第５節　下郡遺跡群第141次調査

（１）はじめに

調査は民間のアパート建設に伴う事前調査として実施した。調査対象地は下郡遺跡群のほぼ中央に位置し、調査面積は214㎡である。平成14年８月26日～９月11日の間行った。調査の結果、弥生時代中期を中心とする遺構群を確認した。検出遺構には、土坑、柱穴、溝状遺構等がある。

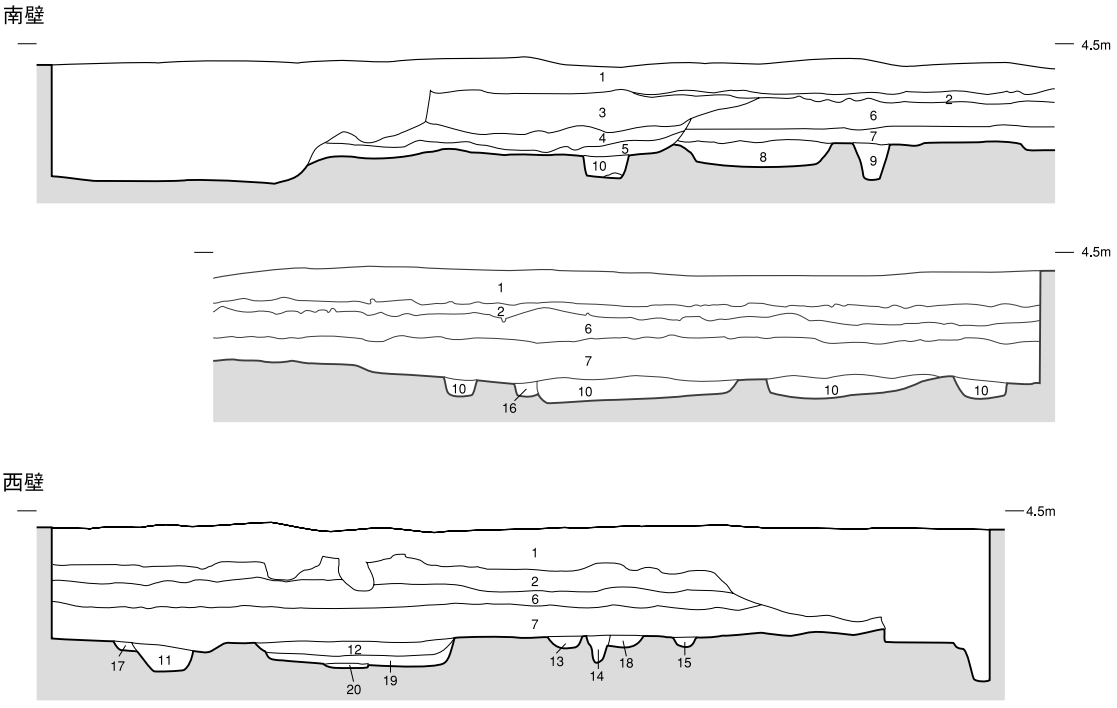


第283図　遺構配置図　(1/200)

（２）層位

今次の調査地点は、現地表面から約0.6m の深さまで客土層が存在し、その下層の茶褐色土層、暗茶灰褐色土層などを除去すると黄茶褐色を呈した基盤土に達する。埋土客土に伴う撹乱穴は、場所によっては遺構検出面にまで及んでいるものもある。遺構はこの基盤土層上面において確認することが

できる。当調査区では後述する第６層上面から掘りこまれると考えられる近世後半期以降の遺構面を除けば重層的に文化面を捉えることはできず、基盤土層上面での確認面のみとなっている。客土層下位の堆積土層について詳細にみていくと、客土に伴う掘削が比較的行われていない地点においては、客土層直下に灰色を呈する水田耕作土（第２層）が存在し、その下面に茶褐色土（第６層）を広範に認めることができる。この第６層は土器片、黄褐色ブロック土などを多量に含み、整地層である可能性も想定される。平面プランとして確認できていないが、第６層から切りこまれる遺構の存在を認知している。堆積土層の観察等から第３層から第５層が第６層上面から掘りこまれる遺構埋土と考えることができるが、出土遺物には近世後半以降のものと推定される微細磁器破片が認められるのみであり、中世以前に遡るものではなく、出土遺物も少ないことから、時期の特定を行うことはできない。第６層下には暗茶灰褐色土層（第７層）が調査区内に展開する。本層も0.4m程度の層厚を有し、ブロック土を多量に含むことから、第６層と同様に整地層である可能性を指摘できるものの、土層上面で遺構の存在を確認することはできず、あるいは、第６層の被覆作業に伴う一連の整地地業によるものである点も考慮される。今回の調査区における遺構の検出面の標高は約３mである。



1. 客土
2. 灰色土（水田耕作土）
3. 茶褐色土
4. 茶灰色土
5. 灰色土（水田耕作土、締まりやや有り、粘性中）
6. 茶褐色土（土器片を含む、粘性弱、締まりやや有り、黄褐色ブロックを含む、褐色粒子を僅かに含む）
7. 暗茶灰褐色土（土器片を含む、粘性弱、締まりやや有り、黄褐色ブロックを含む、1mm～3mm程度の砂粒を若干含む、褐色粒子を僅かに含む）
8. 灰茶黄色土（締まり有り、粘性弱、マンガン均一に含む、黄白色ブロックを含む）
9. 茶褐色土（締まりやや有り、粘性弱、褐色粒子を僅かに含む、茶黄色ブロック層）
10. 茶褐色土（締まりやや有り、粘性弱、褐色粒子を僅かに含む、茶黄色ブロック層）
11. 淡灰褐色土（淡黄色ブロック層、粘性中、締まりやや有り、第18層に比べブロックを多量に含む）
12. 暗茶褐色土（粘性弱、締まりやや有り、黄褐色ブロックを含む）
13. 褐灰茶色土（黄褐色ブロックを含む、粘性中、締まりやや有り）
14. 暗茶色土（黄白色ブロックを含む、粘性弱、締まりやや有り）
15. 暗茶灰褐色土（黄褐色ブロックを含む、粘性弱、締まりやや有り）
16. 黄灰茶色土（締まり有り、粘性弱、暗灰色ブロックを含む）
17. 暗茶褐色土（黄白色ブロックを含む、粘性弱、締まりやや有り）
18. 灰褐色土（黄褐色ブロックを含む、粘性中、締まりやや有り）
19. 暗茶褐色土（第12層に比べやや暗い、粘性弱、締まりやや有り、黄茶色ブロックを含む）
20. 暗茶色土

0　4m

第284図　基本土層断面実測図　(1/80)

第75表　遺構一覧表①

S番号	遺構番号	遺物・その他	時期	地区
001	141**SX**-001	須恵器甕、須恵器片		**M**-10
002	141**SK**-002	下城式甕口縁部片、東北部九州系甕口縁部片	弥生中期	**K**・**L**-9
003	141**SK**-003	下城式甕口縁部片、下城式壺胴部片、東北部九州系甕片、脚坏鉢	弥生中期	**L**-10・11
004	141**SX**-004	弥生土器片		**L**・**M**-9
005	141**SX**-005	下城式甕口縁部片、東北部九州系甕口縁部片		**K**・**L**-8
006	141**SX**-006	下城式壺胴部片		**J**-9
007	141**SX**-007	弥生土器片、東北部九州系甕口縁部片		**J**-9
008	141**SX**-008			**L**・**M**-11・12
009	141**SX**-009	下城式甕口縁部片、下城式系甕底部片		**J**-9
010	141**SX**-010			**J**-9・10
011	141**SX**-011			**J**-9
012	141**SX**-012			**J**・**K**-9
013	141**SX**-013			**J**・**K**-9・10
014	141**SX**-014			**K**-10
015	141**SK**-015	磨消縄文土器片、下城式口縁部片		**J**・**K**-9
016	141**SX**-016	弥生土器片		**J**・**K**-9
017	141**SX**-017	下城式壺片、下城式甕片、弥生壺片		**J**・**K**-9
018	141**SX**-018			**K**-8
019	141**SX**-019	弥生土器片		**K**-8
020	141**SX**-020	東北部九州系甕口縁部片		**K**-9
021	141**SX**-021	東北部九州系甕口縁部片、甕底部、姫島産黒曜石片、台付鉢脚部、壺口縁部片、鉢口縁部片、土器片、石器	弥生中期後半	**K**・**L**-8・9
022	141**SX**-022	弥生土器片		**K**-9
023	141**SX**-023	弥生土器片、瓦質土器片		**K**・**L**-8
024	141**SX**-024	東北部九州系甕口縁部片、甕底部		**K**・**L**-9
025	141**SX**-025	下城式甕口縁部片		**L**-8・9
026	141**SX**-026	弥生土器片		**L**-8・9
027	141**SX**-027	弥生土器片		**L**-8
028	141**SX**-028			**L**-8
029	141**SX**-029	下城式甕口縁部片		**L**・**M**-8・9
030	141**SX**-030	弥生土器片		**L**-9
031	141**SX**-031	弥生土器片		**L**-9
032	141**SX**-032	下城式壺片、壺底部、東北部九州系甕口縁部片、下城式甕口縁部片		**L**-9
033	141**SX**-033			**M**-9
034	141**SX**-034			**L**-9
035	141**SX**-035	東北部九州系甕口縁部片		**L**-9
036	141**SX**-036			**L**-9
037	141**SX**-037	弥生土器片		**L**-9
038	141**SX**-038			**L**-9
039	141**SX**-039			**L**-9
040	141**SX**-040	弥生土器片		**L**-9
041	141**SX**-041	弥生土器片		**L**-8
042	141**SX**-042	弥生土器片		**L**-10
043	141**SX**-043	弥生土器片		**L**-10
044	141**SX**-044			**K**-9
045	141**SX**-045			**K**-9
046	141**SX**-046			**K**-9
047	141**SX**-047	弥生土器片		**K**-9・10
048	141**SX**-048			**K**-9
049	141**SX**-049			**K**-9
050	141**SX**-050			**K**-9・10
051	141**SX**-051			**K**-9・10
052	141**SX**-052			**K**-10
053	141**SX**-053	弥生土器片		**L**-10
054	141**SX**-054			**L**-10
055	141**SX**-055	弥生土器片		**L**-10
056	141**SX**-056	東北部九州系甕底部片、東北部九州系甕口縁部片、下城式壺片		**L**-10
057	141**SX**-057	弥生土器片		**L**-10
058	141**SX**-058			**L**-10
059	141**SX**-059			**L**-10
060	141**SX**-060	壺口縁部片、弥生土器片		**M**-10
061	141**SX**-061	東北部九州系甕底部、弥生土器片		**M**-10

第76表　遺構一覧表②

S番号	遺構番号	遺物・その他	時期	地区
062	141**SX**-062	磨消縄文土器片、下城式壺、下城式甕口縁部片		**K**-12
063	141**SX**-063	弥生土器片		**K**・**L**-12
064	141**SX**-064	台付鉢		**L**-12
065	141**SX**-065	下城式甕口縁部片、東北部九州系甕口縁部片		**L**-12
066	141**SX**-066	下城式甕口縁部片		**L**-12
067	141**SX**-067			**L**-12
068	141**SX**-068	弥生土器片		**L**-12・13
069	141**SX**-069			**M**-12
070	141**SX**-070	下城式甕口縁部片、東北部九州系甕口縁部片		**L**・**M**-12
071	141**SX**-071	弥生土器片		**M**-12
072	141**SX**-072	弥生土器片		**M**-13
073	141**SX**-073	弥生土器片		**M**-12
074	141**SX**-074	弥生土器片		**M**-12
075	141**SX**-075	弥生土器片		**M**-12
076	141**SX**-076	弥生土器片		**M**-13
077	141**SX**-077	弥生土器片		**K**-12
078	141**SX**-078			**K**・**L**-12
079	141**SX**-079	石器		**K**-12
080	141**SX**-080			**K**・**L**-12
081	141**SX**-081			**L**-12
082	141**SX**-082			**L**-12
083	141**SX**-083			**L**-11
084	141**SX**-084			**K**-11
085	141**SX**-085			**L**-11
086	141**SX**-086			**M**-11
087	141**SX**-087			**K**-13
088	141**SX**-088			**L**-13
089	141**SX**-089	弥生土器片		**K**-11
090	141**SX**-090	台形状突帯		**L**-12
091	141**SX**-091	欠番		
092	141**SX**-092	弥生壺片、下城式甕片、下城式壺胴部片		**L**-12・13
093	141**SX**-093	東北部九州系甕口縁部片、下城式甕口縁部片		**L**-13
094	141**SX**-094			**L**-13
095	141**SX**-095	弥生土器片、刻目突帯	弥生中期	**M**-12
096	141**SX**-096	弥生土器片		**M**-12
097	141**SX**-097	弥生土器片		**M**-12
098	141**SX**-098	弥生土器片		**M**-12
099	141**SX**-099	弥生土器片		**L**-11
100	141**SX**-100	弥生土器片		**L**-11
101	141**SX**-101	弥生土器片		**L**-11
102	141**SX**-102	弥生土器片		**M**-13
103	141**SX**-103	弥生土器片		**L**・**M**-13
104	141**SX**-104	弥生土器片		**M**-13
105	141**SX**-105	下城式壺片、東北部九州系甕口縁部片		**L**-13
106	141**SX**-106	弥生土器片		**L**-12・13
107	141**SX**-107	弥生土器片		**L**-12
108	141**SX**-108	壺口縁部片、東北部九州系甕口縁部片		**L**-12
109	141**SX**-109	弥生土器片		**M**-13
110	141**SX**-110	弥生土器片		**L**-13
111	141**SX**-111	弥生土器片		**L**-13
112	141**SX**-112			**L**-13
113	141**SX**-113	下城式甕口縁部片、東北部九州系甕口縁部片		**K**-13
114	141**SX**-114	弥生土器片		**L**-13
115	141**SX**-115	下城式壺片		**L**-13
116	141**SX**-116	弥生土器片		**L**-11
117	141**SX**-117	脚付鉢脚部、東北部九州系甕口縁部片		**M**-13
118	141**SX**-118			**L**-13
119	141**SX**-119	下城式甕口縁部片		**M**-13
120	141**SX**-120	東北部九州系甕口縁部片		**M**-13
121	141**SX**-121	弥生土器片		**L**-13
122	141**SX**-122	弥生土器片		**M**-11
123	141**SX**-123	弥生土器片		**M**-11
124	141**SX**-124	弥生土器片		**M**-11
125	141**SX**-125	東北部九州系甕口縁部片		**L**-10
126	141**SX**-126	弥生土器片		**L**-13

第77表　遺構一覧表③

番号	遺構番号	遺　物　・　そ　の　他	時　期	地区
127	141**SX**-127	弥生土器片		**L**-13
128	141**SX**-128	弥生土器片		**K**-11
129	141**SX**-129	欠番		
130	141**SX**-130	弥生土器片		**L**・**M**-13
131	141**SX**-131	弥生土器片		**L**-11
132	141**SX**-132	下城式甕口縁部片		**L**-10・11
133	141**SX**-133	下城式壺、下城式甕、東北部九州系甕口縁部片、鉢口縁部片		**L**-8・9
134	141**SX**-134	下城式壺片、下城式甕口縁部片		**L**-8
135	141**SX**-135	東北部九州系甕口縁部片		**K**・**L**-9
136	141**SX**-136			**M**-11・12
137	141**SX**-137			**M**-11・12
138	141**SX**-138			**M**-12
139	141**SX**-139	弥生土器片		**K**-11
140	141**SX**-140	壺、石器、東北部九州系甕口縁部片、下城式甕口縁部片、短頸壺		**K**・**L**-9
141	141**SX**-141	弥生土器片		**J**-10
142	141**SX**-142	弥生土器片		**K**-11
143	141**SX**-143	弥生土器片		**K**-11
144	141**SX**-144	弥生土器片、下城式甕口縁部片		**M**-12
145	141**SX**-145	弥生土器片		**M**-13
146	141**SX**-146	弥生土器片		**L**-13
147	141**SX**-147	下城式甕口縁部片、下城式甕底部		**K**・**L**-9
148	141**SX**-148	弥生土器片	**S**-153より新しい	**M**-10
149	141**SX**-149	下城式甕口縁部片		**M**-10
150	141**SX**-150	弥生土器片		**M**-12
151	141**SX**-151	甕底部、下城式甕口縁部片、東北部九州系甕底部片		**L**-9
152	141**SX**-152	東北部九州系甕口縁部片、下城式壺		**L**-8
153	141**SX**-153	弥生土器片	**S**-148より古い	**L**・**M**-10
154	141**SX**-154	下城式甕口縁部片		**M**-12
155	141**SX**-155	東北部九州系甕口縁部片		**L**-8
156	141**SX**-156	弥生土器片		**L**-8
157	141**SX**-157	弥生土器片		**K**・**L**-9
158	141**SX**-158	弥生土器片		**L**-9
159	141**SK**-159	下城式甕口縁部片、東北部九州系甕口縁部片、土器壺口縁部片、石器		**L**-8
160	141**SX**-160	弥生土器、東北部九州系甕底部		**L**-8
161	141**SX**-161	陶器、弥生土器片	近世	**J**-10
162	141**SX**-162	東北部九州系甕		**M**-11
163	141**SX**-163	弥生土器片		**L**-12
164	141**SX**-164			**M**-11
165	141**SX**-165	脚付鉢		**M**-10
000	141**SZ**-000	縄文土器片、陶磁器片		

（３）遺構と遺物

貯蔵穴遺構（SK）

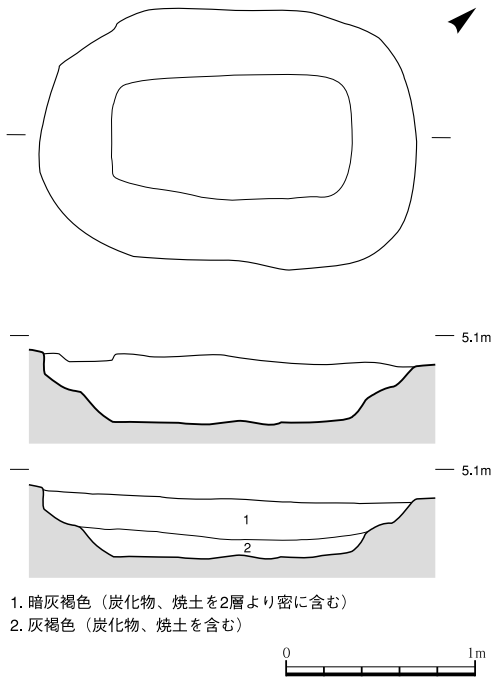
調査区内には、弥生時代中期に比定される遺物を内包する貯蔵穴と推定される土坑数基を確認することができる。その分布は調査区の南西部分から南側にかけて分布し、北側部分では希薄となっている。

141SK002（第285図）

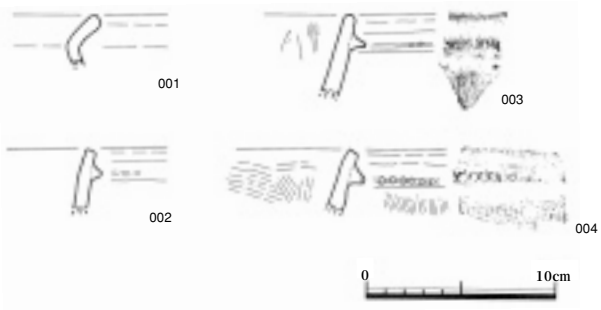
141SK002は調査区西側において検出されたもので、平面プランは2.0m×1.3m規模の隅丸長方形を呈している。中央部が最も深く、最深部検出面から0.3mの深度を有し、底面はフラットである。遺構内堆積埋土は二層に分層することができる。上下層とも灰褐色土を基調としており、両土層とも炭化物、焼土を含むが、含有量の上では、上層が下層を凌駕する。埋土の堆積様態は、水成作用などの自然営力によって堆積した状況は認められず、前述の焼土、炭化物のランダムな分布状況から、人為的な埋め戻しによる可能性も想定される。埋土から出土する遺物は、いずれも弥生時代中期の範疇で捉えられるものであり、遺構の帰属年代を示唆していると考えられる。

出土遺物（第286図）

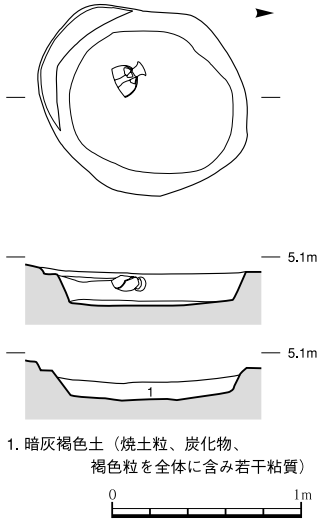
出土遺物には、東北部九州系甕の口縁部破片、下城式甕口縁部破片などがある。しかし、出土遺物量は概して多くない。001は東北部九州系の甕口縁部破片である。内外面とも淡黄褐色を呈し、ヨコナデにより仕上げられる。胎土中には角閃石、長石、金雲母粒を含み、器外面にはススの付着が認められる。002～004は下城式甕口縁部破片である。いずれも別の個体であり、複数個体の存在が想定される。002は外面・赤褐色、内面・橙褐色を呈する。器表面は風化が著しく、器面調整等は不明である。端部を面取りした口縁部に貼付突帯が貼付される。003は直立する口縁部の外面直下に断面三角形の刻目突帯を貼付し、口縁端部は丸く納められる。外面はタテ方向のハケ目とヨコナデにより調整される。内面は、ナデの後、部分的にヘラミガキが施される。外面にはススの付着が認められる。004もまた下城式甕の口縁部破片である。内外面とも淡茶橙色を呈し、器表面はハケ目により仕上げられる。内外面のハケ目工具原体は別のものが使用されており条線幅が異なっている。胎土中には石英、角閃石、長石粒などを含む。



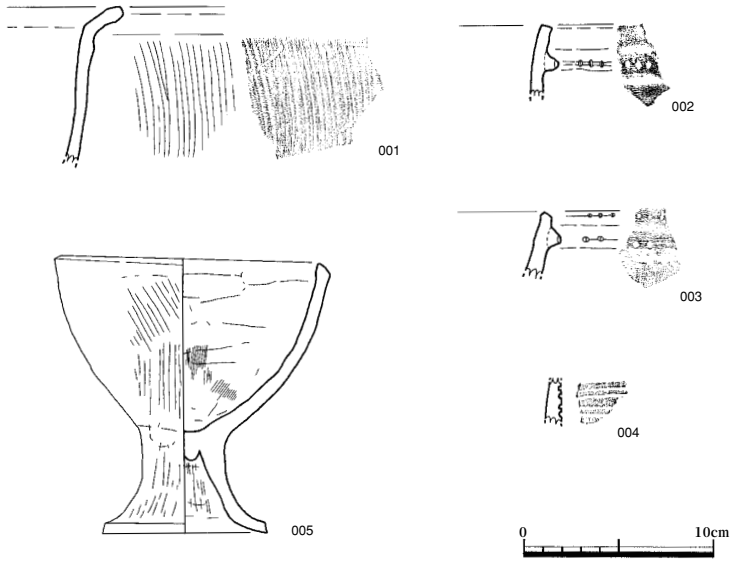
第285図　SK002遺構実測図　（1/40）



第286図　SK002出土遺物実測図　（1/4）



第287図　SK003遺構実測図　(1/40)



第288図　SK003出土遺物実測図　(1/4)

141SK003（第287図）

調査区のほぼ中央で確認した円形土坑である。検出面での径約1.0m、現存深度0.2m を測る。堆積埋土は焼土粒、炭化物、褐色粒子を含む若干粘性を帯びる土層によって構成され、埋土状況から、人為的な埋め戻し土である可能性が想定される。底面はフラットであり、底面から約0.1m のところに脚付鉢が遺棄されていた。埋め戻し途中に廃棄行為が行われたものと推定される。出土遺物は、この脚付鉢以外は小片が少量出土したのみであるが、いずれも弥生時代中期土器の属性を備えており、弥生時代中期に遺構が帰属する可能性を示している。

出土遺物（第288図）

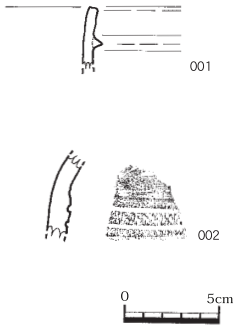
出土遺物には、弥生時代中期甕片、壺破片、脚付鉢がある。**001**は東北部九州系の甕口縁部破片である。器面は淡茶褐色～淡茶黒色を呈し、外面はタテ方向のハケ目、内面はナデによって調整される。胎土中には石英、角閃石、長石粒を含む。器内外面にはススの付着が認められる。**002**は下城式甕口縁部破片である。淡茶褐色を呈し、内外面ともナデにより仕上げられる。胎土中には石英、長石、橙色粒子などを含んでいる。**003**は下城式甕の口縁部破片である。**002**が貼付突帯部のみであったのに対し、**003**は口縁端部外面にも刻目を施す点で異なる。また、突帯位置に関しても**002**が口縁端部からある程度の幅をもっているが、**003**は端部直下に貼付される。器面は淡茶褐色～淡黄色を呈し、胎土中には石英、角閃石、長石粒を含んでいる。**004**は、いわゆる「下城式壺」と呼称される壺形土器の胴部破片である。二叉状工具により施文された重弧文の一部である。橙茶褐色～茶褐色を呈し、器内外面ともナデにより調整される。胎土中には石英、長石粒を含む。**005**は脚付鉢である。完存するものではなく、全体の約２割が欠損し、外面は風化する。口径14.4㎝、器高14.2～14.8㎝、脚部径8.5㎝を測る。内面・淡灰褐色、外面・淡橙褐色を呈する。外器面はハケ目・ナデ、内器面は工具ナデにより仕上げられる。

141SK015

114SK015は調査区北西角付近で検出した不定円形を呈する土坑である。検出面での径約1.1m、現存深度0.15m を測る。遺構底面はフラットであり、141SK002、003と類似の状況を示す。

出土遺物（第289図）

出土遺物は概して少なく、図化可能なものは、２点のみである。001は下城式甕の口縁部破片である。破片全面風化している。直立した口縁部の外器面下に断面三角形の刻目突帯が貼付される。淡黄褐色を呈し、内外面ともナデにより調整される。弥生時代中期に比定される。002は縄文後期の磨消縄文土器の胴部破片である。外面・茶褐色、内面・淡橙茶色を呈している。混入資料である。



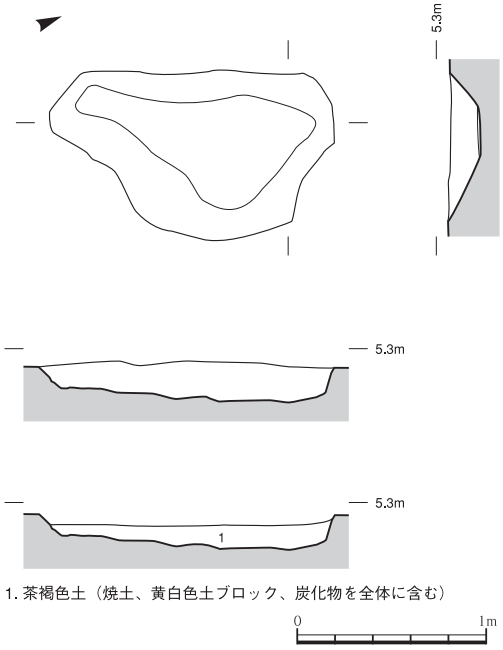
第289図　SK015出土遺物実測図
(1/4)

141SK 159（第290図）

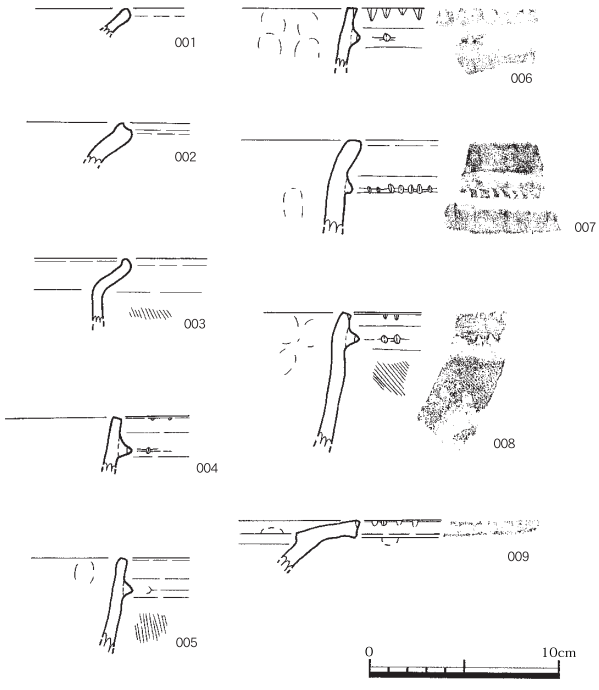
調査区南西部で確認した土坑である。西側を後出する他遺構に切られている。検出段階で確認できる南北軸長1.5m、現存深度0.2m を測る。底面は比較的フラットであり、堆積埋土は茶褐色土の単一土層により構成される。土層中には焼土、黄白色土ブロック、炭化物粒を含み、土層様相から人為的に埋め戻された可能性が考えられる。

出土遺物（第291・292図）

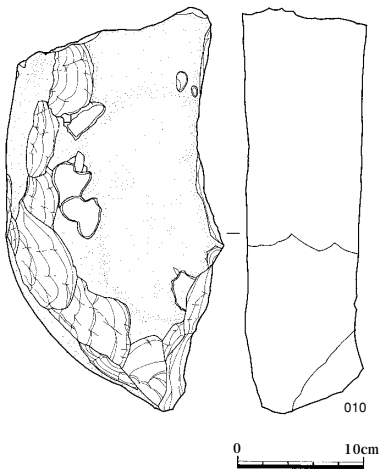
出土遺物はすべて破片化している。弥生時代中期に比定される東北部九州系甕と下城式甕、壺口縁部破片、石皿片などがある。001〜003は東北部九州系甕の口縁部破片である。001は口縁端部片であり、内外面ともヨコナデにより調整される。外面・淡黄褐色、内面・淡黒色を呈している。002は東



第290図　SK159遺構実測図　(1/40)



第291図　SK159出土遺物実測図①　(1/4)



第292図　SK159出土遺物実測図②
(1/3)

北部九州系の「く」字形口縁甕であり、001とは異なり、口縁端部を強いナデ調整により跳ね上げ状に強調する。淡黄褐色を呈し、胎土中には角閃石、長石粒を含む。003も東北部九州系の甕口縁部破片であり、淡橙褐色を呈する。胴部外器面にタテ方向のハケ目を施し、その他の部位についてはナデにより調整される。角閃石、長石粒を含む。004～008は下城式甕口縁部破片である。いずれも直立気味に立ち上がる口縁部の外器面の若干下がった位置に一条の刻目突帯を貼付するタイプのものである。004は橙褐色を呈し、内外面ともナデにより調整される。石英、長石粒を胎土中に内包する。005は淡茶褐色を呈する下城式甕の口縁部である。外面をタテ方向のハケ目により調整する。006も下城式甕の口縁部破片であるが、口縁端部外面に大振りな刻み目を施す点を大きな特徴とする。橙褐色を呈する。007は若干外反気味に屈曲する口縁部外面下位に一条の刻目突帯を貼付する下城式甕口縁部片である。内外面ともナデ調整主体で仕上げられる。008は口縁端部に若干の外反傾向を有し、比較的口縁端部外面に近い位置に突帯が貼付されるタイプの下城式甕口縁部である。内面・赤茶褐色、外面・茶褐色を呈し、内器面はナデ、外器面にはタテ方向のハケ目が施される。胎土中には石英、角閃石、長石、橙色粒子を含む。009は壺の口縁部破片である。口縁部内面に粘土を貼り付け肥厚気味に段を形成する。口唇端部には上下両端に刻目を施す。内面・淡黄茶色～黒色、外面・淡橙褐色を呈し、胎土中には石英、角閃石、長石粒を内包する。内外面ともナデにより調整される。石器には１点の石皿破片がある。010は現存する長軸長16.1㎝、短軸長8.6㎝、厚さ5.0㎝を測り、現存重量987.5g を測る。表裏面共に敲打によると考えられる窪みが認められる。上端、右側に割れによる欠損がみられる。また、表面には被熱によると考えられる剥離が観察される。以上の出土土器は、いずれも弥生時代中期の範疇に比定されるものである。

土坑（SX）

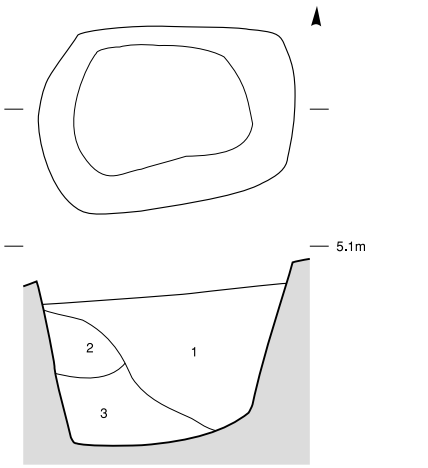
調査区内には、前項の貯蔵穴と推定されるもの以外に大小の土坑、ピット状の遺構などが分布する。その分布状況はおおむね貯蔵穴等の他遺構と同様の傾向を示し、調査区西側から南、南東エリアにかけて主に分布する状況を看取することができる。所産時期についてみると141SX001が古墳時代に比定される以外は、大部分が出土遺物から弥生時代中期に比定されるものと判断される。遺構の性格についても配置や遺物の出土状況から、様々なものが想定され特定するにいたってはいない。

141SX001（第293図）

調査区南壁際で検出した長軸0.35m、短軸0.25m を測る。楕円形を呈するピット状の遺構である。土層状況をみると、掘り返し痕跡を確認することができる。現存深度0.2m を測る。出土遺物には口縁部を欠損する須恵器𤭯１点が掘り返し埋土中から出土している。掘り返し埋土は黄白色土ブロックを含む暗灰褐色土であり、土層状況から人為的な埋め戻しによるものと判断される。

出土遺物（第294図）

001は口縁部から頸部が欠損した須恵器甕である。胴部の最大径9.8㎝を測る。焼成は良好で非常に硬質である。体部下面には回転ヘラケズリが施され、上半は回転ナデにより調整される。諸特徴から陶邑編年Ⅱ型式３段階にほぼ相当すると考えられ、６世紀中葉頃の所産と判断される。



1. 暗灰褐色土（黄白色土ブロック、焼土粒を含む）
2. 黄白色土ブロック
3. 暗灰褐色土（黄白色土ブロックを多量に含み若干粘質）

0　40cm

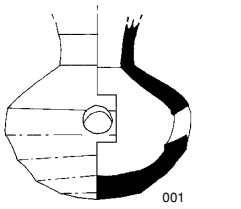
第293図　SX001平面・土層断面実測図（1/10）

141SX005

調査区西壁部分で検出した土坑である。遺構の大半が調査区の外に存するため、全容は不明である。確認できる部分での最深部の深さは検出面から0.3m を測る。

出土遺物（第295図）

出土遺物は小片ばかりで全形を知りうるものはない。図化可能なものは弥生時代中期に比定される東北部九州系甕２点、下城式甕２点の計４点である。001は淡黄褐色を呈する東北部九州系甕の口縁部破片である。口縁端部内面は強いヨコナデにより跳ね上げ気味に若干突出する。胎土中には石英、角閃石、長石粒を含む。002も001と同種の東北部九州系甕の口縁部片である。端部の突出が001よりも強い。器外面にススの付着が認められる。003・004は下城式甕口縁部である。003の外器面はタテ方向のハケ目により調整される。003の内面、及び004の内外面はナデにより仕上げられる。いずれの資料も弥生時代中期の範疇で捉えられるものである。



0　10cm

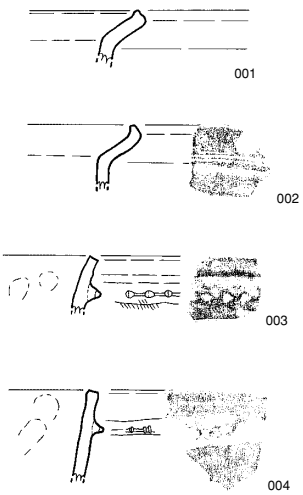
第294図　SX001出土遺物実測図　(1/4)

141SX006

141SX006は調査区北西部の壁際付近で検出したピット状の遺構である。平面プランは若干歪んだ円形を呈し、現存深度0.15m を測る。

出土遺物（第296図）

出土遺物には、「下城式壺形土器」と呼称される壺の胴部破片１点が出土している。001は半截竹管状の二叉状工具で重弧文を施文するもので、淡茶褐色を呈する。胎土中には石英、角閃石、長石を含み、内外面ともナデが施される。

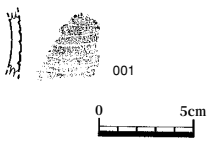


0　5cm

第295図　SX005出土遺物実測図　(1/4)

141SX007

141SX006の東側において確認した土坑状の遺構である。遺構北端は調査区外に展開し、東側部分は近年の撹乱穴により切られており欠失する。

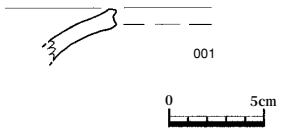


0　5cm

第296図　SX006出土遺物実測図　(1/4)

出土遺物（第297図）

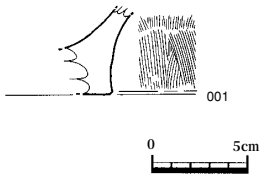
001は弥生時代中期に比定される東北部九州系甕の口縁部片である。内外面ともナデにより調整され、内面端部には強いヨコナデによる突出が認められる。淡茶褐色を呈する。



第297図　SX007出土遺物実測図　(1/4)

141SX009

141**SX**007に北辺を切られるピット状の遺構である。現状で確認される規模は径0.6**m** を測る。検出面からの深度は0.12**m** である。



第298図　SX009出土遺物実測図　(1/4)

出土遺物（第298図）

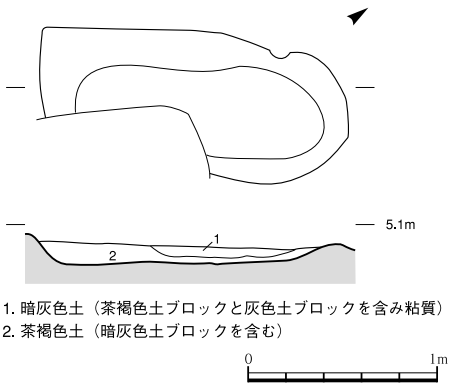
出土遺物は少なく、図化できたのは甕底部１点のみである。厚めの底部に底面からの立ちあがり部分までびっしりとタテ方向のハケ目が施される。下城式系の甕底部と推定される。

141SX017（第299図）

141**SK**015によって切られる不定形の土坑状遺構である。長軸1.6**m** を測り、短軸は0.8**m** の規模を有している。現存深度0.1**m** であり、上下２層の土層を確認することができた。上下層ともブロック土を比較的多く内包しており、人為的な埋め戻しによるものであると考えられる。出土遺物には弥生時代中期の壺、甕の破片が出土しており、当該遺構の構築年代を示唆している。

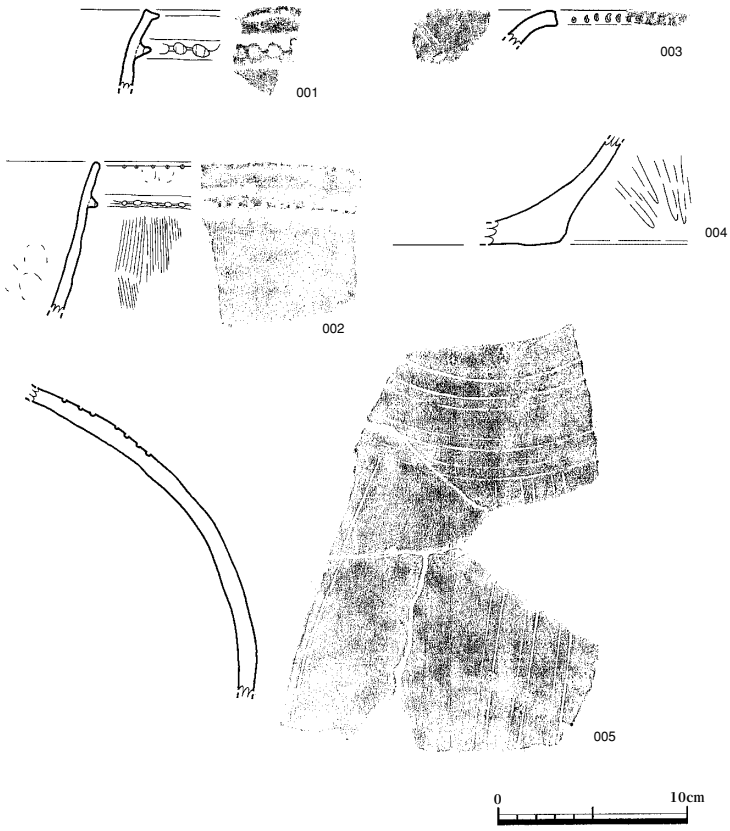
出土遺物（第300図）

001・002は下城式甕形土器の口縁部破片である。いずれも直立外反気味に立ちあがる口縁部の外器面下に刻目突帯を施したものであるが、口縁部の処理、突帯上の刻みのいずれも概して荒く、雑な印象を受ける。**003～005**は壺の破片である。胎土の状況から同一個体



1. 暗灰色土（茶褐色土ブロックと灰色土ブロックを含み粘質）
2. 茶褐色土（暗灰色土ブロックを含む）

第299図　SX017平面・土層断面実測図　(1/40)



第300図　SX017出土遺物実測図　(1/4)

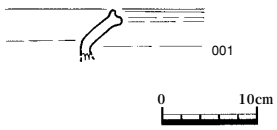
である可能性が高い。003は壺の口縁部破片である。外方へ展開する口縁形状を呈し、口唇部には竹管状の工具による刺突文が施され、口縁内面には半截竹管状の工具により山形文が施文される。淡茶橙色を呈し、内外面ともナデにより調整される。004は底部破片である。底部全周の約１／４が遺存する。器外面には黒斑が認められ、淡黄褐色～黒色を呈する。内面はナデ、外面はタテ方向のハケ目調整の後、ミガキが施される。005は胴部破片である。半截竹管状の二叉状工具により施文される。色調は淡黄褐色～淡黒色を呈し、外面はハケ目調整後、文様が施文され最終調整としてミガキが施される。３点とも石英、角閃石、長石を含むが、特に石英粒の含有が目立つ。さらに、005に関しては、結晶片岩片の存在が指摘され、大分平野における鉱石分布から、大野川以東の海岸部で生産された可能性が示唆される。以上の資料はいずれも弥生時代中期に比定されるものである。

141SX020

ピット状の形状を示す遺構である。平面形は円形を呈しており、径0.6m を測る。

出土遺物（第301図）

弥生時代中期に比定される東北部九州系甕口縁部破片１点が出土している。淡黄褐色を呈し、内外面ともナデにより調整される。



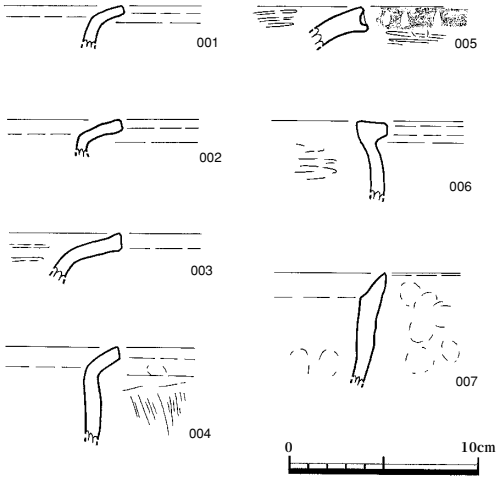
第301図　SX020出土遺物実測図　(1/4)

141SX021

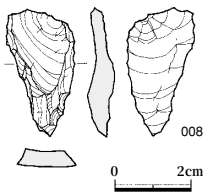
141SX020の西側に隣接する形で検出した長楕円形状を呈する遺構である。長軸長約4.0m を測る。遺構規模の割に出土遺物量は多く、図化可能のもので８点の資料がある。

出土遺物（第302・303図）

001～004は東北部九州系甕の口縁部破片である。口縁内面外端部が強調されるタイプのものは003のみであり、他の資料は口唇部を含む上下端について同時にナデ仕上げされている。いずれも淡黄褐色あるいは淡橙褐色を呈し、器表面は基本的にナデにより調整される。005は壺の口縁部破片である。茶褐色を呈し、器面はナデ調整の後に最終調整としてミガキが施される。口唇部には串状の工具による刺突文が施文される。006は内湾気味の口縁部外面に粘土帯を貼付し断面台形状の口縁部を形成する。資料下位が欠損しているため、全体形状、器種等詳細については不明な部分が多いが、弥生時代中期の大分平野海岸部に分布する方形透かしをもつ脚部を有する台付鉢の口縁部破片である可能性が高い。器表面は風化のため確認が困難となっているが、胎土は淡橙褐色を呈し、外面の一部に赤色塗彩と想定される痕跡を確認することができる。007は口縁部が舌状に立ちあ



第302図　SX021出土遺物実測図①　(1/4)



第303図　SX021出土遺物実測図②　(1/3)

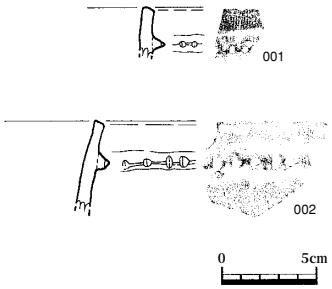
がる鉢の口縁部破片である。内面・暗茶褐色、外面・黒茶色を呈し、器外面にはススの付着が認められる。008は姫島産黒曜石製の剥片である。現存重量3.2g を測る。以上の資料の大部分は弥生時代中期に比定されるものであるが、007のみは、現状では時期比定を行えない。

141SX029

調査区南西部分の南壁に接する部分で検出した円形を呈すると考えられる土坑状の遺構である。遺構の大半は調査区外に存する。

出土遺物（第304図）

２点の下城式甕の口縁部破片を図化することができた。001は淡黄褐色を呈する下城式甕の口縁部破片である。胎土中に石英、角閃石、長石粒を含み、器表面は内外ともナデにより調整される。002もまた下城式甕形土器である。001と同じく淡黄褐色を呈し、ナデ調整により器面を調整する。口縁端部はヨコナデにより調整され、面取りがなされる。



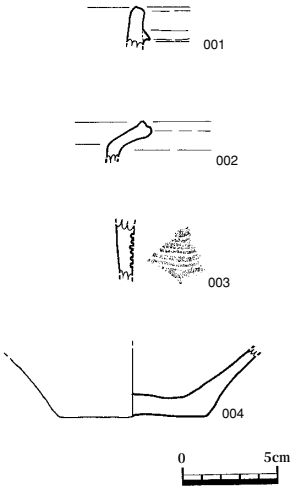
第304図　SX029出土遺物実測図　(1/4)

141SX032

141SX029の北側約１m の地点で確認した土坑である。長楕円形を呈し、遺構規模、埋土の状況などが141SX017に類似する。長軸長1.7m、短軸長1.0m、現存深度0.1m を測る。

出土遺物（第305図）

弥生時代中期に比定される土器資料が出土している。いずれも小片化した破片資料である。下城式甕口縁部片、東北部九州系甕口縁部片、壺胴部破片、壺底部破片などが出土している。001は下城式甕の口縁部破片である。器表面は風化のため磨耗している。淡黄褐色を呈している。002は東北部九州系甕の口縁部破片である。淡黄褐色を呈する。口縁端部は肥厚気味に整形され強いヨコナデが施される。003は淡黄褐色を呈する下城式壺の胴部破片である。半截竹管状の二叉状工具により重弧文が施文されている。004は壺の底部破片である、しっかりとした平底をなし淡黄褐色を呈している。



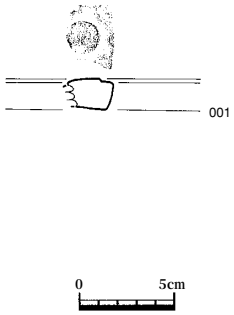
第305図　SX032出土遺物実測図　(1/4)

141SX060

径0.4m を測るピット状の遺構である。現存深度0.15m を測る。

出土遺物（第306図）

001は円形浮文を口縁部上端に貼付する壺口縁部破片である。橙褐色を呈し、ヨコナデにより調整される。口縁端部は面取りされ、肥厚気味に整形され、口縁部上面には平坦面が形成される。弥生時代中期後半～後期初頭に大分平野部から大野川流域に分布する壺口縁部である。



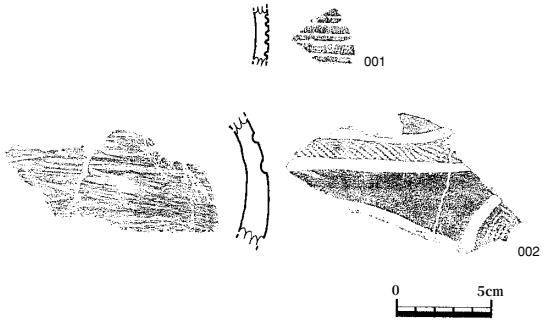
第306図　SX060出土遺物実測図
(1/4)

141SX062

調査区の中央やや東寄りの地点において検出した径0.55m の円形を呈するピット状の遺構である。

出土遺物（第307図）

弥生時代中期に比定される下城式壺の胴部片と縄文後期の磨消縄文系土器の胴部片が出土している。**001**は下城式壺の胴部片であり、二叉状工具により重弧文が施文される。淡黄褐色を呈する。胎土中には石英、角閃石粒などを含むが、特徴的なものとして、緑色結晶片岩の細片を含有する点があげられる。**002**は縄文後期に比定される磨消縄文土器鉢の胴部破片である。外面が磨かれ沈線間には縄文が充填される。内面はヨコ方向の巻貝条痕によって調整される。



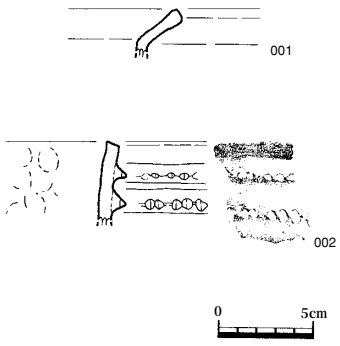
第307図　SX062出土遺物実測図　(1/4)

141SX065

141**SX**062の南側で検出されたピット状の遺構である。径0.6m、現存深度0.2m を測る。東北部九州系甕と下城式甕の口縁部片が出土している。

出土遺物（第308図）

001は東北部九州系甕の口縁部片である。淡黄褐色を呈し、内外面ともヨコナデ調整により仕上げられる。**002**は下城式甕の口縁部破片であり、二条の刻目突帯を口縁部下位に貼付する。外面・暗茶褐色、内面・淡茶褐色を呈し器面はナデにより調整させる。口縁端部は面取りされ断面形は方形を呈する。



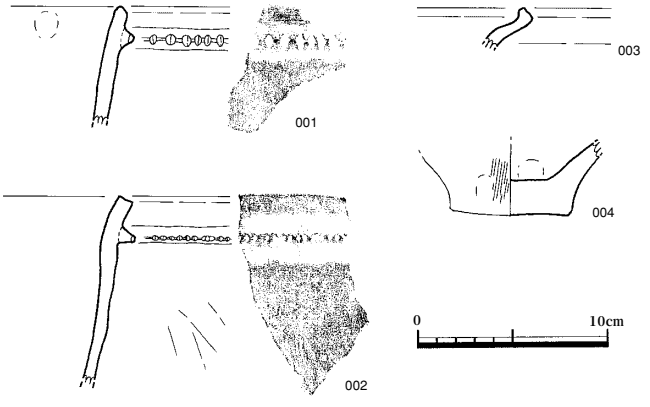
第308図　SX065出土遺物実測図　(1/4)

141SX070

調査区内の南東部分で検出されたピット状の遺構であり、平面プランは円形を呈する。径0.6m、検出面からの深さ約0.2m を測る。

出土遺物（第309図）

下城式甕の口縁部片、底部片、東北部九州系甕の口縁部が出土している。**001**は下城式甕の口縁部破片であり、口縁部外面下位に一条の刻目突帯を貼付する。直立気味に立ちあがる口縁端部は舌状に整形され、突帯に施される刻目は大振りである。外面・赤褐色、内面・淡橙褐色を呈する。**002**にもまた下城式甕の口縁部であるが、**001**とは口縁部形状が異なり、端部は面取



第309図　SX070出土遺物実測図　(1/4)

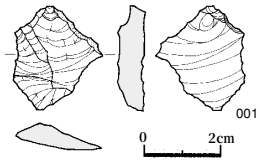
りされる。外面・淡茶褐色、内面・淡黄褐色を呈し、胎土中には石英、角閃石、長石、橙色粒子を含む。003は東北部九州系甕の口縁部片である。口縁端部上面を跳ね上げ状に強調する。強いヨコナデが施される。004は甕底部破片である。底径6.0～6.4㎝を測り、淡橙褐色を呈し、胎土中には石英、角閃石、長石、橙色粒子などを含む。外面にはタテ方向のハケ目調整がみられ、胎土、色調などの特徴から下城タイプの甕の底部であると考えられる。これら４点はいずれも弥生時代中期に比定されるものである。

141SX079

141SX062の西側地点で検出したピット状の遺構であり、径0.3m、深さ0.15m を測る。

出土遺物（第310図）

001は姫島産黒曜石製の剥片である。2.8㎝×2.4㎝、厚さ0.7㎝を測り、現存重量2.9g である。



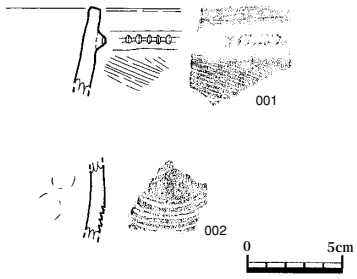
第310図　SX079出土遺物実測図　(1/3)

141SX092

調査区東南部で検出した土坑状の遺構である。新出の遺構が多数重複するため、全容の把握は困難である。遺存部分で確認される規模は1.3m×1.1m であり、深さは最も深い部分で0.1m を測る。

出土遺物（第311図）

下城式甕と壺破片が出土している。001は下城式甕口縁部破片であり、口縁部外面下位に一条の刻目突帯が貼付される。口縁端部から突帯までの間はヨコナデが施され、外器面の突帯下位は斜め方向のハケ目により調整される。橙褐色を呈している。002は下城式壺の胴部破片である。二叉状工具により重弧文が施文され、内外面ともナデにより仕上げられる。



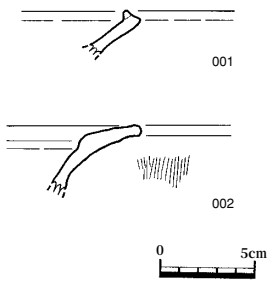
第311図　SX092出土遺物実測図　(1/4)

141SX108

141SX092と切りあい関係を有するピット状の遺構である。141SX092を切る関係にあり、新出のものであると判断される。平面プランは楕円形を呈し、長軸0.55m、短軸0.35m を測る。

出土遺物（第312図）

001は東北部九州系甕の口縁部破片である。淡橙褐色を呈し、内外面とも強いヨコナデ調整が施される。口縁端部内面上端は粘土帯が貼付され、跳ね上げ状に強調される。002は淡黄褐色を呈する壺口縁部破片である。外方へ大きく開く口縁部内面には肥厚気味に粘土が貼付され、段を形成している。外器面はハケ目により調整される。



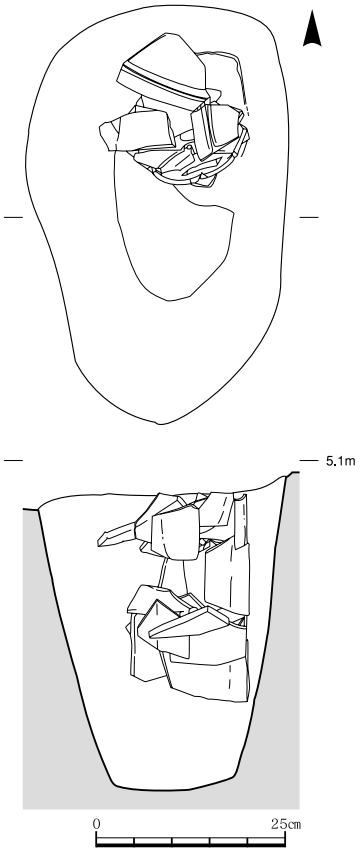
第312図　SX108出土遺物実測図　(1/4)

141SX113（第313図）

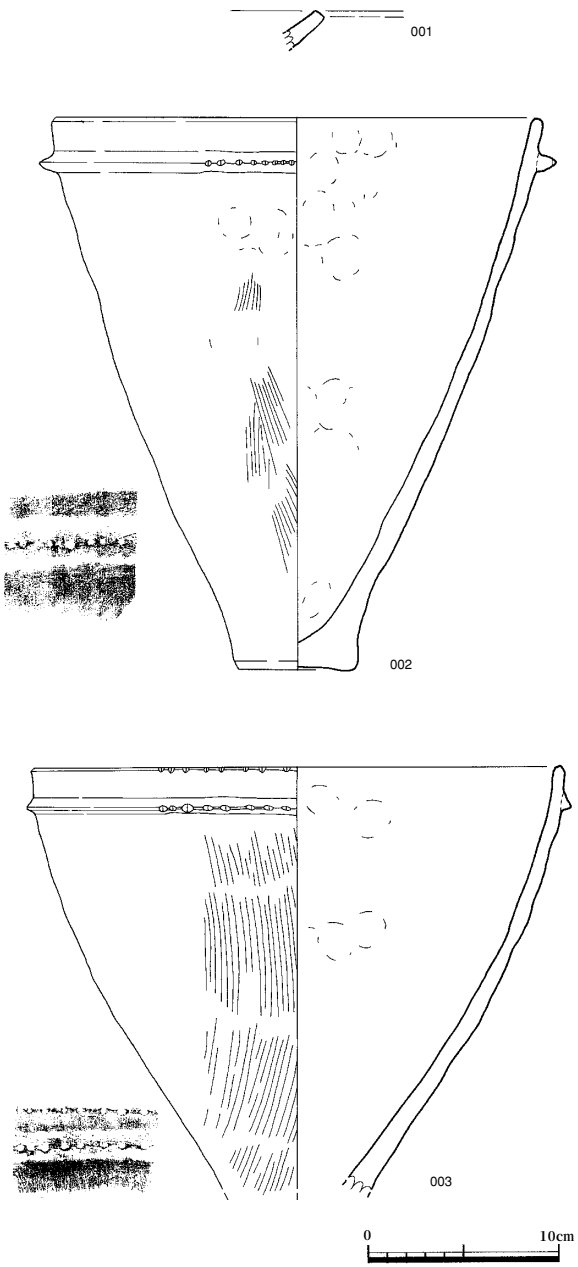
141SX113は、調査区東壁付近で検出した土坑である。0.55m×0.35m の平面規模を有し、現状での深さ0.4m を測る。遺構内埋土は炭化物、褐色粒子を僅かに含む暗灰褐色土の単一土層であり、埋土内の検出面から土坑中位までに破砕された甕破片が折り重なるように埋置されている状況を確認した。これらの出土破片を接合した結果、二個体分の下城式甕であることが判明した。このような甕破片の埋置がどのような理由によるものなのか、その具体的な目的を現段階で明示することはできないが、出土状況、遺構規模、埋土内の位置関係から単なる廃棄行為に伴うものとは考え難い。

出土遺物（第314図）

001は埋土内から出土した東北部九州系甕の口縁部破片である。淡黄褐色を呈しており、端部付近は強いナデにより調整される。002、003は破片の状態で埋置されていた下城式甕である。002は底部は完存するが、上半が約１/２遺存し、図上復元が可能な資料であり、復元口径25.4cm、器高29.2cm、底径6.1cmを測る。全体プロポーションは底部から直線的に立ちあがる形状を示す。内外面とも淡黄褐色～暗茶褐色を呈し、胎土中には角閃石、長石、橙色粒子を含む。内器面は丁寧なナデにより仕上げられ、外器面はタテ方向のハケ目により調整される。003は全体の約１/３が遺存する



第313図　SX113平面・断面実測図　(1/10)

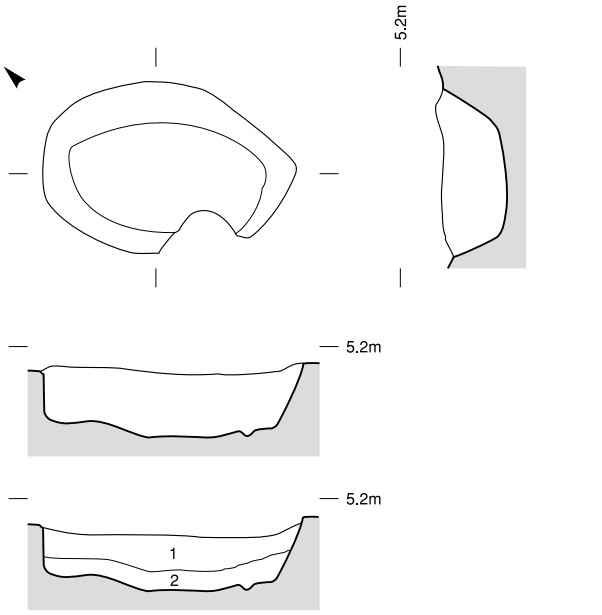


第314図　SX113出土遺物実測図　(1/4)

下城式甕であり、復元口径27.8㎝を測る。淡橙褐色～暗茶褐色を呈し、外面にはタテ方向のハケ目調整が施される。003は口縁部端部に刻目を施文するなど002に比べ若干古相の属性を具備している。また、002・003両者ともに器内外面にススの付着が認められる。これら３点はいずれも弥生時代中期に比定されるものである。

141SX133（第315図）

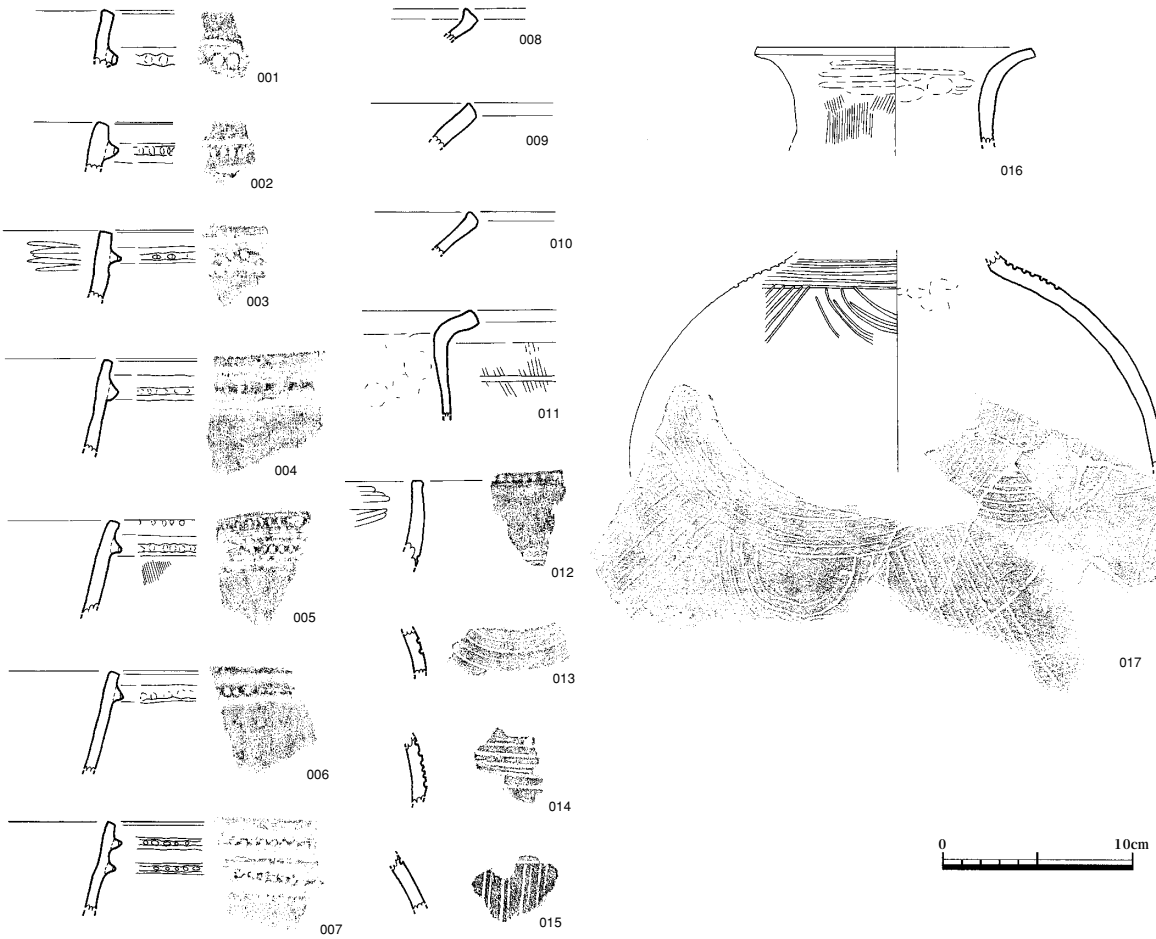
141SX032の北側に軸を揃えて検出した土坑状遺構である。平面プランは楕円形状を呈しており、長軸1.3m、短軸0.9m、現存深度0.3mを測る。遺構内堆積埋土は上下二層に分層することが可能であるが、両土層ともブロック土を内包しており、人為的な埋め戻し行為による可能性が指摘される。



1. 灰茶褐色土（褐色粒子僅かに含む、暗灰色ブロック含む、やや粘質、締りあり）
2. 淡灰褐色土（暗灰色ブロック含む、粘性強、締りあり、褐色粒子僅かに含む、土器片含む、砂質土を多く含む）

0　1m

第315図　SX133遺構実測図　(1/40)



第316図　SX133出土遺物実測図　(1/4)

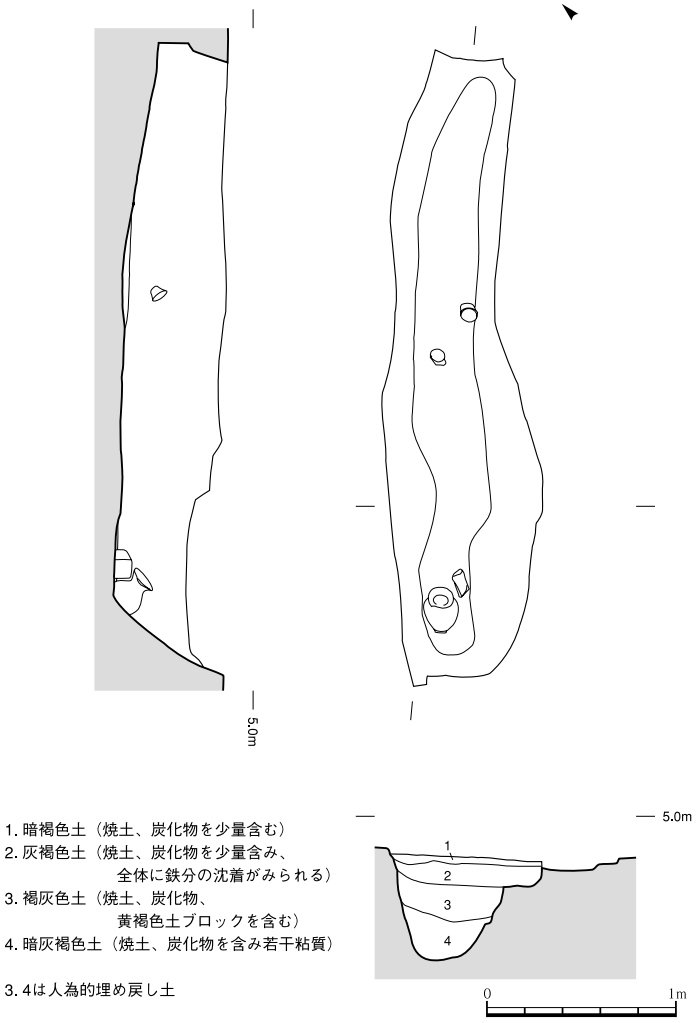
出土遺物（第316図）

出土遺物には、下城式甕口縁部破片、東北部九州系甕破片、下城式壺破片などがある。**001〜007**は下城式甕の口縁部破片である。数種類のタイプがあり、口縁外面下に一条の刻目突帯を貼付するもの（**001〜006**）、二条の刻目突帯を有するもの（**007**）があり、さらに前者は、口縁端部に刻みを施すもの（**005**）とそれ以外のものに分別することが可能である。**001**は淡黄褐色を呈する下城式口縁部であり、内外面ともナデにより調整される。**002**も**001**と同様のタイプの甕口縁部片である。淡橙褐色を呈する。**003**は外面・暗茶褐色、内面・茶褐色を呈する。外器面はヨコナデにより調整され、内器面は最終調整としてミガキが施される。**004**は他の資料に比べ器表面は風化のため摩滅する。外面・淡赤橙色、内面・赤橙色を呈し、胎土中には石英、角閃石、長石、橙色粒子を含む。**005**は当該遺構から出土している一条の刻目突帯を有する下城式甕の中で唯一、口縁端部に刻みをもつ資料である。外面・ナデ調整後ハケ目により調整される。**006**は内外器面ともナデにより調整され、外面・淡赤橙色〜淡黄白色、内面・淡赤橙色を呈する。**007**は二条の刻目突帯を有する下城式甕の口縁部破片である。内外面ともナデにより調整される。**008〜011**は東北部九州系甕口縁部破片である。**008**は強いヨコナデにより口縁端部内面を跳ね上げ状に強調する。内外面ともナデにより調整される。**009**もまた内外面ナデ調整により仕上げられる東北部九州系の甕口縁部である。淡黄白色を呈する。**010**は口縁端部を拡張気味に成形する東北部九州系甕口縁部破片である。内外器面ともナデにより仕上げられ、外面・淡黄褐色、内面・黄褐色を呈する。胎土中には石英、角閃石、長石、橙色粒子を含む。**011**は東北部九州系甕の口縁部から胴部破片である。口縁端部は拡張気味に整形されており、外端部は丸味を帯びた状況で仕上げられる。胴部は口縁端部と比較し、極端に薄く、外器面はタテ方向のハケ目により調整される。**012**は素口縁の鉢口縁部である。口縁部外端部に串状の工具により刺突連点文が施される。内外面とも淡橙褐色を呈し、外器面はナデ調整、内器面はミガキにより仕上げられる。胎土中には石英、角閃石、長石、橙色粒子を含む。**013〜017**は下城式壺形土器破片である。**013〜015**は胴部破片である。いずれも半截竹管状の二叉状工具により平行線文、重弧文が施文される。内外面の調整はナデによるものである。**016**は壺口縁部片である。口縁部分で約１／２が遺存し、復元口径14.6㎝を測る。内外面とも橙褐色〜暗茶褐色を呈し、外器面にはハケ目調整の後、最終調整としてヨコ方向のヘラミガキが施される。最終調整としてのヘラミガキは口縁内面にも認められる。**017**は頸部から胴部上半の破片資料である。複数の破片が接合し、最終的に拓影のような形状へと復元することができた。平行線文とタテ沈線と重弧文の組み合わせにより、いわゆる下城式壺に通有な文様構成をなす。

141SX140（第317図）

141**SX**140は、調査区西壁際で検出した長土坑である。遺構は同一地点で複数回の掘り返しが行われており、141**SX**140は、これらの中でも最も古い段階に位置付けることができるものである。したがって大部分は141**SX**147と重複しており、検出面から設定した堆積土層観察用ベルトの上層に141**SX**147の埋土を確認することができる。第317図に示す土層断面図の第１層、第２層は141**SX**147の埋土に相当し、141**SX**140内の堆積埋土は第３層、第４層が相当する。遺構の両端は新出する遺構によって切られているため、正確な規模は不明だが、現状で約3.3m、最大幅0.8m、現存深度0.6m を測る。堆積埋土は上下二層に分層することができ、上層は焼土粒、炭化物、黄褐色土ブロックを含む

褐灰色土であり、下層は暗灰褐色土である。本層は上層と同じく、焼土粒、炭化物等を含むものの、若干の粘性を帯びている点で上層とは大きく異なる。両層とも自然堆積によるものではなく、人為的に埋め戻された状況を示している。土坑の床面はフラットであり、短軸の断面は**U**字形を呈する。主軸は**N**−40°−**E**の方向を示し、底面南側の壁面の立ち上がり部分には完形の壺が埋置される。遺構の具体的な性格については不明だが、141**SX**140をはじめとする調査区西側には同一方位を意識した遺構群が重複するように構築されており、長土坑形態を呈するものが多い点をひとつの特徴とする。このような点から、これらが当該地点における何らかの区画を意図した遺構群である可能性も想定される。

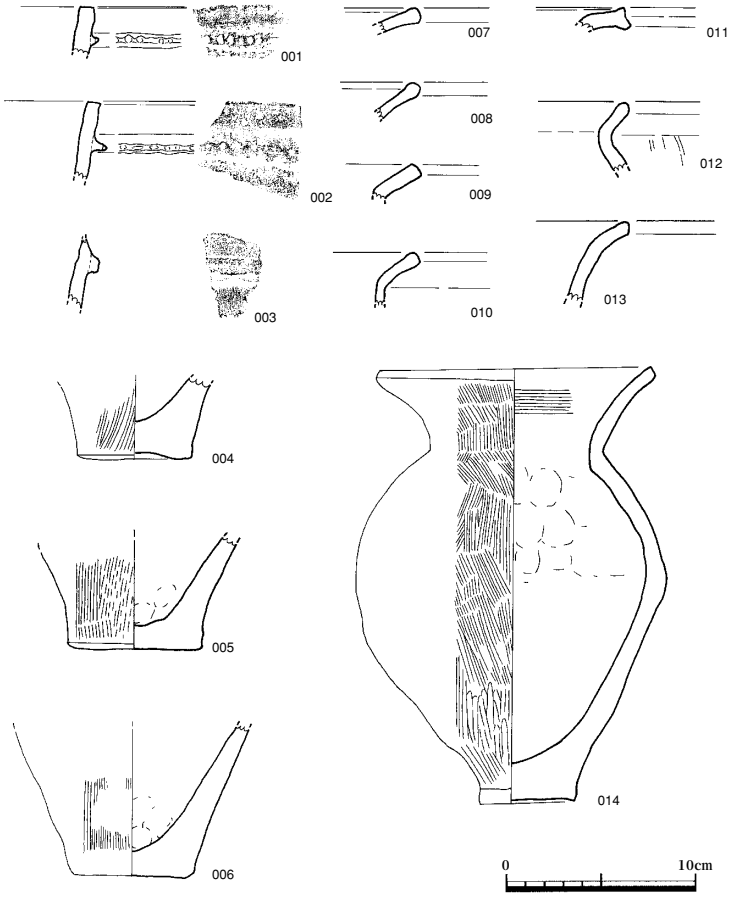


第317図　SX140遺構実測図　(1/40)

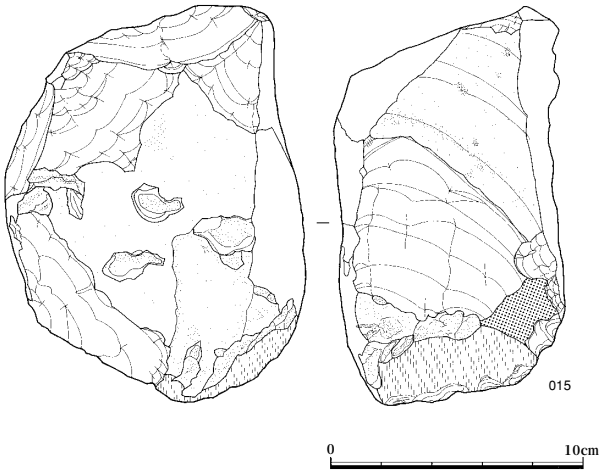
出土遺物（第318・319図）

出土遺物には、下城式甕、東北部九州系甕、壺などがある。**001〜003**は下城式甕の口縁部破片である。**001**はほぼ直立する口縁部外面下位に低平な刻目突帯を貼付する。内外面ともナデにより仕上げられる。**002**は外面・淡茶褐色〜黒色、内面・淡茶褐色を呈し、胎土中には石英、角閃石、長石、橙色粒子を内包する。**003**も下城式甕の口縁部破片であるが、器面は風化のため荒れており、器面の調整観察は困難である。かろうじて外器面にヨコナデの痕跡を認めることができるが、内器面調整は不明である。内外面とも暗黄褐色を呈し、胎土中には石英、角閃石、橙色粒子を含む。**004〜006**は甕の底部破片である。いずれも底部から外方へ立ちあがるタイプのものであり、胎土状況、底部接地面付近までタテ方向のハケ目調整がなされる点から、下城式甕の底部になるものと推定される。**007〜010**は東北部九州系甕の口縁部破片である。口縁端部形状に微細な違いをみせるものの、口縁端部に強いナデを施し、端部を強調するという点は共通する。**007**、**008**、**009**は淡黄白色を呈し、胎土中には石英、角閃石、長石、橙色粒子を含む。**010**は外面・茶褐色、内面・淡灰褐色〜茶褐色を呈する。胎土中には石英、角閃石、長石粒、橙色粒子を含む。**011**は口縁部を内面を肥厚させ、下端を下方へ拡張させる壺の口縁部破片である。内外面との淡茶褐色を呈し、器面はヨコナデにより調整される。胎土中には石英、角閃石、橙色粒子を含む。**012**は口縁部「く」字形を呈する短頸壺の口縁部破片である。内外面とも淡黄白色を呈し、外器面にはハケ目が認められる。**013**は外方へ大きく開く壺の口縁部破片である。淡橙褐色を呈し、内外面ともナデによる器面調整が施される。**014**は遺構内に埋置されていた壺である。完存品である。口径13.7㎝、器高23.1㎝、胴部最大径16.2㎝、底径4.9㎝を測る。外

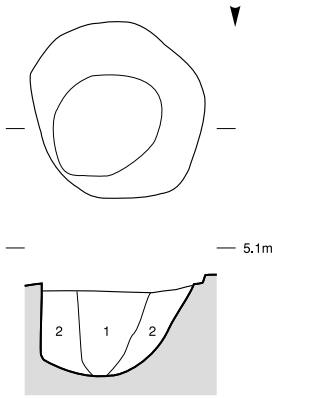
面は、ハケ目、ナデ、ヘラミガキにより調整され、内面は、口縁部付近にヨコ方向のハケ目が認められるが、基本的にはナデにより調整される。内外面とも淡黄褐色を呈し、胎土中には石英、角閃石、長石、橙色粒子を含む。器外面に黒斑が認められる。**015**は石皿の破片と推定されるもので、現存長15.8㎝、厚さ11.9㎝、幅9.2㎝を測り、現存重量1820**g**を有する。中央部に磨面が認められる。裏面及び下端は割れ面である。



第318図　SX140出土遺物実測図①　(1/4)



第319図　SX140出土遺物実測図②　(1/3)



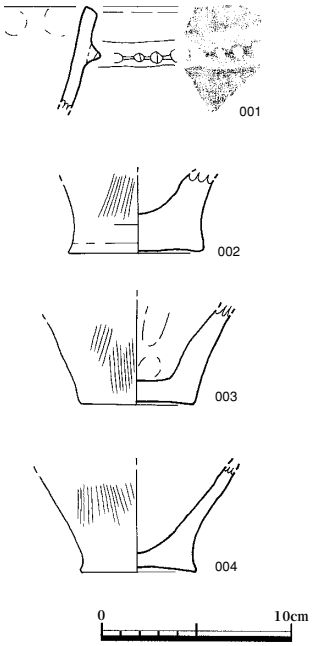
第320図　SX151平面・土層断面実測図　(1/20)

141SX151（第320図）

調査区南西部、144**SX**133と切りあい関係をもって確認された柱穴状の遺構である。円形プランを呈する遺構径は0.45**m**を、現存深度0.25**m**を測る。埋土は柱痕部と裏込め部に相当する土層に二分される。柱痕部と推定される土層には柱裏込め部のものと同様の暗黄褐色砂質土ブロックを内包しており、柱穴であるとすれば、中央に遺存する土層は柱抜き取り後の痕跡であると考えられる。

出土遺物（第321図）

出土遺物には、下城式甕口縁部片、３点の底部片が出土している。**001**は下城式甕の口縁部片である。外面・淡橙褐色、内面・淡茶褐色を呈する。**002**は甕底部破片であり、淡黄褐色を呈する。底径6.6㎝を測り、底部の接地面は若干裾部が外方向へ開き、タテ方向のハケ目の後にヨコ方向のナデにより調整される。このような形態的な特徴は**004**とも共通するものであり、これらの諸特徴から東北部九州系甕の底部と判断される。これに対して、**003**は外面・赤褐色～暗茶褐色を呈し、外器面には接地面までタテ方向のハケ目が認められ、形態的にも底部から上方に直線的に延びる形状を示しており、明らかに**002・004**とは特徴を異にしている。このような特徴は下城式甕に通有なものであり、**003**は下城式甕の底部であると判断される。

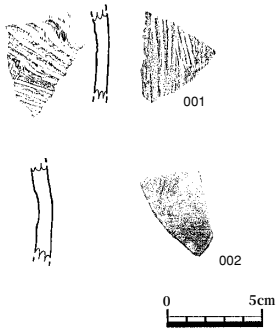


第321図　SX151出土遺物実測図　(1/4)

その他遺物（SZ）

その他の遺物（第322図）

第322図には、表土など遺構外から出土した特徴的な遺物を２点掲載した。**001**は内外面とも巻貝条痕によって調整された縄文土器破片である。外面・茶褐色、内面・黒色を呈し、胎土中には角閃石、長石粒を含む。縄文時代後期の粗製深鉢であろうか。**002**は淡黄褐色の胎土に薄青緑色の釉が掛けられた陶器の破片である。小破片のため器種などの詳細は不明であるが、胎土、釉薬の状況から、瀬戸産のものである可能性が考えられる。



第322図　表土出土遺物実測図　(1/4)

（４）小結

今次の調査では、弥生時代中期の集落の一端を確認することができた。文中でも触れたように、古墳時代に比定される遺物を内包する遺構を１基確認した以外、その他の遺構から出土する遺物はいずれも弥生時代中期の範疇で捉えられるものである。埋土内等に小量の縄文土器を内包することから、近隣に遺構、あるいは包含層などの存在が想定されるが、本調査区では確認できていない。したがって、検出遺構の大半の部分は弥生時代中期のものと考えられよう。このような点から今回確認することのできた遺構分布の偏在、すなわち北側部分での遺構密度の希薄な状況というのは、ストレートに弥生時代中期の様相を示していると考えて大過ないと考えられる。

調査では、貯蔵穴と考えられる土坑、何らかの区画を示すと想定される長土坑などを検出しているが、住居などの直接的に生活痕跡を示す遺構の存在は確認されていない。土坑の遺存状況等を考慮すると、第６層、第７層の整地と考えられる土層の敷設に伴い検出面の上位はある程度の削平を受けて

いると考えられ、これにより竪穴住居などは欠失していることも想定される。しかしながら柱穴の配置等からも住居等の存在を傍証する状況は認められておらず、従前より存在していなかった可能性は高いと推定される。上記の点から弥生時代中期の当該地点の状況は、集落の端部であったことが想定される。こういった点から141SX140をはじめとするある程度の方向性を指向し、区画意図を想起させる遺構の存在は、こういった空間位置との関連において理解すべきなのかも知れない。今後の周辺調査の成果と合わせて検討する必要があろう。

さて、次に今回確認した集落跡の存続年代を検討する。多くの遺構から出土した土器資料の大半は弥生時代中期のものであり、集落存続の時間幅もほぼこの範囲で考えて差し支えないであろう。良好な遺物出土状況を示す遺構が少ないため、詳細は不明であるが、141SX060-001、141SX108-002などの壺資料の存在から、中期後半を中心とするものである可能性を指摘できる。中期の下城式甕、および東北部九州系甕の編年が確立していない現状では甕口縁部形態のみでは中期のいずれの時期に相当するものであるかは判断することはできない。しかしながら、下郡遺跡桑苗遺跡(註1)で大量に出土する前期末、あるいは中期初頭の下城式甕とはいずれの資料も趣を異にしており、調整の粗雑化などの点から中期初頭段階よりも時期的に下るものと考えられる。また、後期初頭段階に確実に下る資料も認められず、このような状況から、遺構の存続幅を中期前半から後半の中で捉えることができよう。

ところで、大分平野部における中期弥生土器は、半截竹管状の二叉状工具により描かれる直線文と重弧文により構成される文様をもつ「下城式壺形土器」、これに前期から続く直立する口縁下に刻目突帯を巡らす「下城式甕形土器」に、円盤充填技法を採用する脚部に方形透かしをもつ台付鉢の３点が大きな特徴となっている。特に甕形土器に関しては、中期前葉段階に東北部九州系の甕が土器組成の中に登場する。しかし、導入段階での組成比率は極めて微量であり、時間の経過に伴って次第に組成を増加し、下城甕の量を凌駕するようになる。このような変遷は、中期を通じての経年変化の中で暫時的に変化することが判明しており、当該遺跡の遺跡存続幅はこの変化期の中に包括される。すなわち、多くの遺構において認められる下城式甕と東北部九州系甕の伴出状況は、まさにこの点を端的に示しているといえる。これは在来の下城式甕と東北部九州系甕という異系統の二種の甕が集落内において同時に使用されていたことをあらわしており、土器の生産、流通などの点からも示唆に富んだ状況が想定される。

これらの二種の甕は、導入当初から一貫して形態・色調・器厚の点において異なっている。特に器厚に関しては、東北部九州系の甕がタタキ成形によるものである点が確認されており(註2)、形態のみでなく、この二系統の甕が成形技法のレベルから異なるものであることが判明している。さらに、中期を通じて共存するにもかかわらず、両者の折衷土器の存在がそれほど顕著でない点も大きな特徴であり、このような点からも異なる生産集団の存在が想起される。

註１　大分県教育委員会　1992　『下郡桑苗遺跡Ⅱ』－弥生時代のブター　大分県文化財調査報告書　第89輯

註２　大分市教育委員会　1993　『下郡遺跡群』　大分市下郡地区土地区画整理事業に伴う発掘調査概報(4)

第78表　遺物観察表①

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
141**SK**002-001	286	弥生	甕	角閃石 長石 金雲母	淡黄褐色	淡黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ					口縁部片	東北部九州系 外面スス
141**SK**002-002	286	弥生	甕	石英 角閃石 長石	橙褐色	赤褐色	ナデ	面取り 不明瞭					口縁部片	下城式
141**SK**002-003	286	弥生	甕	角閃石 長石 礫	淡茶褐色	茶褐色	ナデ後ヘラミガキ	ヨコナデ					口縁部片	下城式 外面スス
141**SK**002-004	286	弥生	甕	石英 角閃石 長石 礫	淡茶橙色	淡茶橙色	ハケ目	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	下城式 ハケ目(内面3～4本　外面5～6本／cm)
141**SK**003-001	288	弥生	甕	石英 角閃石 長石	淡茶褐色～淡茶黒色	淡茶褐色～淡茶黒色	ナデ ヨコナデ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部～胴上半部片	東北部九州系 ハケ目(2～3本／cm) 内外面スス
141**SK**003-002	288	弥生	甕	石英 長石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ	ナデ ヨコナデ					口縁部片	下城式
141**SK**003-003	288	弥生	甕	石英 角閃石 長石	淡茶褐色	淡黄色	ナデ ヨコナデ	ヨコナデ					口縁部片	下城式
141**SK**003-004	288	弥生	壺	石英 長石	橙茶褐色	茶褐色	ナデ	ナデ					胴部片	下城式 上下左右不明
141**SK**003-005	288	弥生	脚付鉢	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡灰褐色	淡橙褐色	ナデ 工具ナデ	ハケ目 ナデ	14.4	14.2～14.8		8.5	一部欠損	内面黒斑 ※底径は脚部径
141**SK**015-001	289	弥生	甕	石英 長石	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ 不明瞭	ナデ 不明瞭					口縁部片	下城式
141**SK**015-002	289	縄文	不明	石英 角閃石 長石	淡橙茶色	茶褐色	ナデ	ナデ ミガキ					胴部片	磨消縄文土器
141**SK**159-001	291	弥生	甕	石英 角閃石 長石	淡黒色	淡黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ					口縁部片	東北部九州系 内面黒斑
141**SK**159-002	291	弥生	甕	角閃石 長石	淡黄褐色	淡黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ					口縁部片	東北部九州系
141**SK**159-003	291	弥生	甕	角閃石 長石	淡橙褐色	淡橙褐色	ヨコナデ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	東北部九州系 ハケ目(約5本／cm)
141**SK**159-004	291	弥生	甕	石英 長石	橙褐色	橙褐色	ナデ	ナデ ヨコナデ					口縁部片	下城式
141**SK**159-005	291	弥生	甕	角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ 指オサエ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	下城式 ハケ目(約6本／cm)
141**SK**159-006	291	弥生	甕	石英 角閃石 長石 橙色粒子	橙褐色	橙褐色	ナデ後指オサエ	不明瞭					口縁部片	下城式
141**SK**159-007	291	弥生	甕	石英 角閃石 長石	淡黒色	橙褐色～淡黒色	ナデ 指オサエ	ナデ ヨコナデ					口縁部片	下城式 内外面黒斑
141**SK**159-008	291	弥生	甕	石英 角閃石 長石 橙色粒子	赤茶褐色	茶褐色	ナデ 指オサエ	ハケ目後ナデ ヨコナデ					口縁部片	下城式 ハケ目(約8本／cm) 一部剥離
141**SK**159-009	291	弥生	壺	石英 角閃石 長石	淡黄茶色～黒色	淡橙褐色	ヨコナデ後指オサエ	ヨコナデ後指オサエ					口縁部片	内面黒斑
141**SK**159-010	292	石器												別表
141**SX**001-001	294	須恵器	甕	石英 白色粒子	灰色	灰色	ナデ 回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ			9.8		口縁部～頸部欠損	
141**SX**005-001	295	弥生	甕	石英 角閃石 長石	淡黄褐色	淡橙褐色	ヨコナデ	ヨコナデ					口縁部片	東北部九州系
141**SX**005-002	295	弥生	甕	角閃石 長石	淡茶褐色	淡灰褐色	ヨコナデ	ナデ ヨコナデ					口縁部片	東北部九州系 外面スス
141**SX**005-003	295	弥生	甕	石英 角閃石 長石	橙褐色	淡橙褐色	ナデ ヨコナデ 指オサエ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	下城式 ハケ目(6本／cm)
141**SX**005-004	295	弥生	甕	石英 角閃石 長石	赤褐色～黒色	赤褐色	ナデ 指オサエ	ヨコナデ					口縁部片	下城式 内面黒斑
141**SX**006-001	296	弥生	壺	石英 角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ	ナデ					胴部片	下城式
141**SX**007-001	297	弥生	甕	石英 角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ヨコナデ	ヨコナデ					口縁部片	東北部九州系
141**SX**009-001	298	弥生	甕	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡黒色	淡茶橙色	ナデ	ハケ目 ナデ					底部片	下城式系 ハケ目(8本／cm) 内面スス

第79表　遺物観察表②

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
141**SX**017-001	300	弥生	甕	角閃石 長石	淡黄褐色	淡茶褐色	ナデ 指オサエ	ヨコナデ					口縁部片	下城式
141**SX**017-002	300	弥生	甕	石英 角閃石 長石 白色粒子 橙色粒子	淡橙褐色	淡橙褐色	ナデ 指オサエ	ハケ目 ヨコナデ 指オサエ					口縁部～胴部片	下城式 ハケ目（８本／cm）
141**SX**017-003	300	弥生	壺	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡茶橙色	淡茶橙色	ナデ	ナデ					口縁部片	
141**SX**017-004	300	弥生	壺	石英 角閃石 白色粒子	淡橙白色 ～淡橙褐色	淡黄褐色 ～黒色	ナデ	ナデ ハケ目後ミガキ					底部１／４	外面黒斑
141**SX**017-005	300	弥生	壺	石英 角閃石 長石 緑色結晶片岩片	淡黄褐色	淡黄褐色 ～淡黒色	ナデ	ハケ目後ミガキ					頸部～胴上半部片	ハケ目（８本／cm） 外面スス
141**SX**020-001	301	弥生	甕	角閃石 長石	淡黄褐色	淡黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ					口縁部片	東北部九州系
141**SX**021-001	302	弥生	甕	角閃石 長石	淡黄褐色	淡橙褐色	ヨコナデ	ナデ ヨコナデ					口縁部片	東北部九州系
141**SX**021-002	302	弥生	甕	角閃石 長石	淡黄褐色	淡黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ					口縁部片	東北部九州系
141**SX**021-003	302	弥生	甕	角閃石 長石	淡黄褐色	淡茶褐色	ヨコナデ 後ミガキ	ヨコナデ					口縁部片	東北部九州系
141**SX**021-004	302	弥生	甕	石英 角閃石 長石	淡黄褐色	淡黄褐色 ～茶褐色	ナデ ヨコナデ 後指オサエ	ハケナデ ヨコナデ 後指オサエ					口縁部～頸部片	東北部九州系
141**SX**021-005	302	弥生	壺	石英 角閃石 長石	茶褐色	茶褐色	ヨコナデ 後ミガキ	ヨコナデ ヨコナデ 後ミガキ					口縁部片	
141**SX**021-006	302	弥生	不明	石英 角閃石 長石	淡橙褐色	淡橙褐色	指オサエ ナデ後ミガキ	不明瞭					口縁部片	赤色塗彩
141**SX**021-007	302	弥生	鉢	角閃石 長石	暗茶褐色	黒茶色	ナデ後指オサエ	ナデ後指オサエ					口縁部片	外面スス
141**SX**021-008	303	石器												別表
141**SX**029-001	304	弥生	甕	石英 角閃石 長石	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ	ナデ					口縁部片	下城式
141**SX**029-002	304	弥生	甕	石英 角閃石 長石	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ	ナデ					口縁部片	下城式
141**SX**032-001	305	弥生	甕	石英 角閃石 長石	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ	ヨコナデ					口縁部片	下城式
141**SX**032-002	305	弥生	甕	石英 角閃石 長石	淡黄褐色	淡黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ					口縁部片	東北部九州系
141**SX**032-003	305	弥生	壺	石英 角閃石 長石	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ	ナデ					胴部片	下城式
141**SX**032-004	305	弥生	壺	石英 角閃石 長石 橙色粒子	橙褐色	淡黄褐色 ～黒色	ナデ後指オサエ	ナデ				7.8	底部のみ	外面黒斑 粘土接合痕
141**SX**060-001	306	弥生	壺	石英 角閃石 長石	橙褐色	橙褐色	ヨコナデ	ヨコナデ 面取り					口縁部片	
141**SX**062-001	307	弥生	壺	石英 角閃石 長石 緑色結晶片岩片	淡黄褐色	淡黒色	ナデ	ナデ					胴部片	下城式 外面スス
141**SX**062-002	307	縄文	鉢	石英 角閃石 長石	暗茶褐色	淡黄褐色 ～黒色	横方向巻貝条痕	ナデ					胴部片	磨消縄文土器 外面黒斑
141**SX**065-001	308	弥生	甕	石英 角閃石 金雲母	淡黄褐色	淡黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ					口縁部片	東北部九州系
141**SX**065-002	308	弥生	甕	角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	暗茶褐色	ナデ後指オサエ	ナデ ヨコナデ					口縁部片	下城式 外面スス
141**SX**070-001	309	弥生	甕	石英 角閃石 長石	淡橙褐色	赤褐色	ナデ後指オサエ	不明瞭					口縁部片	下城式
141**SX**070-002	309	弥生	甕	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡黄褐色	淡茶褐色	ナデ ヨコナデ	面取り 不明瞭					口縁部～胴上半部片	下城式 外面スス
141**SX**070-003	309	弥生	甕	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡黄褐色	暗茶褐色	ヨコナデ	ヨコナデ					口縁部片	東北部九州系 外面スス

第80表　遺物観察表③

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
141**SX**070-004	309	弥生	甕	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡橙褐色	淡橙褐色	不明瞭	ハケ目 ナデ 指オサエ				6.0～ 6.4	底部のみ	下城式系 ハケ目(10本／cm)
141**SX**079-001	310	石器												別表
141**SX**092-001	311	弥生	甕	石英 角閃石 長石 橙色粒子	橙褐色	橙褐色	ナデ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	下城式 ハケ目(５本／cm)
141**SX**092-002	311	弥生	壺	石英 角閃石 長石	黄褐色	黄灰色	ナデ後指オサエ	ナデ					胴部片	下城式
141**SX**108-001	312	弥生	甕	角閃石 長石 橙色粒子	淡橙褐色	淡橙褐色	ヨコナデ	ヨコナデ					口縁部片	東北部九州系
141**SX**108-002	312	弥生	壺	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡黄褐色	淡黄褐色	ヨコナデ	ハケ目 ハケ目後 ヨコナデ ヨコナデ					口縁部片	ハケ目(５～６本／cm)
141**SX**113-001	314	弥生	甕	角閃石 長石 橙色粒子	淡黄褐色	淡茶褐色	ヨコナデ	ヨコナデ					口縁部片	東北部九州系
141**SX**113-002	314	弥生	甕	角閃石 長石 橙色粒子	淡黄褐色 ～暗茶褐色	淡黄褐色 ～暗茶褐色	ナデ 指オサエ	ナデ ヨコナデ ハケナデ	(25.4)	29.2		6.1	口縁部～ 胴部１／２残存 底部完存	下城式 内外面ススス
141**SX**113-003	314	弥生	甕	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡橙褐色 ～黒色	淡橙褐色 ～暗茶褐色	ナデ後指オサエ	ハケ目 ヨコナデ	(27.8)				全体１／３ 底部欠損	下城式 ハケ目(４本／cm) 内外面ススス
141**SX**133-001	316	弥生	甕	石英 角閃石	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ	ナデ					口縁部片	下城式
141**SX**133-002	316	弥生	甕	石英 角閃石 橙色粒子	淡橙褐色	淡橙褐色	ナデ	ヨコナデ					口縁部片	下城式
141**SX**133-003	316	弥生	甕	石英 角閃石 長石	茶褐色	暗茶褐色	ミガキ	ヨコナデ					口縁部片	下城式
141**SX**133-004	316	弥生	甕	石英 角閃石 長石 橙色粒子	赤橙色	淡赤橙色	ナデ	不明瞭					口縁部片	下城式
141**SX**133-005	316	弥生	甕	石英 角閃石 長石 橙色粒子	赤橙色	淡茶褐色	ナデ	ナデ後ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	下城式 ハケ目(９～10本／cm)
141**SX**133-006	316	弥生	甕	石英 角閃石 橙色粒子	淡赤橙色	淡赤橙色 ～淡黄白色	ナデ	ナデ					口縁部片	下城式
141**SX**133-007	316	弥生	甕	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡橙褐色 ～茶褐色	淡橙褐色 ～茶褐色	ナデ ヨコナデ 指オサエ	ナデ ヨコナデ					口縁部片	下城式
141**SX**133-008	316	弥生	甕	角閃石 長石	淡黄褐色	淡灰褐色	ナデ	ナデ ヨコナデ					口縁部片	東北部九州系
141**SX**133-009	316	弥生	甕	角閃石 長石 橙色粒子	淡黄白色	淡黄白色	ヨコナデ	ヨコナデ					口縁部片	東北部九州系
141**SX**133-010	316	弥生	甕	石英 角閃石 長石 橙色粒子	黄褐色	淡黄褐色	ナデ	ヨコナデ					口縁部片	東北部九州系
141**SX**133-011	316	弥生	甕	石英 角閃石 長石 金雲母	淡黄白色	淡茶褐色	ナデ ヨコナデ 指オサエ	ハケ目					口縁部～胴部片	東北部九州系 内面黒斑
141**SX**133-012	316	弥生	鉢	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡橙褐色	淡橙褐色	ミガキ	ナデ ヨコナデ					口縁部片	
141**SX**133-013	316	弥生	壺	石英 角閃石 長石	茶褐色	赤褐色	ナデ	ナデ					胴部片	下城式 外面黒斑
141**SX**133-014	316	弥生	壺	石英 角閃石 橙色粒子	橙褐色	淡橙褐色	ナデ	ナデ					胴部片	下城式
141**SX**133-015	316	弥生	壺	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡橙褐色	淡橙褐色	ナデ	ナデ					胴部片	下城式
141**SX**133-016	316	弥生	壺	石英 角閃石 長石 橙色粒子	橙褐色～ 暗茶褐色	橙褐色～ 暗茶褐色	指オサエ 後ミガキ	ハケ目後 ヘラミガキ ヨコナデ	(14.6)				口縁部１／２	下城式 ハケ目(７～８本／cm)
141**SX**133-017	316	弥生	壺	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡橙褐色	橙褐色	不明瞭	ナデ					頸部～胴上半部片	下城式

第81表　遺物観察表④

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
141**SX**140-001	318	弥生	甕	石英 角閃石 橙色粒子	淡灰褐色	茶褐色	ヨコナデ	ナデ ヨコナデ					口縁部片	下城式
141**SX**140-002	318	弥生	甕	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色 ～黒色	ナデ	ナデ					口縁部片	下城式
141**SX**140-003	318	弥生	甕	石英 角閃石 橙色粒子	暗黄褐色	暗黄褐色	不明瞭	ヨコナデ					口縁部片	下城式
141**SX**140-004	318	弥生	甕	石英 角閃石 長石 橙色粒子 金雲母	黒褐色	橙褐色	ナデ 指オサエ	ハケ目 ナデ				(6.0)	底部1/2	下城式 ハケ目（6～7本／cm）
141**SX**140-005	318	弥生	甕	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡灰褐色	淡茶褐色 ～淡灰褐色	ナデ 指オサエ	ハケ目 ナデ				7.2	底部のみ	下城式 ハケ目（6～7本／cm）
141**SX**140-006	318	弥生	甕	石英 角閃石 長石 橙色粒子	赤橙色～ 暗茶褐色	赤橙色	ナデ 指オサエ	ハケ目 ナデ				6.3	底部のみ	下城式 ハケ目（9～10本／cm）
141**SX**140-007	318	弥生	甕	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡黄白色	淡黄白色	ヨコナデ	ヨコナデ					口縁部片	東北部九州系
141**SX**140-008	318	弥生	甕	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡黄白色	淡黄白色	ヨコナデ	ヨコナデ					口縁部片	東北部九州系
141**SX**140-009	318	弥生	甕	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡黄白色	淡黄白色	ナデ	ヨコナデ					口縁部片	東北部九州系
141**SX**140-010	318	弥生	甕	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡灰褐色 ～茶褐色	茶褐色	ナデ ヨコナデ	ヨコナデ					口縁部片	東北部九州系
141**SX**140-011	318	弥生	壺	石英 角閃石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ヨコナデ	ヨコナデ					口縁部片	
141**SX**140-012	318	弥生	短頸壺	石英 角閃石	淡黄白色	淡黄白色	ナデ ヨコナデ ナデ後指オサエ	ハケ目					口縁部片	東北部九州系
141**SX**140-013	318	弥生	壺	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡橙褐色	淡橙褐色	ナデ	ナデ					口縁部片	
141**SX**140-014	318	弥生	壺	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡黄褐色	淡黄褐色	ハケ目 ナデ ヨコナデ 指オサエ 後ナデ ナデ後指オサエ	ハケ目 ナデ ハケ目後ヘラミガキ ヨコナデ	13.7	23.1	16.2	4.9	完存	ハケ目（約6本／cm） 外面黒斑
141**SX**140-015	319	石器												別表
141**SX**151-001	321	弥生	甕	角閃石 長石	淡茶褐色	淡橙褐色	ナデ 指オサエ	ヨコナデ					口縁部片	下城式
141**SX**151-002	321	弥生	甕	石英 角閃石 白色粒子 橙色粒子	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ 指オサエ	ナデ ハケ目後ヨコナデ				6.6	底部のみ完存	東北部九州系 ハケ目（7本／cm） 外面黒斑
141**SX**151-003	321	弥生	甕	石英 角閃石 長石	黒色	赤褐色～ 暗茶褐色	ナデ 指オサエ	ハケ目				5.9	底部のみ完存	下城式 ハケ目（約5本／cm） 内外面ススス
141**SX**151-004	321	弥生	甕	石英 角閃石 長石	黒褐色	淡黄褐色 ～赤褐色	ナデ 指オサエ	ハケ目 ナデ ヨコナデ				5.9	底部のみ完存	ハケ目（5本／cm） 内面ススス
141**SZ**000-001	322	縄文	不明	角閃石 長石	黒色	茶褐色	巻貝条痕	巻貝条痕					胴部片	
141**SZ**000-002	322	陶磁器												別表

第82表　陶磁器観察表

遺物番号	挿図番号	器種		装飾		法量（cm）			産地	備考
		種類	器種	絵付釉薬	文様	口径	器高	底径		
141**SZ**000-002	322	陶器	不明	青緑色の釉						

第83表　石器観察表

遺物番号	挿図番号	器種	石材	法量（cm）				備考
		種類		長さ	幅	厚さ	重さ(**g**)	
141**SK**159-010	292	石皿	角閃石安山岩	16.1	8.6	5.0	987.5	被熱による剥離　一部欠損
141**SX**021-008	303	不明	姫島産黒曜石	3.4	1.9	0.7	3.2	
141**SX**079-001	310	不明	姫島産黒曜石	2.8	2.4	0.7	2.9	
141**SX**140-015	319	石皿	角閃石安山岩	15.8	11.9	9.2	1820.0	中央部に磨面

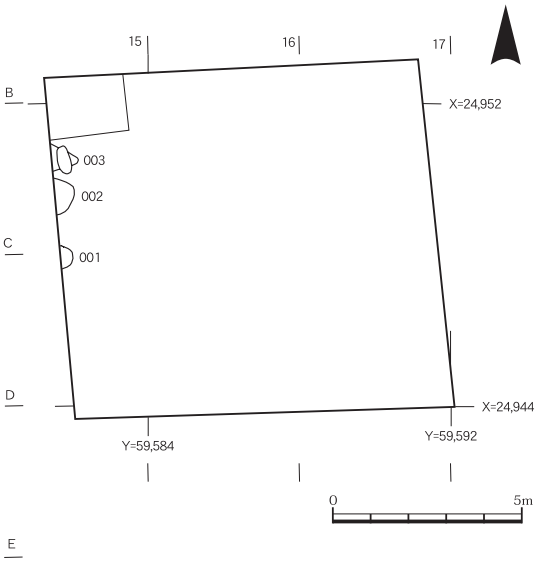
第６節　下郡遺跡群第142次調査

（１）はじめに

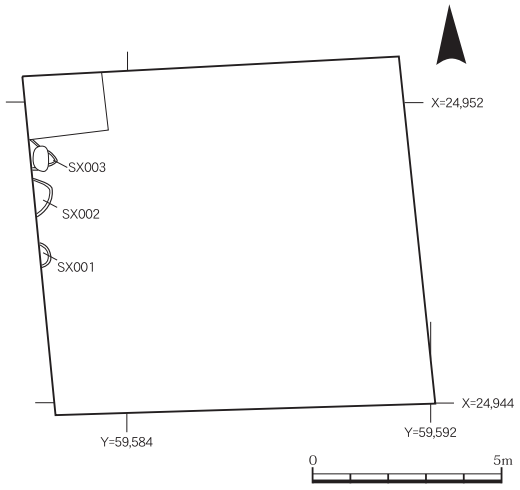
下郡遺跡群第142次調査は、下郡地区土地区画整理地内に所在する小中ツル公園敷地内の防火水槽の設置に伴う事前調査として実施したものであり、下郡遺跡群Ｂ区 f-11・12地点に相当する。

調査の結果、現地表面から約1.0m までは黄白色土を基調とする客土層であり、当該層の下部には部分的ながら水田耕作に伴う茶褐色土（硬質）が認められる。このような土層堆積状況から、当地が公園として整備される以前は、水田として利用されていたことが知られ、しかも、公園整備に伴い水田耕作土を削平し客土したことが判明した。客土層下に散在的に遺存する耕作土の下部には明茶色土の堆積を約0.3m 程度確認することができ、さらにその下層には暗青灰色砂質土の堆積が認められ、これが基盤土層となっている。

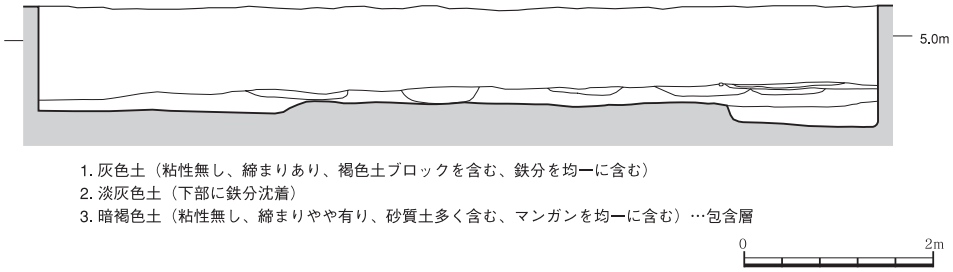
検出遺構は暗褐土上面から掘り込まれるが、遺構の遺存状況は総じて良好でない。最も残りの良い遺構でも遺存深度が約５㎝程度であるといった状況である。おそらく水田構築の際に大規模な地下げが実施されたのであろう。このような中で検出できた遺構は土坑４基のみである。いずれも調査区北西壁付近で確認した。出土遺物に関しては、遺構内埋土からの遺物出土は極めて少なく、出土遺物の大部分は、遺構が掘り込まれる暗褐色土内から出土しており、内容的には、弥生時代中期中葉から後葉に位置付けられる土器資料が大半を占める。



第323図　遺構配置図　(1/200)



第324図　全体遺構図　(1/200)



第325図　調査区西壁土層断面実測図　(1/80)

第84表　遺構一覧表

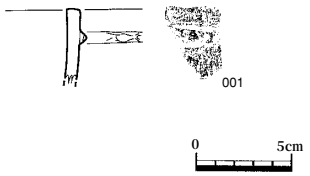
S番号	遺構番号	遺　物　・　そ　の　他	時　期	地区
001	142**SX**-001	下城式甕口縁部片	不明	**C**～**D**-15
002	142**SX**-002	弥生壺口縁部片、下城式甕口縁部片、壺底部	弥生中期	**C**-15
003	142**SX**-003		不明	**C**-15
004	142**SX**-004	東北部九州系甕口縁部片、東北部九州系甕底部、下城式甕口縁部片、下城式甕底部、下城式壺、壺片、壺口縁部片、壺肩部片、石鏃、砥石	不明	**B**～**E**-15～17

（２）遺構と遺物

土坑（SX）

142SX001

調査区西壁の中央付近で検出した土坑である。円形基調のプランを呈すると考えられるが、西半は調査区外にあり、全体形状は不明である。壁際で確認される長径1.5m を測り、遺存する遺構深度は最深部で4.4m である。



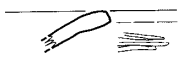
第326図　SX001出土遺物実測図　(1/4)

出土遺物（第326図）

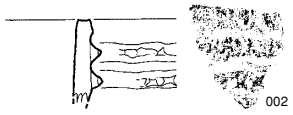
遺構内埋土から出土した遺物は、土器資料１点のみである。**001**は下城式甕の口縁部破片であり、内面・淡黄褐色、外面・淡赤橙色を呈し、一条の刻目突帯を貼付する。破片資料であり、当該遺構に帰属するものであるのかどうかは不明であり、暗褐色土からの混入遺物である可能性も考慮される。

142SX002

調査区北西壁付近で検出した土坑である。大半が撹乱穴によって切られている。遺構の性格等は不明である。現存深度は最深部で4.5m を測る。



出土遺物（第327図）



001は弥生時代壺口縁部片である。器表面は赤橙色を呈し、外器面にはヨコ方向のヘラミガキが施される。器外面には黒斑が認められ、胎土中には角閃石、長石粒を含む。**002**は下城式甕口縁部片であり、内外面とも暗茶褐色を呈し、二条の刻目突帯が貼付される。内外面ともナデにより調整される。**003**は壺底部片であり、約１/５が遺存する。外面は黒茶色、内面は暗茶褐色を呈している。これらの遺物は、弥生時代中期中葉～後葉に位置づけられる。いずれの遺物も弥生時代中期の範疇で捉えられるものである。





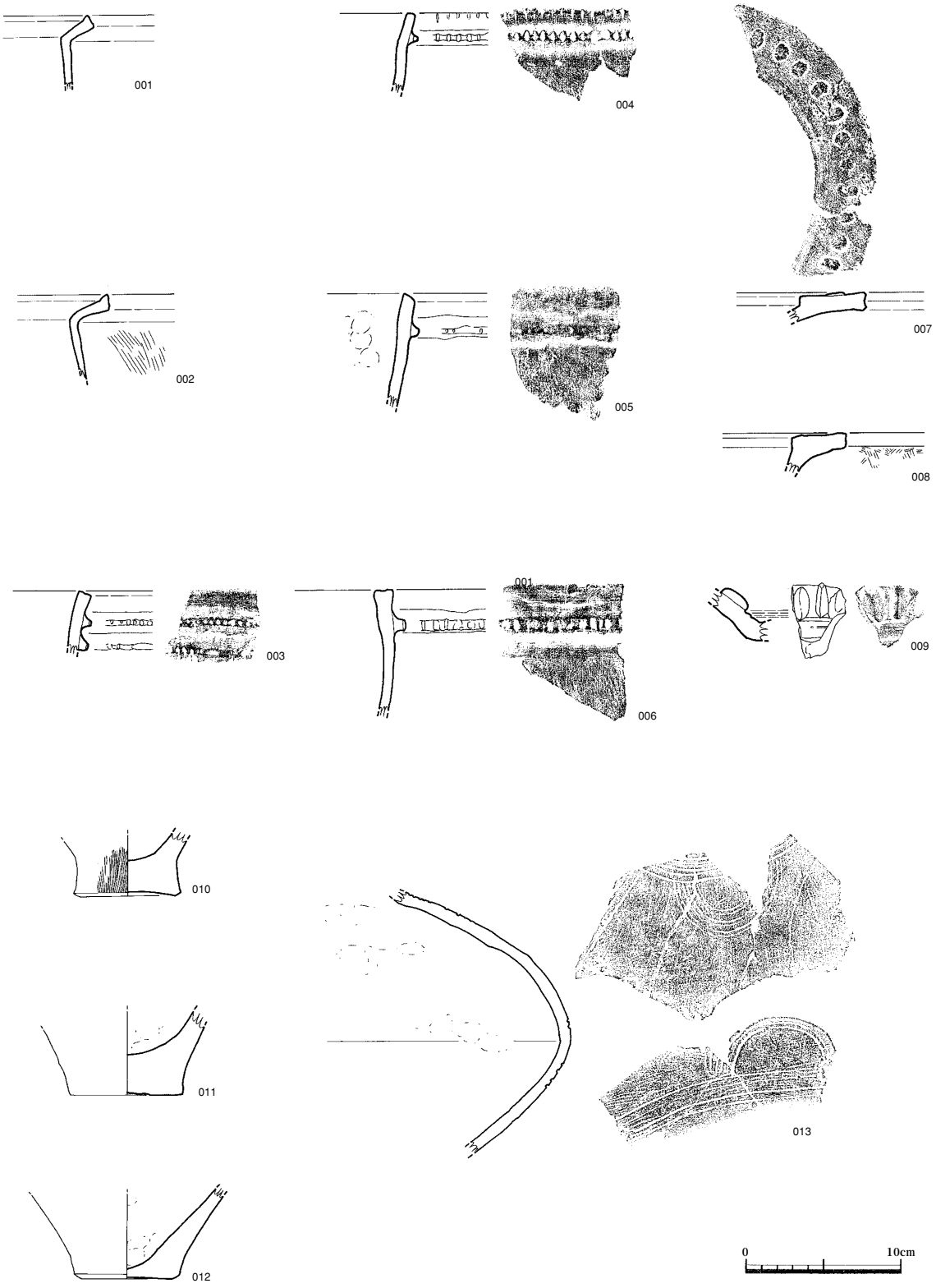
第327図　SX002出土遺物実測図　(1/4)

142SX003

調査区北西壁で検出した土坑である。大半を撹乱穴により切られており、出土遺物も皆無である。埋土状況は142**SX**001・002と類似しており、同様の土坑遺構であると考えられる。

142SX004

今次の調査では、３基の遺構を確認しているが、これらの土坑が掘り込まれる暗褐土層には土器資料を内包する。本層の形成過程とも関連するが、本層にはラミナ状に砂質土の堆積を部分的に認める



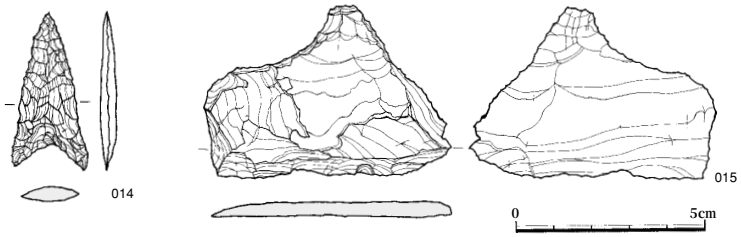
第328図　SX004（暗褐土層）出土遺物実測図①　(1/4)

ことができ、本層が水性堆積による包含層である可能性も想定される。

出土遺物（第328・329図）

001・002は東北九州系甕の口縁部破片である。両資料とも淡黄褐色を呈し、口縁端部をナデにより仕上げ、外器面をタテ方向のハケ目により調整する。同種の甕の器壁は総じて薄く、胴部の破片資料であっても後述する下城式系甕とは明確に異なり、区別することができる。**003〜006**は下城式甕口縁部破片である。直立気味に立ちあがる口縁部外面下位に二条の刻目突帯を貼付するもの（**003**）と一条突帯のものとがある。**003**は二条の刻目突帯を貼付する下城式甕の口縁部破片である。淡橙褐色を呈し、内外器面ともナデにより調整される。外反気味に上方へのびる口縁部外面の若干下がった位置に断面三角形の突帯二条が貼付される。突帯の上端には細かな刻み目が密に施される。**004**は橙褐色を呈する下城式甕口縁部破片であり、内外面とのナデにより調整される。外面の貼付突帯上面に刻目が施される他、口縁端部にも刻みを施す点で他の個体と異なっている。**005**も下城式甕の口縁部破片である。風化のため突帯上端の刻みは不明瞭となっている。赤橙色を呈し、内外器面ともナデにより仕上げられる。**006**は淡黄褐色〜黒色を呈する下城式甕口縁部破片である。全口径の約１/５が遺存する。ナデにより調整される。**007・008・009・013**は壺破片資料である。**007・008**は壺口縁部破片である。**007**は内面に粘土を貼りつけ、水平口縁を形成する。口縁部上端には円形浮文を密に貼りつける。内外器面ともナデにより調整する。**008**は**007**と同様に口縁部内面に粘土帯を貼りつけ、水平口縁を形成する。**007**との違いは、口縁部を厚ぼったく仕上げ、外面にハケ目の痕跡が認められる。**009**は壺の肩部破片である。外器面に棒状浮文が並列して貼付され、その下部に半截竹管状の二叉状工具によると考えられる沈線が施文される。外面・茶褐色〜橙褐色、内面・淡黄白色を呈し、内外器面ともナデにより調整される。**013**は下城式壺の胴部破片である。外面・茶褐色〜橙褐色、内面・淡黄白色を呈する。外器面はハケ目後にナデが施され半截竹管状の二叉状工具による平行線文、タテ沈線文、上下方向の重弧文により文様を構成する。胎土中には石英、角閃石、長石、橙色粒子を含む。**010〜012**は甕の底部破片である。**010**は底部のみ遺存する。底径6.9㎝を測る。淡黄褐色を呈し、胎土中には石英、角閃石、長石、橙色粒子を含む。胎土状況、色調などから下城式甕の底部と考えられる。**011**もまた底部のみ完存する甕底部である。底径7.1㎝を測る。外器面にはハケ目が施されているようだが、風化のため明瞭でない。胎土中には石英、角閃石、長石など、比較的粒の大きい混和材を含み、これらの特徴から下城式甕の底部片と考えられる。**012**も甕の底部片であり、約１/２が遺存する。復元底径6.8㎝を測る。外面・淡黄白色、内面・明黄白色を呈している。内外面ともナデにより調整される。底部厚が薄く、上方にむかって器壁が薄くなっていく傾向にあり、このような諸特徴から東北部九州系甕の底部破片である可能性がある。

石器に関しては、完存する姫島産黒曜石製の石鏃１点と結晶片岩製の砥石と考えられる剥片１点が



第329図　SX004（暗褐土層）出土遺物実測図②（1/2）

出土している。**014**は暗褐土層内に点在する暗褐色砂質土から出土したものである。長軸3.8㎝、基底部幅2.0㎝、最大厚0.4㎝、重量2.0g を測る。表裏面に入念な調整が施される。**015**は結晶片岩製の剥片である。内外面に研磨痕跡があり、砥石と考えられる。両端は欠損しており、現存部分での長軸長6.6㎝、短軸長3.2㎝、厚さ5.5㎝、現存重量11.6g を測る。

（3）小結

今次の調査では、当地の水田化に伴い上面を削平されており、検出できた遺構は僅かに土坑３基のみである。土坑が確認される暗褐土層は、水性堆積により形成された可能性を有する遺物包含層であり、出土遺物には一定の幅を有するもの、おおむね弥生時代中期の範疇に属するもので構成されている。土層上面において検出された土坑内出土遺物も同様の様相を示している。

これらの遺物の中で諸特徴から最も新出すると判断されるものは、**007**の壺口縁部であり、これは近年、特に「別府湾沿岸形壺」（坪根・服部2004）とした資料に相当する。口縁部の形態分類上においてA２類に分類されるものであり、同種の資料は宮崎県新田原遺跡６号および４号住居跡（石川1986）などから出土している。新田原遺跡４・６号住居跡からは、この種の壺の他、下城式甕形土器、中溝式甕、西部瀬戸内中期Ⅲ期（梅木1995・2004）に相当する矢羽根透かしを有する高坏の脚部、凹線文を施した壺の口縁部などが出土している。これらの点から、新田原遺跡から出土したA２類に分類される口縁部形態を有する別府湾沿岸形壺AⅡ型式との時間定点を求めることができ、したがって、本地点で確認された**007**の壺形土器が中期後半から末の時間幅の中に相当させることができると考えられる。さらに、**008**の口縁部形態や**009**に確認される浮文などは、下城式壺分類Ⅳ類（坪根・服部2004）に比較的多く認められる属性であることも注意される。

以上の点を踏まえると、土坑が形成される暗褐土層の形成時期を中期後半から末以降に想定することが可能である。土坑から出土した遺物様相も、暗褐土層出土遺物と大きく異なる特徴はなく、大きく時期的に乖離した遺物の出土も今のところ認められないことから、土坑の形成時期は暗褐土層堆積直後に行われた可能性が高いと考えられる。その時期は弥生時代中期後半～末のある段階であったと判断される。

今回の調査地点の周辺には、弥生前期末から中期まで永続する集落の存在が確認されている。このような環境の中で形成された弥生時代中期後半～末に比定される土層の堆積背景が注目され、集落全体の中でどのような位置にあるのかどうかも含め、検討していく必要があろう。

参考文献

石川悦雄　1986『新田原遺跡・瀬戸口遺跡・蔵園地下式横穴墓』宮崎県新富町教育委員会

梅木謙一　1995「西瀬戸内地方における弥生中期の土器様相」『古文化談叢』34九州古文化研究会

梅木謙一　2004「四国・南九州間における凹線文土器の交流」『西南四国－九州間の交流に関する考古学的研究　平成14年度～平成15年度科学研究費補助金研究成果報告書（研究代表者　下條信行）』

坪根伸也・服部真和　2004「東南部九州地域の弥生中期中葉から後期前葉」『第53回埋蔵文化財研究集会　弥生中期土器の併行関係　発表要旨集』埋蔵文化財研究会　第53回埋蔵文化財研究集会実行委員会

第85表　遺物観察表

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
142**SX**001-001	326	弥生	甕	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡黄褐色	淡赤橙色	ナデ	ナデ					口縁部片	下城式
142**SX**002-001	327	弥生	壺	角閃石 長石	赤橙色	赤橙色～黒色	ヨコナデ	ヨコナデ ヘラミガキ					口縁部片	外面黒斑
142**SX**002-002	327	弥生	甕	石英 角閃石 長石	暗茶褐色	暗茶褐色	ヨコナデ	ナデ					口縁部片	下城式
142**SX**002-003	327	弥生	壺	角閃石 橙色粒子	暗茶褐色	黒茶色	ナデ 指オサエ	ナデ					底部１／５	
142**SX**004-001	328	弥生	甕	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ	ヨコナデ ハケ目後ナデ					口縁部片	東北部九州系
142**SX**004-002	328	弥生	甕	角閃石 長石 橙色粒子	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ ヨコナデ	ヨコナデ ハケ目後ナデ					口縁部片	東北部九州系 ハケ目（６～７本／cm）
142**SX**004-003	328	弥生	甕	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡橙褐色	淡橙褐色	ナデ	ヨコナデ					口縁部片	下城式
142**SX**004-004	328	弥生	甕	石英 角閃石 長石 橙色粒子	橙褐色	橙褐色	ナデ	ナデ ヨコナデ					口縁部片	下城式
142**SX**004-005	328	弥生	甕	石英 角閃石 長石 金雲母	赤橙色	赤橙色	ナデ 指オサエ	ナデ 指オサエ					口縁部片	下城式
142**SX**004-006	328	弥生	甕	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡橙褐色 ～茶褐色	淡黄褐色 ～黒色	ナデ ヨコナデ	ナデ ヨコナデ					口縁部～胴部片	下城式
142**SX**004-007	328	弥生	壺	石英 角閃石 橙色粒子	淡茶褐色	赤褐色	ヨコナデ	ヨコナデ					口縁部１／５	
142**SX**004-008	328	弥生	壺	石英 角閃石 橙色粒子	淡黄白色	淡黄白色	ヨコナデ	ハケ目					口縁部片	
142**SX**004-009	328	弥生	壺	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡黄白色	茶褐色～橙褐色	ナデ	ナデ					肩部片	
142**SX**004-010	328	弥生	甕	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡黄褐色	淡橙褐色 ～黒色	ナデ 指オサエ	ハケ目 ナデ				(6.9)	底部のみ	下城式 ハケ目（９～10本／cm）
142**SX**004-011	328	弥生	甕	石英 角閃石 長石	暗茶褐色 ～黒色	赤橙色	ナデ 指オサエ	不明瞭				7.1	底部のみ	下城式 外面ハケ目の痕跡
142**SX**004-012	328	弥生	甕	石英 角閃石 長石 橙色粒子	明黄白色	淡黄白色	ナデ 指オサエ	ナデ				(6.8)	底部１／２	東北部九州系
142**SX**004-013	328	弥生	壺	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡黄白色	茶褐色～橙褐色	ナデ 指オサエ	ハケ目後ナデ					肩部～胴部片	下城式 ハケ目（６本／cm）
142**SX**004-014	329	石器												別表
142**SX**004-015	329	石器												別表

第86表　石器観察表

遺物番号	挿図番号	器種	石材	法量（cm）				備考
		種類		長さ	幅	厚さ	重さ（g）	
142**SX**004-014	329	石鏃	姫島産黒曜石	3.8	2.0	0.4	2.0	
142**SX**004-015	329	砥石	結晶片岩	(6.6)	(3.2)	5.5	11.6	研磨痕両端欠損※長さは長軸、幅は短軸

第７節　下郡遺跡群第143次調査

（１）はじめに

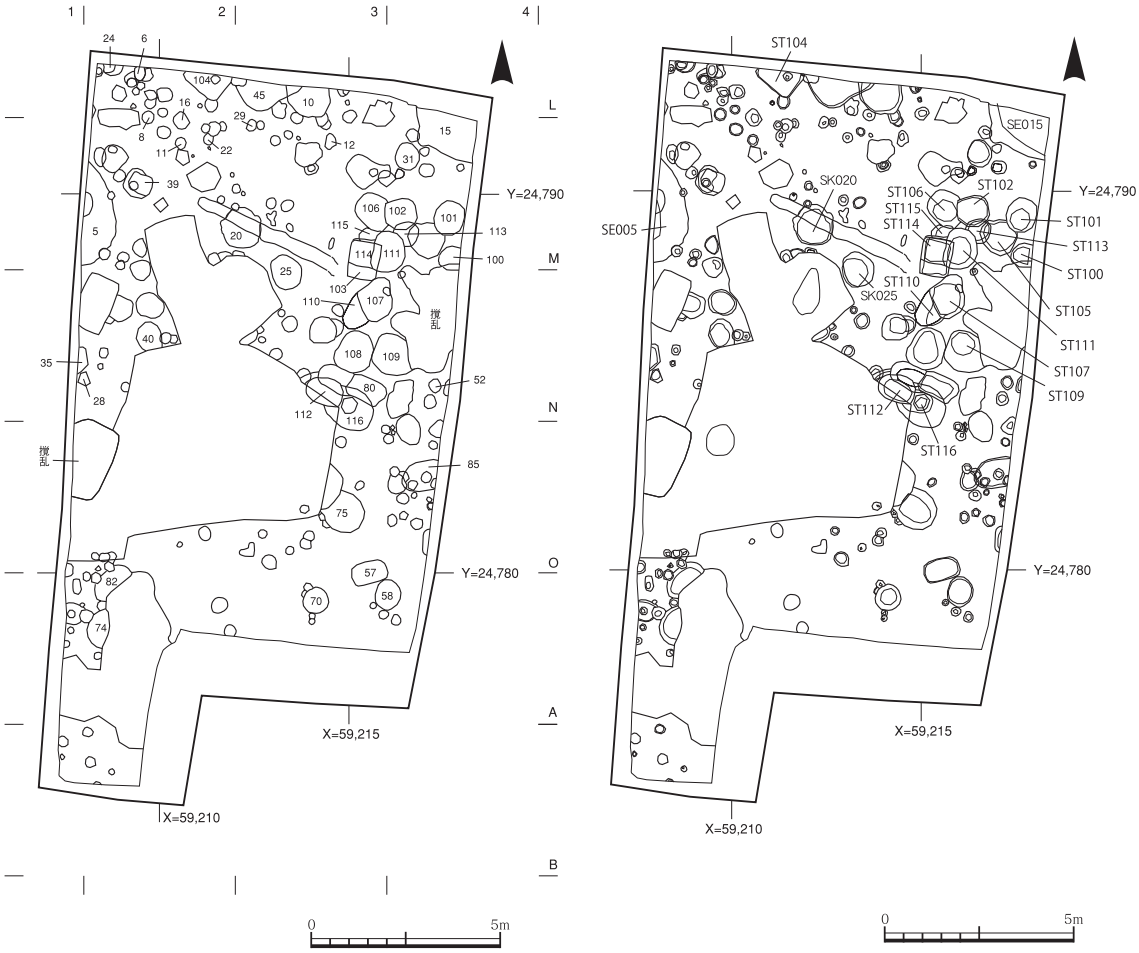
今次の調査地は大分市下郡中央２丁目262に所在する。今回の調査は、遺跡の範囲ならびに状況の把握を目的としたもので、176㎡の調査区を設け、平成16年（2004）３月９日～４月23日にかけて調査を実施した。

調査対象地域は、区画整理以前に墓地が形成されていた。調査区中央部では区画整理に伴う墓地移転による墓地改葬が行われており、それに伴う撹乱穴が随所にみられる。また、調査区の南側は下郡遺跡群第58次調査区と一部重複している。

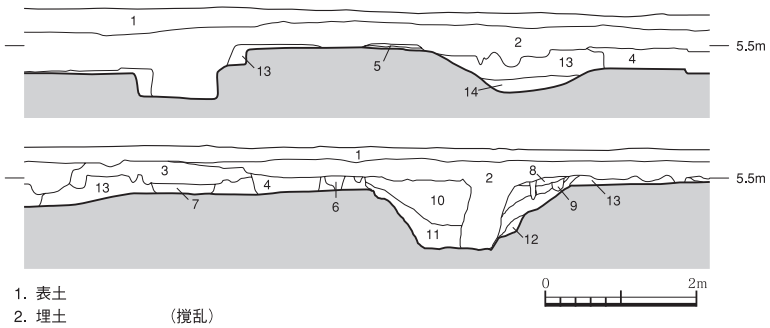
調査の結果、弥生時代中期に比定される貯蔵穴（143SK020・025）、古代の所産と考えられる井戸跡（143SE005・015）、近代墓・近世墓（143ST100～116）、土坑群を検出した。



第330図　下郡遺跡群第143次調査周辺位置図　（1/250）



第331図　遺構配置図　(1/200)



1. 表土
2. 埋土　（撹乱）
3. 灰茶褐色土　（土器片、炭化物を含む、茶色粒子を含む、やや粘性あり）
4. 暗灰茶褐色土　（3より暗、土器片を含む、締りよく粘性あり）
5. 灰茶褐色土　（土器片、茶色粒子を含む、締りよく粘性ややあり）
6. 暗灰褐色土　（土器片、茶色ブロック土を含む、締りよく粘性なし）
7. 暗灰茶褐色土　（土器片、炭化物を含む、やや砂質、締りよく粘性なし）
8. 灰茶褐色土　（土器片を含む、茶色ブロック土を多く含む、締りよく粘性あり）

SE005

9. 暗灰褐色土　（土器片を含む、茶色ブロック土を含む、炭化物を含む、砂質、締りよく粘性あり）
10. 暗灰褐色土　（土器片、炭化物を含む、茶色ブロック土を多く含む、締りよく粘性強い）
11. 灰褐色土　（土器片、炭化物を含む、茶色ブロック土を含む、締りよく粘性強い）
12. 黄茶灰褐色土　（地山ブロックを含む、締りやや甘く粘性あり）
13. 黄灰茶褐色砂質土（地山、0.5～1mmの粒子を含む）
14. 灰褐色砂

第332図　調査区西壁土層断面実測図　(1/100)

第87表　遺構一覧表①

S番号	遺構番号	遺物・その他	時期	地区
001	143**SX**-001	土器片、土師器片、染付碗	不明	**L**-2
002	143**SX**-002	土器片		**L**-2
003	143**SX**-003	土器片		**M**-2
004	143**SX**-004	土器片		**M**-2
005	143**SE**-005	弥生土器片、須恵器片	古代	**M**-2
006	143**SX**-006	土器片		**L**-2
007	143**SX**-007	弥生土器片		**L**-2
008	143**SX**-008	弥生土器片		**L**・**M**-2
009	143**SX**-009	弥生土器片		**L**-2
010	143**SX**-010	土器片、染付碗	近代	**L**-3
011	143**SX**-011	土器片		**M**-2
012	143**SX**-012	土器片		**M**-3
013	143**SX**-013	土器片、下城式土器片		**M**-2
014	143**SX**-014	土器片、弥生土器片		**M**-2・3
015	143**SE**-015	須恵器杯片、須恵器蓋片、須恵器身片、土師器片	古代	**L**・**M**-4
016	143**SX**-016	土器片		**L**・**M**-2
017	143**SX**-017	土器片		**M**-3
018	143**SX**-018	土器片		**M**-3
019	143**SX**-019	土器片		**L**-2
020	143**SK**-020	下城式甕片、東北部九州系甕片	弥生中期	**M**-2・3
021	143**SX**-021	下城式土器		**M**-3
022	143**SX**-022	弥生土器片		**M**-2
023	143**SX**-023	須恵器片、土器片		**M**-2
024	143**SX**-024	土器片		**M**-2
025	143**SK**-025	下城式甕片、東北部九州系弥生土器片	弥生中期	**M**・**N**-3
026	143**SX**-026	唐津、土器片		**M**-3
027	143**SX**-027	土器片		**N**-2
028	143**SX**-028	土器片		**N**-2
029	143**SX**-029	土器片		**M**-2
030	143**SX**-030	弥生土器片		**N**-2
031	143**SX**-031	土器片		**M**-4
032	143**SX**-032	土器片		**M**-4
033	143**SX**-033	土器片		**M**-3
034	143**SX**-034	土器片		**L**・**M**-2
035	143**SX**-035	弥生土器片		**N**-2
036	143**SX**-036	弥生土器片		**N**-2
037	143**SX**-037	土器片		**L**-3
038	143**SX**-038	土器片		**M**-2
039	143**SX**-039	弥生土器片、土器片		**M**-2
040	143**SX**-040	弥生土器片、土器片		**N**-2
041	143**SX**-041	土器片		**L**-2
042	143**SX**-042	土器片		**M**-2
043	143**SX**-043	土器片		**M**-4
044	143**SX**-044	土器片		**L**-2
045	143**SX**-045	土器片		**L**-3
046	143**SX**-046	土器片		**M**-2
047	143**SX**-047	須恵器片、土器片		**M**-3
048	143**SX**-048	弥生土器片、土器片		**M**-3
049	143**SX**-049	土器片		**N**-2
050	143**SX**-050	土師器片、弥生土器片		**N**-3
051	143**SX**-051	土器片		**N**-3
052	143**SX**-052	土器片		**N**-3
053	143**SX**-053	弥生土器片、土器片		**N**-3
054	143**SX**-054	土器片		**N**-3
055	143**SX**-055	弥生土器片、土器片		**N**-3
056	143**SX**-056	土器片		**M**-2
057	143**SX**-057	土器片		**O**・**A**-3
058	143**SX**-058	土器片		**A**-3・4
059	143**SX**-059	土器片		**A**-4
060	143**SX**-060	弥生土器片		**O**-4
061	143**SX**-061	土器片		**O**-3
062	143**SX**-062	土師器片、土器片		**O**-3
063	143**SX**-063			**O**-4
064	143**SX**-064	土器片		**O**-4
065	143**SX**-065	土器片		**O**-2

第88表　遺構一覧表②

S番号	遺構番号	遺　物　・　そ　の　他	時　期	地区
066	143**SX**-066	弥生土器片		**O**-2
067	143**SX**-067	土器片		**N**・**O**-2
068	143**SX**-068	弥生土器片		**M**-3・4
069	143**SX**-069	弥生土器片		**O**-3
070	143**SX**-070	甕	近世	**A**-3
071	143**SX**-071	土器片		**A**-2
072	143**SX**-072	染付片、弥生土器片	近世	**A**-2
073	143**SX**-073	土器片		**O**-2
074	143**SX**-074	土器片		**A**-2
075	143**SX**-075	須恵器杯片、土器片		**O**-3
076	143**SX**-076	土器片		**L**-2
077	143**SX**-077	土器片		**O**-2
078	143**SX**-078	土器片		**O**-2
079	143**SX**-079	弥生土器片、土器片		**N**-2・3
080	143**SX**-080	土器片		**N**-3
081	143**SX**-081	弥生土器片		**L**-3
082	143**SX**-082	土器片		**O**・**A**-2
083	143**SX**-083	土器片		**N**-3
084	143000-084	欠番		
085	143**SX**-085	下城式土器		**O**-4
086	143000-086	欠番		
087	143000-087	欠番		
088	143000-088	欠番		
089	143000-089	欠番		
090	143000-090	欠番		
091	143000-091	欠番		
092	143000-092	欠番		
093	143000-093	欠番		
094	143000-094	欠番		
095	143000-095	欠番		
096	143000-096	欠番		
097	143000-097	欠番		
098	143000-098	欠番		
099	143000-099	欠番		
100	143**ST**-100	土師器小皿、肥前系磁器染付碗、六道銭、土器片	近世	**M**-4
101	143**ST**-101	土器片	近世	**M**-4
102	143**ST**-102	六道銭、土器片	近代	**M**-4
103	143**ST**-103	土師器小皿、唐津片、須恵器片、弥生土器片、六道銭、土器片		**M**・**N**-4
104	143**ST**-104	肥前系磁器染付皿、土器片	近代	**L**-2
105	143**ST**-105	須恵器片、土師器片、六道銭、人骨片、土器片		**M**-4
106	143**ST**-106	施釉土師質小皿、土師器片、六道銭、人骨	近代	**M**-3
107	143**ST**-107	土師器片、唐津、弥生土器片、六道銭、人骨		**N**-3・4
108	143**ST**-108	肥前系磁器染付碗、肥前系陶器平碗、土師器小皿、弥生土器片、人骨片、土器片		**N**-3
109	143**ST**-109	須恵器片、弥生土器片、土器片		**N**-3・4
110	143**ST**-110	土器片、六道銭		**N**-3
111	143**ST**-111	須恵器片、土師器片		**M**・**N**-3・
112	143**ST**-112	須恵器片、土師器片、土器片、肥前系磁器染付碗、唐津系陶器徳利		**N**-3
113	143**ST**-113	須恵器片、土器片、六道銭		**M**-4
114	143**ST**-114	土師器小皿、須恵器片、土器片、六道銭		**M**-3
115	143**ST**-115	土師器小皿、須恵器片、土器片		**M**-3
116	143**ST**-116	土師器小皿、染付碗片、唐津片、関西系陶器碗、土器片		**N**・**O**-3

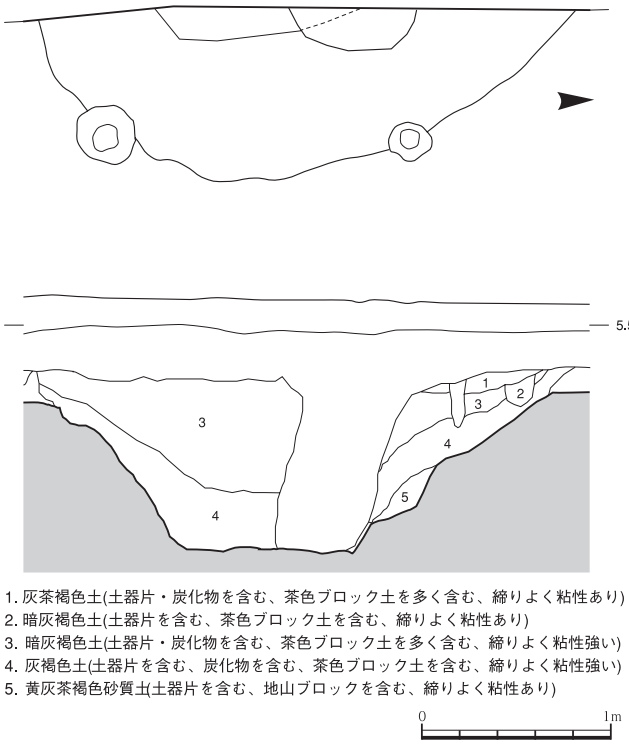
（２）遺構と遺物

井戸跡（SE）

調査区内において２基の井戸跡を確認した。

143SE005（第333図）

調査区北西側で検出した143SE005は西半部が調査区外に展開しているため規模は不明ながら、検出規模は東西0.8m、南北2.8mを測る。井戸の深さについては検出面から約1.22mを測る。土層観察から掘り込みが２段になっているのが確認される。また、規模・形状から井戸跡と推定される。出土遺物は須恵器、弥生土器片、土師器片を含む。時期は出土遺物に８世紀後半代に位置づけられる須恵器の壺片がみられることから、古代の所産である可能性が高い。



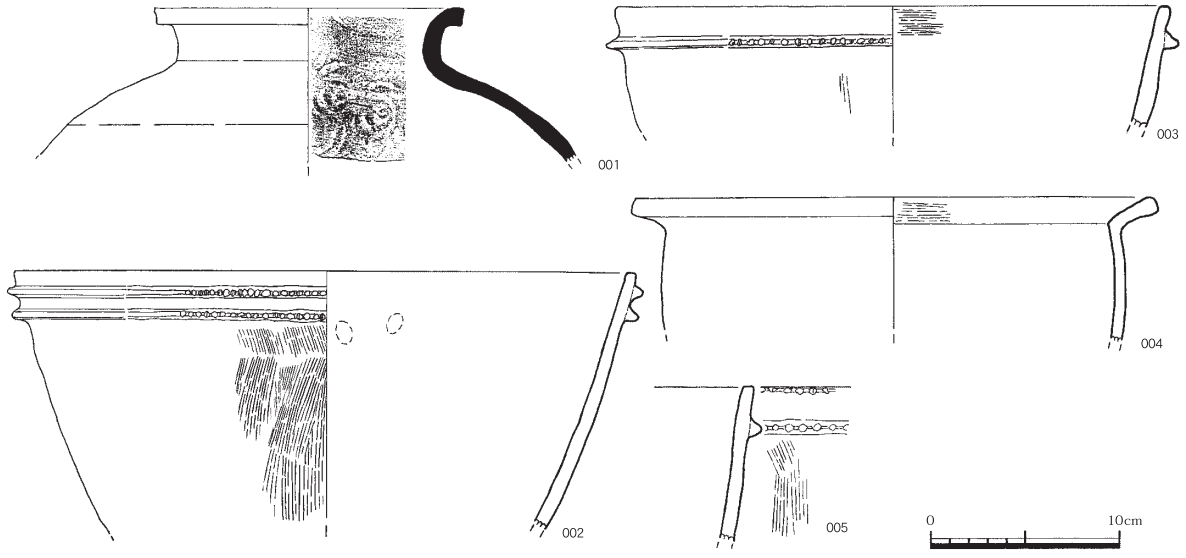
1. 灰茶褐色土(土器片・炭化物を含む、茶色ブロック土を多く含む、締りよく粘性あり)
2. 暗灰褐色土(土器片を含む、茶色ブロック土を含む、締りよく粘性あり)
3. 暗灰褐色土(土器片・炭化物を含む、茶色ブロック土を多く含む、締りよく粘性強い)
4. 灰褐色土(土器片を含む、炭化物を含む、茶色ブロック土を含む、締りよく粘性強い)
5. 黄灰茶褐色砂質土(土器片を含む、地山ブロックを含む、締りよく粘性あり)

0　1m

第333図　SE005平面・土層断面実測図　(1/40)

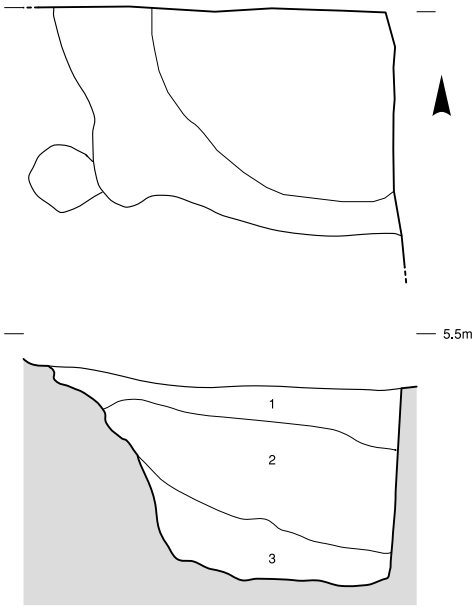
出土遺物（第334図）

出土遺物には弥生土器片が多く見られるが、１点のみ須恵器の壺が出土している。001は須恵器の壺片である。内面にタタキあて具痕がみられる。002・003は下城式甕形土器である。002は口径31.6㎝を測る。刻目突帯が二条みられる。003は復元口径28.8㎝を測る。口縁部下に一条の刻目突帯がみられる。004は東北部九州系の甕形土器である。復元口径26.8㎝を測る。005は下城式甕形土器の口縁部で刻目突帯がみられる。



第334図　SE005出土遺物実測図　(1/4)

143SE015（第335図）



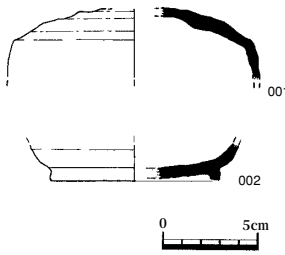
1. 灰茶褐色土（土器片・炭化物を含む、茶色ブロック土を多く含む、締りよく粘性あり）
2. 暗灰褐色土（土器片を含む、茶色ブロック土を含む、締りよく粘性強い）
3. 灰褐色土　（土器片を含む、地山ブロックを含む、締りよく粘性あり）

0　1m

第335図　SE015平面・土層断面実測図　（1/40）

調査区北東隅で検出した井戸跡である。遺構の北半部が調査区外に展開しているため規模は不明である。検出長は東西1.62m、南北1.1m を測る。井戸の深さについては検出面から約1.5m 下の灰白色砂質シルト土で床面がみられた。井戸枠などはみられなかったが、規模・形状から井戸跡と推定される。下部埋土より８世紀後半代の須恵器の坏片が出土していることからこの時期の所産と考えられる。

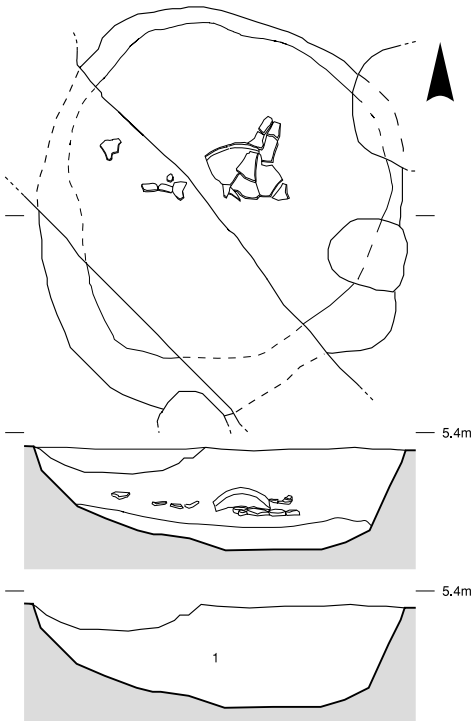
出土遺物（第336図）



第336図　SE015出土遺物実測図（1/4）

出土遺物には須恵器坏片などがみられる。001は須恵器の坏蓋片である。天井部に回転ヘラケズリを施す。002は須恵器の坏身片である。復元底径8.9㎝を測る。高台が付く底部のみ残存している。

貯蔵穴（SK）



1. 暗灰褐色土(土器片・炭化物を含む、黄茶色ブロック土を含む、締りよく粘性あり）

0　1m

第337図　SK020遺構実測図　（1/20）

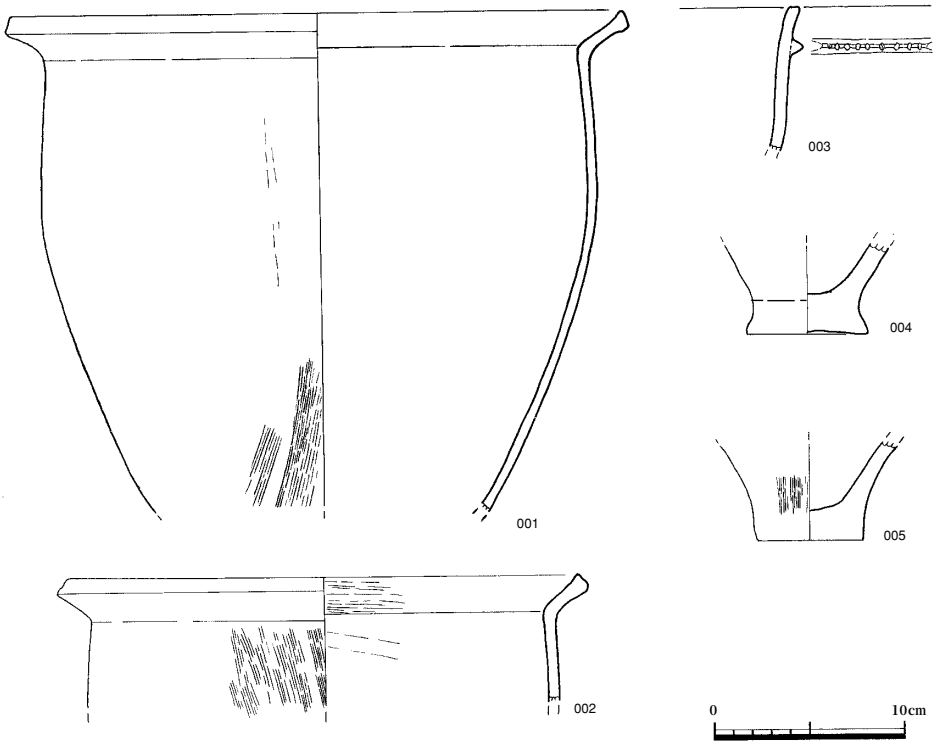
調査区中央部で円形プランを呈する貯蔵穴を２基確認した。いずれも上部は削平を受けており、基底部しか残存していない。

143SK020（第337図）

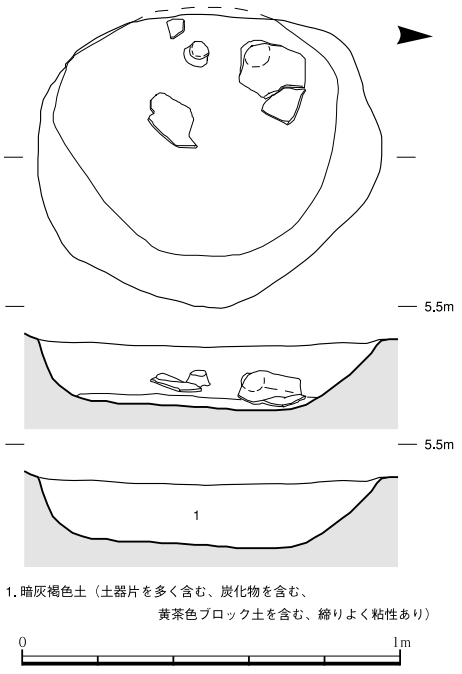
長径1.1m、短径0.94m、深さは検出面から0.3m を測る。底面直上から土器が出土している。出土遺物には下城式甕片、東北部九州系の甕片などがみられ、弥生時代中期前葉～中葉に比定される。

出土遺物（第338図）

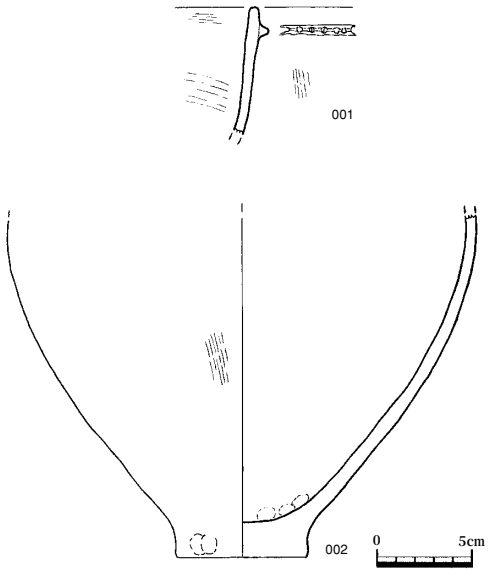
001・002は東北部九州系甕形土器である。001は口縁部が「く」字状に外反し端部を平坦に仕上げたものである。復元口径32.8㎝を測る。002は復元口径26.6㎝を測る。003は下城式甕形土器の口縁部である。一条の刻目突帯を口縁下に貼付する。004は甕の底部で、底径6.4㎝を測る。005は甕の底部で底径5.6㎝を測る。



第338図　SK020出土遺物実測図　(1/4)



第339図　SK025遺構実測図　(1/20)



第340図　SK025出土遺物実測図　(1/4)

143SK025（第339図）

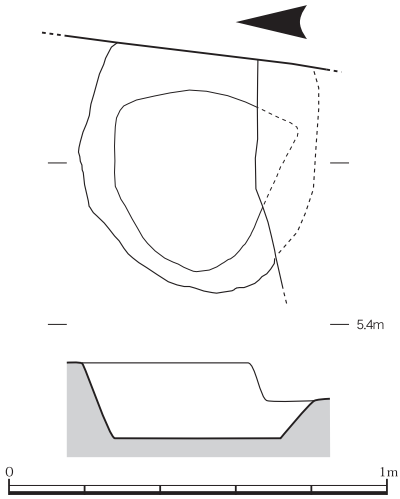
長径0.9m、短径0.77m、遺存深土は検出面から0.25m を測る。底面直上から比較的まとまって土器の出土がみられる。

出土遺物（第340図）

出土遺物には下城式甕片がみられ、弥生時代中期前葉～中葉に比定される。001は下城式甕形土器の口縁部である。刻目突帯が巡る。002は甕の底部で、底径6.9㎝を測る。

墓（ST）

調査区東半で近世墓群を検出した。この墓壙群は、以前に墓地改葬が行われており、墓石などの上部施設は認められない。また、改葬時の撹乱の下部に僅かにプランを確認できるものを含めると調査区内で約20基ほどあるものと思われる。さらに東側の調査区外にかけて墓壙群が展開していた可能性が考えられる。



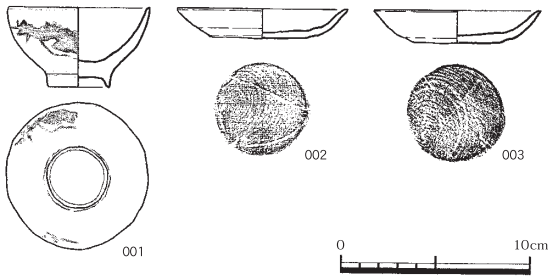
第341図　ST100平面・断面実測図
(1/20)

143ST100（第341図）

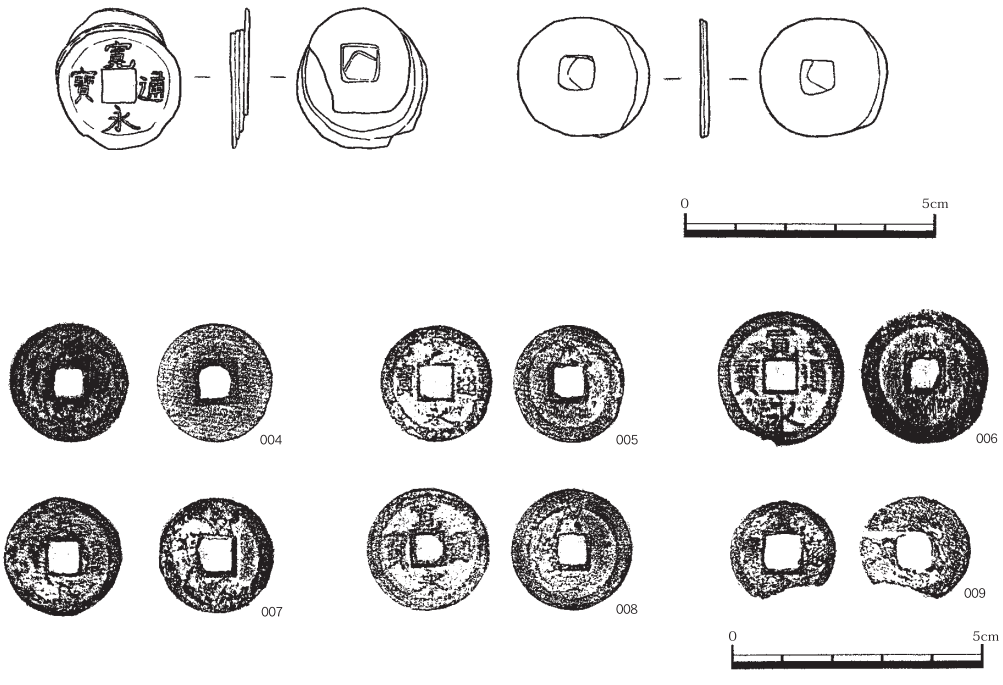
143ST100は楕円形の平面プランを呈する墓壙で、改葬時に伴う撹乱穴によって南側が切られている。墓壙底は水平で、早桶を持つ構造であった可能性が考えられる。墓地改葬によって上部は欠損しており、底面のみ残存している。底径0.5m、深さは検出面より0.1m を測る。

出土遺物（第342・343図）

出土遺物は土師質小皿、肥前系磁器染付碗、六道銭が認められた。001は肥前系磁器染付碗である。胴部外面にはコンニャク印判がみられ、18世紀前半代の製品と考えられる。002・003は土師質小皿である。002は口径8.9cm、器高1.5cm、底径4.6cmを測る。003は口径8.8cm、器高1.7cm、底径4.7cmを測る。いずれも、底部には右回転の糸切



第342図　ST100出土遺物実測図　(1/4)

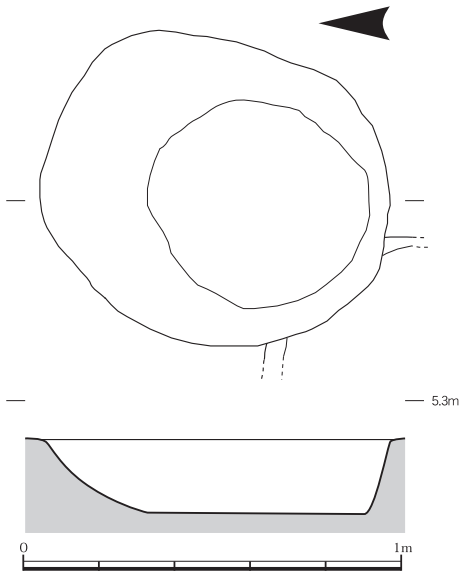


第343図　ST100出土銭　(2/3)

り痕が認められる。改葬土中より銭貨５枚（寛永通宝）が出土した。出土位置から棺内副葬品と推定される。004～007は初鋳年代が1697年となる新寛永銭。008は初鋳年代が1636年となる古寛永銭。009は初鋳年代が1739年となる鉄銭である。

143ST101（第344図）

143ST101は楕円形の平面プランを呈する墓壙で、墓壙底は水平で、早桶を持つ構造であった可能性が考えられる。墓地改葬によって上部は欠損しており、底面のみ残存している。底径0.55m、現存深度は0.1m を測る。143ST101は土器片のみの出土であり、帰属時期は特定できなかった。



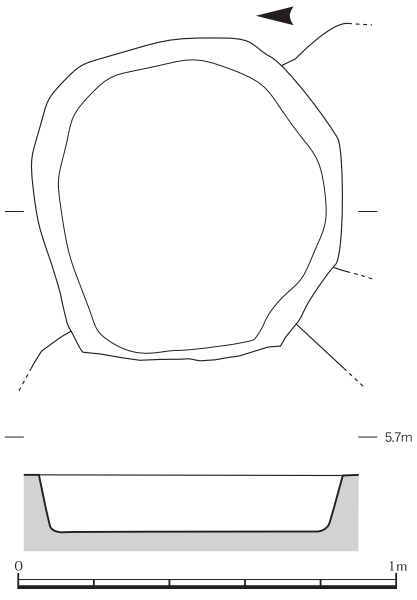
第344図　ST101平面・断面実測図　(1/20)

143ST102（第345図）

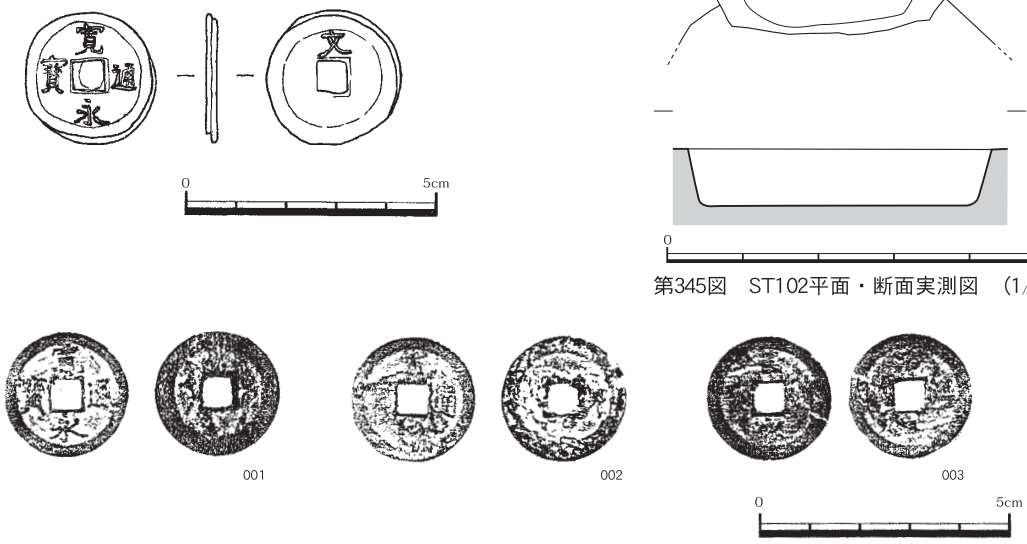
143ST102は143ST101と同様に楕円形の平面プランを呈する墓壙である。墓壙底は水平で、早桶を持つ構造であった可能性が考えられる。墓地改葬によって上部は欠損しており、底面のみ残存している。底径0.85m、深さは他のよりも若干深く0.15m を測る。

出土遺物（第346図）

143ST102は六道銭がみられる他は土器片のみで同じく時期の特定はできなかった。底面付近で六道銭と思われる銭貨３枚（寛永通宝）が出土した。３枚とも初鋳年代が1697年となる新寛永銭である。



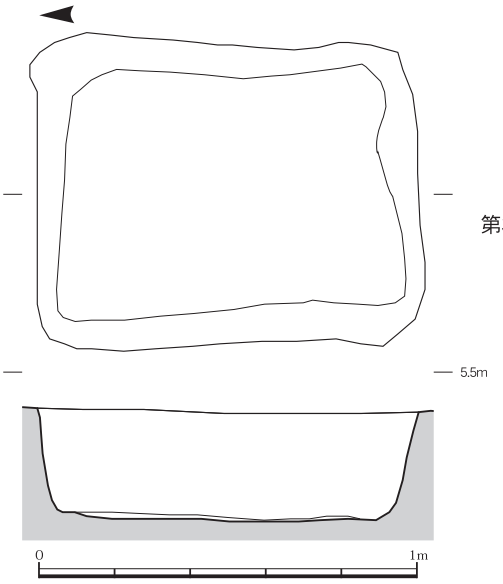
第345図　ST102平面・断面実測図　(1/20)



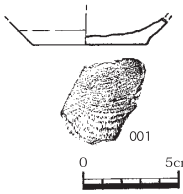
第346図　ST102出土銭　(2/3)

143ST103（第347図）

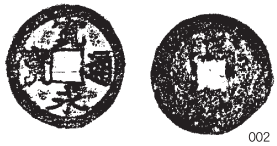
143ST103は改葬に伴う撹乱により上部は欠損している。方形の平面プランを呈する墓壙である。墓壙の規模は長軸0.85m、短軸0.7m、深さは検出面より0.3mを測る。掘方の形態は方形で、墓壙底は水平で、使用された棺は木製の方形棺と推定される。

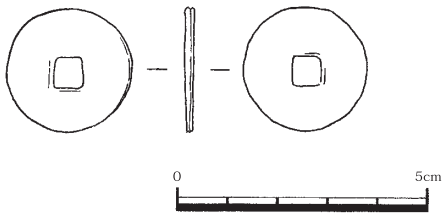


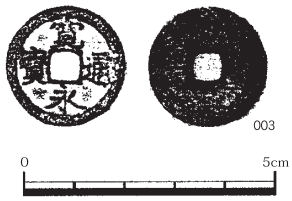
第347図　ST103平面・断面実測図　(1/20)



第348図　ST103出土遺物実測図　(1/4)





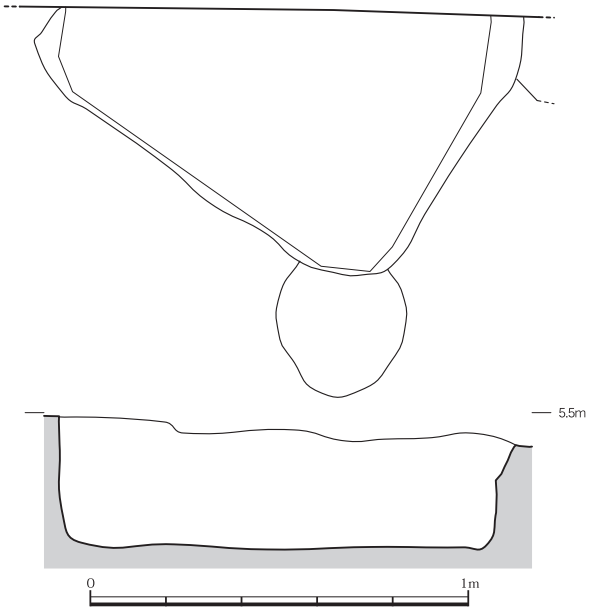


第349図　ST103出土銭　(2/3)

出土遺物（第348・349図）

出土遺物は土師器小皿、六道銭などがみられる。001は土師器小皿であり、復元底径5.8cmを測る。底部には右回転の糸切り痕がみられる。この土師器小皿の形状から時期は19世紀前半と考えられる。底面付近で六道銭と思われる銭貨２枚（寛永通宝）が出土した。２枚とも初鋳年代が1636年となる古寛永銭である。

143ST104（第350図）

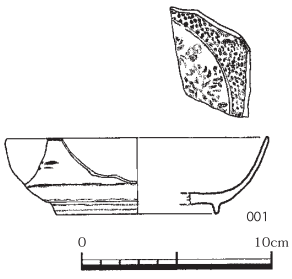


第350図　ST104平面・断面実測図　(1/20)

143ST104は調査区北壁に位置する方形の平面プランを呈する墓壙である。約半分ほどが調査区外にのびている。墓壙の規模は長軸検出長約1.1m、短軸0.8m、深さは検出面から0.45mを測る。埋土より棺材片を確認した。墓壙底は水平であり、使用された棺は木製の方形棺と推定される。

出土遺物（第351図）

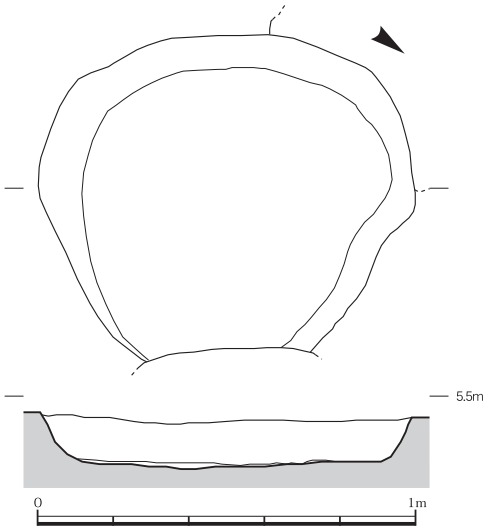
001は肥前系磁器染付碗片である。型紙摺印判であり、19世紀後半代の製品と考えられる。



第351図　ST104出土遺物実測図　(1/4)

143ST105（第352図）

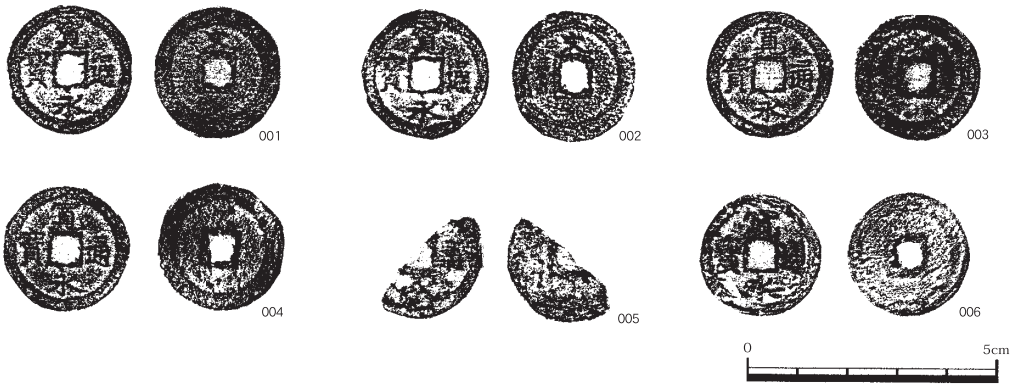
143ST105は楕円形の平面プランを呈する墓壙である。北側を143ST101に切られている。墓壙の規模は底径0.8m、深さは検出面から0.15m を測る。改葬時に削られており、底面のみ残存している。埋土は改葬土である。埋葬主体部の床面から人骨片を検出した。



第352図　ST105平面・断面実測図　(1/20)

出土遺物（第353図）

出土遺物は六道銭がみられる他は土器小片のみであり、帰属時期は特定できない。底面付近で六道銭と思われる６枚の銭貨（寛永通宝）がみられる。001～004は初鋳年代が1668年となる文銭。005は初鋳年代が1697年となる新寛永銭。006は初鋳年代が1636年となる古寛永銭である。



第353図　ST105出土銭　(2/3)

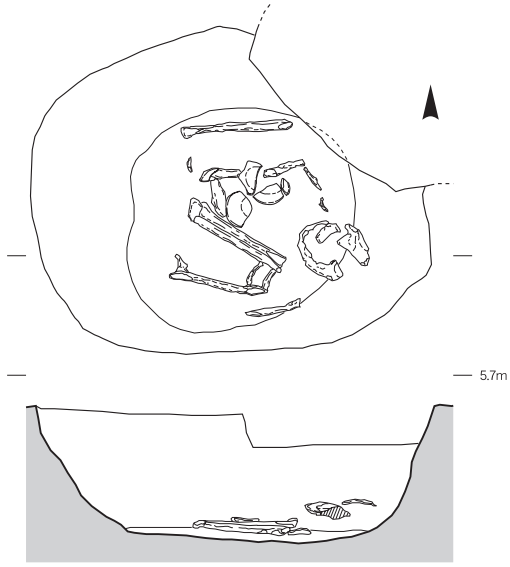
143ST106（第354図）

143ST106は楕円形の平面プランを呈する墓壙である。墓壙の規模は底径約0.7m、深さは検出面から0.4m を測る。墓壙底は水平で、使用された棺は早桶と推定される。埋葬主体から頭部は東を向き、膝を曲げた状態の人骨を検出した。

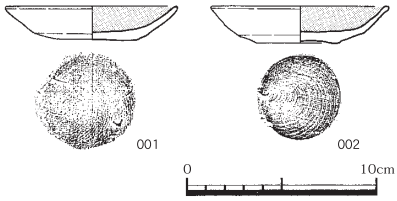
出土遺物（第355・356図）

出土遺物は施釉土師質小皿２枚、六道銭の出土が認められた。施釉土師質小皿の形状から、時期は19世紀後半に位置づけられる。001・002は施釉土師質小皿である。001は口径9.1cm、器高1.7cm、底径4.1cmを測る。002は口径9.4cm、器高1.9cm、底径4.3cmを測る。遺構底面付近から六道銭と思われる５枚の銭貨がみられる。003・004は初鋳年代が1636年となる古寛永銭。005は初鋳年代が1668年と

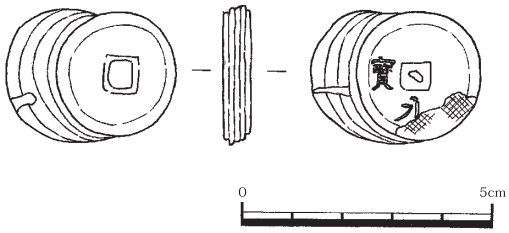
なる新寛永文銭。006・007は初鋳年代が1697年となる新寛永銭である。

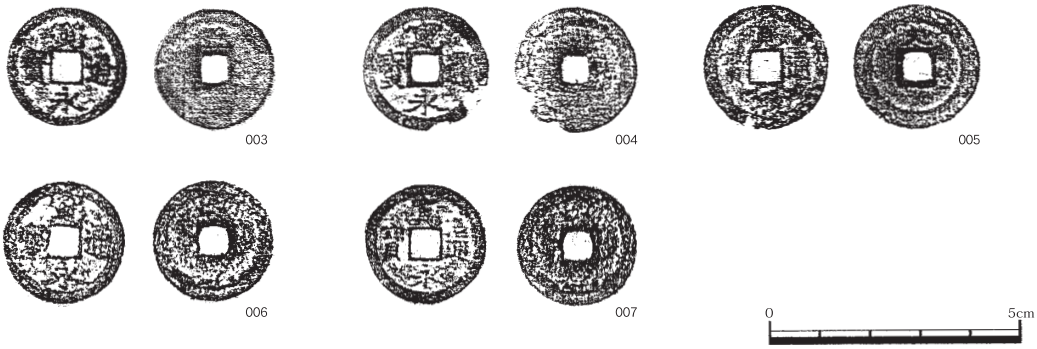


第354図　ST106平面・断面実測図　(1/20)



第355図　ST106出土遺物実測図　(1/4)





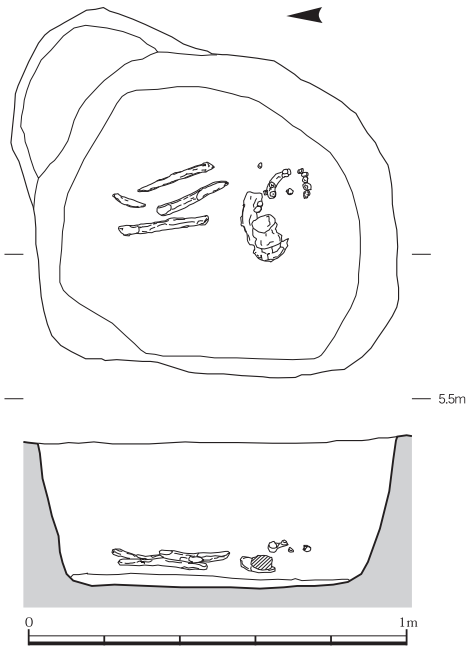
第356図　ST106出土銭　(2/3)

143ST107（第357図）

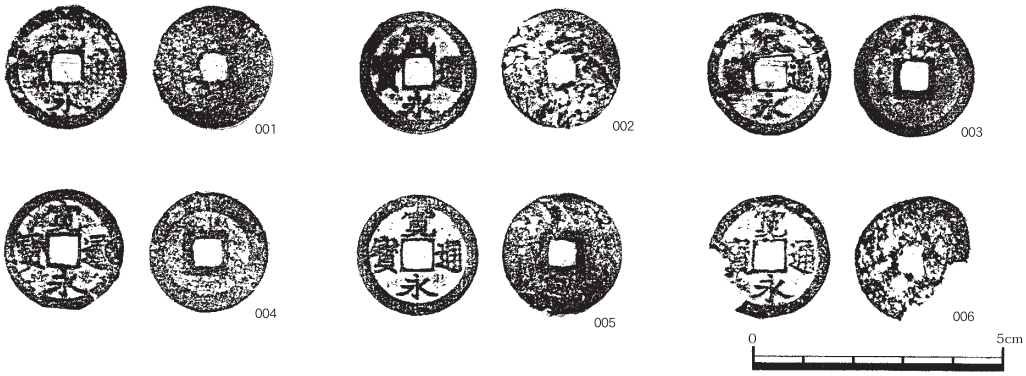
143ST107は楕円形の平面プランを呈する墓壙である。墓壙の規模は底径約0.75m、深さは検出面から0.4mを測る。墓壙底は水平で、使用された棺は早桶と推定される。埋葬主体部から人骨1体分を検出したが、遺存状態は良好でない。出土遺物には六道銭がみられる他は土器小片のみで、帰属時期の特定は行えない。

出土遺物（第358図）

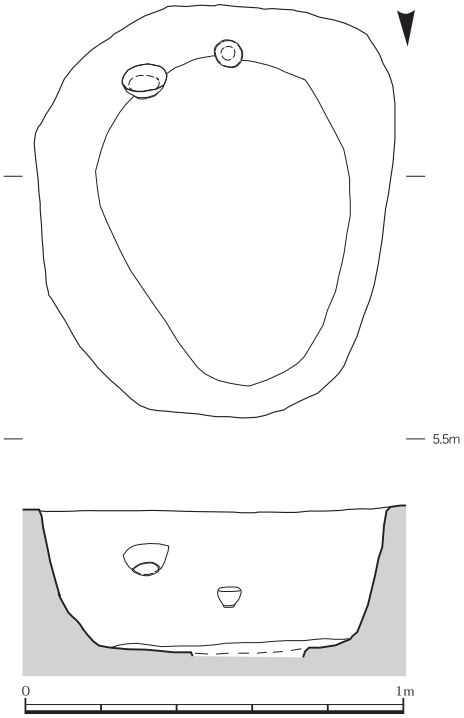
底面付近で六道銭と思われる6枚の銭貨（寛永通宝）がみられる。001～005は初鋳年代が1636年となる古寛永銭。006は初鋳年代が1697年となる新寛永銭である。



第357図　ST107平面・断面実測図　(1/20)



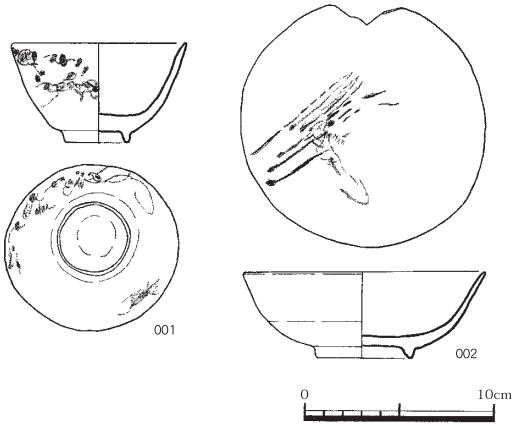
第358図　ST107出土銭　(2/3)



第359図　ST108平面・断面実測図　(1/20)

143ST108（第359図）

143ST108は楕円形の平面プランを呈する墓壙である。墓壙の規模は底径0.75m、深さは検出面から0.4mを測る。墓壙底は水平で、使用された棺は早桶と推定される。埋葬主体から人骨片を検出した。



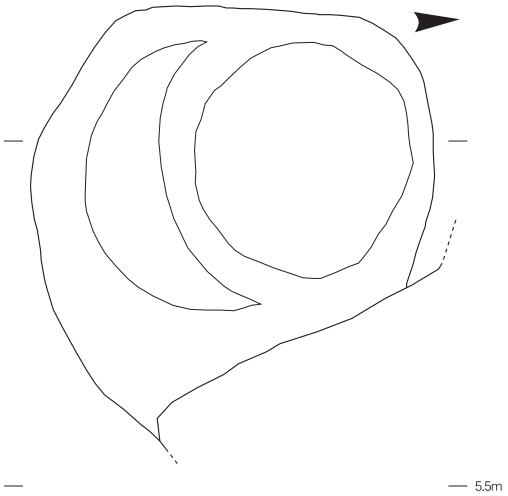
第360図　ST108出土遺物実測図　(1/4)

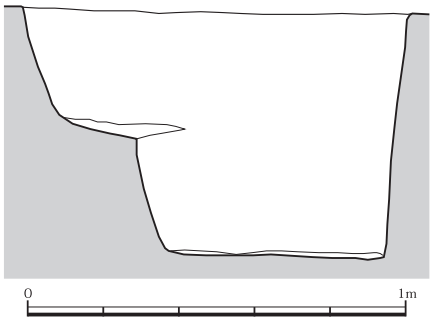
出土遺物（第360図）

出土遺物は肥前系陶器碗、土師質小皿片等の出土を確認した。001は肥前系磁器染付碗である。17世紀後半代の製品である。002は肥前系京焼風陶器平碗である。17世紀中～後半代の製作年代が推定される。

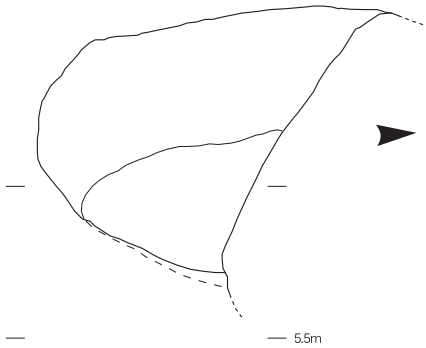
143ST109（第361図）

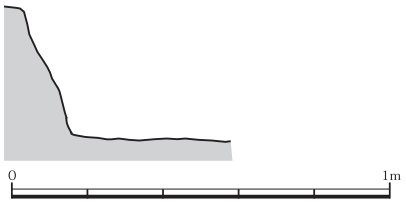
143ST109は楕円形の平面プランを呈する墓壙で、約半分を改葬時の撹乱穴によって切られている。墓壙の規模は底径約0.8m、検出面からの深さ0.6mを測る。墓壙底は水平で、使用された棺は早桶と推定される。埋葬主体から人骨片を検出した。所産年代については出土遺物が土器片のみであり、特定できなかった。



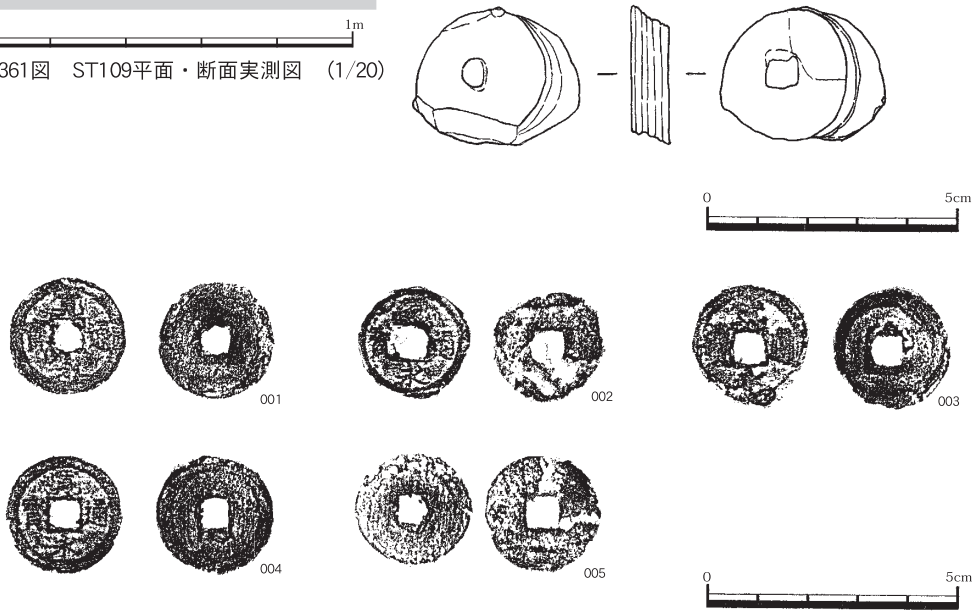


第361図　ST109平面・断面実測図　(1/20)





第362図　ST110平面・断面実測図　(1/20)



第363図　ST110出土銭　(2/3)

143ST110（第362図）

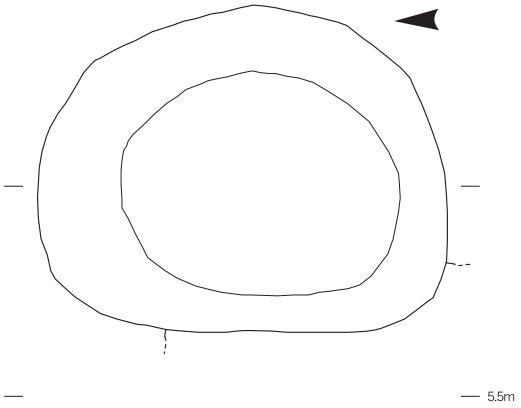
143ST110は楕円形の平面プランを呈する墓壙で、北側部分を143ST107により切られている。墓壙の規模は底径0.5m、検出面からの深さ0.4m を測る。

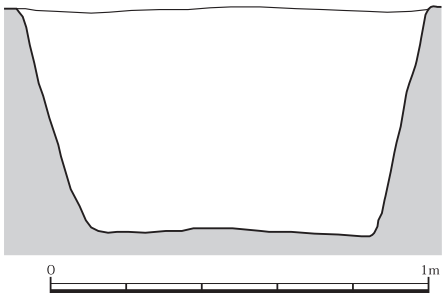
出土遺物（第363図）

底面付近より六道銭と思われる５枚の銭貨（寛永通宝）がみられる。001は初鋳年代が1697年となる新寛永銭である。002～004は初鋳年代が1739年となる鉄銭である。005は分類不能の銅銭である。

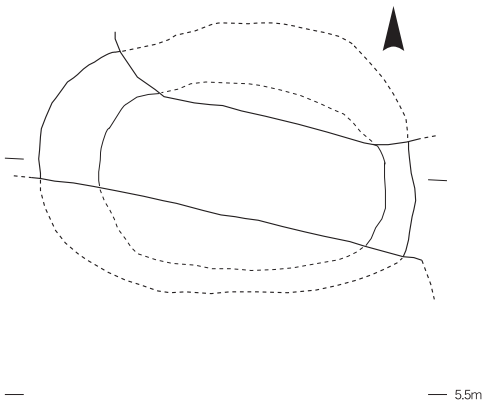
143ST111（第364図）

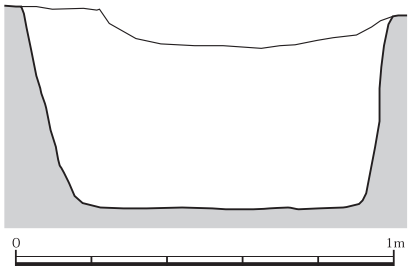
143ST111は楕円形の平面プランを呈する墓壙で、西側は143ST103により切られている。墓壙の規模は底径0.75m、深さは検出面から0.6m を測る。墓壙底は水平で、使用された棺は早桶と推定される。出土遺物は土器片のみで時期は特定できなかった。





第364図　ST111平面・断面実測図　(1/20)





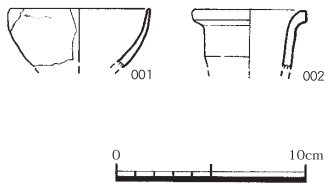
第365図　ST112平面・断面実測図　(1/20)

143ST112（第365図）

143ST112は楕円形の平面プランを呈する墓壙である。北側は143ST108、南側は改葬時の撹乱によって切られている。墓壙の規模は底径0.8m、深さは検出面から0.5m を測る。

出土遺物（第366図）

出土遺物には肥前系磁器染付碗がある。001は肥前系磁器染付碗である。19世紀後半代の製品である。002は唐津系陶器の徳利の口縁部である。



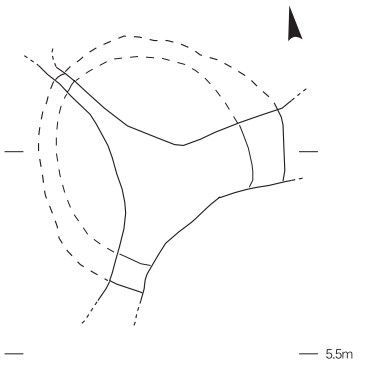
第366図　ST112出土遺物実測図　(1/4)

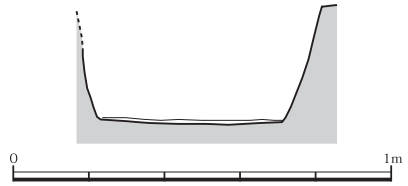
143ST113（第367図）

143ST113は楕円形の平面プランを呈する墓壙である。北側を143ST105、西側を143ST102により切られている。墓壙の規模は底径0.5m、検出面からの残存深度0.3m を測る。墓壙底は水平で、使用された棺は早桶と推定される。

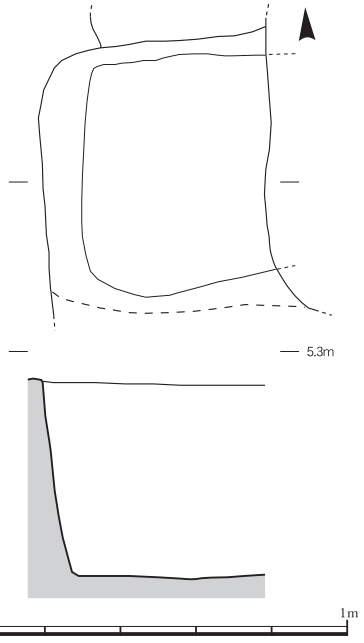
出土遺物（第368図）

出土遺物は六道銭がみられる他は土器片のみであり、時期を特定することはできなかった。底面付近で棺材片に付着し、布に包まれた状態の六道銭と思われる6 枚の銭貨が認められた。当該遺物は布

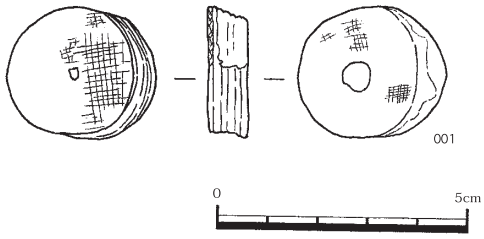




第367図　ST113平面・断面実測図　(1/20)



第369図　ST114平面・断面実測図　(1/20)



第368図　ST113出土銭　(2/3)

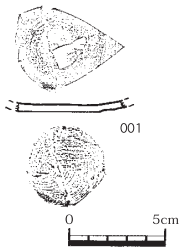
の状態が良好であるため、六道銭１枚１枚の剥ぎ取りを行っておらず、銭種等の詳細は不明である。

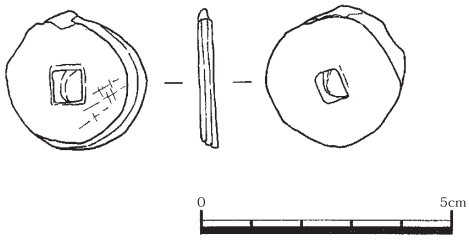
143ST114（第369図）

143ST114は方形の平面プランを呈する墓壙である。東側は143ST111により切られている。墓壙の規模は底径検出長0.6m、深さは検出面から0.5mを測る。墓壙の掘方から方形棺と推定される。

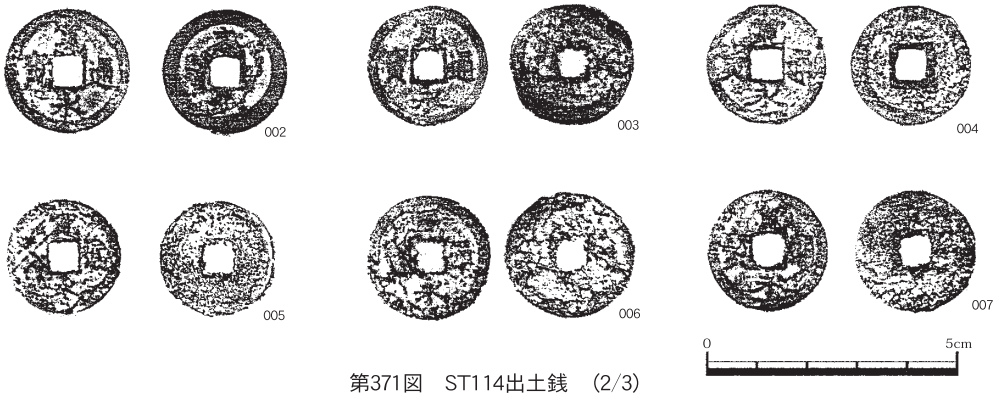
出土遺物（第370・371図）

出土遺物には土師器小皿片、六道銭がある。001は土師器小皿であり底部のみが残存している。底径4.3㎝を測る。底部には右回転の糸切り痕が認められる。時期は出土した土師器小皿の特徴から19世紀前半と考えられる。底面付近より六道銭と思われる６枚の銭貨（寛永通宝）がまとまって出土している。002は初鋳年代が1668年となる文銭。003～005は初鋳年代が1697年となる新寛永銭。006・007は初鋳年代が1636年となる古寛永銭である。

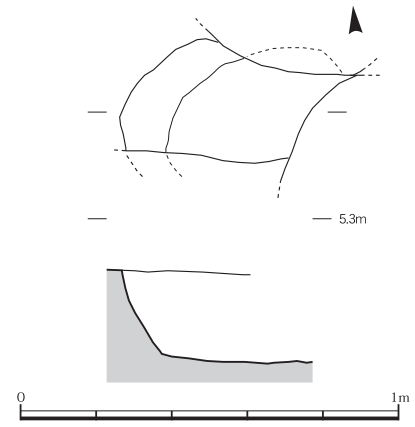




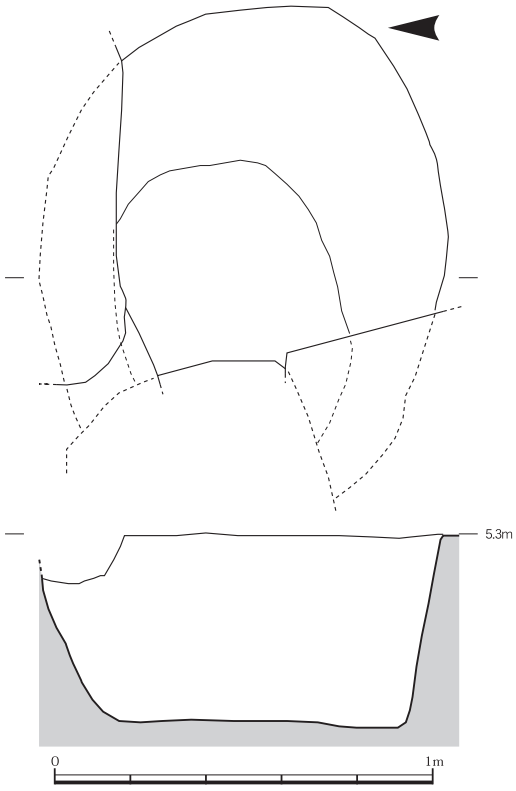
第370図　ST114出土遺物実測図　(1/4)



第371図　ST114出土銭　(2/3)



第372図　ST115平面・断面実測図　(1/20)



第374図　ST116平面・断面実測図　(1/20)

143ST115（第372図）

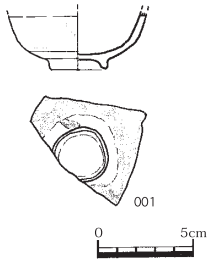
143ST115は楕円形の平面プランを呈する墓壙で、東側を143ST111、南側を143ST103によって切られている。墓壙の規模は底径検出長0.25m、現存深度0.3mを測る。墓壙底は水平で、使用された棺は早桶と推定される。



第373図　ST115出土遺物実測図　(1/4)

出土遺物（第373図）

出土遺物001は土師器小皿片である。001は口縁部のみ残存している。復元口径11.8㎝を測る墓壙の構築時期は土師器小皿の特徴から19世紀前半と考えられる。



第375図　ST116出土遺物実測図　(1/4)

143ST116（第374図）

143ST116は楕円形の平面プランを呈する墓壙で、南側は墓地改葬時の撹乱、西側は143ST112に切られている。墓壙の規模は長軸0.8m、深さは検出面から0.5m を測る。墓壙底は水平である。底面に正方形の木棺の痕跡が確認されたため方形棺であると考えられる。

出土遺物（第375図）

出土遺物には床面付近より関西系陶器が出土している。001は関西系陶器碗であり、18世紀前半代の製品と考えられる。

（3）小結

今回の調査では近代墓・近世墓を約20基ほど確認した。区画整理の際に墓地改葬が行われており、墓石などの上部施設は既に存在していなかった。そのため、構築年代の把握は難しい。そのなかで時期を押さえることができる土坑の形態や出土遺物について検討してみる。

墓坑の形態は調査区内において、平面形態が円形、平面形態が方形を呈する掘方の内部に円形の掘方を有するもの、平面形態が方形を呈する掘方を有するものなど大きく３種類のものが確認できた。円形の掘方を呈するものについては、円形木棺（早桶）。方形の掘方を呈するものについては、箱型木棺（方形棺）が使用されたものと考えられる。埋葬姿勢は膝を曲げて座った状態の座棺である。

第89表　墓壙出土銭貨

遺構	六道銭	出土位置	出土状態	挿図番号
ST100	古寛永（1636）２枚、新寛永（1697）３枚　鉄銭（1739）１枚	改葬土	６枚錆着	343
ST102	新寛永（1697）３枚	棺内底部中央	３枚錆着	346
ST103	古寛永（1636）２枚	棺内底部中央	２枚錆着	349
ST105	古寛永（1636）１枚、文銭（1668）４枚　新寛永（1697）１枚	棺内底部中央		353
ST106	古寛永（1636）２枚、文銭（1668）１枚　新寛永（1697）２枚	棺内底部北寄り		356
ST107	古寛永（1636）５枚、新寛永（1697）１枚	棺内底部中央	１枚ずつ離れて	358
ST110	新寛永（1697）１枚、鉄銭（1739）３枚　不明銅銭　１枚	棺内底部南寄り		363
ST113	推定寛永銭　６枚	棺内底部中央	６枚錆着	368
ST114	古寛永（1636）２枚、文銭（1668）１枚　新寛永（1697）３枚	棺内底部中央		371

調査区内で確認された約20基の墓壙のうち円形木棺（早桶）を使用したのは16基、箱型木棺（方形棺）を使用したものは４基である。墓石などがないため詳細な時期は不明であるが、出土した遺物をみると、墓地が構築された年代は、17世紀後半代～19世紀後半代までに位置づけられることができる。このことから、近世～近代にかけて両方の棺が使用されたことがわかる。このような事例は大分市内の各近世墓においても同様に併存が認められる。

大分市内に所在する近世墓地の埋葬主体は早桶や方形棺などの座棺が主流である。市内に所在する机張原女狐近世墓地では、18世紀前半段階に墓地の形成が始まった当初から早桶が使用され、一貫して明治30年代まで継続して使用される(註１)。それに対し、市内に所在する鴛野中尾近世墓地では、様相が異なり、墓地の形成が始まる17世紀後半代に早桶の使用が認められた。18世紀代では埋葬に使用される棺の主体となる。ところが18世紀後半代から方形棺が使用されるようになり、1790年以降には早桶から方形棺へと棺の主体となる(註２)。このことから、大分市内に所在する近世墓地は、個々の墓地によって棺の変遷に少異が認められる。今回の調査区で確認された墓壙群は、上部施設が無いため、時期を求めることは難しいが、２種類の棺が存在していることから、他の近世墓地でみられるような変遷があったことが考えられる。

墓壙内から出土した遺物では、17世紀後半～19世紀後半に位置づけられる遺物がみられる。しかし、先述したが、墓地改葬を受けており、墓石が存在していないため、これらの墓地群の形成された時期や埋葬された時期は特定できない。しかし、出土遺物から時期を特定できるものがいくつかの墓壙からみられ、そのなかで、ほぼ完形に近い土師質小皿が140ST100より２枚出土している。ロクロ土師器で口縁が大きく開いている形状から18世紀中頃～後半と考えられる。それから施釉土師質小皿が140ST106より２枚出土している。施釉したロクロ土師器で、底部内面に赤色顔料を塗り、その後ニカワ状の厚い柿釉を施している。底部外面は無釉である。形状から19世紀後半～末頃に位置づけられる(註３)。

近世墓からの代表的な出土遺物で六道銭がある。調査区内では六道銭と思われる銭貨が出土した墓は８基を数える。六道銭はいずれも墓壙の底面付近で出土している。出土した銭貨の枚数は、６枚で出土するのもあれば、２～３枚と墓によって異なる。市内に所在する机張原女狐近世墓地では、男性墓には６枚セット、女性墓には２枚または１枚、幼児墓には１枚あるいは無しという具合に、六道銭の枚数が年齢と性別によって相違がみられることを指摘されている(註４)。そのことから、今回の調査区内では上部施設が存在しないため、男性墓、女性墓の区別は難しいが、出土する六道銭の枚数の差によって男性墓と女性墓がわかることは大きな成果であると思われる。これをあてはめていくと、

140ST100・105・106・113・114はほぼ６枚セットで出土しており、成人男性墓である可能性が考えられる。

今回の調査では、20基ほど近代墓・近世墓が確認された。出土遺物から17世紀後半～19世紀後半代の時期にわたって埋葬が行われていたと考えられる。また、調査区およびこの周辺にいくつかの墓地群が形成されていたことが、区画整理前の状況や周辺の調査結果からわかってきている。調査地周辺は近世段階より集落があり、それに伴う墓地が形成されていたと考えられる。また、区画整理前において、約100年前までの年月日を記した墓石もあったとの情報を近所の住民の方から聞くことができた。また、それに関連する事で、明治30年代に墓地は人家等から60間以上隔てることを決め、この規定に適合しない墓地の埋葬を禁止する法令が全国的に施行された。大分県においても、明治35年（1902年）「墓地及埋葬制限細則」が改正されたことにより、この墓地群での埋葬が終焉したと考えられる。

その他の検出した遺構は、区画整理や後世の開発によって残りは良くないが、主な遺構として、弥生時代中期前葉の貯蔵穴がみられた。南側に隣接する第58次調査区やその周辺の調査区で同様な遺構が確認されており、当該時期の住居跡、貯蔵穴などがみられ、調査地周辺に集落が展開していることが想定されている。古代の遺構では、２基の井戸跡が確認されているが、調査区周辺に古代の遺構群が展開しているものと考えられる。

註１　田中裕介　1996「墓壙と棺」『女狐近世墓地』九州横断自動車道関係調査報告書５　大分県教育委員会

註２　吉田　寛　1999『中尾近世墓地』大分県教育委員会

註３　田中裕介　1996「土師質小皿」『女狐近世墓地』九州横断自動車道関係調査報告書５　大分県教育委員会

註４　田中裕介　1996「銭貨類」『女狐近世墓地』九州横断自動車道関係調査報告書５　大分県教育委員会

田中裕介　1996『女狐近世墓地』九州横断自動車道関係調査報告書５　大分県教育委員会

吉田　寛　1999『中尾近世墓地』大分県教育委員会

第90表　遺物観察表①

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
143**SE**005-001	334	須恵器	甕	石英	灰色	灰色	あて具痕	ヨコナデ	(14.6)				口縁部～胴部	
143**SE**005-002	334	弥生	甕	石英 角閃石	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ	ハケ目 ナデ	31.6				口縁部～胴部	下城式 ハケ目（7～10本／cm）
143**SE**005-003	334	弥生	甕	角閃石 黒雲母	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ	ハケ目 ナデ	(28.8)				口縁部のみ	下城式 ハケ目（6～7本／cm）
143**SE**005-004	334	弥生	甕	角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ	ハケ目 ナデ	(26.8)				口縁部のみ	東北部九州系 ハケ目（5～6本／cm）
143**SE**005-005	334	弥生	甕	石英 角閃石	淡茶灰褐色	淡茶褐色	ナデ	ハケ目 ナデ					口縁部のみ	下城式 ハケ目（5～6本／cm）
143**SE**015-001	336	須恵器	蓋	白色粒子	灰色	灰色	ヨコナデ	ヨコナデ 回転ヘラケズリ					胴部のみ	
143**SE**015-002	336	須恵器	坏	砂粒	灰色	灰色	回転ナデ	ヘラケズリ ヨコナデ				(8.9)	底部のみ	
143**SK**020-001	338	弥生	甕	石英 角閃石	茶灰褐色	茶灰褐色	ナデ	ハケ目 ナデ	(32.8)				口縁部～胴部	東北部九州系 ハケ目（7～8本／cm）
143**SK**020-002	338	弥生	甕	角閃石 長石	茶灰褐色	茶灰褐色	ナデ	ハケ目 ナデ	(26.6)				口縁部のみ	東北部九州系 ハケ目（5～6本／cm）
143**SK**020-003	338	弥生	甕	石英 金雲母	灰褐色	灰茶褐色	ナデ	ナデ					口縁部のみ	下城式
143**SK**020-004	338	弥生	甕	角閃石 長石	暗灰茶褐色	暗灰褐色	ナデ	ハケ目 ナデ				6.4	底部のみ	ハケ目（8本／cm）
143**SK**020-005	338	弥生	甕	角閃石	茶灰褐色	茶灰褐色	ナデ	ナデ				5.6	底部のみ	
143**SK**025-001	340	弥生	甕	角閃石	茶褐色	灰茶褐色	ナデ	ナデ					口縁部のみ	下城式
143**SK**025-002	340	弥生	甕	角閃石 長石	茶灰褐色	茶灰褐色	ナデ	ハケ目 ナデ				6.9	胴部～底部	ハケ目（5～6本／cm）
143**ST**100-001	342	陶磁器												別表
143**ST**100-002	342	土師器	小皿	砂粒	淡茶褐色	淡茶褐色	回転ナデ	回転糸切り離し	8.9	1.5		4.6	完存	
143**ST**100-003	342	土師器	小皿	砂粒	茶褐色	茶褐色	回転ナデ	回転糸切り離し	8.8	1.7		4.7	完存	
143**ST**100-004	343	古銭												別表
143**ST**100-005	343	古銭												別表
143**ST**100-006	343	古銭												別表
143**ST**100-007	343	古銭												別表
143**ST**100-008	343	古銭												別表
143**ST**100-009	343	古銭												別表
143**ST**102-001	346	古銭												別表
143**ST**102-002	346	古銭												別表
143**ST**102-003	346	古銭												別表
143**ST**103-001	348	土師器	小皿	砂粒	茶褐色	茶褐色	回転ナデ	回転糸切り離し				(5.8)	全体1／5	
143**ST**103-002	349	古銭												別表
143**ST**103-003	349	古銭												別表
143**ST**104-001	351	陶磁器												別表
143**ST**105-001	353	古銭												別表
143**ST**105-002	353	古銭												別表
143**ST**105-003	353	古銭												別表
143**ST**105-004	353	古銭												別表

第91表　遺物観察表②

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
143**ST**105-005	353	古銭												別表
143**ST**105-006	353	古銭												別表
143**ST**106-001	355	土師質	小皿	砂粒	黄橙色	淡茶褐色	回転ナデ	回転ナデ	9.1	1.7		4.1	完存	透明釉
143**ST**106-002	355	土師質	小皿	砂粒	黄橙色	淡茶褐色	回転ナデ	回転ナデ	9.4	1.9		4.3	完存	透明釉
143**ST**106-003	356	古銭												別表
143**ST**106-004	356	古銭												別表
143**ST**106-005	356	古銭												別表
143**ST**106-006	356	古銭												別表
143**ST**106-007	356	古銭												別表
143**ST**107-001	358	古銭												別表
143**ST**107-002	358	古銭												別表
143**ST**107-003	358	古銭												別表
143**ST**107-004	358	古銭												別表
143**ST**107-005	358	古銭												別表
143**ST**107-006	358	古銭												別表
143**ST**108-001	360	陶磁器												別表
143**ST**108-002	360	陶磁器												別表
143**ST**110-001	363	古銭												別表
143**ST**110-002	363	古銭												別表
143**ST**110-003	363	古銭												別表
143**ST**110-004	363	古銭												別表
143**ST**110-005	363	古銭												別表
143**ST**112-001	366	陶磁器												別表
143**ST**112-002	366	陶磁器												別表
143**ST**113-001	368	古銭												別表
143**ST**114-001	370	土師器	小皿	砂粒	淡茶褐色	淡茶褐色	回転ナデ	回転糸切り離し				4.3	底部のみ	
143**ST**114-002	371	古銭												別表
143**ST**114-003	371	古銭												別表
143**ST**114-004	371	古銭												別表
143**ST**114-005	371	古銭												別表
143**ST**114-006	371	古銭												別表
143**ST**114-007	371	古銭												別表
143**ST**115-001	373	土師器	小皿	砂粒	茶褐色	淡茶褐色	回転ナデ	回転ナデ	(11.8)				口縁部のみ	
143**ST**116-001	375	陶磁器												別表

第92表　陶磁器観察表

遺物番号	挿図番号	器種		装飾		法量（cm）			産地	備考
		種類	器種	絵付 釉薬	文様	口径	器高	底径		
143**ST**100-001	342	磁器	碗	染付	外コンニャク印判	7.5	4.2	3.3	肥前系	完存
143**ST**104-001	351	磁器	皿	染付	内型紙摺印判 外型紙摺印判	(13.6)	4.0		肥前系	
143**ST**108-001	360	磁器	碗	染付	外コンニャク印判	9.2	5.2	3.3	肥前系	完存
143**ST**108-002	360	陶器	平碗	透明	内山水文	8.8	4.5		肥前系	ほぼ完存 京焼風
143**ST**112-001	366	磁器	碗	染付		(7.5)			肥前系	
143**ST**112-002	366	陶器	徳利	透明		(6.0)			唐津系	
143**ST**116-001	375	陶器	碗	透明					関西系	

第93表　古銭観察表

遺構番号	挿図番号	種類	出土位置	出土状態	備考
143**ST**100-004	343	新寛永銭１枚	改葬土	６枚錆着	
143**ST**100-005	343	新寛永銭１枚	改葬土	６枚錆着	
143**ST**100-006	343	新寛永銭１枚	改葬土	６枚錆着	
143**ST**100-007	343	新寛永銭１枚	改葬土	６枚錆着	
143**ST**100-008	343	古寛永銭１枚	改葬土	６枚錆着	
143**ST**100-009	343	不明鉄銭１枚	改葬土	６枚錆着	
143**ST**102-001	346	新寛永銭１枚	棺内底部中央	３枚錆着	
143**ST**102-002	346	新寛永銭１枚	棺内底部中央	４枚錆着	
143**ST**102-003	346	新寛永銭１枚	棺内底部中央	５枚錆着	
143**ST**103-002	349	古寛永銭１枚	棺内底部中央	２枚錆着	
143**ST**103-003	349	古寛永銭１枚	棺内底部中央	３枚錆着	
143**ST**105-001	353	文銭１枚	棺内底部中央		
143**ST**105-002	353	文銭１枚	棺内底部中央		
143**ST**105-003	353	文銭１枚	棺内底部中央		
143**ST**105-004	353	文銭１枚	棺内底部中央		
143**ST**105-005	353	新寛永銭１枚	棺内底部中央		
143**ST**105-006	353	古寛永銭１枚	棺内底部中央		
143**ST**106-003	356	古寛永銭１枚	棺内底部北寄り		
143**ST**106-004	356	古寛永銭１枚	棺内底部北寄り		
143**ST**106-005	356	新寛永銭１枚	棺内底部北寄り		
143**ST**106-006	356	新寛永銭１枚	棺内底部北寄り		
143**ST**106-007	356	新寛永銭１枚	棺内底部北寄り		
143**ST**107-001	358	古寛永銭１枚	棺内底部中央	１枚ずつ離れて	
143**ST**107-002	358	古寛永銭１枚	棺内底部中央	１枚ずつ離れて	
143**ST**107-003	358	古寛永銭１枚	棺内底部中央	１枚ずつ離れて	
143**ST**107-004	358	古寛永銭１枚	棺内底部中央	１枚ずつ離れて	
143**ST**107-005	358	古寛永銭１枚	棺内底部中央	１枚ずつ離れて	
143**ST**107-006	358	新寛永銭１枚	棺内底部中央	１枚ずつ離れて	
143**ST**110-001	363	新寛永銭１枚	棺内底部南寄り		
143**ST**110-002	363	不明鉄銭１枚	棺内底部南寄り		
143**ST**110-003	363	不明鉄銭１枚	棺内底部南寄り		
143**ST**110-004	363	不明鉄銭１枚	棺内底部南寄り		
143**ST**110-005	363	不明銅銭１枚	棺内底部南寄り		
143**ST**113-001	368	六道銭６枚	棺内底部中央	布に包まれた状態 ６枚錆着	
143**ST**114-002	371	文銭１枚	棺内底部中央		
143**ST**114-003	371	新寛永銭１枚	棺内底部中央		
143**ST**114-004	371	新寛永銭１枚	棺内底部中央		
143**ST**114-005	371	新寛永銭１枚	棺内底部中央		
143**ST**114-006	371	古寛永銭１枚	棺内底部中央		
143**ST**114-007	371	古寛永銭１枚	棺内底部中央		

第４章　総　　括　－調査成果の整理とまとめ－

下郡遺跡群は縄文時代後期から現代へ、連綿と続く複合遺跡であることが143地点におよぶ発掘調査により明らかとなっている。なかでも、弥生時代中期・後期終末、古代において遺跡の大規模化が顕著となることが判明しており、遺跡変遷の中でも大きな画期となっている。

本書において報告をおこなった各調査地点でも当該期の遺構、遺物が確認されており、盛況を誇っていた下郡遺跡群の片鱗を垣間見ることができる。第25次調査地点では、弥生時代前期末の堆積層により覆われた旧河道が検出され、遺跡拡大期である弥生時代中期への萌芽期の様相を明らかにした。特に土器に関しては、大きな地域性が現出する中期への連続性を各器種について指摘することができ、伴出する石器についても多くの知見を得ることができた。

古代遺構に関しては、特異な構造を有する道路状遺構の確認をし、周辺に展開する同時期の遺構群との関連が注目された。下郡地区は「こおり」地名から、古来より大分郡衙の推定地として有力視されていた地域にあたる。検出された道路状遺構は、こういった推測を補完するものとしても注視される内容をもっている。

本章では、このような個別的にも重要な事象についての考察を提示することで、本報告書の総括–調査成果の整理–としたい。

第１節　大分平野部における弥生時代前期末から中期の土器について

－大分平野部（別府湾沿岸地域）の前期から中期の土器概要－

坪根　伸也

本稿では、下郡遺跡群の所在する大分平野部の弥生時代前期から中期の土器様相について、筆者が以前におこなった検討結果を踏まえつつ、その後の成果と本報告内での知見を加え若干の検討を行いたい。

１．弥生土器編年概要（前期・中期）

前期

前期に関しては、弥生時代早期までを含め、０期からⅤ期までの時期変遷を示したことがある(註１)。０期は高橋徹氏による「上菅生Ｂ式」の内容(註２)をもつ無刻目突帯文甕を主体とする段階とし、続くⅠ期に刻目突帯文甕を伴出する段階を設定した。Ⅰａ期とⅠｂ期に細分し、Ⅰｂ期は一条の刻目突帯文甕を主要器種とする段階であり、「下黒野式」(註３)とほぼ同じ内容を有する。その前段階に位置づけられるⅠａ期は無刻目突帯甕と刻目突帯甕が共存する段階として設定したが、近年、「二反田式」としてより具体的な様式概要が示されている(註４)。

Ⅱ期はⅠｂ期の「下黒野式」各器種が型式的に退化した型式群により構成される。一条の刻目突帯甕の器表面の調整は条痕調整からナデ調整により仕上げられるものが主体をなし、浅鉢についても出土量の減少と呼応するように屈曲も緩慢になり、型式的な退化が明確となる。Ⅲ期は、いわゆる

「遠賀川式系土器」が伴出する段階として設定したものである。Ⅲ**b**期に大分市下志村遺跡出土土器群[註5]をあて、当該地域の前期末から中期に盛行する下城式甕形土器の成立への見通しを示した[註6]。これに先行するⅢ**a**期には大分市一方平Ⅳ遺跡出土土器などが相当する。この段階も様式内容が不明な点が多い時期であるが、最近、Ⅲ期に相当する時期にその後確認された資料を加え、「一方平Ⅳ式」、「上七曾子式」とし、より具体的な内容が提示されている[註7]。Ⅳ期はⅢ期の広域土器様式の融合を受け、一条刻目突帯をもつ直口甕、いわゆる「下城式甕」へと展開する甕が主体化する段階である。

壺は一環して板付系のものが様式セットとして伴出する。Ⅴ期は前期末に比定される段階であり、下郡遺跡群第25次調査の第Ⅲ層出土土器群を標識とする。詳細はすでに報文中にて触れているが、下城式甕の口縁部形状は多彩なバリエーションを示すようになり、壺についても北部九州系のものから脱却した器形、文様を有するものが主体を占めるようになる。この混沌とした中から中期にいたり「下城式壺」[註8]が出現する過程を垣間見ることができる[註9]。

中期

中期は、下城式甕、下城式壺、そして円盤充填技法による台付鉢（高坏）という極めて強い地域性を示す器種のセットにより構成される点を大きな特徴とする。いまだ資料不足は否めないが、中期１期から中期４期として編年を試みたことがある[註10]。中期１期が中期初頭に相当し、２期が中期前半から中頃に、３期が後半、４期が中期末にほぼ相当する。下城式甕形土器は、前期のものに比して胴の張りが減少し、口縁下の刻目突帯もより下位に貼付されるようになる。また、口縁端の刻みを省略する資料が増える点もこの段階の特徴である。中期２期は下城式甕形土器に加え、東北部九州系甕が一定量伴出する点を大きな特徴とする。他の器種に関しては、基本的に中期１期のものを踏襲する。中期３期には、比率的に少ないながら、壺等に須玖式系のものが顕著になる段階である。鋤先口縁状のものや広口壺などが認められるようになる。甕は、東北部九州系「く」字形口縁甕の割合が大きくなる。中期４期には須玖式系の鋤先口縁長頸壺などがより顕著となり、これらの壺の口縁部は大きく発達する。また、口縁上端に浮文が付けられるものの増加もこの段階の大きな特徴である。また、東北部九州地域で特徴的な直口壺の登場もひとつのメルクマールとなる。さらに、東北部九州系の小型器台も新たに器種構成に加えられる。甕は前段階に比して、東北部九州系甕が圧倒的な量を示すようになり、下城式甕はごく少量となる。東北部九州系甕は、口縁部端部の強調を強めるタイプのものと、逆に跳ね上げ気味の形態をなさないものとの二者への分化が行われ、底部形態についても平底のものと上げ底風のものの二種が認められるようになる。加えて器面の調整に着目すると、甕の内面底部付近にケズリ風の調整痕をおこなう資料が顕著となり、技法面においても瀬戸内方面からの影響を看取することができる。

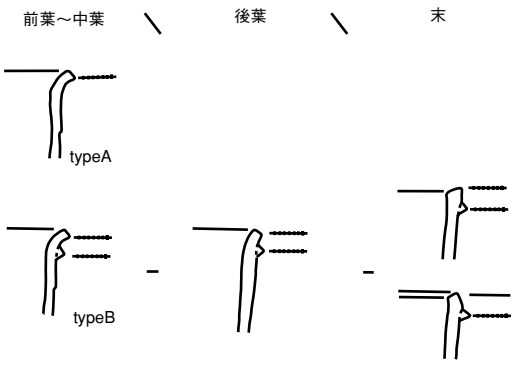
以上が、大分平野部（別府湾沿岸地域）における弥生時代前期から中期の土器変遷の概略である。次節以降においては、上記のような変化を示す土器変遷の中でエポックとなりうるいくつかの事象について概観しよう。

2．下城式甕の成立過程

豊後大分地域の弥生時代前半期を象徴するものに、「下城式甕」がある。前節でも若干指摘したように、下城式甕の成立プロセスに関しては、縄文時代晩期末（弥生時代早期）と下城式甕が盛行する前期末を繋ぐ時期の資料に永らく恵まれなかったこともあり、不明な点が少なくなかった。ところが、ここ数年、少しずつではあるが、これを補完する資料の発見・報告が相次ぎ、成立過程について一定の視座を求めることが可能となりつつある。

下城式甕の成立には、晩期（弥生早期）の刻目突帯文の影響なくして語ることができないという点は改めて述べるまでもないが、資料の欠如していた段階においては、漠然と刻目突帯文からのストレートな型式変化にその成立を求める傾向にあった。ところが、これでは同時期に下城式甕と九州島を二分するように分布するいわゆる「亀ノ甲タイプ」との分布域、成立契機の違いを説明することができなかった。つまり、祖形を同じくするにもかかわらず、異なる形態的特徴をもち、さらになぜこのように明確に分布域を異にするのかという疑問を払拭することができなかったのである。

それが、第Ⅲ期資料の充実により、系譜関係の整理が可能となった[註11]。具体的には、第Ⅲ**b**期に比定される大分市下志村遺跡出土資料にある甕には、西部瀬戸内地域に分布する遠賀川式系甕起源となる「口縁下端凸状甕」系譜甕資料が一定量存在し（タイプ**A**甕）、これに在地の突帯文系甕とこのタイプ**A**甕との融合により成立したと考えられる口縁直下に貼付突帯を巡らすタイプ**B**甕が成立し、後の下城式甕の祖形になったと理解されるのである。このような想定を首肯するように、続く第Ⅳ期、第Ⅴ期の古い段階の下城式甕の口縁部形態には外反器形のものが多い点が指摘される。



第376図　甕形土器口縁部形態変遷模式図

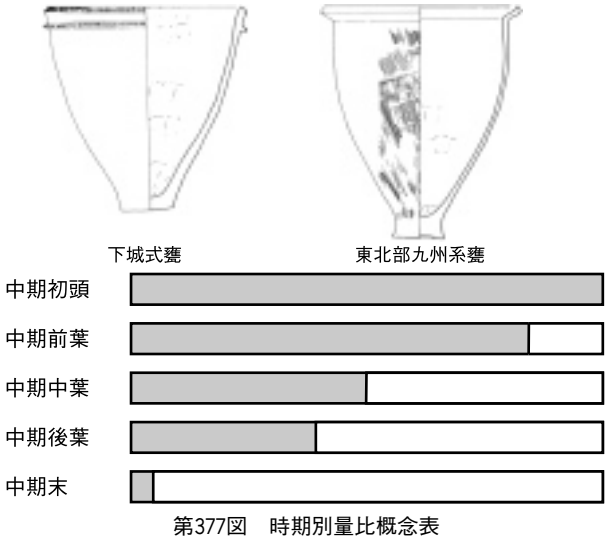
つまり、下城式甕は、西部瀬戸内地域を介した遠賀川式系の甕と在地の突帯文系甕との折衷型から展開する形で成立し、他の地域が中期にむけて地域性を現出する中で、直口一条突帯の甕に代表される下城式甕の分布域を東部九州を中心として確立していったと見られるのである。

3．中期の甕形土器について

前期に成立した下城式土器は、中期においても盛行し東部九州を特徴づける土器型式としての地位を不動のものとする。ところが、中期前葉前後より土器組成の中にこの下城式甕に加え、東北部九州系の甕が登場するようになる。東北部九州系甕の導入段階での組成比率は極めて微量であるが、経年変化に伴いその比率を増大させる傾向が看取される。すなわち、前葉段階から在来の下城式甕形土器と東北部九州系甕という異系統の二種の甕が集落内において同時に使用される状況が認められるのである。

時間経過に伴いこの二種の甕の組成比率は次第に逆転し、中期末段階には、東北部九州系甕が主体を占めるようになる[註12]。当該地域に登場する東北部九州系甕は、中期前葉の導入当初から、形態・色調・器厚の点において、在来の下城式甕形土器とは大きく異なっている。なかでも器厚に関して

は、東北部九州系の甕がタタキ成形によるものである点が認知されており[註13]、基本的に粘土紐積上げ技法により成形される下城式甕とは形態のみでなく、成形技法のレベルから異なるものであることが明らかとなっている。具体的には、下城式甕の厚さが平均６～８㎜であるのに対し、東北部九州系甕は４～５㎜と明確な差異が認められる。色調に関しては、下城式甕が暗茶褐色系、東北部九州系の甕が淡黄白色系の色調を呈している。プロポーションについては、口縁部形態、底部形態に関してまったく異質であることは外形から明らかである。この二種の甕は中期を通じて同一遺跡、同一遺構の中で共存するが、特に一方の甕に優位性を示すような出土状況は今のところ確認されていない。つまり、両者に機能差はなく、あくまで煮沸具として使用されているにすぎないのである。こういった様相とあわせ、東北部九州系甕の存在形態には導入段階から客体としての状況は看取されず、さらに、胎土の理化学的分析においても、下城式甕と同種の粘土が使用されている点が指摘されている[註14]。このように成形技法にまでおよぶ相違をもつ異種系統土器の在り方は、旧来型式（下城式甕）の消滅という形で中期末から後期初頭段階に収束する。この過程は急速なものでなく、中期を通じて漸移的に変化したと考えられる。しかもその経過の中で折衷形の作成が顕著でないという特徴があり、成形技法の差異とともに、厳然とした分別がおこなわれていたことが知られる。



第377図　時期別量比概念表

これに対して、「下城式甕」の分布は宮崎県の中部以北にまでおよぶが、この宮崎県中部には中期末～後期初頭段階においても下城式甕が比較的高比率で土器組成中に遺存し、この段階で「中溝式」とよばれる折衷型式を生起させることが知られている[註15]。宮崎県域と大分平野部との相違は、宮崎県域において、東北部九州系甕の流入が地理的条件の中で遅延した点にあると考えられ、東北部九州系の甕の導入段階には、すでに器壁を薄く作るという規範の弛緩、言いかえればタタキ技法情報の欠如によるといった条件の差異に基づくものである可能性が指摘される。つまり、大分平野部での両者の折衷型式作成が顕著でなく、両型式の漸移的な交代は、根源的な成形技法の違いに起因すると想定されるのである。

４．下城式壺形土器について

中期のもうひとつの特徴的な事象に下城式壺形土器がある。下城式壺形土器に関しては、高橋徹氏により形態的な特徴から複数系統の変遷[註16]が指摘されているが、これに加えて大分市浜遺跡[註17]、大分市久原遺跡[註18]出土資料から、下城式壺の中でも中型法量の壺に関しては、第376図に示す口縁部形態の変遷を認めることができる[註19]。

下城式系の壺の文様は、半截竹管状の二叉状工具を用いた二条一組の線で平行線文、重孤文などを描く。この種の壺は下郡遺跡群第25次調査出土資料から明らかとなったように、前期末段階にヘラ描きによるモチーフの原形がすでに用意されており、中期にいたり二叉状工具の導入という新技術の採

用によって完成・定型化したものである。これは、これらの文様のルーツを周防灘沿岸地域の前期末前後に隆盛する二枚貝を施文原体とする壺文様に求めるとした従来の想定とは異なるものであり[註20]、出自・系譜関係に関しての独自性として理解される。ところで、この種の文様施文の技術展開は、中期を通じて櫛状工具への発展はなく、２本一単位の文様施文に固執する。ここにも大分平野部の強い地域性を垣間見ることができる。

口縁部形態の詳細分類に関しては、以下のようにまとめることができる[註21]。

Ⅰ類　頸部から外反する形状を示すもの。

Ⅱ類　Ⅰ類の口縁部内面に一条の突帯を巡らすタイプのもの。

Ⅲ類　Ⅱ類の内面突帯の上端を口縁部内面と接着させ、内側に段状の形成を行うもの。

Ⅳ類　Ⅲ類と同様の手法で口縁端部内面に段を形成し、口縁端部上面を水平に成形したもの。突帯の貼り付け状況により形成した段の平面形状により二種に分類可能である。

Ⅳ**a**類　貼付け突帯の両端を外方に屈曲させ、漏斗状の意匠に成形するもの。

Ⅳ**b**類　**a**類のような意匠の形成はおこなわず、内面段が途切れることなく一周する形状を示すもの。

Ⅴ類　基本形状はⅣ類と同類であるが、口縁端部外面下端を拡張させるタイプのもの。

Ⅴ類もⅣ類と同様に突帯の貼り付けにより形成した段の平面・形状により二種に分類可能である。

Ⅴ**a**類　貼付け突帯の両端を外方に屈曲させ、漏斗状の意匠に成形するもの。

Ⅴ**b**類　**a**類のような意匠の形成はおこなわず、内面段が途切れることなく一周する形状を示すもの。



第378図　口縁部形態模式図

上記の口縁部は型式学的な類縁度からⅠ類−Ⅱ類−Ⅲ類−Ⅳ・Ⅴ類の変遷関係が想定される。さらに出現期の下城式壺形土器がすべてⅠ類である点、加えて中期末に編年される舞田原遺跡33号竪穴出土の壺資料[註22]などの口縁部形態がⅤ類に分類されるものである点から、Ⅰ類→Ⅱ類→Ⅲ類→Ⅳ・Ⅴ類の順位で変遷したものと考えられる。

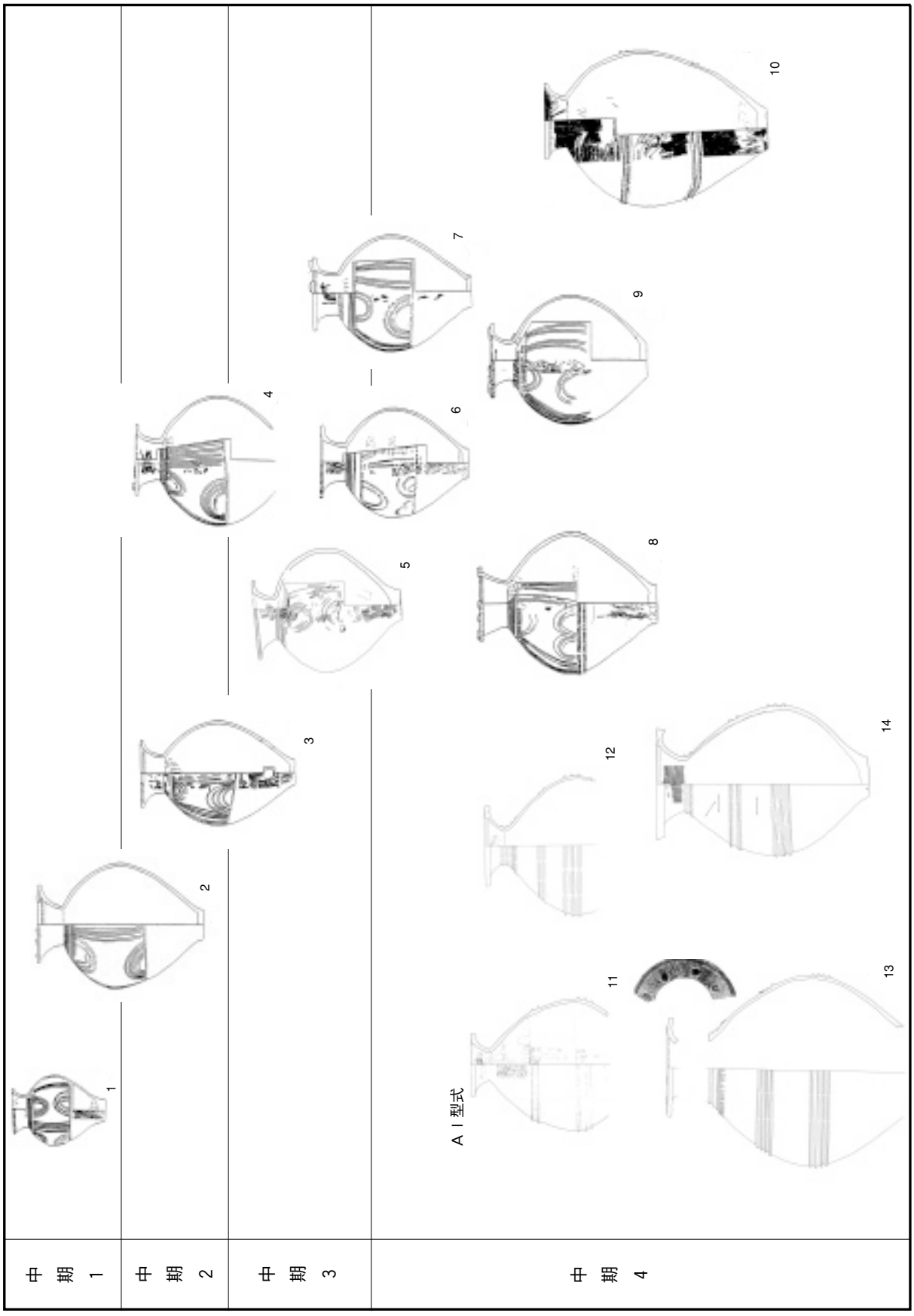
器表面の文様には、上部ヨコ沈線、下部ヨコ沈線、この上下のヨコ沈線を繋ぐタテ沈線、これらの区画の中に描かれた下向きの重孤文、上向きの重孤文などの文様単位が存在するが、これらの文様単位の切りあい関係を検討すると、文様の施文順位に下記に示す六つのパターンが存在することが判明する。

パターン１　上部ヨコ沈線→タテ沈線→下部ヨコ沈線→重弧文

パターン２　ヨコ沈線（上・下）→（列点文）→タテ沈線→重弧文

パターン３　ヨコ沈線（上・下）→タテ沈線→重弧文

パターン４　ヨコ沈線（上・下）→タテ沈線→（タテ沈線間の文様）→重弧文



第379図　東部九州（第二・三地域）中期から後期中葉の土器編年１　（1/18）

第94表　口縁形態と文様パターンの相関表

	パターン１	パターン２	パターン３	パターン４	パターン５	パターン６	追加型施文	順番型施文
Ⅰ類	◎						◎	△
Ⅱ類			△					△
Ⅲ類		△	○	△			△	△
Ⅳ類			◎	△			△	◎
Ⅴ類					○			○

◎比較的多い　○多い　△少ない

パターン５　　突帯（二条の刻目突帯）→ヨコ沈線→タテ沈線→重弧文→（列点文）

パターン６　　上部ヨコ沈線→タテ沈線→重弧文（下部ヨコ沈線省略）

これらの文様施文順位パターンと先に示した口縁部形態との相関関係を第94表に示した。

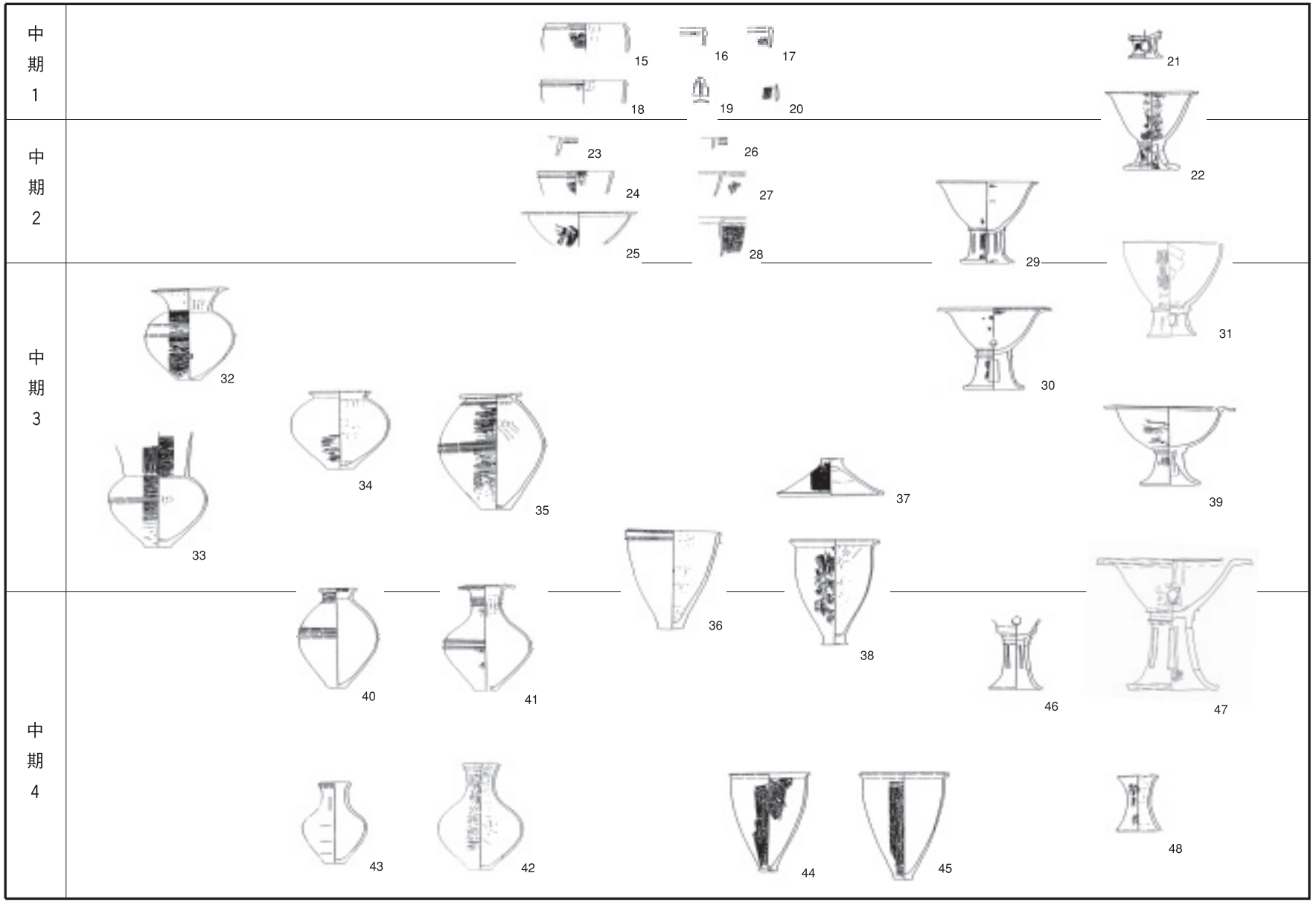
この相関表をみると、口縁部形態にみる時間的変化と施文順位パターンに相関関係があることが判明する。

時間の経過に伴い、次第にタテ方向の分割を重視する施文意識から水平方向の割り付けをより意識する施文へと変化した可能性を指摘することができる。具体的には、ヨコ上部条線→タテの分割線→下のヨコ条線→重弧文の順序で施文されていたものが、上下のヨコ条線→タテの分割線の施文をおこなうようになる。したがって、口縁部形態Ⅲ類からⅤ類など後半に位置づけられる資料の中には、水平方向への割り付けがうまくいかず、やむなく同一区画内に複数の重弧文を施文したものが散見される。さらに進むと水平方向の割り付け意識も希薄となり、Ⅴ類口縁をもつ資料には下部ヨコ沈線を省略したものやその部分を突帯により代用するものも出現する。併せて、最終の器面調整と文様の施文の順番にも時間経過による変化傾向を読み取ることができる。それは、最終調整として行われるミガキ調整の前に施文を行うか否かという点であり、最終調整後に文様施文をおこなうものを追加型施文、調整前に施文を終了するものを順番型施文と呼ぶことにする(註23)。ふたたび、相関表においてこの点を検討すると追加型施文から順番型施文へという傾向を看取することができる。

このような傾向が認められる中期後半には、他に勾玉状の浮文を多用するなどの文様上の変化も大きな特徴といえる。これらの変化に呼応するように、中期末の壺形土器は沈線文系のものから多条の突帯を付す壺への急激な変化を遂げ、後期へと連続するようになる。

５．台付鉢（高坏）形土器について

中期土器のもうひとつの特色は脚に透孔をもつ台付鉢（高坏）であり、下郡桑苗遺跡の調査所見(註24)から中期初頭段階には確実に存在することが知られている。方形の透孔をもつ台付鉢（高坏）は、その後、中期前半から中頃に盛行するが、源六原遺跡(註25)等において中期末の竪穴遺構などからの出土も確認されており、中期末の段階まで数量を減少しながらも存在したと推定される。これらの土器には鉢部（坏部）と脚部を一気に作り、鉢部（坏部）の底に開いた孔を円形の粘土円盤でふさぐ、いわゆる円盤充填技法によって作製されている点を特徴とする。円盤充填技法は、台付鉢（高坏）に最も顕著に採用されているが、大分市浜遺跡(註26)の墳墓に供献された資料では壺にも脚が付けられ、円盤充填技法で作製されている。中期前半から中頃にはかなりの高比率で存在し、初現は前述のように中期初頭には存在し、本地域で生起した可能性も想定される状況にある(註27)。



1～4・6～9：久原遺跡　　5・29・31・46・47：浜遺跡第２地点
10・41・42・48：下郡遺跡群第120次ＳＤ1100　　11：近中遺跡１号住居　12：成田尾遺跡２号土器棺
13：小川原遺跡９号墓　14・43：舞田原遺跡33号住居
15～ 20：下郡遺跡群第３次ＳＫ26　　21：下郡桑苗遺跡
22：下郡遺跡群第 30 次ＳＫ18　　23～ 28：下郡遺跡群第 30 次ＳＫ214　　30：
32～ 39：下郡遺跡群第 75 次ＳＤ02　　40・44・45：菅無田遺跡８号住居

6．まとめ

下郡遺跡群出土土器を中心に、大分平野部（別府湾沿岸地域）の弥生前期末から中期の土器様相について概観した。前期末に比定される下郡遺跡群第25次調査第Ⅲ層出土土器群の中には、中期において顕著となる地域性の萌芽的な様相を認めることができた。中期には、前期から展開する下城式土器に加え、東北部九州系土器が土器組成に新たに加わり、様式内での漸移的な変化による置換状況が看取された。こうした過程の中で後期の斉一的な様相へと収斂されていくのである。

註１　坪根伸也1996「東九州（大分）の弥生前期土器−別府湾沿岸地域を中心として−」『西部瀬戸内の弥生文化－前期弥生土器の諸相』山口考古学談話会百回記念大会実行委員会
坪根伸也2000「東九州における弥生前期土器の諸相−口縁下端凸状甕と下城式甕」『土器持寄会論文集突帯文と遠賀川』土器持寄会論文集刊行会
坪根伸也2001「弥生文化成立期の具体像（東部九州）」『第47回埋蔵文化財研究集会　弥生文化の成立－各地域における弥生文化成立期の具体像』

註２　高橋徹1980「大分県考古学の諸問題（１）－刻目突帯文土器の出現とその展開について－」『大分縣地方史』大分県地方史研究会

註３　高橋徹1983「東九州における突帯文土器とその周辺」『古文化談叢　第12集』　九州古文化研究会

註４　高橋徹2001「大分の弥生・古墳時代土器編年」『大分県立歴史博物館　研究紀要』　大分県立歴史博物館

註５　高橋徹1996「第Ⅳ章　付論大分平野周辺前期～中期の弥生土器について」『曲遺跡　九州横断道路関係埋蔵文化財発掘調査報告書』　大分市教育委員会

註６　坪根伸也2000「東九州における弥生前期土器の諸相−口縁下端凸状甕と下城式甕」『土器持寄会論文集突帯文と遠賀川』土器持寄会論文集刊行会

註７　井口あけみ2003「上七曾子遺跡２号溝（**SD**02）出土の弥生土器について」『古国府遺跡群・上七曾子遺跡−共同住宅建設工事に伴う発掘調査報告書』大分市教育委員会

註８　小田富士雄1958「下城式土器考」『白渇遺跡』佐伯市教育委員会

註９　坪根伸也1992「**B** 区 **g**−14地点出土の弥生土器について」『下郡遺跡群　大分市下郡地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報３』大分市教育委員会

註10　坪根伸也・服部真和2004「東南部九州地域の弥生中期中葉から後期前葉」『弥生中期土器の併行関係』第53回埋蔵文化財研究集会実行委員会

註11　註１文献に同じ。

註12　坪根伸也1998「東九州における異種系統土器の共存事例の検討～素描～」『第１回弥生土器研究セミナー資料』

註13　坪根伸也1993「弥生土器の成形技法について−東九州における円盤充填技法−」『下郡遺跡群大分市下郡地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報４』大分市教育委員会

註14　大分市教育委員会2000『井ノ久保遺跡発掘調査報告書』－平成８年度東九州自動車道及び併設市道建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査－

註15　桑畑光博2000「中溝式系土器の検討宮崎県における弥生時代中期後半から後期前半にかけての土器編年にむけて」『古文化談叢』　45　九州古文化研究会

註16　高橋徹他1989『大分県史』先史篇Ⅱ　大分県

註17　村上久和1995『大在古墳・浜遺跡第２地点』大分県教育委員会

註18　塔鼻光司1991「久原遺跡」『大分市埋蔵文化財調査年報2−平成２年度−』大分市教育委員会

註19　註10文献に同じ。

註20　高橋信武1992「２弥生土器について」『下郡桑苗遺跡Ⅱ』－弥生ブタ－大分県文化財調査報告書　第89輯　大分県教育委員会

註21　註10文献に同じ。

註22　清水宗昭1985『舞田原』犬飼町教育委員会

註23　深澤芳樹1989「木葉紋と流水紋」『考古学研究』第36巻第３号考古学研究会

註24　大分県教育委員会　1992『下郡桑苗遺跡Ⅱ』－弥生ブタ－大分県文化財調査報告書　第89輯

註25　高橋徹1997「源六原遺跡」『直川村誌』南海部郡直川村

註26　註17文献に同じ。

註27　武末純一2004「九州東部（豊後）」『考古資料大観』１　小学館

第２節　大分平野出土の不定形石錘について

荻　　幸一

遺物の事実記載の項で記したように、下郡遺跡第25次調査では、結晶片岩系ないしは凝灰岩などの扁平な自然礫・礫片ないしは剝片を素材とし、形状は定形化しておらず、打ち欠きによるか整形加工の一環として浅い内湾状の抉入部を作製するだけの粗雑な石錘が、10点以上出土している。それは下郡遺跡に留まらず、大分平野内の下志村遺跡第２次調査、玉沢遺跡第２・３・６・８次調査、そして賀来西遺跡試掘調査でも相当数出土していることが判っている(註1)。

この節では、これらの不定形石錘について、先ず各遺跡ごとに形態分類を試み、使用痕の様相を明らかにし、更に大分平野全体として統合的に捉え、所属時期や平野内の地域的な石材選択などについて、若干の考察を行いたい。

①下郡遺跡（第381図）

本遺跡は、大分平野中央やや西よりの大分川下流右岸の沖積平野に立地する。20点ほどの石錘が出土しており、殆どはここで検討する結晶片岩系ないしは凝灰岩製の不定形石錘だが、他に蛇紋岩の自然礫を用いた紡錘形の定型的な切目石錘も１点検出されている。

・形態分類

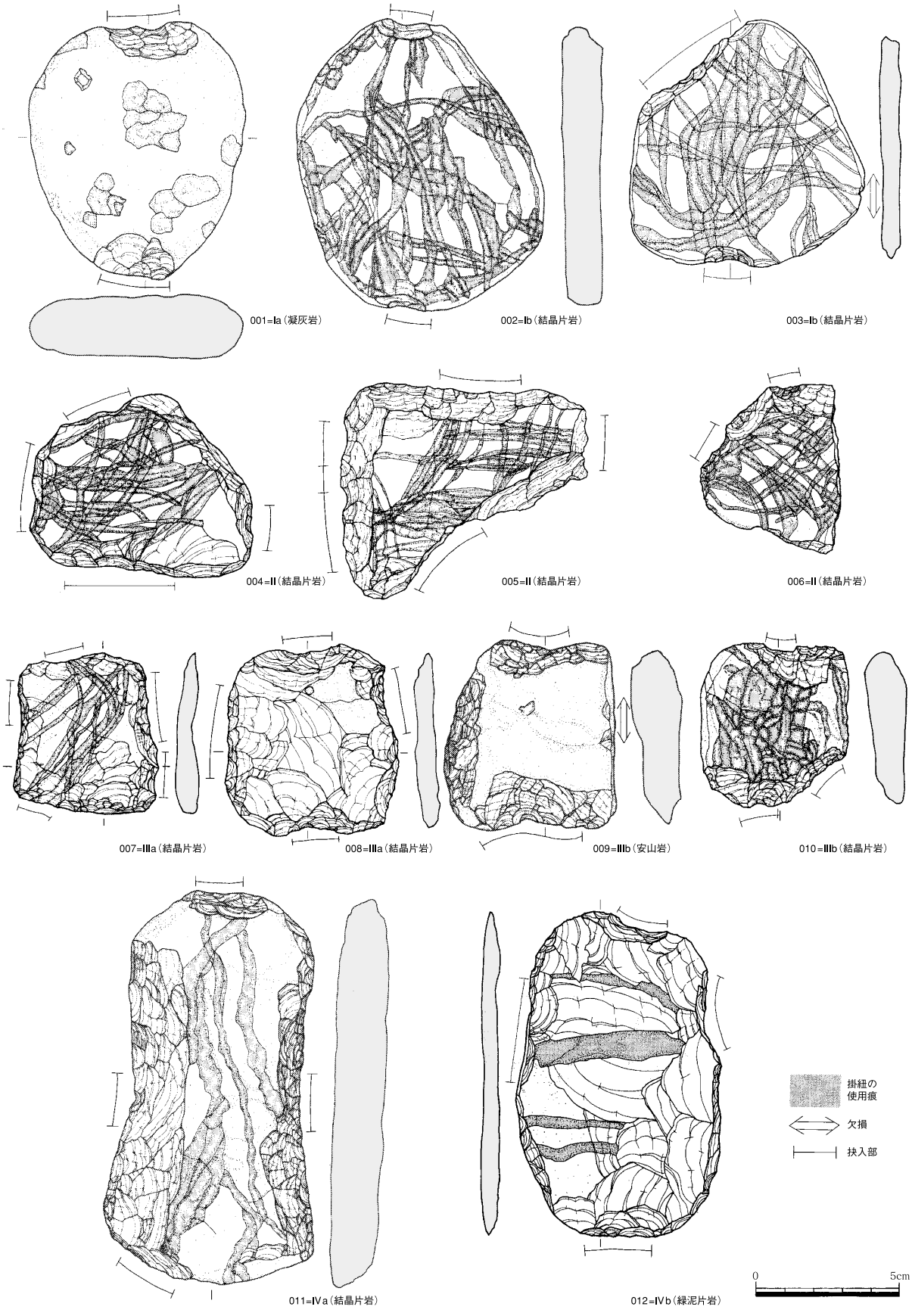
先ず本遺跡出土の石錘を、素材・形状・加工部位・抉入部の位置などで分類を試みた。

Ⅰ類は、楕円形の自然礫を素材としており、整形のための二次加工は殆ど施されず、長軸の上下端に打ち欠きによる抉りを入れている。001・002が相当する。だが、003のにように周縁に自然面を残す薄い剝片を素材とするものも認められるので、自然礫を素材とするものをⅠ**a**類、周縁に自然面を残す剝片を素材とするものをⅠ**b**類としておく。

Ⅱ類は、薄く扁平な剝片を素材としており、周縁に整形のための二次加工を顕著に施し、横長の多角形状に仕上げているが、横長の下端は抉入部を除き、外湾する傾向が認められる。また、打ち欠きによる抉りが上下端だけでなく、左右側縁中央に見られることが多い。004・005がこれに相当し、右半を大きく欠損しているが、006もこの範疇と考えられる。004は四角形状に仕上げており、005は下端右半を欠損しているが長方状を呈していたと考えられ、006は四ないし五角形状を有していたと推測される。

Ⅲ類は扁平な礫・剝片を素材とし、Ⅱ類のように整形のための二次加工を顕著に施すが、正方形に近い形状に仕上げている。007～010が相当するが、打ち欠きによる抉りは、007・008のように上下・左右端に入れる場合と上下端に限られる二種が認められる。また自然礫を素材とする場合、007・008のように直線状の端部を利用して、整形加工を省略する例も見られる。そのため、剝片を素材とするものをⅢ**a**類、自然礫を素材とするものをⅢ**b**類と細分しておくが、両者は素材の差から厚みに差異が認められる。

Ⅳ類は、周縁部の整形加工の前に表裏面に面的な調整を施しており、かなり入念であり、全体形状が打製石斧状を呈する特殊なものである。刃部形成は見られず、上下・左右端に打ち欠きによる抉り



第381図　下郡遺跡第25次調査出土石錘の形態分類　(1/2)

が認められる。011・012が相当するが、左右側縁が内湾して石鍬状を呈す011のような例をⅣ**a**類、左右側縁が直線状で扁平打製石斧状を呈す。012のような例をⅣ**b**類と細分しておく。

・使用痕の様相

本遺跡の石錘で顕著な使用痕が認められたのは、全て結晶片岩製ないしは同系統の緑泥片岩製の資料に限られる。使用痕は、図にスクリーン・トーンを貼った箇所と「⇔」で示した部位である。詳細に見ていく。

001・008には、敲打痕のような窪みが数カ所見られるだけで、石錘としての使用痕かどうか不明である。002～007・009～012には、長く蛇行するような浅い剝落が認められ、スクリーン・トーンによって示している。結晶片岩という石材に特有して見られる使用痕であると推測され、一部は摩滅したような変色としても認められる。主に抉入部と抉入部を結ぶように伸びており、掛け紐の圧迫によると推測される。そのうち、002・003・004・005・006・010は、上下・左右ないし**X**字状の2方向に示すものが多く、掛け紐が十字に掛けられていたことを窺わせる。それは、上下端にしか抉入部が認められないⅠ類の002・003も同様で、抉りの作製は省略されることがあることを示唆する。但し、抉入部がない場合には、003・009の右側縁中央に折れや微細な剝落として使用痕が現れることがある。また、007・009・011・012は抉入部が上下・左右端に存在しながら、長く浅い剝落が一方向にしか認められないが、実際には十字もしくは**X**字の紐が掛けられていたものと推測される。一方、同方向の使用痕は全て複数認められ、固定されている筈の掛け紐が、使用時に若干のずれによる移動があったこと、また抉入部の欠損などによっては紐を掛ける位置をずらして再利用したと想定される。

②下志村遺跡第2次調査（第382図、大分市教育委員会2005）

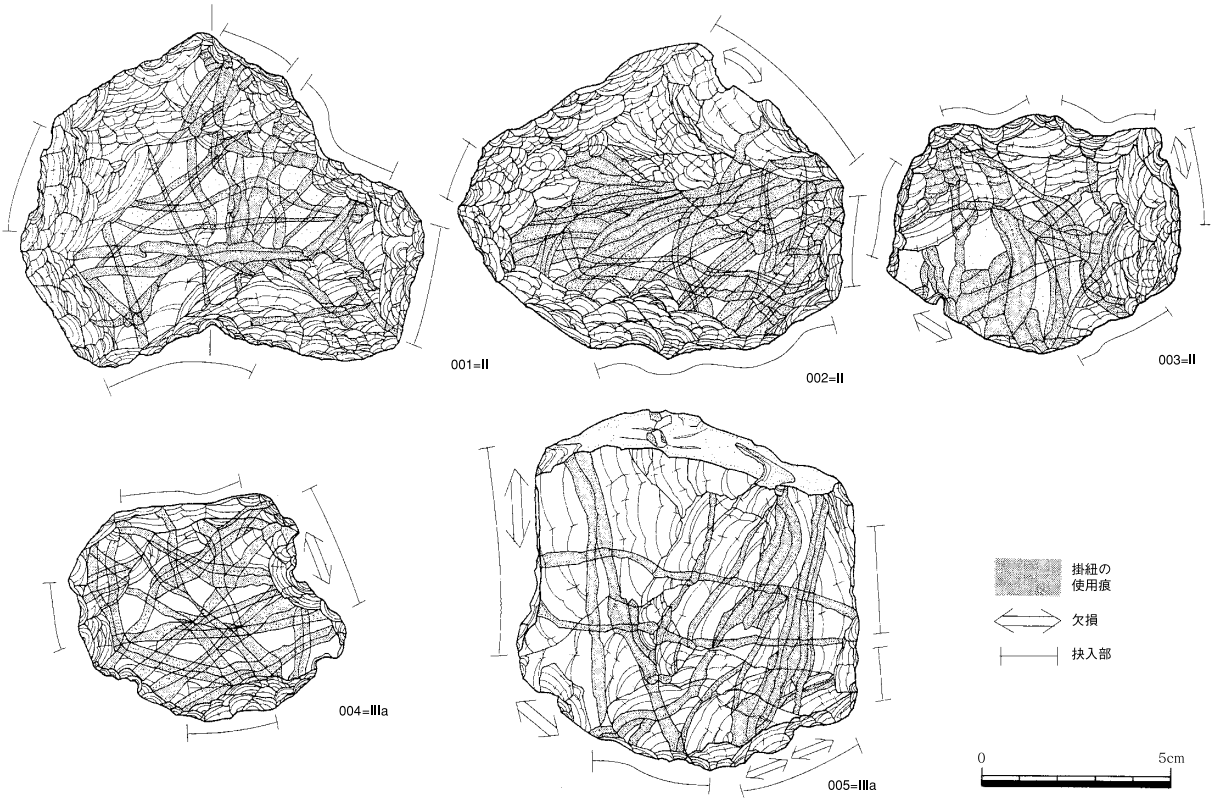
本遺跡は大分平野でも西部に近い、大野川下流東岸の砂丘上に立地し、南東部に近接する佐賀関半島から延びる丘陵からは結晶片岩・石英が産出する。結晶片岩・緑泥片岩製の不定形石錘やその未成品・素材・調整剝片が多数出土しており、遺跡内で製作していたと推測される。

・形態分類

実測した石錘は5点で、全て結晶片岩製である。下郡遺跡で示した基準に当て嵌ると、001～003は周縁部の整形加工によって横長の四ないし五角形を呈し、長軸の下端が外湾しており、抉入部を上下・左右端に持つので、Ⅱ類とするのが妥当と考えられる。004はやや歪だが、周縁部の整形加工によって正方形状に仕上げており、剝片を素材としているので、Ⅲ**a**類の範疇に入ると考えられる。004は上下・左右端に抉入部を持ち典型的だが、005は剝片素材ながら、上端側縁は自然面で構成されており、整形加工も見られず、抉りも作製されておらず、**a**・**b**類の折衷的な例である。

・使用痕の様相

抉入部と抉入部を結んで蛇行する長く浅い剝落が、縦横ないしは右上から左下・左上から左下の二



第382図　下志村遺跡第２次調査出土石錘　(1/2)

方向に全資料ともに認められ、掛け紐が十字もしくは**X**字状に掛けられていたと推測される。また、同様に掛け紐によると考えられるやや深い抉りが、蛇行する浅い剝落の末端部に全資料で看取されているが、003・005の下端左側のような抉入部以外の箇所だけでなく、抉入部にも多く見られることから、掛け紐末端部の欠損は通常の抉入部でも一般的に起ったと推察される。

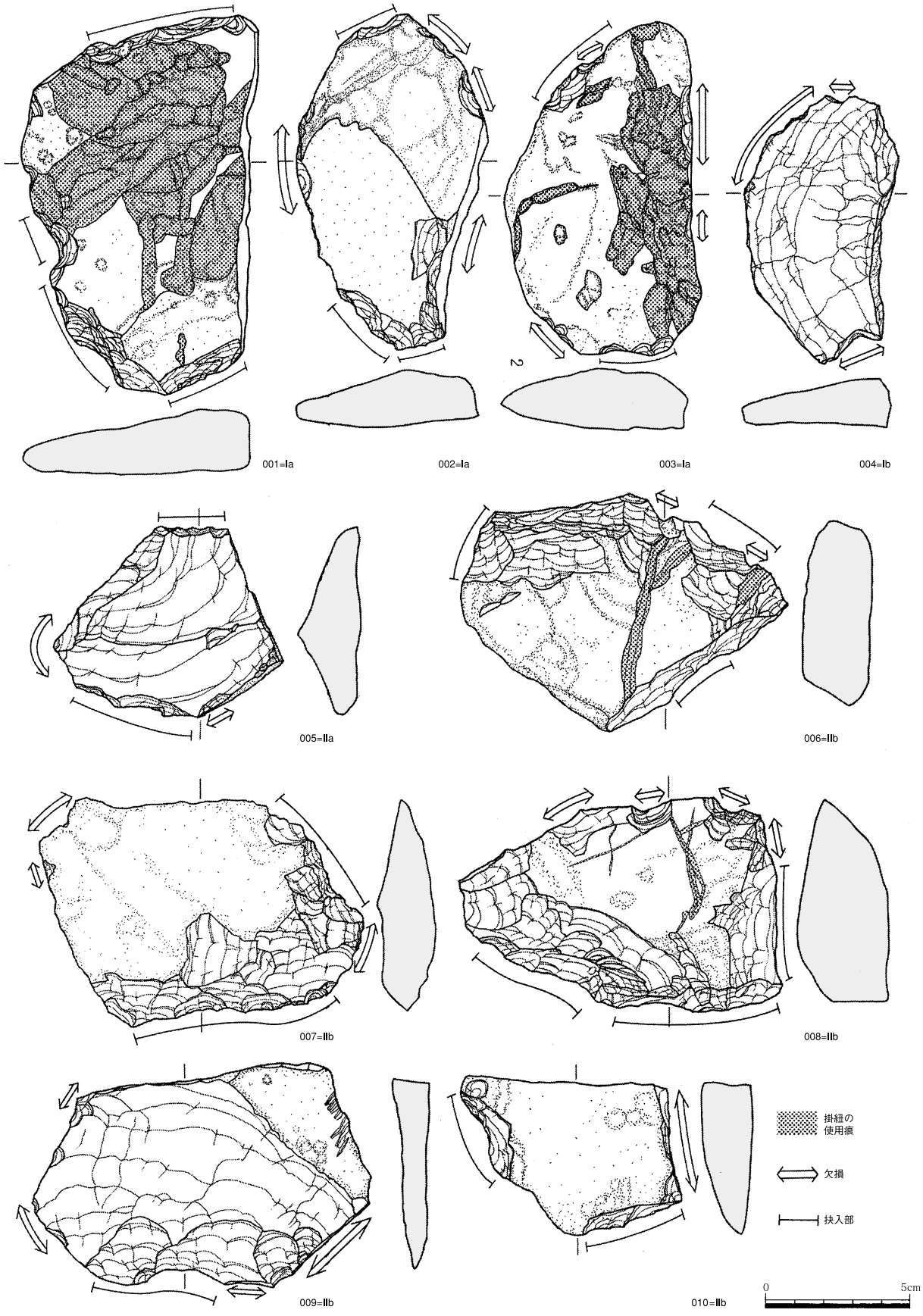
③賀来西遺跡試掘調査（第383図、大分市教育委員会2004）

賀来西遺跡は大分平野北西端に近い、大分川が支流の賀来川と合流する付近の北側に立地する。試掘調査で10点の凝灰岩製不定形石錘が出土している。

・形態分類

同様に下郡遺跡で示した基準に当て嵌ると、以下のようになる。

001～003は自然礫を素材とし、打ち欠きによる抉りを入れているだけなので、Ⅰ**a**類となる。004は、目立った打ち欠きは認められないが、001～003と形状が似ること、掛け紐を掛けたと思しき上下端に欠損が認められることから、Ⅰ類の不定形石錘と判断し、周縁に自然面を残す剝片を素材としているので、Ⅰ**b**類と認定しておく。005～009は、周縁に整形のための二次加工を施し、多角形に仕上げているのでⅡ類に該当する。但し、剝片を素材としているのは005のみで、006～010は表裏面に自然面を残す礫片を素材にしていると考えられる。従って、Ⅲ類に倣って前者を**a**類、後者を**b**類と細分することにする。Ⅱ**b**類には、Ⅲ**b**類に看取された一部の縁辺の整形加工を省略するという同様



第383図　賀来西遺跡試掘調査出土石錘　(1/2)

の特徴が、006の下端右半、007の上端・左側縁、008の上端、009の上端・右側縁上半、010の左側縁下半に認められる。また、005の右側縁には折断によって整形が為されており、結晶片岩には見られなかった整形法である。

・使用痕の様相

結晶片岩では抉入部同士を結んで蛇行する使用痕は、浅い剝離と若干の変色という形で認められたが、賀来西遺跡で出土した軟質の凝灰岩では、浅い窪みという圧痕とでもいうべき状況で看取された。若干の変色を伴うことがあるのは結晶片岩と同様である。掛け紐を掛けられた位置の縁辺の欠損も同様に認められる。但し、004・005のような同質ながら若干硬質の凝灰岩には、浅い窪みという形の使用痕は見られない。以下、具体的に見てゆく。

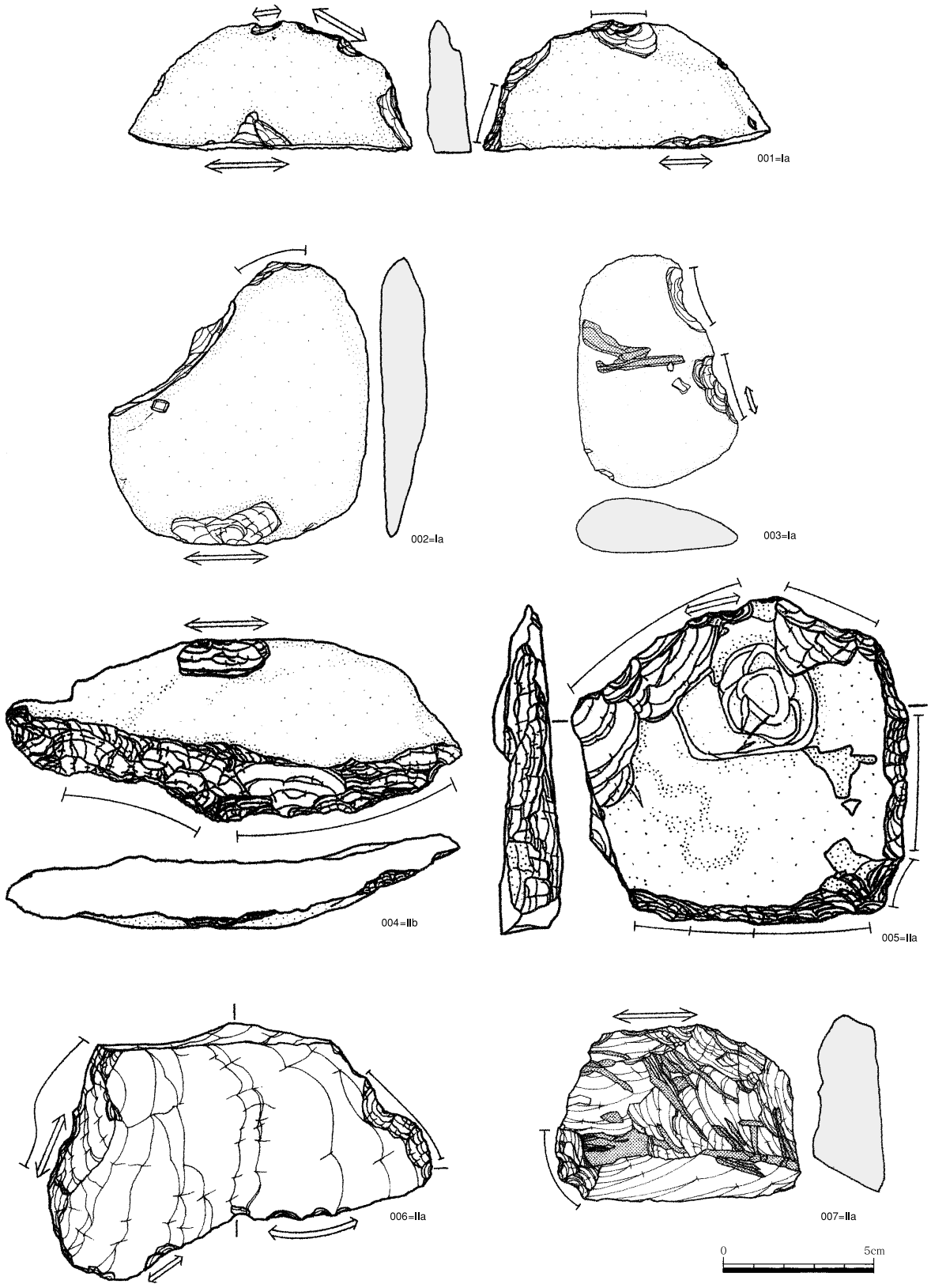
抉入部同士を結んで蛇行する圧痕は001・003・006・008において認められ、上下・左右の二方向に存在し、やはり掛け紐が十字状に掛けられたことが窺える。また、蛇行する圧痕状の使用痕はほとんどの例で複数見られ、掛け紐がずれたり、場所を変えて掛けられたことも示唆している。006のみは上下・左右方向とも１状のみしか看取されないが、上下方向の窪みはかなり深く鮮明である。一方、抉入部の深い抉りという形の欠損は、003の左側縁上半、006の上端の中央と右端近くに認められ、抉りを入れずに掛け紐を掛けたための縁辺部の浅い欠損は、002・003の左右側縁、004の上下端と右側縁上半、005の下端の中央、007の左右側縁中央、008の上端前縁と右側縁上端近く、009の左側縁、010の右側縁に看取される。また、009の右側縁にはやはり掛け紐によると考えられる数条の擦痕も見られる。

④玉沢地区条里跡第２・６・８次調査（第384・385図、大分市教育委員会2002、2003、2005）

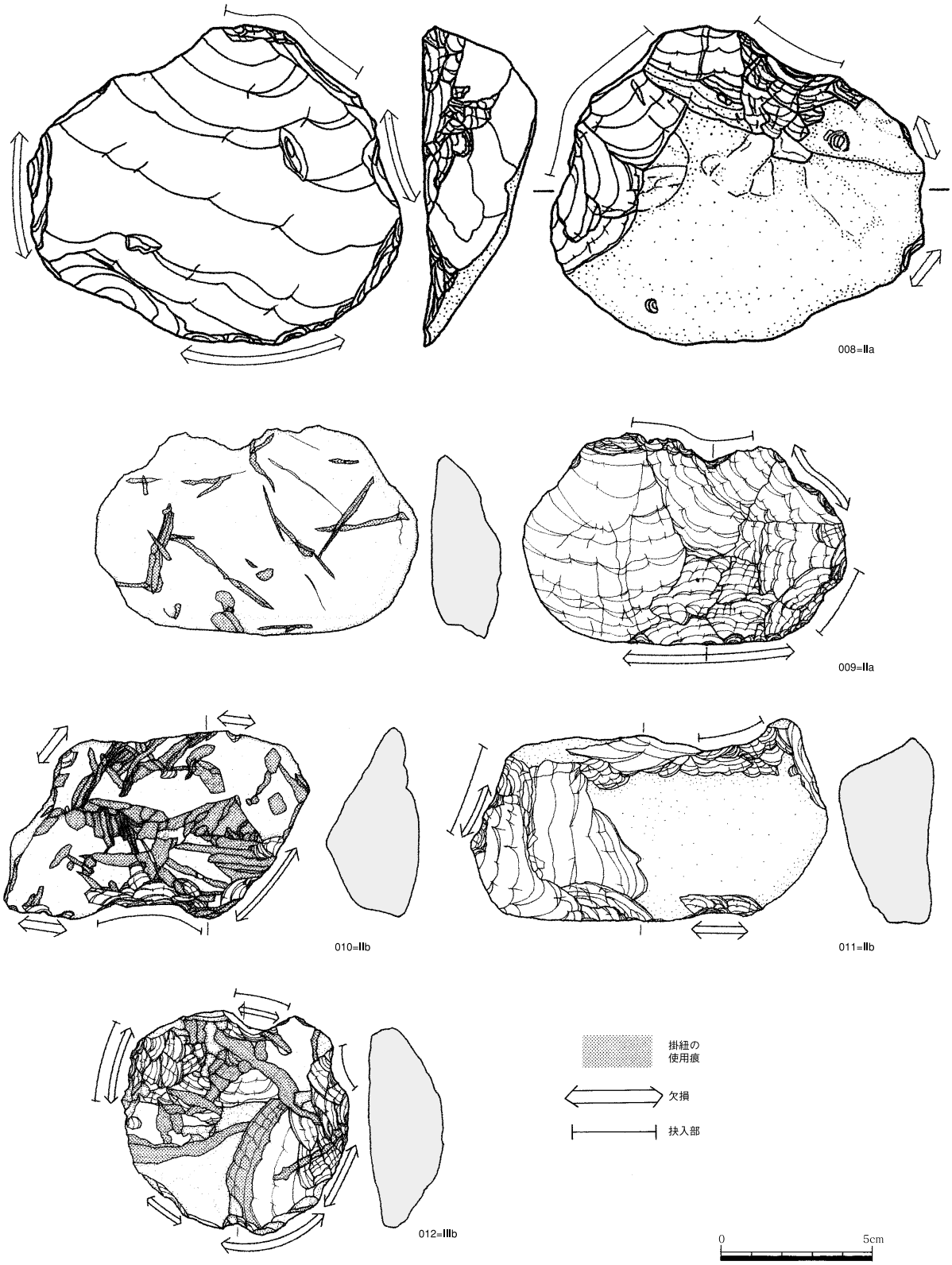
玉沢条里跡は大分平野中央部西よりの、大分川と合流する手前の七瀬川北岸の沖積平野に立地する。現在に至るまで、県が第１・４・５次調査を、市が第２・３・６・７・８次調査を行っており、ここでは報告ないしは整理が済んでいる第２・６・８次調査で出土した不定形石錘について、一括して取り扱うものとする。なお、第２次大戦直後までは石切場が存在した北側の雄城台には、不定形石錘の石材となる凝灰岩が原産する。第２・６・８次調査で併せて12点の不定形石錘が出土しており、全て凝灰岩製である。

・形態分類

下郡ないしは賀来西で提示した基準に当て嵌ると下記のようになる。002・003は自然礫を素材とし、打ち欠きによる抉りだけを入れている、典型的なⅠ**a**類である。001は下端の折れた或いは切断した礫片を素材として、やはり抉りだけを入れて仕上げているので、Ⅰ**a**類とする。005～009は剝片を素材とし、整形加工によって形状を多角形に仕上げているⅡ**a**類である。但し、006・007・008・009は素材の縁辺を半ば残しており、整形加工の一部を省略するⅡ**b**類との中間的様相を有する。また、008は下端が剝片の弧状の縁辺を残しており、形状的にはⅠ類に類似し、009は周縁のブランティング的な二次加工だけでなく、面的な加工によっても整形を行っている。004・010・011は自然礫を



第384図　玉沢地区条里跡出土石錘①　(1/2)



第385図　玉沢地区条里跡出土石錘②　(1/2)

素材として、周縁部の整形加工によって多角形に仕上げており、Ⅱ**b**類に相当する。やはり半ばが素材のままで、整形加工を省略している。また、004は直線状ではなく弧状に整形加工を施しており、上半の礫面の弧状の縁辺と相俟って、全体の形状は多角形というより、楕円形に近い形となっており、Ⅰ類との中間的な様相を呈する。012は自然礫を素材とし、周縁に整形加工を施して正方形に近い形状に仕上げているので、Ⅲ**b**類に属すると考えられる。半ば以上の縁辺はそのまま利用して、整形加工を省略している。

・使用痕の様相

先ず、抉入部同士を結んで蛇行する圧痕状の浅い窪みは、007では左上から右下と左右の、009では左上から右下と右上から左下の、010では右上から左下と左右の、012では上下・左右の２方向に認められ、他の石錘の抉入部と掛け紐によると推測される浅い剝落の位置から、やはり十字ないしは**X**字状に紐が掛けられることが多かったことを窺わせる。但し、003は圧痕状の浅い窪みが横方向にしか見られず、抉入部も右側縁にしかなく、縁辺部の欠損も見当たらないことから、一文字状の掛け紐の存在が想定される。これは、抉入部と欠損が対になって上下端にしか認められない002・004も同様ではなかったかと推測される。抉入部が作製されなかったために、掛け紐によって縁辺部に浅い剝落が生じたと考えられるのは、001の上・下端、002・005・011・012の下端、004・007・009の上端、008の下端・左側縁、010の上端・右側である。抉入部を有しながら更に深く抉れるように欠損しているのは、005の上端、008の右側縁、006・011の左側縁、012の上端・左側縁である。同様に抉入部を有するが、掛け紐がずれたために抉入部に接する位置に欠損が生じたと推測されるのは、003の左側縁、009の上端、010の下端、012の右側縁である。掛け紐のずれの存在は、圧痕状の浅い窪みが同様に複数存在することからも補助的に予想される。

⑤４遺跡の総合

・形態組成の比較

下記に各遺跡の形態組成を記載する。なお、下郡遺跡第25次・下志村第２次の項で既述したⅡ類は、賀来西に倣ってⅡ**a**類としておく。

下郡遺跡第25次＝Ⅰ**a**（２）　Ⅰ**b**（１）　Ⅱ**a**（３）　Ⅲ**a**（２）　Ⅲ**b**（２）
　　Ⅳ**a**（１）　Ⅳ**b**（１）

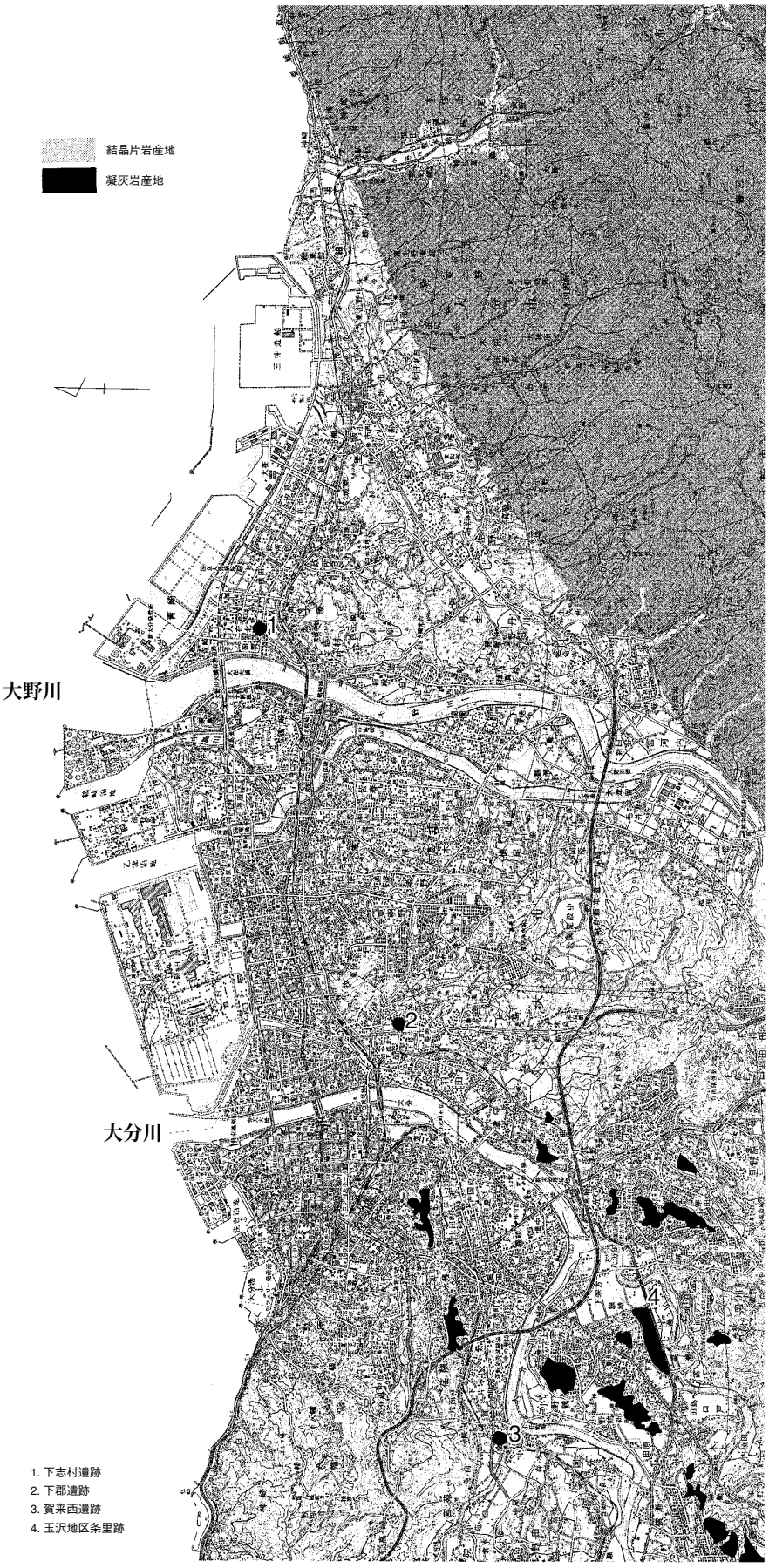
下志村第２次＝Ⅱ**a**（３）　Ⅲ**a**（２）

賀来西試掘＝Ⅰ**a**（３）　Ⅰ**b**（１）　Ⅱ**a**（１）　Ⅱ**b**（５）

玉沢第２・６・８次＝Ⅰ**a**（３）　Ⅱ**a**（５）　Ⅱ**b**（３）　Ⅲ**b**（１）

下志村第２次は紙数・時間の関係で全点を実測したわけではなく、賀来西は試掘調査時に出土したものであるため、組成に偏りがあると考えられる。そこで、下郡遺跡第25次、玉沢第２・６・８次を基本として考えることにする。

下郡遺跡第25次はⅠ～Ⅳ類まで満遍なく組成している。玉沢はⅠ～Ⅲ類までを組成としている。ここで大きな違いはⅣ類の存否である。Ⅳ類は打製石斧や石鍬を模した形状で刃部形成が為されず、打ち欠きによる抉りが見られるものである。



第386図　石錘出土遺跡と石材産地

細分形態の方を見てみると、Ⅰ類で礫素材の**a**類型が主体となること、Ⅱ類で剥片・礫を素材とする**a**・**b**の両類型が拮抗して組成することは共通するが、Ⅲ類の数量は下郡が圧倒的に多く、玉沢では僅か１点出土しているのみである。

この差は、全て石材に起因すると考えられる。即ち、打製石斧や石鍬は、結晶片岩でも多く製作されているが、玉沢地区条里跡で出土する、雄城台近辺に原産する凝灰岩では製作されることはないというのが、Ⅳ類の存否の理由であろう。一方Ⅲ類は、正方形に近い礫片ないしは輪切り状の剥片が素材となっているが、結晶片岩では同様の礫片が存在し、柱状の原礫が多く存在する。それから輪切り状の剥片が剥離できるが、既述の凝灰岩の自然礫は楕円形を呈することが殆どで、柱状の原礫も見たことがなく、従って輪切り状の剥片も剥離されないであろう。

また、下志村第２次・賀来西試掘も含めてみてみると、全てか殆どが結晶片岩製である下郡遺跡第25次・下志村第２次では、礫素材と剥片素材の比率が５：12と剥片素材が多く、全てが凝灰岩製である賀来西試掘・玉沢地区条里跡では、礫素材と剥片素材の比率が15：７と礫素材の方が多い。これも石材の差異に起因すると推察される。

・使用痕の様相

個々の使用痕については各遺跡の項で既述したが、縁辺部の欠損と表裏面の蛇行する浅い窪みに大別される。縁辺部の欠損は、打ち欠きによる抉りがない箇所に紐を掛けたために生じたものと、打ち欠きによる抉りのある箇所に紐を掛けたが更に深い抉り状に欠損したものに細分される。これは、石材による差異はないが、表裏面に看取される蛇行する浅い窪みは、結晶片岩と凝灰岩で全く異なる。即ち、結晶片岩の場合にはその結晶に沿って薄い剥落の繋がりという形で表れ、軟質の凝灰岩の場合は圧痕状の浅い窪みという状況を示し、これも石材ごとに大きな差異が認められる。また、蛇行する浅い窪み、縁辺の欠損、抉りの位置から掛け紐が十字もしくは**X**字状の２方向に掛けられたと考えられるものと、縦ないしは横の１方向に掛けられたものの２種が想定されるが、その比率は２方向：１方向＝34：３と、圧倒的に前者が多いのが判る。

・所属時期

４遺跡ともに殆どの石錘が、所産時期の特定のできる遺構などから出土していないので、厳密な意味での所属時期を決定することは不可能だが、各遺跡の状況などから予測してみたい。

先ず、下郡遺跡第25次だが、殆どが層位ごとにグリッド単位で把握されている。しかし、その層位も必ずしも時期を特定できるわけではなく、しかも層位が異なるからと言って、ここで扱った不定形石錘に時期的に分離できるような明確な差異は認められない。従って、全ての層位の時間幅の中で大まかに捉えておくのが、今の段階では妥当だと考えられる。即ち、縄文時代後期初頭～弥生時代中期初頭の間である。

次いで、下志村第２次だが、**B**区を中心に検出された弥生時代から古墳時代前期と、**A**区を中心に検出された中世～近世の大きく２時期に分れる。**B**区出土の２点のうち１点は、撹乱層からの出土であり、残る１点は近世の溝からの出土だが、中世以降の遺物も混入しており、弥生～古墳前期の遺物の流れ込みも予想され、時期は特定できない。**A**区のものは全て近世以降の遺構から出土しており、

流れ込みと推測され、中世ないしは近世初頭の所産である蓋然性が高い。従って当遺跡では、中世以降所産のものの比率が高いが、**B**区出土のものについては弥生～古墳時代前期の可能性もある。

次に賀来西試掘であるが、試掘調査時に出土したものなのでやや厳密性を欠くが、試掘の成果をもとにここに検討してみる。**A**−10トレンチで１個出土しているが、これは第１次調査の地点と重なっており、その結果からすると、13・14世紀以前の中世段階の所産である可能性が高い。**C**−19トレンチでも１個出土しているが、当トレンチからは古墳時代の水田が検出されており、その時期の所産である可能性が高い。**D**−1・４・５・８で６個出土しているが、この地区では古墳時代中期を中心にすると考えられる土坑・柱穴・水田が検出されており、石錘もその時期の所産である可能性が高い。**E**−15・18・30トレンチからも１本ずつ出土している。しかし、いずれも近世以前の水田が検出されているが、時期を特定できる遺物が出土していないため時期は厳密には不明である。だが、水田層の枚数から予想すると、中世の所産である可能性が高い。即ち、古墳時代と中世の２時期が想定される。

最後に玉沢条里跡だが、地点が異なるため、調査の次数ごとに検討していく。

第２次は調査区ごとに時期が異なるので、調査区ごとに見る。第Ⅰ調査区では、弥生中期後葉から古墳時代後期までの所産である第１号溝状遺構から２点出土しており、その時期である可能性が高い。第Ⅱ調査区では、中世初頭に造成されたと考えられる条里水田の溝状遺構から１点、同じ水田の耕作土から２点出土しており、中世初頭以降の所産であると考えられる。第Ⅲ調査区は、弥生時代中期中葉～後期後葉に亘る甕棺墓・土壙墓・石棺墓などが検出された幼・小児用の墓域であり、その検出面からグリッド一括として１点検出されており、同様の時期であると考えられる。

第６次では２個の石錘が出土している。１点は弥生時代中期に所属すると考えられる第15号溝状遺構から、もう１点は弥生時代後期所産の第12号溝状遺構からの出土であり、弥生時代中期～後期の時期が想定されるが、古墳時代初頭～後期の溝状遺構・水田も検出されていることから、その時期からの流れ込みも予想される。

第８次では、４点の石錘が出土している。１点は表面採集品で、もう１点は12世紀半ばと考えられる水田層から、残る２点は17世紀所産の水田層から出土している。近世期の水田は耕作による中世の水田面からの巻き上げの可能性が高く、そうなると中世初頭～後半の時期が想定される。

まとめると、中世全般の時期と縄文時代～古墳時代にかけての大きく２時期が想定される。但し、縄文時代の可能性があるのは今のところ下郡遺跡第25次だけで、弥生～古墳時代により偏っているようである。両時期の間の古代に所属する遺跡からの出土は知られていない。今後検出されるとすれば、大分平野では結晶片岩・凝灰岩製の不定形石錘が、弥生時代から中世、或いは近世前期の長期間に亘って、殆ど形態・調整技術・石材の変化もなく使用され続けてきた可能性がある。

石材と遺跡分布

不定形石錘が作られている殆どの石材が、結晶片岩（緑色結晶片岩を含む）と凝灰岩である。結晶片岩は佐賀関半島の丘陵部を中心に丹生台地の辺りまで大規模に原産し、大分川東岸域までは若干ながら認められる。石錘に用いられている灰色で割合均質の凝灰岩は雄城台から木上地区の台地上を原産地としている。つまり、前者は大分平野北東端に、後者は北西端近くに存在する。石錘の全点が結晶片岩製だった下志村遺跡は大分平野中央東よりの北端に立地し、丹生台地に隣接する。また、凝灰岩製の１点を除く全点が結晶片岩製だった下郡遺跡は大分川最下流域の東岸に立地し、若干は結晶片岩が原産する地域である。一方、全点が凝灰岩製だった玉沢条里跡は、西に大きく屈曲してからの大分川と七瀬川の間に立地し、凝灰岩の原産地である雄城台の直下に位置する。やはり全点が凝灰岩製だった賀来西遺跡は、玉沢条里跡より更に西上した大分川と賀来川に挟まれた地点に立地し、石材供給源としては凝灰岩の雄城台・木上に明らかに近い位置にある。これらからすると、結晶片岩製の石錘は大分平野でも、大分川が北に大きく屈曲した後の最下流域東岸より東の地域に濃密で、凝灰岩製の石錘はそれより西の、大分平野でも北西部に偏るようである。但し、下郡遺跡第25次に凝灰岩製の石錘が１点出土しており、製品は未だ認められないが、賀来西・玉沢条里跡でも結晶片岩が出土しているので、両石材の若干の流通はあったと推察される。大分平野南部については、これからの資料の集積を待つほか、状況は判然としない。

註１　筆者は４遺跡で出土した不定形石錘を報告書の執筆に携わったために、全て実見・実測・事実記載を行った。

参考文献

大分市教育委員会　2002　『玉沢条里跡第２次発掘調査報告書』

大分市教育委員会　2003　『玉沢条里跡第６次発掘調査報告書』

大分市教育委員会　2004　『賀来西遺跡第１次・第２次発掘調査報告書』

大分市教育委員会　2005　『下志村遺跡第２次発掘調査報告書』

報 告 書 抄 録

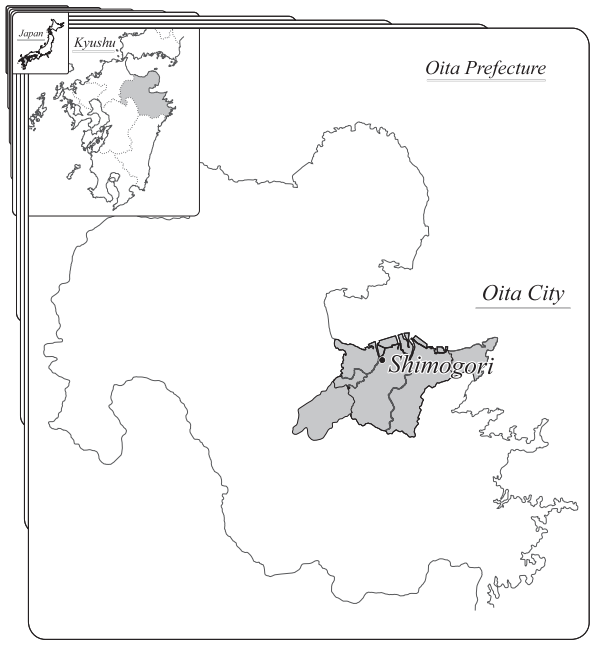
ふ り が な	しもごおりいせきぐん
書 名	下郡遺跡群 Ⅲ
副 書 名	大分市下郡地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書２
巻 次	—
シリーズ名	大分市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第61集
編集者名	坪根 伸也、梅木 信宏、中西 武尚、荻 幸二、苅谷 史穂、松尾 聡、松竹 智之、今田 秀樹
編集機関	大分市教育委員会
所在地	〒870-8504 大分市荷揚町２番31号 TEL(097)534-6111
発行年月日	西暦2005年３月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
下郡遺跡群第25次調査	大分市下郡	44201	322137	33°13′20″	131°37′19″	19900509～19900911	900	公共事業
下郡遺跡群第98次調査	大分市下郡	44201	322137	33°13′18″	131°38′01″	19971101～19971226	207	公共事業
下郡遺跡群第99次調査	大分市下郡	44201	322137	33°13′16″	131°38′01″	19971101～19971226	313	公共事業
下郡遺跡群第140次調査	大分市下郡	44201	322137	33°13′30″	131°38′00″	20021205～20030729	1,136	公共事業
下郡遺跡群第141次調査	大分市下郡	44201	322137	33°13′13″	131°37′09″	20020826～20020911	214	公共事業
下郡遺跡群第142次調査	大分市下郡	44201	322137	33°13′24″	131°38′21″	20021112～20021115	100	公共事業
下郡遺跡群第143次調査	大分市下郡	44201	322137	33°13′19″	131°37′08″	20040309～20040423	176	公共事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
下郡遺跡群第25次調査	集落跡	弥生～縄文時代	土坑、溝状遺構、流路跡	土器、石器、木器	
下郡遺跡群第98次調査	集落跡	弥生時代	貯蔵穴、溝状遺構、道路状遺構	企救型甕、土師器、須恵器	
下郡遺跡群第99次調査	集落跡	弥生時代	貯蔵穴、溝状遺構、道路状遺構	企救型甕、土師器、須恵器	
下郡遺跡群第140次調査	集落跡	弥生・古墳・中世・近代	整地層、竪穴住居跡、土塁、土坑	白磁、青磁、中国産染付、瓦質土器、京都系土師器、須恵器甕	
下郡遺跡群第141次調査	集落跡	弥生時代	土坑、柱穴、溝状遺構	須恵器壺、東北部九州系甕、下城式甕、下城式壺	
下郡遺跡群第142次調査	集落跡	弥生時代	土坑	弥生土器片	
下郡遺跡群第143次調査	集落跡	弥生・古代・近代・近世	貯蔵穴、井戸跡、近代墓、近世墓	肥前系染付、土師器小皿、須恵器杯	

Summary

The Shimogori sites are located at Shimogori, Oita City, in Oita Prefecture, Japan.
The main excavation of the site began in fiscal year 1987 based on the confirmation of the existence. It is located on the natural embankment of the Oita River at an elevation of 5.0 meters above the sea level.
The investigation has already been executed at 143 points.
This report is based on results of the 25th investigation, the 98th investigation, the 99th investigation, the 140th investigation, the 141st investigation, the142nd investigation, and the 143rd investigation
In the 25th investigation, the river mark that buried in the end of the first term of the age of Yayoi was detected.
We discovered the plant residue, and the animal remains, the Jomon pottery, the Yayoi pottery, and a large amount of stone implements and the wood manufacture in the river mark.
In the 98th and 99th investigation, the road mark between the Nara era and the first term of the Heian era has been discovered. The road mark has a special structure with a digging, and the transition of the road mark was shown.
In the 140th investigation, the village mark of the tumulus period and the pavilion mark of the Middle Ages were discovered.
The pavilion mark was built in the16th century. Therefore, the relationship to "Bungo Funai" located in the opposite bank in the river should be paid to attention.
In the 143rd investigation, a part of village mark on the age of Yayoi and the grave group at the early modern age has been discovered.
It has been reconfirmed that Shimogori sites were the compound sites that continued from the age of Jomon to the present age.
The excavated various relics show that Shimogori sites are basic sites of each age, and the relation to sites that develop with surroundings is based, and continuous investigation should be conducted.



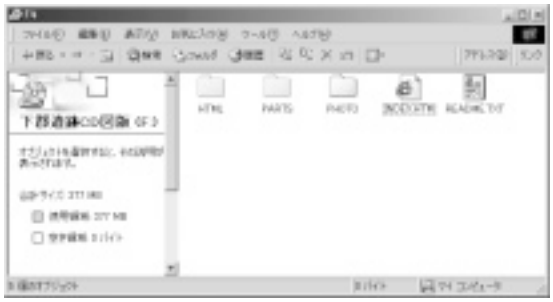
写真図版CDの使い方

●必要環境

ソフトウェア：　Windows95以上　または、MacOS9以上
Microsoft Internet Explorer（以下IEと略す）5.0以上
Netscape Communicator（以下NCと略す）5.0以上のWebブラウザが必要です。
ディスプレイ：　解像度 1024×768（16ビット）以上の表示可能なディスプレイ（32ビット推奨）
CD－ROMドライブ：上記基本ソフトウェアに対応したCD－ROMドライブ
※注〔WebブラウザはIEで最適化しています。NCの場合、一部ご使用になれない機能もありますので、IEの使用をおすすめします。〕

● 起動方法

Windows



1.「下郡遺跡群」ＣＤをＣＤ－ＲＯＭドライブにセットします。
2. ＣＤ－ＲＯＭドライブ「下郡遺跡群」フォルダーを開きます。
3. ウインドウ内の「index.htm」もしくは「index」を開きます。

Mac

1.「下郡遺跡群」ＣＤをＣＤ－ＲＯＭドライブにセットします。
2.「下郡遺跡群」アイコンを開いて下さい。
3. ウインドウ内の「index.htm」アイコンを開きます。

● 使用方法






1. 起動するとウインドウ右に各調査区のメニューが表示されます。
2. 各調査区の遺構・遺物写真をクリックするとウインドウ右下にインデックスが表示されます。
3. インデックスから目的の画像をクリックするとウインドウ右下に詳細画面が表示されます。
4. 詳細画面の写真をクリックすると画像が別ウインドウで拡大表示されます。

※注 本CD図版は“JavaScript”を使用しておりますので、正常に表示する為には設定を“ON”にしておいて下さい。
（通常、初期設定は“ON”になっていますので変更する必要はありません。）

下郡遺跡群　Ⅲ

－大分市下郡地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書２－

2005年３月31日

発行　大分市教育委員会
大分市荷揚町2-31
印刷　佐伯印刷株式会社